

福島味噌袋遺跡

福島味噌袋遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一六

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2016

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 福島味噌袋遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2016

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 序

東毛広域幹線道路の一部の国道354号玉村伊勢崎バイパスは、「7つの交通軸構想—東毛軸—」の一環として大河川利根川の架橋である五料橋の交通渋滞緩和と、通行時間の短縮等の利便をはかり、新たに利根川に伊勢玉大橋を架橋して、建設された道路であります。玉村伊勢崎バイパスは、平成26年8月に暫定2車線で供用が既に開始されており、現在は更なる交通量の増加に対応するため、4車線化の工事が進められております。

福島味噌袋遺跡は、玉村伊勢崎バイパス建設予定地に在って、利根川の右岸にある遺跡です。遺跡は平成22年6月から24年3月にかけて、発掘調査を行いました。そして調査成果として、古墳時代後期や平安時代の集落や水田、中世の溝群、江戸時代に浅間山の火山災害により被災した、耕地を復旧するために掘られた復旧溝など、多くの遺構と出土遺物がありました。特に9世紀第3四半期に集中して現れた竪穴住居群、天明3(1783)年以降の復旧溝群などは、地域の土地利用の在り方を示す資料となりました。また、出土遺物の中では、縄文時代の尖頭器や、希少な古墳時代前期と考えられる螺旋状鉄製釧は注目されました。

このたび、発掘調査成果をまとめ、埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することとなりました。発掘調査から報告書作成に至るまでご指導、ご協力を賜りました群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会生涯学習課、地元関係の皆様にご感謝申し上げます。そして本報告書が今後地域の歴史を知るうえで広く活用されますことを願い、序とします。

平成28年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 中野三智男



# 例 言

- 1 本書は、平成22・23年度国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴い発掘調査された福島味噌袋(ふくじまみそぶくろ)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 福島味噌袋遺跡は、群馬県佐波郡玉村町福島481-2・482・483・485-2・486-2・541-3・542-1・543-1・544-1・591-1・592-1・592-2番地に所在する。
- 3 事業主体は群馬県伊勢崎土木事務所である。
- 4 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 5 発掘調査の期間と体制は次の通りである。

調査期間 平成22年6月1日～平成24年10月31日(履行期間：平成22年3月31日～平成23年3月31日)

調査担当 調査部調査2課 上席専門員 石守 晃、主任調査研究員 宮下 寛

遺跡掘削工事請負 株式会社シン技術コンサル

委託 地上測量・航空写真撮影：株式会社測研 土器洗浄・注記作業：有限会社高澤考古学研究所

調査期間 平成23年1月1日～平成23年3月31日(履行期間：平成22年9月1日～平成23年3月31日)

調査担当 調査部調査1課 上席専門員 井川達雄、調査研究員 長谷川博幸

遺跡掘削工事請負 株式会社歴史の杜

委託 地上測量・航空写真撮影：株式会社測研 土器洗浄・注記作業：株式会社歴史の杜

調査期間 平成23年4月1日～平成23年9月30日(履行期間：平成23年3月31日～平成24年3月31日)

調査担当 調査部調査2課 上席専門員 井川達雄、上席専門員 関根慎二

遺跡掘削工事掘削請負 株式会社歴史の杜

委託 地上測量：株式会社シン技術コンサル

航空写真撮影：技研測量設計株式会社 土器洗浄・注記作業：山下工業株式会社

- 6 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間 平成24年12月1日～平成25年3月31日(履行期間：平成24年12月1日～平成25年3月31日)

整理担当 資料部資料2課 上席専門員 石守晃

整理期間 平成27年3月1日～平成27年3月31日(整理履行期間：平成26年4月1日～平成27年3月31日)

整理担当 資料部資料課 長谷川博幸

整理期間 平成27年4月1日～平成27年10月31日(整理履行期間：平成27年4月1日～平成28年3月31日)

整理担当 資料部資料1課 上席専門員石守 晃

- 7 本書作成の担当者は次の通りである。

編 集 石守 晃、長谷川博幸

本文執筆 第2章第1・2節は大木紳一郎が執筆したものに石守晃が加筆し、その他本文は石守が原稿を執筆した。

デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)

遺物観察 縄文・弥生土器：石坂 茂(専門調査役) 石器・石製品：岩崎泰一(資料統括)・石田典子(主任調査研究員)

土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役)・徳江秀夫(資料部長)

中近世陶磁器・土器：藤巻幸男(専門調査役)・大西雅広(上席専門員)

金属製品・製鉄遺物・炭化物：関邦一(補佐(総括))

遺物写真撮影 石坂 茂、岩崎泰一、神谷佳明、石田典子、藤巻幸男

保存処理 関 邦一

- 8 石材同定は飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
- 9 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 発掘調査及び本書作成に当たり諸氏、機関よりご協力、ご指導を得た。記して感謝の意を表します。

(五十音順・敬称略)

群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、小山岳夫、玉村町教育委員会生涯学習課、玉村町下之宮地区自治会

## 凡 例

- 1 福島味噌袋遺跡の遺構平面図は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)国家座標(座標第IX系)を用いて測量した。遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北で、真北方向は+0°27'42.55"である。

- 2 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を示している。

- 3 遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。

- 4 遺構平面図の縮尺はそれぞれの図に記した他は、以下の通りである。

竪穴住居 1:60、竈は 1:30、掘立柱建物 1:60、溝 1:80・1:100・1:120・1:150・1:200・1:250・1:400、

井戸・土坑・ピット 1:40、水田 1:100・1:200、復旧溝群・畑 1:80・1:100・1:150、風倒木痕 1:60


遺構断面図の縮尺は、竪穴住居・炉・竈、土坑、ピットは平面図に同じ。溝は 1:40・1:50など。

- 5 遺物図の縮尺は以下の通りである。

土器 1:3、1:4、1:8、石器・石製品 1:1、1:2、1:3、1:4、鉄製品 1:2、羽口 1:3

- 6 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。

- 7 図中で使用したスクリーンパターンやマークは、以下のことを表す。

 黒色  砂目粘土  油煙

 スス  灰釉  布目

 燻  摩滅  朱塗り

 焼土  粘土  硬化面

 攪乱  畦畔  風倒木

● 土器 ▲ 石器

- 8 本書では必要に応じて、浅間山A軽石(As-A)、浅間山B軽石(As-B)、浅間山C軽石(As-C)、浅間山板鼻黄色軽石(As-YP)、榛名—二ツ岳渋川火山灰(Hr-FA)などの主要テフラを略号のみで表記した。
- 9 遺構の面積を表記したものは、デジタルプランメーターで計測した。
- 10 土層や土器の色調で、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を使用したものの殆どは該当する記号(「10YR6/6」等)を記載した。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	1
(1) 国道354号玉村遺跡伊勢崎バイパス	1
(2) 試掘調査	4
(3) 調査に至る経過	4
第2節 発掘調査の経過	4
第3節 調査の方法	7
(1) 調査区の設定	7
(2) 調査面の設定	8
(3) 調査方法	8
(4) 標準土層	9
第2章 地理的および歴史的環境	10
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	10
第2節 遺跡周辺の歴史環境	12
(1) 旧石器時代	12
(2) 縄文時代	13
(3) 弥生時代	13
(4) 古墳時代	13
(5) 奈良・平安時代	14
(6) 中・近世	15
第3章 発見された遺構と遺物	22
第1節 1区の遺構と遺物	24
(1) 1区1面の遺構と遺物	24
1区調査の概要(24)、1区1面の概要(24)、As-A復旧水田(24)、復旧溝群(26)、溝(32)、土坑(41)	
(2) 1区2面の遺構と遺物	42
1区2面の概要(42)、溝(42)、土坑・ピット(48)、耕作面(段差)(50)	
(3) 1区3面の遺構と遺物	52
1区3面の概要(52)、住居(52)、掘立柱建物(56)、水田(59)、大畔(60)、溝(60)、土坑ピット(67)	
(4) 1区4面の遺構と遺物	70
1区4面の概要(70)、水田(72)、溝(74)、焼土遺構(81)、土坑(81)、ピット(84)、風倒木痕(84)	
(5) 遺構外の出土遺物	85
(6) 旧石器等の確認調査	88
第2節 2区の遺構と遺物	89
(1) 2区1面の遺構と遺物	89
2区1面の概要(89)、2区1面の概要(89)、復旧溝群(89)、畑(97)、溝(104)	
(2) 2区2面の遺構と遺物	107
2区2面の概要(107)、溝(107)、土坑(118)、不明遺構(120)	
(3) 2区3面の遺構と遺物	122
2区3面の概要(122)、住居(122)、As-B下水田(163)、溝(165)、井戸(166)、土坑(168)、焼土遺構(171)	
(4) 2区4面の遺構と遺物	172
2区4面の概要(172)、溝(172)、井戸(178)、土坑(178)、ピット(183)、焼土遺構(183)、風倒木痕(183)	
(5) 遺構外の出土遺物	185
(6) 旧石器等の確認調査	191
第3節 3区の遺構と遺物	192
(1) 3区1面の遺構と遺物	192
3区1面の概要(192)、3区1面の概要(192)、復旧溝群(193)、畑(206)、溝(207)、池(215)、井戸(216)、土坑(218)	
(2) 3区2面の遺構と遺物	219
3区2面の概要(219)、溝(219)、土坑(230)	
(3) 3区3面の遺構と遺物	235
3区3面の概要(235)、住居(235)、掘立柱建物(271)、水田(274)、溝(277)、井戸(280)、土坑(285)、遺物集中域(288)	
(4) 3区4面の遺構と遺物	289
3区4面の概要(289)、焼土遺構(289)、風倒木痕(290)	
(5) 遺構外の出土遺物	290
(6) 旧石器等の確認調査	292
第4節 弥生・縄文時代の遺物	293
第4章 まとめ	296
第1節 福島味噌袋遺跡の埋蔵文化財	296
(1) 概況	296
(2) 平安時代の竪穴住居と水田	296
第2節 螺旋状鉄釘	297
参考文献	299

# 挿図目次

第1図	福島味噌袋造跡と郡高泉の地勢	1	第68図	2区2面全体図	107
第2図	福島味噌袋造跡位置図と郡高泉の地勢	2	第69図	2区1～9・28号溝	109
第3図	証書調査成果	3	第70図	2区2面の溝遺構出土遺物(1)	111
第4図	福島味噌袋造跡の調査区	8	第71図	2区2面の溝遺構出土遺物(2)	112
第5図	福島味噌袋造跡の標準土層	9	第72図	2区11号溝	114
第6図	周辺地形分相図	11	第73図	2区16～27号溝	116
第7図	周辺地形分布図	15	第74図	2区1～7・29号土坑	119
第8図	1区1面全体図	22	第75図	2区23・24・25・26・27号土坑	120
第9図	1区A-a復旧水田	23	第76図	2区2号不明遺構	121
第10図	1区1号復旧溝群と出土遺物	25	第77図	2区3面全体図	122
第11図	1区2号復旧溝群	27	第78図	2区1号住居	123
第12図	1区3号復旧溝群と出土遺物	28	第79図	2区1号住居掘り方と遺	124
第13図	1区4・5・6号復旧溝	29	第80図	2区1号住居出土遺物(1)	125
第14図	1区7号復旧溝群	31	第81図	2区1号住居出土遺物(2)	126
第15図	1区7号復旧溝群出土遺物	32	第82図	2区2号住居と遺	127
第16図	1区1・2号溝	33	第83図	2区2号住居出土遺物	128
第17図	1区3・8・10・12号溝	35・36	第84図	2区3号住居出土遺物	129
第18図	1区3号溝出土遺物	37	第85図	2区3号住居遺	130
第19図	1区4・5・6・7号溝	38	第86図	2区4号住居出土遺物	131
第20図	1区9号溝と出土遺物	39	第87図	2区4号住居遺	132
第21図	1区10号溝	40	第88図	2区5号住居出土遺物	133
第22図	1区3号土坑	41	第89図	2区6号住居	134
第23図	1区2面全体図	42	第90図	2区6号住居遺と出土遺物	135
第24図	1区13～15・19・21～23号溝	43・44	第91図	2区7号住居	137
第25図	1区16・17号溝	47	第92図	2区7号住居遺と出土遺物	138
第26図	1区18・20号溝	48	第93図	2区8号住居と遺	139
第27図	1区2面の土坑とピット	49	第94図	2区8号住居出土遺物	140
第28図	1区2面の段差遺構	50	第95図	2区9号住居	141
第29図	1区3面全体図	52	第96図	2区9号住居遺	142
第30図	1区1区1号住居	53	第97図	2区9号住居出土遺物	143
第31図	1区1号住居遺と出土遺物	54	第98図	2区21号住居(掘り方)と出土遺物	144
第32図	2号住居	55	第99図	2区10号住居出土遺物	145
第33図	1区1号掘立柱建物面	56・57	第100図	2区11号住居	146
第34図	As-B水田	58	第101図	2区11号住居出土遺物	147
第35図	大野	59	第102図	2区12号住居	148
第36図	1区24・25・26・27・28号溝	61	第103図	2区12号住居遺と出土物	149
第37図	1区29・36・37・38・39・40号溝	63	第104図	2区13号住居	150
第38図	1区30号溝	64	第105図	2区13号住居出土遺物	151
第39図	1区31号溝	64	第106図	2区14・15号住居と出土遺物	152
第40図	1区32・33・34・35号溝と出土遺物	66	第107図	2区16号住居遺と出土遺物	154
第41図	1区3面の土坑とピット	68	第108図	2区17号住居	155
第42図	1区3面の土坑・ピットの出土遺物	69	第109図	2区17号住居出土物	156
第43図	1区4面全体図	70	第110図	2区18号住居	157
第44図	Br-FA水田	71・72	第111図	2区18号住居出土遺物	158
第45図	1区41・42・52・59・60・63・64号溝	73	第112図	2区19号住居	159
第46図	1区59・60号溝土層断面と43号溝出土遺物	74	第113図	2区19号住居出土遺物	160
第47図	1区43・44・45・46・47・48・49・50・51号溝と50号溝出土遺物	77	第114図	2区20号住居	161
第48図	1区52・53・54・55・56・57・58号溝	79・80	第115図	2区20号住居出土物	162
第49図	1区1・2号焼土	81	第116図	2区21号と住居出土物	163
第50図	1区4面の土坑群	82	第117図	2区As-B水田	164
第51図	1区4面のピット群	83	第118図	2区10号溝	165
第52図	1区1号堀削水田	85	第119図	2区1・2号井戸	166
第53図	1区遺構外の出土遺物(1)	86	第120図	2区1・2号井戸出土遺物(1)	167
第54図	1区遺構外の出土遺物(2)	87	第121図	2区2号井戸出土遺物(2)	168
第55図	2区1面全体図	89	第122図	2区3面の土坑と出土遺物(1)	169
第56図	2区1号復旧溝群	90	第123図	2区3面の土坑と出土遺物(2)	170
第57図	2区2・3号復旧溝群と1～3・7号復旧溝群出土遺物	91	第124図	2区1号焼土と出土遺物	171
第58図	2区4号復旧溝群	93	第125図	2区4面全体図	172
第59図	2区5号復旧溝群出土遺物	94	第126図	2区20・30号溝	173
第60図	2区6号復旧溝群	95	第127図	2区31号溝	173
第61図	2区7号復旧溝群	96	第128図	2区32号溝と出土遺物	175
第62図	2区1・2号畑	97	第129図	2区33・34号溝	176
第63図	2区3・4号畑	99	第130図	2区35号溝	177
第64図	2区5号畑	101	第131図	2区3号井戸と出土遺物	178
第65図	2区6・7号畑	102	第132図	2区4面の土坑(1)	179
第66図	2区8号畑	103	第133図	2区4面の土坑(2)	180
第67図	2区12・13・14・15号溝	105	第134図	2区4面の土坑の出土遺物	181
			第135図	2区4面のピット群	182



第1361R	2区2～6号出土遺構	184	第185R	3区4号住居出土遺物	244
第1377R	2区の風側本道	185	第186R	3区5号住居	245
第1381R	2区遺構外の出土遺物(1)	186	第187R	3区5号住居出土遺物	246
第1390R	2区遺構外の出土遺物(2)	187	第188R	3区7号住居	247
第1400R	2区遺構外の出土遺物(3)	188	第189R	3区7号住居出土遺物	248
第1411R	2区遺構外の出土遺物(4)	189	第190R	3区8号住居	249
第1421R	2区遺構外の出土遺物(5)	190	第191R	3区8号住居出土遺物	250
第1431R	3区1面全体図	192	第192R	3区9号住居	251
第1441R	3区1号復旧溝群	193	第193R	3区9号住居出土遺物	252
第1451R	3区2号復旧溝群	194	第194R	3区10号住居	254
第1461R	3区3号復旧溝群	195	第195R	3区10号住居(11号住居)出土遺物	255
第1471R	3区4・5・11号復旧溝群	196	第196R	3区11号住居	256
第1481R	3区6号復旧溝群	197	第197R	3区11号住居出土遺物	257
第1491R	3区7号復旧溝群	199	第198R	3区12号住居と出土遺物	258
第1501R	3区8号復旧溝群	201	第199R	3区13号住居	260
第1511R	3区9号復旧溝群	202	第200R	3区13号住居出土遺物	261
第1521R	3区10号復旧溝群	203	第201R	3区14号住居	262
第1531R	3区復旧溝群出土遺物	204	第202R	3区14号住居出土遺物	263
第1541R	3区1・2号復旧	205	第203R	3区15号住居	264
第1551R	3区1・2・3・4・5号溝	209・210	第204R	3区15号住居出土遺物	265
第1561R	3区1号溝出土遺物(1)	211	第205R	3区16号住居と出土遺物	266
第1571R	3区1号溝出土遺物(2)	212	第206R	3区17号住居	268
第1581R	3区2・3号溝出土遺物	213	第207R	3区17号住居出土遺物	269
第1591R	3区1号池	215	第208R	3区18号住居	270
第1601R	3区1号井戸	216	第209R	3区18号住居出土遺物	271
第1611R	3区1面の土坑群	217	第210R	3区1号掘立柱建物と出土遺物	272
第1621R	3区1面の土坑群出土遺物	218	第211R	3区2号掘立柱建物	274
第1631R	3区2面全体図	219	第212R	3区As-B下木田	275
第1641R	3区2号溝と出土遺物	220	第213R	3区As-B下木田出土遺物	276
第1651R	3区7・18号溝	221	第214R	3区19号溝	277
第1661R	3区8・14号溝と出土遺物	223	第215R	3区21号溝	278
第1671R	3区9号溝と出土遺物	224	第216R	3区24・25号溝と出土遺物	279
第1681R	3区10号溝と出土遺物	225	第217R	3区26号溝と出土遺物	281
第1691R	3区11号溝と出土遺物	226	第218R	3区2号井戸及び3区3面の土坑群(1)と出土遺物	283
第1701R	3区12号溝	227	第219R	3区3面の土坑群(2)と出土遺物	284
第1711R	3区13号溝	228	第220R	3区3面の土坑群(3)・ピット	285
第1721R	3区15・16・17号溝	229	第221R	3区遺物集・中城と出土遺物(1)	286
第1731R	3区20・22号溝と出土遺物	231	第222R	3区遺物集・中城出土遺物(2)	287
第1741R	3区23号溝	231	第223R	3区4面全体図	289
第1751R	3区2面の土坑(1)	233	第224R	3区1号焼土	289
第1761R	3区2面の土坑(2)	234	第225R	3区風側本道	290
第1771R	3区3面全体図	235	第226R	3区遺構外の出土遺物	291
第1781R	3区1号住居	236	第227R	福島県増茂遺跡試掘坑・トレンチ配置図	292
第1791R	3区1号住居(3号住居)出土遺物	237	第228R	福島県増茂遺跡出土土質・弥生土層(1)	293
第1801R	3区2・15号住居	238	第229R	福島県増茂遺跡出土縄文土層及び石器(2)	294
第1811R	3区2号住居出土遺物	239	第230R	福島県増茂遺跡出土石器(3)	295
第1821R	3区3号住居	240	第231R	福島県増茂遺跡と埴野町西一里塚遺跡群出土の櫛型炭鉄刀	298
第1831R	3区3号住居出土遺物	241			
第1841R	3区4号住居	243			

## 本文写真

写真1	1区の調査風景	5	写真	櫛野の中の3区の調査風景	7
写真	巖冬期の2区の調査風景	6	写真1	カスリーン台風被災状況	12

## 表目次

表1	調査遺跡一覧	16～20	表12	1区ピット測定表	333
表2	福島県増茂遺跡調査遺跡数一覧	22	表13	2区復旧溝群測定結果表	334
表3	1区遺物観察表	300～302	表14	2区畑測定表	335
表4	2区遺物観察表	301～314	表15	2区水田測定表	336
表5	3区遺物観察表	314～325	表16	2区土坑測定表	336
表6	縄文・弥生時代の遺物観察	325～327	表17	2区ピット測定表	336
表7	非掘立柱遺物重量表(1) 一須恵器・土師器中心	327	表18	3区復旧溝群測定結果表	337
表8	非掘立柱遺物重量表(2) 一須恵器中心	329	表19	3区畑測定表	338
表9	1区復旧溝群測定値一覧	331	表20	3区水田測定表	338
表10	1区水田測定表	332	表21	3区土坑測定表	338
表11	1区土坑測定表	333	表22	3区ピット測定表	338

# 写真目次

PL. 1	1 1区1面 西より	PL.17	1 1区B-FA下木田(手前側南東)
	2 1区1面 西上より	2 1区B-FA下木田全景(北西より)	2 1区B-FA下木田全景(北西より)
PL. 2	1 1区A-A復旧水田全景(南より)	3 1区B-FA下木田全景(南東より)	3 1区B-FA下木田全景(南東より)
	2 1区1号復旧溝及び1・2号溝 南西より	4 1区B-FA下木田輸出状況(西より)	4 1区B-FA下木田輸出状況(西より)
PL. 3	1 1区A-A復旧水田全景(南より)	5 1区B-FA下木田輸出状況(南東より)	5 1区B-FA下木田輸出状況(南東より)
	2 1区1号復旧溝土留堀植状況 南東より	6 1区B-FA下木田輸出状況(北より)	6 1区B-FA下木田輸出状況(北より)
	3 1区1号復旧溝全景 西より	7 1区4復旧部全景(東より)	7 1区4復旧部全景(東より)
	4 1区2号復旧溝 南より	PL.18	1 1区南西側-FA下木田と溝跡(手前側南)
	5 1区3号復旧溝As-A植植状況 南より	2 1区南東部道橋面(北西より)	2 1区南東部道橋面(北西より)
	6 1区3号復旧溝全景 南より	3 1区41号溝全景(東より)	3 1区41号溝全景(東より)
	7 1区4号復旧溝全景 東上より	4 1区42号溝全景(東より)	4 1区42号溝全景(東より)
	8 1区4号復旧溝途中・東上 北より	5 1区43～51号溝(北西より)	5 1区43～51号溝(北西より)
PL.4	1 1区5号復旧溝全景 北より	PL.19	1 1区43～46・48・49号溝(南東より)
	2 1区6号復旧溝全景 北より	2 1区45・46・50・51号溝(南東より)	2 1区45・46・50・51号溝(南東より)
	3 1区7号復旧溝全景 南東より	3 1区45号溝遺物(36)出土状況(西より)	3 1区45号溝遺物(36)出土状況(西より)
	4 1区7号復旧溝土留堀植状況 南より	4 1区48・49号溝全景(南東より)	4 1区48・49号溝全景(南東より)
	5 1区3号溝西部 東より	5 1区51号溝全景(南東より)	5 1区51号溝全景(南東より)
PL. 5	1 1区4号溝全景 西より	6 1区52・53号溝全景(南東より)	6 1区52・53号溝全景(南東より)
	2 1区5・6・7号溝全景 西より	7 1区52・53号溝全景(南東より)	7 1区52・53号溝全景(南東より)
	3 1区6号溝全景 東より	8 1区54～58号溝全景(南西より)	8 1区54～58号溝全景(南西より)
	4 1区9号溝全景 北西より	PL.20	1 1区54号溝遺物出土状況(西より)
	5 1区10号溝全景 北東より	2 1区55・56・57号溝全景(西より)	2 1区55・56・57号溝全景(西より)
	6 1区11号溝全景 東より	3 1区58号溝全景(南西より)	3 1区58号溝全景(南西より)
	7 1区12号溝全景 南東より	4 1区59・60号溝航空写真(手前側)	4 1区59・60号溝航空写真(手前側)
	8 1区3号土坑全景(南東より)	5 1区59・60号溝全景(南より)	5 1区59・60号溝全景(南より)
PL. 6	1 1区2面航空写真(北東より)	6 1区61・62号溝全景(東より)	6 1区61・62号溝全景(東より)
	2 1区2面航空写真(北北)	7 1区63号溝全景(北より)	7 1区63号溝全景(北より)
PL. 7	1 1区2面北部全景(東より)	8 1区64号溝全景(南より)	8 1区64号溝全景(南より)
	2 1区2面南部全景(西より)	PL.21	1 1区1号出土(南より)
PL. 8	1 1区2面南部全景・13号溝全景(横側) (北より)	2 1区2号出土(南東より)	2 1区2号出土(南東より)
	2 1区2面西部溝全景(北より)	3 1区4面北部土留堀全景(東より)	3 1区4面北部土留堀全景(東より)
	3 1区1号溝(右端11号溝、西より)	4 1区4面北部土留堀出土状況(東より)	4 1区4面北部土留堀出土状況(東より)
	4 1区1号溝北端(西より)	5 1区4面北部土留堀出土状況(北東より)	5 1区4面北部土留堀出土状況(北東より)
PL. 9	1 1区15号溝土留堀面(西より)	6 1区4面北部土留堀古智留遺物出土状況(北東より)	6 1区4面北部土留堀古智留遺物出土状況(北東より)
	2 1区16号溝全景(南より)	7 1区4面北部土留堀古智留遺物出土状況(東より)	7 1区4面北部土留堀古智留遺物出土状況(東より)
	3 1区17号溝全景(北東より)	8 1区4面北部土留堀古智留遺物出土状況(南より)	8 1区4面北部土留堀古智留遺物出土状況(南より)
	4 1区18号溝全景(北東より)	PL.22	1 骨土器出土状況
	5 1区19号溝全景(東上より)	2 縄文土器出土状況	2 縄文土器出土状況
	6 1区20号溝全景(北東より)	3 縄文土器出土状況	3 縄文土器出土状況
	7 1区21(左)・22号溝全景(南より)	4 石輪出土状況(33号溝内)	4 石輪出土状況(33号溝内)
	8 1区23号溝全景(北より)	5 石輪出土状況	5 石輪出土状況
PL.10	1 1区1号土坑全景(南東より)	6 打製石片出土状況	6 打製石片出土状況
	2 1区2号土坑全景(北東より)	7 1区8号土坑(東より)	7 1区8号土坑(東より)
	3 1区4号土坑土留堀面(南西より)	8 1区9号土坑遺物出土状況(北より)	8 1区9号土坑遺物出土状況(北より)
	4 1区4号土坑全景(南西より)	9 1区9号土坑全景(南上より)	9 1区9号土坑全景(南上より)
	5 1区5号土坑全景(南東より)	10 1区10号土坑土留堀面(北東より)	10 1区10号土坑土留堀面(北東より)
	6 1区6号土坑全景(南東より)	11 1区11号土坑遺物出土状況(西より)	11 1区11号土坑遺物出土状況(西より)
	7 1区14号土坑全景(南東より)	12 1区12号土坑全景(北東より)	12 1区12号土坑全景(北東より)
	8 1区1号ピット全景(南東より)	PL.23	1 1区15号土坑全景(南より)
	9 1区2号ピット全景(南東より)	2 1区17号土坑全景(西より)	2 1区17号土坑全景(西より)
PL.11	1 1区3面航空写真(東より)	3 1区18号土坑全景(西上より)	3 1区18号土坑全景(西上より)
	2 1区3面航空写真(北北)	4 1区14号ピット全景(北東より)	4 1区14号ピット全景(北東より)
PL.12	1 1区1号住居全景(南西より)	5 1区15号ピット全景(南東より)	5 1区15号ピット全景(南東より)
	2 1区1号住居跡(西より)	6 1区16号ピット全景(東より)	6 1区16号ピット全景(東より)
	3 1区1号住居掘り方全景(南西より)	7 1区17号ピット土留堀面(南東より)	7 1区17号ピット土留堀面(南東より)
	4 1区2号住居全景(掘り方、北西より)	8 1区18号ピット全景(南東より)	8 1区18号ピット全景(南東より)
	5 1区A-下木田全景(東側上空より)	9 1区19号ピット全景(南東より)	9 1区19号ピット全景(南東より)
PL.13	1 1区1号掘り建物全景(南西より)	10 1区20号ピット全景(北北より)	10 1区20号ピット全景(北北より)
	2 1区20号溝全景(北西より)	11 1区21号ピット全景(南東より)	11 1区21号ピット全景(南東より)
	3 1区21・25・26号溝(南東より)	12 1区22号ピット全景(南東より)	12 1区22号ピット全景(南東より)
	4 1区27号溝全景(北西より)	13 1区23号ピット全景(東より)	13 1区23号ピット全景(東より)
	5 1区28号溝全景(南東より)	14 1区24・25・26号ピット全景(東より)	14 1区24・25・26号ピット全景(東より)
PL.14	1 1区29・36号溝全景(東より)	PL.24	1 1区27号ピット全景(南東より)
	2 1区30号溝全景(南より)	2 1区28号ピット土留堀面(南東より)	2 1区28号ピット土留堀面(南東より)
	3 1区31号溝全景(東より)	3 1区29号ピット全景(南東より)	3 1区29号ピット全景(南東より)
	4 1区32・35号溝全景(南上より)	4 1区31号ピット全景(南東より)	4 1区31号ピット全景(南東より)
	5 1区33号溝全景(南上より)	5 1区32号ピット全景(南西より)	5 1区32号ピット全景(南西より)
	6 1区34号溝全景(西より)	6 1区33号ピット全景(東より)	6 1区33号ピット全景(東より)
	7 1区37(左)・38号溝全景(東より)	7 1区34・35号ピット全景(西より)	7 1区34・35号ピット全景(西より)
	8 1区39(左)・40号溝全景(東より)	8 1区34号ピット土留堀面(西上より)	8 1区34号ピット土留堀面(西上より)
PL.15	1 1区7号土坑全景(南より)	9 1区37号ピット全景(東上より)	9 1区37号ピット全景(東上より)
	2 1区3号ピット全景(南東より)	10 1区38号ピット土留堀面(西上より)	10 1区38号ピット土留堀面(西上より)
	3 1区4号ピット全景(南東より)	11 1区1号掘堀木土留堀面(南東より)	11 1区1号掘堀木土留堀面(南東より)
	4 1区5号ピット全景(北西より)	12 1区1号掘堀木調査	12 1区1号掘堀木調査
	5 1区6号ピット全景(北東より)	PL.25	1 2区1 面北平部航空写真(東より)
	6 1区7号ピット全景(南東より)	2 2区1 面北平部航空写真(上側北)	2 2区1 面北平部航空写真(上側北)
	7 1区9号ピット全景(南東より)	PL.26	1 2区1 面南平部航空写真(西上より)
	8 1区10号ピット全景(東より)	2 2区1 面南平部航空写真(上側北)	2 2区1 面南平部航空写真(上側北)
	9 1区11号ピット全景(南東より)	PL.27	1 2区1 1号復旧溝全景(南上より)
	10 1区12号ピット全景(南東より)	2 2区1 1号復旧溝土留堀面(東より)	2 2区1 1号復旧溝土留堀面(東より)
PL.16	1 1区4面航空写真(西上より)	3 2区2・3号復旧溝全景(南より)	3 2区2・3号復旧溝全景(南より)
	2 1区4面航空写真(北北)	4 2区4号復旧溝全景(東より)	4 2区4号復旧溝全景(東より)
		5 2区5号復旧溝全景(北北より)	5 2区5号復旧溝全景(北北より)
		6 2区6号復旧溝全景(北北より)	6 2区6号復旧溝全景(北北より)
		7 2区7号復旧溝全景(北北より)	7 2区7号復旧溝全景(北北より)
		8 2区1号溝全景(西上より)	8 2区1号溝全景(西上より)

PL-28	1	2区2号地権全(西より)
	2	2区3号地権全(西より)
	3	2区4号地権全(西より)
	4	2区5号地権全(西より)
PL-29	5	2区5号(横方向)・7号(縦方向)復旧調整(手前敷束)
	2	2区6号地権全(西より)
	2	2区7号地権全(西より)
	2	2区8号地権補正状況(東より)
	4	2区8号地権全(北より)
	5	2区9号地権全(北より)
PL-30	6	2区10号地権全(西より)
	7	2区10・14・15号地権全(北より)
	8	2区13・14・15号地権全
	1	2区1・7・8号溝(南より)
PL-31	2	2区4・5・6号溝(西より)
	1	2区1号溝全(東より)
PL-32	2	2区2号溝全(西より)
	2	2区3・29号溝全(西より)
	4	2区7・8号溝全(西より)
	5	2区9号溝全(西より)
	6	2区16号溝断面(東より)
	7	2区25号溝及び25・30号土坑(西より)
PL-33	8	2区25号溝土層断面(東より)
	2	2区16～27号溝全(西より)
	2	2区23号溝土層断面(東より)
	3	2区25号溝断面土状況
PL-34	4	2区27号溝土層断面(西より)
	2	2区28号溝土層断面(西より)
	1	2区3号南北平流航空写真(西より)
	2	2区3号南北平流航空写真(土層上)
PL-35	1	2区1号住居全(南西より)
	2	2区南平流航空写真(土層上)
PL-36	1	2区1号住居建築物出土状況(南西より)
	3	2区1号住居建築物方(南西より)
	4	2区1号住居建築物方全(南西より)
	5	2区2号住居全(東より)
	6	2区2号住居及び貯蔵穴(西より)
	7	2区2号住居建築物方全(西より)
	8	2区2号住居建築物方(西より)
	1	2区3号住居全(西より)
	2	2区3号住居(西より)
	3	2区3号住居建築物方全(東より)
PL-37	4	2区3号住居建築物方全(西より)
	4	2区4号住居セクション(東より)
	6	2区4号住居全(西より)
	7	2区4号住居(西より)
	8	2区4号住居建築物方(西より)
	1	2区5号住居全(西より)
	2	2区5号住居建築物方全(東より)
	3	2区6号住居全(南より)
	4	2区6号住居建築物出土状況(西より)
	5	2区6号建築物方(西より)
PL-38	6	2区6号住居建築物方全(西より)
	7	2区7号住居全(西より)
	2	2区7号住居建築物方全(東より)
	2	2区7号住居建築物方全(西より)
	4	2区8号住居全(西より)
	4	2区8号住居(西より)
	5	2区8号住居建築物方(西より)
	6	2区8号住居建築物方全(西より)
	7	2区9号住居全(西より)
	8	2区9号住居建築物方全(東より)
PL-39	7	2区9号住居建築物方全(西より)
	2	2区9号住居土層補修状況(西より)
	3	2区9号住居(西より)
	4	2区9号・21号住居建築物方全(西より)
	5	2区10号住居全(西より)
	6	2区10号住居全(西より)
	7	2区10号住居建築物方(西より)
	8	2区10号住居建築物方全(西より)
	8	2区10号住居建築物方全(東より)
	2	2区11号住居建築物出土状況(西より)
PL-40	2	2区11号住居建築物出土状況(西より)
	3	2区11号住居建築物方(西より)
	4	2区11号住居建築物方全(東より)
	5	2区12号住居全(西より)
	6	2区12号住居(西より)
	7	2区12号住居建築物方(西より)
	8	2区12号住居建築物方全(西より)
	1	2区13号住居(西より)
	2	2区13号住居建築物方(西より)
	4	2区14号住居全(南より)
PL-41	5	2区14号住居建築物出土状況(西より)
	6	2区14号住居建築物方全(西より)
	7	2区16号住居全(西より)
	8	2区16号住居建築物出土状況(西より)

PL-42	1	2区16号住居建築物方(西より)
	2	2区16号住居建築物方全(西より)
	3	2区17号住居全(西より)
	4	2区17号住居建築物出土状況(西より)
PL-43	5	2区17号住居建築物出土状況(西より)
	6	2区17号住居(西より)
	7	2区17号住居建築物方(西より)
	8	2区17号住居建築物方全(西より)
	2	2区18号住居全(西より)
	3	2区18号住居建築物出土状況(西より)
	4	2区18号住居建築物方(西より)
	5	2区18号住居建築物方全(西より)
	6	2区19号住居建築物出土状況(西より)
	7	2区19号住居(西より)
PL-44	8	2区19号住居建築物方(西より)
	2	2区20号住居建築物出土状況(東より)
	3	2区20号住居(東より)
	4	2区20号住居建築物方(西より)
PL-45	5	2区20号住居建築物方全(西より)
	6	2区20号住居(東より)
	7	2区20号住居建築物出土状況(西より)
	8	2区20号住居建築物方全(東より)
	2	2区A～F下水道平部全(北東より)
	3	2区A～F下水道平部全(北東より)
	2	2区A～F下水道(東部・北東)
	3	2区A～F下水道(西部・北東)
	5	2区A～F下水道(西部・北東)
	PL-46	6
1		2区A～F下水道(北東)
2		2区A～F下水道(北東)
3		2区A～F下水道(北東)
4		2区A～F下水道(北東)
5		2区A～F下水道(北東)
6		2区A～F下水道(北東)
7		2区A～F下水道(北東)
8		2区A～F下水道(北東)
9		2区A～F下水道(北東)
PL-47	1	2区A～F下水道(北東)
	2	2区A～F下水道(北東)
	3	2区A～F下水道(北東)
	4	2区A～F下水道(北東)
	5	2区1号井戸全(北東)
	6	2区2号井戸全(北東)
	7	2区2号井戸建築物出土状況(東より)
	8	2区2号井戸建築物方全(東より)
	9	2区2号井戸建築物方全(東より)
	10	2区2号井戸建築物方全(東より)
PL-48	1	2区2号井戸建築物方全(東より)
	2	2区9号土坑全(南より)
	3	2区10号土坑全(南より)
	4	2区11号土坑全(南より)
	5	2区12号土坑全(南より)
	6	2区13号土坑全(南より)
	7	2区28号土坑全(南より)
	8	2区43号土坑全(南より)
	9	2区44号土坑全(南より)
	10	2区44号土坑全(南より)
PL-49	1	2区北平部4面航空写真(土層上)
	2	2区北平部4面航空写真(土層上)
	1	2区11号溝全(北より)
	2	2区29・30号溝全(西より)
PL-50	3	2区31号溝全(東より)
	4	2区32号溝全(東より)
	5	2区32号溝建築物出土状況
	6	2区33・34号溝全(東より)
	7	2区33・34号溝全(東より)
	8	2区33号溝全(北より)
	9	2区29・30号溝全(西より)
	10	2区31号溝全(東より)
	11	2区32号溝全(東より)
	12	2区32号溝建築物出土状況(東より)
PL-51	1	2区15号土坑全(西より)
	2	2区16号土坑全(南より)
	3	2区17号土坑全(西より)
	4	2区18号土坑土層断面(南より)
	5	2区19号土坑全(西より)
	6	2区20・21号土坑全(西より)
	7	2区22号土坑全(東より)
	8	2区30号土坑全(南より)
	9	2区31号土坑全(南より)
	10	2区33号土坑全(南より)
PL-52	11	2区34・35号土坑全(南より)
	12	2区36・37号土坑全(南より)
	13	2区38号土坑全(南より)
	14	2区39号土坑全(西より)
	15	2区40号土坑全(西より)
	1	2区41号土坑全(南より)
	2	2区42号土坑全(北より)
	3	2区49号土坑全(東より)
	4	2区23号ビット全(南より)
	5	2区22号ビット全(西より)
6	2区24号ビット全(西より)	
PL-53	7	2区北部石部確認調査全(西より)
	8	2区中南部石部確認調査全(北より)
	9	2区石部確認調査全(北より)
	10	2区石部確認調査全(北より)
	1	2区石部確認調査190・110リッド(東より)
	2	2区1面航空写真(土層上)
	3	2区1面航空写真(土層上)
	4	2区1～3号復旧調整航空写真(土層上)
	5	2区1号復旧調整全(北より)
	6	2区2号復旧調整全(東より)
7	2区3号復旧調整全(北より)	
8	2区3号復旧調整全(南より)	

PL-35	1	3区4～9号復旧調査航空写真(上熊本)	PL-66	1	3区8号住居全築(西より)
	2	3区4・5(千前)号住居復旧調査土層断面(東より)		2	3区8号住居遺物出土状況(西より)
	3	3区6号復旧調査互17号(北)(東より)		3	3区8号住居掘り方全築(西より)
	4	3区7号復旧調査全築(南より)		4	3区8号住居掘り方全築(西より)
PL-36	5	3区7号復旧調査掘削状況(東より)	5	3区9号住居全築(西より)	
	2	3区8号復旧調査全築(南より)	6	3区9号住居掘り方(西より)	
	3	3区10号復旧調査全築(西より)	7	3区9号住居掘り方(西より)	
	3	3区1号全築(東より)	8	3区9号住居掘り方全築(西より)	
	4	3区1号調査部(北西より)	PL-67	1	3区10号住居全築(西より)
	5	3区1～5号調査部/瓦葺(西より)		2	3区10号住居掘り方全築(西より)
2	3区1号調査南東部石積(南より)	3		3区10号住居掘り方全築(西より)	
3	3区1号調査南東部掘り方(南東より)	4		3区10号住居掘り方全築(西より)	
4	3区2号調査部(南より)	5		3区10号住居掘り方全築(西より)	
5	3区3号調査部(南より)	6		3区10号住居掘り方全築(西より)	
PL-37	6	3区3号調査部(南より)	7	3区10号住居掘り方全築(西より)	
	7	3区3号調査部(南より)	8	3区10号住居掘り方全築(西より)	
	8	3区3号調査部(南より)	PL-68	1	3区12号住居遺物出土状況(西より)
	9	3区3号調査部(南より)		2	3区12号住居遺物出土状況(西より)
	10	3区3号調査部(南より)		3	3区12号住居掘り方全築(南より)
	11	3区3号調査部(南より)		4	3区12号住居掘り方全築(南より)
	12	3区3号調査部(南より)		5	3区12号住居掘り方全築(南より)
	13	3区3号調査部(南より)		6	3区12号住居掘り方全築(南より)
	14	3区3号調査部(南より)		7	3区12号住居掘り方全築(南より)
	15	3区3号調査部(南より)		8	3区12号住居掘り方全築(南より)
	16	3区3号調査部(南より)		9	3区12号住居掘り方全築(南より)
	17	3区3号調査部(南より)		10	3区12号住居掘り方全築(南より)
	18	3区3号調査部(南より)		11	3区12号住居掘り方全築(南より)
	19	3区3号調査部(南より)		12	3区12号住居掘り方全築(南より)
20	3区3号調査部(南より)	13		3区12号住居掘り方全築(南より)	
21	3区3号調査部(南より)	14		3区12号住居掘り方全築(南より)	
PL-38	1	3区1号土坑土層断面(南より)	PL-69	1	3区13号住居掘り方全築(西より)
	2	3区2号土坑土層断面(南より)		2	3区13号住居掘り方全築(西より)
	3	3区2号土坑全築(南より)		3	3区13号住居掘り方全築(西より)
	4	3区3号土坑土層断面(南より)		4	3区13号住居掘り方全築(西より)
	5	3区3号土坑全築(東より)		5	3区13号住居掘り方全築(西より)
	6	3区4号土坑土層断面(南より)		6	3区13号住居掘り方全築(西より)
	7	3区4号土坑土層断面(東より)		7	3区13号住居掘り方全築(西より)
	8	3区5号土坑土層断面(南より)		8	3区13号住居掘り方全築(西より)
	9	3区6号土坑土層断面(南より)		9	3区13号住居掘り方全築(西より)
	10	3区6号土坑底板出土状況(北より)		10	3区13号住居掘り方全築(西より)
	11	3区6号土坑掘り方全築(東より)		11	3区13号住居掘り方全築(西より)
	12	3区7号土坑土層断面(東より)		12	3区13号住居掘り方全築(西より)
	13	3区7号土坑底板出土状況(手前東)		13	3区13号住居掘り方全築(西より)
	14	3区8号土坑全築(東より)		14	3区13号住居掘り方全築(西より)
	15	3区8号土坑掘り方全築(東より)		15	3区13号住居掘り方全築(西より)
PL-39	1	3区6号調査全築(南より)	PL-70	1	3区16号住居掘り方全築(西より)
	2	3区6号調査全築(南より)		2	3区16号住居掘り方及び土層断面(西より)
	3	3区9号調査全築(南より)		3	3区17号住居全築(西より)
	4	3区7号調査全築(西より)		4	3区17号住居掘り方全築(西より)
	5	3区20号調査全築(東より)		5	3区17号住居掘り方全築(西より)
PL-40	1	3区9号調査全築(西より)	6	3区17号住居掘り方全築(西より)	
	2	3区8号調査土層断面(西より)	7	3区17号住居掘り方全築(西より)	
	3	3区12号調査土層断面(西より)	8	3区18号住居全築(西より)	
	4	3区13号調査土層断面(西より)	PL-71	1	3区18号住居掘り方全築(西より)
	5	3区13号調査土層断面(西より)		2	3区18号住居掘り方全築(西より)
	6	3区13号調査土層断面(東より)		3	3区18号住居掘り方全築(西より)
	7	3区13号調査土層断面(南より)		4	3区18号住居掘り方全築(西より)
	8	3区9号土坑全築(南より)		5	3区18号住居掘り方全築(西より)
	9	3区10号土坑全築(南より)		6	3区18号住居掘り方全築(西より)
	10	3区12号土坑土層断面(南より)		7	3区18号住居掘り方全築(西より)
11	3区13号土坑全築(南より)	8		3区18号住居掘り方全築(西より)	
12	3区13号土坑全築(北より)	9		3区18号住居掘り方全築(西より)	
13	3区13号土坑全築(北より)	10		3区18号住居掘り方全築(西より)	
PL-41	4	3区15号土坑全築(北より)	PL-72	1	3区As-8下木田山(南東より)
	5	3区16号土坑全築(北より)		2	3区As-8下木田山(南東より)
	6	3区17号土坑全築(東より)		3	3区As-8下木田山(南東より)
	7	3区18号土坑全築(東より)		4	3区As-8下木田山(南東より)
	8	3区18号土坑全築(東より)		5	3区As-8下木田山(南東より)
	9	3区18号土坑全築(東より)		6	3区As-8下木田山(南東より)
	10	3区18号土坑全築(東より)		7	3区As-8下木田山(南東より)
	11	3区18号土坑全築(東より)		8	3区As-8下木田山(南東より)
	12	3区18号土坑全築(東より)		9	3区As-8下木田山(南東より)
	13	3区18号土坑全築(東より)		10	3区As-8下木田山(南東より)
	14	3区18号土坑全築(東より)		11	3区As-8下木田山(南東より)
	15	3区18号土坑全築(東より)		12	3区As-8下木田山(南東より)
	16	3区18号土坑全築(東より)		13	3区As-8下木田山(南東より)
	17	3区18号土坑全築(東より)		14	3区As-8下木田山(南東より)
	18	3区18号土坑全築(東より)		15	3区As-8下木田山(南東より)
	19	3区18号土坑全築(東より)		16	3区As-8下木田山(南東より)
	20	3区18号土坑全築(東より)		17	3区As-8下木田山(南東より)
PL-42	1	3区3号調査航空写真(上熊本)	PL-73	1	3区26号調査全築(南より)
	2	3区3号調査航空写真(上熊本)		2	3区26号調査全築(西より)
	3	3区3号調査航空写真(上熊本)		3	3区2号住居掘り方全築(西より)
	4	3区3号調査航空写真(上熊本)		4	3区2号住居掘り方全築(西より)
	5	3区3号調査航空写真(上熊本)		5	3区2号住居掘り方全築(西より)
	6	3区3号調査航空写真(上熊本)		6	3区2号住居掘り方全築(西より)
	7	3区3号調査航空写真(上熊本)		7	3区2号住居掘り方全築(西より)
	8	3区3号調査航空写真(上熊本)		8	3区2号住居掘り方全築(西より)
	9	3区3号調査航空写真(上熊本)		9	3区2号住居掘り方全築(西より)
	10	3区3号調査航空写真(上熊本)		10	3区2号住居掘り方全築(西より)
PL-43	1	3区1号住居遺物出土状況(西より)	PL-74	1	3区29号土坑全築(南より)
	2	3区1号住居遺物出土状況(西より)		2	3区31号土坑全築(西より)
	3	3区1号住居掘り方土層断面(南より)		3	3区32・33・34号土坑全築(北東より)
	4	3区1号住居掘り方及び土層断面(東より)		4	3区35・36号土坑全築(北より)
	5	3区2号住居全築(西より)		5	3区37号土坑全築(北より)
	6	3区2号住居掘り方全築(西より)		6	3区38号土坑全築(北より)
	7	3区2号住居掘り方全築(西より)		7	3区39号土坑全築(西より)
	8	3区2号住居掘り方全築(西より)		8	3区40号土坑全築(南西より)
	9	3区2号住居掘り方全築(西より)		9	3区41号土坑全築(北西より)
	10	3区2号住居掘り方全築(西より)		10	3区42号土坑全築(北北西より)
PL-44	1	3区2号住居遺物出土状況(南より)	11	3区43号土坑全築(西より)	
	2	3区2号住居遺物出土状況(北より)	12	3区44号土坑全築(南西より)	
	3	3区3号住居全築(西より)	13	3区45号土坑全築(西より)	
	4	3区3号住居掘り方全築(西より)	14	3区46号土坑全築(西より)	
	5	3区3号住居掘り方全築(西より)	15	3区48号土坑全築(北北東より)	
	6	3区3号住居掘り方全築(西より)	PL-75	1	3区4号全築(東より)
	7	3区3号住居掘り方全築(西より)		2	3区1号住居遺物調査236・240グリッド(東より)
8	3区3号住居掘り方全築(西より)	3		3区1号住居遺物調査236・240グリッド(東より)	
9	3区3号住居掘り方全築(西より)	4		3区1号住居遺物調査236・240グリッド(東より)	
10	3区3号住居掘り方全築(西より)	5		3区1号住居遺物調査236・240グリッド(東より)	
11	3区3号住居掘り方全築(西より)	6		3区1号住居遺物調査236・240グリッド(東より)	
12	3区3号住居掘り方全築(西より)	7		3区1号住居遺物調査236・240グリッド(東より)	
PL-45	1	3区5号住居全築(西より)	PL-76～PL-77	1区遺物写真	
	2	3区5号住居掘り方全築(西より)	PL-77～PL-78	2区遺物写真	
	3	3区5号住居掘り方全築(西より)	PL-78～PL-79	3区遺物写真	
	4	3区5号住居掘り方全築(西より)			
	5	3区5号住居掘り方全築(西より)			
	6	3区5号住居掘り方全築(西より)			
	7	3区5号住居掘り方全築(西より)			

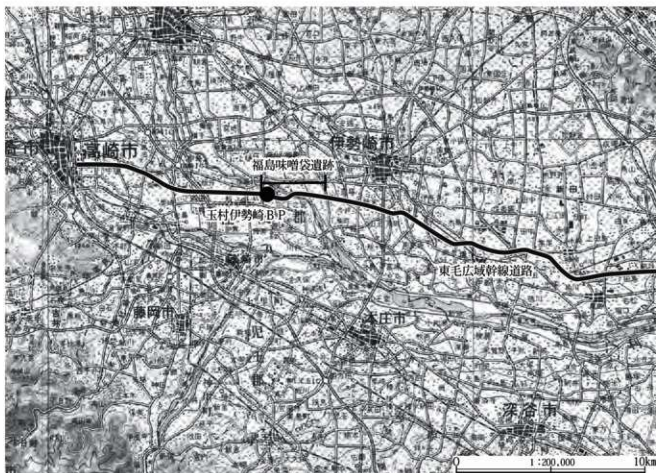
## 第1章 調査に至る経過

### 第1節 調査に至る経過

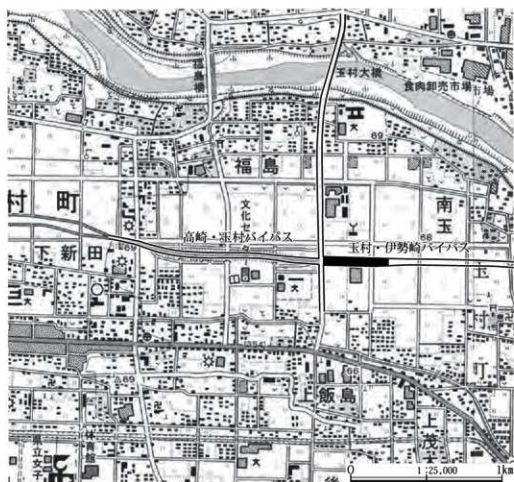
さて、幹線道路である国道354号は、昭和40代のモータリゼーションの到来によって、各所での出退動時を中心

#### (1) 国道354号と玉村伊勢崎バイパス

一般国道354号(以下「国道354号」とする)は、昭和49(1974)年11月12日の政令364号で、館林市—高崎市間の路線として指定され、昭和50年4月1日に施行された一般国道である。その経路は、幾度かの変更を経て、現在、群馬県高崎市と茨城県鉦田市(旧鹿島郡大洋村)を結ぶ道路となっている。一方、群馬県にとって国道354号は、県の南寄りに在る、西毛(群馬県西部)の高崎市と、中毛(同中南部)の伊勢崎市、東毛(同東部)の太田市、館林市、及び邑楽郡板倉町を結ぶ幹線道路としての機能を併せ持つものである。



第1図 福島味噌袋遺跡と群馬県の地勢(国土地理院発行、20万分の1地勢図「宇都宮」平成23年6月1日発行を使用)



第2図 福島味噌袋遺跡位置図

(国土地理院発行、1:25,000 地勢図「伊勢崎」平成15年2月1日発行  
1:25,000 地勢図「高崎」平成22年12月1日発行)

とした交通渋滞を引き起こすようになる。その交通渋滞が顕発する箇所の一つに、一級河川利根川を渡河し、西の佐波郡玉村町の中心市街地(旧例幣使街道玉村宿)と、東の伊勢崎市を繋ぐ五料橋がある。五料橋の渋滞は、玉村町付近の地形に要因があるものであるが、その要因の一つは、玉村町(中心市街地)が、古くから北の前橋市や勢多郡大胡町(現前橋市)と南の多野郡新町(現高崎市)や藤岡市、或いは西の高崎市や東の伊勢崎市街地を結ぶ陸上交通の結節点であることであり、二つ目の要因は、このような交通の要衝であるにも拘らず、玉村町の中心市街地と北の前橋市方面、或いは東の伊勢崎市方面への通行が、大規模河川である利根川によって阻まれているのに対し、周辺域の渡河点が、上述の五料橋と、玉村町の中心市街地の北方に在る群馬県道24号高崎伊勢崎線(以下「県道高崎伊勢崎線」とする)の架橋である福島橋の二箇所に限られていることである。

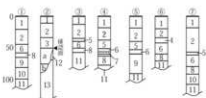
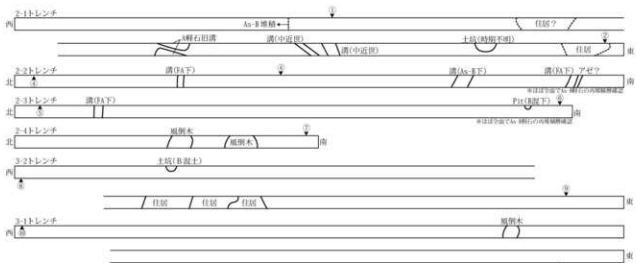
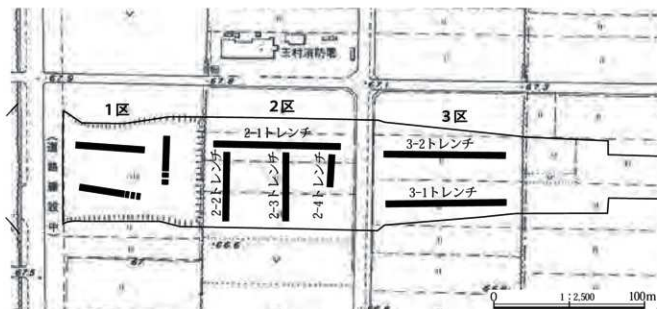
この二箇所の架橋のうち、北方の福島橋は、玉村町の

中心市街地と北の前橋市と東の伊勢崎市の二方面への渡河路であるため、交通集中を生じさせ、交通渋滞が常態化させていた。しかしこの方面の渡河は、平成13(2001)年12月、群馬県道40号藤岡大胡線バイパスの建設に伴って、福島橋の東600mの地点に、新たに玉村大橋が架橋されることで改善し、交通渋滞の緩和が図られた。しかし、玉村町の中心市街地から東方、伊勢崎市方面への通行は、相変わらず五料橋に頼るのみであった。

この五料橋の渋滞に対し、平成8年の首都圏整備計画の整備対

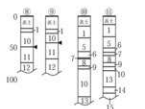
象路線である国道354号(旧道)に並走するバイパス(玉村・伊勢崎バイパス)を建設させることで、五料橋の交通渋滞を緩和させ、交通量を増加させ、通行を円滑化させる計画を立案した。この計画は、地域間連携や発展に貢献する広域幹線道路の一つとして建設中の、東毛広域幹線道路の一部として取り込まれている。東毛広域幹線道路は、幾つかの事業を組み合わせて建設される高規格道路で、西毛の高崎市と県東端部の板倉町とを結ぶ、全長58.61kmの4乃至6車線の幹線道路である。事業期間は昭和37年度から平成29年度(1962.4～2018.3)であり、現在線路で供用が開始されている。

このバイパスの一部となる玉村伊勢崎バイパスは、利根川への新たな架橋を伴うもので、西方で既設の国道354号のバイパスである高崎玉村バイパスに接続し、東方では県道高崎伊勢崎線のバイパス(塚塚工区)へ接続するものである。玉村伊勢崎バイパスは、佐波郡玉村町福島(ふくじま)に所在する県道40号藤岡大胡線バイパスと



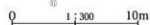
2区試掘土層注記(①～⑦)

- 表土  
 2 暗灰～灰色砂質土  
 3 灰色砂質土、やや粘質  
 4 暗褐色砂質土、As-B混  
 5 暗色砂、As-Bの内堆積土  
 6 灰濁～暗褐色粘質土、一部下位に黄褐色のFP含む  
 7 灰褐色粘質土、FA層  
 8 黒褐色土、As-C混土  
 9 濁～暗褐色粘質土  
 10 灰～灰黄褐色粘質土  
 11 にぶい黄褐色～灰白色粘質土  
 12 黄褐色ローム  
 13 黄褐色土、粘性あり  
 a 暗褐色土、8・12層上ブロック含む住居層上  
 b 暗褐色土、12層上ブロック含む住居層り方覆土



3区試掘土層注記(⑧～⑱)

- 表土  
 1 灰～褐色砂質土、圃場整備時の客土  
 2 灰褐色砂質土  
 3 暗灰～暗褐色砂質土、As-B混  
 4 暗灰色軽石層(As-B)  
 5 暗灰色粘質土  
 6 暗濁～褐色粘質土、部分的に下底にFA含む  
 7 暗灰～黒褐色土、As-C含む  
 8 灰白色粘質シルト  
 9 暗灰～黒褐色土、As-YP  
 10 灰白～灰～暗灰色粘質土



第3図 試掘調査成果

の交差点を基点に、玉村町東部を東進した後、利根川を渡河し、伊勢崎市上之宮町域を横断して、同市田中町の群馬県道104号駒形柴町線との交差点を終点とする、全長3,030mの道路である。玉村伊勢崎バイパスは、既に平成26年(2014)8月31日に暫定2車線で供用が開始されているが、平成29年度(2017.4-2018.3)までに4車線化させる予定で事業が進められている。

### (2) 試掘調査

玉村伊勢崎バイパスの事業を担当する群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所(以下「伊勢崎土木」)は、群馬県教育委員会文化財保護課(以下「保護課」)に対し、埋蔵文化財の有無を問い合わせた。これに対し保護課は桜井美枝主幹を担当として、1区を対象とした当該事業地に対する試掘調査を実施した。平成22年3月5日には周知の遺跡である玉村町№183遺跡の一部である2区に対し、平成22年5月20日から6月4日にかけては、福島味噌袋遺跡から下之宮高段遺跡の試掘調査の一環として、3区に対する試掘調査を実施した。試掘調査は、何れも幅1mほどのトレンチを用い、これを機械により掘削する方法で実施している。

このうち1区では3箇所のトレンチを設定して、試掘調査を実施した。試掘トレンチは第3図に示したように中・西部に東西方向のものを南北に、東部に南北方向のものを設定した。掘削深度は、凡そ2m程であった。1区の試掘調査の詳細は確認できなかったが、As-A、As-B下面を確認するに至っている。

2区ではトレンチを掘削したが、区北部に東西方向に設定し、長さ89.5m、深さ110～125cm程に掘削した1トレンチ、1トレンチの南側に、調査区西部に南北方向に設定し、長さ48m、深さ80cm以内に掘削した2トレンチ、同じく区調査区中央付近に南北方向に設定し、長さ44m、深さ80～100cm程に掘削した3トレンチ、同じく調査区東部に南北方向に設定し、長さ24m、深さ120cm以内に掘削した4トレンチの、4本のトレンチを設定、掘削した。その結果、1トレンチでは西部にAs-Bの堆積が見られ、中部と東端近くで住居跡、中部でAs-A復旧溝や中近世の溝、2トレンチでは、北・南部でHr-FA下の溝、中部でAs-B下の溝、3トレンチの北部でHr-FA下の溝、南部でAs-B混土下のピット、4トレンチ

では2箇所の風倒木痕が検出された。

東側区画では調査区の南北に東西方向に設定したトレンチを2本を設定した。このうち南側の1トレンチは長さ120～130m程、深さ80cm、2トレンチは長さ82m、深さ85～90cm程に掘削した。その結果、1トレンチの中部で風倒木痕が検出され、東半部で住居跡を検出した。

これらの試掘調査の結果、1区では、2区では「事業地の一部で古墳～奈良・平安時代の住居跡や溝、江戸時代の復旧溝跡が発見され、土師器・須恵器片が出土し、3区では下之宮高段遺跡までの総合的所見として「ほぼ全域で、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴うAs-A軽石や泥流に覆われた水田・畑、As-B軽石層前後で営まれた水田跡等を検出した」と評価されたため、本遺跡の1・2・3区ではそれぞれ「本調査が必要」と判断され、1区の所見は平成21年(2009)頃に、2区の所見は平成22(2010)年3月に、3区の所見は同年6月にそれぞれ伊勢崎土木事務所と玉村町教育委員会に通知されている。

### (3) 発掘調査に至る経過

この試掘調査の成果を受けて平成22年、伊勢崎土木は保護課に対して発掘調査の依頼を行い、保護課は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。以下「事業団」とする)に対し、調査を打診した。これに対して事業団は保護課に対して実施計画書等を提出し、その結果を受けて伊勢崎土木は同月24日、事業団へ調査依頼を行い、同月、事業団は受託する旨の回答を行った。そして同年9月1日に事業団による下之宮高段遺跡等の発掘調査の実施が決することとなったのである。

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は3期に亘って実施した。

第1期は1区を対象として、2010年(平成22年)6月から10月にかけて実施した。調査面は4面であった。

第2期は2区北半部を対象として、2011年(平成22年)1月から3月にかけて実施した。調査面は実質3面であった。

第3期は2区南半部と3区を対象として、2011年(平成22年)4月から9月にかけて実施した。調査面は実質3面であった。



以下に調査日誌の抜粋を記す。

### 【第1期調査】(1区)

2010年(平成22年)6月

- 1日 担当者着任。発掘調査事務所開所。隣地所有者等挨拶。県文化財保護課桜井主幹来跡。  
調査区範囲確認。1区北西部より表土掘削開始。
- 3日 調査範囲安全柵等で圍繞(一部除く)。
- 4日 隣地所有者へ挨拶。伊勢崎土木若月主幹来跡。
- 8日 1区1面遺構確認開始。  
南側所有者との協議により、馬入れ確保のため、1区南西隅部の先行調査決定。
- 9日 2号土坑より1区の遺構調査開始。As-A復旧溝確認。
- 10日 測量、写真撮影等の記録作業開始。
- 17日 1区1面遺構確認全景写真。南西隅部表土掘削、遺構確認、調査開始。  
排土置場付近の上物収獲に伴い、安全柵設置完了。
- 18日 1区南西隅部、測量、写真撮影開始。
- 21日 20日の降雨により調査区一部水没。調査継続。
- 22日 1区南西部全景写真撮影。その後レンチによる下面(2面)への確認調査着手。
- 24日 23日の降雨により調査区一部水没。調査継続。  
1区南西隅部2面の調査継続、全景写真撮影。
- 25日 1区北東部で近世水田確認。
- 29日 岡山理科大学小林博昭教授、飯島部長来跡。
- 30日 前日の降雨のため、調査区の大半水没し、機械掘削中止。排水作業。南西部は人力により調査継続。



### 7月

- 2日 湧水、雨水対策で以降ポンプ排水恒常化。
- 6日 堀口常務、相京局長巡察。
- 8日 玉村町教育委員会中島主査来跡。
- 9日 1区1面及び、1区南西部2面空中写真撮影。
- 12日 全体測量。南西部埋戻し(～21日)。
- 17日 第2回玉村村火大会警備(調査区・排土置場・事務所への侵入阻止)。酔客含む数名の侵入者排除。  
後日火花破片散乱を確認。関東地方梅雨明け。
- 20日 北東部1面調査終了。気温38°、体調不良の作業員2名、休息後帰宅させる。以後暫く猛暑続く。
- 21日 1区北東部下面面への掘削機械による掘削開始(～22日)。
- 22日 1区As-B混土下面確認作業。飯島部長、古環境研究所杉山・早田氏、飯島部長来跡(委託に非ず)。
- 26日 16:00より雷雨のため作業中断(注意報発令)。

### 8月

- 5日 平面測量開始(～12日)。
- 6日 第2面空中写真撮影。
- 17日 1区西部3面(As-B下面)への調査開始。1区2面測量終了。
- 24日 県文化財保護課生方主監、高野次長他来跡。
- 26日 1区北東部3面調査開始。
- 31日 3面空中写真撮影。平面測量開始(～9月3日)。

### 9月

- 1日 1区4面北東部調査開始。
- 6日 1区南西部より4面(Hr-FA下面)へ機械を使用し掘り下げ、遺構確認開始(～10日)
- 10日 1区北東部を除く1区4面水田面調査開始。
- 14日 千葉県埋蔵文化財センター職員1名来跡。
- 22日 As-Bの調査のため、岡山理科大学小林博昭教授、玉村町教育委員会中島主査ら15名来跡。

### 10月

- 1日 能登健氏来跡。
- 6日 玉村町教区委員会中島主査来跡。
- 8日 岡山理科大学小林博昭教授サンプル採取。
- 12日 機会による掘削作業終了。
- 14日 1区4面、北東部微高地空中写真撮影。
- 17日 事業団バス見学会、30名来跡。

## 第1章 調査に至る経過

- 18日 北東部下位面への遺構確認調査開始。
- 19日 北東部下位面への遺構確認調査終了(遺構、遺物無し)  
西側より埋戻し作業開始。
- 20日 外部電気業者侵入し、無断で安全柵一部取り外し。
- 22日 北東部遺構調査、記録作業終了。第1期発掘調査終了。
- 25日 写真整理作業(～27日)
- 28日 事務所撤去関連作業。
- 29日 発掘調査事務所撤去。
- 31日 調査担当離任。
- 11月**
- 12日 安全柵撤去。
- 13日 埋戻し完了。搬入路鉄板除去。

### 【第2期調査】(2区北半部)

2011年(平成23年)1月

- 1日 担当者着任。
- 4日 発掘調査事務所用地造成(～5日)。
- 5日 2区北半部表土掘削開始(～19日)。  
事務所設置。安全柵設置。
- 6日 2区北半部1面(As-A降下前後)遺構確認開始。
- 14日 2区北半部1面遺構掘削開始。
- 18日 2区北半部1面写真撮影、断面測量開始。
- 26日 2区北半部1面空中写真撮影。
- 28日 2区北半部2面(As-B降下前後)(・3面)機械掘削開始  
(～2月2日)、遺構確認開始(～2月14日)。

2月

- 9日 2区北半部2面及びAs-B混土下面遺構確認。
- 15日 2区北半部、竪穴住居掘削開始。



- 16日 2区北半部、竪穴住居測量、写真撮影開始。  
As-B下遺構検出。
- 22日 2区西南部遺構確認。
- 3月**
- 8日 2区北半部、2・3面空中写真撮影。
- 9日 2区北半部東端から3(4)面機械掘削開始(～16日)。
- 11日 2区北半部 3(4)面遺構確認、掘削開始。
- 14日 3区安全柵設置。表土掘削開始(～25日)
- 15日 2区北半部竪穴住居調査終了。2(3)面調査終了。
- 17日 2区北半部遺構実測、写真撮影開始。
- 18日 旧石器確認調査開始(～25日)。
- 23日 2区北半部3(4)面空中写真撮影。同遺構調査終了
- 25日 第2期(2区北半部)調査終了。
- 31日 調査担当離任。

### 【第3期調査】(2区南半部・3区)

2011年(平成23年)4月

- 1日 担当者着任。
- 5日 発掘調査準備。
- 6日 3区1面(中世以降)遺構確認開始。
- 7日 遺構掘削、写真撮影、測量開始。県文化財保護課  
洞口係長他3名来跡。
- 11日 2区北半部埋戻し開始(～18日)。
- 15日 発掘調査事務所進入路付替え(～18日)。
- 20日 3区1面空中写真撮影。
- 21日 3区1面調査終了。湧水対策の周溝掘削。
- 22日 3区2面までの機械掘削開始(～28日)。
- 25日 3区2面遺構調査開始。
- 26日 3区2面確認に伴い検出の1面掘り残し遺構(以下「1.5面」とする)掘削開始。
- 5月**
- 2日 3区1.5面遺構写真撮影、測量開始。
- 9日 3区2面、As-B下水田、竪穴住居等掘削開始。
- 10日 3区1.5面調査終了。
- 12日 2面遺構測量、写真撮影開始。
- 6月**
- 3日 3区2面空中写真撮影。同面調査終了。



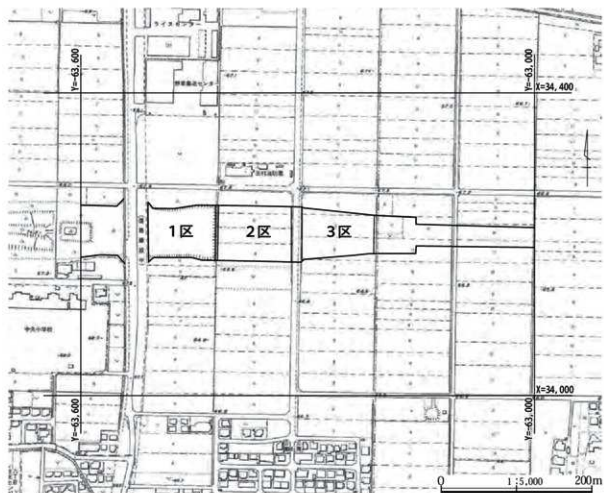
- 6日 3区3(4)面への機械掘削開始(～15日)。相  
京事業局長来跡。
- 9日 3区3(4)面遺構確認開始。
- 13日 3区3(4)面遺構掘削開始。玉村町教育委員会  
中島係長来跡。
- 15日 2区南半部表土掘削開始(～24日)。玉村中学生  
徒3名職場体験(～16日)
- 16日 3区3(4)面遺構写真撮影、測量開始。
- 17日 3区旧石器確認作業開始(～27日)。
- 24日 3区3(4)面調査終了。
- 27日 3区調査終了。作業員1名救急搬送、即日回復。
- 28日 3区埋戻し開始(～7月15日)。
- 29日 2区南半部1面(As-A下面)遺構確認開始(～  
7月4日)。
- 7月
- 1日 理事長・常務理事・事務局長安全週間視察。
- 4日 2区南半部1面遺構掘削開始。
- 5日 2区南半部1面遺構写真撮影開始。
- 7日 2区南半部1面遺構測量開始。
- 14日 2区南半部1面空中写真撮影。同2面(As-B混  
土)掘り下げ開始(～8月4日)。
- 16日 第22回玉村花火大会警備(調査区・排土置場・  
事務所への侵入阻止)。順調に終了。
- 20日 台風6号接近により現場作業中止。
- 30・31日 降雨により調査区冠水。
- 8月
- 3日 2区南半部2面遺構確認開始。
- 3日 2区南半部2面遺構掘削開始。
- 9日 2区南半部2面遺構測量、写真撮影開始。
- 12日 2区南半部3面(As-C混黒色土面)遺構確認開  
始(～17日)。

- 18日 2区南半部3面遺構掘削開始。
- 23日 2区南半部空中写真撮影。同3面遺構測量、写真  
撮影開始。
- 25日 2区南半部3(4)面までの機械掘削開始(～31  
日)。
- 29日 2区南半部3(4)面遺構確認開始。
- 9月
- 1日 台風12号の影響で調査区冠水。5日まで排水作業  
続く。
- 13日 2区南半部旧石器確認調査開始(～16日)。
- 15日 2区南半部3(4)面遺構調査終了。
- 16日 2区南半部調査終了。撤収作業着手。
- 22日 台風15号被害復旧作業(～26日)。
- 26日 2区南半部埋戻し作業開始(～30日)。
- 29日 発掘調査事務所撤去。
- 30日 作業完了。担当離任。

## 第3節 調査の方法

### (1)調査区の設定

本遺跡周辺は、圃場整備の施行により、ほぼ100mに敷設された道・水路で圍繞された区画が広がる。玉村伊勢崎バイパスの路線は、この区画を東西に横断して設定されているが、本遺跡は道水路で区画された3つの区画を横切り、この区画を以て区とした。区の呼称は西から東に1区、2区、3区とした。国道354号高崎玉村バイパス・玉村伊勢崎バイパス関連遺跡の多くは、区の呼称を東から西に向けて付している。これは高崎玉村バイパスの建設に伴う発掘調査事業に於いて、日本測地系第IX系X=30,000m、Y=-60,000mにグリッドの基点を置き、グリッド等の呼称を、基点から西・北方向に付したことに倣ったものである。しかし、本遺跡では東西逆転しているため、その経緯を記す。本遺跡に於ける調査は最西の区域から入ったが、その時点では本遺跡はその区画のみであるのか、他の区画が加わるかは決まっていなかった。1区の調査図面、遺物注記に区番号が記されていないのはこのためである。その後、順次東に向けて一区画ずつ調査を行い、2期調査の途中から、東側の一区画が加わって、本遺跡は3区画で構成されることが決まった。既に



第4図 福島味噌袋遺跡の調査区(玉村町都市計画図No. 8 平成3年作図使用)

着手されていた2期調査に於いて、既調査の西側の区画を1区とし、2期調査対象区域を2区とし、次年度調査の東側地区を3区と呼称することとしたのである。

## (2)調査面の設定

本遺跡は、下記4面の調査面を設定した。

第1面 近世面であり、天明3(1783)年浅間山噴出のAs-A軽石層(後述の標準土層IV層)下面を基本として設定した。

第2面 中世面であり、天仁元(1108)年浅間山噴出のAs-B軽石を混入する土層(標準VI層、標準VII層(「所謂B黒」))上面を確認面として設定した。

第3面 古代面であり、低地部ではAs-B(標準VIII層)下面を確認面とし、微高地部では標準IX・X層上面を確認面とした。主に平安時代の遺構を確認した。

第4面 古墳時代面であり、低地部に於いては、6世紀初頭の榛名山噴出テフラ(Hr-FA、標準XI層)下面を確認

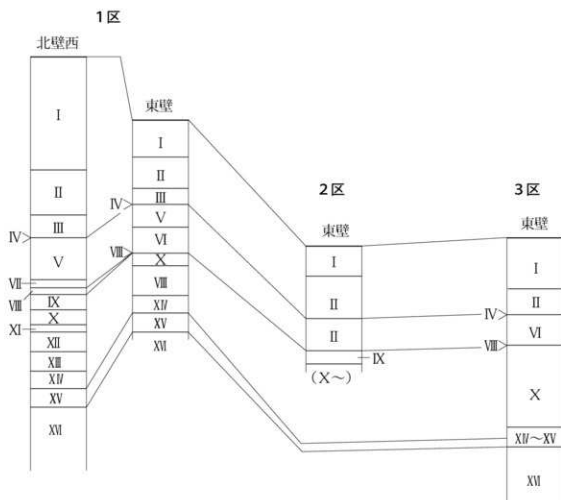
面とし、微高地に於いてはHr-FAまたは標準XII、XIII層上面を確認面とした。

## (3)調査方法

上述のように本遺跡の調査は、複数面を対象としており、各区、各面毎に実施した。

掘削は、表土及び各確認面の土層は、掘削機械を用い、一部人力した。この作業の後、鋤簾を用いて、人力により確認面の精査を行い、遺構確認を行った上で、スコップ或いは移植コテ等を用いて、人力により遺構を掘削した。この際、土層確認のためのベルト等を設定し、記録化を図るまでの間、掘り残す等の手順を経た。

記録保存のための遺構の記録は、測量図と写真による。平面図は、原則としてデジタル測量で行い、断面図はアナログ測量により図化した。また、写真撮影は、区全体対象としたものとして、適宜航空写真撮影を行った。区全体或いは各遺構の写真撮影は、デジタル写真撮影を



第5図 福島味噌袋遺跡の標準土層

基本として、全景写真等については、記録保存の観点から6×7版によるモノクロ写真撮影も併用した。

#### (4) 標準土層

本遺跡の堆積層は、地点、地点により異なるものであった。従って、全く標準的な土層を示すことはできないが、以下、これらを概観してまとめたものを標準土層として示す。

尚、1区では、発掘調査前に広範囲、且つ比較的深く、土壌の入れ替えが行われていたため、外周部の土層観察所見によるものであることを附記しておく。

I：現耕作土

II：近世耕作土：黄灰色砂質土

III：洪水層土：褐色砂質土、明黄褐色土、川砂

IV：As-A：天明3(1783)年、浅間山噴火テフラ

V：洪水層土：褐灰色土

VI：As-B混土：にぶい黄色・灰黄色土

VII：As-B混土：黒褐色砂質土

VIII：As-B：天仁元(1108)年、浅間山噴火テフラ

IX：As-B下耕作土：黒色粘質土

X：グライ化粘質土：灰褐色粘質土

XI：Hr-FA火山灰：6世紀初頭、榛名山噴火テフラ

XII：Hr-FA下耕作土：黒色粘質土

⑬：ローム漸移層土：にぶい褐色～にぶい黄褐色土

XIV：ローム：黄褐色土

XV：As-YP：15,800年前、浅間山噴出、岩黄褐色軽石

XVI：前橋泥流：24,300年前、浅間山噴火、塚原土石なだれによる堆積物

## 第2章 地理的および歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺の地形

#### (1) 地理的環境

福島味噌袋遺跡の地理的位置は、現利根川が前橋市南部から玉村町域にかけて東南東方向に流下する流路右岸にある。遺跡の存する佐波郡玉村町は、北に赤城山、北西に榛名山、南を藤岡一比企丘陵に囲まれた前橋台地(新井1962)の南東部にあたる。

南玉理堀遺跡をのせる前橋台地は、今から約2万年前に浅間山麓で水蒸気爆発と、大規模な山体崩壊によって発生した応桑泥流が吾妻川を下って前橋市域に至り、泥流堆積物を厚く積もらせたことで形成されたと考えられ、この泥流堆積物の上には板黄褐色軽石層(As-YP)を挟む上部ローム層を載せている。このローム層上面は、南東方向へ樹枝状に延びる小支谷によって侵食されており、そのうちの多くは古墳時代以前に埋没している。

前橋台地の南部にあたる玉村町の景観は、ほとんど起伏のない平坦な地形にみえるが、明治18年測量の迅速図(第6図参照)によれば、前橋台地南部は北西から南東にかけて緩い傾斜面を形成しており、標高は町北西部の板井では75mほど、南東端にある沼の上では55mほどとなっている。

現在、玉村町域を横断する流路をとる利根川は、この前橋台地を貫流する大河川でもある。かつては、前橋台地の北東辺にあたる赤城山麓との境、すなわち現在の広瀬川が流れる低地帯を流下していたと考えられており、その頃の玉村町附近は数条の小河川が流下する台地であつたらしい。西遷と称される利根川の現流路への変流の時期と要因については、自然災害説と人工引水説があり(築瀬大輔2012)、前者は応永34(1427)年の大洪水による西遷を取り、後者は現利根川の位置に在った久留馬川に拠って築城した石倉城へ、旧利根川から導水したところへ、利根川が変流して城が崩れたとするもので、その時期天文から永禄(1532-1570)あるいは天文8(1539)年と天文12(1543)年としている。現状では、東

西交通路の研究(久保田2009、築瀬2012)等から、応永34年の大洪水が利根川西遷の端緒となったと考えられている。

玉村町域での現利根川は、約200～150mの幅を有し、河床から10～3mの崖を形成している。台地地形は北西から南東方向へ緩く傾斜するため、崖高は南東ほど低い。

前述したように、前橋台地上には中小河川が北西から南東方向に幾筋も流れていたと考えられる。その多くは、縄文時代から浅間Cテフラの堆積する3世紀後半～4世紀初頭までの間には埋没したらしい。また、そのなかで、いくつかの水流を集めて現代まで遺存し続けたと考えられるのが、前橋南部から玉村町域を流れる端気川や藤川である。また、玉村町の現利根川以南の地域でも、埋没した矢川の流路が想定されている。矢川は、藤川や端気川と平行するように東南流して利根川及び烏川に注ぐ流路をとっていたようであるが、その河道については、明治18年測量の迅速図(第6図)や航空写真(1947年米軍撮影)、地区境と小字地名を参考におおよそ復原が可能であり、これに発掘調査の埋没河川調査例を加えた復原流路も提示されている(中島1999、関・中島2005)。なお矢川旧河道は中間点の箱石で東方に分岐して利根川に注いでいたことが絵図等で判明している。これは「裏矢川」と呼ばれている流路をうかがうことができる。

ところで、この矢川旧河道は、天明3(1783)年の浅間山噴火の際に発生した泥流に襲われ、泥流堆積物で埋没してしまったことが記録に残されている。現在の玉村東南域はこの泥流堆積物が厚く覆っていて、微妙な地形の凹凸を隠している。天明泥流は利根川から溢れ出して両岸の低い部分を襲っており、特に矢川旧河道に沿った地域は被害がひどく、利根川までの間約1.5kmの広範囲に及んでいる(関・中島2005)。なお、昭和22年のキャスリーン台風のときにも、これとほぼ同様の氾濫被害がでていることは注目される(写真1)。

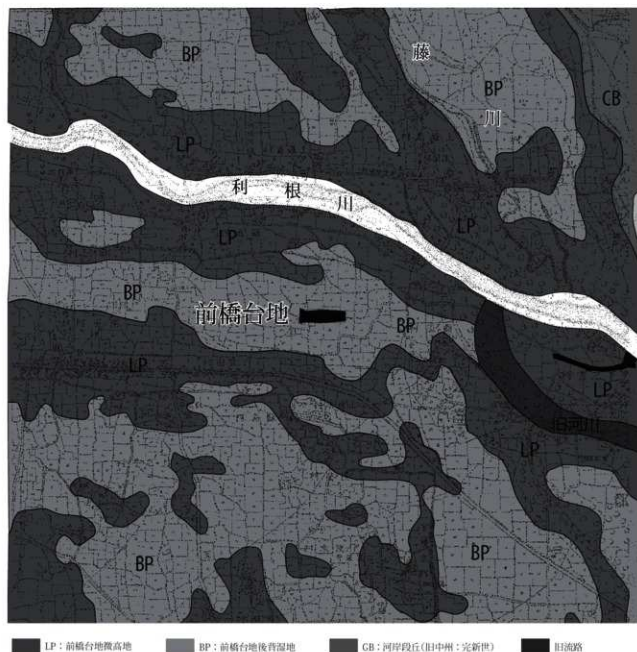
玉村町南東部を襲った天明泥流堆積物の層厚は深いところで2m前後を測る。この地域に高い密度で存在した

古墳群は埋没しているものも多く、また当時の水田や畑などの耕作地も泥流堆積物に覆われてほぼ平坦になってしまっている。

この凄まじい被害をもたらした天明泥流は、西方に離れた長野県境にある浅間山の噴火に起因する。浅間山はこれより遡る3世紀後半～4世紀初の間、天仁元(1108)年の2回にわたって噴火がおき、このとき広範囲に亘って住民の生活環境に多大な影響を与えたと考えられている。また、前橋台地北西にそびえる榛名山は、古墳時代の西暦6世紀に2回の大きな噴火があり、県中央～東部

に甚大な被害を与えたことが知られる。これらの火山噴火被害について、玉村地域においては降下火山灰のほか、榛名山の2度の噴火時に発生した洪水や泥流に覆われた事が判明している。さらに、年代や要因は特定できないが、中世に発生した洪水被害の痕跡も遺跡調査では明瞭に残されている。これらは、天明泥流のように甚大ではないにしても、少なくとも農作物への被害は大きかったであろうと推察される。

玉村町域の歴史的な自然環境について、前橋台地東南部を主体に利根川の変流以後と以前で概述してきた。な



第6図 周辺地形分類図(陸軍迅速図「伊勢崎」「倉賀野驛」に加筆)

お、前橋台地の南限を画する烏川は玉村町の南界ともなっており、対岸には藤岡市、埼玉県上里町がある。烏川は榛名山山西麓を流下して前橋台地の西側を画し、玉村町の南側では東流して南方から北流してくる神流川と合流、そこから約3km下流で現利根川を合わせている。16世紀代以前は玉村町の対岸で現流路のやや南側を流れ、利根川との合流点が尾島あたりまで至る以外、烏川の流路自体は大きな変化はなく、当地域における人類史のなかで確定的な地理的境界あるいは交流・交易ルートとしての役割を果たしてきた。このことから、烏川が存在が利根川変流以前の玉村町域の遺跡分布のあり方に一定の条件を与えていることは充分予測されるところである。

福島味噌袋遺跡の周辺地域における過去の植生については、いくつかの遺跡発掘調査に伴う花粉分析結果によって大まかな推定が可能である。それによれば、古墳時代の4～6世紀代では、集落のある遺跡近辺では概ね草本花粉と木本花粉がほぼ同量あり、草本ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が優勢で、木本ではコナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が優勢との結果が出ている(玉村町：砂町遺跡(8)・齊田中耕地遺跡(125)など)のことから、遺跡周囲では水田を含む湿地及びやや乾燥地からなる草地と広葉樹林が相半ばする景観が推測される。また浅間Bテフラに覆われた12世紀初頭の地層からは、木本より草本花粉が大きく上回り、草本ではイネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科が、木本ではクレーシイ属・マテバシイ属とコナラ属コナラ亜属が優勢で、湿地もあるが比較的乾燥気味の開けた土地の周囲に広葉樹林が存在する景観が推測される(柄田添遺跡(6)・若王子遺跡(217)など)。更に砂町遺跡(8)では、6世紀初頭の榛名山の火山降灰(Hr-FA)は花粉の様相に大きな影響を与えていないとの結果が確認された。そして天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う降下火山灰(As-A)と泥流下の土層中の花粉から、遺跡地周辺はかなり開けた乾燥草地の周辺に疎らな広葉樹林が存在する景観であるが、古墳時代や12世紀末の木本花粉相に加えて新たにマツ属が確認されることから、場所によっては人為的な開発の結果生じる二次林の拡散が裏付けら



写真1 キャスリーン台風被災状況  
(1947年10月30日米軍撮影、国土地理院「高崎」使用)

れたといえよう(往来遺跡(377)他)。

以上の花粉分析結果は、発掘調査遺跡内の水田や畑土壌、ないしは遺構内に堆積した黒泥土を試料としていることから得られる結果は地点限定的であり、広範囲な自然植生の様相を必ずしも映し出すものではない。それでも、各遺跡における同一地層での分析結果や同一地点での大まかな経年変化の様相を相対化することで、遺跡立地環境を復原する有用な条件を提示することになろう。

## 第2節 遺跡周辺の歴史環境

福島味噌袋遺跡の形成された歴史的背景および地域史のなかにおける位置づけを考察するために、ここでは玉村町域を中心に、必要に応じて前橋市南部・伊勢崎市南西部を含めて時代毎の遺跡分布について概述したい。

### (1) 旧石器時代

第1節で述べたように、前橋台地は約2万年前からの上部ローム層をのせており、玉村町域においても後期旧石器時代の遺跡が発見されてもよい条件ではあるが、現在まで明確な遺跡の存在は知られていない。



## (2) 縄文時代

玉村町域とその周辺では、縄文時代から遺跡の存在が明確になってくる。玉村町向田遺跡(490)では旧石器時代末期まで溯りうる黒曜石製木葉形尖頭器、齊田中耕地遺跡(125)では柳葉形尖頭器、砂町遺跡(8)・上新田中道東遺跡(119)・福島曲戸遺跡(284)・横丹遺跡では有舌尖頭器が出土している。

縄文時代早期以降、とりわけ群馬県内で各地に集落が形成され遺跡数が激増する前期以降にあっても、玉村町域での遺跡数・遺構検出は希薄である。福島大光坊(306)・上之手石塚Ⅲ(264)・福島曲戸(284)の各遺跡で少数の土坑が検出されているのみで、集落の存在は不明瞭である。

## (3) 弥生時代

玉村町域での弥生遺跡の分布は、縄文時代と同様に少ない。しかし、西側に隣接する井野川流域やこれに続く烏川中流域左岸には中期後半から後期にかけての弥生集落遺跡が多く分布するのと対照的な状況を示している。

現状で最も古い段階の弥生土器が出土したのは福島飯塚遺跡(155)である。ここでは東北地方南部の南御山式系と思われる溝文土器がみられ、それ以外にも中期中葉から中期後半頃の在地系土器が出土している。中期後半では上飯島芝根Ⅱ遺跡(383)で中期後半の住居Ⅰ棟(御新田式か?)、一万田遺跡(44)では中期後半の粟林式土器を用いた土器棺墓が知られており、小規模で短期間と想定されるとしても集落の存在は否定できない。遺構は確認出来ないが、福島南玉(317)・上新田中道東(119)・福島大島(158)、現利根川以北では徳丸仲田・砂町(8)の各遺跡で中期後半の土器片が出土している。特徴的なのは、在地系節描文の粟林式とともに、北島式ないし御新田式(福島飯塚(155)・上飯島芝根Ⅱ(383)や、東北部から東関東の溝文系かと思われる土器(砂町遺跡(8))が目立つことである。出土総数そのものが少量であるにもかかわらず明確な存在を示すことから、比率としては他地域に比べてかなり高い。弥生時代の後期は県内各地に集落遺跡が拡散する分布動態が知られるが、当地域においては全く異なる。茂木古墳群内玉村町13号古墳から出土した後期初頭の甕を筆頭に、福島飯塚(155)・福島南玉(317)・上新田中道東(119)・神人村Ⅱ(46)の各遺跡か

ら少数の樽式土器片が出土しているのみで、遺構の存在はなお不明瞭である。ここでは、群馬県北～西半部で見られるような弥生後期の定住集落の姿は想定しにくい状況といえる。

## (4) 古墳時代

玉村町から前橋市南部及び伊勢崎市南部にかけての地域開発史のなかで、最初の大きな画期が古墳時代前期にあるとの理解については、大方の意見が一致するところであり、弥生時代後期においても集落遺跡の姿が見えてこない状況に比べて、爆発的ともいえる急激な遺跡の増加を示している。遺跡規模の大小や微妙な時期差を除けば、地域内全体にまんべんなく分布しており、分布密度の濃淡も認めがたい。

前期の古墳については、川井稲荷山古墳(総覧-芝根村第7号(483))、軍配山古墳(総覧-玉村町第1号(403))、西南西約4.5kmなどが近隣のものとして掲げられる。川井稲荷山古墳は2次的な埋葬のための墳丘改変で墳形や規模は不明だが、初期の段階では4世紀代の前期古墳であったことが判明し、三角縁神獣鏡Ⅰ面が出土している。また、街道南(494)・上新田中道東(119)・福島飯塚(155)・上之手石塚(258)・御門(276)等の遺跡から周溝墓が検出されており、集落と一体で各地に分布していた様相を示している。住居跡では上之手八王子遺跡(8)で住居の周囲に浅い溝を廻らす形態が確認され、地下水位の高い低地域での水はけを意図した住居形態かと注目される。

古墳時代中期(5世紀代)は、前期に比べると遺跡数が減少する傾向がうかがわれ、現利根川左岸の伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡のように後期まで継続する集落と前期で一旦終息する集落の両者がみられる。梨ノ木山古墳(480)などの中期古墳が存在すること、前述のように6世紀初頭に噴火した榛名山降下テフラⅡ-FAで覆われた水田が玉村町域～前橋市南部の各地で検出されていることから、5世紀代を通じて継続した地域経営が行われていたことは間違いないだろう。ただし、この時期の古墳としては5世紀後半の梨ノ木山古墳(総覧芝根3号(480))で5世紀後半から6世紀にかけての初期群集墳の存在が判明しているのみで、5世紀前半に比定できる古墳については不明確なままである。松原Ⅲ遺跡(29)では5世紀前半の滑石製模造品の工房跡が検出されており、比較的早

い段階で模造品による祭祀システムの一部を担う地域として機能していたことが知られる。

古墳時代後期(6～7世紀)には、烏川左岸に若宮・八幡原古墳群、角洲古墳群(445付近)、茂木古墳群(455付近)、川井古墳群(500付近)が、現利根川右岸にそって箱石古墳群(298付近)、小泉古墳群(365付近)がそれぞれ展開するようになる。茂木古墳群の中核であるオトカ塚古墳(481)は全町86mを越える前方後円墳であり、日本最大級の馬形埴輪を出土したことで知られる。6世紀中頃～後半の古墳と考えられ、玉村地区における古墳築造最盛期を代表する例といえよう。

玉村地区における6～7世紀代の古墳の密な分布状況に比べ、集落遺跡の存在は限られている。土器などの遺物については各所で散見出来るが、集落としての姿を示すのは福島飯塚遺跡(155)などわずかである。福島飯塚遺跡では6世紀中頃の榛名山噴火に伴うHr-FP泥流に覆われた水田跡が確認されているので、集落域と農業生産域、墓域が小単位でセットになっているのではなく、玉村町～前橋南西部域の広範囲のなかで、烏川左岸に古墳群が分布するように、集落域も集中立地している可能性も考えておくべきであろう。

玉村町～前橋南西部域は、6世紀の初頭と中頃に噴火した榛名山の降下テフラの直接的な被害は少なかったようだが、その二次的災害ともいえる泥流が広範囲に堆積しており、これによって埋もれた田畑の分布が知られる。

特殊な遺構・遺物例としては、天神巡りⅢ遺跡(224)で土器焼成土坑が検出され、福島飯塚遺跡(155)で琴柱形石製品、上新田中道東遺跡では棒状に固結した漆塊が出土している。

## (5)奈良・平安時代

律令期の上野国には13の郡が置かれ、更にその下に里・郷が置かれた。10世紀の『倭名類聚抄』に記載された「那波郡」には朝倉・鞆田・田後・佐味・俊文・池田・葦東の7郷が属しており、このうち佐味・鞆田郷が現在の玉村町域に概ね推定されている(尾崎1976)。

この地域における集落遺跡は7世紀後半あたりから顕在化してきて、平安時代の9世紀代には分布密度がかなり高くなり、分布範囲もほぼ全域にひろがるようである。

上之手八王子遺跡(205)は7世紀後半から11世紀前半にいたるまでの163棟の竪穴住居が確認され、長期安定型集落の現出をうかがうことができる。全容は把握できていないが、柄田浜(6)、上之手石塚(258)、福島稲荷木遺跡(152)なども同様であろう。平安時代主体の集落でも齊田竹之内(130)、福島飯塚(155)、行人塚(250)、上飯島芝根遺跡(382)など多くの遺跡が挙げられ、佐味・鞆田郷の姿を垣間見るようである。

集落遺跡以外では、現利根川左岸にある砂町(8)、上福島尾柄町(17)、中之坊遺跡(20)では東西に走る推定東山駅路a(牛堀一ノ原ルート)が判明している。これは、路側溝心々距離約9～10mで、7世紀後半から8世紀にかけて利用されたと推定されている。この推定駅路と関連して、南に約250mほど離れて官衙施設と目される、南北方向の条里地割に合致する柵列(中島・吉澤2004)や瓦、「舎」の墨書土器等が出土する一万田遺跡(44)がある。

本地域では、1108(天仁元)年に噴火した浅間山の火山灰に比定される浅間Bテフラ(As-B)に覆われた水田跡の検出が広範囲に見られる。これらは平均幅1.3mほどの大畦の走向から、ほぼ律令期の条里地割に沿ったものと理解されている。部分的に条里プランから外れた地形優先の区画や、異なる基準線を用いたらしい区画の存在なども判明している(中島・吉澤2004)。As-Bに覆われた水田条里地割の成立年代については、耕土下位から出土する土器の年代から8世紀後葉(中里2000)、前橋台地南部の調査例をもとに9世紀初頭以降(新井2001)といった見解がある。

ところで、本遺跡遺跡の東方約2.5kmの下之宮には延喜式内社である火雷神社が鎮座する。元々は利根川寄りに在ったという、地元住民の話もあるが、現本殿は18世紀中頃の建物で、縁起によれば御諸別王の創建で、796(延暦15)年に官社に列せられたと『日本後紀』にみえる。また、現利根川を越えた伊勢崎市側には俊文神社が鎮座する。この両社は上野国の12座のうちの2座であり、地名の「上之宮」「下之宮」と呼応して南北に並んだ位置関係にあることが注目される。いずれも8世紀には存在していたことが想定され、火雷神社は農耕神、俊文神社は織物・養蚕の神の信仰とし、古代集落の展開と関連づける考え方もある(井上1992)。

## (6)中・近世

本地域における発掘調査では、1108（天仁元）年噴火による浅間Bテフラを鍵層として調査面を分け、これより上層で確認される遺構や出土遺物を中世及び近世に帰属するとして扱うことが多い。また、1783（天明3）年の浅間Aテフラを鍵層に近世遺構であることを認定する

ことができる。また、中世から近世を通じて現代までその痕跡を残す遺構もあることから、ここでは分割せず一括して概観する。

12世紀中頃（長寛年中）に伊勢神宮内宮の「玉村御厨」がこの地におかれたとの記録（『神宮雜記』）が残されている。ここでは、125町（ha）の神田・名田から「布30端」を上納したとされる。この時の在地開発領主が玉村氏で



第7図 周辺遺跡分布図(陸軍迅速図「伊勢崎」「倉賀野驛」に加筆)

## 第2章 地理および歴史的環境

表1 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	旧国 府県	種別 又	古墳 調査	発掘 調査	中世 調査	近世 調査	備考
1	風島鳴鳴宮遺跡	●		●	●	●	●	本遺跡
2	玉村町№1遺跡			●	●	●	●	敷布地
3	玉村町№29遺跡			●	●	●	●	古墳
4	玉村町№33遺跡			●	●	●	●	古墳
5	玉村町№35B遺跡			●	●	●	●	旧3-19F試掘、水田、溝、畑、土坑、ビット
6	柳田浜遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、集落・水田、畑、土坑、ビット
7	玉村町№39遺跡			●	●	●	●	史年試掘
8	砂野遺跡			●	●	●	●	旧10-11F調査、溝、東山塚跡、水田
9	金化遺跡			●	●	●	●	503年調査
10	玉村町№713遺跡			●	●	●	●	史年試掘、水田、土坑、ビット、溝
11	玉村町№663遺跡			●	●	●	●	史年試掘、溝
12	玉村町№77遺跡			●	●	●	●	史年試掘
13	玉村町№517遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、水田
14	尾納町B遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、水田
15	尾納町B遺跡			●	●	●	●	旧4年調査
16	尾納町B遺跡			●	●	●	●	旧3年調査、東山塚跡、水田、溝
17	尾納町B遺跡			●	●	●	●	旧調査、水田
18	土屋島尾納遺跡			●	●	●	●	旧3調査、水田、畑、溝
19	土屋島遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、水田、溝
20	中之坊遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、集落
21	玉村町№363遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、集落
22	1町遺跡			●	●	●	●	旧4年調査、集落
23	土屋島中町遺跡			●	●	●	●	旧3-14F調査、集落、土坑、権列、畑
24	玉村町№627遺跡			●	●	●	●	旧4年試掘、道
25	玉村町№17遺跡	●		●	●	●	●	玉村遺跡・玉村塚仮定地を含む
26	玉村町№67遺跡			●	●	●	●	史年試掘、土坑
27	芦宮遺跡			●	●	●	●	史年調査、水田等
28	玉村町№668遺跡			●	●	●	●	史年試掘、土坑
29	松原遺跡			●	●	●	●	史年試掘、付調査、集落
30	松原遺跡			●	●	●	●	史年試掘調査
31	松原遺跡			●	●	●	●	史年調査
32	阿佐文館遺集			●	●	●	●	近世の可能性有
33	阿佐文館			●	●	●	●	最終前段長岡城
34	玉村町№569遺跡			●	●	●	●	古墳
35	玉村町№569遺跡			●	●	●	●	古墳
36	玉村町№467遺跡			●	●	●	●	古墳
37	玉村町№79遺跡			●	●	●	●	史年試掘、集落
38	玉村町№71遺跡			●	●	●	●	史年試掘、集落
39	玉村町№72遺跡			●	●	●	●	史年試掘、畑
40	原道正遺跡			●	●	●	●	史年調査、溝
41	原道遺跡			●	●	●	●	史年試掘、溝
42	玉村町№72遺跡			●	●	●	●	史年試掘、集落
43	玉村町№79遺跡			●	●	●	●	史年試掘、水田
44	一方田遺跡			●	●	●	●	史年試掘、集落他
45	神人村遺跡			●	●	●	●	史年試掘、土坑、溝
46	神人村B遺跡			●	●	●	●	旧調査、水田
47	玉村町№79遺跡			●	●	●	●	SC3試掘、土跡等付録地
48	玉村町№90遺跡			●	●	●	●	史年試掘
49	玉村町№57遺跡			●	●	●	●	古墳
50	玉村町№73遺跡			●	●	●	●	史年試掘、集落
51	玉村町№82遺跡			●	●	●	●	史年試掘、集落
52	玉村町№81遺跡			●	●	●	●	史年試掘
53	玉村町№511遺跡			●	●	●	●	旧調査、畑
54	橘屋敷宮前遺跡			●	●	●	●	旧調査、畑
55	玉村町№18遺跡			●	●	●	●	敷布地
56	玉村町№19遺跡			●	●	●	●	敷布地
57	福翁山古墳群			●	●	●	●	敷布地、跡末期古墳群
58	竹葉跡古墳			●	●	●	●	宮郷村第29遺跡
59	宮郷村第17遺跡			●	●	●	●	旧4調査
60	杉葉跡古墳			●	●	●	●	宮郷村第29遺跡
61	宮郷村第8号墳			●	●	●	●	旧4調査
62	宮郷村第7号墳			●	●	●	●	旧調査
63	宮郷村第5号墳			●	●	●	●	旧4-20、水田、道、畑、塚、復旧済

調査：発掘調査 試掘：試掘調査 総覧：土毛古墳総覧 F：年度S昭和 H：平成

No	遺跡名	旧国 府県	種別 又	古墳 調査	発掘 調査	中世 調査	近世 調査	備考
64	宮郷村第6号墳			●	●	●	●	
65	宮郷村第13号墳			●	●	●	●	
66	渡土塚古墳			●	●	●	●	旧4調査
67	宮郷村第12号墳			●	●	●	●	
68	金社福山古墳			●	●	●	●	宮郷村第9号墳
69	松原遺跡			●	●	●	●	敷布地、古墳
70	土之宮古墳			●	●	●	●	旧6調査、石室調査
71	西土之内遺跡			●	●	●	●	敷布地、集落
72	若宮古墳群			●	●	●	●	跡末期古墳群か
73	宮郷村第11号墳			●	●	●	●	
74	宮郷村第10号墳			●	●	●	●	
75	宮郷村第19号墳			●	●	●	●	
76	宮郷村第18号墳			●	●	●	●	
77	宮郷村第17号墳			●	●	●	●	
78	宮郷村第15号墳			●	●	●	●	
79	宮郷村第14号墳			●	●	●	●	
80	宮郷村第16号墳			●	●	●	●	
81	東土之内遺跡			●	●	●	●	
82	玉村町№42遺跡			●	●	●	●	史年試掘、畑
83	玉村町№45遺跡			●	●	●	●	史年試掘
84	玉村町№46遺跡			●	●	●	●	史年試掘
85	玉村町№46遺跡			●	●	●	●	史年試掘
86	玉村町№47遺跡			●	●	●	●	史年試掘
87	玉村町№48遺跡			●	●	●	●	史年試掘
88	福井西ノ敷			●	●	●	●	福井氏、田口文書
89	福井東ノ敷			●	●	●	●	福井氏、田口文書
90	石原屋敷			●	●	●	●	石原氏、田口文書
91	玉村町№51遺跡			●	●	●	●	史年試掘、塚、畑
92	玉村町№52遺跡			●	●	●	●	史年試掘
93	田口下島敷遺跡			●	●	●	●	旧調査、塚、集落、土坑
94	田口下島敷			●	●	●	●	旧部分発掘、田口遺正、前世紀
95	田村屋敷			●	●	●	●	田村氏(藤原)・石長門(門)
96	玉村町№55遺跡			●	●	●	●	史年試掘
97	宇津水館			●	●	●	●	
98	玉村町№699遺跡			●	●	●	●	史年試掘、水田
99	玉村町№503遺跡			●	●	●	●	旧2-19-20試掘、水田、土坑、ビット、溝
100	玉村町№556遺跡			●	●	●	●	旧調査、水田
101	深町B遺跡			●	●	●	●	旧調査、水田
102	深町遺跡			●	●	●	●	503-55調査、水田
103	玉村町№106遺跡			●	●	●	●	史年試掘
104	玉村町№672遺跡			●	●	●	●	史年試掘
105	石原屋敷			●	●	●	●	福井氏、石原文書
106	玉村町№107遺跡			●	●	●	●	史年試掘
107	玉村町№674遺跡			●	●	●	●	史年試掘
108	玉村町№504遺跡			●	●	●	●	史年試掘、水田
109	玉村町№633遺跡			●	●	●	●	旧13-17試掘、水田、復旧済
110	玉村町№505遺跡			●	●	●	●	旧調査、水田
111	中道東・中道西Ⅱ・鞍馬東遺跡			●	●	●	●	旧2調査、集落、水田、南田遺
112	玉村町№123遺跡			●	●	●	●	敷布地
113	玉村町№684遺跡			●	●	●	●	旧4試掘、溝、水田、復旧済
114	鞍馬東遺跡			●	●	●	●	旧調査、水田
115	清田八幡堂・清田五反田遺跡			●	●	●	●	旧3調査、水田、溝、土坑
116	玉村町№124遺跡			●	●	●	●	敷布地
117	芦ノ内遺跡			●	●	●	●	旧1調査、水田、溝、土坑
118	玉村町№125遺跡			●	●	●	●	敷布地
119	上新田中道東遺跡			●	●	●	●	旧16-17-20-22調査、集落、水田、畑、復旧済
120	玉村町№122遺跡			●	●	●	●	敷布地
121	玉村町№109遺跡			●	●	●	●	史年試掘、水田、大溝
122	与六屋敷			●	●	●	●	早田(和道)与六、天正末
123	玉村町№110遺跡			●	●	●	●	史年試掘
124	玉村八幡堂			●	●	●	●	旧調査(支玉村八幡宮本所在)
125	西田中継地遺跡			●	●	●	●	旧4-20、水田、道、畑、塚、復旧済

## 第2節 遺跡周辺の歴史環境

No	遺跡名	国史 古蹟	国史 史蹟	国史 古蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	備考
125	五村町№711遺跡		●	●	●					肥前書3、水田、井戸、土坑、ビット
127	五村町№547遺跡		●	●						肥前書、溝
128	五村町№111遺跡		●	●						562遺跡
129	五村町									享徳2：古里入道、近世：伊奈平十郎家敷
130	西田之内遺跡		●	●						旧2-14調査、水田、屋敷、堀、敷田溝
131	布留塚Ⅱ遺跡		●	●	●					旧3調査、水田、塀、井
132	福島藤木遺跡		●	●	●					旧3-14、水田、屋敷
133	五村町№536遺跡		●	●	●					肥前書、水田
134	五村町№543遺跡		●	●	●					肥前書、水田
135	布留塚遺跡		●	●						肥前書、水田
136	五村町№708遺跡		●	●	●					肥22遺跡、水田、溝
137	五村町№159遺跡		●	●	●					肥22遺跡
138	福島寺			●						肥前書一枚 福島元謙、宇津木文書
139	五村町№528遺跡		●	●	●					肥前書、水田
140	原教Ⅱ遺跡		●	●	●					旧6調査、水田、溝、屋敷
141	天神古墳		●	●						旧6調査、溝
142	原教遺跡(第2次)		●	●						肥22遺跡
143	五村町№149遺跡		●	●	●					肥22遺跡
144	五村町№583遺跡		●	●	●					旧14遺跡(№582)、遺物包含層
145	福島古部遺跡		●	●	●					旧10-11調査、集落、溝、土坑、敷田溝
146	五村町№571遺跡		●	●	●					旧10遺跡(№562)、集落、水田
147	五村町№683遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№709)
148	五村町№175遺跡		●	●	●					敷布地
149	五村町№673遺跡		●	●	●					肥前書(№691)
150	五村町№602遺跡		●	●	●					肥前書、水田、土坑
151	原教遺跡(第1次)		●	●	●					肥前書
152	福島藤木Ⅳ遺跡		●	●	●					旧2調査、集落、稲、水田、溝、井戸、土坑
153	五村町№176遺跡		●	●	●					敷布地
154	福島藤木Ⅲ遺跡		●	●	●					肥前書、水田、溝
155	福島藤木Ⅱ遺跡		●	●	●					旧9-12調査、稲、水田、屋敷
156	福島藤木Ⅴ遺跡		●	●	●					旧5調査、集落、水田、溝
157	福島藤木Ⅰ遺跡		●	●	●					旧4調査、集落
158	福島大島遺跡		●	●	●					旧9-11調査、水田、溝、土坑、屋敷、敷田溝
159	福島藤木Ⅰ遺跡		●	●	●					旧3-4-10調査、集落、井戸、溝
160	五村町№147遺跡		●	●	●					城跡、航空写真による
161	五村町№131遺跡		●	●	●					肥22遺跡
162	五村町№152遺跡		●	●	●					肥22遺跡
163	五村町№715遺跡		●	●	●					肥22遺跡、集落、水田
164	五村町№549遺跡		●	●	●					肥22遺跡、水田
165	八街五調ノ八北 北区遺跡		●	●	●					肥前書、集落、水田
166	五村町№114遺跡		●	●	●					肥前書
167	南栗野遺跡		●	●	●					肥22遺跡、土坑、井戸、溝
168	五村町№129遺跡		●	●	●					敷布地
169	五村町№115遺跡		●	●	●					肥前書、水田
170	宇賀北沖遺跡		●	●	●					肥44遺跡、溝、水田
171	五村町№116遺跡		●	●	●					肥21遺跡、堀
172	五村町№681遺跡		●	●	●					旧33遺跡(№707)、水田
173	五村町№821遺跡		●	●	●					旧44遺跡(№640)、水田
174	五村町№130遺跡		●	●	●					敷布地
175	藤原遺跡		●	●	●					562遺跡、井戸
176	内山原教ノ内山 原教遺跡		●	●	●					天正年間、信州野城内山原右衛門、田口文書
177	五村町№134遺跡		●	●	●					敷布地
178	西下原教		●	●	●					敷布地
179	五村町№132遺跡		●	●	●					敷布地
180	五村町№524遺跡		●	●	●					肥前書(№442)、土坑、溝
181	五村町№92遺跡		●	●	●					古墳
182	五村町№327遺跡		●	●	●					肥前書(№437)、溝、井戸
183	五村町№567遺跡		●	●	●					旧10遺跡(№553)、集落、水田
184	五村町№119遺跡		●	●	●					肥前書
185	五村町№120遺跡		●	●	●					肥前書
186	中袋遺跡		●	●	●					旧14遺跡、水田、溝

No	遺跡名	国史 古蹟	国史 史蹟	国史 古蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	国史 史蹟	備考
187	五村町№514遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№431)、水田、溝?
188	五村町№300遺跡		●	●	●					肥前書、水田、溝
189	五村町№502遺跡		●	●	●					肥前書(№611)、水田
190	五村町№313遺跡		●	●	●					肥前書
191	五村町№317遺跡		●	●	●					肥前書
192	五村町№318遺跡		●	●	●					肥前書
193	東田原教		●	●	●					東田氏
194	五村町№330遺跡		●	●	●					敷布地
195	五村町№233遺跡		●	●	●					古墳、S36航空写真
196	上之手立野遺跡		●	●	●					古墳、集落、屋敷、土坑、溝
197	柳田原教		●	●	●					柳田氏
198	五村町№314遺跡		●	●	●					肥前書、水田
199	五村町№236遺跡		●	●	●					古墳、S36航空写真
200	五村町№315遺跡		●	●	●					肥2-14遺跡、井戸、土坑、溝
201	五村町№625遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№649)、水田、溝
202	五村町№316遺跡		●	●	●					肥前書
203	本森原教		●	●	●					本森氏
204	五村町№523遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№440)、水田
205	上之手八王子遺 跡		●	●	●					S63相調査、水田、溝
206	五村町№337遺跡		●	●	●					敷布地
207	上之手八王子Ⅱ 遺跡		●	●	●					肥前書、集落、溝、敷田溝
208	中塚遺跡		●	●	●					肥前書、集落
209	原屋敷		●	●	●					肥前書、肥前書門、田口文書
210	原屋敷Ⅱ遺跡		●	●	●					肥前書、屋敷跡
211	原屋敷Ⅲ遺跡		●	●	●					S63調査、原屋敷跡、土坑、溝
212	新輪島Ⅱ遺跡		●	●	●					肥前書、溝
213	五村町№232遺跡		●	●	●					古墳、S36航空写真
214	新輪島遺跡		●	●	●					肥前書、土坑、井戸、溝
215	五村町№564遺跡		●	●	●					肥前書(№541)、水田、溝、土坑
216	若王子古墳		●	●	●					肥前書(№339)古墳
217	若王子遺跡		●	●	●					肥前書、水田、溝
218	天神寄りⅡ遺跡		●	●	●					肥前書、水田
219	天神寄りⅤ遺跡		●	●	●					肥前書、土坑、溝、ビット
220	五村町№565遺跡		●	●	●					敷布地
221	五村町№403遺跡		●	●	●					肥22遺跡、集落
222	天神寄り遺跡		●	●	●					肥前書、集落
223	西ノ下遺跡		●	●	●					肥前書、溝、敷田溝
224	天神寄りⅢ遺跡		●	●	●					肥前書、集落、土坑、溝、敷田溝、田口文書
225	天神寄りⅣ遺跡		●	●	●					肥前書、土坑、ビット、井戸、溝、集石礎石
226	五村町№670遺跡		●	●	●					肥前書調査
227	五村町№405遺跡		●	●	●					肥22遺跡
228	五村町№244遺跡		●	●	●					古墳、S36航空写真
229	五村町№503遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№122)、溝、土坑
230	五村町№496遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№45)、溝
231	五村町№495遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№44)、溝
232	五村町№406遺跡		●	●	●					肥22遺跡
233	五村町№407遺跡		●	●	●					肥22遺跡、水田、溝
234	五村町№329遺跡		●	●	●					肥22遺跡、集落
235	五村町№330遺跡		●	●	●					肥22遺跡
236	五村町№331遺跡		●	●	●					肥前書、集落
237	天神下遺跡		●	●	●					肥前書、井戸、土坑、溝
238	上之手地区遺跡 群(1)(仮訳塔 ノ1)		●	●	●					S63調査、水田、溝
239	五村町№319遺跡		●	●	●					肥22遺跡
240	五村町№531遺跡		●	●	●					肥22遺跡(№522)、集落、水田
241	五村町№333遺跡		●	●	●					敷布地
242	上之手地区遺跡 群(1)(仮訳塔 ノ1)		●	●	●					S63調査、観音科建群、溝
243	五村町№232遺跡		●	●	●					古墳、S36航空写真
244	宇賀遺跡		●	●	●					S63調査、集落、稲、棚田、土坑、井戸、ビット、溝
245	上之手地区遺跡 群(2)(仮訳塔 ノ1)		●	●	●					S63調査、土坑、溝

第2章 地理および歴史的環境

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	平安	中世	近世	備考
246	玉村町No321遺跡				●				伝説類
247	行人塚V遺跡				●				伝説類、集落
248	上之平地区遺跡群(1)(仮称No138)					●			伝説類、土坑、溝
249	行人塚遺跡				●				伝説類、集落
250	行人塚遺跡				●				伝説類、集落
251	行人塚V遺跡				●				伝説類、集落
252	行人塚II遺跡				●				伝説類、土坑、溝
253	上之平地区遺跡群(1)(仮称No138)				●				伝説類、不明遺構、土坑
254	玉村町No320遺跡				●				伝説類
255	玉村町No365遺跡				●				旧伝説類(No586)、水田、溝、ビット
256	上之平石塚V遺跡			●					旧伝説類、集落、土坑、ビット、溝
257	上之平石塚II遺跡				●				伝説類、集落
258	上之平石塚遺跡				●	●			旧伝説類、墓、塚、原、溝
259	上之平栗原前古墳				●	●			伝説五村第34号墳
260	玉村町No322遺跡				●				伝説類、集落
261	新井原					●	●		新井氏
262	行人塚VI遺跡				●	●			旧伝説類、集落、溝、井戸
263	上之平石塚IV遺跡				●				伝説類、土坑、溝
264	上之平石塚III遺跡	●	●		●				伝説類、集落、土坑、溝
265	御前遺跡				●				旧伝説類、集落
266	玉村町No238遺跡				●				古墳、S30航空写真
267	内面伊勢山II遺跡				●				伝説類、集落
268	内面伊勢山遺跡				●				旧伝説類、古墳、井戸
269	玉村町No323遺跡				●	●			伝説類、集落集落
270	栗原前遺跡				●				伝説類、溝
271	栗原前II遺跡				●				伝説類、ビット、溝
272	上之平地区遺跡群(1)(仮称No138)				●				S63遺跡、土坑、溝
273	内面伊勢山IV遺跡				●				伝説類、集落、古墳
274	玉村町No324遺跡				●	●			伝説類(No547)、集落、ビット、溝
275	宇良遺跡				●				S63遺跡、水田
276	御門遺跡				●				旧伝説類、集落、墓、溝、土坑
277	玉村町No242遺跡				●				古墳、S30航空写真
278	玉村町No326遺跡				●	●			伝説類(No547)、集落、水田、溝
279	蟹沢遺跡				●	●			伝説類
280	蟹沢遺跡				●	●			伝説類、土坑、溝
281	蟹沢IV遺跡				●	●			伝説類
282	福程遺跡				●				伝説類
283	玉村町No255遺跡				●	●			官邸、S30航空写真
284	福島山IV遺跡	●	●	●	●	●			旧伝説類、集落、土器焼成、水田、復旧溝
285	玉村町No565遺跡				●				旧伝説類(No547)、畑、道路
286	玉村町No600遺跡				●				旧伝説類(No601)、集落、水田、溝、復旧溝
287	野原遺跡				●				旧伝説類、水田、溝
288	福島久保山遺跡				●	●			旧伝説類、集落、原、水田、復旧溝
289	久保山遺跡				●	●			旧伝説類、集落、原、水田、井戸、ビット、溝、復旧溝
290	玉村町No512遺跡				●				旧伝説類(No423)、水田
291	玉村町No150遺跡				●				S63遺跡
292	味噌袋・福島二丁町遺跡				●				旧伝説類、溝、土坑、水田
293	玉村町No184遺跡				●	●			敷布地
294	玉村町No166遺跡				●				伝説類、集落、水田
295	利根遺跡				●				伝説類、土手、畑
296	玉村町No204遺跡				●				伝説類
297	玉村町No207遺跡				●				伝説類
298	玉村町No212遺跡				●	●			敷布地
299	玉村町No201遺跡				●				古墳?

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	平安	中世	近世	備考
300	玉村町No202遺跡				●				古墳?
301	福島二丁町遺跡				●	●	●		伝説類(No214)、水田、畑、復旧溝、溝
302	南玉塚遺跡				●	●	●		伝説類(No214)、水田、畑、復旧溝
303	下之河内中遺跡				●	●	●		伝説類(No214)、水田、畑、復旧溝
304	下之河内高野遺跡				●	●	●		伝説類(No214)、水田、畑、復旧溝
305	玉村町No208遺跡				●				伝説類
306	福島大光の遺跡				●	●	●		旧伝説類、集落、溝、溝、畑、復旧溝
307	玉村町No183遺跡				●	●	●		敷布地
308	玉村町No586遺跡				●	●	●		旧伝説類(No587)、集落、水田、溝、原、復旧溝
309	福島大光の遺跡				●	●	●		旧伝説類、墓、水田、原
310	玉村町No157遺跡				●				伝説類
311	玉村町No159遺跡				●				伝説類
312	玉村町No158遺跡				●				伝説類
313	玉村町No161遺跡				●				伝説類
314	玉村町No162遺跡				●				伝説類
315	玉村町No160遺跡				●				伝説類、畑
316	玉村町No185遺跡				●	●	●		敷布地
317	福島・南玉塚				●	●	●		敷布地
318	玉村町No186遺跡				●	●	●		敷布地
319	玉村町No163遺跡				●	●	●		S63遺跡
320	玉村町No164遺跡				●	●	●		伝説類、集落、水田
321	玉村町No314遺跡				●				古墳
322	玉村町No315遺跡				●				古墳
323	玉村町No316遺跡				●				古墳
324	玉村町No317遺跡				●				古墳
325	玉村町No173遺跡				●	●			伝説類、集落、水田
326	玉村町No172遺跡				●	●			伝説類、集落
327	玉村町No167遺跡				●	●			伝説類、集落、水田
328	玉村町No148遺跡				●				原(古輪船(文政5~6年))
329	玉村町No168遺跡				●				旧伝説類
330	土上堂遺跡				●				伝説類、集落
331	玉村町No190遺跡				●	●	●		敷布地
332	玉村町No169遺跡				●	●	●		伝説類、集落
333	玉村町No408遺跡				●				伝説類、水田
334	南玉塚				●				歴史学
335	玉村町No201遺跡				●	●	●		伝説類(No214)、土坑、原
336	玉村塚				●	●	●		南玉塚(古輪船、金沢13、13世紀)
337	玉村町No180遺跡				●				古墳跡
338	玉村町No173遺跡				●				伝説類、水田
339	社宮高古墳				●				S51発掘
340	玉村町No174遺跡				●				旧伝説類、水田
341	玉村町No191遺跡				●	●			敷布地
342	玉村町No192遺跡				●	●			敷布地、水田
343	土上堂I・II遺跡				●				伝説類
344	玉村町No427遺跡				●	●			敷布地
345	三崎遺跡				●				伝説類、集落、水田、溝
346	三崎遺跡				●				伝説類、水田、溝
347	玉村町No337遺跡				●	●			伝説類(No408)、畑、水田
348	玉村町No170遺跡				●				伝説類、畑、水田
349	玉村町No203遺跡				●				伝説類
350	玉村町No206遺跡				●				伝説類
351	玉村町No193遺跡				●				古墳?
352	玉村町No194遺跡				●				古墳
353	少杉山古墳				●				古墳
354	玉村町No214遺跡				●	●			敷布地
355	玉村町No429遺跡				●	●			古墳?、S30航空写真
356	玉村町No430遺跡				●	●			古墳?、S30航空写真
357	玉村町No431遺跡				●	●			古墳?、S30航空写真
358	玉村町No209遺跡				●				伝説類
359	玉村町No519遺跡				●	●			伝説類(No408)、畑
360	玉村町No194遺跡				●	●			伝説類、水田、畑
361	玉村町No196遺跡				●				古墳
362	玉村町No197遺跡				●				古墳
363	玉村町No198遺跡				●				古墳
364	玉村町No457遺跡				●	●			伝説類、水田、畑
365	玉村町No213遺跡				●	●			敷布地
366	玉村町No432遺跡				●	●			古墳?、S30航空写真

第2節 遺跡周辺の歴史環境

No	遺跡名	旧石垣	礎文	古墳	古井	中井	五井	備考
367	玉村町№433遺跡			●				古墳
368	川岸稲石遺跡	●		●	●	●	●	約500年前。包含竪溝、集落、水田、溝、土坑
369	北田中遺跡					●		田1調査、畑
370	玉村町№685遺跡			●				田6区画(№685)、畑、復旧溝
371	玉村町№458遺跡			●				田6区画(№47)、水田
372	稲荷木1号墳		●					S52発掘
373	稲荷木2号墳		●					S52発掘
374	沖遺跡			●				田6調査、畑
375	玉村町№459遺跡			●				田6区画
376	玉村町№543遺跡			●				田6区画(№494)、畑
377	往来遺跡					●		田6調査、畑
378	玉村町№559遺跡			●				田6区画(№661)、水田
379	玉村町№678遺跡			●				田6区画(№670)
380	玉村町№179遺跡			●	●			敷布地
381	玉村町№687遺跡			●				田6区画(№687)、水田
382	土蔵高芝畑遺跡			●				田6調査、集落、水田
383	土蔵高芝畑日遺跡	●				●		田6調査、集落、水田
384	玉村町№528遺跡			●				田6区画(№490)、集落、水田
385	玉村町№554遺跡			●				田6区画(№527)、集落、水田
386	玉村町№181遺跡			●	●			敷布地
387	玉村町№165遺跡			●	●			S63区画、集落
388	玉村町№187遺跡			●	●			敷布地
389	玉村町№188遺跡			●	●			敷布地
390	大野神遺跡			●				田6調査、水田
391	玉村町№799遺跡		●	●				田6区画(№721)、土坑、ビット
392	浅木蔵(元木蔵)			●	●	○		田62号、天正11年竹筒製書巻
393	玉村町№189遺跡			●				敷布地
394	玉村町№417遺跡			●				田6区画
395	玉村町№418遺跡			●				S63区画
396	玉村町№525遺跡			●				田6区画(№488)、水田
397	玉村町№145遺跡			●				田6区画
398	藤原寺跡敷			●	○			伝玉村太郎、13世紀
399	玉村町№542遺跡			●				田6区画(№489)、土坑、溝
400	玉村町№153遺跡			●				田6区画
401	玉村町№178遺跡			●	●			敷布地
402	玉村町№154遺跡			●				田6区画
403	玉村町№155遺跡			●				田6区画
404	玉村町№180遺跡		●	●				敷布地
405	玉村町№572遺跡			●				田6区画(№683)、水田
406	玉村町№693遺跡			●	●			田63立合、水田
407	玉村町№696遺跡			●				田6区画
408	玉村町№177遺跡			●	●			敷布地
409	玉村町№691遺跡			●	●			田7区画、水田、溝1溝、溝、ビット
410	玉村町№397遺跡			●				田6区画
411	面田遺跡			●				田6調査、集落
412	面田日遺跡			●				田6調査
413	玉村町№398遺跡			●				田6調査、溝
414	玉村町№698遺跡			●				田6区画、水田
415	玉村町№699遺跡			●				田6区画、集落
416	内瀬戸土遺跡			●				田6調査、集落
417	玉村町№702遺跡			●				田6区画(№702)、水田
418	水口遺跡			●				田6調査、水田
419	玉村町№416遺跡			●				田6調査
420	徳尾塚敷			○				田63立合、天正、西側に郭部
421	玉村町№182遺跡			●				敷布地
422	玉村町№688遺跡			●				田6区画(№711)、水田
423	玉村町№420遺跡			●				田6区画、溝
424	河下塚敷			●	○			大正年間まで建物残る
425	玉村町№422遺跡			●	●			敷布地
426	玉村町№401遺跡			●	●			田6区画
427	土手東遺跡	●		●	●	●	●	田6調査、水田、土坑、ビット、溝、塀穴、堀り
428	玉村町№630遺跡			●	●			田6区画(№630)、集落、水田、畑
429	玉村町№402遺跡			●				田6区画、集落
430	稲荷山遺跡群(本武蔵所17)	●		●				S63調査、土坑、丹戸、溝

No	遺跡名	旧石垣	礎文	古墳	古井	中井	五井	備考
431	外瀬八反田古遺跡					●		田7区画、土坑
432	外瀬八反田日遺跡					●		田7調査、溝、土坑、ビット
433	稲荷山遺跡群(本武蔵所18)					●		S63調査、丹戸、溝
434	玉村町№695遺跡			●				田6区画、水田
435	玉村町№698遺跡			●				田6区画
436	外瀬八反田日遺跡					●	●	田6調査、集落、溝、道路、ビット
437	外瀬八反田遺跡(第2次調査)					●	●	田6調査、集落、水田
438	外瀬八反田遺跡					●	●	田6調査、土坑、溝
439	玉村町№694遺跡			●				田6区画、集落、水田
440	玉村町№688遺跡			●				田6区画(№590)、集落、水田、溝
441	玉村町№689遺跡			●			●	田6区画(№591)、集落、水田、溝
442	玉村町№691遺跡			●				田6区画(№603)、水田
443	玉村町№699遺跡			●				田6区画、集落
444	玉村町№410遺跡			●				田6区画
445	玉村町№341遺跡			●				古墳、S58航空写真
446	玉村町№411遺跡			●	●			田6区画、溝、土坑
447	玉村町№340遺跡			●				稲賀玉村町第22号墳
448	玉村町№345遺跡			●				稲賀玉村町第23号墳
449	玉村町№434遺跡			●				古墳
450	玉村町№694遺跡			●				田6区画
451	玉村町№432遺跡			●				田6区画
452	玉村町№696遺跡			●				田6区画、水田
453	玉村町№643遺跡			●				稲賀玉村町第4号墳
454	玉村町№413遺跡			●				田6区画
455	玉村町№424遺跡			●				敷布地
456	玉村町№415遺跡			●	●			田6区画、集落
457	石部寺遺跡			●				田6調査、集落、溝
458	石部寺東遺跡			●				田6調査、溝
459	玉村町№421遺跡			●				田6区画、水田、溝
460	御山南遺跡			●				S62調査、集落
461	玉村町№351遺跡			●				古墳
462	藤原			●				稲賀高芝畑村第10号墳
463	藤原山古墳			●				稲賀玉村町第1号墳
464	玉村町№710遺跡			●				S43調査、稲賀玉村町第2号墳
465	下茂木神明日遺跡			●				S62調査、水田、溝
466	神明遺跡			●				S63調査
467	玉村町№422遺跡			●				S63区画
468	玉村町№354遺跡			●				S41調査、稲賀玉村町第3号墳
469	玉村町№355遺跡			●				稲賀玉村町第24号墳
470	玉村町№356遺跡			●				古墳、S58航空写真
471	玉村町№358遺跡			●				稲賀玉村町第6号墳
472	玉村町№362遺跡			●				稲賀玉村町第10号墳
473	玉村町№358遺跡			●				稲賀玉村町第7号墳
474	玉村町№360遺跡			●				稲賀玉村町第8号墳
475	玉村町№361遺跡			●				稲賀玉村町第9号墳
476	玉村町№363遺跡			●				稲賀玉村町第11号墳
477	玉村町№364遺跡			●				稲賀玉村町第12号墳
478	浄土山古墳			●				S42調査、稲賀芝畑村第1号墳
479	玉村町№370遺跡			●				古墳
480	蟹ノ木山古墳			●				S41-42調査、稲賀芝畑村第5号墳(京辰堀り古墳)
481	オトノ塚遺跡			●				田63調査、稲賀芝畑村第2号墳(4号墳)、集落、丹戸
482	鶴岡山古墳			●				稲賀芝畑村第4号墳
483	下茂木地区遺跡群(本武蔵所21)			●	●			S63調査、水田、丹戸、溝
484	玉村町№613遺跡			●				田6区画(№513)、溝、土坑、水田
485	玉村町№693遺跡			●				田6区画(№539)、溝、ビット
486	下茂木塚敷			●				高野基兵衛、天正年間、田口文書
487	下茂木地区遺跡群(本武蔵所22)			●				S63塚敷
488	玉村町№425遺跡			●				敷布地
489	玉村町№699遺跡			●				田6区画(№557)、水田、溝
490	山田遺跡			●	●			田19-20区画(№69+70)

## 第2章 地理的および歴史的環境

No	遺跡名	旧石垣	旧文	旧交	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	備考
491	玉村町№426遺跡				●	●	●	●	●	●	敷石地
492	玉村町№608遺跡				●	●	●	●	●	●	田・19区画、土坑、水田、溝、発掘溝、井戸、ピット
493	北原遺跡				●	●	●	●	●	●	新調倉、集積、土坑、井戸、溝、水田
494	街道南遺跡				●	●					肥前倉、土坑、びや、溝、井戸
495	茶室山古墳				●						古墳
496	玉村町№428遺跡				●	●					敷石地
497	房子塚古墳				●						肥前芝根村第9号墳
498	玉村町№443遺跡										肥前芝根村第12号墳
499	玉村町№444遺跡				●						S4調査、肥前芝根村第18号墳

あったとも目される。鎌倉幕府の政權下では、それまで上野国奉行人の安達氏に被官していた玉村氏によって支配されていたが、弘安8(1285)年の霜月騒動で安達氏滅亡に従い、その支配は北条得宗家へ移った。これにより、北玉村は円覚寺、これ以外の地は極楽寺に寄進されたと推定されている(唐沢定市1988)。

遡って、平安時代後期頃に現伊勢崎市南西部域を支配していたと推定される藤原姓那波氏が、治承・寿永乱(1180～1185)で没落し、替わって中原姓大江氏が那波氏を名乗ったといわれる。この中原姓那波氏は、室町時代に上杉氏守護下で玉村を含む旧那波郡域を支配し、特に、戦乱期に入った15世紀後半の享徳の乱(1455～1483)や長尾景春の乱(1476～1480)では山内上杉方に在って、古賀公方足利成氏方や長尾景春に対峙する境目の領主としての役割を担っていた。しかし、応永34年に始まる利根川西遷によって支配領域が東西に分かれ、居城である小泉城の大半が利根川に落ちて、現利根川左岸の那波城(堀口城、伊勢崎市堀口町)に移る。そして戦国期には由良氏、のち後北条氏に属したらしい。

当地は、上述の享徳の乱以降、関東公方家と関東管領家、上杉氏内の内紛等で戦乱が続いたが、相模の後北条氏の北進による川越合戦の惨敗、その後の庄迫から、山内上杉憲政が、天文21(1552)年に本拠の平井を退去した後は、越後の上杉、甲斐の武田、後北条氏らの草刈り場となり、広い範囲にわたって荒廃したと推測される。その後、近世には、紆余曲折はあるものの、玉村町域は前橋藩領を中心に、天領、旗本領があった。

さて、この地域は新旧の利根川を渡河して東西を結ぶ主要幹線が通っていた。旧利根川の渡河点は伊勢崎市の茂呂町であったが、律令期の東山道駅路がその機能を失った後、鎌倉街道への接続路として、鎌倉街道支道(b)

No	遺跡名	旧石垣	旧文	旧交	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	備考
500	川井堀崎山古墳								●	肥前芝根村第7号墳、三角縁神鏡出土
501	玉村町№499遺跡								●	肥前(№608)、水田
502	玉村町№497遺跡								●	肥前(№673)、水田
503	玉村町№462遺跡								●	S63区画
a	東山街道								●	中略東山道
b	鎌倉街道支道									
c	上野大道								●	
d	日光例幣使街道									
e	佐渡奉行道									
f	玉村宿									
g	前橋堀(窪川)								●	関東奉行伊勢崎留守

が設けられた。その後、室町時代に入ると、当地を通過する東西交通路は上野国板敷(高崎市)と下野国足利を基点とすることとなり、利根川西遷後の15世紀中葉以降は、現在の県道高崎伊勢崎線に沿う位地に、所謂「上野大道」(c)が設けられた。15世紀後半期の軍勢の移動は、上野大道を用いて行なわれた。享徳3(1454)年に古河公方方に攻め落とされる伊勢崎市上之宮町の上之宮要害も上野大道沿いに在り、一方、康正2(1456)年の赤堀政綱軍忠状寫に「那波郡福島橋切落警護」とあるように、上野大道の新利根川渡河点は玉村町福島で、そこに橋(舟橋か)が架けられていたことが知られる。しかし、戦国時代末になると、近世に例幣使街道となる新たな東西路が開通してたことが、『前田慶次道中日記』に示されている。

近世、正保4(1647)年以降には、日光例幣使街道(d)が整備され、玉村宿(f)、五料宿、柴宿が整えられた。また、五料宿に隣接して五料関所が設けられ、柴宿との間に渡船が整備され、また柴宿からは例幣使街道の脇往還となる日光裏街道も整備された。一方、南の武蔵から烏川を渡船して玉村町域に入る、佐渡奉行道が整備された。佐渡奉行道は時期より四通りの路線があったが、このうち木庄市の八町河原から渡船して五料宿に至り、日光例幣使街道を通る路線と、烏川を渡って川井河岸に至り、その後、烏川右岸を通って北上し、玉村八幡宮参道前に入る旧新二つの路線が主たる路線であった。この他、利根川を利用した水運もあり、五料関の東には、木材筏組と前橋藩の米輸送を主に扱う五料河岸が、五料河岸の対岸には、十四河岸組合に加わり、扱い荷も多かったと見られる鞆負河岸が在った。

ところで、前橋南部から玉村町にかけての前橋台地上には、多数の環濠屋敷の存在が知られる。それらは単郭方形の縄張り構造を持つものが多いが、これらの屋敷跡



のうち、初源が13世紀代まで遡及する可能性のある城郭・屋敷として、弘長二(1262)年記録ほか板碑があり玉村太郎邸宅の伝承の残る観照寺屋敷(398)のほか、玉村城(336)、南玉館(276)、阿左美館(33)などが知られる(群馬県教育委員会1988)。発掘調査例では、宇貫館(244)、内田屋敷(176)、原屋敷(209)、田口下屋敷(94)、下之宮高俣、角洲城等が列記され、近世まで継続するものもみられる。なお、本遺跡の南東には金蔵寺があり、その開基と伝わる金原氏の屋敷跡と推定される玉村城(南玉村屋敷)が南に隣接する。ここには町重要文化財に指定された2基の五輪塔(文安5・6年銘)が残る。その更に南東に接して南玉館が位置し、那波氏家臣であった原氏の館、あるいは上野国守護安達氏家臣の玉村氏の館との伝承が残る。これらの屋敷遺構は従来中世に築かれた土豪屋敷と考えられ、近世を通して存在した例も少なくないと考えられてきた。しかしながら、近年の発掘調査により、齊田竹之内(130)、齊田中耕地(125)、福島飯玉(132)、福島飯塚(155)、福島大島(158)、福島大光坊(306)、福島久保田(288)、久保田(289)、八幡原赤塚Ⅱ、下之宮高俣(304)、上之手石塚(258)等の各遺跡の発掘調査により、概ね15世紀以前の未周知の屋敷遺構が発見され、且つ洪水層に覆われていることなどから、周知の屋敷遺構の多くが、戦国時代末以降の所産であると可能性が出てきており、築城、存続期間の再確認が必要となってきている。

農業生産関連の遺構としては、福島久保田遺跡(288)で1427(応永34)年と想定される洪水層に覆われた水田跡が検出されている。上之手立野遺跡(196)や福島飯玉遺跡(132)では、浅間Bテフラ降下以降で天明3年以前の水田・畑が判明している。

近世に入ると、この地は徳川幕府代官の伊奈忠次の管掌のもとで再開発が実施された(『玉村町誌』)。伊奈氏は慶長15(1610)年に滝川用水を完成した。備前堀(g、滝川用水開削)と新田開発により、「新田村」が誕生し、玉村八幡宮を境に上新田と下新田にわかれることとなった。

近世の埋没遺跡としては、中世から引き続く環濠屋敷、1783(天明3)年浅間山噴火に伴う泥石流被害の埋没家屋・田畑がある。玉村八幡宮の東に隣接する玉村館(129)は伊奈忠次の陣屋が置かれたとされる。現利根川左岸にある上福島中町遺跡(23)は、天明泥流によって埋没した建

物が発見された。ここからは礎石建物10棟、便所6棟、井戸2基、畑、道などの存在が判明し、当時のままの各種生活用具が出土している。また桶越諏訪前遺跡(54)では、埋没家屋や植込みなどが、利根添遺跡(295)では矢川氾濫を防ぐための堤防遺構が確認されている。この天明泥流で埋没した田畑としては、川井箱石(368)、柄田添遺跡(6)等が知られており、柄田添遺跡では農作業(草取りか)の足跡列、利根川対岸の伊勢崎市東上之宮遺跡では水田の倒れたイネも発見されている。この天明泥流被災後の復旧田畑の検出も多い下之宮中沖(303)、下之宮高俣(304)、川井箱石(368)、福島飯塚(155)、福島大島(158)等の各遺跡では、砂礫の多く混じる泥流堆積物の天地返しによる耕土復旧を行った様子がありありとかがえる。

## 第3章 発見された遺構と遺物

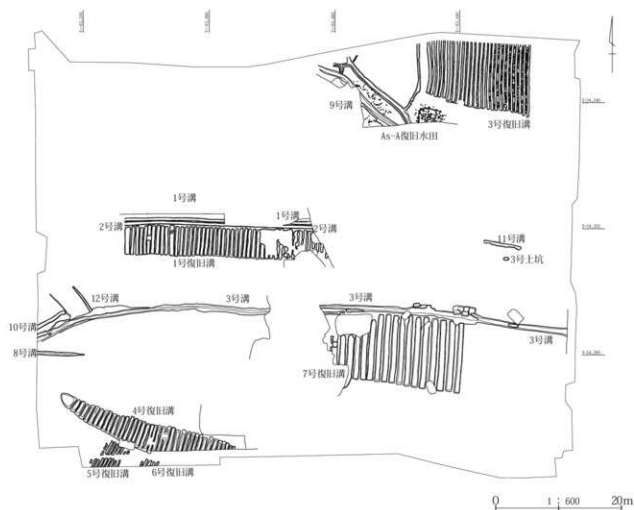
本遺跡では、1～3区での調査を行い、1・2区は4ヶ面の調査面、3区では3ヶ面の調査面で発掘調査を実施した。また、検出された遺構は、おおよそ天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う被災前後の時期(1面)、中世を中心とする時期(2面)、平安時代を中心とした時期(3面)、古墳時代を中心とした時期(4面)の遺構があった。

本章では、各区、面毎に、発見された遺構、遺物を報告することとする。

なお、右表(表2)に各区の出土遺構量を示す。

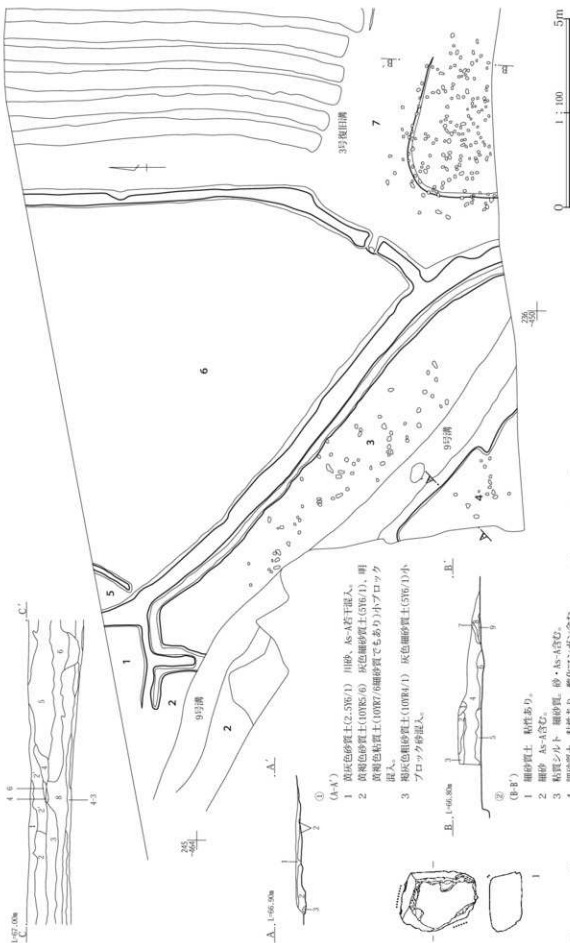
表2 福島味噌袋遺跡調査遺構数一覧

区	1区	2区	3区	合計
遺構				
竪穴住居	2	22	17	41
掘立柱建物	1		1	2
水田(面)	3	1	1	5
畑(面)		7	1	8
復旧溝(面)	7	8	10	25
溝	64	26	26	116
井戸		3	2	5
土坑	18	44	36	98
ピット	38	29		67
その他	4	2	2	8



第8図 1区1面全体図

- (C-C')  
 1 灰色キャスリーン台風浜赤砂(5Y6/1)  
 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 川砂混入。  
 2' 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2)  
 3 褐色細砂質土(10YR6/1) 2層に比し層が薄い。  
 4 褐色粘質土(10YR3/3)等混入。  
 5 8層土とAs-A層石の混入。  
 6 灰色(Y6/1) As-A混入。 2層土若干混入。  
 7 灰色(7.5Y6/1) As-A、明黄褐色土混入。  
 8 灰オリーブ色(2.5Y7/1) As-A等混入。  
 9 褐色シルト質土(10YR6/1) 川砂や砂多。



第9図 1区As-A層旧水田

## 第1節 1区の遺構と遺物

### (1) 1区1面の遺構

#### 1. 1区調査の概要

最初に1区全体の調査について述べる。

1区では、南接する耕作地への馬入れ確保のため、南西隅部の調査を、優先的に実施した。

1区では、残留物により、最近土の入れ替え作業が行われていたことが確認された。この入れ替え作業による掘削は、広範囲に及び、程度の差こそあれ1面から4面まで、全ての調査面にその痕跡が見られた。

また、上述の南西隅部掘削部の調査時点では、その埋設を警告するテープが確認されたことから、水道管の敷設が確認された。この水道管は、玉村町水道局の水道管図に示す位置より10m以上北に外れて敷設されていたもので、南側掘削部の西寄りを斜めに横断し、本線調査区南縁に沿って敷設されていた。この水道管は商用施設へ配管する、径30cmの管であったため、その敷設位置周辺の調査は、水道管確認以前に掘削を開始した1面の一部のみに留めざるを得なかった。

#### 2. 1区1面の概要

1面では上述の土壌入れ替えに伴う攪乱の影響が顕著で、鳥状に所々遺構を確認できたに過ぎなかった。また、上述の水道管の敷設によって、調査区南縁の調査は、水道管の敷設がなされる前に掘削を開始した1面の一部(5・6号復旧溝群付近)に限定した。

1面では、天明3(1783)年の浅間山の大噴火、いわゆる「浅間焼け」に伴う遺構群を調査した。本遺跡における浅間焼けの災害は軽石の降下に伴うものに限られたが、軽石の直接被害を示す遺構は見られなかった。1区1面で確認された遺構の多くはAS-A軽石降下後の復旧を示すものであった。

1区1面で確認された遺構は復旧水田1か所、復旧溝群7か所、溝11条、土坑1基が確認された。

全体的な土地区画は把握されなかったが、北東部より南東部が低い。また、後述する南西隅近くにある4号復旧溝群とその南側とは30cm程の段差があり、西壁際やや

南寄りに勾配率4%を測る比高差20cm程の段差があり、南東部の7号復旧溝群の東側も10cm程の小さい段差が見られた。これらは、近世の耕作区画に伴うものと思慮される。なお、調査対象ではなかったが、キャスリーン台風の洪水被災(写真1)時の洪水層(砂層)が区北部で確認されている(写真2)。

以下、各遺構の報告に移るが、遺構番号は区毎に付されているため重複するが、以下報文中では、区呼称を省略して記載することとする。

#### 3. AS-A復旧水田(第9図、PL. 2・76)

**概要** 本水田はAS-A被災前後の水田址である。東側は3号復旧溝群と重複し、試掘トレンチで壊されて確認できず、南・西側は上述の土取りの攪乱により壊されていたため、狭い範囲を確認できたに過ぎない。

**位置** 本水田址は1区北東部、236～250-440～460グリッドにある。

**重複** 3号復旧溝群、9号溝と重複する。3号復旧溝群に対しては、土層観察(写真2:0622-1139)から推して、後述の水田面1～6は3号復旧溝群より新しいが、水田面7はこれに切られている。また9号溝は本水田址より新しい。

**規模** 残存東西:22m 南北:14m

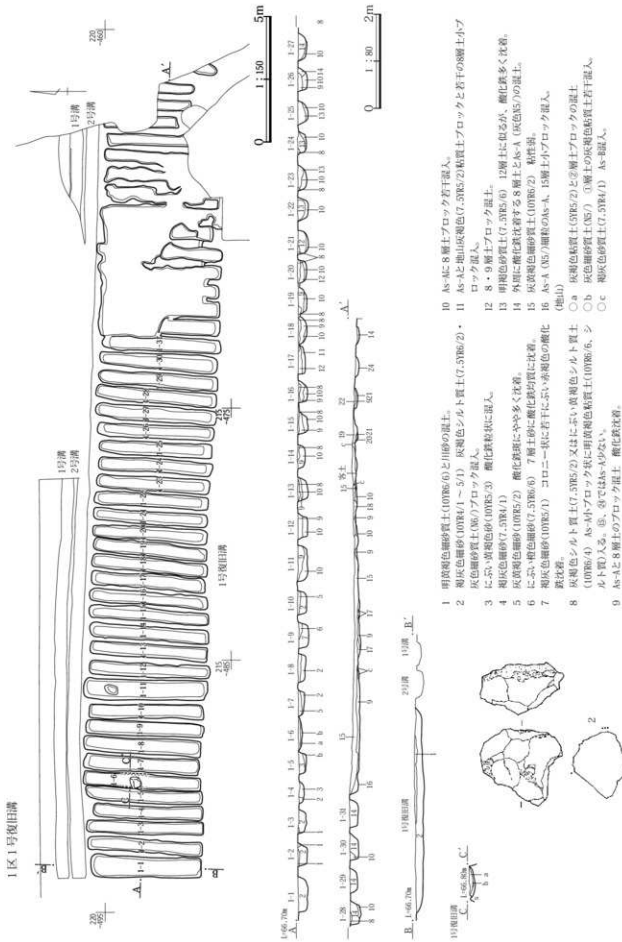
水田面規模は表10参照のこと。

**覆土** 水田面1～6は酸化鉄を多く含む褐灰砂質土等で埋没する。水田面7は3号復旧溝と同じ灰黄褐色シルト質土を含むAS-A軽石層で覆われている。

**構造** 畦畔の配置に規格性はなく、地形に合わせて設置されている。

畦は、概ね北西—南東方向に軸線を取る。水田面1・3と水田面5・6・7の間であり、幅90cm程を測る。また、水田面1と水田面2・3の間、水田面3と水田面4の間もその可能性を有するが、その幅は、前者は幅32cm、後者は水田面4の側のラインは段差があり、北西側は40cm、南東側は65cmを測る。明らかな畦は、畦を仕切るように、水田面2・3の間、水田面5・6の間、6・7間に設置されている。畦の幅は、前者は36cm、中者は24cm、後者は40cm程で、76cmを測る箇所もある。

また、いずれの畦にも水口がある。水口の設置位置は、水田面2・3の間では北側の畦から120cm、水田面5・6



第10図 1区1号復旧溝群と出土遺物



間では南西側の畦に沿って、水田面6・7間には南西側の畦から160cm離れた位置に設けられている。水口の幅は、水田面2・3間では測定できなかったが、水田面5・6間では上幅28cm、下幅8cm、水田面6・7間では上幅40cm、下幅16cmを測る。なお、水田面6・7間の水口底面の水田面6寄りに、ほぼ水田面6の面の高さに頂部が設置されるように、礫が据えられていた。

水田面は全体としては平坦であったが、南北両端部を除く水田面3、水田面8の南部中央付近に凹凸が見られた。通水関係にある水田面の比高差は、水田面2・3で2～6cm、水田面5・6と水田面6・7では6cmを測る。水田面5・6・7と地形に沿った、北西から南東方向への通水が想定されるが、水田面2・3では逆に東から西方向に通水していた可能性が想定される。また水田面2・3では、水田面2の北側から東側、水口の東側、水田面3の西から北側、そして南東側の畦畔に沿って、幅12～28cm、深さ1～5cmの浅い溝が掘削されている。この溝の掘削については、高低差の逆転を補う施工で在った可能性を指摘したい。

**遺物** 少量の土師器・須臾器片と中近世の陶磁器と共に火打石(1)が出土したに過ぎない。また水田面7の南寄りの東西7m、南北4.5mの範囲には、炭化物粒の分布が見られ、その北東寄りには、焼土の面的分布も確認された。

**所見** 上述のように、本水田址は自然地形を利用した縄張りで造成されている。

本水田址は近世後期の所産であるが、土層断面の観察から、確認した水田面1～6はAs-A被災後の所産と判断されるが、水田面7は被災の直後か被災前かは確認できないが、水田面6との境の畔までを埋めて、畑地として活用したものと判断される。なお、水田面7の区画は、耕地復旧作業の中で、復旧溝群の掘削区域とされ、以後畑地として使用されたものと思量される。これらの所見と水田面6・7間の畔の形状から判断して、本水田址はAs-A被災前から営まれていたものと推察される。

#### 4.1号復旧溝群(第10図、PL.2・3・76)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。本溝群は、東部が現代の攪乱により破壊され、全容を把握することはでき

なかった。

**位置** 本溝群は1区中部やや西寄りに所在する。215～220-461～493グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。なお、北側に1・2号溝が、本溝群の北縁に並走しており、関係性が窺われる。

**規模** 東西：残長32.3m 南北：4.9m

個々の溝の規模等については表9に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** 覆土の概要を述べると、西から4条目以东の復旧溝にはAs-A軽石が埋め込まれ、西から3条目までの復旧溝には全体に、4条目以东の復旧溝の中・上位層には褐灰色細砂質土等の土壌が埋め込まれている。

**構造** 本復旧溝群は46条以上の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN2°Eを向く。

溝は49～96cm、平均70.67cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、4.35～4.9m、平均4.6mを測り、上幅は42～80cm、平均54.52cm、確認面からの深さは7～23cm、平均16.67cmを測る。また溝と溝は7～23cm、平均17.02cmを隔てて掘削されていた。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 少量の中近世陶磁器など火打石2点(2・3)が出土したに過ぎなかった。

**所見** 上述のように、本復旧溝群は1・2号の南に接して掘削されていた。掘削範囲は短冊形を呈するが、これは土地区画を反映したものと判断される。

本復旧溝群はAs-A軽石を埋め込み、天地返しを測ったものである。当時の掘削深度は確認されなかったが、恐らく50、60cm以下と推定される。

また、東寄りの溝にAs-A軽石が多く、西寄りの溝1～3ではAs-A軽石が出土しなかったことから、埋め込み作業は一斉に行ったのではなく、東側から行ったものと想定される。溝の掘削も、掘削の深さが尺貫法に当てはまらず、正確な設計に基づくのではなく、現地で設定を調整する、いわゆる「現場打」で行われたものと思慮される。また、東から作業を行っていることから推して、作業は少人数で行われたものと推察される。

#### 5.2号復旧溝群(第11図、PL.3)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返し



第11図 1区2号復旧溝群

を目的として掘削された溝群である。南西隅張出部の限定した調査区で確認したものであり、更に西寄り to 上述の水道管が埋設されていたため、より狭い範囲で調査されたに過ぎなかった。

**位置** 本溝群は1区南西隅の張出部に在り、175～177-506～508グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかったが、北側に4～7号溝が並走する。

**規模** 東西：残長2.3m 南北：残長1.6m

個々の溝の規模等については表9に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** 覆土は下位にAs-A軽石が埋め込まれ、その上位には褐灰色細砂質土等の土壌が埋め込まれている。

**構造** 本復旧溝群では、その一部、5条の溝を確認した。復旧溝の軸線方向はN15°Eを向く

溝は52～54cm、平均52.50cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できなかったが、上幅は42～45cm、平均43.67cm、確認面からの深さは2～9cm、平均5.80cmを測る。また溝と溝とは7～15cm、平均10.50cm隔てて、近接して掘削されていた。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立っている。

**遺物** 出土遺物は見られなかった。

**所見** 上述のように、本復旧溝群はその一部を調査できたに過ぎなかったため、全容は詳らかでない。

本復旧溝群はAs-A軽石を埋め込み、天地返しをはかったものである。

その掘削は、溝と溝との掘削間隔が2尺に足りず、正確な尺貫法に基づいたものとは言い難い。

### 6. 3号復旧溝群(第12図、PL. 3・76)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。本溝群は、北部が調査区外に出ていて、全容は把握できなかった。

**位置** 本溝群は1区北東部、北側調査区間に在り、237～250-429～445グリッドに位置する。

**重複** 復旧水田の水田面7面を切る。なお、本復旧溝群は、復旧水田の水田面7面(以東)の上に造成した盛り土を掘り込んで掘削されている。また、重複関係にはないが、西側に復旧水田(水田面5・6)が隣接する。

**規模** 東西：16.5m 南北：残長11.4m

個々の溝の規模等については表9に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

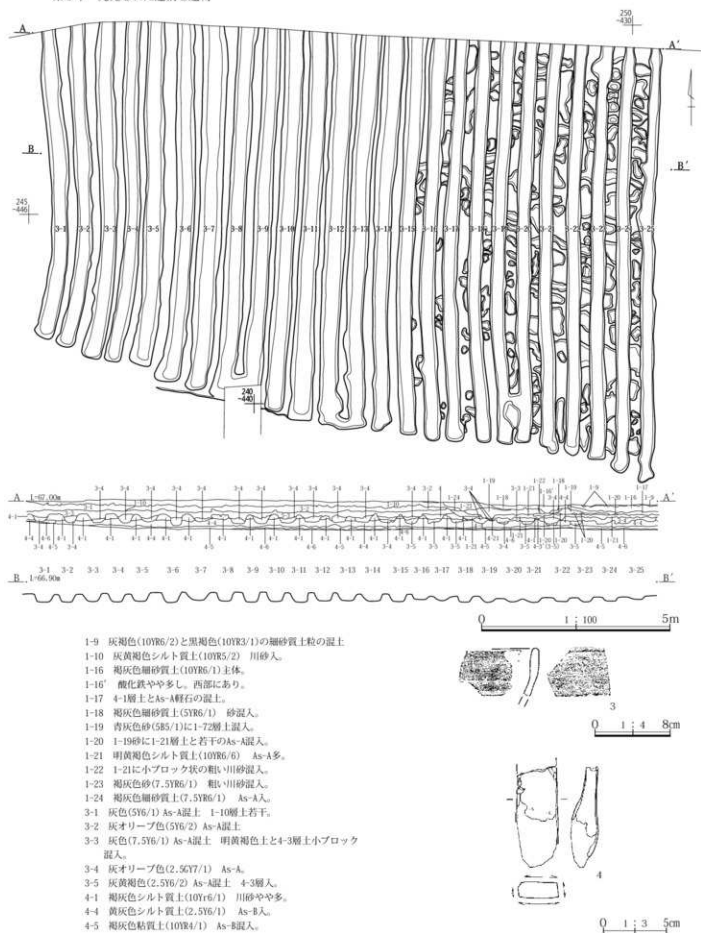
**覆土** 覆土の概要を述べると、下位層にAs-A軽石と灰褐色シルト質土の混土、あるいは溝によってAs-Aが埋め込まれ、上位に灰褐色シルト質土、中位に上・下位層の軽石・シルトが混在する。全体としては、下位にAs-A軽石、上位に灰褐色シルト質土を入れようと意図していたことが分かる。

**構造** 本復旧溝群は25条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN5°Eを向く。

溝は55～83cm、平均65.67cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できなかったが、溝の上幅は34～62cm、平均45.04cm、確認面からの深さは9～26cm、平均17.16cmを測る。また溝と溝とは7～23cm、平均17.02cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

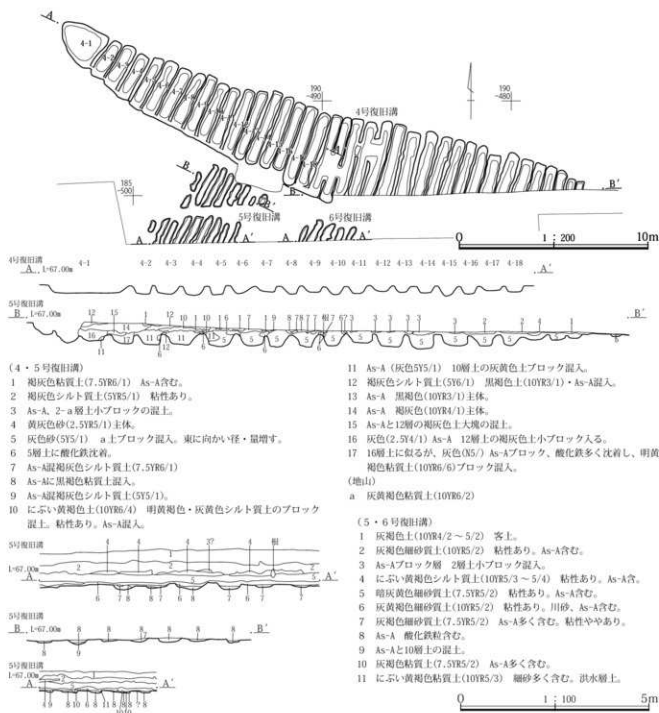
**遺物** 在地系の焙烙(3)など少量の中近世土器・陶磁器、砥石(4)、火打石(5～7)が出土した。



- 1-9 灰褐色(10YR6/2)と黒褐色(10YR3/1)の細砂質土粒の混土
- 1-10 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 川砂入。
- 1-16 褐灰色細砂質土(10YR6/1)主体。
- 1-16' 酸化鉄やや多し。西部にあり。
- 1-17 4-1層土とAs-A軽石の混土。
- 1-18 褐灰色細砂質土(5YR6/1) 砂混入。
- 1-19 青灰色砂(5B5/1)に1-72層土混入。
- 1-20 1-19砂に1-21層土と若干のAs-A混入。
- 1-21 明黄褐色シルト質土(10YR6/6) As-A多。
- 1-22 1-21に小ブロック状の粗い川砂混入。
- 1-23 褐灰色砂(7.5YR6/1) 粗い川砂混入。
- 1-24 褐灰色細砂質土(7.5YR6/1) As-A混入。
- 3-1 灰色(5Y6/1) As-A混土 1-10層土若干。
- 3-2 灰オリブ色(5Y6/2) As-A混土
- 3-3 灰色(7.5Y6/1) As-A混土 明黄褐色土と4-3層土小ブロック混入。
- 3-4 灰オリブ色(2.5Y7/1) As-A。
- 3-5 灰黄褐色(2.5Y6/2) As-A混土 4-3層入。
- 4-1 褐灰色シルト質土(10Y6/1) 川砂やや多。
- 4-4 黄灰色シルト質土(2.5Y6/1) As-B入。
- 4-5 褐灰色粘質土(10YR4/1) As-B混入。

第12図 1区3号復旧溝群と出土遺物





第13図 1区4・5・6号復旧溝

**所見** 上述のように、本復旧溝群は、復旧水田の水田面7面(以東)の上に盛土造成した区域を掘り込んで掘削されている。本復旧溝群を掘削した、盛り土の一面は1枚の畑地であったと認識される。

本復旧溝群はAs-A軽石を埋め込み、天地返しを測ったものである。当時の掘削深度は20～25cm以上あり、土位の埋土と共に、天地返しされた土壌は耕されている。

また、溝と溝との掘削間隔は2尺に近いが、正確な尺貫法に基づくものとは言い難い。

#### 7.4号復旧溝群(第13図、PL.3)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。本溝群は、南東部が調査区外に出ていて、全容は把握することはできなかった。

**位置** 本溝群は1区北東部、南東部に在り、184-194～476～503グリッドに位置する。

**重複** 重複する遺構はないが、南に5・6号復旧溝群が近接する。

**規模** 東西:残長29.9m 南北:4.6m

個々の溝の規模等については表9に記しているが、溝番号は西側から順に付す。

**覆土** 覆土の概要を述べると、西端の溝1～溝15にかけては灰色砂で充填され、溝15～19には主としてAs-Aが充填される。その上は、溝15から西の区域では、褐灰色シルト質土等が乗っている。

**構造** 本復旧溝群は、西端(溝1)は、隅丸三角形の浅い掘り込であるが、その東側には38条の溝が連なる。全体としては三日月上のプランを示す。復旧溝の軸線方向はN27°Eを向く。

溝は西端の溝1を除く、溝2～39の区域を見ると、46～106cm、平均61.03cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できなかったが、溝の上幅は28～95cm、平均61.03cmを測り、確認面からの深さは6～37cm、平均24.26cmを測る。また、溝と溝とは4～72cm、平均14.13cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 上述のように、本復旧溝群の南側は、30cm程の段差があって、南側に近接する5・6号復旧溝群より1段低い区画に掘削されている。本復旧溝群の北縁は比較的直線的なライン上にあるが、南縁は上述の段差の制約を受けて、極緩やかに蛇行しているが、南縁は、北縁と接合する本復旧溝群の西端付近で、北側に湾曲している。このため本復旧溝群は若干変則的な形状を呈するものの、短冊形を基本とした区画内に掘削されており、1枚の畑の区画を利用して掘削されたものと思慮される。

また、溝と溝との掘削間隔の平均は2尺に近いが、正確な尺貫法に基づくものとは言い難い。

なお、本復旧溝群はAs-A軽石を埋め込み、天地返しを図ったものであるが、西寄りに灰色砂が埋められていることから推して、本復旧溝群の掘削時期は、洪水の発生した天明6(1786)年以降である可能性も考慮される。

### 8.5・6号復旧溝群(第13図、PL.4)

**概要** 5・6号復旧溝群は、耕作のため、降下As-A軽石の除去を目的として掘削された溝群である。5号復旧溝群は、南側が調査区外に在り、上記の水道の敷設によって東西方向へ中位が失われている。一方、6号復旧溝群

は過半が南側調査区外に出ていて、北端部が確認されたに過ぎない。

**位置** 5・6号復旧溝群は1区南東部に位置し、5号復旧溝群は183～186-492～499グリッド、6号復旧溝群は182・183-488～491グリッドにある。

**重複** 共に他遺構との重複は見られなかったが、北側に4号復旧溝群が近接する。また5・6号溝は2.4m隔たつて東西にある。

**規模** 5号復旧溝群 東西:5.0m 南北:残長44.6m  
6号復旧溝群 東西:4.4m 南北:残長1.2m

個々の溝の規模等については表9に記しているが、5・6号復旧溝群共に、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** 両復旧溝群共に、As-A軽石あるいはAs-A軽石を多く含む灰褐色粘質土等が埋め込まれている。その上には耕作土となる灰黄褐色砂質土の砂質土が乗っている。

**構造** 5号復旧溝群は10条の溝から成り、復旧溝の軸線方向はN28°Eを向く。

溝は46～57cm、平均52.56cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できなかった。溝の上幅は19～40cm、平均31.80cm、確認面からの深さは2～9cm、平均5.80cmを測るが、耕作土下からの深さは10cm程である。また溝と溝は13～31cm、平均20.67cmを隔てて、近接して掘削されていた。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。6号復旧溝群は8条の溝から成り、復旧溝の軸線方向はN31°Eを向く。

溝は44～58cm、平均51.86cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できなかった。溝の上幅は20～48cm、平均32.25cm、確認面からの深さは3～10cm、平均5.88cmを測るが、耕作土下からの深さは10cm程である。また溝と溝は14～20cm、平均17.14cmを隔てて、近接して掘削されていた。

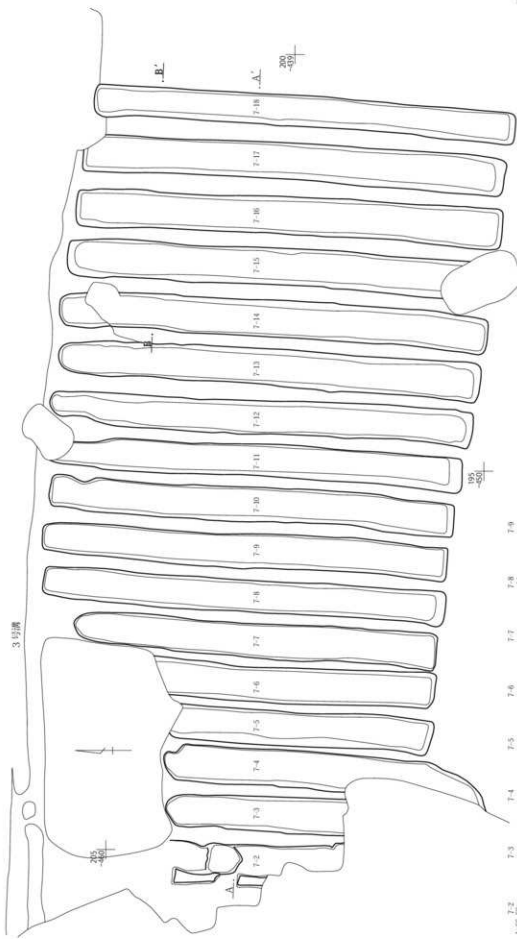
溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 共に出土遺物は見られなかった。

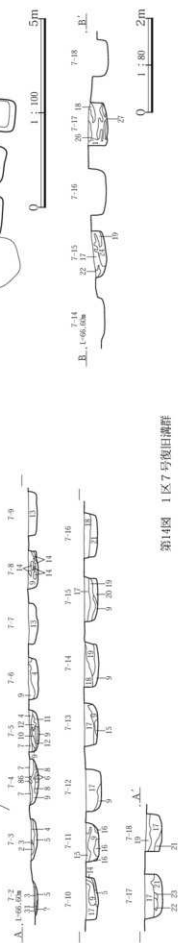
**所見** 上述のように、5・6号復旧溝群はAs-A軽石を埋め込み、天地返しを測ったものである。

なお、5号復旧溝群と6号復旧溝群の北縁のラインは、直線上にあるため、同一の復旧溝群である可能性が考慮される。

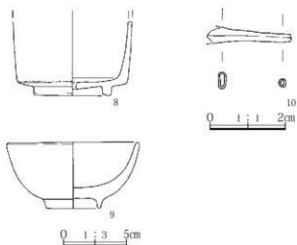
3号溝



第1節 1区の遺構と遺物



第14図 1区7号復旧溝群



第15図 1区7号復旧溝群と出土遺物

- 1 褐色色(10Y4/1)・灰黄色(10YR6/2)細砂 As-A、明赤褐色細砂質シルト(5YR5/8)小ブロック混入。
- 2 褐色色砂質土(10YR4/1) 明黄褐色シルト質土(10YR6/6)、小礫混入。
- 3 褐色色細砂質土(10YR4/1) 黄灰色(2.5Y5/1)、明赤褐色細砂質シルト小ブロック混入。
- 4 褐色色細砂(7.5YR6/1) 褐色土(10YR6/1)、赤褐色細砂質シルト、細砂質小ブロック混入。
- 5 褐色色砂(10Y5/1) にぶい黄褐色細砂質シルト(10YR6/3)ブロック、赤褐色細砂質シルト、細砂質小ブロック混入。
- 6 褐色土(5Y5/1、やや粉質)とAs-Aの混上。
- 7 褐色土(5Y5/1、やや粉質)、灰黄色(2.5Y6/2、やや砂質)のブロック混上。As-A混入。
- 8 6層上と赤褐色細砂質シルトのブロック混上。
- 9 褐色色シルト質土(7.5YR5/1) 粘性ややあり。As-A小ブロック状に若干混入。
- 10 8層上とAs-A(軽径大)の混上。
- 11 9層上に似るが、As-A全体に多く色調明るい。
- 12 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 赤褐色細砂質土小ブロックとAs-Aやや多く混入。
- 13 9層上に赤褐色細砂質シルト、にぶい黄褐色細砂質シルト(10YR6/3、粘性ややあり)のブロック混上。
- 14 As-Aと13層上と同じにぶい黄褐色細砂質シルトのブロック混上。
- 15 灰色砂礫(5Y6/1、川砂)
- 16 褐色色細砂質土(10YR5/1)とAs-Aのブロック混上 若干の赤褐色細砂質シルト混入。
- 17 As-A褐色土(7.5YR5/1～6/1)と若干の灰黄色粘質土(2.5Y6/2～7/2)のブロック混入。
- 18 褐色色細砂質シルト(7.5YR6/1) As-Aブロック状に混入。
- 19 9・18層上、灰色川砂(5Y6/1)の大ブロックの混上。As-A混入。
- 20 19層上に灰色川砂(5Y6/1)多く入る。
- 21 9層上に18層上ブロック状に混入。
- 22 黄灰色砂(2.5Y6/1) やや粗粒。
- 23 褐色色細砂(10YR5/1)
- 24 灰色細砂(5Y5/1)と27層上ブロック混上 灰色川砂(7.5Y6/1)混入。
- 25 褐色土(7.5YR5/1、地山) 細砂ブロック状に含む。
- 26 褐色土(7.5YR5/1) As-A含み、褐色色シルト質土上ブロック(7.5YR6/2)混入。
- 27 褐色色細砂(10YR5/1)

### 9. 7号復旧溝群(第14図、PL. 4・76)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。本溝群は、西側を中心に上述の擾乱により失われているため、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本溝群は1区南西部に在り、194～206-439～461グリッドに位置する。

**重複** 重複する遺構はないが、本復旧溝群の北縁に沿って3号溝が近接してある。

**規模** 東西：残長21.0m 南北：11.1m

個々の溝の規模等については表#に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** 底面付近に褐色色シルト、褐色色砂等が入り、その上に溝10・12・13・15・17・18では、As-A軽石が乗る。

**構造** 本復旧溝群は、18条の溝から成る。全体として長方形のプランを呈する。復旧溝の軸線方向はN5°Eを向く。

溝は106～146cm、平均124.66cmの間隔で掘削されている。溝の長さは9.6～11.3m、平均10.89m、溝の上幅は80～97cm、平均87.65cm、確認面からの深さは10～36cm、平均23.56cmを測る。また溝と溝との間は12～50cm、平均33.18cmを測る。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 瀬戸・美濃陶器汁次かと思われるもの(9)、肥前磁器碗(10)などの国産陶磁器、キセル吸い口(11)が出土した。

**所見** 本復旧溝群は、3号溝の南の1枚の畑地に掘削されたものと思慮される。

本復旧溝群の溝は1区1面の他の復旧溝群に比して、溝の規格が大きく、正確な尺貫法に基づくものとは言い難いが、溝と溝との掘削間隔の平均は4尺に近い。

なお、本復旧溝群はAs-A軽石を埋め込み、天地返しを図ったものであるが、褐色色砂・細砂も含まれていることから推して、本復旧溝群の掘削時期は、洪水の発生した天明6(1786)年以降である可能性も考慮される。

### 10. 1・2号溝(第16図、PL. 2)

**概要** 1号溝が北側に、2号溝が南側に在って並走する、比較的幅の狭い溝遺構である。1・2号溝は、上述の1号復旧溝群の北縁に沿って在り、その西端部は、1号復

旧溝群の西縁の延長線上に在り、同復旧溝群との関連性が指摘できる。

1・2号溝の東部と東端部は擾乱によって失われているため、全容を把握することはできなかった。

**位置** 1・2号溝は1区中部西寄りに在り、1号溝は220-470～490グリッド、2号溝は220-470～490グリッドに位置する。

**重複** 両溝とも単独で在り、他遺構との重複は認められなかったが、両溝は10cm以下の間隔で並走して在り、2号溝は1号復旧溝群と20cm以下の間隔で位置する。

**規模** 1号溝 残長：29.6m 幅：50cm 深さ：9cm

2号溝 残長：29.9m 幅：56cm 深さ：15cm

**覆土** 1号溝は中・下位に褐灰色砂、上位ににふい黄色粘質土、2号溝は下位に褐灰色砂、中・上位には灰黄砂が入っている。

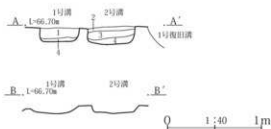
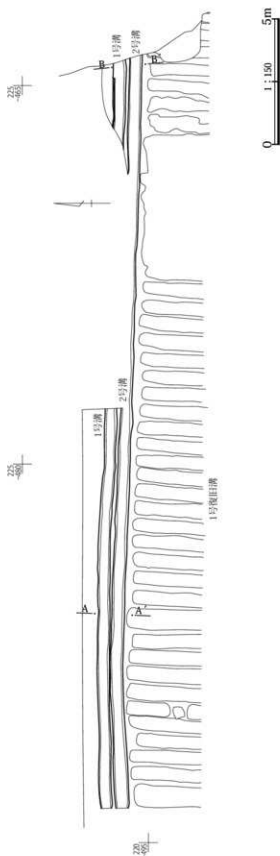
**構造** 1・2号溝は極緩やかなくの字状の走行を呈し、西側はN89°E、東側はN87°Wを向く。

1・2号溝は両溝共に掘削形態は箱堀状を呈し、壁面が立つ。また両溝共に底面は平坦である。

**遺物** 1・2号溝からの出土遺物は得られなかったが2号溝からは国産緑釉陶器1点が出土した。

**所見** 1・2号溝は共に流水の痕跡は確認されなかった。

また、共に砂が充填されているが、この砂は、流水によるものではなく、天明6(1786)年の洪水被災に伴うものの可能性が考えられ、両溝が極めて近接して掘削され、近似した埋土であることから推して、復旧溝と同様の機能を有していた可能性が考えられる。



- 1 灰色砂(5Y5/1) 酸化鉄小ブロック状に沈着。明黄褐色(2.5Y6/6)細砂小ブロック混入。
- 2 にふい黄色粘質土(2.5Y6/3)と川砂の小ブロック混入。As-A混入。
- 3 褐灰色砂(10YR5/1) 地山の暗灰黄色細砂土小ブロック混入。As-A若干混入。
- 4 褐灰色砂(10YR5/1)と褐灰色砂(10YR4/1)のブロック混入。

第16図 1区1・2号溝

### 11. 3号溝(第17・18図, PL. 4・76)

**概要** 3号溝は比較的規模の大きな溝である。西部が調査区外にあるため、全容は詳らかにできなかったが、1区を横断し、位置的に2区13号溝に接続するものと判断される。

遺構としては確認できなかったが、本溝は埋没後に規模を縮小して掘り直されている。

また、1区東寄り、上述の7号復旧溝群の北縁に沿うようにある。

**位置** 溝は区中程やや南寄りに在り、200-420～500グリッドに位置する。

**重複** 本溝は他の遺構との重複は無い。しかし、上述のように東部で7号復旧溝に近接し、西部で10号溝の南側に並走する。

**規模** 確認長:86.5m(3号溝・2区13号溝全長:143.8m)幅:110cm(掘り直し後:70cm)深さ:40cm(掘り直し後:24cm)

**覆土** 川砂が混入する褐色土、灰黄褐色粘質土等で埋没する。掘り直された後の覆土は、灰色細砂質土等、川砂を混入する土壌で埋没している。

**構造** 本溝の西部は弧状のプランを呈し、中・東部は直線的なプランを呈するが、東部で僅かに屈曲する。西端はN65°E、中・東はN87°W、東端付近でN83°Wを向く。

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底状を呈する。底面は西高東低であるが、勾配は0.36%と平坦に近い。

**遺物** 瀬戸・美濃産の腰踏碗(12)・鉄絵鉢(13)等・碗(14)、在地系の焙烙(15)、不明鉄製品(16～18)、寛永通宝(19)、敲石(20)、板碑片、火打石(22～24)が出土した。

**所見** 本溝の覆土には若干の川砂が混入し、掘り直された溝には川砂が混入することから、本溝は水路として使用されたものと想定される。

本溝からは近代の遺物も出土するが、本溝の開削時期を特定するには至らなかった。

### 12. 8号溝(第17図, PL. 5)

**概要** 本溝は比較的幅の狭い溝である。西側が調査区外にあるため、全容は詳らかにできなかった。また、覆土北寄りに現代の掘り直しが確認された。

**位置** 本溝は1区中西部、西側調査区際内に在り、200-

500～507グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独で在り、他の遺構との重複は無い。

**規模** 確認長:7.5m 幅:60cm 深さ:28cm

**覆土** 褐色土等で埋没する。

**構造** 本溝は直線的な走行を為す。その走向は、N87°Wを向く。

掘削形態は箱堀状を呈し、壁面は比較的鋭角に立つ。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝は調査範囲も狭く、掘削意図は確認できなかった。

また、覆土の観察から、本溝は現代に掘り直されていることが確認される。その掘削が何時まで遡るかは特定できないが、近世、近代の所産と推定される。

### 13. 4・5・6・7号溝(第19図, PL. 5)

**概要** 4・5・6・7号溝はしっかりした掘り込の溝遺構である。

4・6・7号溝は南から順に並び、(5・)6・7号溝は並走する。また、5号溝は、6・7号溝の間に在って、6号溝の北側にその一部の痕跡を残すが、ほぼ土層断面で確認できるに過ぎない。4～7号溝は狭い調査区内に、その一部が現れただけで、全容を把握することはできなかった。また南側にある4号溝の南には、上述の2号復旧溝群が近接して在り、2号復旧溝群の北縁に沿ってある。

**位置** 4・5・6・7号溝は1区南西隅張出部にある。4号溝は170-500グリッド、5号溝は170-180-500グリッド、6号溝は170-180-500、7号溝は170-180-500グリッドに位置する。

**重複** 5・6・7号溝は重複して在り、5号溝は6・7号溝に対して新しいが、6・7号溝の新旧関係は明確ではないが、As-A混入の有無により、6号溝は7号溝より新しいものと想定される。

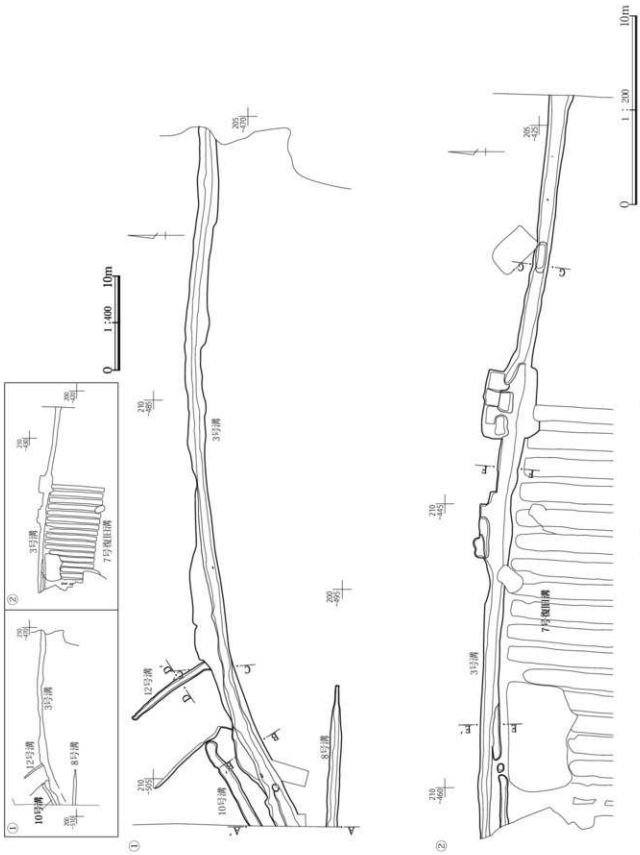
また4号溝は他遺構との重複は認められなかったが、2号復旧溝群と約60cm、6号溝と90～125cm隔たっている。

**規模** 4号溝 残長:2.6m幅:86cm深さ:16cm

5号溝 長さ:1m幅:94cm深さ:48cm

6号溝 残長:2.4幅:78cm深さ:48cm

7号溝 残長:2.4m幅:60cm深さ:40cm



第17図 1区3・8・10・12号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物



第17図の2 1区3・8・10・12号溝土層断面





**覆土** 4・5号溝はAs-Aを含む褐色土等、6号溝はAs-Aを含む褐色土等で埋没し、7号溝にはふい褐色土で埋没するが、As-Aは含まれない。

**構造** 4・6・7号溝は直線的なプランを呈し、4号溝はN66°W、6・7号溝はN59°Wを向く。

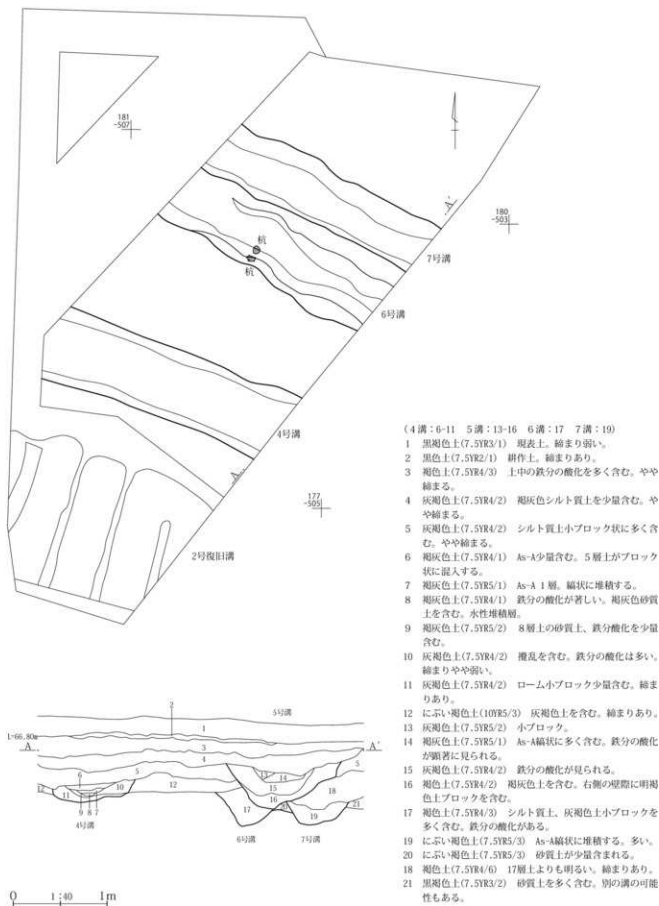
4～7号溝の掘削形態は箱城状を呈するが、6号溝は薬研堀に近い形状をなす。4～7号溝の壁面は開き気味である。また4・6・7号溝の底面はは平坦であるが、5号溝の底面の横断面形は丸底状を呈する。

**遺物** 出土遺物は共に見られなかった。

**所見** 上述のように、4号溝は2号復田溝群の北縁に沿うように在り、一体のものと思慮される。また、5～7号溝は7号溝、6号溝、5号溝の順に掘り直されたものである。

いずれの溝も掘削意図を把握することはできなかった。

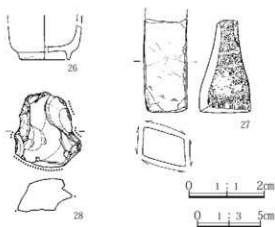
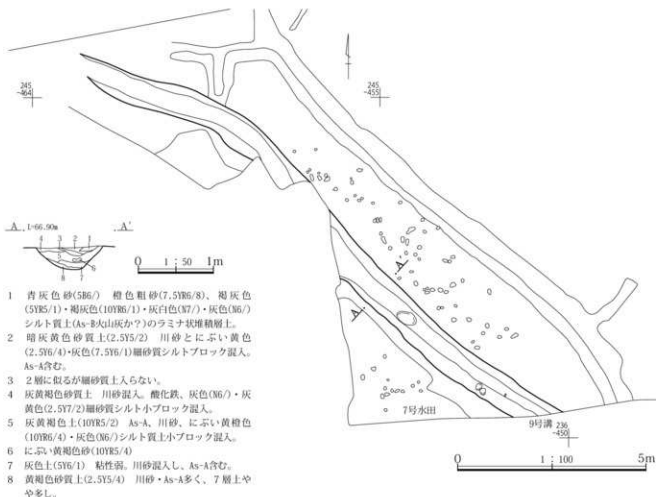
なお、本溝群の新旧関係は7号溝→6号溝→4号溝→5号溝の順に新しいものと判断される。なお、その時期はAs-Aの混入の有無から、7号溝は天明3年以前、4～6号溝は天明3年以降の所産と判断される。後者のうち4・5号溝は天明3年より時代が下るものと判断される。



(4溝:6-11 5溝:13-16 6溝:17 7溝:19)

- 1 黒褐色土(7.5YR3/1) 現表土。締まり弱い。
- 2 黒色土(7.5YR2/1) 耕作土。締まりあり。
- 3 褐色土(7.5YR4/3) 上中の鉄分の酸化を多く含む。やや締まる。
- 4 灰褐色土(7.5YR4/2) 褐色シルト質土を少量含む。やや締まる。
- 5 灰褐色土(7.5YR4/2) シルト質土小ブロック状に多く含む。やや締まる。
- 6 褐色土(7.5YR4/1) As-A少量含む。5層土がブロック状に混入する。
- 7 褐色土(7.5YR5/1) As-A 1層。編状に堆積する。
- 8 褐色土(7.5YR4/1) 鉄分の酸化が著しい。褐色砂質土を含む。水性堆積層。
- 9 褐色土(7.5YR5/2) 8層土の砂質土、鉄分酸化を少量含む。
- 10 灰褐色土(7.5YR4/2) 塵炭を含む。鉄分の酸化は多い。締まりやや弱い。
- 11 灰褐色土(7.5YR4/2) ローム小ブロック少量含む。締まりあり。
- 12 にぶい褐色土(10YR5/3) 灰褐色土を含む。締まりあり。
- 13 灰褐色土(7.5YR5/2) 小ブロック。
- 14 褐色土(7.5YR5/1) As-A編状に多く含む。鉄分の酸化が顕著に見られる。
- 15 灰褐色土(7.5YR4/2) 鉄分の酸化が見られる。
- 16 褐色土(7.5YR4/2) 褐色土を含む。右側の埋跡に明褐色土ブロックを含む。
- 17 褐色土(7.5YR4/3) シルト質土。灰褐色土小ブロックを多く含む。鉄分の酸化がある。
- 19 にぶい褐色土(7.5YR5/3) As-A編状に堆積する。多い。
- 20 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 砂質土が少量含まれる。
- 18 褐色土(7.5YR4/6) 17層土よりも明るい。締まりあり。
- 21 黒褐色土(7.5YR3/2) 砂質土を多く含む。別の溝の可能性もある。

第19図 1区4・5・6・7号溝



第20図 1区9号溝と出土遺物

## 14. 9号溝(第20図、PL. 5・76)

**概要** 本溝はしっかりした掘り込の溝遺構である。本溝は、北側が調査区外に在り、南側は現代の攪乱に壊されているため、全容は明らかにできなかった。

**位置** 本溝は1区北東部に在り、236～246-450～462グリッドに位置する。

**重複** 本溝はAs-A復旧水田と重複し、これを切っている。

**規模** 確認長：15.9m 幅：90cm 深さ：30cm

**覆土** 灰黄褐色砂質土等で埋没する。埋没土は砂質土が多く、またAs-A軽石や川砂が混入する。

**構造** 本溝は緩やかに蛇行するプランを呈する。その走行は、北端でN70°Wを向き、南端部ではN59°Wを向く。

**掘削形態**は箱堀状を呈し、底面は平坦に近く、壁面は比較的鋭角に立つ。

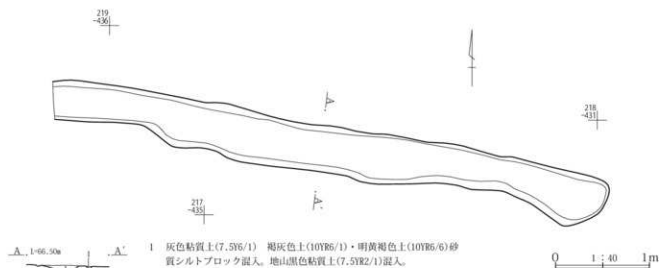
**遺物** 磁器の湯飲みと思われるもの(25)、砥石(26)、火打石(27)や近代陶磁器片が出土した。

**所見** 本溝は覆土の観察から、水路として掘削されたものと思慮される。

なお、本溝の南部の西壁は、As-A復旧水田の水田面3・4間の畦畔に接して掘削されていることから、As-A復旧水田の遺構を踏まえて掘削されたものと思慮される。

## 15. 10号溝(第17図・17図の2、PL. 5)

**概要** 本溝は比較的幅の狭い溝である。西側が調査区外にあるため、全容は詳らかにできなかった。



第21図 1区11号溝

また、本溝の東側には比高差10数cmを測る段差が見られた。

**位置** 本溝は1区中西部、西側調査区際に在り、200-500～507グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独で在り、他遺構との重複はなかった。

**規模** 確認長：5.2m 幅：60cm 深さ：21cm

**覆土** As-Bの入る黄灰色シルト質土で埋没する。本溝の下面には黒色As-B混土(7.5Y2/1)が遺存する。

**構造** 直線的な走行を呈し、走向は、N57°Eを向く。

掘削形態は箱堀状を呈するが、壁面は傾斜は鈍角である。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は確認できなかった。

また、本溝は確認層位から推して、中・近世の所産として把握されるものの、時期は特定できなかった。

**構造** 本溝の走行は、時計回りの極緩やかな弧状を呈するものである。その走向は、西端でN82°W、東端でN75°Wを向く。

遺存箇所が底面近くに限られるため、はっきりしないが、本溝の掘削形態はおおよそ箱堀状を呈すると見られる。

また、底面の横断面形は丸底状を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝は確認範囲も狭く、遺存状態も良好ではなかったため、掘削意図を想定することはできなかった。

また、本溝は確認層位から推して、おおよそ近世の所産として把握されるものの、その時期を特定することはできなかった。

なお、位置及び溝の規模から推して、2区12号溝に接続する可能性を有する。

#### 16. 11号溝(第21図、Pl. 5)

**概要** 本溝は調査区内で起結する、比較的幅の狭い溝遺構である。

**位置** 本溝は1区中東部に在り、216～218-430～436グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独で在り、他の遺構との重複は見られなかった。

なお、南側に3号土坑が近接している。

**規模** 長さ：6.0m 幅：50cm 深さ：6cm

**覆土** 灰色砂質土で埋没する。

#### 17. 12号溝(第17図・17図の2、Pl. 5)

**概要** 本溝は比較的幅の狭い溝である。

南側が3号溝と重複するため、全容を詳らかにすることはできなかった。

**位置** 本溝は1区中西部に在り、206～211-498～501グリッドに位置する。

**重複** 本溝は3号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

なお、本溝の西側3.2m程隔てた位置に、比高差10数cmの西側から東側に向がる段差があり、本溝と並行に並

走する。

**規模** 確認長：4.9m 幅：40cm 深さ：8cm

**覆土** 土層の観察所見を残せなかった。

**構造** 本溝は直線的な走行を呈し、その走向は、N38°Wを向く。

掘削形態は箱堀状を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

また、上述のように、西側に段差があって、本溝に並走している。従ってこの段差以東は、削平されていると判断されるが、本溝はその区画形成に伴って掘削されたものと思慮される。

なお、本溝の時期は、確認面からおおよそ近世の所産と認識されるものの、特定することはできなかった。

#### 18. 3号土坑(第22図、Pl. 5)

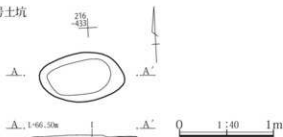
**概要** 本土坑は、上述の11号溝の南1.6mにある比較的大きな土坑である。

遺存状態が悪く、底面付近を確認、調査できたに過ぎなかった。

**位置** 本土坑は1区中東部に在り、215-432～433グリッドに位置する。

**重複** 本土坑は単独で在り、他遺構との重複は見られなかった。

3号土坑



3号土坑(A-A')

1 層灰色砂質土(10YR5/1)とにぶい黄褐色土(10YR4/3粘性あり)のブロック混入。As-A混入。

第22図 1区3号土坑

**規模** 径：90×52m 深さ：3cm

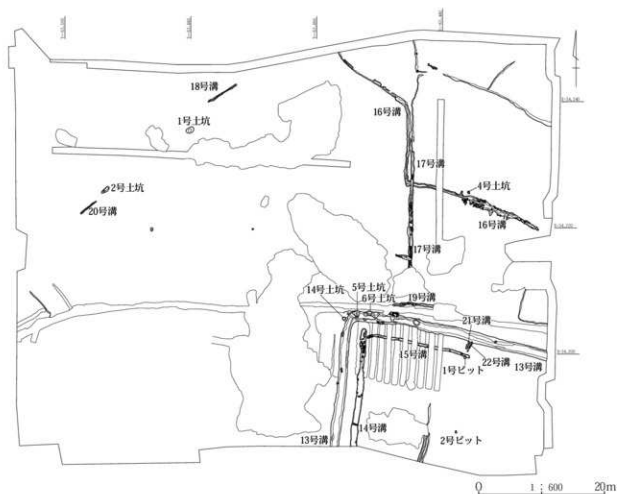
**覆土** 灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色土のブロックの混入で埋没する。

**構造** 本土坑は楕円形のプランを呈する。遺存状態が悪いので、全容を明らかにすることはできないが、掘削形態は箱状を呈するものと推定され、底面は平底である。主軸の方向はN82°Eを向く。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本土坑の掘削意図は特定できなかった。

また、確認面から推して、おおよそ近世の所産と想定されるが、時期の特定には至らなかった。



第23図 1区2面全体図

## (2) 1区2面の遺構

### 1. 1区2面の概要

2面土取りの範囲は、1面に比べると減少していたが、やはり、その影響は少なかった。

1区2面は、主にAs-B軽石を多く含む土層の上面を確認面として、中世の遺構を調査した。2面は、3面に現れる微高地と低地部といった区分けはできず、1面と同様比較的平坦であった。

その遺構は、北西部には水田面と見られる水平な面を検出したが、畦畔は確認されなかった。西端部から17号溝の西側まではほぼ平坦であり、その勾配率は0.26%を測るに過ぎなかった。北東部および南東部では遺構が確認されたが、北東部では水田の痕跡とも思われる段差が確認され、本節の末尾にその概要を記す。また南東部では、その遺存状態から、中世以降、近世中期以前と想定される時期に、大きく土地が削平されていたことが確認された。また南西隅張出部では2面の遺構は確認されな

かった。

2面で調査された遺構は、溝11条、土坑6基、ピット2基であり、上述の段差遺構があった。なお、鉤形に走行する13号溝と、その内側に並走する14・15号溝の存在から、南西部には屋敷遺構の在った可能性が想定された。

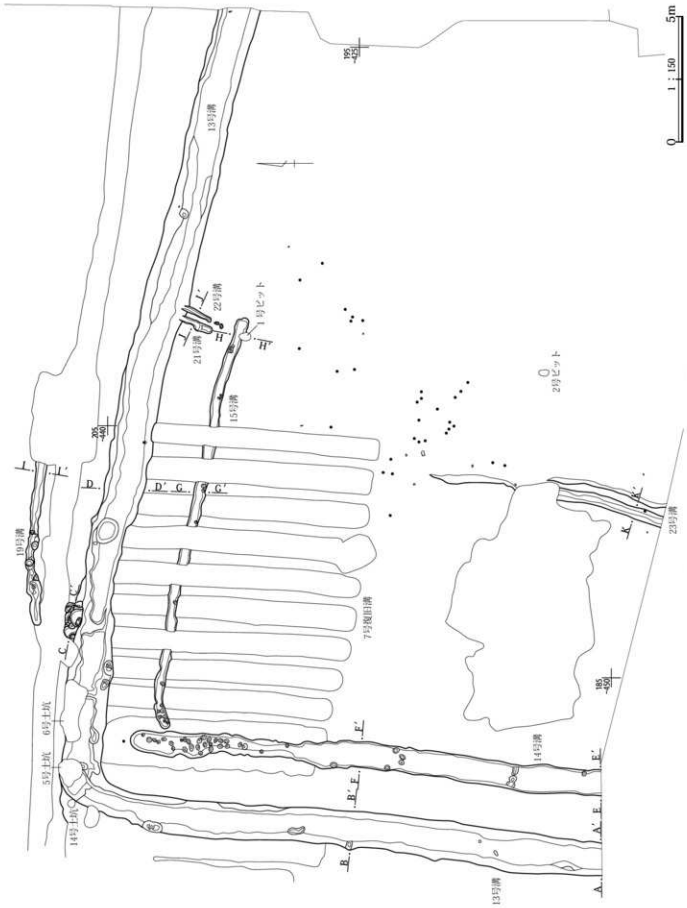
### 2. 13・14・15号溝(第24図・24図の2、PL. 8・9)

**概要** 13・14・15号溝は並走する溝群であるが、屋敷遺構の周堀を想定するものである。

13・14・15号溝は、後世の削平によって上位が失われており、底面近くを調査できたに過ぎなかった。13・14号溝は南側が調査区外に出ており、全容を把握することはできなかった。また15号溝は、1面の7号復旧溝群による攪乱で、断続的に確認されている。

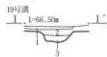
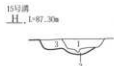
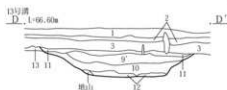
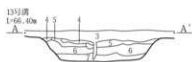
なお13号溝は、位置的に2区16号溝に接続するものと判断される。

**位置** 本溝群は1区南東部に在り、13号溝は185～206・423～457グリッド、14号溝は185～204・452～454グリッ



第24図 1区13～15・19・21～23号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物



13号溝(A-A'・B-B'・C-C'・D-D')

- 1 灰色細砂質土(5Y6/1) 粘性弱。
- 2 明黄褐色細砂質土(10YR6/8) 1層土小塊混入。粘性有。
- 3 黄灰色土(2.5Y6/1) 川砂混入。
- 4 黒褐色砂質土(10YR3/1) As-B混上。②層土小塊混入。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性あり。As-B、①、②層土小塊混入。
- 6 黒褐色粘質土(10YR3/1) As-B多く、2層土小塊若干。
- 7 灰黄色土(10YR5/2) ②層土中塊混入。粘性あり。
- 8 褐灰色細砂質土(10YR5/1)
- 9 褐灰色砂質土(7.5YR4/1) As-B混上。②・③・3層土粒混入。粘性あり。
- 9' 9層土にふい赤褐色(5YR5/3)

14号溝

- 1 黄灰色土(2.5Y6/1) 川砂と酸化鉄粒混入。
- 2 褐灰色砂質土(10YR5/1) As-Bと交層土ブロック多く混入。
- 3 13号溝A-A' 4層基調に②層土ブロック混入。

15号溝(G-G')

- 1 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘性有。As-A含。
- 2 灰色シルト質土(5Y5/1) 粘性あり。酸化鉄多く褐色掛かる。As-A若干混入。
- 3 褐灰色シルト質土(10YR5/1) 酸化鉄多く沈着。
- 4 褐灰色シルト質土(7.5YR5/1) 粘性弱。酸化鉄粒状に沈着。
- 5 5層の灰色砂質土に黒褐色As-B混砂質土、明黄褐色粘質土入るブロック混上。
- 6 10層土に5層の明黄褐色粘質土と若干の黒褐色、As-B混砂質土入るブロック混上。
- 7 灰色As-B混砂質土(5Y5/1)に黒褐色As-B混砂質土(7.5YR3/1)と明黄褐色粘質土(10YR6/8)入るブロック混上。

19号溝

- 1 にふい黄褐色土(10YR5/3) 若干の酸化鉄ブロック状に混入。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) やや砂質。As-B、若干のにふい黄褐色土(10YR6/4-7/4)小ブロック混入。粘性あり。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 酸化鉄粒混入。粘性あり。

21・22・23号溝(J-J'・K-K')

- 1 褐灰色土(10YR4/1) As-B混入。①小ブロック多く入り、②・③ブロック少量混入。
- 2 ①に1層土小ブロック若干混入。
- 3 ①・①・②・③小ブロックの混上。

10 褐灰色砂質土(10YR4/1) 粘性あり。As-B混上。

- ②と若干の③層土塊混入。
- 11 にふい黄褐色土(10YR5/3) 粘性あり。As-B、②・③層土小塊や多く混入。
- 11' 11層に似るが、混入物塊大きい。
- 12 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) As-B、②・③層土小塊混入。
- 13 As-Bに②・③層土小塊多く混入。D-D'南は3層土小塊も入る。
- 14 As-Bと11'層'小塊の混上
- 15 褐灰色土(10YR5/1)とAs-B混黒色砂質土(10YR2/1)の混上。②層土塊多く入る。(地山層)
- ① 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性あり。
- ② 明黄褐色土(10YR6/8)と明黄褐色土(10YR6/6)の粘質土にHr-FA
- ③ 黒色粘質土(7.5YR2/1)

15号溝(H-H')

- 1 褐灰色砂質土(7.5YR4/1) As-B多く含む。にふい黄褐色粘質土(10YR5/3)ブロック多く、若干の灰色砂質土(5Y5/1、As-B混)粒見られる。
- 2 黒色土(10YR2/1) 13・15溝10層土ブロックと多くのAs-B混入。
- 3 13・15溝10層土と黒褐色As-B混砂質土(7.5YR3/1)、明黄褐色粘質土(10YR6/8)入るブロック混上。

① 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)

② 黒色土(7.5YR1.7/1)

③ 明黄褐色ローム(10YR6/8)

0 1:40 1m

第24図の2 1区13～15・19・21～23号溝



ド、15号溝は199～203-435～451グリッドに位置する。  
**重複** 13号溝は21・22号溝及び5・6号土坑と重複するが、5号土坑に対しては本溝の方が新しいが、他の遺構との新旧関係は特定できなかった。また15号溝は1号ピットと重複するが、15号溝の方が古い。

**規模** 13号溝 確認長:53.0m(13号溝・2区16号溝全長:119.8m) 幅:160cm 深さ:34cm

14号溝 確認長:18.8m 幅:100cm 深さ:12cm

15号溝 確認長:16.6m 幅:45cm 深さ:10cm

**覆土** 13号溝は黒褐色砂質土や褐色灰色砂質土など、様々な土壌で覆われ、層によってはAs-Bも含まれている。14号溝は川砂含む黄褐色土やAs-B含む褐色灰色砂質土で埋没している。15号溝は灰色砂質土やAs-B混土等で埋没する。

**構造** 上述のように13・14・15号溝は底面近くが依存するに過ぎなかったため、全容は把握できなかったが、以下若干の所見を記す。

13号溝は鉤形のプランを呈するが、西端から北端西部にかけては比較的直線的な走行を取り、それ以北の北端は極緩やかな弧状を呈して、東に向かい徐々に南側に押し下げられるような走行を取る。その走向は、西端ではN6°E、北端の西端ではN87°Wを向き、西端ではN77°Wを向く。掘削形態は箱型状を呈する。勾配は南西、北西、東部と低いものの、その勾配率は0.38%とほぼ平坦に近い。また13号溝に接続すると見られる2区16号溝を合せても、勾配率は0.38%を測るに過ぎない。

14号溝は比較的直線的な走行を取るが、南端部で反時計回りに僅かに屈曲する消す孔が見られる。その走向はN6°Eを向き、掘削形態は箱型状を呈する。

15号溝は14号溝の北端寄り南1.2m程、14号溝の東縁から12cmほど隔てた位置から、14号溝に垂直方向に掘削される。その走向は東西両端部が南に屈曲し、北側に張り出す緩やかな弧状を呈するもので、その走向は、西端N77°Eは、その直ぐ東でN4°W、中程でN10°W、東端部寄りでN4°W、東端部でN18°Wを向く。掘削形態は箱型状を呈する。

**遺物** 13号溝からは土師器・須恵器・陶器片と共に不明鉄製品(28)が、15号溝からは少量の土師器・須恵器片が出土したが、14号溝からの遺物の出土は見られなかった。

**所見** 上述のように、本溝群は上位が削平され、全容は詳らかにできなかったが、13号溝、14号溝の規格と規模

が比較的大きいこと、そして13号溝の鉤状のプランと、これに並走する14・15号溝から推して、本溝群は屋敷遺構に伴う周堀並びに内堀と想定した。しかし、13号溝の北端は、2区16号溝に接続すると想定され、その走向は北端西端を除いて13号溝の西端に対しての垂直ではなく、かなり南に下がるため、屋敷遺構としてはやや異形であるが、2区16号溝より北に並走する溝群や、1区1面3号溝の有様から推して、これらの溝の掘削区域は用水敷設区域と認識されることから、これに沿って掘削されたものと推定されるものである。

従って本溝群はおおよそ中世の所産と推定されるが13号溝は出土遺物から近世である可能性がある。

### 3. 19号溝(第24図・24図の2、Pl. 9)

**概要** 19号溝は、想定された屋敷遺構(13号溝)の北側にある溝遺構である。東西両端共に、1面3号溝等で壊されて確認できなかったため、全容は詳らかでない。

なお、規模は屋敷内の15号溝と近似するが、走向が若干ずれるため、屋敷遺構に伴うものとしては認識されない。

**位置** 本号溝は、1区北東部に在り、207～208-441～447グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は無かった。

**規模** 残長:6.5m 幅:43cm 深さ:10cm

**覆土** 本溝は褐色で埋没している。

**構造** 本溝の走行は、西半部は極緩やかな蛇行が見られ、東半部は直線的な走行を呈する。その走向は、西端はN2°Eを向き、東半部はN7°Wを向く。

掘削形態は、西部は葉研堀状を呈し、底面も凹凸が見られるが、東部は箱型状を呈し、底面は平底状を呈する。

**遺物** 本溝からは少量の土師器、須恵器が出土しているが、図示すべきものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかったが、1面3号溝や2区の下流域に当たる溝群幅状葉研堀の形態を呈することから、牛馬糞の跡の可能性を考慮したい。

その時期は、確認面等から推して、おおよそ中世の所産として把握するが、時期の特定には至らなかった。

### 4. 21・22号溝(第24図・24図の2、Pl. 9)

**概要** 21・22号溝は、並走してある小型の溝遺構である。

**位置** 21・22号溝は、1区南東部、13号溝北辺部の南に在り、21号溝は200～202-435グリッド、21号溝は200～202-435～436グリッドに位置する。

**重複** 21・22号溝は北側が13号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。また21・22号溝はおおよそ18cm程隔たって並走する。共に単独で在り、他遺構との重複は無かった。

**規模** 21号溝 残長：1.5m 幅：30cm 深さ：8cm

22号溝 残長：1.3m幅：20cm深さ：6cm

**覆土** 21号溝はAs-Bを含む褐灰色砂質土で埋没する。22号溝は灰黄褐色粘質土等で埋没する。

**構造** 21号溝は直線的な走行を呈し、その走向はN27°Eを向く。掘削形態は箱型状を呈する。

22号溝も直線的な走行を呈し、その走向はN24°Eを向く。掘削形態は葉研型状を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 21・22号溝は並走してあるが、確認範囲も狭く、掘削意図を特定することはできなかった。

その時期は、確認面等から推して、おおよそ中世の所産として把握するが、時期の特定には至らなかった。

#### 5. 23号溝(第24図・24図の2、PL. 9)

**概要** 本溝は、想定された屋敷遺構(13号溝)の南寄りにある溝遺構である。中程に現代の掘削が入り、南側も調査区外であるため、全容は詳らかでない。また遺存状態は不良で、北半部は東肩も失われている。

**位置** 本溝は、1区南東部に在り、182～192-442～443グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は無かった。

**規模** 残長：9.4m 幅：46cm 深さ：5cm

**覆土** 本溝の覆土は記録できなかった。

**構造** 本溝の走行は、東に張り出す緩やかな弧状を呈する。その走向は、北端はN0°Eを向き、南端はN14°Eを向く。

掘削形態は、箱型状を呈する。

また、南半部の東側に接して、下幅52～64cm、上幅16～32cm、高さ1程の畦状の高まりが並走する

**遺物** 本溝からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかったが、東側にそって畦状の高まりが見られることから、水田に伴う給

排水路の可能性が考慮される。

その時期は、特定できなかったが、畦状の高まりと一体の構造とするならば、上述の屋敷遺構よりは新しく、後世の開削により削平された面に掘削されていることから、中世以降、恐らくは近隣で水田開削が行われた、近世前、中期の所産として把握されるものである。

#### 6. 16・17号溝(第25図、PL. 9)

**概要** 16・17号溝は一部並走する箇所を伴って交差する溝である。16号溝は北西側は北側調査区外に出ており、17号溝は南側が現代の掘削に壊されていたため、全容を確認することはできなかった。

**位置** 16・17号溝は、1区北東部に在り、16号溝は219～247-424～456グリッド、17号溝は213～232-444～445グリッドに位置する。

**重複** 16・17号溝は重複するが、17号溝の方が新しい。

**規模** 16号溝 確認長：45.5m 幅：70cm 深さ：15cm

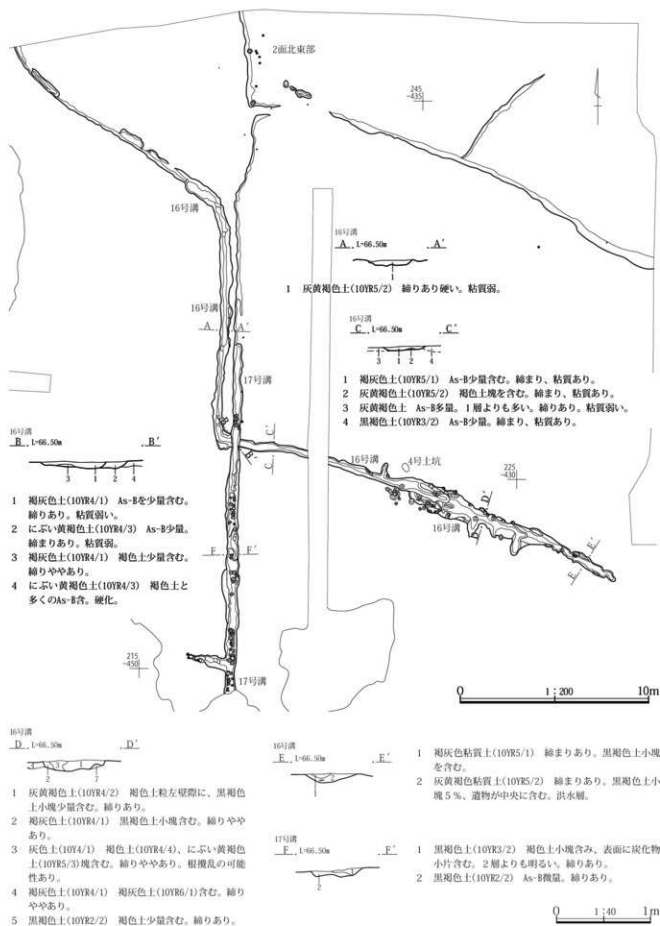
17号溝 確認長：18.5m 幅：60cm 深さ：13cm

**覆土** 16号溝は灰黄褐色土やにぶい黄褐色土、17号溝は褐灰色砂質土、暗褐色土、黒褐色土等で埋没する。両溝共にAs-Bを混入する。

**構造** 16号溝は北西から南東方向へ、二度の屈曲を経る箱型に走行し、この二度の屈曲の間は20～60cmの間隔を保って17号溝と並走する。この17号溝と並走する箇所の走行は直線的であり、その北側、即ち北西側では極緩やかな蛇行を呈するが、北東側の肩が失われて、断続的に溝の形状が遺されている。一方、南側、即ち南東側は極緩やかな弧を描いて走る。その走向は、北端ではN21°W、屈曲部に入る手前ではN47°W、17号溝と並走する箇所ではN4°Eを向き、二度目の屈曲部の東側ではN83°E、南東端ではN64°Eを向く。掘削形態は箱型を呈し、勾配率は0%前後である。また、二度目の屈曲部以東には北北東方向に1箇所、南南西方向に2か所の分岐する張出部が見られる。

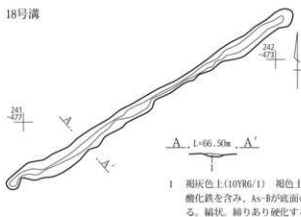
17号溝は比較的直線的な走行を取り、その走向はN2°Eを向き、掘削形態は箱型状を呈する。

なお、本溝の北側は、本溝の西縁の延長線上に、本溝の残骸と見られる段差が、16号溝が分岐するまでの7.7m程の間続いていた(第25図)。掘削形態は箱型状を呈し、本溝も勾配率は0%前後である。また、南端近くで西北

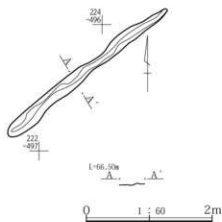


第25図 1区16・17号溝

18号溝



20号溝



第26図 1区18・20号溝

西側に、2.1m程の長さを測る溝が分岐する。

**遺物** 16号溝からは僅かな中世陶器片と在地系の鋼が、17号溝からは僅かな土師器片が出土した。

**所見** 17号溝は上述のように北側に段差としてつづいており、16号溝との分岐点からは北東に進んで、後述する段差遺構へと繋がる。また南半部の底面には鋤跡と見られる小孔が穿たれている。これらの点から、本溝の掘削意図の一つに、土地区画があったものと思慮される。

16号溝の掘削意図は特定できなかったが、17号溝と一部並走する箇所があることから推して、17号溝と同様の掘削意図があったものと思慮される。

16・17号溝の時期は、確認面からおおよそ中世の所産とできるだけ、特定することはできなかった。

#### 7. 18・20号溝(第26図、PL. 9)

**概要** 18・20号溝は、1区北西部に位置する小型の溝遺構である。同規模で同示の走向を呈することから一連の溝遺構として取り上げる。

**位置** 18・20号溝は、1区北東部に在り、18号溝は240～242-472～477グリッド、20号溝は222～224-494～497グリッドに位置する。

**重複** 18・20号溝は共に単独で在り、他遺構との重複は無かった。

**規模** (18号溝) 長さ：5.3m 幅：25cm 深さ：6cm  
(20号溝) 長さ：3.2m 幅：22cm 深さ：3cm

**覆土** 18号溝は底面近くにAs-Bを含む褐灰色土で埋没する。20号溝の覆土は記録できなかった。

**構造** 18号溝は直線的な走行を呈し、その走向はN51°Eを向く。掘削形態は部分的に平底を見せるが、全体と

しては葉研堀状を呈する。

20号溝は直線的な走行を呈し、その走向はN51°Eを向く。掘削形態は葉研堀状を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 18・20号溝の掘削意図は特定できなかったが、幅狭で葉研堀状の形態を呈することから、牛馬耕の鋤跡の可能性を考慮したい。

その時期は、確認面等から推して、おおよそ中世の所産として把握するが、時期の特定には至らなかった。

#### 8. 1区2面の土坑・ピット群(第27図、PL. 10)

**概要** 本項では1区2面の土坑及び小型のピットについて報告する。

また、6号土坑は1基の土坑として処理したが、西から①ピット、②土坑、③ピット、④土坑の4基の4基以上の土坑、ピットの掘り直しによるものである。

**位置** 1区2面の本土坑群のうち1・2号土坑は1区北西部、4号土坑は区北東部、5・6号土坑は区南東部に在り、1・2号ピットは区南東部に位置する。個々の土坑の位置するグリッドは表9参照のこと。

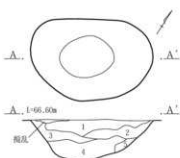
**重複** 5・6・14号土坑は13号溝と重複し、1号ピットは15号溝と重複する。このうち5号土坑が13号溝より古い他は、新旧関係を特定することはできなかった。

また6号土坑の中の土坑、ピットの新旧は、土層断面が北にはずれたため、確認できなかった。

**規模** 表11・12

**覆土** 1・2号土坑はAs-Bが多く入る褐灰色土等、4号土坑は重複する復旧溝のものと思われるAs-A層が確認されたが、褐灰色土等、5号溝はAs-Bの入る褐灰色砂質土

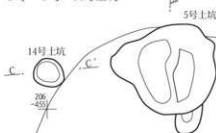
1号土坑



1号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) III・VI層上と多くのAs-B混入。
- 2 1・1層上ブロックにAs-B入る混土。VI層上粒若干混入。

5号・6号・14号土坑



5号土坑

A, L=66.00m

5号土坑

- 1 褐灰色砂質土(10YR5/1)に①・②層上の混土。
- 3 ①・③層上の混土。②若干。粘性あり。

1号ピット



2号ピット

A, L=66.00m



- 3 VI層上にV・4層土・As-B入。
- 4 黄灰色土(2.5Y4/1) 多量のAs-Bと若干のV・VII層土小入。
- 5 4層上にIII・VI・V層土入る。

- I 黒褐色As-B混砂質土(7.5YR3/1)
- II As-B
- III 黒褐色シルト質土(7.5YR3/1)
- IV ぶい黄色シルト質土(2.5Y6/3)
- V Hr-FA
- VI 青黒色土(5P2/1)

2号土坑



L=66.00m

2号土坑

- 1 褐灰色砂質土(10YR5/1) As-Bやや多く、1層と少量のIII・IV層土小混入。
- 2 暗灰黄砂質土(2.5Y5/2) As-Bやや多く、I・III・IV層土混入。
- 3 黄灰色シルト質土(2.5Y4/1) 粘性あり。

4号土坑



A, L=66.00m

4号土坑

- 1 ぶい黄褐色土(10YR5/3) 締まりあり。粘性弱。
- 2 As-A, 復田溝のAか。黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 3 褐灰色土(10YR5/1) 酸化鉄少量含む。締まりあり。
- 4 褐灰色土(10YR4/1) 3層とほぼ同じ。やや締まりあり。
- 5 黒褐色土(10YR2/2) 締まりやや弱い。

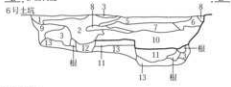
13号溝



(地山層上)

- ① 灰黄褐色土(10YR5/2)
- ② 明黄褐色粘質土(10YR6/6-6/8)にHr-FA入る。
- ③ 黒色粘質土(7.5YR2/1)

6号土坑

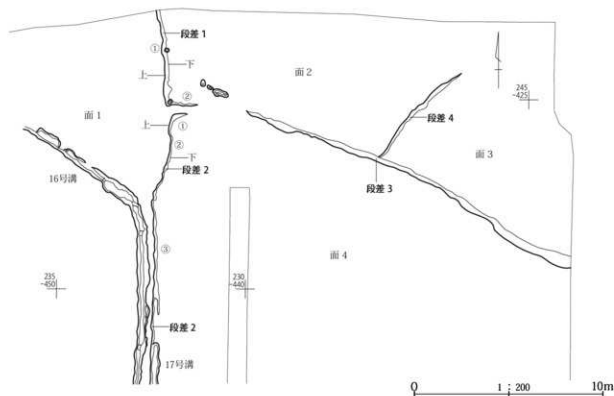


6号土坑

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) As-B, ②混入。
  - 2 黒褐色砂質土(10YR3/1) As-B混入。灰黄褐色砂質土(10YR6/2)ブロック混入。
  - 3 褐灰色砂質土(10YR4/1) As-B混入。灰黄褐色砂質土(10YR6/2)と若干の②ブロック混入。
  - 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) As-Bと②・6層土混入。
  - 6 灰黄褐色粘質土(10YR5/2)
  - 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性あり。
  - 8 ぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)
  - 9 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) ②層土部分的にAs-B小ブロック混入。
  - 10 ぶい黄褐色土(10YR6/4) 粘性あり。
  - 11 黒褐色粘質土(7.5YR3/1) 部分的に明黄褐色土(10YR6/8)入る。
  - 12 2層土に11・13層土ブロック混入。
  - 13 暗灰黄粘質土(2.5Y4/2) As-B混入。
- (地山層上)
- ① 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性あり。
  - ② 明黄褐色土(10YR6/8)と明黄褐色土(10YR6/6)の粘質土にHr-FA
  - ③ 黒色粘質土(7.5YR2/1)

0 1:40 1m

第27図 1区2面の土坑とピット



第28図 1区2面の段差遺構

等、6号土坑は黒褐色砂質土、にぶい黄褐色粘質土等、14号土坑は黒褐色土、1号ピットはAs-Bを含む褐色砂質土、2号ピットはAs-Bを含む黒褐色・褐色灰色土で埋没する。

**構造** 各土坑のプランは1・4・14号土坑は楕円形、2号土坑は隅丸短冊形、5号土坑は張出部のある楕円形を呈する。6号土坑は西から①楕円形(ピット)、②三日月形(土坑)、③円形(ピット)、④隅丸三角形(土坑)のプラン土坑ピットが重なっている。

底面の形態は、1号土坑は丸底、2・5・14号溝は平底、4号土坑は不整形を呈する。6号土坑内の土坑、ピットの平面形態は確認できなかった。

主軸方位は表12に記す。

**遺物** 各土坑、ピットからの出土遺物は得られなかった。

**所見** 各土坑の掘削意図は特定できなかった。なお、2号土坑の主軸方位は、南西に近接してある20号溝の走向はほぼ一致している。

またこれらの土坑ピットの時期は特定できなかったが、概ね中世の所産と判断している。

### 9. 耕作面(段差) (第28図)

**概要** 上述のように、1区2面北半部ではAs-Bを多く含

む、As-B混土上面で、水田面と認識される面を検出した。北西部から中東部西半にかけての区域では、牛馬工作に伴う蹄跡の痕跡が考慮される18・20号溝が遺されていたものの、畦畔等を確認することはできなかった(第#図)。

しかし北東部東寄りでは、畦畔は確認されなかったが、耕地区画を示唆する段差が確認された。

**位置** 本耕作面、段差は1区北東部にあり、233～249-422-444グリッドに位置している。

**重複** 本遺構には他遺構との重複は見られなかった。西南部の段差の南側は、17号溝の西縁に接続している。

**規模** 残存範囲 東西：14.9m 南北：11.7m

**覆土** 褐色シルト質土で被覆される。

**構造** 本遺構の段差は、有機的に結合する、北西(本項では「段差1」と呼称する。以下同じ)、南西(段差2)、北東にあるもののうち、略西北西-東南東方向に走行する段差(段差3)、段差3から略北東方向に分岐する段差(段差4)から成る。また、段差1・2の西側の(耕作)面を面1、段差3の北側に在って、段差1・4間にある(耕作)面を面2、段差4以東の(耕作)面を面3、段差2の東、段差3の南にある(耕作)面を面4がある。

段差1は、北側が調査区外に出ていて確認できなかった。段差1は略南北走行する部分(①)と略東西走行する

部分(②)から成る、L字状のプランを呈する。①はN3°Wを向き、5.1mを測り、②はN88°Wを向き、東西1.6mを計る。段差1は東、または北方向に落ちる。また段差1の南西隅部の下場に径25×19cmの小孔が検出され、その北側の段差1-①の下場に径24×21cmを測る小孔が検出された、両者のスパンは2.75mを測る。

段差2は、略東西走行する部分(①)と略南北走行する部分(②・③)から成り、プランは逆L字形を呈する。①はN88°Eを向き、長さ0.8mを計り、段差1-②の南に40cm程隔たっている。段差2-②は段差2-①の西端に垂直に接続し、そのラインは段差1-①のライン上に乗る。段差2-②は全長4.1mを測り、北端がN8°E、南端がN14°Eを向く、緩やかな弧を描く走行を見せる。段差2-③は段差2-②の南端から屈曲してこれに接続するもので、N1°Wを向き、直線的に7.5m程走って、17号溝西縁に接続する。段差2は東、または南方向に落ちる。

段差3は、段差2②の東端から東へ2.6m隔てて在り、長さ19.2mを測る。その走向は、西部でN70°W、中東部でN57°W。東端部でN72°を向く、緩やかに蛇行して略西北西-東南東方向に走行する。段差3は北方向に落ちる。

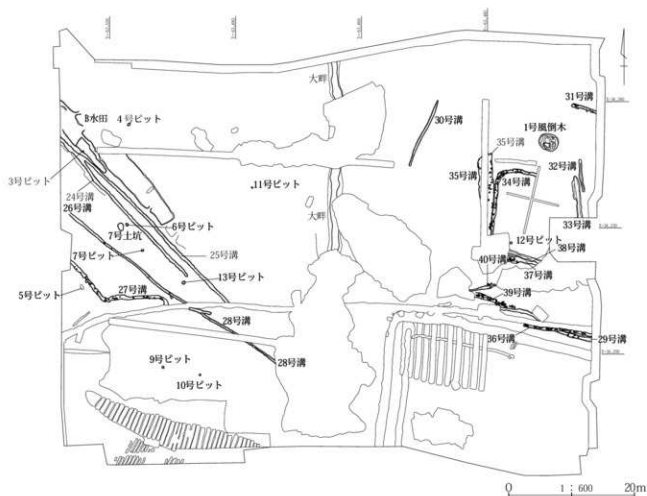
段差4は、段差3の西端7.4m地点から略北東方向に分岐する。分岐地点の直近でN38°E、中程でN42°E、北東端でN39°Eを向き南西橋近くで屈曲して、時計回りに緩やかな弧を描く。長さは4.1mを計る。段差4は南東方向に落ちる。

これら4条の段差で形成された面は、4面在った。段差1を介して東西に並ぶ、面1と面2の比高差は約5cmを測り、段2を介して東西に並ぶ、面1と面2の比高差は3～5cmを測る。段差3を介して南北に並ぶ、面2と面4の比高差は6cm以下を測り、面3と面4の比高差は6～11cmを測る。また、段4を介して北西、南東に並ぶ、面2と面3の比高差は4cm以下を測る。

**所見** 上述のように段差1-②の延長線上に段3の西端が位置していることから、段差1と段差3は接続していた可能性が考慮される。

また、段差1-②と段差2-①の間が40～48cm離れていることから、面2-面4、面3-面4間には畦が設けられていたことが想定される。またその想定に誤りがなければ、段1-①、段2-②の西側と、段4の西側に畔が設けられていた可能性がある。

以上の点から、本段差は、水田耕作に伴うものである可能性が考慮される。



第29図 1区3面全体図

### (3) 1区3面の遺構

#### 1. 1区3面の概要

1区3面は、上位の1・2面とは異なり、地形に凹凸が現れる。即ち、その地形は、中・西部の低地部と、北寄りを中心とした東部の微高地部とに分かれる。

3面では、低地部においては、下位面の遺構との峻別は比較的容易だが、微高地部の遺構は、2面から4面の遺構が調査面を下げる中で、順次漸移的に確認されており、特に3面と下位面の4面との遺構の峻別は難しい。

従って、概ね、天仁元(1108)年の面に続く面で確認された遺構と、4面で確認、調査された遺構のうち、明らかに律令期に属する遺構を選別して3面の遺構として、以下に報告する。

低地部の遺構は、As-Bに埋没した天仁元(1108)年の面に確認したが、確認できた遺構は、中西部で水田区画の一部とこれに伴う溝2条、中北部にある大群、及び南西部と2条と北東部東寄りの1条の溝遺構であった。

また微高地部では、前述のように東南部では近世段階で削平されていたため遺構は確認できなかったが、中東部から北東部にかけては、竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、溝13条があった。

#### 2. 1号住居(第30・31図, PL.12・76)

**概要** 本住居は離付の竪穴住居である。住居南西隅部は、擾乱により確認できなかった。

**位置** 本住居は1区北東部、220～224-425～429グリッドに位置する。

**重複** 他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 長軸：363cm 短軸：335cm 深さ：0.22cm

**竈** 幅：78cm 奥行き：180cm

左袖幅23cm 長さ78cm

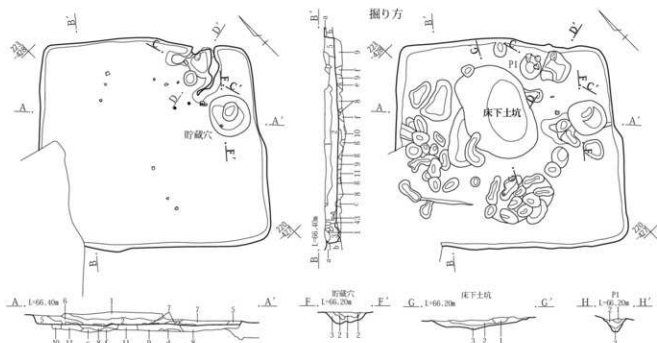
右袖幅23cm 長さ88cm

燃焼部 径38×30cm 深さ5cm

**貯蔵穴** 径67×64cm 深さ28cm

**覆土** 黒色粘質土や黒褐色土等で埋没する。壁際の黒褐





## (1号住居覆土)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 色調明るい。As-Cと若干のa土塊入。
- 2 黒色粘質土(10YR2/1) a・b小塊、若干のAs-C、礫等に焼上。
- 3 aと2層土の塊混上。
- 4 黒色粘質土(10YR1.7/1)
- 5 黒褐色土(10YR2/2) 1層に比べ暗い。a土小塊等混入。
- 6 黒褐色土(10YR3/1) 粘性やや弱。a土粒とAs-C混入。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 褐色ローム(7.5YR6/6)・b土塊等混入。

## (掘方)

- 9 黒色粘質土(10YR2/1)・にぶい黄褐色粘質土(10YR7/3)と明黄褐色土ローム(10YR6/8)塊の混上。若干のAs-C入。
- 10 黒褐色土(10YR3/1) 若干のにぶい黄褐色粘質土(10YR7/3)と明黄褐色土ローム(10YR6/8)小塊含む。粘性有。
- 11 灰黄褐色土(10YR5/2・4/2)と黄褐色ローム小塊の混上。
- 12 黒褐色土(10YR2/2)と灰黄褐色粘質土(10YR5/2)の塊混上。若干の黄褐色ローム小塊入。

## (地山)

a にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)

b 明黄褐色土ローム(10YR6/6)

c 暗褐色粘質土(10YR3/3)

d 黒褐色土(10YR3/2)

## (貯蔵穴)

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 2層土粒とにぶい黄褐色土ローム粒(10YR7/4)若干を含む。
- 2 灰褐色土(7.5Y4/1) にぶい黄褐色土ローム粒(10YR7/4)混入。粘性あり。
- 3 黒色粘質土(10YR2/1) にぶい黄褐色土ローム(10YR7/4)・2層土粒やや多く含み、若干の塊土粒(赤褐色2.5YR4/8)含む。

## (床下土坑)

- 1 黒褐色粘質土(10YR3/1) As-Cと若干の2・3層土小ブロック混入。
- 2 褐色粘質土(7.5YR4/1) 1・3層土ブロックやや多く混入し、若干のAs-C混入。
- 3 にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)に1・2層土、黒色粘質土(10YR2/1)、粘性ある明黄褐色土(10YR6/6)、粘性やや弱い浅黄褐色土ロームブロック(10YR8/3)混入。僅かなAs-C混入。

## (1号ピット)

- 1 灰褐色粘質土(7.5YR4/2)黒色粘質土粒(10YR2/1)、褐色土ローム(7.5YR7/6)小ブロック混入。
- 2 黒褐色粘質土(7.5YR2/2) 黒色粘質土(10YR2/1)・褐色土ローム(7.5YR7/6)ブロックやや多く混入。
- 3 黒褐色粘質土(7.5YR3/1)に黒色粘質土(10YR2/1)・褐色土ローム(7.5YR7/6)入る小ブロックの混上。

0 1 60 2m

## 第30図 1区1号住居

色土や黒色粘質土(3~6層)はいわゆる三角堆積層である。

**構造** [竪穴] 本住居は隅丸方形プランを呈し、その軸線方向はN43°Eを向く。

**[掘り方]** 本住居は、中央に径78×55cm、深さ12cmを測る、楕円形プランの掘り込を伴う掘り方を有し、これを黒色粘質土、黒褐色土、ローム漸移層土、ローム等の土壌で埋め戻して床面を造る。

**[竈]** 竈は北東壁南東部に設けられる。隅丸楕形のプランを有する浅い掘り方を有し、これを黒褐色粘質土等で

埋め戻して燃焼面を作る。竈掘り方の北隅近くには小坑が掘られ、河床礫が立てられる。

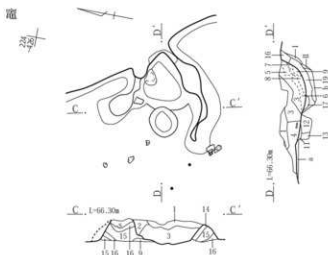
燃焼部は隅丸三角形を呈し、床面より僅かに低く作られ、その手前に径23×21cm、深さ11cmを測る、支脚の抜き取り痕跡と見られる小坑が確認される。

燃焼部両側には灰褐色土、灰黄色土、黒褐色土を用いた袖が作られるが、天井部及び煙道は確認できなかった。

**[柱穴]** 柱穴は確認できなかった。

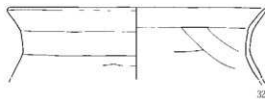
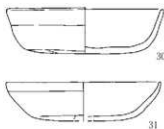
**[貯蔵穴]** 住居南東部南西壁沿いに貯蔵穴が掘削される。貯蔵穴は楕円形プランを呈する。掘削形態は楕円形だが、

### 第3章 発見された遺構と遺物



#### (竈覆土)

- 1 黒褐色粘質土(10YR3/1) As-Cと弱く焼土化したロームブロック混入。
  - 2 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり。ローム粒含む。
  - 3 黒褐色粘質土(7.5YR3/1) 一部焼土化したロームブロック・粒、焼土。にぶい黄褐色土ローム(10YR5/3)ブロック、にぶい黄褐色土ローム(10YR6/4)多く混入。
  - 4 黒色粘質土(10YR2/1) ロームとにぶい黄褐色土ローム(10YR6/4)ブロック若干混入。
  - 5 褐色土(7.5YR4/3) 粘性弱。3層土小ブロック、焼土ブロック混入。
  - 6 3・5層土ブロックと焼土小ブロック入る混土。灰混入。
  - 7 褐色土(7.5YR4/4) 粘性やや弱。弱い焼土化みられる。3層土粒と焼土小ブロック混入。
  - 8 灰色土(N5~N4) 焼土。にぶい褐色土(7.5YR6/4)小ブロック多く、にぶい褐色土(5YR6/4)混入。
  - 9 暗赤褐色土(5YR3/2) 焼土ブロック、灰、焼土化した黒褐色土粒(5YR2/1)混入。
- (支脚採取地)
- 10 にぶい黄褐色土ローム(10YR7/4)
  - 11 黒褐色土(10YR3/1) 10層土粒含む。
  - 12 黒褐色土(10YR3/2)に11層土と黒色土(10YR2/1)、焼土粒入るブロック混土に10層土小ブロック含む。粘性あり。
  - 13 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒色土(10YR2/1)入る。



第31図 1区1号住居竈と出土遺物

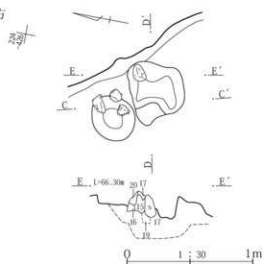
底面はやや凹凸が見られる。

**遺物** 杯(29・30)・甕(31)等の土師器、及び須恵器片や、磨石(32)未固結凝灰岩の竈構築材(33)並びに同天井石(35)の出土が見られた。

**所見** 本住居の竈穴の掘削位置は、条里方眼に依拠していない。

本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

#### 竈掘り方



#### (竈構築材)

- 14 褐色土(7.5YR6/1) 焼土粒、15層土小ブロック、明黄褐色ローム粒(10YR7/6)混入。弱い焼土化みられるが、粘性やや弱。
- 15 灰黄褐色土(10YR5/2)と16層土のブロック混土。焼土粒、明黄褐色ローム粒(10YR7/6)混入。
- 15' 焼土小ブロック混み、黒色粘質土(10YR2/1)小ブロック含む。
- 16 黒褐色粘質土(10YR3/1) 少量のローム細粒で、若干の15層土小ブロック混入。
- 17 にぶい黄褐色土(10YR7/4) 19層土粒含む。粘性ややあり。
- 20 15層土と17層土の小ブロック焼土。焼土粒は含まない。

#### (掘方覆土)

- 18 灰褐色粘質土(7.5YR4/2) 黒色粘質土小ブロック(10YR2/1)と明赤褐色焼土粒(5YR5/6)含む。弱い焼土化見。
- 19 黒褐色粘質土(10YR3/2) 黄褐色土ロームブロック(10YR7/8)、17層土ブロック、黒色粘質土(10YR2/1)小ブロック含む。

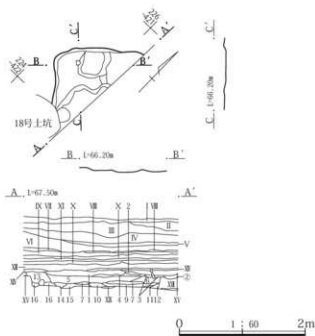
#### (住居掘方)

- a 暗褐色土(10YR3/3) 黒褐色粘質土(10YR3/1)の混土。明黄褐色土小ブロック(10YR6/6)と焼土粒含む。
  - b 黒褐色土(7.5YR3/1) 明黄褐色ローム粒混入。
- ※カマドのロームで別記載ない場合 淡黄色ローム(2.5YR/4)

### 3. 2号住居(第32図、PL.12)

**概要** 本住居は竈穴住居である。

本住居は西隅に近い部分を確認。調査したに過ぎず、過半は東側調査区外に出ていて、全容を把握することはできなかった。また、確認面が本住居に対して低かったこともあり、平面的には、床面は、その一部を確認したに過ぎず、全体的には掘り方の調査に留まった。



## (2号住居)

- 1 黒褐色粘質土(7.5YR2/2) As-C若干入り、4層土小ブロック、黄褐色土(10YR/6)・V層土粒入り。
- 2 褐色土(10YR5/1) XV層土小ブロックと若干のAs-C混入。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性あり、若干のローム粒入り。
- 4 灰黄褐色粘質土(10YR4/2) 若干のAs-C混入。
- 5 黒色粘質土 1層土の小ブロック混入。As-Cと焼土粒、若干のふい黄褐色土(10YR3/3)小ブロック混入。
- 6 黒褐色粘質土(7.5YR3/3) V層土小ブロック多く混入し、As-C入り、ローム小ブロック混入。
- 7 粘性ある褐色シルト質土(7.5YR6/2)に黒色土(10YR2/1)、5層土にふい黄褐色シルト質土(10YR7/3)入るブロック混入。
- 8 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性ややあり。若干の灰黄褐色土(10YR6/2)混入。

第32図 1区2号住居

**位置** 本住居は1区北東部、調査区東側に在り、223～225-420～421グリッドに位置する。

**重複** 18号土坑と重複するが、新旧関係は特定することはできなかった。

なお、18号土坑は4面の遺構として報告する。

**規模** 残径：140×120cm 深さ：0.05cm

**覆土** 黒褐色粘質土で埋没する。黒褐色土等で埋没する。壁際の黒褐色粘質土(5層)と黒褐色土(13層)はいわゆる三角堆積層である。

**構造**〔竪穴〕本住居は一部を調査したに過ぎないので、の竪穴は、隅丸方形あるいは隅丸長方のプランを呈するものと想定される。軸線方向はN47°Wを向くものと想

## (2号住居掘り方)

- 8 黒褐色土(10YR3/1) 粘性あり。7層土粒混入。
- 9 黒色土(10YR2/1) 粘性あり。若干の焼土粒含む。
- 10 黄褐色ローム(10YR6/8)に橙色ローム(7.5YR7/8)、灰黄褐色粘質土(10YR5/2)、黒色粘質土(10YR2/1)入るブロック混入。粘土構築材。
- 11 黒褐色土(7.5YR3/2) にふい黄褐色土(10YR5/3)・黒褐色粘質土(10YR2/1)小ブロック混入。
- 12 黒褐色土(7.5YR3/2) にふい黄褐色土(10YR5/3)・黒褐色粘質土(10YR2/1)小ブロック混入。
- 14 黒色粘質土(10YR2/1)
- 15 黒褐色粘質土(10YR3/1) 明黄褐色土(10YR6/6)、灰褐色土(7.5YR6/2)混入。

- 16 黒褐色土(10YR3/2) 粘性有。灰褐色土(7.5YR6/2)小ブロック入。(自然堆積層等)

- I にふい黄褐色砂質土 小粒と若干のAs-A等混入。
  - II 1層土に黄褐色土(10YR6/6)入る混入。As-A入る。
  - III 灰黄褐色土(10YR6/6) 粘性弱。黄褐色土(10YR6/6)、As-A等入。
  - IV 褐色砂質土(10YR6/1) As-A、酸化鉄粒多く入る。
  - V にふい、橙色砂質土(7.5YR6/4) 粘性弱く、As-A、酸化鉄全体に入。
  - VI 褐色砂質土(7.5YR6/1) 中央にAs-A、川砂、酸化鉄水平に入る。
  - VII 黄灰色粘質土(2.5Y6/1) 黄褐色シルト質土(10YR6/6)と僅なAs-A入。
  - VIII 褐色砂質土(7.5YR6/2) 僅かに黒色土(10YR2/3) 粒入り。
  - IX にふい黄褐色粘質土(10YR7/3) 酸化鉄繊維状に入。
  - X にふい黄色土(2.5Y6/3) 粘性有。酸化鉄と粘性やや有る黄褐色土(10YR6/6)粒多く混入し、橙色揃る。As-B若干入る。
  - XI 灰黄褐色土(10YR5/2)と橙色土(7.5YR6/8)の混入。As-B若干入。
  - XII 褐色土(7.5YR6/1) 粘性有。褐色土(7.5YR6/8)粒とAs-B入。
  - XIII 褐色粘質土(7.5YR4/1-5/1) 黒褐色粘質土(10YR3/1)等混入。
  - XIV 暗褐色土(10YR3/3) 粘性有。よく締まる。As-C等混入。
  - XV 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性やや強く、As-C混入。
  - XVI 黒褐色土(10YR3/2) 粘性有。若干のAs-Cと僅かな焼土粒含む。
  - XVII 黒褐色粘質土(7.5YR3/2) As-C僅かに含む。
  - XVIII にふい黄褐色粘質土(10YR4/3-5/3) XIX小ブロック混入。
  - XIX 黄褐色ローム(10YR6/6)とにふい黄褐色土(10YR5/3)の混入。(遺構層覆土)
- ② 灰褐色土(7.5YR4/2-3/2) 粘性あり。VII・X層土等含む。
  - ③ XII・XIII・黒色粘質土(10YR2/1)のブロック混入。
  - ④ 粘性ある黒褐色土(7.5YR3/1)とIX層土の混入。IX層土混入。

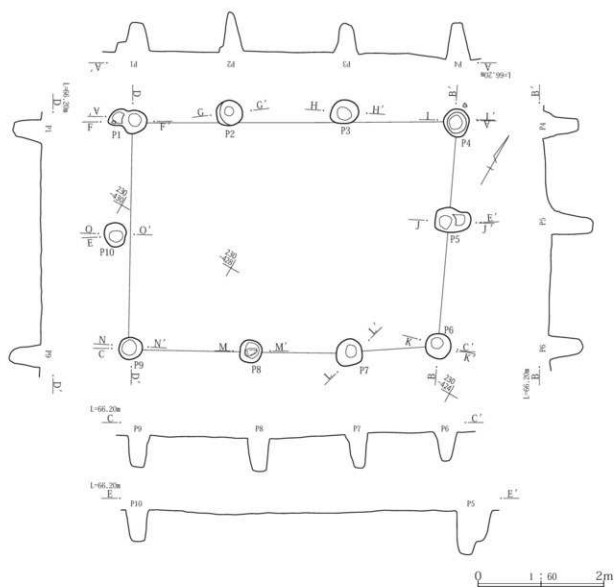
定される。

〔掘り方〕北壁扱いが深くなり、凹凸のある掘り方を有する。灰褐色シルト質土、黒褐色土、黒色・黒褐色粘質土等で戻して床面を造る。床面は部分的に残る。

〔竈・貯蔵穴・柱穴〕竈・貯蔵穴・柱穴は確認できなかった。

**遺物** 少量の土師器・須恵器片が出土したが、図示すべきものは見られなかった。

**所見** 本住居の竪穴は糸里方眼に依拠していない。本住居の時期は、出土遺物から推して、おおよそ平安時代所産として把握されるに過ぎない。



第33図 1区1号掘立柱建物平面

4. 1号掘立柱建物 (第33図、PL.13)

**位置** 本建物は北東部の微高地部、1号住居の北側に位置し、228～234-424～431グリッドにある。

**重複** 本建物は単独で在り、他遺構との重複は見られなかった。

**概要** 本建物は、主軸(棟方向)を東北東-西南西に取る、2×3間の掘立柱建物である。

**〔覆土〕** 本建物の柱痕は黒褐色粘質土等で埋没しているが、柱は、黒色粘質土あるいは黒褐色土等の土壌で固定されている。

**規模** 範囲：571×397cm

P 1 径：59×38cm 深さ：45cm 柱痕径：8～18cm

P 2 径：42×39cm 深さ：61cm 柱痕径：10～15cm

P 3 径：45×39cm 深さ：53cm 柱痕径：5～12cm

P 4 径：45×41cm 深さ：55cm 柱痕径：18cm以下

P 5 径：56×39cm 深さ：69cm 柱痕径：8～18cm

P 6 径：42×39cm 深さ：53cm 柱痕径：8～17cm

P 7 径：42×41cm 深さ：56cm 柱痕径：10～21cm

P 8 径：36×33cm 深さ：49cm 柱痕径：14～15cm

P 9 径：36×33cm 深さ：50cm 柱痕径：8～22cm

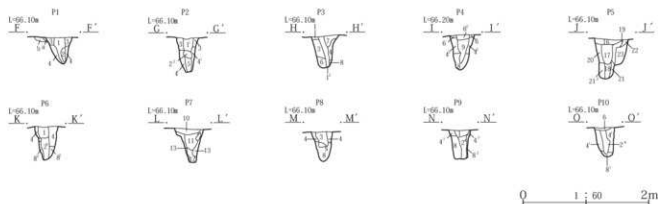
P 10 径：36×33cm 深さ：50cm 柱痕径：8～12cm

P 11 径：29×28cm 深さ：35cm

**構造** 上述のように本建物は3×2間の掘立柱建物である。主軸(棟方向)はN30°Wを向く。

**〔柱穴の配置〕** 本建物の柱の配列は、西北西列に対して東南東列がやや西南西方向に寄る、菱形に近い方形のプランを呈する。

また、棟持ち柱のうち、西南西側のものは、西南西ラ



- 黒褐色粘質土(10YR3/1) As-C塊と灰褐色粘質土(7.5YR6/2)混入。  
1<sup>1</sup> 明黄色ローム塊(10YR6/8)少量混入。ノ<sup>1</sup> 混入物少く粗。  
1<sup>3</sup> ローム塊大きい。
- 黒色粘質土(7.5YR2/1) 明黄色ローム塊(10YR7/6)若干入。  
2<sup>2</sup> 密度弱く粗。ノ<sup>2</sup> 混入物なし。ノ<sup>2</sup> ローム少量。
- 褐色粘質土(10YR4/1) 明褐色粘質土(7.5YR7/2)小塊西側に多く混入。  
3<sup>1</sup> 明黄色土ローム(10YR6/6-8)入り、灰褐色砂質土混入。  
4 黒色土(7.5YR2/1) 明るい灰褐色粘質土(7.5YR6/2)・黄褐色ローム小塊(7.5YR7/8)混入。ビット西は混入物少ない。  
4<sup>1</sup> 明黄色土ローム(10YR6/6)多し。ノ<sup>4</sup> 混入物僅か。
- 明黄色土ローム(10YR6/6)に2層上入る塊混入。  
5 黒褐色土(10YR3/1) 粘性あり。僅かにローム粒混入。  
6<sup>2</sup> 色調やや暗い。
- 3層上に明黄色土ローム塊(10YR6/6)多く入る。若干の4層土小塊入る。  
8 黒色粘質土(10YR2/1)  
8<sup>2</sup> 明黄色土ローム塊(10YR6/6)多く入る。
- 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性やや強。深い黄褐色土ローム粒(10YR5/3)含む。
- 暗い褐色土(10YR4/1) As-C若干混入。粘性あり。
- 黒色土(7.5YR2/1) c層小塊混入。粘性弱。
- 黒色粘質土(10YR1.7/1) As-C僅かに含む。粘性あり。
- 黒褐色粘質土(7.5YR3/1) c層小塊僅かに含む。
- 黒褐色土(7.5YR3/1) c層小塊多く混入。粘性あり。
- 黒色土(7.5YR2/1) c層小塊混入。粘性ややあり。
- 暗い灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性あり。若干のAs-C等混入。
- 黒色土(10YR2/1) 粘性あり。
- 黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり。ローム、d・e層土多く混入。
- 黒褐色土(10YR3/1) 粘性あり。ローム、d・e層土若干混入。
- 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり。ローム・e層土と若干のd層土混入。
- 黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり。d・e層粒部分的に含む。
- 黒褐色粘質土(10YR3/2) 粘性強。上位にd・e層粘若干入。  
a 層にローム小塊混入。  
b a層にローム小塊混入。  
c 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘性あり。  
d 褐色土ローム(7.5YR6/8)  
e に深い黄褐色土(10YR6/3)

第33図の2 1区1号掘立柱建物柱土層断面

インより24cm程張り出す。

〔柱穴の形態及び規模〕柱穴のプランは、P1とP5が張出しを有するが、全体的に見れば、円形若しくは隅丸方形を基準としている。

掘削形態は何れも井筒形で、平底状を呈する。

柱穴の径は33～58cm、平均40.5cmを測るが、張出部を除いた場合は33～45cm、平均38.3cmを測る。深さは45～69cm、平均58.1cmと、しっかりした掘り込を有する。

〔柱間〕本建物の柱間は以下の通りである。

(桁間) P1-P2 : 150cm	P2-P3 : 183cm
P3-P4 : 177cm	P6-P7 : 135cm
P7-P8 : 195	P8-P9 : 195cm
(梁間) P1-P10 : 186cm	P9-P10 : 177cm
P4-P5 : 156cm	P5-P6 : 192cm

桁間は、135～195cmとその規格に幅があり、平均は

166.50cmを測る。一方、梁間は156～192cmとやはりその規格に幅があり、平均は177.75cmを測る。

〔上層〕柱の径は、土層断面から推して、おおよそ3寸程度であったと推定される。

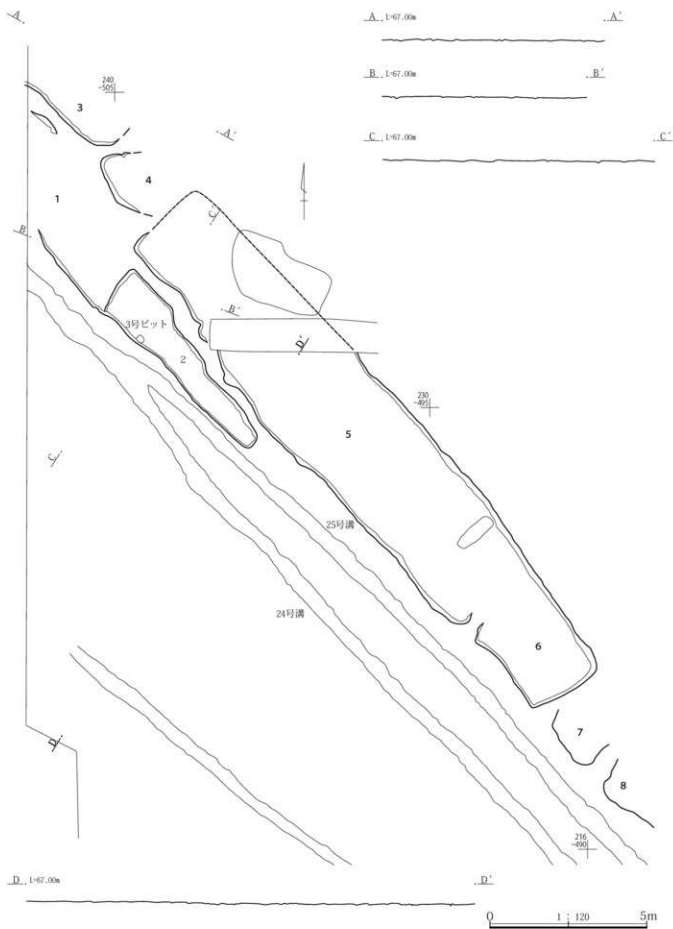
また、底面に柱の荷重による塑性変形が確認されないことと併せて鑑みるに、柱1本に係る荷重はロームと同質の支持力を持つ土壌と仮定すれば、柱材1本に対する荷重は40kg以下と推定され(石守1986)、極簡単な構造物であったと推定することができる。

棟方向はN58°Eを向く。

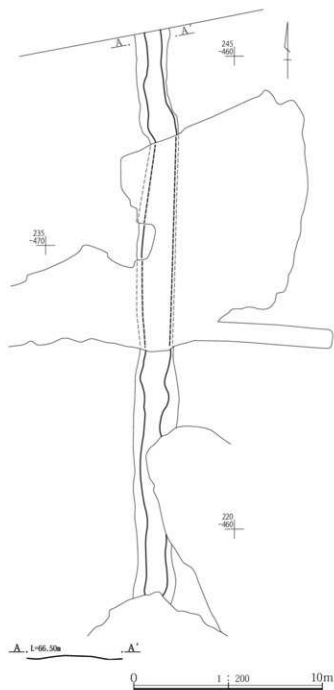
遺物 柱穴1・4・5・7から僅かな土師器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

所見 本建物の建設意図は特定できなかった。

また、建物の時期は明瞭ではない。柱穴の径はやや中世的であるものの、棟持ち柱を有することから、おおよそ律令期以前の所産として把握されるものである。



第34図 As-B下水田



第35図 1区大畔

### 5. As-B下水田及び24・25号溝

(第34・36図、PL.12・13)

**概要** 1区では北西部を中心に広い範囲でAs-Bが面的に確認された。しかし、水田址と認識されたのは25号溝東側の一部区域に限られた。しかし、これも遺存状態は良好ではなく、浅間山噴出のAs-B降下時(天仁元年、A.D.1108)に耕作されていたか否かについては、疑問を呈せざるを得ない状態である。

24・25号溝は、As-B下水田に沿ってあるため、これと

一体の遺構として判断されるものである。また24号溝は北側が25号溝に接続しており、25号溝は北側が西側調査区外に出ており、南側は1面3号溝に壊されていて、共に全容を把握することができなかった。

**位置** As-B下水田及び24・25号溝は、中西部から北西部にかけて在り、As-B下水田は216～240-487～507グリッド、24号溝は212～231-487～505グリッド、25号溝は208～に位置する。

**重複** 24号溝は25号溝から分岐するようであるが、新旧関係はなく、As-B下水田と併せて同時併存していたものと判断される。

**規模** As-B下水田 東西：19.7m 南北：23.8m

個々の水田面里規模は表10参照。

24号溝 残長：27.1m 幅：50cm 深さ：4cm

25号溝 残長：33.5m 幅：48cm 深さ：6cm

**覆土** As-B下水田及び24・25号溝は、共にAs-Bで覆われていた。

**構造** As-B下水田は、25号溝の東側に、これに沿って確認された。遺存状態が悪いため、全容を詳らかにできないが、確認した水田面8面を元に以下に概要を記す。

西側に水田面1・2、東側に水田面3～8が、それぞれ北から南に向かって順に並ぶが、遺存状態が悪いため、水田面によっては、更に南北に分割される可能性が遺される。

一方、本水田址は、25号溝と水田面の間には畦が設けられるが、その規模は水田面の1との間には下幅76cm、上幅56cm、水田面2との間には下幅22～84cm、上幅12～70cmを測る。また水田面1と3の間には下幅60cm、上幅36cm、水田面2と5の間には下幅60～80cm、上幅22～74cmを測る畦があり、水田面1と2の間には下幅44cm、上幅30cmを測る畔がある。また水田面2の南には水田面は形成されず、25号溝と水田面90～124cm、62～112cmを測る畦となっている。

24号溝は、25号溝からN34°Eの軸線方向で右岸側に分岐し、分岐点から4m程の地点から、走向をN43°Wの方位に走向を転じて、以南はおおよそ直線的に走行する。掘削形態は箱堀状を呈するが、底面は北西高南東低であるが、傾斜はほとんどなく勾配率は僅か0.07%である。

25号溝は、N47°Wの方位で西側調査区から入り、直

ぐにN57°Wに転じて24号溝と分岐した後、N46°WからN44°Wに走向を転ずる、極緩やかに屈曲する逆く字状のプランを以て走行する。掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底状で、底面の高低は北西高南東低である。しかし、傾斜はほとんど勾配率は0.6%を測るに過ぎない。

**遺物** As-B下水田、24・25号溝は共に遺物の出土は見られなかった。

**所見** As-B下水田址は、僅かな範囲で畦畔も確認されただけで、上述のように、遺存状態も悪く、確認範囲の状態も正確に確認できたものではなかった。本水田址は、確認範囲では、25号溝の左岸に沿って北側で2列、中・南側で1列の水田面が確認され、25溝に沿う縄張りで造成されたことが確認されたに過ぎなかった。

一方、断定できないものの、その位置等から推して、24・25号溝は水田耕作に伴う給水路、または排水路であったものと判断される。

なお、As-B下水田、24・25号溝は、天仁元(1108)年以前の所産ではあるが、造成、掘削時期は特定できなかった。おおよそ、平安時代の所産として把握したい。

#### 6. 大群(第35図、PL.11)

**概要** 本大群は、略南北に走向することから、条里制に依拠した畦遺構と考えられる畦遺構である。南端部と遺構の中段の、合せて3か所で、現代の攪乱により削られていたため、全容は詳らかにできなかった。

**位置** 本遺構は1区中北部に在り、216～246-463～465グリッドに位置する。

**重複** 本遺構と他の遺構との重複はなかった。

**規模** 残長：30.5m 下幅：151～207cm 上幅：70～107cm 高さ：2～4cm

**覆土** 覆土の記録は残せなかったが、上面はAs-BまたはAs-B混土が堆積し、側面はAs-Bが堆積があったものと想定している。

**構造** 本遺構の北部南寄りで東側にクランクするが、南端を除く北部と中・南部は比較的直線的な走行を呈する。その走向は北部はN5°W、北部南端でN16°W、N9°Wと走行を転じ、中・南部はN1°Eを向く。

形態は、上面は平らであり、南北方向の傾斜は見られない。側面は緩傾斜を呈する。

**遺物** 本溝からの出土遺物は見られなかった。

**所見** 本遺構の両側にはAs-Bで被覆された平坦面が広がり、As-B下水田に伴う大群である。

その時期は、天仁元(1108)年を下限とする、おおよそ平安時代の所産として把握される。

なお、本遺構は4面に確認された、並走する大型の溝である、52・53号のうち東側の53号溝の西壁の上に載っている。

#### 7. 26・28号溝(第36図、PL.13)

**概要** 26・28溝は、上述の24・25号溝より、一回り小さい規格を持つ溝遺構である。重複する1面3号溝跡を境に、北側に26号溝、南側を28号溝と遺構番号を付したが、位置と形態、底面の深さから推して同一の溝遺構である。

26号溝の北西端は削平により失われ、28号溝の南東端は現代の攪乱により壊されており、中位を1面3号溝、と試掘トレンチに切られているため、全容は詳らかにできなかった。

**位置** 26号溝は1区中西部に、207～222-487～509グリッドに位置する。28号溝は1区南西部に在り、198～207-473～485グリッドに位置する。

**重複** 26号溝は8号ピットと重複するが、新旧関係は特定できなかった。また、28号溝は27号溝と重複するが27号溝の方が新しい。

**規模** 26号溝 残長：23.5m 幅：46cm 深さ：5cm

28号溝 残長：14.5m 幅：43cm 深さ：4cm

26・28号溝 全長：40.6m

**覆土** 26号溝はAs-Bやや多く入る灰黄褐色土等、28号溝はAs-B等で埋没する。

**構造** 26・28号溝の走行は極緩やかに蛇行するが、その走向は西北部ではN51°W、中段から南東部ではN55°Wを向く。

掘削形態は、箱堀状を呈する。底面は北西高南東低であるが、底面はほぼ平坦で、勾配率は0.37%を測るに過ぎない。

**遺物** 本溝からの出土遺物は見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかったが、掘削長等から推して、水路の可能性が考えられる。

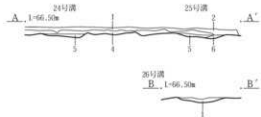
その時期は、覆土の所見からは、26号溝は天仁元(1108)年以降の所産と認識される。また、28号溝は天仁元年を



第1節 1区の遺構と遺物

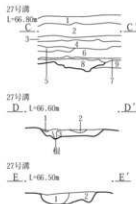
(24・25号溝)

- 1 褐灰色砂質土(10YR5/1) As-B混入。
- 2 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) As-B多く、3層土ブロック混入。
- 3 灰黄褐色土(10YR6/2) As-B混入。粘性弱。
- 4 As-B にふい黄色(2.5Y6/3)・灰色(5Y5/1)を成す。下面に5層土入る箇所あり。
- 5 As-B層 上位は暗灰色土(N3/)、中・下位は灰色土(7.5Y5/1)が多い。
- 6 褐灰色火山灰層(5YR5/1) 所々にいわゆるレド'アツク。径5mm以上のAs-B混入。



(26号溝)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) As-Bやや多く入り、明褐色粘質土(7.5YR5/6)ブロックと若干の灰白色シルト土(2.5Y7/1)ブロック混入。粘性やや有。



(27号溝-C')

- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘性やや弱。As-A混雑シルト質土(5YR6/8)のブロック混入。
- 2 黄灰色砂質土(2.5Y5/1) As-A含む。粘性やや弱。
- 3 明黄褐色土(10YR6/6) As-Aと砂混入。粘性やや弱。
- 4 にふい黄褐色土(10YR7/4) 粘性やや弱。上位にAs-A、灰オリーブ色土(5Y5/2)混入。
- 5 灰灰色シルト質土(2.5Y6/1) 粘性有。As-A僅かに含むが本来でない。
- 6 灰褐色シルト質土(7.5YR6/2) 粘性有。
- 7 6・8・9層土ブロック混入。

(27号溝覆土)

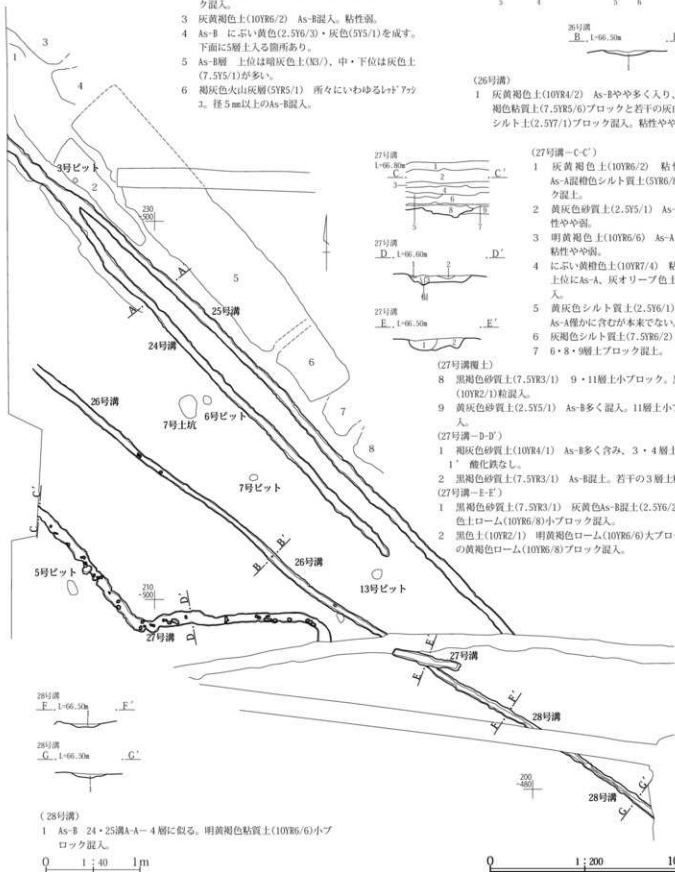
- 8 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) 9・11層土小ブロック。黒色粘質土(10YR2/1)粒混入。
- 9 黄灰色砂質土(2.5Y5/1) As-B多く混入。11層土小ブロック混入。

(27号溝-D')

- 1 褐灰色砂質土(10YR4/1) As-B多く含む、3・4層土混入。1' 酸化鉄なし。
- 2 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) As-B混入。若干の3層土粒入り。

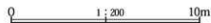
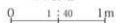
(27号溝-E')

- 1 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) 灰黄色As-B混入(2.5Y6/2)と明黄褐色土ローム(10YR6/8)小ブロック混入。
- 2 黒色土(10YR2/1) 明黄褐色ローム(10YR6/6)大ブロックと少量の黄褐色ローム(10YR6/8)ブロック混入。



(28号溝)

- 1 As-B 24・25溝A-A-4層に似る。明黄褐色粘質土(10YR6/6)小ブロック混入。



第36図 1区24・25・26・27・28号溝

下限とするが、おおよそ天仁元年以前に掘削された、平安時代の所産として把握される。

#### 8. 27号溝(第36図、PL.13)

**概要** 27号溝は、近接あるいは隣接する24～26・28号溝とは異なり、規格化された走行を持たない溝遺構である。

**位置** 本溝は1区中西部に在り、207～214-490～506グリッドに位置する。

**重複** 本溝は28号溝と重複するが、本溝の方が新しい。

**規模** 残長：26.8m 幅：62cm 深さ11cm

**覆土** As-Bの混入する、黒褐色砂質土等で埋没する。

**構造** 本溝は蛇行するが、北西部は西側調査区端から直線的に入って8.5m地点で屈曲し、略東方向へ9m程走行して南に折れる。1面の3号溝との重複区間の様相は詳らかにできなかったが、東端部は略東方向に直線的に走行する。その走向は西北部ではN40°W、中程はN86°Eで、その東端からN2°Eを向き、東端部でN79°Wを向く。

掘削形態は、箱塚状を呈する。底面は凹凸が見られる。また底面は北西高南東低であり、ほぼ平坦であり、勾配率も0.56%を測るに過ぎない。

**遺物** 本溝からの出土遺物は見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかったが、形態から推して、自然の流路、あるいはこの流路を利用した水路の可能性が考えられる。

その時期は、覆土の所見からは、天仁元(1108)年以降の所産と判断されるが、2面には確認されなかったため、天仁元年からあまり下らない時期のものと思量される。

#### 9. 29号溝(第37図、PL.14)

**概要** 29号溝は、小型の溝遺構である。東側が調査区外に在り、後述のように攪乱もあるため、全容は詳らかにできなかった。

本溝は東・中・南の3区間に分けられるが、東・中区間の境は1面3号溝で壊され、36号溝と重複する為、分断されている。また、中・西区間の境は、後世の攪乱により、北東部を除いて失われている。

**位置** 本溝は1区中東部南西寄りに在り、202～209-423～442グリッドに位置する。

**重複** 36号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 残長：10.3m幅：60cm深さ14cm

**覆土** As-Bの混入する、As-B混黒褐色砂質土等で埋没する。

**構造** 本溝は東・中・西区間共に直線的に走行し、西・中区間の東端部は南東または東南東側に屈曲する。東部区間は中部区間東端の延長線上に乗り、その西端で緩やかに屈曲して走行を転ずる。その走向は西区間ではN72°W、同東端ではN30°W、中区間ではN8°W、同東端部ではN80°Wを向く。東区間の走向はN73°Wを向き、その東端は僅かに屈曲して、N77°Wを向く。

掘削形態は、箱塚状を呈する。西区間の底面には鋤先痕が残り、中区間にはそうした痕跡は見られないが、中区間西寄りの本溝の北側には凹凸が見られる。また、東区間でも若干の小孔が見られた。

底面の比高差は西区間では西部に対して、同東部は5cm程高くなっており、西区間東部から中区間はほぼ平坦である。そして、中区間東端から東区間東端にかけては、西高東低に僅かな傾斜が見られる。この区域の勾配率は1.82%を測る。

**遺物** 少量の土師器、須恵器が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

その時期は、覆土の所見からは、天仁元(1108)年以降と思慮されるが、2面には確認されなかったため、天仁元年からあまり下らない時期の所産ではないかと思われる。

#### 10. 30号溝(第38図、PL.14)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。1区内の小範囲で起結し、所見は多くない。

**位置** 本溝は1区北東部西寄りに在り、229～240-447～520グリッドに位置する。

**重複** 本溝と重複関係にある遺構はなかった。

**規模** 長さ：11.3m 幅：44cm 深さ3cm

**覆土** As-Bで埋没する。

**構造** 本溝の走行は極緩やかな蛇行を呈する。その走向は北端部ではN15°E、南端部ではN17°Eを向く。

掘削形態は、箱塚状を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

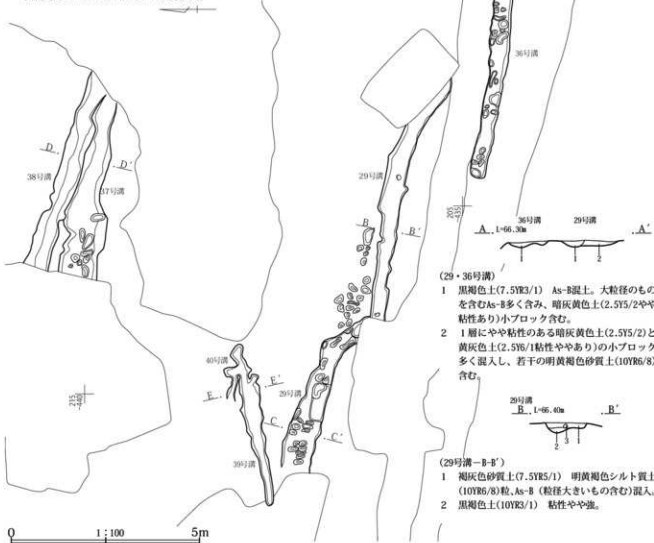


- (37・38号溝)
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2-5/2) As-B多く含む。
  - 2 黒褐色土(10YR3/1) 粘性有。As-B含。
  - 3 褐灰色砂質土(10YR4/1) As-B多く含む、4層土ブロックと酸化鉄粒混入。
  - 4 黒褐色粘質土(10YR3/2)



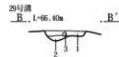
(39・40号溝)

- 1 黒色土(7.5YR2/1)・黒褐色砂質土(10YR3/1) As-Bとにぶい黄褐色土(10YR/3・5/3粘性あり)ブロック混入。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) にぶい黄褐色土(10YR5/4粘性あり)と灰黄褐色土(10YR5/2)ブロック混入。
- 3 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) 明褐色土(7.5YR5/6)中ブロックと若干の地山灰黄褐色土(10YR5/2粘性ややあり)混入。



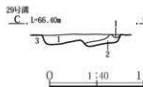
(29・36号溝)

- 1 黒褐色土(7.5YR3/1) As-B混土。大粒径のものを含むAs-B多く含む、暗灰黄色土(2.5Y5/2やや粘性あり)小ブロック含む。
- 2 1層にやや粘性のある暗灰黄色土(2.5Y5/2)と黄灰色土(2.5Y6/1粘性ややあり)の小ブロック多く混入し、若干の明黄褐色砂質土(10YR6/8)含む。



(29号溝-B-B')

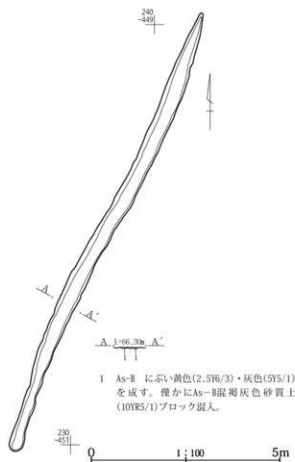
- 1 褐灰色砂質土(7.5YR5/1) 明黄褐色シルト質土(10YR6/8)粒、As-B (粒径大きいもの含む)混入。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 粘性やや強。



(29号溝-C-C')

- 1 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) 灰黄色As-B混砂質土(2.5Y6/2)、明黄褐色ローム(10YR7/8)小ブロック混入。
- 2 黒色土(10YR2/1) 明黄褐色ローム(10YR5/6)ブロックと少量の明黄褐色ローム(10YR7/8)ブロック混入。
- 3 As-B 1層土の灰黄色土と若干の黒褐色土(10YR2/1)小ブロック混入。

第37図 1区29・36・37・38・39・40号溝



第38図 1区30号溝

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

また、その時期は、覆土の所見から推して、おおよそ天仁元(1108)年を下限とする、概ね平安時代の所産と判断される。

#### 11. 31号溝(第39図、PL.14)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。東側が調査区外に出ていて、全容を把握することはできず、所見は多くない。

**位置** 本溝は微高地部分に当たる、1区北東部東側調査区間に在り、238～239-422～426グリッドに位置する。

**重複** 本溝と重複関係にある遺構はなかった。

**規模** 残長：4.2m 幅：40cm 深さ7cm

**覆土** As-Bを少量含む黒色土で埋没する。

**構造** 本溝の走行は緩やかな弧状を呈する。その走向は西端部ではN71°W、東端部ではN68°Wを向く。

**掘削形態**は、箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底状を呈する。

**遺物** 僅かな土師器・須恵器・陶器片を出土したが、図

示すべきものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

その時期は、覆土の所見から推して、天仁元(1108)年以降と認識されるが、さして下らない時期の所産と判断される。

#### 12. 32・33号溝(第40図、PL.14)

**概要** 32号溝は、小型の溝遺構であり、33号溝は大型の溝遺構である。33号溝は南側が馬入れに入り、その南側では確認できなかったため、全容を把握することはできなかった。

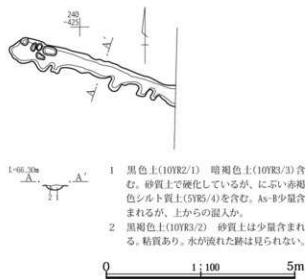
**位置** 本溝は微高地部分に当たる、1区中東部東側調査区間に近い位置に在り、32号溝は225～230-424～425グリッド、33号溝は221～228-424～425グリッドに位置する。

**重複** 両溝共に、重複関係にある遺構はなかった。なお、33号溝の北部では西側に張り出す部分があるが、これに対して東側の溝本体は新しい。

**規模** (32号溝) 長さ：5.2m幅：53cm深さ7cm  
(33号溝) 残長：6.7m幅：112cm深さ13cm

**覆土** 32号溝は川砂含む暗灰黄色砂質土等で埋没し、33号溝はAs-Bを多く含む黒褐色土等で埋没するが、西側張出部は褐灰色砂質土等で埋没する。

**構造** 32号溝の走行は緩やかに屈曲するく字状を呈し、その走向は北端部ではN2°W、南端部ではN11°Wを向く。掘削形態は、箱堀状を呈する。



第39図 1区31号溝

33号溝は直線的な走行を見せるが、北端で僅かに時計回りに傾く。その走向はN 5°Wを向き、北端部ではN 13°Wを向く。掘削形態は、箱型を呈する。なお、上述のように33号溝の北部では、南北323cmの範囲で、西側に40cm程の張り出しが見られる。溝本体と張出の底面は、3cm程の比高差を以て、張出部の方が高い。

**遺物** 32号溝では僅かな量の土師器、須恵器片の他に、尾張陶器片口鉢(35)が出土した。また33号溝からは土師器・須恵器片の出土が見られたが、図示するものはなかった。

**所見** 32・33号溝の掘削意図は特定できなかった。しかし、32号溝は33号溝を避けるように、走向を変じて掘削されている。また、軸線方向は一致するが、33号溝本体に切られる33号溝北部張り出しは土坑等の別遺構である可能性も考慮される。

その時期は、32号溝は特定できなかったが、確認面から推しておよそ天仁元(1108)年以前の所産と推定される。

但し、32号溝は33号溝を意識して、これを避けて掘削されていることから、同様に天仁元年以降の所産として把握される。

また、33号溝は覆土等から、天仁元年以降の所産と判断される。しかし西側張出部を考慮するなら、天仁元年以前に掘削された可能も考慮される。

#### 14. 34号溝(第40図、PL.14)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構であるが、南西端部は攪乱により、北東端部はサブレンチで壊されているが、攪乱の南、あるいはサブレンチの東に延伸しない。

**位置** 本溝は中東部北寄りに在り、218～229-432～439グリッドに位置する。

**重複** 35号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 残長：15.7m 幅：60cm 深さ8cm

**覆土** 本溝はAs-Bの入る黒褐色砂質土と上位に入るにぶい黄褐色土等で埋没する。

**構造** 本溝の走行は、北西部に屈曲部を持つ鉤形を呈し、その走向は西辺ではN 7°E、北辺ではN 78°Wを向く。屈曲の角度は95°を測る。

掘削形態は、箱型を呈するが、底面は軸線上での凹

凸はない。また底面には踏先と思われる小孔が見られる。**遺物** 僅かな量の須恵器片が出土したが、図示するものはなかった。

**所見** そのプランから推して、本溝し土地区画のために掘削されたものの可能性が考慮される。本溝の掘削意図は把握されなかった。なお、西側24m地点に、走向の近い大群があることを付記しておく。

その時期は、特定できなかったが、覆土の観察所見から推して、天仁元(1108)年を前後とする時期の所産と判断される。

#### 15. 35号溝(第40図、PL.14)

**概要** 本溝は、大型の溝遺構である。南部は削平により失われているため、全容は詳らかでない。

**位置** 本溝は中東部北寄りに在り、224～231-438～440グリッドに位置する。

**重複** 34号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 残長：13.0m 幅：220cm 深さ8cm

**覆土** 本溝はAs-Bの入る黒褐色砂質土で埋没する。

**構造** 本溝の走行は直線的であり、その走向はN 3°Wを向く。

掘削形態は、箱型を呈し、底面はほぼ平坦である。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は把握されなかった。なお、西側24m地点に、走向の近い大群があることを付記しておく。その時期は、特定できなかったが、覆土の観察所見から推して、天仁元(1108)年以降の所産と判断される。

#### 16. 36号溝(第37図、PL.14)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。東部は調査区外にあるため、全容は詳らかでない。

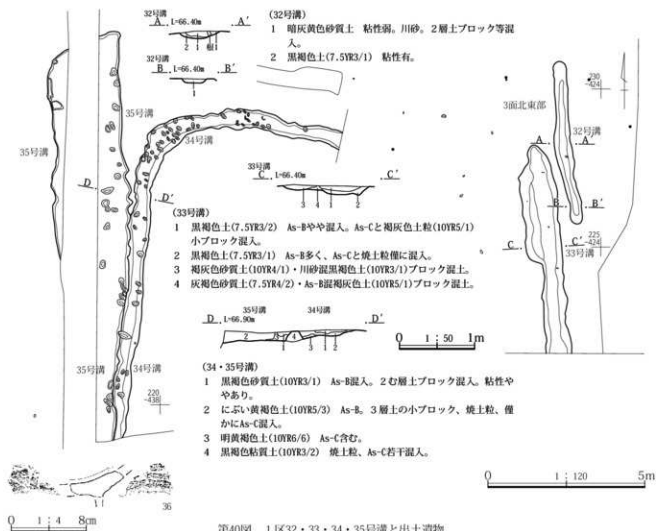
**位置** 本溝は南東部東寄りに在り、201～204-423～434グリッドに位置する。

**重複** 29号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。

**規模** 残長：11.0m 幅：48cm 深さ10cm

**覆土** 本溝はAs-Bの入る黒褐色砂質土で埋没する。

**構造** 本溝の走行は直線上に載るが、極緩やかに蛇行する。その走向は全体としてN 83°Wを向く。



第40図 1区32・33・34・35号溝と出土遺物

掘削形態は、箱塚状を呈するが、底面に鋤先痕を伴う小孔が見られる。軸線方向の底面に高低差は見られない。  
**遺物** 出土遺物は得られなかった。  
**所見** 本溝の掘削意図は把握されなかった。その時期は、特定できなかったが、覆土の観察所見から推して、天仁元(1108)年以降の所産と判断される。

17. 37・38号溝(第37図, PL.14)

**概要** 37・38号溝は、南北(南が37号溝)に接して走行する小型の溝遺構である。両溝共に、東西両側が現代の攪乱で失われていたため、共に全容を把握することはできなかった。

**位置** 本溝は微高地部分に当たる、1区中東部に在り、37号溝は214～216-431～436グリッド、38号溝は214～215-432～436グリッドにある。

**重複** 37・38溝は東端で重複するが、37号溝の方が新しい。

また、両溝共に他の遺構との重複関係は見られなかった。

**規模** (37号溝) 残長：4.7m 幅：67cm 深さ10cm  
 (38号溝) 残長：5.4m 幅：56cm 深さ16cm

**覆土** 37号溝はAs-Bを多く含む灰黄褐色砂質土、38号溝はAs-Bを多く含む川砂含む暗灰黄色砂質土等で埋没する。

**構造** 37号溝の走行は直線的であり、その走向はN71°Wを向く。掘削形態は箱塚状を呈し、底面は自然地形とは反対方向に傾斜する、東高西低であり、その勾配は1.72%を測る。

38号溝の走行は直線に近く、極緩やかな弧状を呈する。その走向は西端でN88°W、東端でN23°Wを向いている。掘削形態は、箱塚状を呈する。西部の底面に小孔が見られる。底面はほとんど平坦だが、強いて言えば東高西低である。

**遺物** 37号溝では僅かな量の土師器、須臾器片が出土し

だが、図示すべきものはなかった。また38号溝からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 37・38号溝の掘削意図は特定できなかった。

その時期は、両溝共に覆土の所見から、おおよそ天仁元(1108)年以降の所産と推定されるが、2面で確認されなかったこと、及びAs-Bを多く含むことから、天仁元年よりあまり下らない時期のものと思慮される。

#### 18. 39・40号溝(第37図, PL.14)

**概要** 39・40号溝は、小型の溝遺構である。両溝は東端で分岐あるいは合流する。短い溝であり、所見は多くない。

なお、40号溝の西端部は削られて失われ、極短い範囲でしか確認できなかった。

**位置** 本溝は1区中東部に在り、39号溝は210～211-438～442グリッド、38号溝は211-439～440グリッドにある。

**重複** 39・40号溝は東端で重複するが、新旧関係は特定できなかった。

また、両溝共に他の遺構との重複関係は見られなかった。

**規模** (39号溝) 長さ: 4.3m 幅: 50cm 深さ7cm

(40号溝) 長さ: 1.0m 幅: 20cm 深さ10cm

**覆土** 39号溝はAs-Bを含む黒色・黒褐色砂質土等、40号溝は黒褐色砂質土で埋没する。

**構造** 39号溝の走行は直線的であり、東端部で僅かに北方に屈曲する。その走向はN79°Eを向くが、東端部でN73°Eを向く。掘削形態は箱状を呈し、軸線方向の底面の比高差はない。

40号溝の走行は直線で、その走向は西端でN78°Wを向く。掘削形態は、箱状を呈する。

**遺物** 共に出土遺物は得られなかった。

**所見** 39・40号溝の掘削意図は特定できなかった。

その時期は、両溝共に覆土の所見から、おおよそ天仁元(1108)年以降の所産と推定される。

#### 19. 45号溝(第47図, PL.18・76)

**概要** 本溝は出土遺物から3面に加えるべきであるが、4面の43・44・46～51号溝とともに一連の溝群としてあるため、同溝群と共に報告することとする。

#### 20. 1区3面の土坑・ピット(第41図, PL.15・76)

**概要** 1区3面では土坑4基とピット10基を確認した。以下、一括で報告する。

**位置** 本土坑ピット群のうち・北西部には7号土坑、3・4・5・6・7・13号ピットの土坑1基、ピット6基、南西部には9・10号ピットのピット2基、中北部には11号ピットのピット1基、中東部に11・18号土坑と12・33号ピットの土坑2基とピット1基、北東部には8号土坑1基が分布する。

なお、個々の土坑、ピットの所在するグリッドは表11・12参照のこと。

**重複** 3号ピットはAs-B下水田の水田面2の中に在って、水田面2の西側の畦に接してある。また5号ピットは27号溝と重複するが、共に新旧関係を特定することはできなかった。

また他の土坑、ピットは何れも単独で在り、重複関係は見られなかった。

**規模** 表11・12

**覆土** 7号土坑は褐灰色粘質土等で埋没し、3・6・10号ピットは黒褐色土等、11・18・33号土坑は黒褐色粘質土等、4号ピットは暗褐色土等、5・12・13号ピットは灰黄褐色土等、7・9号ピットは灰黄褐色土等、11号ピットは褐灰色土等で埋没する。このうち3～5・7～11号ピットはAs-Bを含むが、その含有量が少ないのが10・11号ピットであり、多いものが4・5・7号ピットである。

**構造** 7号土坑は楕円形、8号土坑は長円形、11・18・33号土坑は隅丸方形のプランを呈し、掘削形態はいずれも箱形で、7・8・11土坑は平底、18号土坑は平底状を呈する。

3・6・9・10・11号ピットは隅丸方形、4・5・7・12・13号ピットは楕円形のプランを呈する。ピットの底面は3・4・5・6・9・33号ピットが丸底、7・10・11・12号ピットが平底を呈する。

また、3・7・10・12号ピットには柱痕が認められた。

主軸方位は表#に記す。

**遺物** 7号土坑から一定量の土師器片が出土したが、図示すべきものはなかった。また、8号土坑から須恵器碗(41)、11号土坑からは内外面に「子」字のあるものを含む土師器杯(42～45)、須恵器杯(46)、18号土坑から図化すべきものはなかったが少量の須恵器片が出土した。33

第3章 発見された遺構と遺物

7号土坑



7号土坑

1 褐灰色粘質土(10YR4/1) 僅かにローム・明黄褐色粘質土混入。  
2 灰黄褐色土(10YR5/2) 明黄褐色粘質土含む。

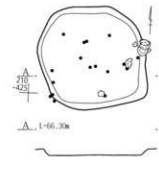
8号土坑



8号土坑

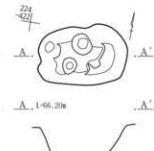
1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり。褐灰色土・にぶい黄褐色土混入。  
2 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性ややあり。にぶい黄褐色土・明黄褐色土混入。

11号土坑



11号土坑

18号土坑



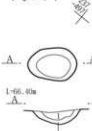
18号土坑

3号ピット



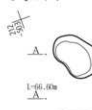
3号ピット

4号ピット



4号ピット

5号ピット



5号ピット

6号ピット



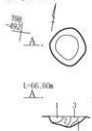
6号ピット

7号ピット



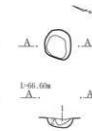
7号ピット

9号ピット



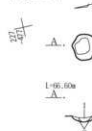
9号ピット

10号ピット



10号ピット

11号ピット



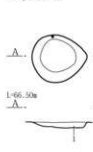
11号ピット

12号ピット



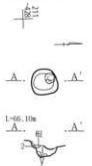
12号ピット

13号ピット



13号ピット

33号ピット



33号ピット

(3号ピット)

1 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土粒を含む。植痕か。  
2 黒褐色土(10YR3/1) As-B、明黄褐色土を含む。  
3 黒褐色土(10YR3/2)酸化鉄を含む。

(4号ピット)

1 暗褐色土(10YR3/3) As-B多い。暗黄褐色土含む。  
2 黒褐色砂質土(10YR3/2) As-B多く明黄褐色土含む。

(5号ピット)

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 明黄褐色土少量。As-B多し。  
2 褐灰色土(10YR4/1) As-B、明黄褐色土多量に含む。

(6号ピット)

1 黒色土(10YR2/1) しまり弱い。粘質あり。  
2 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土含。締りやや弱。粘有。  
3 灰黄褐色土 黄褐色土。As-B多く含む。締まり、粘質弱。

(7号ピット)

1 黒褐色土(10YR3/2) As-B少量。締まりあり。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) As-B多。黄褐色・褐灰色土含。  
3 にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-B少量。締まり弱い。  
4 褐灰色土(10YR4/1) As-B含む。締まりあり。

(9号ピット)

1 褐灰色土(10YR4/1) As-B、黄褐色土含む。  
2 明黄褐色土(10YR6/6) 大ブロック主体 As-B混入。  
3 灰黄褐色土(10YR4/2) As-B少量。黄褐色土等含む。  
4 黄褐色土(10YR5/6)

(10号ピット)

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰黄褐色土・黄褐色土粒含む。  
2 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土粒、As-B少量含む。

(11号ピット)

1 褐灰色土(10YR4/1) As-B多い。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2)褐灰色土(10YR4/4)含む。

(12号ピット)

1 灰黄褐色粘質土 黒褐色土。にぶい黄褐色土混入。  
2 黒褐色土(10YR3/1) にぶい黄褐色・灰白色土含む。  
3 灰褐色粘質土(7.5YR4/2) にぶい黄褐色土混入。  
4 1に似るがにぶい黄褐色土入らない。

(13号ピット)

1 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 黒褐色土粒混入。

(33号ピット)

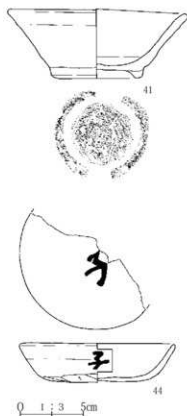
1 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土、黄褐色ローム混入。  
2 黒色土(10YR2/1) 黄褐色ローム、底部に明オリーブ灰色シルト質土(5G7/1)混入。粘性弱。



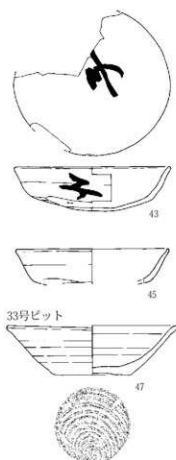
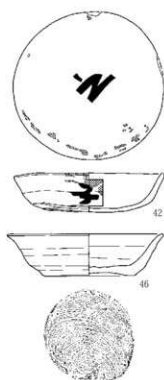
第41図 1区3面の土坑とピット



8号土坑



11号土坑



第42図 1区3面の土坑・ピットの出土遺物

号ピットから須恵器碗(47)が出土した。

なお、3～12号ピットからの出土遺物はなかった。

**所見** 柱痕跡を確認した、3・7・10・12号ピットは柱穴として使用されたものと思慮されるが、いずれに対しても建物あるいは柵を想定することはできなかった。

また、他の土坑、ピットの掘削意図は特定できなかった。

なお、その時期は、出土遺物と覆土の観察所見から、7号土坑は概ね平安期、8号土坑は9世紀第4四半期～10世紀第1四半期、11号土坑は9世紀後半、18号土坑は

律令期の所産と判断された。また、覆土の観察所見から6・12・13号ピットは概ね平安期以前、3～5・7・9・10号ピットは天仁(1108)元年以降の所産と判断されるが、As-Bの含有量の多い4・5・7号ピットはAs-B降下から時間が経たない時期の所産であろうと推察される。

## 21. 1区南西張出部

**概要** 1区3面張出部ではAs-B下面を確認したが、凹凸が見られるだけで、遺構を確認することはできなかった。

(4) 1区4面の遺構と遺物

1. 1区4面の概要

1区4面は、東部中央と北寄りの微高地部と、中・西部と東部南寄りの低地部に分かれる。

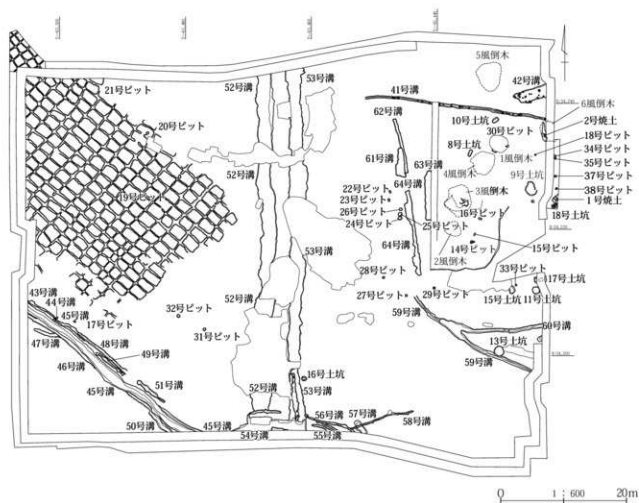
このうち微高地部にはロームが現れていたが、ここに調査した遺構は、2面から4面の遺構が調査面を下げる中で、順次漸移的に確認されたため、各面を明確に峻別することはできなかった。また、下位層に確認された遺構と、中位層で明らかに律令期に属すると判断された住居址と、出土遺物が、律令期に属すると判断された掘立柱建物、土坑、ピットを取り上げて報告する。報告する遺構は溝2条、土坑7基、ピット24基がある。また、風倒木6基も確認した。

なお、弥生・縄文時代の遺物包含層も出土したが、本節6項(293・294頁)に報告する。

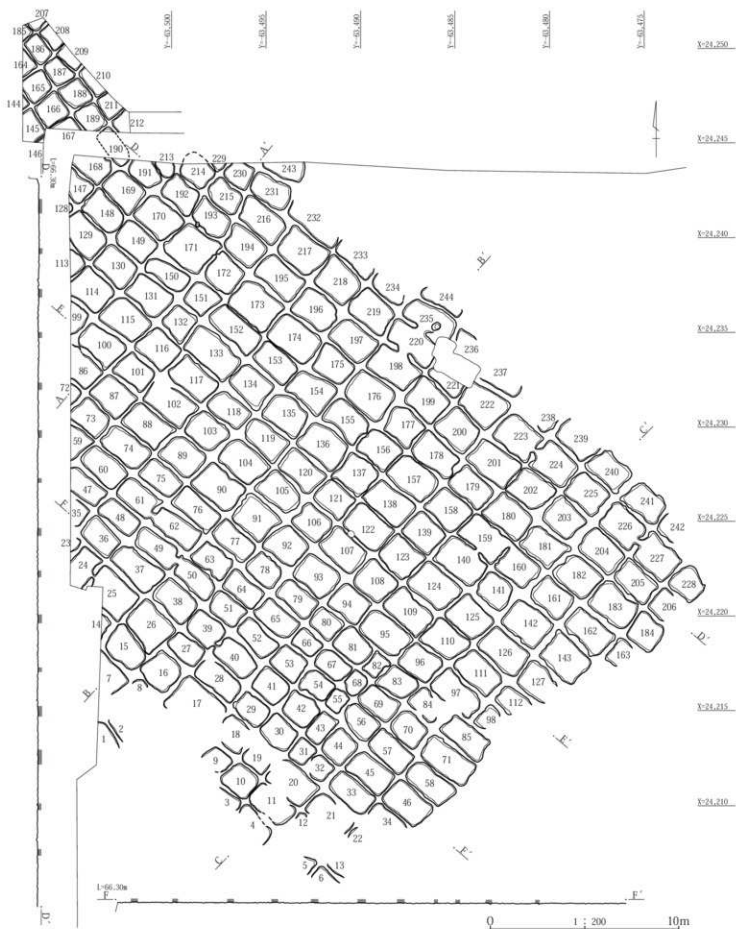
低地部の遺構は、Hr-FAで覆われた6世紀初頭(あるいは5世紀末)の面、あるいはAs-B堆積層下の黒色土を排除した面で確認した遺構を報告する。確認できた遺構は、北西部で水田区画の一部と、南西部にこれと走行が一致する溝9条、中部で南北に調査区を横断する溝2条、中南部に溝6条、そして東部の微高地部との境に掘削される溝6条、土坑2基があった。なお、各溝の勾配は無いが、あってもその傾斜は僅かであった。

また微高地部では、前述のように東南部が近世段階で削平されていたため遺構は確認できなかったが、中東部から北東部にかけて遺構が確認された。調査された遺構には、竪穴住居2軒、溝13条、焼土遺構2基があった。

なお、南西隅張出部は、調査範囲が狭いため、安全面から4面まで下げることはできなかった。

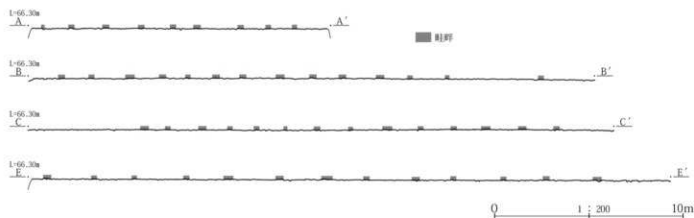


第43図 1区4面全体図



第44図 Ir-FA下水田

### 第3章 発見された遺構と遺物



第44図の2 1区Hr-FA下水田

#### 2. Hr-FA下水田(第44図、Pl.17・18)

**概要** Hr-FA下水田は、いわゆる、小区画水田である。

1区西部に確認された、椋名山の6世紀初頭の噴火に伴う降下火山灰、Hr-FAで覆われた水田址である。北西隅部から南東方向にかけて帯状に確認されたが、本水田址の北西側は調査区外に延びており、北東及び南西の両側と南東側は確認できなかった。

この遺存状態から推して、本水田址は、北東・南西方向に傾斜面を持つ、谷地形の中心部に設置されていたものと思量される。

また、本水田址の南西隅から5m程隔たった位置に、43・45・46・48～50号溝の溝群が本水田址に並走してある。

**位置** 本水田址は上述のように1区北西隅から中西部に位置する。全体としては、205～251-471～507グリッドに所在する。個々の水田面の位置は、表#に記す。

**重複** 本水田址は単独で在り、他遺構との重複は認められなかった。

**規模** 全体北西-南東長:46.8m 北東-南西幅:30.2m。

個々の水田面の規模は、表3に記す。

**覆土** Hr-FA火山灰で埋没する。

**所見** 本水田址は小区画水田である。

全体的軸線方向はN47°Wを向く。北西方向が高く、南西方向に低く、勾配は0.11%を測る程度で、ほとんど平坦である。

北西-南東方向の畦が108～231cm、平均168.03cmにほぼ並行に設置され、この畦の間を垂直方向に、102～332cm、平均230.144cm程の間隔で畦を設けて、障子状の畦群を形成し、これらの畦群に囲まれた水田面を作っ

ている。

水田面は長方形のプランを呈し、その北西-南東方向の長さは0.73～2.25m、平均1.96m、北東-南西方向の幅は0.72～2.05m、平均1.31mを測り、その面積は0.83～4.09㎡、平均2.57㎡を測る。

北西-南東方向に走る畦の幅は、14～85cm、平均35.43cm、北東-南西方向に走る畦の幅は13～78cm、平均35.31cmを測る。

水田面は、確認範囲の北西部及び南西部で小さく、中東部で大きくなる傾向がある。

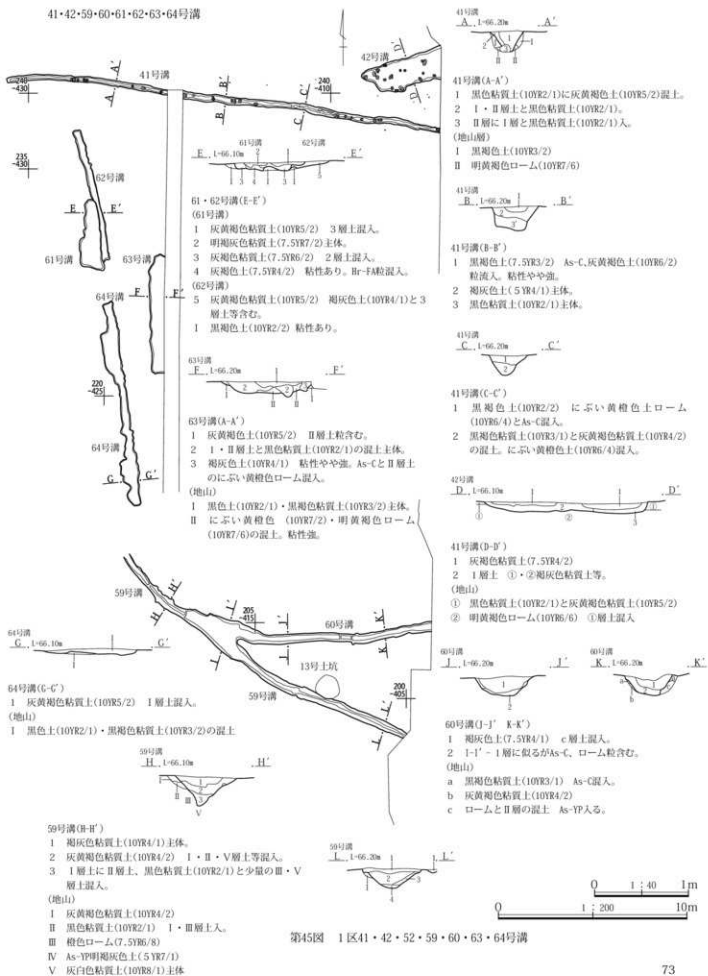
水口として認定されるのは、共に北西-南東方向に連なる水田面39と40、171と172の間である。共に、通水は北西側から南東側と判断される。水田面39と水田面40の間の水口は、やや西寄りに開口し、水口の上幅は17cmを測るが、水田面39と水田面40の比高差は現況で1cmを測るに過ぎない。水田面171と水田面172間の水口はやや西東寄りに開口し、水口の上幅は10cmを測るが、水田面171と水田面172の比高差も、現況で1cmを測るに過ぎない。なお、隣接する水田面198と水田面220、水田面220と水田面235の間も開口しているが、開口幅が広過ぎるため、水口とは見做されないものとみられる。

**遺物** 僅かな土師器が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 本水田址は、本水田址を覆うテフラ(Hr-FA)から推して、6世紀初頭の所産と判断される。

また本水田址の南西に並走してある、43・45・46・48～50号溝は本溝に対する旧水路、あるいは排水路であったものと判断される。

41・42・59・60・61・62・63・64号溝



第45図 1区41・42・52・59・60・63・64号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物



59・60号溝(1-1')

(60号溝)

1 60号溝K-K' - 1層に同じ。

2 60号溝K-K' - 2層に同じ。

3 褐灰色土(7.5YR6/1) 2層土と1層土粘混入。砂質、粘性有。

(59号溝)

4 石灰色土(2.5YR6/1) 砂質、粘性有。II層土粘混入。

5 褐灰色土(7.5YR5/1) I・6層土、褐灰色粘質土(10YR4/1)等混入。

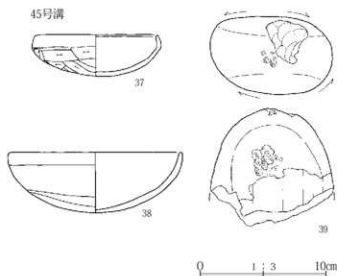
6 ぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 粘性あり。I層土多く混入し、浅黄褐色粘質土(10YR8/4)、II層土粘混入。

(地山)

I 黒色粘質土(10YR2/1) As-Cは見えず。

II 明黄褐色ローム(10YR7/6) 粘性あるもやや砂質。

III H-H-V層に同じ



第46図 1区59・60号溝土層断面と45号溝出土遺物

#### 3. 41・42号溝(第45図、PL.18)

**概要** 41・42号溝は、1区の微高地部付近にある。41号溝は低地部の微高地寄りから微高地を横断し、東側は調査区外に延伸する。42号溝は東側は調査区外に出ていて、短い区間を調査したに過ぎない。

**位置** 41・42号溝は1区北東部に在り、41号溝は237～241-423～451グリッド、42号溝は240～243-423～428グリッドに位置する。

**重複** 両溝とも単独で在り、他遺構との重複は認められなかった。

**規模** 41号溝 残長：28.5m 幅：38cm 深さ：20cm

42号溝 残長：5.6m 幅：180cm 深さ：12cm

**覆土** 41号溝は黒色粘質土、黒褐色土、明黄褐色ローム、42号溝は灰褐色・黒色粘質土、明黄褐色ロームで埋没する。

**所見** 上述のように41号溝の走行は西端で時計回りに緩やかな弧状を呈し、中・東部は全体としては直線的ながら、振幅の多くない蛇行を見せる。また41号溝の走行は西端ではN85°Eを向くが、中・東部では全体としてN81°Wを向く。掘削形態は壁面が立つ箱型状を呈する。勾配は東高西低で、0.36%である。

一方、52溝の走行は直線的で、その走向はN74°Eを向く。掘削形態は箱型状を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 両溝共に流水の痕跡はなく、掘削意図は明らかにできなかった。しかしながら、41号溝は区画溝の可能性

が考慮される。

また時期は特定できなかった。

#### 4. 59～64号溝(第45・46図、PL.20)

**概要** 59・60・61・62・63・64号溝から成る本溝群は、低地部北東部、微高地部との境付近に掘削される溝群である。このうち59・60号溝の西端は1区内に始まり、東端は調査区外に出た後、59号溝は東接する2区の30号溝と、60号溝は同じく2区31号溝に接続するものと判断される。また61～64号溝は1区内で起結するが、62号溝と64号溝は同一の溝の可能性を有し、64号溝の北部と南部で西側に拡張する箇所は61号溝の延長箇所の可能性を有する。

**位置** 59・60号溝は1区南東部に位置し、61～64号溝は1区北東部に位置する。59号溝は197～209-426～443グリッド、60号溝は203～205-423～439グリッド、61号溝は228～232-444～446グリッド、62号溝は228～237-444～447グリッド、63号溝は221～229-441～442グリッド、64号溝は212～226-442～445グリッドに位置する。

**重複** 59号溝と60号溝、61号溝と62号溝は重複するが、59号溝と61号溝がそれぞれ新しい。その他の溝は単独で在り、他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** (59号溝) 長さ：(22.5)m 幅：60cm 深さ：35cm

(60号溝) 長さ：(16.0)m 幅：50cm 深さ：24cm

(61号溝) 長さ：4.8m 幅：110cm 深さ：7cm

(62号溝) 長さ: 8.8m 幅: 48cm 深さ: 6cm

(63号溝) 長さ: 7.9m 幅: (90) cm 深さ: 10cm

(64号溝) 長さ: 13.6m 幅: 98cm 深さ: 6cm

**覆土** 59号溝は灰黄褐・褐灰・黒褐色粘質土等、60号溝は灰黄褐・褐灰色粘質土等で、61号溝は灰黄褐・明褐・灰褐色粘質土等で、62号溝は灰黄褐色粘質土で、63号溝は灰黄褐色粘質土や褐色土等で、64号溝は灰黄褐色土で埋没する。何れの埋土も流水の痕跡は見られない。

**所見** 59号溝はN36°Wの方向で現れ、反時計回りに弧状に走行して東端でN69°W方向を向く。本溝の掘削形態は葉研堀状を呈し、上述のように東接する2区30号溝への接続が想定される。

60号溝の西端は59号溝から分岐するように在り、西端の走向はN68°Wを向き、調査区東端の走向はN82°Wを向く。全体的走向は反時計回りの弧状を為すものの、蛇行しており、掘削形態は箱堀状を呈するものの、底面の横断面形は弧状を呈する。

61号溝は一部が確認されたに過ぎないが、走向はN2°Wを向き、走行は直線的であるが、64号溝の南部と北部の西方への拡張箇所が本溝に含まれるとするならば、本溝は蛇行していることになる。本溝の掘削形態は箱堀状を呈する。

62・64号溝は一条の溝として記載するが、走向は北端でN16°W、南端でN6°Wを向くが、その走行は極弱く屈曲する逆く字状を呈し、掘削形態は箱堀状を呈する。

63号溝短い区間で確認されたに過ぎず、また東側が試掘トレンチで壊されていて全容は把握できなかったが、走向はほぼ観陸を向き、走行は直線的で、62・64号溝を合せた全長は25.1mを測る。掘削形態は箱堀状を呈する。

なお、何れの溝も走行方向の底面は平坦で、勾配を確認するには至らなかった。

**遺物** 59・61～64号溝からは土師器片、60号溝からは土師器・須恵器片が出土したが、何れも出土量は少量であり、図化するものはなかった。

**所見** 59～64号溝は、低地部と微高地部を画する溝であったと思慮されるが、覆土の観察からは流水の痕跡は確認されず、掘削意図を特定することはできなかった。

また各溝の時期は、概ね古墳時代から律令期の所産として把握されるものの、その時期を特定することはできなかった。

5. 43～51号溝(第47図、PL.19)

**概要** 43・44・45・46・47・48・49・50・51号溝から成る本溝群は、1区南西部にある。このうち45・46号溝は西・南両共に調査区外に抜けており、43号溝は西側が、50号溝は南側が調査区外に出ていたが、その他の溝は1区内に起結する。

また、位置的に48号溝と51号溝は同一の溝である可能性が考慮される。

**位置** 本溝群は1区南東部にまとまって位置する。43号溝は202～208-496～504グリッド、44号溝は205～206-500～501グリッド、45号溝は187～208-478～504グリッド、46号溝は187～206-477～504グリッド、47号溝は205～206-499～504グリッド、48号溝は197～206-489～497グリッド、49号溝は196～200-489～494グリッド、50号溝は187～196-482～489グリッド、51号溝は192～195-483～487グリッドに位置する。

**重複** 43号溝は44・48号溝と、44号溝は46号溝と、45号溝は44・46・47・51号溝と、46号溝は47号溝と、48号溝と49号溝とが重複する。このうち44号溝は43号溝より、45号溝は46・50号溝より、47号溝は45・46号溝より新しいことを確認したが、その他は新旧関係を特定することはできなかった。

**規模** 43号溝 長さ:(11.2)m 幅:42cm 深さ:3cm

44号溝 長さ:(1.0)m 幅:40cm 深さ:3cm

45号溝 長さ:(33.6)m 幅:160cm 深さ:25cm

46号溝 長さ:(33.4)m 幅:65cm 深さ:13cm

47号溝 長さ:(45.0)m 幅:50cm 深さ:8cm

48号溝 長さ:101.0m 幅:56cm 深さ:11cm

49号溝 長さ:56.0m 幅:48cm 深さ:8cm

50号溝 長さ:(10.0)m 幅:75cm 深さ:21cm

51号溝 長さ:5.5m 幅:60cm 深さ:4cm

**覆土** 43号溝は砂質土多量に含む灰黄褐色土、44号溝はにぶい黄褐色粘質土、45号溝は灰黄褐色・にぶい黄褐色土で埋没するが、上位に砂質土、下位に砂礫が含まれる。46・47号溝は砂質土を含む灰黄褐色土等、48号溝はにぶい黄褐色・灰黄褐色・黒褐色土等、49号溝は灰黄褐色土、下位に砂を少量含む黒褐色粘質土等で、50号溝は明黄褐土やにぶい黄褐色・灰黄褐色砂質土等、51号溝はにぶい黄褐色土等で埋没する。このうち43・45～47号溝の埋め土は洪水層土と認められたもので、特に45号溝の埋土

は流水の痕跡示すものである。

**所見** 43号溝はN33°Wの方向で走行するが、その走行は蛇行を見せる。その掘削形態は、西側は箱堀状を呈し、東側は菜研堀状を呈する。勾配は0%である。

44号溝は、本溝群中で走向の異なる溝の1条である。走向はN26°Eの方向を向き、その走行若干反時計回りの弧状を描く。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底である。

45号溝は両側が調査区外にあるため、全容は詳らかでない。その走向は西側ではN33°Wを向き、東側ではN27°Wを向く。走行は東部で少し振幅が大きい箇所も見られるが、全体に緩やかに蛇行する。掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は丸底状を呈する。本溝の勾配は0.25%で、東に向かって低い。

46号溝も両側が一部が確認されたに過ぎないが、西部は45号溝の南縁に沿い、東部は同溝の北側に沿って確認された。走向は西端でN31°Wを向き、時計回りに弧状に13m程東進して、走向をN51°Wに向いた辺りで45号溝と重なり、11.5m程確認できなくなるが、滅失区間手前からほぼ直線上に、再び現れ、この箇所の走向はN48°Wで、逆時計回りに緩やかな弧状を描いて東進し、N71°W方向を向いて、調査区外に出る。掘削形態は箱堀状を呈するが、部分的に菜研堀状を呈し、底面の横断面形は丸底状を呈する。本溝の勾配は0.19%で、東に向かって低い。

47号溝は短区間が確認されたに過ぎず、調査区内に現れて、東部が45号溝に壊され、以東の状態は確認されなかったため、全容は詳らかでない。走行は転倒したく字状を呈し、走向は、西側はN68°W、東側はN1°Eを向く。掘削形態は箱堀状で平底を呈し、勾配は無い。

同一の溝の可能性を有する48・51号溝は一括で報告する。48号溝は43号溝の北壁に現れ、東端で失われる。51号溝はその延長線上2.1m地点に現れて短区間で起結する。その走行は弱く屈曲するが、西側はN51°W、東側はN47°Wを向く。51号溝は極弱い逆時計回りの弧状の走向を見せるが、全体としての走向はN53°Wを向く。共に掘削形態は箱堀状を呈するが、48号溝西半部では4～9cmの比高差で走行方向での凹凸が見られるが、東半部及び51号溝は平坦で、全体として勾配は測定不能である。

49号溝は45・48溝の間に在って、両溝に並走してある。走行は多少蛇行する様相を呈するが、確認範囲が短いため、全容は明らかにできない。全体の走向はN51°Wを向く。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底である。

50号溝は45号溝北壁に現れ、2.5m程東進して、45号溝と重複し、1.6m程東で、今度は45号溝の南壁に現れ、8.4m程東進して調査区南側に抜ける。走向は全体に蛇行が見られ、走向は西端でN50°W、東端で45°Wを向く。掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は弱く湾曲する。勾配は0%に近い。

**遺物** 45号溝からは杯(36・37)等の土師器や須恵器片、敲石(38)、46号溝からは土師器片、50号溝からは僅かな土師器片と不明鉄製品(39)が出土したが、他の溝からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 44号溝の掘削意図は不明であるが、他は、走向が上述のHr-FA下水田に近似し、43・45～47号溝は洪水層土で埋没し、その走行に蛇行が見られ、45号溝や48号溝に流水の痕跡が認められたため、水路である可能性が考慮される。またこれらは比較的直線的に掘削されたものもあるが、43・46・50号溝は蛇行が明確で、自然の通水痕に沿って掘削されたものと想定される。

また44号溝を除く各溝は、Hr-FA下水田に伴うものとして、概ね6世紀初頭の所産と判断される。また、44号溝は古墳時代から律令期の所産として把握されるに過ぎなかった。

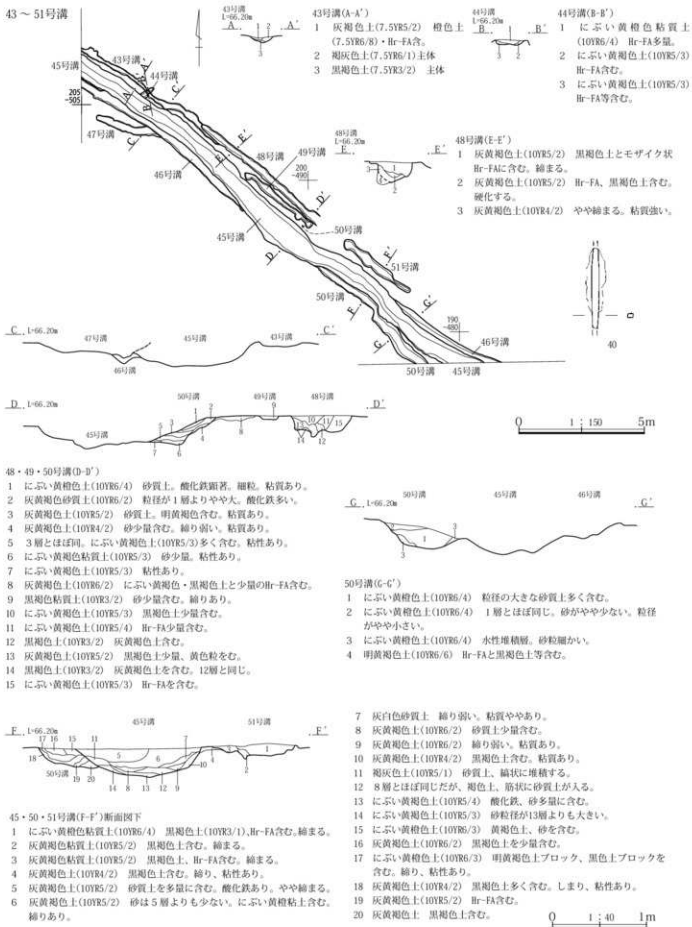
#### 7. 52・53号溝(第48図、PL.19)

**概要** 52・53号溝は、並走してほぼ南北に走行する大型の溝遺構である。両溝共に北端が調査区外に在り、調査区内の数カ所が、現代の攪乱によって壊されており、また、南端が54・56号溝と重複するため全容は詳らかにできなかった。また、上位が削平されて、遺存状況も良くなかった。

52・53号溝は、並走する為、同じ機能を持っていたものと判断される。また53号溝の西肩付近には3面のAs-B下水田の大畔がやはり南北に在ったことから、2面の大畔と同様の土地区画の認識に基づいて掘削された溝遺構であると判断される。

**位置** 52・53号溝は1区中部にある。52号溝は191～244-465～468グリッド、53号溝は189～245-460～463





第47図 1区43・44・45・46・47・48・49・50・51号溝と50号溝出土遺物

グリッドに位置する。

**重複** 52号溝は62(W)溝と重複し、恐らく54号溝とも重複する。また、53号溝は54号溝と重複する。52号溝と62号溝との新旧関係は特定できなかったが、53号溝が54号溝に切られていることから、52号溝は54号溝よりも古いものと想定される。

**規模** (52号溝) 長さ:(53.5)m 幅:42cm 深さ:3cm

(53号溝) 長さ:(56.0)m 幅:40cm 深さ:3cm

**覆土** 52号溝はにぶい褐色・褐灰色・灰褐色粘質土等で埋没する。一方、53号溝は黒褐色粘質土やにぶい黄褐色土等で埋没する。また両溝共に覆土にHr-FAが混入する。

**所見** 上述のように52号溝と53号溝は、芯々距離で5~6.5m隔てて在り、両溝の走向はほぼN0°で、それらの走行は比較的直線的であるものの、極緩やかな蛇行を見せる。

両溝共に掘削形態は箱型状を呈するが、底面は平底状を呈しており、細かい凹凸が見られる。また共に北高南低で、その勾配は52号溝は0.04%、53号溝は0.22%である。

**遺物** 52号溝からは少量の土師器片が出土したが、図示すべきものはなかった。また53号溝の出土遺物は得られなかった。

**所見** 上述のように、52・53号溝は3面の大群の下に在り、並走してあること、また埋土に水路の痕跡は見られなかったこと等から、大群あるいは道路の側溝としての性格が想定される。

また時期は特定できなかったが、その走向から推して、概ね律令期の所産と判断される。

#### 6. 54 ~ 58号溝(第48図、PL.19・20)

**概要** 本溝群は1区中南部にある54・55・56・57・58号溝から成る。

このうち54号溝が比較的規模(幅員)が大きいものの、他の溝は近似した規模を示している。

54号溝は両側がいずれも南側調査区外に、55~57号溝は東寄りか南側調査区外に出る。57号溝の西端は56号溝が、58号溝の西側が57号溝から、それぞれ分岐するように在り、西側端部は確認できなかった。

また、56号溝は途中で空白部分があり、54号溝も途中で攪乱により失われている。

**位置** 本溝群は1区中南部にまとまってある。54号溝は188~190-460~472グリッド、55溝は188~189-456~469グリッド、56溝は188~190-455~460グリッド、57溝は187~189-463~468グリッド、58溝は188~191-443~453グリッドに位置する。

**重複** 54号溝は56号溝と、56号溝の西部(56溝W)は52溝と、56号溝の東部(56溝E)は57号溝と、そして57号溝は58号溝、58号溝は土坑状の掘り込みと重複する。このうち54号溝が53号溝を、56号溝(W)が52号溝を、58号溝が土坑状の掘り込みを切る他は、新旧関係を特定することはできなかった。

**規模** (54号溝) 長さ:(11.5)m 幅:144cm 深さ:32cm

(55号溝) 長さ:(3.5)m 幅:38cm 深さ:17cm

(56号溝) 長さ:(14.9)m 幅:38cm 深さ:11cm

(57号溝) 長さ:(2.9)m 幅:45cm 深さ:7cm

(58号溝) 長さ:(10.6)m 幅:25cm 深さ:8cm

**覆土** 54号溝は褐灰色砂質土、青灰色・明青灰色砂等、55号溝の上位は灰黄褐色細砂質土、下位は褐灰色川砂、56号溝の上位は褐灰色砂質土、下位は褐灰色土等、57号溝は褐灰色シルト質土、にぶい黄褐色粘質土、58号溝は灰白色細砂質土、灰黄褐色・にぶい黄褐色土で埋没している。

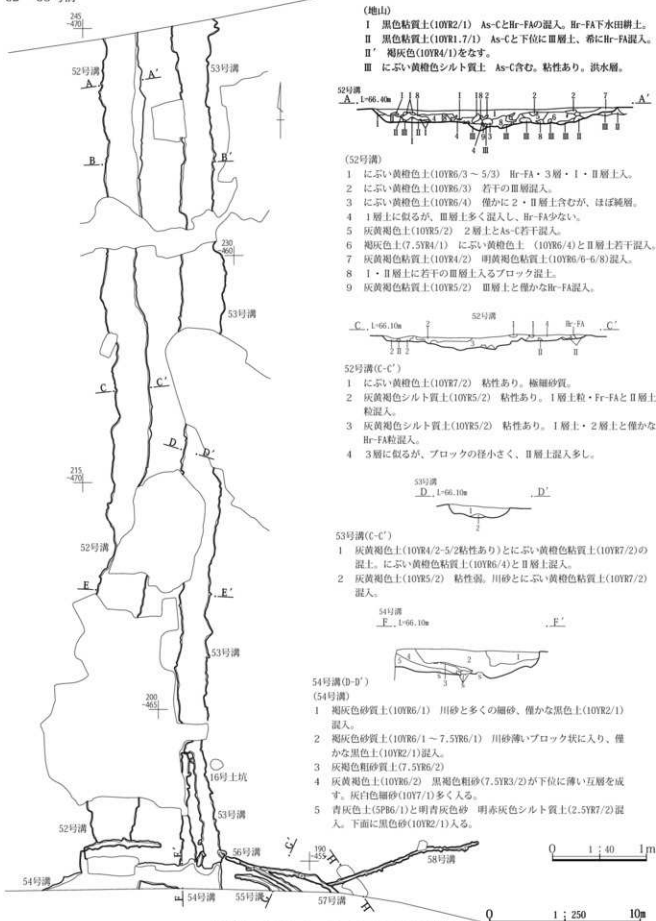
**所見** 54号溝は、その西側がN70°Eの方向調査区に入り、弧状の走行でN86°Wに走行を転じ、東端でN2°Wの走向に転じて、直線的に南側調査区に出る。掘削形態は箱型状を呈し、勾配は西高東低で10.5%を測る。

55号溝の西端はN87°Eの走向を示し、時計回りに弧状の走行を呈して南側調査区に抜ける。調査区南端での走向はN53°Wを向き、掘削形態は箱型状を呈する。勾配は測定されない。

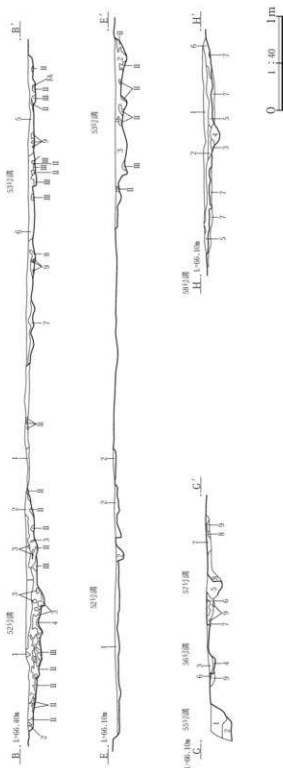
56号溝は東西に分かれるが、その走行は時計回りの弧状を呈し、その走向は、西側(56号溝W)の西端でN80°E、東端でN87°W、東側(56号溝E)の西端ではN80°W、東端の南側調査区際以西はN60°Wを向き、その掘削形態は箱型状を呈するが底面は凹凸が見られ、全体として勾配は測定されない。

57号溝の走行は、西半では直線的、東半では時計回りに弧状を呈する。その走行は56号溝から分岐する西端部では、N81°Wを向き、調査区外に出る東端部の南壁際

52～58号溝



第48図 1区52・53・54・55・56・57・58号溝



第48図の2 1区52・53・54・55・56・57・58号溝

ではN15°Wを向く。その掘削形態は箱塚状を呈し、底面の横断面形は丸底状を呈する。勾配は測定されない。

57号溝の走行は、中・西部では極弱い反時計回り、東部は反時計回りの弧状を呈する。その走行は西端ではN73°E、中東部ではN78°Eから屈曲してN90°Eに転じ、東端部ではN72°Eを示す。掘削形態は箱塚状で、底

52・53号溝(B-B')

(52号溝)

- 1 褐色粘質土(10YR4/1) 僅かなHr-FAと下位面に2層土混入。
- 2 褐色粘質土(7.5YR6/1) Hr-FAとⅢ層土、As-C混入。
- 3 Ⅱ層土 2層土溶け込むように混入。
- 4 Ⅲ層土中心にⅡ層土溶け込むように混入。

(53号溝)

- 6 黒褐色粘質土(2.5Y3/1) 2層土Hr-FA、Ⅱ層土・As-C混入。
- 7 Ⅲ層土 Ⅱ層土とHr-FA混入。
- 8 Ⅲ層土にⅡ・Ⅰ・Hr-FA多く入る。
- 9 Ⅱ層土にⅢ層土若干混入。3層土に似た感じ。

52・53号溝(E-E')

(52号溝)

- 1 Ⅱ・2・灰黄褐色土(10YR5/2)の混土。粘性あり。Hr-FA混入。
- 2 灰黄褐色土(2.5Y6/2) 粘性あり。Hr-FA・Ⅲ層土混入。

(53号溝)

- 3 灰黄褐色土(10YR5/2)と2層土の混土。Ⅰ・Ⅱ層土、Hr-FA・Ⅲ層土多く含む。

55・56・57号(G-G')

(55号溝)

- 1 褐色細砂質土(10YR6/1)と黄灰色細砂質土(2.5Y6/1)が3cm厚程で互層を成す。9層土混入。

(56号溝)

- 2 褐色土川砂層(10YR6/1) Hr-FA・Ⅰ・9層土混入。

(57号溝)

- 3 褐色砂質土(7.5YR5/1) 5・9層土と若干のHr-FA混入。
- 4 褐色土(10YR4/1) 色調暗い。粘性あり。5・6層土混入。

(57号溝)

- 5 褐色シルト質土(7.5YR6/1) 6・9層土混入。締り有。粘性弱。

(地山)

- 6 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土(10YR4/1)・As-C混入。

- 7 にふい黄褐色土(10YR7/2) 若干の9層土粒含む。

- 8 Hr-FA (橙色土7.5YR6/8)

- 9 黒色粘質土(10YR2/1) 部分的に6・7層土・As-C混入。

58号溝(H-H')

- 1 褐色土(10YR6/1) 粘性やや弱く細砂質。5層土等混入。

- 2 4・7層土の混土。

- 3 褐色土(7.5YR5/1) 粘性ややあり。細砂・4層土粒混入。

- 4 灰白色細砂質土(5Y7/1) 酸化鉄と7層土小ブロック粒混入。

- 5 Ⅰ層土とHr-YP (黄褐色土10YR7/8)のブロック混土。7層土粒混入。

- 6 褐色土(7.5YR4/1) 粘性あり。5層土ブロックと7層土粒混入。

(地山)

- 7 黒褐色土(10YR3/1) 5層土に6層土混入。As-C入る。地山層。

面の横断面形は丸底状を呈する。勾配は測定されない。

**遺物** 54・56・58号溝からは少量の土師器片等の出土があったが、図示するものはなかった。55・57号溝の出土遺物は得られなかった。

**所見** 58号溝を除く本溝群各溝は、北に湾曲する近似した走行を見せる。また54・55号土坑は覆土の砂から流水



第49図 1区1・2号焼土

の痕跡が窺われ、また56～58号土坑の覆土も洪水に起因する土壌と認められるものである。また56号溝の底面は流水の痕跡を示唆する凹凸が見られた。勾配が確認されたのは、54号溝のみであるが、54～57号溝は自然の流路に倣った走行を有する水路の可能性が考慮され、58号溝も同様の用途を有する可能性が有る。

また各溝は、概ね古墳時代から律令期の所産として把握することができるが、その時期を特定することはできなかった。

### 8. 1・2号焼土(第49図、PL.21)

**概要** 1区中・北東の微高地部(ローム露出部)の4面確認面において、焼土面2箇所を検出した。

**位置** 1号焼土遺構は1区中東部に在って、224-424～425グリッドに位置し、2号焼土遺構は1区北東部に在って、234～235-423～424グリッドに位置する。

**重複** (1号焼土)遺構単独である。

(2号焼土)遺構は6号風倒木痕と重複するが、同風倒木痕よりは新しい。

**規模** 1号焼土 径：53×46cm

2号焼土 径：68×65cm 深さ：20cm

**覆土** 1号焼土遺構は、焼土を含む黒褐色土等で覆われている。

また、2号焼土遺構は、焼土を含む褐色土あるいは黒褐色土等で覆われている。

**所見** 1号焼土遺構は東西38cm、南北38cmの範囲で、焼土面の広がりか確認された。

2号焼土は、楕円形プランで丸底状の底面を有する土坑状の掘り込を有し、その東部から北東部にかけて長さ57cm、幅24cmを測る範囲で、焼土面が見られた。

**遺物** 1・2号焼土遺構共に、出土遺物を得ることはできなかった。

**所見** 1・2号焼土遺構共に、燃焼の目的を特定することはできなかった。

廃棄後の埋没状況等も、十分に把握することができなかった。

また、その時期もおおよそ古墳時代から律令期の所産として把握されるに過ぎなかった。

### 9. 1区4面の土坑(第50図、PL.22・23)

**概要** 1区4面では9・10・12・13・15～17号土坑の7基の土坑を調査した。

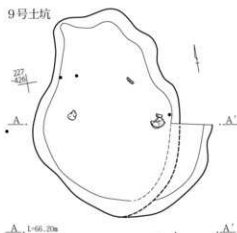
以下4面の土坑を一括して報告する。

**位置** 9～10号土坑は北東部の微高地(ローム露出部)に、12～13・15・17号土坑は中・南東部にある。

各土坑の所在グリッドは表#参照のこと。

第3章 発見された遺構と遺物

9号土坑



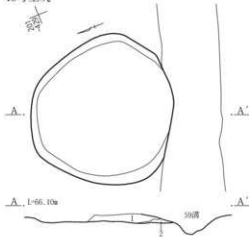
(土坑覆土)

1 黒褐色粘質土(10YR2/2) 黒色粘質土(10YR2/1)、明黄褐色ロームブロック(10YR6/6)若干混入。

(地山)

1 灰褐色粘質土(7.5YR4/2) ローム含む。

13号土坑



(13号土坑)

1 褐灰シルト質土(10YR3/2) 黄褐色ローム(10YR7/8)にぶい黄褐色土(10YR7/4)入る。(水平堆積有)

2 黒色土(10YR2/1) 黄褐色ローム(10YR7/8)混入。

3 明オリーブ灰色シルト質土(5G7/1) 粘性弱(地山)

(17号土坑)

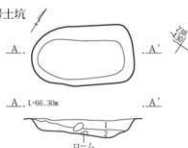
(自然堆積層と耕土)

- 1 灰色細砂質土(5Y5/1)
- 2 褐色細砂質土(10YR6/1) As-A, Hr-Fe混入。
- 3 明黄褐色シルト質土(10YR6/6)とAs-Aの混土。
- 4 明黄褐色土(2.5Y7/6) 粘性有。層下(5層)上入。
- 5 褐色土(10YR6/1) 粘性有。4・6層上等入る。
- 6 褐色粘質土(10YR4/1~5/1) 川砂と5・7層若干。
- 11 黒色粘質土(10YR2/1) As-C混入。
- 12 灰黄褐色土(10YR5/2) As-Cと上に11層、下に13層入。
- 13 明黄褐色ローム(10YR6/6) 粘性有。
- 14 As-YF 浅黄褐色(10YR8/3)

(17号土坑覆土)

- 7 12層上に6・11・13層上入るブロック混入。
- 8 11・12・13層上と褐色土(10YR6/1)の混土。
- 9 11・12・14層上の混土。
- 10 11層上に若干の12層上入る。

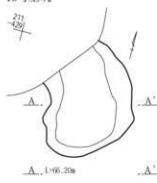
10号土坑



10号土坑

- 1 黒色粘質土(10YR2/1) にぶい黄褐色土(10YR6/3)小ブロック少量混入。
- 2 暗褐色粘質土(10YR3/3)

15号土坑

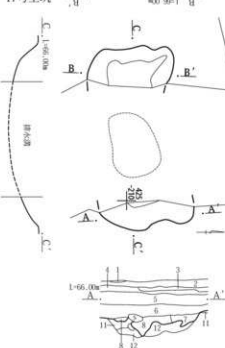


15号土坑

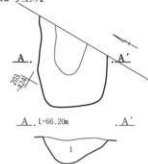
- 1 黒褐色土(10YR2/2) ローム含む。締り有。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム多量。締り有。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム多量。黒褐色土含。

(1<2<3の順で粘質強い)

17号土坑



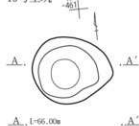
12号土坑



12号土坑

- 1 褐灰色粘質土(7.5YR5/1) 褐色粘質土(10YR4/6)小ブロックと若干の明黄褐色ローム(10YR6/6)、As-C混入。

16号土坑

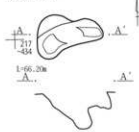


(16号土坑)

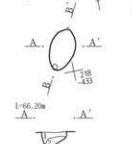
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) As-C混入し、ローム小ブロック含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) にぶい黄褐色土(10YR7/4粘性あり)、褐色粘質土(10YR5/1)ブロック多く入り、黄褐色(10YR7/8)ロームブロックも混入する。
- 3 黒褐色土(10YR3/1) 明赤褐色土(5YR5/8粘性あり)と2層土構成土小ブロック混入。
- 4 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 明黄褐色土(10YR6/6, 6/8)ローム小ブロック混入。粘状に酸化鉄比有。
- 5 黒褐色土(7.5YR3/1) 明黄褐色ローム、明赤褐色土ローム(5YR5/6)にぶい黄褐色土(10YR4/3)小ブロック混入し灰色砂(5R6/0)も入る。

第50図 1区4面の土坑群

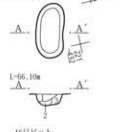
14号ピット



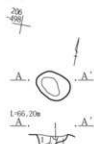
15号ピット



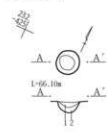
16号ピット



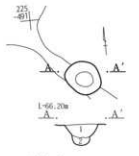
17号ピット



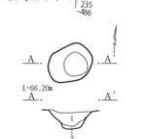
18号ピット



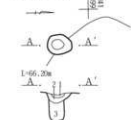
19号ピット



15号ピット



16号ピット



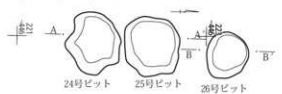
17号ピット



18号ピット



24号・25号・26号ピット



21号ピット



22号ピット



23号ピット



- 19号ピット  
1 黒灰色粘質土 炭水層  
2 黒灰色土 FA、黒褐色土

- 20号ピット  
1 灰黄褐色粘質土 黒褐色土  
2 灰黄褐色土 黒褐色土少量  
3 黒褐色土 粘質土

- 21号ピット  
1 灰黄褐色土 FA含む、粘り強、粘有。  
2 明黄褐色土 灰黄褐色土含、粘り強有。  
3 灰黄褐色土 明黄褐色土多、粘・粘強。

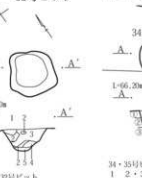
- 22号ピット  
1 黒褐色土 明褐色土少量  
2 明褐色土 黒褐色土少量  
3 明褐色土 粘有。

- 23号ピット  
1 黒褐色土 明褐色軽石少量、明褐色土含、粘り強、粘有。  
2 黒褐色土 明褐色土含、粘り強、粘有。  
3 明褐色土 粘有。

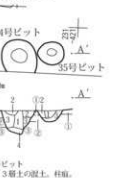
31号ピット



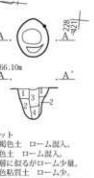
32号ピット



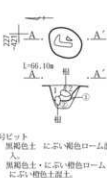
34号・35号ピット



37号ピット



38号ピット



- 31号ピット  
1 にぶい黄褐色土 灰少量含、粘り強。  
2 灰黄褐色土 黒褐色土含、粘り強。

- 32号ピット  
1 にぶい黄褐色土  
2 黒褐色土  
3 にぶい黄褐色土  
4 にぶい黄褐色土  
5 灰黄褐色土 (各層粘り強有、粘質強)

- 34・35号ピット  
1 2・3層土の混土、粘強。  
2 灰白土  
3 黒褐色粘質土  
4 2・3層土と灰黄褐色土の小ブロック混土。  
(地山) ①: 2層石灰、②: ①層+3層、③: 黒褐色粘質土等

- 37号ピット  
1 黒褐色土 ローム混入。  
2 黒色土 ローム混入。  
3 1層に粘りがローム少量。  
4 黒褐色土 ローム少量。  
(1:粘り強、2・3・4:粘り欠)

- 38号ピット  
1 黒褐色土 にぶい褐色ローム混入。  
2 黒褐色土、にぶい褐色ローム、にぶい褐色土混入。  
(地山) ①: 明黄褐色土、②: 浅黄褐色土

第51図 1区4面のピット群



**重複** 13号土坑は59号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

また他の土坑は何れも単独で在り、重複関係は見られなかった。

**規模** 表4

**覆土** 15号土坑は黒褐色土等、9・10・16号土坑は黒褐色粘質土等、12号土坑は褐色粘質土、13号土坑は褐色シルト質土等、17号土坑は黒色粘質土等でそれぞれ埋没する。

**所見** 9号土坑は楕円形、10・12号土坑は隅丸方形様、13・16・17号土坑は円形、15号土坑は三日月形のプランを呈する。掘削形態は何れも箱形で、底面は、9・10・13・15号土坑は平底、12号土坑は尖底、16・17号土坑は丸底を呈する。

主軸方位は表4に記す。

**遺物** 何れの土坑からの出土遺物も見られなかった。

**所見** 1区4面の各土坑の掘削意図を把握することはできなかった。

何れの土坑も時期を特定することはできず、古墳時代から律令期の所産として把握されるに過ぎなかった。

#### 10. 1区4面のピット(第51図、PL.24)

**概要** 1区4面では14・29・31・32・34・35・37・38号土坑の23基のピットを調査した。以下4面のピットを一括して報告する。

**位置** 北西部に19～21号ピット、南西部に17・31・32号ピット、北東部の低地部には22～26号ピット、微高地には14・16・18・34・35・37・38号ピット、南東部に27～29号ピットが存在する。

各ピットの所在グリッドは表#参照のこと。

**重複** 19～21号ピットはHr-FA下水田と重複しこれを切る。また、34・35号ピットは重複するが、34号ピットがこれを切る。この他のピットはそれぞれ単独で在り、重複関係にあるものはなかった。

**規模** 表5

**覆土** 15・16号ピットは灰黄褐色粘質土等、17・19号ピットは褐色粘質土等、18・24・29・38号ピットは黒褐色土等、20・23・25～28号ピットは灰黄褐色土等、21号ピットはにぶい黄褐色土等、22号ピットは暗褐色土等、31・32号ピットはにぶい黄褐色土等、34・35・37号ピットは黒

褐色粘質土等で埋没する。

なお、14号ピットの覆土の記録は残せなかった。

**所見** ピットのプランは、14号ピットが不整形、15・16・22・23号ピットは楕円形、17・19・21・26・28・29・34・35・37・38号ピットが略円形、18・27号ピットが円形、20号ピットが隅丸長方形、24・25・31・32号ピットが隅丸方形を呈する。

底面の形態は、14・17・19・21・22・23・26・27・34・35・36・37号ピットが丸底、15・18号ピットが尖底、16・20・24・25・28・29・31・32・38号ピットが平底を呈する。

主軸方位は表5に記す。

なお、16・17・34・35・37・38号ピットは径10～12cm程の柱痕を確認した。

**遺物** 4面のピットからの出土遺物は得られなかった。

**所見** 4面のピットのうち、16・17・34・35・37・38号ピットは、土層断面に柱痕が確認されたことから、柱穴として使用されたことが確認された。このうち16・17号ピットは単独で在り、建物や柵等の構造物を想定することはできなかったが、34号ピット乃至35号ピットと37号ピットと38号ピットは直線的に並ぶため建造物の存在を検討した。しかし、その柱間は34・37号ピットが313cm、35・37号ピットが279cm、37・38号ピット間が196cmを測るように、柱間に統一性が見られないことから、柵あるいは建物を想定することはできなかった。

21号ピットは、その形態から推して杭の打つ設痕の可能性が考慮される。また、14号ピットは斜め方向に延びることから、人為的掘削によるものではなく、木の根の痕跡である可能性が考慮される。

なお、15・18～20・22～29・31・32号ピットの掘削意図を把握することはできなかった。

4面の各ピットの時期を特定することはできず、概ね、古墳時代から律令期の所産として把握されるに過ぎなかった。

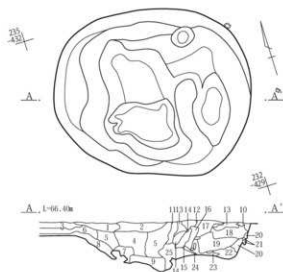
#### 11. 風倒木痕(第52図、PL.24)

**概要** 1区4面では6基の風倒木痕を確認した。

このうち1号風倒木は当初、9号土坑として調査を開始したものであり、一部の記録に。

**位置** 1～6号風倒木痕は、1区、中東部から北東部に





## (風倒木痕)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) As-B, RR粘混入。粘性あり。
  - 2 黒褐色粘質土(10YR2/3) As-C、若干のV層土軽石、RR粘混入。
  - 3 暗褐色土(7.5YR3/3) As-CとRR粘混入。粘性やや強。
  - 4 黒褐色粘質土(10YR3/1) As-C、RR粘。a上と若干のII層土入。
  - 5 黒褐色土(10YR3/2) As-C、RR粘。a上とb上の小ブロック混入。
  - 6 4層土に似るが、As-C多く、II層土も多い。
  - 7 黒色粘質土(5YR2/1) 粘性特に強い。
  - 8 黒褐色粘質土(10YR2/2) b上と若干のRR、下位中心にIV層土混入。
  - 9 黒褐色粘質土(7.5YR3/2) a上と下位中心にIV層土混入。
  - 10 I層土にIV層土粘、As-C混入。
  - 11 III・IV層土の混土 II層土混入。
  - 12 IV層土上にIII・V層土混入。
  - 13 III・IV層土の混土。
  - 14 III層土 IV・V層土粘若干混入。
  - 15 V層土上に上位にIV層土、下位にIII層土入る混土。
  - 16 III層土 IV・V層土小ブロックとやや丸の硬い酸化マンガン混入。
  - 17 IV層土 V層土軽石と若干の硬い酸化マンガンらしきもの混入。
  - 18 III層土 II層土とIV・V層土粘多く混入。
  - 19 V層土軽石 若干のIII・IV層土混入。
  - 20 II層土上にIII層土の入る混土 IV層土粘若干混入。
  - 21 I・II・III層土粘の混土。
  - 22 II・III層土の混土 IV・V層土粘混入。
  - 23 V層と灰黄色シルト(2.5Y7/2、粘性あり)のブロック混土。
  - 24 II層土 III・IV層土混入。
- 25 III・IV・V層土の混土 西上位⇨下位東の傾向あり。  
(地山層等)
- I 灰黄色粘質土(10YR4/2)
  - II 黒色粘質土(10YR2/1)
  - III 灰黄色粘質土(10YR5/2) 上位にII層土混入。2-a 藩移層に相当。
  - IV 明黄色ローム(10YR6/6 ~ 8/6)
  - V 灰黄色粘質土(2.5YR6/4) As-YP。
  - VI 暗褐色ローム(10YR8/6) 腐状に酸化鉄沈着。
- RR 様名起湖の赤褐色礫(2.5Y4/6)
- a 灰黄色土(10YR5/2) 粘性あり。= III層土。
  - b にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性あり。
- As-B にぶい黄色(2.5Y6/3)・灰色(5Y5/1)を成す。僅かにAs-B混濁灰色砂質土(10YR5/1)ブロック混入。

第52図 1区1号風倒木痕

かけての微高地部にある。

1号風倒木痕は232～234-428～431グリッド、2号風倒木痕は218～221-436～438グリッド、3号風倒木痕は222～227-436～438グリッド、4号風倒木痕は228-232-430～434グリッド、5号風倒木痕は341～346-429～433グリッド、6号風倒木痕は234-237-421-423グリッドに位置する。

**重複** 1号風倒木痕が30号土坑、6号風倒木痕が、2号焼土遺構と重複するが、共に風倒木痕の方が古い。

**規模** 1号風倒木痕 径：3.0×2.6m深さ：78cm

2号風倒木痕 径：2.8×2.2m

3号風倒木痕 径：4.2×4.1m

4号風倒木痕 径：3.8×3.6m

5号風倒木痕 径：4.6×3.9m

6号風倒木痕 径：3.4×(2.8)m

**遺物** 何れの風倒木痕からも、遺物の出土は得られなかった。

**所見** 倒木方向は、1・2・6号風倒木痕は西、3・5号風倒木痕は北西、4号風倒木痕は北北西である。

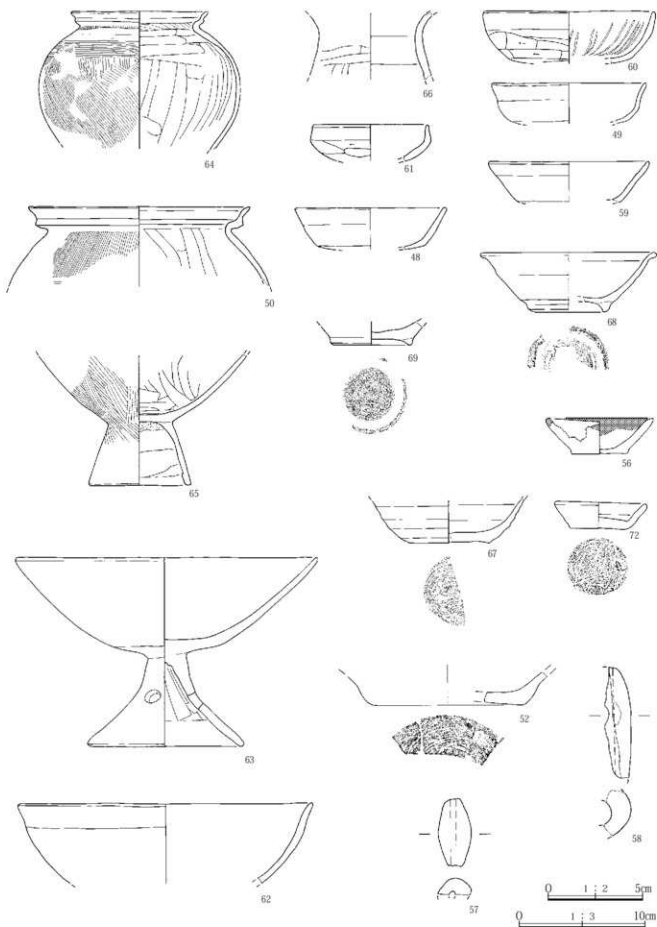
倒木の時期は特定できなかったが、1号風倒木痕は上位にAs-Bが入ることから古代末まで遡る可能性を有するが、他の風倒木痕を含め、概ね律令期以前と把握できるに過ぎなかった。

## (5)遺構外の出土遺物(第53・54図、PL.76・77)

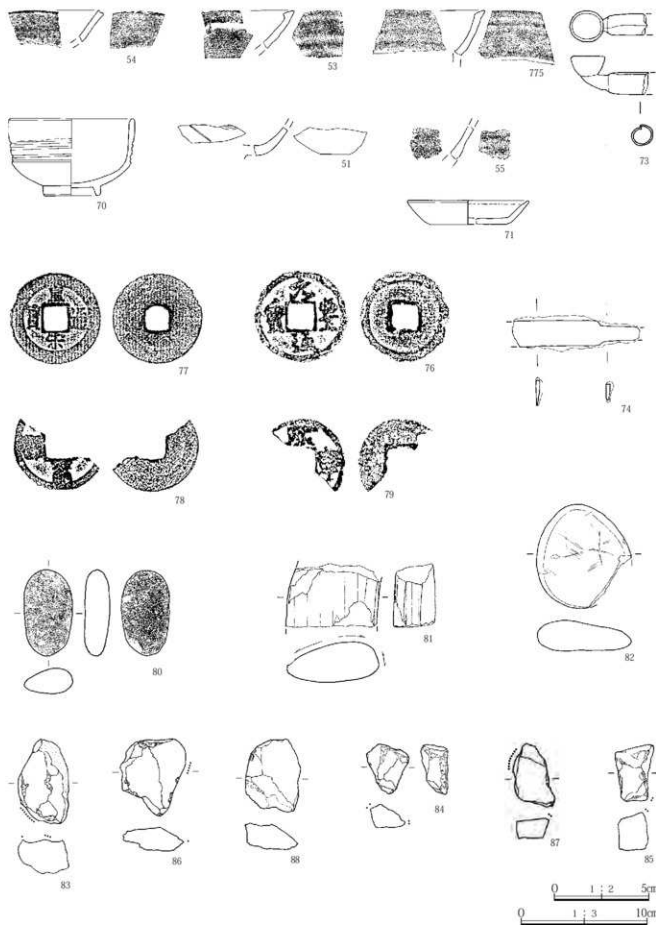
**概要** 本書において、遺構外の遺物は古墳時代以降と弥生時代以前に分けて報告する。前者は各節(各区)毎に、面を分けずに一括のものとして、各節の末尾に一項を設けて記載する。また、後者は第三章第1節(本節)の末尾に一括報告する。

なお、本項では1区の遺構外の出土遺物を報告する。

**出土遺物** 1区の遺構外の遺物は、土師器、須恵器片を中心に各種出土したが、図示したものには、古墳時代前期の土師器の土付甕(47～49)や、平安時代の土師器杯(50～54)・高杯(55)・鉢(56)・甕(57)・須恵器の杯(58)・椀(59・60)や、土鍾(61・62)などがあり、中近世の龍泉窯系青磁椀(63)、中国磁器白磁皿(64)、古瀬戸おろし皿(65・66)、瀬戸・美濃陶器腰鎗椀(67)、尾張陶器片口鉢(68)、在地系土器皿(69・70)・内耳鍋(71)、あるいはキセルの雁首(72)、刀子(73)、不明鉄製品(74)、銅銭(75)



第53図 1区遺構外の出土遺物(1)



第54図 1区道構外の出土遺物(2)

### 第3章 発見された遺構と遺物

～78)、あるいは不明礫石(79)、磨石(80)、砥石と思われる石製品(81)、火打石(82～87)があった。

また、図化できなかった遺物は、1面からは土師器片126g、須恵器片60g、2面からは土師器片1,311g、須恵器片970g、陶磁器片6g、その他19g、3面からは土師器片2,681g、須恵器片923g、陶磁器片14g、その他1g、4面からは土師器片6,529g、須恵器片970g、陶磁器片17g、その他1gが出土し、面の特定できなかったものを合せて、土師器片10,705g、須恵器片2,894g、陶磁器片37g、その他19gの遺物の出土があった。

**出土区域** これらの遺物のうち東部から出土したものは遺物番号58、南東部からは同71、中東部からは同55・60、北東部からは48・49・53・54・57・59・63・65・66・68・69・74、北西部からは同77・78、南部からは同47・59・51、南西部からは56・57の出土があった。

**出土面** 出土面が特定されたものを面毎に分けると、2面からの出土遺物は遺物番号47・50・63・70・71が、3面からの出土遺物は54・59・61・65・66・68、4面からの出土遺物は48・58・69であった。また、これとは別に行った陶磁器を中心とした集計では、次の出土遺物を確認している。古代の須恵器5片、灰釉陶器3片、中世の陶磁器2片、国産陶器6片、在地系土器陶器類3片、近世の国産陶磁器45片、在地系焼締陶器等5片、近現代の陶磁器14片、瓦3片、ガラス2片、時期不詳の土器類10片があり、他に鉄製品類1点があった。

## (6) 1区の旧石器等の確認調査

### 1 調査方法

1区4面の調査の終わりに、北東寄りのローム露頭部では、旧石器の確認調査を、低地部では下位層の遺構の確認作業を行った。

このうちローム露頭部では、2×2mの試掘坑を8m間隔で、北東部で7カ所、中東部で2箇所設定し、人力で掘削した。

また、低地部では1m幅の略東西に長いトレンチを、南北、中央に設定した。トレンチの長さは、北側から長さ52m、66m、75.4mを測り、その配置はやや扇形状を呈し、試掘トレンチと試掘トレンチの間隔は17～26.7mを測る。調査は土木機械を併用して行った。

なお、試掘トレンチ等の設定位置図は第3章末尾に1～3区一括して掲載した。

### 2 調査結果と所見

ローム露出域の試掘坑は、30cm程でAs-YP層に達し、深さ40、50cm程で風化した前橋泥流層に達したが、何れの試掘からも旧石器時代の遺物、遺構は確認されなかった。

また、低地部も深さ20～30cm程でAs-YP層に達し、深さ30～50cm程で、風化した前橋泥流層に達した。この間、弥生時代以前の遺構、遺物を確認することはできなかった。

代から律令期の所産と見られる溝や井戸等を調査した。

## 第2節 2区の遺構と遺物

### (1) 2区1面の遺構と遺物

#### 1. 2区調査の概要

2区の調査は事業の工程との関係から、220-319グリッドと222-413グリッドを結ぶ線を境とする、北半部と南半部に分けて調査を行った。

2区の調査においても、1面では天明3(1783)年の浅間山被災前後の遺構、2面では天仁元(1108)年の浅間山噴出の軽石を包含するいわゆるB混土面を調査した。

3面以下は、北東側の微高地部と南西側から南東部にかけての低地部とに分かれる。微高地部では平安時代を中心とする集落、低地部では天仁元年の浅間山噴火に伴う被災水田面を調査した。

4面の微高地部では、土坑、ピットを調査し、多数の風倒木痕の存在を確認した。低地部ではおおよそ古墳時

#### 2. 2区1面の概要

2区1面は、南西部がほぼ平坦な地形であるが、南西部は、その中程で僅かに窪みを伴う若干凹面を造る。

1面は3面以下に現れる微高地と低地部の存在を示唆するように、中・東北部で遺構の分布が密で、西部の遺構分布は粗で、南東部に遺構は確認されなかった。

1面で調査した遺構は、As-A被災後の復旧作業に伴って掘削された復旧溝群15箇所、As-A被災時以前の畑8面、溝3条を調査した。

#### 3. 1号復旧溝群(第56・57図、PL.27・77)

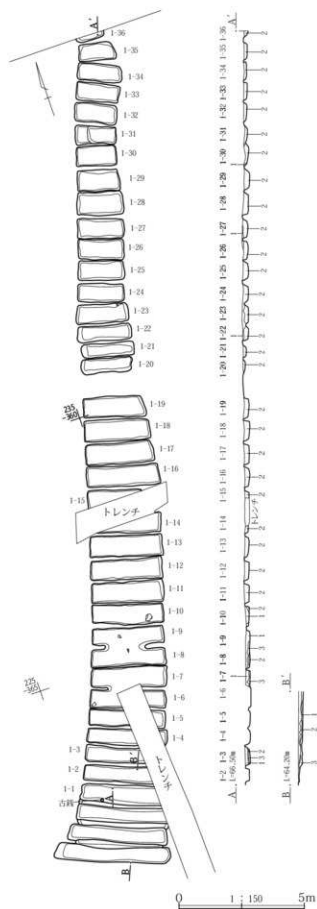
**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目途として掘削された溝群である。

本復旧溝群は、北端部が調査区外に出ており、上位も削平されているらしく、全体を把握したものではない。

**位置** 本復旧溝群は2区中北部、北東四半部の復旧溝群



第55図 2区1面全体図 (S=1/600)



第56図 2区1号復旧溝群

のほぼ西端を画する復旧溝群である。本復旧溝群は216～249-364～366グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。なお、東側に3・4・8号畑、南に7号復旧溝群、西側に2号畑が近接している。

**規模** 東西：4.7m、南北：残存33.0m

個々の溝の規模等については表13に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 確認範囲(底面近く)はAs-A軽石で埋められる。

**構造** 本復旧溝群は39条以上の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN71°Wを向く。

溝は59～164cm、平均86.66cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、1.15～4.6m、平均2.40mを測り、上幅は52～92cm、平均73.51cm、確認面からの深さは6～24cm、平均15.87cmを測る。また溝と溝の間は5～96cm、平均13.32cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 瀬戸・美濃陶器香が(89)・鍔鏡(91)、肥前磁器碗(90)、キセル吸い口(92)と少量の土師器、須臾器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N19°E方向に長い、東辺の北側が南側より狭くなる、短冊形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

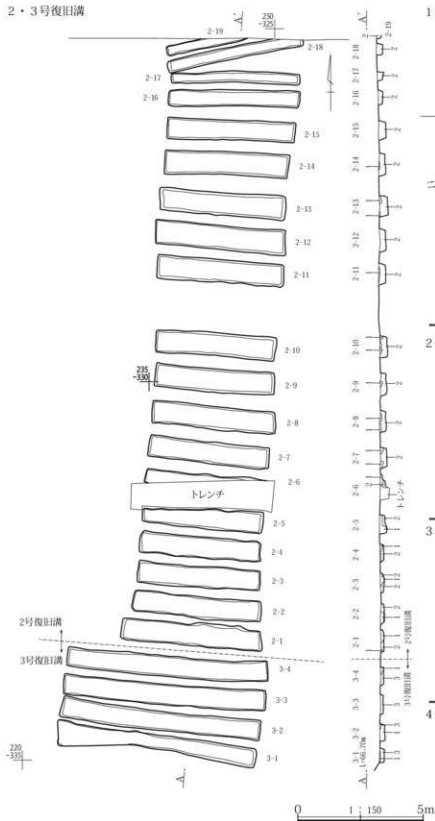
#### 4.2・3号復旧溝群(第57図、PL.27・77)

**概要** 2・3号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。2号復旧溝群は、北端部が調査区外に出ており、全容は把握できなかった。

また、3号復旧溝群は、2号復旧溝群と掘削間隔や規模、走行が近似しているが、2・3号復旧溝群のうち4条は3層土が入り、他の復旧溝群は2層土が埋没しており、復旧溝の長さもこの4条の方が長い。他の復旧(近世耕作上)

- 1 暗褐色土 As-A粒少量混入する。
- 2 As-A堆積層 全体的に鉄分沈着により、やや赤みを帯びる。
- 3 暗灰褐色土 粘性ややあり、しまり弱し。全体的にややゼラつきありAs-A粒まばらに含む。

## 2・3号復旧溝



(近代耕作上)

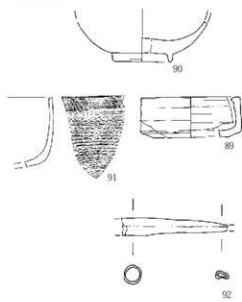
1 暗灰褐色土 全体的にややザラつきあり。As-A粒少量含む。

(復旧溝覆土)

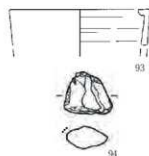
2 As-A混土 砂質土、As-A多量に含む。洪水堆積土を埋めたと考えられる。

3 暗赤褐色砂質土 粘性あり、締まり弱し。As-A粒少量含む。洪水土砂と考えられる。

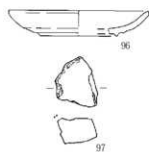
## 1号復旧溝



## 2号復旧溝



## 3号復旧溝



## 4号復旧溝



第57図 2区2・3号復旧溝群と1～3・7号復旧溝群出土遺物

### 第3章 発見された遺構と遺物

溝と時期の違うものであると解釈し、4条を以て3号復旧溝群とした。

なお、2号復旧溝群の北側の復旧溝3条と、4条以南の復旧溝は走向が異なることから、別遺構の可能性もある。以下記載の必要がある場所では前者は2b号復旧溝群、後者を2a号復旧溝群と呼称することとする。

**位置** 2・3号復旧溝群は2区北東部の東寄りに位置する。2号復旧溝群は224～248-323～331グリッド、3号復旧溝群は219～224-325～333グリッドに位置する。  
**重複** 他遺構との重複は見られなかったが、2号復旧溝群の南端の復旧溝と3号復旧溝群の北端の復旧溝は並走し、離間距離が47cm程と、それぞれ復旧溝群の溝と溝との間隔に近い距離にある。なお、2号復旧溝群の西側には5号畑、東側には6号畑が近接し、3号復旧溝群の西側には4号復旧溝群、南東に6号復旧溝群が近接してある。

**規模** 2号復旧溝群東西：5.6m 南北：残存24.2m(2a南北：22.8m 2b：残存1.3m)

3号復旧溝群東西：8.0m 南北：4.3m

個々の溝の規模等については表13に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 2号復旧溝群の各溝は暗灰褐色土やAs-A軽石混土、洪水堆積土で埋められる。3号復旧溝群はAs-A混土や暗褐色土の洪水土砂と考えられるもので埋められている。

**構造** 2号復旧溝群は39条以上の溝から成り、このうち2a復旧溝群は36条、2b復旧溝群は3条である。復旧溝の軸線方向は2a復旧溝群の溝はN83°Wを向き、2b号復旧溝群はN79°Eを向く。

2a号復旧溝群の溝10・11間は290cmの間隔で掘られているが、これを除く溝と溝の間は115～164cm、平均132.31cmの間隔で掘削されている。溝の長さは4.8～5.6m、平均5.03mを測り、上幅は58～95cm、平均20.80cm、確認面からの深さは14～33cm、平均22.44cmを測る。また溝と溝の離間距離は30～75m、平均46.38cm隔てて掘削されている。

2b号復旧溝群の溝と溝の間は60～94cm、平均76.50cmの間隔で掘削されている。溝の長さは5.1～5.5m、平均5.30mを測り、上幅は58～95cm、平均43.67cm、確認面からの深さは14～26m、平均22.00cmを

測る。また溝と溝の離間距離は15～48cm、平均31.50cm隔てて掘削されている。

3号復旧溝群は4条の溝から成り、復旧溝の軸線方向はN25°Eを向く。

3号復旧溝群の溝と溝の間は100～114cm、平均108.17cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたものでは、7.95～8.03m、平均7.98mを測り、上幅は72～84cm、平均79.25cm、確認面からの深さは14～24cm、平均19.00cmを測る。また溝と溝の離間距離は25～30cm、平均28.33cm隔てて掘削されている。

2・3号復旧溝群の各溝の掘削形態は箱塚状で、壁面は立つ。

**遺物** 2号復旧溝からは、肥前磁器青磁香が(93)、火打石(94・95)が出土し、3号復旧溝群からは瀬戸・美濃陶器皿(96)、火打石(97)と、僅かな量の土師器片が出土した。

**所見** 2号復旧溝群は、全体として、N-3°E方向に長い、短冊形の区画内に掘削されている。なお、北端部で2b号復旧溝群が2a号復旧溝群と分離できるため、畑の区画が2a・b号復旧溝群の境に在った可能性が考慮される。

また、3号復旧溝群はN85°W方向に長い、長方形の区画内に掘削されている。

この掘削範囲は、As-A被災後の土地区画を反映しているものと思慮される。

2・3号復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

#### 5.4号復旧溝群(第57・58図、PL.27・77)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

4号復旧溝群は、復旧溝の底部のみが検出されており、他の復旧溝群より、高い位置に掘削されたものと思慮される。

**位置** 本復旧溝群は2区中北部にあり、222～229-333～352グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。なお、東側に3号復旧溝群が、47cmの離間距離を測るが、接してあり、南西に8号畑が近接してある。

**規模** 東西：19.0m 南北：3.8m



個々の溝の規模については表13に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** 全体にAs-A軽石が埋め込まれているが、東部の溝18・19・20・23には暗褐色土も埋め込まれている。

**構造** 本復旧溝群は23条以上の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN15°Eを向く。

溝は57～100cm、平均85.27cmの間隔で掘削されているが、西寄り溝1～9の掘削の間隔は広く、平均102.63cmを測るのに対し、溝9～23の掘削の間隔は平均75.36cmが測られる。溝の長さは1.22～3.85m、平均2.92mを測り、上幅は23～80cm、平均53.22cm、確認面からの深さは3～20cm、平均6.83cmを測る。また溝と溝の間は15～48cm、平均31.82cmを隔ててあるが、西端部を除いて近接して掘削されており、西寄りの方が広く、溝1～6の間は平均42.00cmを隔てて掘削されているのに対し、それより東側の溝6～23の間は平均28.82cmを隔てて掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 火打ち石(98・99)が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N76°W方向に長い、西辺290cm、東辺が400cmと見られるが短冊形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群はAs-A降下の天明3(1783)年以降の所産と考えられる。

#### 6.5号復旧溝群(第59図、PL.27)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目途として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は2区中部南寄りにあり、194～215-364～379グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群は7号復旧溝群と重なるが、本復旧溝群が7号復旧溝群に乗る状態である。

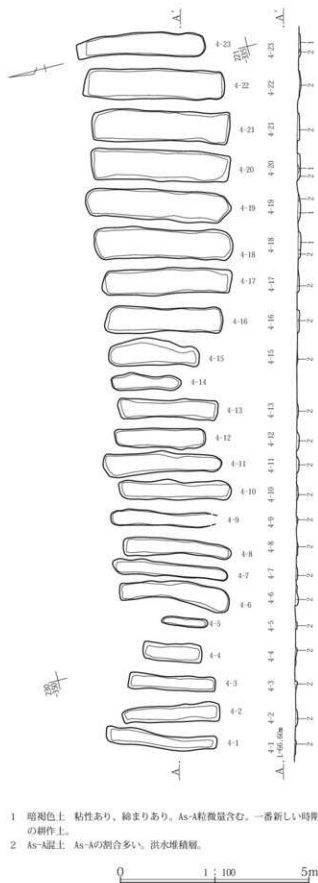
**規模** 東西：9.3m、南北：21.0m

個々の溝の規模等については表13に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

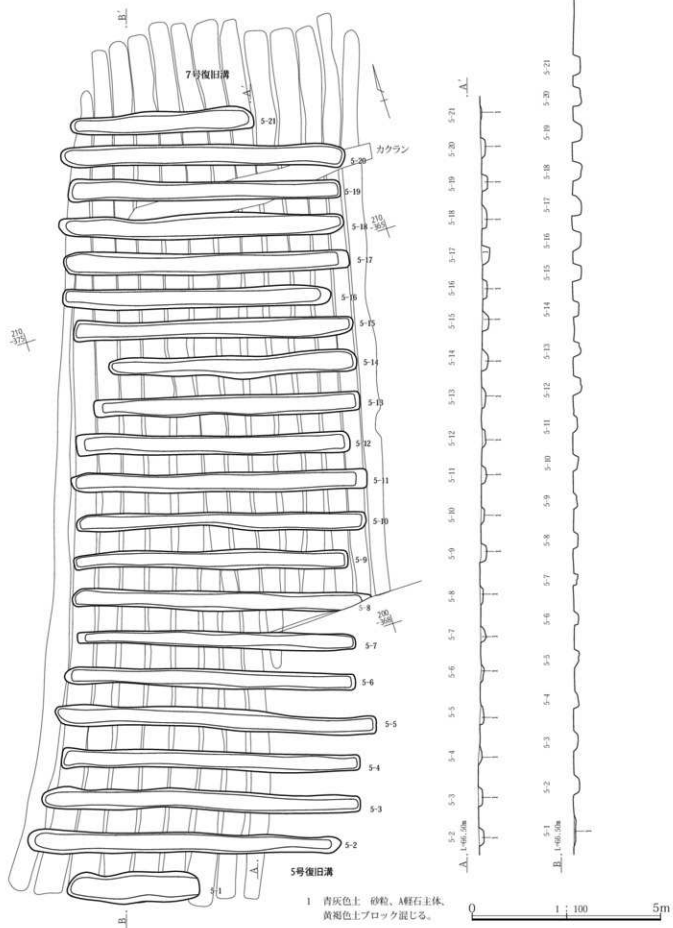
**覆土** 砂粒、黄褐色土を含むAs-A軽石で埋め込まれている。

**構造** 本復旧溝群は21条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN76°Wを向く。

溝は82～119cm、平均101.93cmの間隔で掘削されてい



第58図 2区4号復旧溝群



第59図 2区5号復旧溝群

(1786)年の洪水被災後に掘削された可能性が考えられる。

### 7. 6号復旧溝群

(第60図、PL.27)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。東側が調査区外に出ているため、全容を確認することはできなかった。

**位置** 本復旧溝群は2区中東部東端にあり、210～219-319～328グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。なお、西端部北辺で、36cm隔たって3号復旧溝群と近接してある。

**規模** 東西：残長9.6m 南北：7.8m

個々の溝の規模等については表13に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** 溝1～7はAs-Aを主体として埋没し、溝8以东はAs-Aを少量含む

明茶褐色土で埋められている。

**構造** 本復旧溝群は10条以上の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN10°Eを向く。

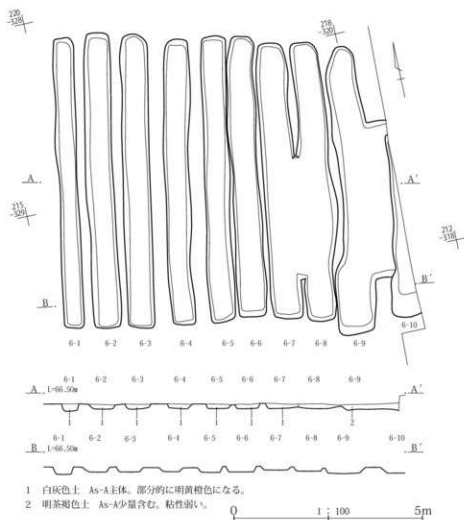
溝は75～109cm、平均95.00cmの間隔で掘削されている。溝の長さは、測定できたもので7.3～7.8m、平均7.56mを測る。また、上幅は55～85cm、平均71.56cmを測るが、最西の溝1の幅は55cmと狭いため、これを除く溝の幅の平均は73.63cmを測る。また確認面からの深さは10～21cmで、平均13.00cmを測り、溝と溝の間隔距離は10～42cm、平均25.33cmと近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、壁面は立つ。

**遺物** 僅かな量の土師器・須臾器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N78°W方向に長い、短冊形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。



第60図 2区6号復旧溝群

る。溝の長さは3.50～8.52m、平均7.28mを測るが、南北両端の溝1と溝21が短いため、これを除く溝の長さの平均は7.60mとなる。また、上幅は40～85cm、平均52.29cm、確認面からの深さは4～23cm、平均14.62cmを測る。また溝と溝の間隔距離は30～65cm、平均50.65cm隔てて掘削される。

**遺物** 僅かな量の土師器・須臾器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N20°E方向に長い区画内に掘削されているが、その掘削範囲は、後述する7号復旧溝群の範囲と同じであると考えられる。

本復旧溝群は、7号復旧溝群を掘削して天地返しを行った後に、敷えて再度天地返しを行ったものである。7号復旧溝群と本復旧溝群がどの程度の時間差を以て掘削されたのかは明らかにはできなかった。

なお、本復旧溝群の時期は、天明3年以降の所産ではあるが、覆土に砂粒が入ることから、あるいは天明6

### 8. 7号復旧溝群

(第61図、PL.27)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。東側が調査区外に出ているため、全容を確認することはできなかった。

**位置** 本復旧溝群は2区中北部にあり、194～217-364～379グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群の上に5号復旧溝群が乗るように掘削されている。なお、本復旧溝群の北辺から北北東方向に1.7m隔たって1号復旧溝群が近接してある。

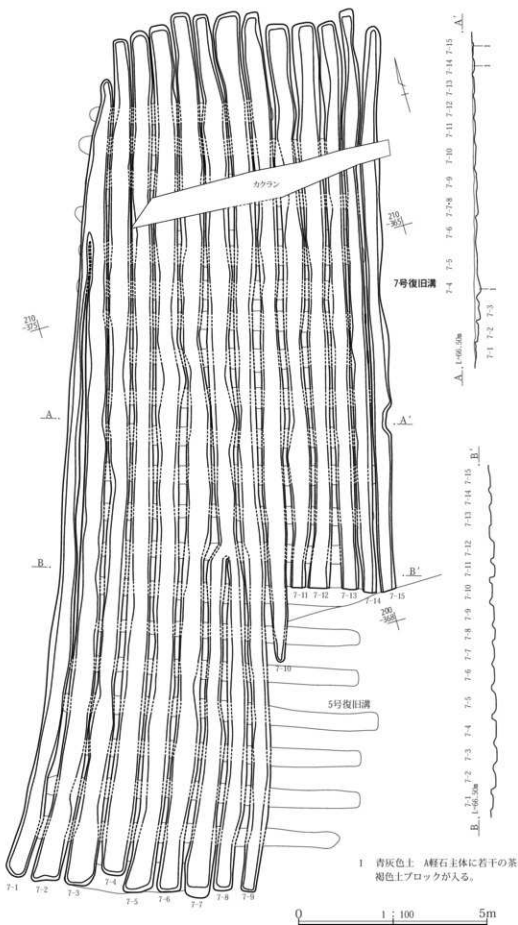
**規模** 東西：10.3m、南北：23.3m

個々の溝の規模等については表13に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** As-Aを主体として埋められている。

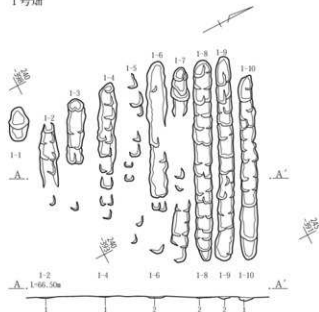
**構造** 本復旧溝群は15条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN10°Eを向くが南部では若干西に傾いて、N24°E方向に転ずる。

溝は53～75cm、平均65.82cmの間隔で掘削されている。溝の長さは、測定できたもので14.9～23.26m、平均19.28mを測る。しかし



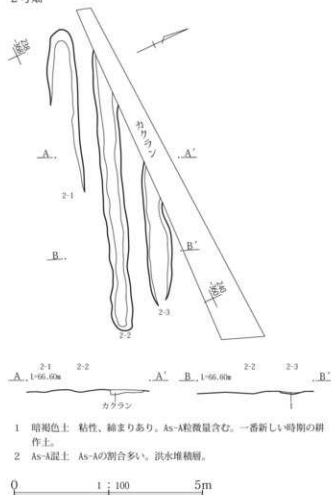
第61図 2区7号復旧溝群

## 1号畑



- 1 As-A混土 As-Aの割合多い。砂層堆積層。洪水堆積層かと考えられる。  
2 As-A混土 1層に類するが1層よりAs-Aの割合混入少ない。

## 2号畑



- 1 暗褐色土 粘性、締まりあり。As-A粒微量含む。一番新しい時期の耕作土。  
2 As-A混土 As-Aの割合多い。洪水堆積層。

0 1:100 5m

第62図 2区1・2号畑

東部の溝は南部が削平されていることから短く、これを除いた溝2～6・8・9の長さの平均は22.62mを測る。また、上幅は40～65cm、平均54.00cm、最西の平均54.00cmを測る。また確認面からの深さは3～20cmで、平均9.07cmを測り、溝と溝の離間距離は8～15cm、平均11.36cmと近接して掘削されている。

**遺物** 少量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N20°E方向に長い、長方形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

## 9. 1号畑(第62図, Pl. 27)

**概要** 本畑は、降下As-A降下後に復旧された畑跡である。削平され、狭い範囲でしか確認できなかった。

**位置** 本畑は2区北西部にあり、239～245-391～397グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複はなかった。

**規模** 東西:5.4m 南北:6.7m

個々のサクの規模等については表14に記しているが、個々のサクの番号は南側から順に付している。

**覆土** As-Aの割合の多い砂で埋没する。

**構造** 本畑は10条のサク(溝)から成る。サクの軸線方向はN58°Wを向く。

サクは60～88cm、平均72.11cmの間隔で掘削されている。サクの長さは、測定できたもので0.9～5.4m、平均3.89mを測る。サクの上幅は30～50cm、平均42.9cmを測り、確認面からの深さは3～8cmで、平均5.33cmを測るに過ぎない。畝間は18～45cm、平均29.33cmを測る。

また底面には鋤先痕が見られる。この鋤先痕は、東に背を向けて、西から東に移動しながら掘削されたもので、サク2～10の観察では左右(南北)2列ずつで掘削されている。前後(東西)方向の鋤入れと鋤入れの間隔は14～58cmで、平均35.7cmを測る。

サクの掘削形態は箱型状を呈するが、底面の横断面形は平底状を呈する。

**遺物** 本畑からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 本畑は、N27°E方向に長い区画の中に掘削されたものである。

その掘削時期は特定できなかったが、砂層で埋没する

### 第3章 発見された遺構と遺物

ことから天明6(1786)年以降の所産の可能性が考えられる。

また、2期調査期の所見では、埋土が同じことから本畑は8号畑と同時期のものと判断されている。

#### 10. 2号畑(第62図、PL.28)

**概要** 本畑は、降下As-A降下後に復旧された畑跡である。削平され遺存状態は悪く、更に北側はX=34,241ライン付近以北は、後世の掘乱れで失われており、極狭い範囲でしか確認できなかった。

**位置** 本畑は2区中北部にあり、238～240-360～368グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複はなかった。なお、本畑の東には1号復旧溝群が近接している。

**規模** 東西：残長8.0m 南北：残長3.0m

個々のサクの規模等については表14に記しているが、個々のサクの番号は南側から順に付している。

**覆土** 遺存状態が悪く明確ではないが、As-Aの割合の多い土で埋没しているものと思慮される。

**構造** 本畑は3条のサク(溝)から成る。溝の軸線方向はN70°Wを向く。

サクは96～100cm、平均97.50cmの間隔で掘削されている。サクの長さは、測定できたものはなかった。サクの上幅は45～76cm、平均65.00cmを測り、確認面からの深さは3～7cmで、平均5.33cmを測るに過ぎない。畝間は35～40cm、平均37.50cmを測る。

溝の掘削形態は箱型で、壁面は立つ。

**遺物** 本畑からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 本畑の範囲は確認できなかった。また図化はできなかったが、本畑の南側にはAs-Aの割合の多いサクの痕跡が見られた。

本畑の削平時期は特定できなかった。なお、天明3(1783)年以降で、比較的早い時期の可能性が考慮される。

#### 11. 3号畑(第63図、PL.28)

**概要** 本畑は3条の溝のみが確認されているもので、3号畑として調査した。が、復旧溝群であるため、整理段階で遺構番号を付したものである。降下As-A軽石を除去し、天地返しを別途として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は2区中北部に所在し、上述の2号

畑の北東方にある。246～248-341～353グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群は単独であり、他の遺構との重複はなかった。

なお、東部に5号畑、西に1号復旧溝群が近接し、南に4号畑が接する。

**規模** 東西：11.2m、南北：1.8m

個々の溝の規模等については表14に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** As-Aを主体として埋められている。

**構造** 本復旧溝群は3条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN82°Wを向く。

溝は67～73cm、平均69.75cmの間隔で掘削されている。溝の長さは、9.92～11.20m、平均10.71mを測り、上幅は40～45cm、平均43.33cmを測る。また確認面からの深さは19～25cmで、平均21.67cmを測り、溝と溝の離間距離は24～28cm、平均26.00cmを測った。

溝の掘削形態は箱型で、壁面は立つ。

**遺物** 本復旧溝群からは、僅かな料理土師器片が出土したに過ぎない。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N80°W方向に長い、短冊形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

#### 12. 4号畑(第63図、PL.28)

**概要** 本畑はAs-A被災後に復旧された畑跡である。

北寄りで削平されて遺構が失われるなど、遺存状態は良好とは言えない。

また、北部では、中・南部に対して走向の異なる走向サク21・22があるが、この2条のサクは、本畑の他のサクに比して幅も狭く、本畑とは別遺構である可能性を有する。

**位置** 本畑は2区中北部にあり、231～246-341～354グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複はみられなかった。

なお、本畑の西には1号復旧溝群が近接しており、北部には8号復旧溝群が接する。

**規模** 東西：13.2m 南北：14.9m

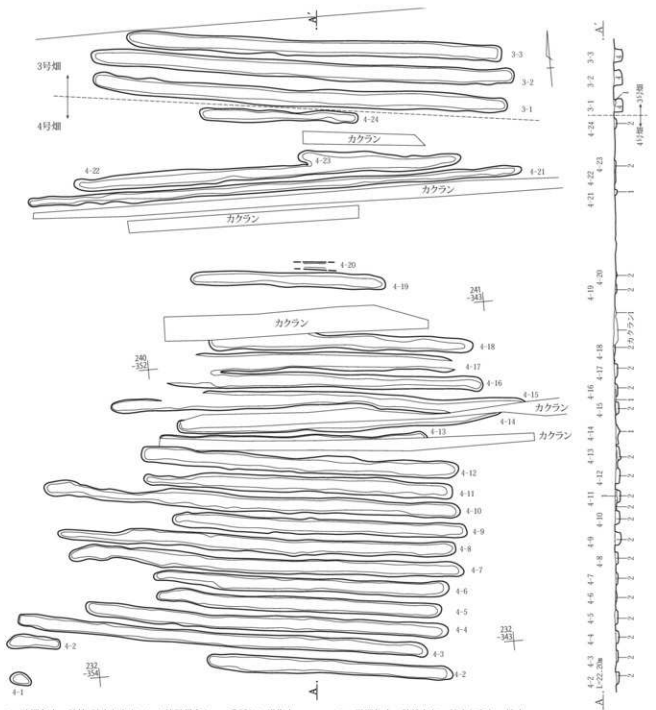
個々のサクの規模等については表14に記しているが、個々のサクの番号は南側から順に付している。

**覆土** サク14・21は本遺構の中で最も新しい暗褐色土、サク2～13・15～20・22・23・24はAs-A降下前の耕土である暗赤褐色土、サク27・28・31・32はAs-A混土で埋没する。

**構造** 本畑は24条のサクから成る。サクの軸線方向は、

南部では東側でN83°W、西部でN79°Wを向き、中部ではN84°W、北部ではサク21・22でN89°W、サク23・24ではN85°Wを向く。

サクとサクが視覚的に離れ過ぎているように見受けられるサク1・2間、サク12・13間、サク18・19間、そしてサク20・21間と測定のできなかったサク22～24間のデータを除くと、サクは、38～77cm、平均50.03cmの間



- 1 暗褐色土 粘性、締まりあり。As-A粒微量含む。一番新しい耕作土。  
 2 暗赤褐色土 粘性、締まりあり。As-A粒微量含む。As-A降下後の耕作土であり、1層より古い耕作土。

- 3 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。地山。  
 4 As-A混土 1号畑～1層に同じ。

第63図 2区3・4号畑

0 1:100 5m

隔で掘削されている。サクの長さは、測定できたもので、0.66～13.1m、平均8.58mを測り、サクの上幅は20～64cm、平均37.74cmを測り、確認面からの深さは3～29cmで、平均8.96cmを測る。畝間はサクの掘削の間隔で除外したものを除くと、10～25cm、平均13.50cmを測る。

サクの掘削形態は箱型状を呈する。その、底面形態は横断面形で平底、丸底状などが混在している見られる。

**遺物** 土師器・須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 本畑は略北北東方向に長い、長方形の区画の中に掘削されたものである。

上述のように北部は別遺構になる可能性を有する。

なお、本畑の時期は、その覆土から推して、As-A被災後(天明3年)の時期を示す。

### 13. 5号畑(第64図、PL.28)

**概要** 本畑は、As-A降下後に復旧された畑跡である。

本畑は北側が調査区外に出ており、南寄りと北寄りで削平された箇所があるなど、遺存状態は良好とは言えないものであった。

**位置** 本畑は2区北東部西寄りにあり、228～247-330～342グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複はなかった。なお、本畑の東には2号復旧溝群、西には8号復旧溝群、4号畑が近接してある。

**規模** 東西：11.6m 南北：19.7m

個々のサクの規模等については表143に記しているが、個々のサクの番号は南側から順に付している。

**覆土** サク6・11～14・21・25・30は本遺構の中で最も新しい暗褐色土、サク7～10・15～20・22・23・24はAs-A降下前の耕土である暗赤褐色土、サク27・28・31・32はAs-A混土で埋没する。

**構造** 本畑は32条のサクから成る。サクの軸線方向は、N3°Wを向く。

サクとサクが視覚的に離れ過ぎているように見受けられるサク1・2間、サク3～6間、サク23・24間、サク28～30間、サク31・32間のデータを除くと、サクは、37～75cm、平均53.50cmの間隔で掘削されている。サクの長さは、測定できたもので、0.9～10.36m、平均

5.51mを測るが、視覚的に短いサク2・6～14・20～24・26・29～31を除いた溝の平均は8.61mを測る。サクの上幅は14～44cm、平均34.53cmを測り、確認面からの深さは3～20cmで、平均6.75cmを測る。畝間はサクの掘削の間隔の除外したものを除くと、8～45cm、平均18.96cmを測る。

サクの掘削形態は箱型状を呈するが、底面形態は横断面形で平底、丸底状などが混在している。

**遺物** 少量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本畑はN3°E方向に長い、長方形の区画の中に掘削されたものである。

本畑の覆土は、地点によって、As-A降下前と降下後という二つの要素を示している。従ってその時期は捉えにくいだが、本畑はAs-A降下(天明3年)前に開削され、As-A被災後もその位置に復旧されたものと想定される。

### 14. 6号畑(第65図、PL.28)

**概要** 本畑は、As-A降下後に耕作された畑跡である。

本畑は東側と北側が調査区外に出ており、また中南部は削平されて確認できず、北西隅部も遺存状態が良くなかったため、全容は把握できなかった。

**位置** 本畑は2区北東隅にあり、236～248-318～324グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複はなかった。なお、本畑の西には2号復旧溝群が近接してある。

**規模** 東西：残存6.9m 南北：残存16.2m

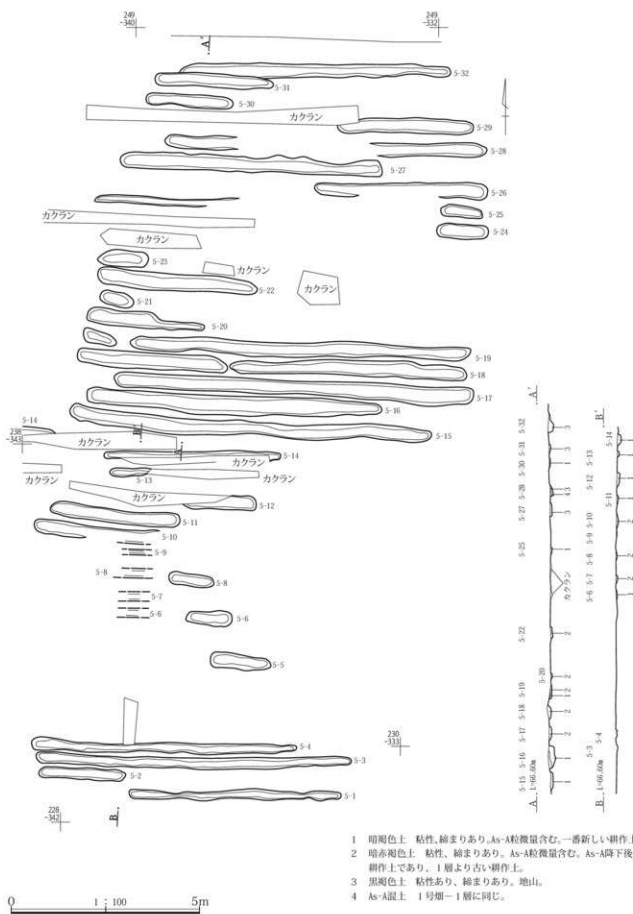
個々のサクの規模等については表14に記しているが、個々のサクの番号は北側から順に付している。

**覆土** サク1・4・11・18・19・21は上位にAs-Aの多い混土、下位に黒褐色土、サク2・3・5～10・12・13・20・22はAs-Aの多い混土、サク14～1はAs-A混土で埋没する。

**構造** 本畑は23条のサクから成る。サクの軸線方向は、南部ではN85°W、中・北部ではN83°Wを向く。

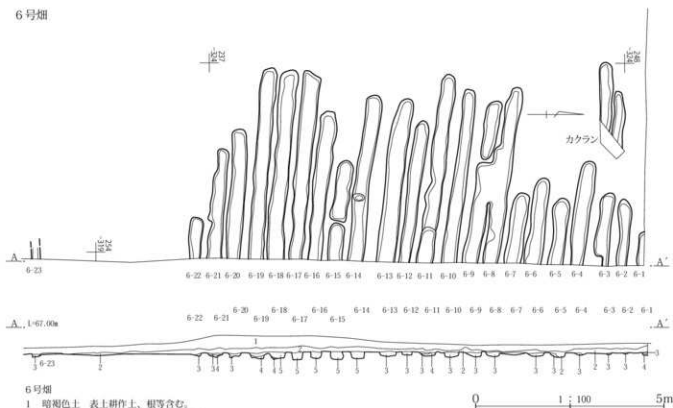
**位置** 的に南に離れるサク23を除くと、本畑のサクは、59～78cm、平均57.13cmの間隔で掘削されている。サクの長さは測定できなかった。サクの上幅は23～46cm、平均36.13cmを測り、確認面からの深さは5～21cmで、平均11.48cmを測る。畝間は10～35cm、平均19.40cmを測る。





第64図 2区5号畑

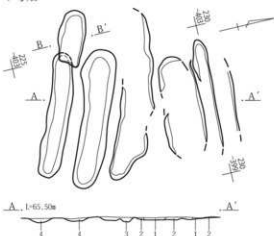
6号畑



6号畑

- 1 暗褐色土 表土耕作上、根等含む。
- 2 暗褐色土 表上下耕作上、根等含まず。
- 3 As-A混土 As-Aの割合多い、砂層堆積層。赤みを帯びるが、上層耕作土鉄分沈着であると考えられる。
- 4 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。地山。
- 5 As-A混土 3層に類するが、赤みを帯びない。

7号畑



7号畑

- 1 As-A堆積層 純層と考えられる。
- 2 暗褐色As-B混土 粘性、締まりあり。地山。
- 3 暗褐色土 粘性、締まりあり。As-A粒微量含む。全体的にややザラつく。一番新しい。
- 4 赤灰褐色砂質土 As-A少量含む。鉄分沈着のため変色。洪水堆積土層と考えられる。

サクの掘削形態は箱型を呈するが、底面形態は横断面形で平底、丸底状などが混在するが、サク2～33では北寄りのものは丸底が多く、南寄りのものは平底を呈する傾向が見られる。

**遺物** 少量の土師器須恵器片が出土した。

**所見** 本畑はN4°E方向に長い、長方形の区画の中に掘削されたものである。

本畑は覆土から推して、As-A降下(天明3年)後の所産として把握されるが、覆土にAs-Aが多いことから、余り時代が下らない時期のものである可能性が考慮される。

15. 7号畑(第65図、PL.28・29)

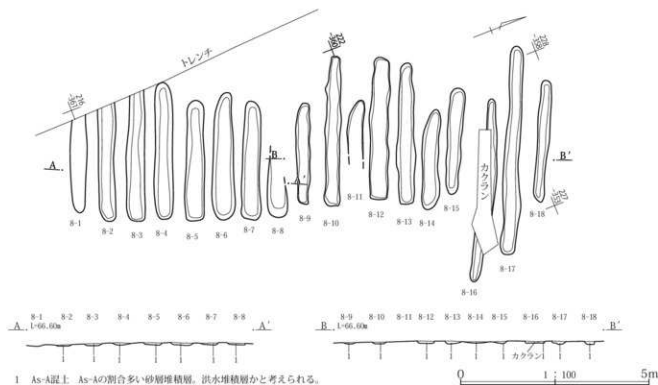
**概要** 本畑は、As-A降下前後に耕作されたと思慮される畑跡である。

本畑は遺存状態が不良なため、一部を確認したに過ぎなかったが、覆土の比較から、新旧3面の畑の存在が窺われた。

**位置** 本畑は2区北西部南寄りにあり、225～230-399～404グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複は見られな

第65図 2区6・7号畑



1 As-A混土 As-Aの割合多い砂層堆積層。洪水堆積層かと考えられる。

第66図 2区8号畑

かった。

しかし、1層の畑を切り、3層の畑が形成されていることを確認した。前者はサク。

**規模** 東西：残存4.7m 南北：残存5.3m

個々のサクの規模等については表14に記しているが、個々のサクの番号は南側から順に付している。

**覆土** サク1・2はAs-Aを少量含む洪水堆積層土、サク3はAs-Aを微量に含む暗褐色土、サク4・6はAs-A純層、サク5はAs-B混暗褐色土で埋没する。

**構造** 本畑は6条のサクから成る。サクの軸線方向は、サク1・2とサク3の東部ではN69°W、サク3の西部とサク4・6ではN4°Wを向く。

本畑のサクは後述のように時期の異なるものが混在し、遺存状態も良くないため、一律に抜うのは適当ではないが、101～111cm、平均105.67cmの間隔で掘削され、サクの残長3.7～4.5m、平均4.22m、上幅は60～100cm、平均78.50cmを測り、確認面からの深さは2～9cmで、平均6.67cmを測る。畝間は20～35cm、平均27.67cmを測る。

サクの掘削形態は箱型を呈し、底面の横断面形は、サク1・2丸底を呈し、それ以外は平底状を呈する。

**遺物** 僅かな量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本畑がどのような区画の中に耕作されたかは明確ではないが、残存範囲から推せばN14°E方向に長い区画の中に掘削されたものといえることができる。

また、本畑はサク1～3はAs-A降下(天明3年)後、サク4・6はAs-A降下直後、サク5はAs-A降下以前の所産として把握されるが、これらを勘案すれば、本畑はAs-A降下以前から以後にかけて継続的に耕作されたものと思慮される。

#### 16. 8号畑(第66図、PL.29)

**概要** 本畑は、降下As-A降下後に耕作された畑跡である。本畑の遺存状態は良好なものではなく、また一部が攪乱で壊されていた。

**位置** 本畑は2区中部にあり、215～228-352～360グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複はなかった。なお、西側に1号復旧溝群に近接してある。

**規模** 東西：6.3m 南北：12.8m

個々のサクの規模等については表14に記しているが、個々のサクの番号は南側から順に付している。

**覆土** 土層観察記録によれば、南半部にあるサク2～8はAs-A、砂粒を含む黄褐色土、北半部にある9～18はAs-Aの割合が多い砂層で埋没する。

**構造** 本畑は18条のサクから成る。サクの軸線方向は、N67°Wを向く。

本畑のサクは52～94cm、平均71.63cmの間隔で掘削され、サクの長さは1.6～5.5m、平均3.44m、土幅は26～55cm、平均42.41cmを測り、確認面からの深さは2～20mで、平均6.11cmを測る。畝間は16～60cm、平均28.13cmを測る。

サクの掘削形態は箱型状を呈し、底面は平底状を呈する。

**遺物** 本畑からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 本畑はN20°E方向に長い、短冊形の区画の中に掘削された畑である。

また、覆土の記録が2期調査(北半部)と3期調査(南半部)で異なっているが、共通所見から推して、本畑は、As-A降下(天明3年)後の所産として把握される。

なお、その時期は特定できなかったが、北半部の覆土の所見に従えば、天明6(1786)年の洪水以降の所産である可能性が考慮される。2期調査期の所見では、埋土が同じことから本畑は1号畑と同時期のもの判断されている。

#### 17. 12号溝(第67図、PL.29)

**概要** 12号溝は、その南西端部が西側調査区外に出ており、北側は北半部の調査(2期調査)では確認されなかったため、内容を把握することはできなかった。

なお、掘削位置と規模において、1区11号溝に接続する可能性が考慮される。

**位置** 本群は2区中西部の西端部に位置する。214～221-407～415グリッドに所在する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 残長:11.2m 幅:45cm 深さ:8cm

**覆土** As-A混じりの明茶褐色土で埋没する。

**構造** 12号溝は西側よりN77°Eの角度で調査区に入り、3.2m程極緩やかな弧状を呈して走行し、走向をN37°Eに転じて直線的に走行する。

遺存状態が不良であるため掘削形態はやや不明瞭であるが、箱型状を呈するものと想定される。底面の横断面

形は丸底状を呈する。また底面の勾配は、南西高北東低であるが、勾配率は1.25%を測るに過ぎなかった。

**遺物** 本溝からは、少量の土師器、須恵器片が出土したに過ぎなかった。また、これらの遺物で図示すべきものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は確認されなかったが、その走行から推して、1区北東部の舌状の微高地の南東縁に沿って掘削された可能性が考慮される。

またその時期はAs-A被災の天明3(1783)年以降の所産として把握できるに過ぎない。

#### 18. 13・14号溝(第67図、PL.29)

**概要** 13号溝北辺と14号溝が並走に近い状態で走向する。また、両溝共に遺存状態はよくなく、13号溝では北西側が西側調査区外、南東側が南側調査区外に出ているため、内容は把握できなかった。

**位置** 13・14群は2区中西部にあるが、13号溝は387～415-180～202グリッド、14号溝は195～202-389～410グリッドに所在する。

**重複** 13・14号溝は東端部で接するが、新旧関係は特定できず、また両溝は他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 13号溝 残長:44.7m 幅:40cm 深さ:6cm

14号溝 長さ:24.1m 幅:40cm 深さ:5cm

**覆土** 13・14号溝は共にAs-A混じりの明茶褐色土で埋没する。

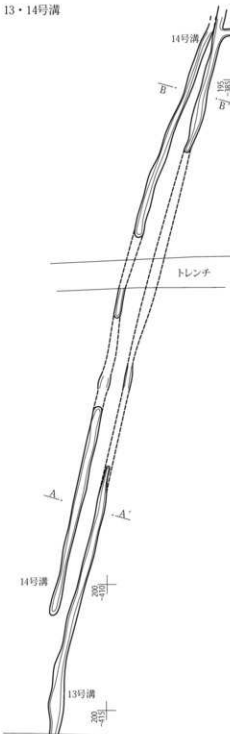
**遺物** 13号溝からは土師器片と僅かな量の須恵器片が出土したが、14号溝からの出土遺物はなかった。

**構造** 13号溝は西側よりN83°Wの角度で調査区に入り、2m程でN78°Wに走向を転じて直線的に27.2m走行する。13号溝は西壁から28.3mの地点でN2°E方向に分岐し、2.5m直線的に走行したところで、N19°Eの角度に走向を転じて弧状に走行し、12.7m走行してN17°Eの角度で南側調査区外に抜けている。

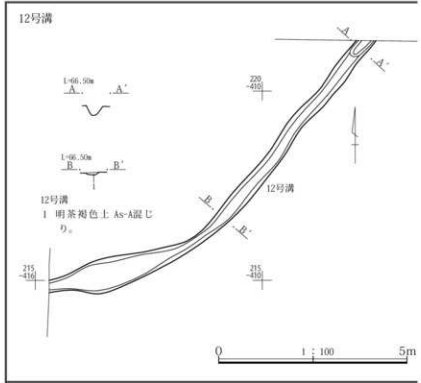
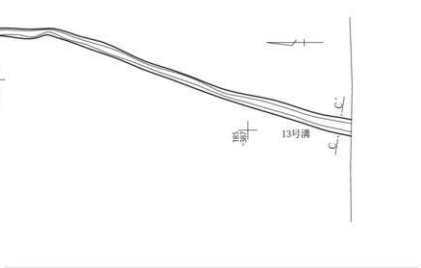
13号溝の掘削形態は、遺存状態が不良であるため掘削形態はやや不明瞭だが、箱型状を呈するものと想定される。底面の横断面形は丸底状を呈し、底面は西高東低であるが、勾配率は0.13%を測るに過ぎない。

14号溝は西壁から4.9m付近、13号溝の北側40cm程から始まり、N78°Wの方位に走向を取り、東方へ直線的に17.6m程走行して、N70°Wに走向を転じ、7.0m程直

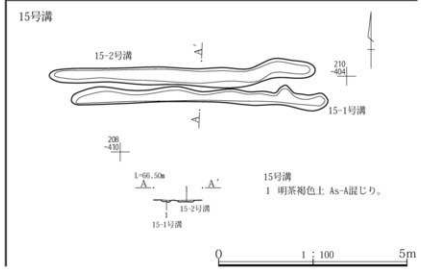
13・14号溝



13・14号溝 断面図の下  
1 明茶褐色土 As-A脱じり。



12号溝  
1 明茶褐色土 As-A脱じり。



15号溝  
1 明茶褐色土 As-A脱じり。

第67図 2区12・13・14・15号溝

### 第3章 発見された遺構と遺物

線的に走行するが、その東端は、13号溝の分岐点より少し東まで伸びている。

14号溝の掘削形態は、遺存状態が不良であるためやや不明瞭だが、箱堀状を呈するものと想定される。底面の横断面形は丸底状を呈し、底面は西高東低であるが、勾配率は僅かに0.08%を測るに過ぎず、ほとんど平坦である。

**遺物** 13号溝からの出土遺物はなかった。

14号溝からは少量の土師器、須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 13号溝の掘削意図は特定できなかったが、その走行から推して、土地区画によるものの可能性がある。

14号溝の掘削意図も特定できなかったが、13号溝と走行が近いことから、13号溝と同様の掘削意図を有していたものと推定される。

また両溝の時期は、As-A被災の天明3(1783)年以降の所産として把握できるに過ぎない。

15-2号溝の掘削形態は、遺存状態が不良であるため掘削形態はやや不明瞭だが、箱堀状を呈するものと想定される。底面は平底を呈し、底面は西高東低であるが、勾配率は僅かに0.29%を測るに過ぎない。

**遺物** 僅かな量の土師器・須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 15-1号溝、15-2号溝の掘削意図は、共に確認することはできなかった。

またその時期を特定することはできず、はAs-A被災の天明3(1783)年以降の所産として把握できるに過ぎなかった。

#### 19. 15号溝(第67図、Pl.29)

**概要** 本溝は、南北にほぼ並走する2条の溝から成る。便宜的に南側の溝を15-1号溝、北側の溝を15-2号溝と呼称して報告する。

なお、本溝の遺存状態は不良である。

**位置** 本群は2区中西部に位置する。209～210-404～411グリッドに所在する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 15-1号溝 長さ：6.8m 幅：35cm 深さ：5cm

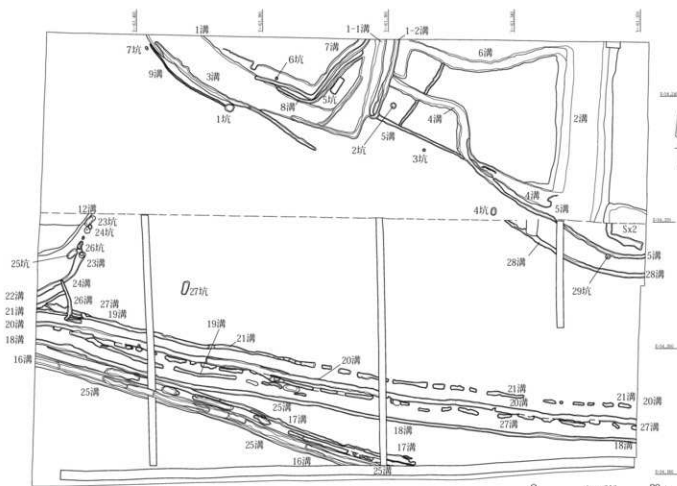
15-2号溝 長さ：7.1m 幅：46cm 深さ：6cm

**覆土** As-A混じりの明茶褐色土で埋没する。

**構造** 15-1号溝の走向は、中・西部ではN89°Eを呈して直線的に走行し、東部でN85°Wに走向を転じ、直線的に走行する。

15-1号溝の掘削形態は、遺存状態が不良であるため掘削形態はやや不明瞭だが、箱堀状を呈するものと想定される。底面は平底を呈し、底面は西高東低であるが、勾配率は僅かに0.12%を測るに過ぎず、ほぼ平坦である。

15-2号溝の走向はN90°を呈し、直線的に走行するが、東端部でN25°Eに走行を転じ、更に走向をN90°に転じて直線的に走行する。東端部の位置は、以西の地域より30cmより北にある。



第68図 2区2面全体図 (S=1/600)

## (2) 2区2面の遺構と遺物

### 1. 2区2面の概要

2区2面の遺構は北部のものと南部のものに分かれるが、共に溝を中心とし、若干の土坑が混在する。北部の遺構は北西端から東へ数十m地点と北東端から南へ40m地点を結ぶ線より北東側に分布する。1～5号溝と28号溝、1～7号土坑と29号土坑が検出され、一方、南部は南寄りに12・16～27号溝と、24・26号土坑が分布している。

上述のように、2区2面の溝群は19条の溝から成るが、その走行から、2号溝、4号溝、11号溝、24号溝、1・7号溝、3・5・9・28号溝、12・22・23号溝、16・17・25号溝、18・19・20・21・27号溝の4条5群のグループに分類されるが、溝遺構はグループ毎に記載する。また土坑群は一括記載する。

なお、11号溝は、4面に確認した遺構であるが、土層確認から木面に含まれるものとして報告する。

### 2. 1-1・1-2・3・7・8・9号溝

(第69～71図、PL.31・77・78)

**概要** 1-1号溝は大型の溝であるが、1-1・3・7・8・9号溝は1号溝に近接して、同溝に近い走行を取る中、小型の溝遺構である。3号溝を除く各溝は、1-1号溝は北西端、北東端が調査区外に出ており、1-2号溝の北端は調査区外に出ており、南端は1号溝と重複し、7・8号溝は北東端が1号溝と重複し、9号溝は東端が1号土坑と重複しているため、全容は把握できなかった。

**位置** 1・3・7～9号溝は2区中・西北部にあり、1-1号溝は233～249-360～398グリッド、1-2号溝は236～246-358～363グリッド、3号溝は231～248～グリッド、7号溝は239～248-364～389グリッド、8号溝は236～246-363～381グリッド、9号溝は238～248-385～397グリッドに位置する。

**重複** 3・7・8号溝は、それぞれ1号溝と重複するが、新旧は特定できなかった。また9号溝は1号土坑と重複するが、9号溝の方が古い。なお、3号溝はその走行か

### 第3章 発見された遺構と遺物

ら推して、1号溝の存在に影響を受けていると見られることから、1号溝より、3号溝の方が新しい可能性が考慮される。

**規模** (1-1号溝) 残長:49.4m 幅:465cm 深さ:25cm

(1-2号溝) 残長:14.1m 幅88cm 深さ:14cm

(3号溝) 長さ:31.4m 幅:60cm 深さ:10cm

(7号溝) 残長:23.0m 幅:80cm 深さ:38cm

(8号溝) 残長:17.4m 幅:67cm 深さ:25cm

(9号溝) 残長:15.7m 幅:33cm 深さ:8cm

**覆土** 1-1・1-2・3・7号溝はAs-Bの入る暗灰褐色土等、8号溝はAs-Bを多く含む暗褐色土、9号溝はAs-BまたはAs-Bを含む黒褐色土で埋没する。

**構造** 1-1号溝は南辺と東辺から成る鉤形のプランを呈するが、南辺部西半は西北端の走向がN46°Wを向く、反時計回りの弧状の走向を呈し、東半はN75°Wに走向を取る直線的な走行を呈し、東辺は南部がN18°E、北端部がN10°E測る、時計回りの弱い弧状の走行を呈する。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底状であるが、南辺の東壁から11.1m以東の南壁から東辺の東壁に沿って、南辺では幅82cm、1号溝底面からの深さ8cm、東辺では幅192cm、底面からの深さ15cmを測る溝が掘削されている。また、この溝の東壁から6.2mの地点からN59°E、更にN38°Eに走向を転じ、この溝の北部は1号溝東辺部分の西壁に沿って、幅53cm、1号溝底面からの深さ8cm以下を測る別の溝遺構が、北側調査区端から6mの地点まで掘削される。底面は南東部が最も低く、西高東低、北高南低で、前者の勾配率は0.91%、後者の勾配率は0.99%を測る。

1-2号溝は北端部でN8°E、南端部でN18°Eに走向を取る。反時計回りに緩やかな弧状の走向取り、南端部で西側に折れて、N88°Wを向く。掘削形態は箱堀状を呈し、底面の横断面形は丸底状を呈する。底面は北高南低であるが、勾配率は0.62%を測るもので、ほとんど高低差はない。

3号溝は1号溝の中にある西半部と、その南側に出る東半部に分けられる。西半部は、北西端はN55°W、東部はN63°Wに走向を取り、反時計回りに緩やかな弧状の走向を取り、東半部は、西部がN66°W、南東端部はN57°Wに走向を取り、時計回りに緩やかな弧状の走向を取る。西半部と東半部は、N76°Wに走向を取り、長

さ2.2m程を測る直線的に走行する部分を経て接続するが、この部分は1号溝西辺の南肩に乗る。本溝の掘削形態は箱堀状を呈し、底面の横断面形は極弱い丸底状を呈する。本溝の底面は中央部が東西両側に比して僅かに低い。

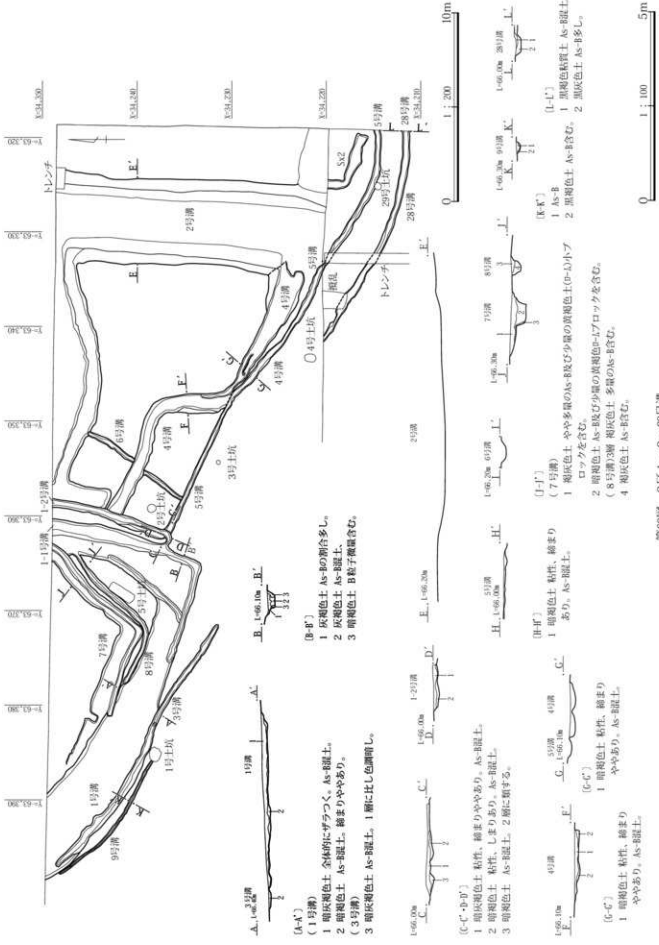
7号溝は南辺と東辺から成る鉤形のプランを呈するが、南辺はへ字状の走向を呈し、西半はN74°W、東半はN65°Wの走向を取る。東辺は南半部は直線的、北半部は蛇行するが、南半部はN39°E、北半部は南部はN57°E、北端部ではN40°Eに走向を取る。掘削形態は箱堀状で平底を呈す。底面は、北東、南東隅部に対して南東隅部が低いが、その勾配は僅かである。なお、7号溝の北側に1.6m、西側に0.9m隔てて7号溝に沿い、7号溝側に10cm以下の比高差で低くなる段差が並走する。この段差は南西隅で7号溝が途絶えて以西も6.6m程延長しているが、7号溝が途絶えた直西側では、幅2.4m、長さ130cm程を測る隅丸長方形プランの張り出しが南方向に突出する。

8号溝は南辺と東辺から成る鉤形のプランを呈するが、南東隅は弧状を呈する。南辺は時計回りに極緩やかな弧状を呈し、西端部はN63°W、東部はN70°Wに走向を取り、東辺は時計回りに弧状の走向を呈するが、南部はN44°E、中位はN40°E、北端部はN60°Eに走向を取る。掘削形態は箱堀状を呈し、底面の横断面形は丸底状を呈する。底面は南西高北東低で、勾配率は1.72%を測る。

9号溝の中・西部は反時計回りの弧状の走行を呈し、東部は直線的な走行を呈し、東端部で南に屈曲する。その走向は北西端でN37°W、中・東部でN64°W、東端部はN59°Wを測る。掘削形態は箱堀状を呈し、底面の横断面形は丸底状を呈する。底面は西高東低であるが、勾配率は0.83%を測るに過ぎない。

**遺物** 1号溝は多くの土師器片や椀(100)・羽釜(101)を含む須恵器片、土錘(102)、砥石(103)、敲石(104～106)火打石(107)、不明石製品(108)が出土しているが、4号溝との帰属が峻別できなかった。遺物には灰黒陶器長頸壺(109)があった。また、3号溝は少量の土師器片や敲石(119)、7号溝は土師器片や椀(125)を含む須恵器、鉄滓(126)、8号溝は須恵器片と少量の土師器片や敲石(127)、9号溝は少量の須恵器片が出土している。





(A-A') (1号溝)  
 1 暗灰褐色土 粘性、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 粘性、しまりあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり。

(2号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(3号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(4号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(5号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(6号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(7号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(8号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

(9号溝)  
 1 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 2 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。  
 3 暗褐色土 As-B層土、結まりややあり、As-B層土。

第69図 2区1~9・28号溝

**所見** 1号溝は、その規模等から推して水路の可能性を有するものの、その掘削意図は特定できなかった。また、3・9号溝の掘削意図は特定できず、7・8号溝はそのプランから推して、区画溝の可能性も考慮されるが、掘削意図は特定できなかった。

なお、7号溝の北及び西に並走する段差の突出部は、その形態から信玄堤のプランに近似している。

その時期は、9号溝が覆土の観察所見からAs-B降下後、早い段階のものであるとみられる。しかしながら、他の溝の時期は特定できず、中世を中心とする時期の所産とできるに過ぎなかった。

### 3. 2号溝(第69・70図、PL.31・78)

**概要** 本溝は大型の溝であるが、遺存状態は良好とは言えず、2区南半部に比して確認面の高かった、北半部の調査区(2期調査)のみで確認された。また、本溝の北部は調査区外に出ていて確認できなかった。

**位置** 本溝は2区北東部にあり、220～248-323～334グリッドに位置する。

**重複** 本溝は4・5号溝と重複する。が、新旧は特定できなかった。

**規模** 残長：27.5m 幅：900cm 深さ：25cm

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 本溝は直線的な走行を呈し、その走向はN4°Eを向く。

掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底である。底面は地形とは逆の南高北低を呈するが、勾配は0.18%と、ほぼ平坦である。

**遺物** 在地系土器片口鉢(110～113・116)・内耳鍋(117)、瀬戸・美濃焼陶器すり鉢(114)、尾張陶器片口鉢(115)、葎石(118)があった。

**所見** 本溝は、その規模から推して水路の可能性を有するものの、その掘削意図は特定できなかった。

また本溝は、その走向から推して、条里方眼に即して掘削された可能性が考慮される。

その時期も特定できず、おおよそ中世の所産とできるに過ぎなかった。

### 4. 4・5・28号溝(第69～71図、PL.31・32・78)

**概要** 4号溝は中型の溝であり、5・28号溝は小型の溝

である。

4号溝と5号溝は途中流路が重なりね15号溝と28号溝が並走するようにあるため、合せて報告する。

また、4号溝は西端は1-2号溝と重複して、その以西は確認されず、東端部は東側調査区外に出ていたため全容は把握できなかった。また4号溝はその中程、5号溝との重複部以東では、遺構が不明瞭となり、的確に遺構を把握することができなかった。

5号溝は西側が1-1号溝と重複して、その以西は確認されず、東端部は南側調査区外に出るため、全容は把握できなかった。また5号溝はその中程、4号溝との重複部では、遺構が確認できなかった。

28号溝は、西端(北西側)は北半部の調査区(2期調査)では確認されなかった。

なお、5・28号溝は、その位置と走行から推して、共に3区6号溝に接続する可能性が考えられるが、5号溝の方がその可能性が高いものと思慮される。

**位置** 4・5・28号溝は2区北東部にある。4号溝は220～243-329～359グリッドに、5号溝は214～236-319～361グリッド、28号溝は211～220-319～341グリッドに位置する。

**重複** 4号溝は1-2・2・5・6・22号溝と重複するが、5号溝は土層観察からは併存していた可能性が考慮されるものの、他の溝との新旧関係を特定することはできなかった。後述のように6号溝に対しては本溝の方が古い可能性がある。

また、5号溝は1-2・2・4・6・22号溝と重複する。4号溝は併存していた可能性が考慮されるものの、他の溝との新旧は特定できなかった。

28号溝は単独であり、他の遺構との重複は見られなかったが、5号溝と東側で2.2m、西側で2.8mの間隔を以て、ほぼ並走する。

**規模** 4号溝 残長：34.7m 幅：140cm 深さ：18cm

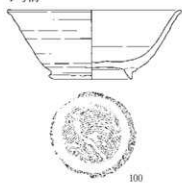
5号溝 残長：35.0cm(推定全長：51.2m)幅：68cm 深さ：7cm

28号溝 残長：24.8m 幅：73cm 深さ：17cm

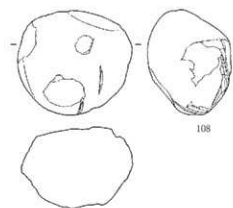
**覆土** 4・5号溝はAs-B含む暗褐色土等、As-B混黒褐色粘質土等で埋没する。

**構造** 4溝の西北端部は、走向をN63°Wに向け、反時計回りに緩やかな弧状を呈して11m程走行し、N3°W

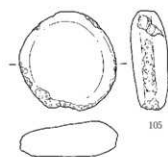
1号溝



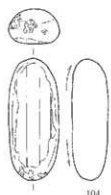
100



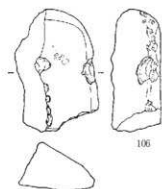
108



105



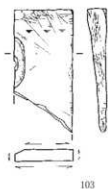
104



106

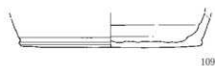


107

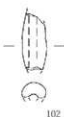


103

1・4号溝



109



102

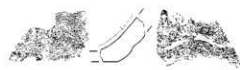
2号溝



115



113



110



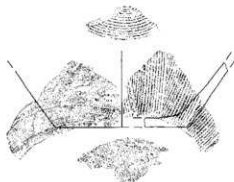
116



112



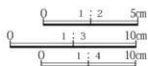
117



114



118



第70図 2区2面の溝遺構出土遺物(1)

3号溝



119

4号溝



120

5号溝



122



124

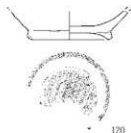


123



121

7号溝

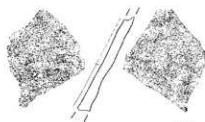


125

16号溝



128



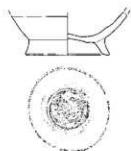
129

8号溝



127

20号溝

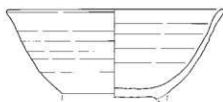


130

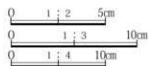
23号溝



131



132



第71図 2区2面の溝遺構出土遺物(2)

に走向を転じて短く直線的に走行した後、その南端部で北西側から来る5号溝の上流部と合流する。以東において4号溝は3条に分流するが、最も南の本流と認識されるものを、「4-1号溝」、北寄りのものを「4-2号溝」、中位を流下するものを「4-3号溝」と仮称して、以下報告する。

4-1号溝は5号溝上流部が合流した後、反時計回りに走向して、5号溝下流部に接続する。4-1号溝と5号溝下流部との境は明瞭ではないものの、その幅員から、4号溝と5号溝上流部との合流点から、略東南東方向、8.6m付近が5号溝との境になるものと思われる。一方、5号溝との合流点の北側の直線部南半部の東壁際に、幅72cm以下、4号溝本体の底面から15cm低い4-2号溝が分岐するが、4-2号溝は東方に短く走行した後、N68°W方向に走向を転じて直ぐに、N62°Wに走向を転じた辺りで、4-3溝が南側に分岐する。4-2号溝は4-3号溝分岐後、直線的に走行し、更に反時計回りに緩やかな弧を描きながら、2号交差点に至る。一方、4-3号溝も分岐後、反時計回りに緩やかな弧を描いて走行するが、4-2号溝との分岐点から東南東方向256cm程の地点で4-2号溝の北壁と4-1号溝の南壁が失われて、4-2号溝の端部である、4-2号溝が2号溝と交差する手前13メートル地点まで一体の溝として走行する。

5号溝は4号溝と合流するまでの西部と、4号溝と接続した以東の東部とに分かれる。西部は19m程を測り、N67°Wに走向を取り、直線的に走行して、東端部は4号溝に合流する。東部は、上述のように4号溝接合部以東の区域であり、長さ25m程を測り、西端部はN59°Wに走向を取り、反時計回りに緩やかな弧状を呈して8.5m程走行するが、その東端の走向はN70°Wに向き、ここから走向をN56°Wに走向を転じて、9m程直線的に走行した後、N85°Wに走向を転じて反時計回りに弧状に走行し、東端部の走向は、N82°Wを測る。

28号溝は西北端部でN57°W、東端部でN88°Wに走向を向けるが、反時計回りに弧状に走行する。

掘削形態はいずれの溝も箱型状を呈し、4号溝の底面の横断面形は位置により平底、または丸底を呈し、5・28号溝の底面は平底である。4号溝の勾配はほとんど無く、5・28号溝は西高東低であるが、その勾配は5号溝は0.16%、28号溝も0.52%を測るに過ぎない。

**遺物** 4号溝からは土師器・須恵器・陶器片や尾張陶器

片口鉢(120)が出土した。なお、1・4号溝のいずれにも属するか判断はできなかった出土遺物に、灰釉陶器長頸壺(109)がある。

5号溝からは土師器・須恵器・陶器片や土鍾(121)、敲石(122～124)が出土した。

28号溝からは少量の土師器片が出土したに過ぎなかった。

**所見** 4・5・28号溝は、水路の可能性を有するものの、その掘削意図は特定できなかった。

その時期も特定できず、おおよそ中世の所産とできるに過ぎなかった。

### 5. 6号溝(第69図)

**概要** 本溝は、中規模の溝遺構である。北側を排水溝で壊され、南側は5号溝と重複しているため、全容を詳らかにすることはできなかった。なお、本溝は13m程の間隔を以て、西側の7・8号溝と並走するようにある。

**位置** 本溝群は2区中北部にあり、235～245-351～358グリッドに位置する。

**重複** 本溝は4・5号溝と重複する。が、新旧関係を特定することはできなかったが、4号溝との交点でクランクするものと推定されることから、4号溝を意識して掘削された可能性が考慮されることから、本溝の方が新しいものと推定される。

**規模** 残長：12.1m 幅：64cm 深さ：11cm

**覆土** の記録は残せなかった。

**構造** 本溝は極緩やかに蛇行する走行を呈するが、溝の中程、4号溝との交点付近を境に、その北側に對し、南側は60cm程西にずれる。また、その走向は北側の北端ではN20°E、南端ではN28°E、南側ではその北端でN28°E、南端ではN29°Eに取る。掘削形態は箱型状を呈する。

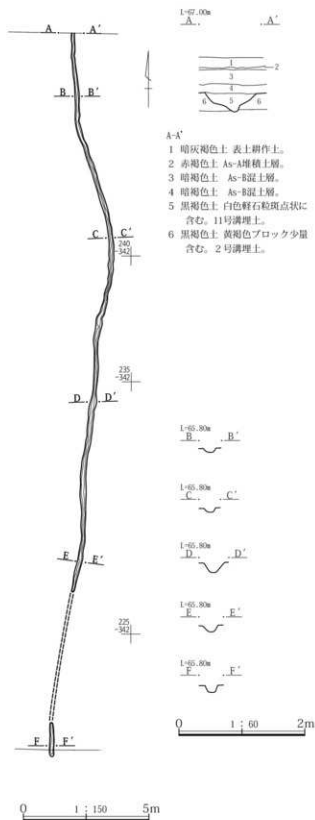
**遺物** 本溝からは僅かな須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 本溝群の掘削意図は把握されなかった。

またその時期も、確認面から推して、概ね中世と想定されるに過ぎなかった。

### 6. 11号溝(第72図)

**概要** 11号溝は、小型の溝遺構である。本遺構は北側が



第72図 2区11号溝

調査区外に出ているため、全容を確認することはできなかった。

なお、本溝は、2・3面では確認されず、4面で確認された。しかしながら、土層断面の確認により、2号溝を切ることが確認されたため、本面に含めた。

**位置** 11号溝は2区中東部から北側にかけてあり、214～249-342～352グリッドに位置する。

**重複** 11号溝は4面においては単独で在ったが、土層断面の観察では、2面の2号溝と重複しこれを切る。

**規模** 11号溝 残長36.5m 幅：27cm 深さ：6cm

**覆土** 11号溝は黒褐色土で埋没する。

**構造** 11号溝の西端3.7mはN90°E方向を向き、その東は4.3mの間は順次N83°E、N74°Eと走行を走行の方向を変じ、東端で反時計回りに大きく転じてN7°Eに向く、その後1.2m途絶えて1.35m程が確認され、再び5m程途絶えて、以北は再び現れるが、全体として22m程直進した後、極緩やかな弧を描きながらN14°W、N3°Wと走行の方向を転じて北側調査区外に抜ける。

掘削形態は箱堀状を呈する。底面は凹凸は見られるが、全体としては平坦であり、南側東西走行部分では東高西低で1.03%の勾配であり、東側南北走行部分では南高北低で0.16%を示す。全体としては北端が高く西端が低く、その勾配は0.13%である。

**遺物** 僅かな土師器片が図示すべきものはなかった。

**所見** いずれの溝についても掘削意図を特定することはできなかった。なお、プランから推して、11号溝は区画溝の可能性を有し、33・34号溝は区画溝、あるいは水路の可能性が考慮される。

また各溝共に、概ね古墳時代の所産として把握されるが、その時期を特定することはできなかった。

### 7. 24号溝(第73図)

**概要** 本溝は、短い区間しか調査できなかった。また本溝は、近接する12・22・23号溝の溝群、あるいは18・19・20・21・21-2・26・27号溝の溝群と交差する位置関係にあり、両溝群とは異なる掘削意図を有していたものと認識される。

**位置** 本溝群は2区西端部のやや南寄り、204～210-409～411グリッドに位置する。

**重複** 21・21-2・22・23・26号溝と重複する。が、いず

れの溝に対しても、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 残長：30.5m 幅：50cm 深さ：4cm

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 北端はN20°Wから入り、中位でN0°に走行を転じ、南端でN120°Wに方向を転じて抜ける。掘削形態は箱型を呈する。

**遺物** 本溝からは土師器、須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

**所見** 本溝群は調査区域も短く、覆土の記録も遺せなかったため、掘削意図は把握されなかった。

またその時期は、特定できず、概ね中世と想定されるに過ぎなかった。

#### 8. 16・17・25号溝(第71・73図, PL.31・32)

**概要** 本溝群は、芯々幅で16号溝と25号溝が1.5m、25号溝と27号溝1mの間隔で並走していた。また位置と規模、及び走行方向から推して、16号溝は西側1区の2面13号溝の延長したものであり、同様の理由から17号溝は1区2面19号溝の延長したものであると想定される。

**位置** 本溝群は2区南部に西寄りにあり、16号溝は181～198-361～415グリッド、17号溝は181～200-355～415グリッド、25号溝は181～196-355～405グリッドに位置する。

**重複** 25号溝と16・17号溝は側縁で重複し、17・18号溝が重複する。が、16号溝が25号溝を切る以外は、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 16号溝 残長：58.0m 幅：205cm 深さ：41cm

17号溝 残長：62.0m 幅：63cm 深さ：4cm

25号溝 残長：51.0m 幅：110cm 深さ：11cm

**覆土** 16号溝：As-B軽石混土で埋設するが、中位層はロームブロック多く、下位層は暗灰色粘質土ブロックで埋まるため、人為的に埋められたものと思量される。

17号溝：18号溝との分層はできなかったが、一括の埋土としてAs-Bを多く含む。下位層には砂も多く含まれるため、流水の可能性を有する。

25号溝：上位層はAs-B多く含む、下位層はロームブロック多く含む。このため、少なくとも下位層は人為的に埋められたものと思量する。

**構造** 25号溝は断続的に不定長、不定間隔に連なるが、底部の遺存と判断して溝道構として取り扱った。

16・17・25号溝は、西部では1区の13溝東部と同じ、N76°Wに走行を取るが、東部では僅かに時計回りに走行を転じ、N70°Wに走行を取る。掘削形態は16号溝は壁面が緩やかな葉研状を呈し、17・25号溝は箱型を呈する。16・25号溝の底面は長軸方向に緩やかな凹凸が見られる。このうち16号溝の底面は、比高差10cm程で、凹部の長さも3～10数mと比較的長く、またその間隔も3～10mと比較的長い。一方、25溝は45mの間に底面の凹部が見られるが、この凹部は、比高差10～10数cm程で、凹部の長さも3m弱から10m程、その間隔も2、3m以上と比較的短い。凹部の間は陥子の可能性もあるが、この場合の陥子堀は、井上哲朗の陥子堀の分類(井上2000)ではB-II類に分類される。

**遺物** 16号溝は少量の土師器と椀(128)を含む須恵器片や常滑陶器片口鉢(129)、17号溝は僅かな土師器片が出土したが、25号溝からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 本溝群は16号溝の西側延長部分と見られる1区13号溝が、西端で直角に南方向に折れる(S°Wに)ことから区画溝であると判断されるが、1区13号溝で想定したように、屋敷遺構の堀である可能性が考慮されるが、この場合、屋敷の規模は一町(108m)以上あった可能性が考慮される。また16・17・25号溝は、その走行の一致と掘削位置の近接から、重複関係にあったものと認識されるが、16号溝は25溝を掘り直したものと判断される。

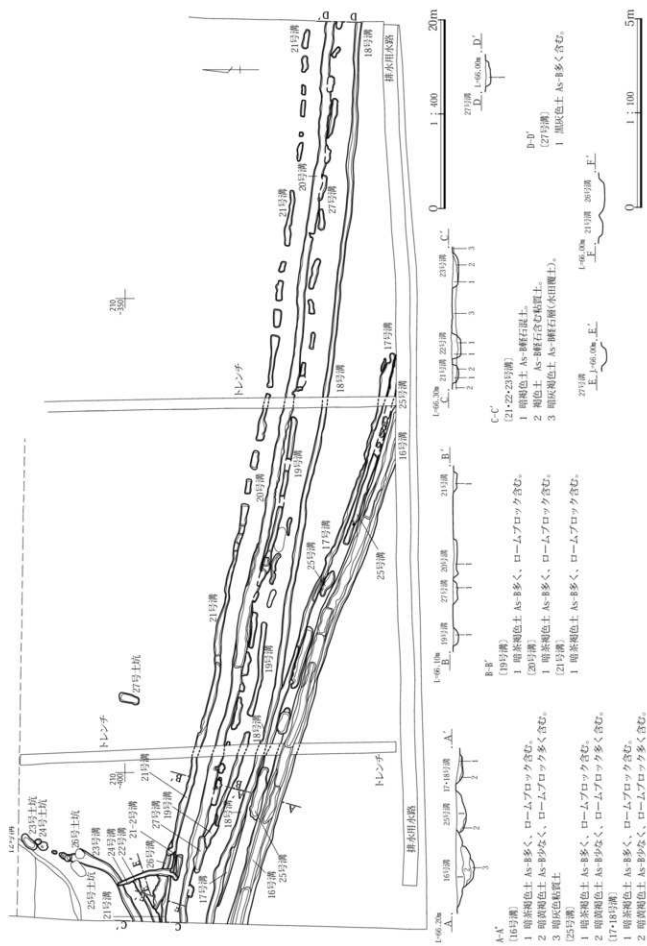
またその時期は概ね中世と思量されるが、25号溝が陥子堀であるとするならば、その時期は15世紀中葉以降と言えよう。

#### 9. 18・19・20・21・21-2・26・27号溝

(第71・73図, PL.32)

**概要** 本溝群は18～21・21-2・26・27号溝から成り、芯々幅で18号溝と19号溝が2m、19号溝と27号溝が1.25m、27号溝と20号溝が1m前後、20号溝と21号溝が2.25m、20号溝と21-2号溝が0.6m、21号溝と21-2号溝が1.1m、21号溝と26号溝が0.7m以下の間隔で概ね並走していた。また西端部の走行から19号溝と26号溝は同一意図による掘削が想定され、20・21・27号溝は掘り直しの可能性が考慮される

また、本溝群は、短い区間のみで確認された21-2・27号溝と区中央で途絶える19号溝を除けば、2区を東西に貫



- A-A'**  
 (16号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。  
 2 暗茶褐色土 As-B少なく、ロームブロック多く含む。  
 3 暗灰色粘質土  
 (25号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。  
 2 暗茶褐色土 As-B少なく、ロームブロック多く含む。  
 (17・18号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。  
 2 暗茶褐色土 As-B少なく、ロームブロック多く含む。

- B-B'**  
 (19号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。  
 (20号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。  
 (21号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。

- C-C'**  
 (21・22・23号溝)  
 1 暗褐色土 As-B粘石混土。  
 2 褐色土 As-B粘石含む粘質土。  
 3 暗灰色褐色土 As-B粘石層(水田覆土)。  
 (21号溝)  
 1 暗茶褐色土 As-B多く、ロームブロック含む。

- D-D'**  
 (27号溝)  
 1 黒灰色土 As-B多く含む。  
**E-E'**  
 (16号溝 21号溝 25号溝)

第73図 2区16～27号溝



通している。このうち18号溝は3区20号溝と、20号溝は3区7号溝と、21号溝は3区18号溝と位置的に接続するものと判断されたが、西側の1区への延伸は確認されなかった。

**位置** 本溝群は2区南部に西寄りに位置する。18号溝は185～201-320～415グリッド、19号溝は192～203-373～408グリッド、20号溝は188～204-320～415グリッド、21号溝は190～206-321～415グリッド、21-2号溝は203～204-408～411グリッド、26号溝は204～207-410～414グリッド、27号溝は187～203-320～グリッドにある。  
**重複** 18号溝と17号溝、27号溝と19・20号溝、21は側縁で重複し、24号溝と21・21-2・26号溝が重複する。が、いずれに対しても新旧関係は特定できなかった。

**規模** 18号溝 残長：97.8m 幅：85cm 深さ：11cm  
19号溝 残長：36.5m 幅：74cm 深さ：15cm  
20号溝 残長：77.8m 幅：104cm 深さ：13cm  
21号溝 残長：97.0m 幅：55cm 深さ：10cm  
21-2号溝 残長：2.5m 幅：63cm 深さ：8cm  
26号溝 残長：7.5m 幅：90cm 深さ：11cm  
27号溝 残長：95m 幅：64cm 深さ：11cm

**覆土** 18号溝：17号溝との分層はできなかったが、一括の埋土としてAs-Bを多く含む。下位層には砂も多く含まれるため、流水の可能性を有する。

19・20・21・27号溝：As-B多く含む、ロームブロック含む暗茶褐色土。

21-2・26号溝：覆土の記録を残せなかった。

**構造** 19・21・27号溝は東寄りで断続的に不定長、不定間隔を以て連なる。

18号溝は西部ではN74°W、東部ではN87°Wに走行を取り、比較的直線的なプランを呈する。幅員の増減はあまり見られない。掘削形態は箱型状を呈する。

19号溝は27号溝と重複する。西端でN58°W方向に走行を取るが、以東は蛇行しており、全体としての向きはN89°Wである。掘削形態は箱型状を呈する。

20号溝は、西端部はN87°Eを向くが、以東は直線的に走行するが、西部はN75°Wを向き、弱く時計回りに走行を転じて、東部はN86°Wを向く。掘削形態は箱型状を呈する。

21号溝は、西端部はN89°Wを向くが、以東は弱く蛇行するが、その走行の方向はN79度Wの方向を向き、東

端近くはN97°Wを向く。また東寄りでは断続的で、中・西部も底面の凹凸があるが、途絶箇所と盛り上りの幅はおおよそ50cm、75cm、100cmの3種に分けられる。しかし、確認面と底面、あるいは底面の凹凸間の比高差は小さく、障子堀とは見られないため、東部は底面の凹部が遺存した状態と考えられる。掘削形態は箱型状を呈する。

21-2号溝は21号溝に並走するが、短区間のみの確認であったため全容は詳らかでない。その走行は緩やかな曲線をし、全体としてN79°Wを向く。掘削形態は箱型状を呈する。

26号溝も短区間のみの確認であったため全容は詳らかでないが、東端はN57°Wを向き、以東は極緩やかな蛇行を見せて、走行の方向は概ねN75°Wを向く。掘削形態は箱型状を呈する。

27号溝は不連続的に遺存する。その走行は個々の遺存部分で異なるため蛇行していたものと判断されるが、全体として、走行軸はN78°Wを取る。また21号溝と同様、確認面と底面、あるいは底面の凹凸間の比高差は10cm以下と小さく、障子堀とは認められないことから、本溝は底面近くが依存したものと思慮される。掘削形態は箱型状を呈する。

**遺物** 18号溝は須恵器片、19・21・27号溝は少量の土師器・須恵器片、20号溝は土師器片や椀(130)を含む須恵器片が出土した。26号溝からの出土遺物は見られなかった。なお、21-2号溝の出土遺物の有無は確認できない。

**所見** 本溝群は全体としてN80°W前後を向き、自然地形の傾斜に合わせて掘削されたものと思慮される。またいずれの溝についても掘削意図は特定できず、18号溝以外は覆土においても確認できなかったが、19・26号溝の走行には蛇行が見られ、19・21・27号溝の底面の凹凸が見られることから流水の可能性も考慮される。しかし、その勾配は18号溝で0.33%、19号溝で0.16%、20号溝で0.32%、21号溝で0.30%、27号溝で0.29%と、ほとんど水平に近い状態にあるため、水路であるか否かを断定することはできない。一方、プランが蛇行するものがあるため、土地区画の溝とすることは、躊躇せざるを得ない。またその時期は概ね中世と思慮される。

10. 22・23号溝(第71・73図、PL.32・78)

**概要** 本溝群は、芯々幅で22号溝と23号溝が1.75mの間隔で並走する。また西側の1区での延長確認されなかった。

**位置** 本溝群は2区西端部やや南部に西寄りに位置する。22号溝は206～209-411～417グリッド、23号溝は208～217-408～417グリッドにある。

**重複** 22・23号溝が24号溝、22号溝が26号溝と重複する。が、共に新旧関係を特定することはできなかった。また12・22・23号溝の新旧関係も特定できなかった。

**規模** 22号溝 残長：5.2m 幅：72cm 深さ：10cm  
23号溝 残長：11.0m 幅：92cm 深さ：16cm

**覆土** 22・23号溝は共に下層が粘質土で、上下両層共にAs-B層石が混入する。

**構造** 22号溝は西側よりN61°Eの角度で調査区に入り、を取るが、東部では僅かに時計回りに走行を転じ、N70°Wに走行を取る。

23号溝は西側よりN74°Eの角度で調査区に入り、半ばまで直線的に走行するが、中程で反時計回りに走行をN23°Eに転じて、北端では蛇行するが、蛇行部分では底面が断続的に確認できたに過ぎない。

掘削形態はいずれの溝も、箱型を呈する。

**遺物** 22号溝からは僅かな量の土師器・須恵器片、23号溝からは少量の土師器片や椀(131・132)を含む須恵器片が出土した。

**所見** 両溝は、調査区の西側に延伸するが、共に西接する1区では確認されなかった。

掘削意図は確認されなかったが、その走行から推して、1区東部の舌状を呈する微高地の東縁に沿って掘削された可能性が有る。

また、その時期は概ね中世とできるに過ぎないが、上述の舌状の微高地の南寄りには、近世の開削によって削平されるため、少なくとも近世中期以降に下る可能性は少なく、また、16・17・25号溝群や18・19・20・21・21-2・26・27号溝群と異なった走行の方向を見せることから、両溝群とは異なる時期の所産と想定される。

11. 2区2面北半部の土坑群(第74図)

**概要** 本項では2区2面の土坑のうち、X=200ライン以北に所在する、1～7号土坑の7基の土坑を報告する。

**位置** 本土坑群のうち1号土坑は2区中北部西寄り、2・3号土坑は2区中北部東寄り、4号土坑は2区中東部西寄り、5・6号土坑は2区中北部、7号土坑は北西部に位置する。個々の土坑の位置するグリッドは表16参照のこと。

**重複** 本土坑群のうち、1号土坑は9号溝と重複し、て、これを切るが、他の土坑は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 表16

**覆土** 1号土坑はAs-Bを含む暗褐色土、2～4号土坑はAs-Bを含む褐灰色土、5～7号土坑はAs-Bを多量に含む褐灰色土で埋没する。

**構造** 本土坑群の各土坑のプランは、1～3・6号土坑は円形、4・7号土坑は楕円形、5号土坑は隅丸長方形のプランを呈する。掘削形態は箱型を呈し、1・4・5号土坑は平底、2・3・6・7号土坑は丸底を呈する。

主軸方位は表16に記す。

**遺物** 1号土坑からは僅かな量の土師器・須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

また他の土坑からの遺物の出土はなかった。

**所見** 本溝群各土坑の掘削意図は特定できなかったが、5号土坑のプランは中世の屋敷遺構等で頻繁に見られる隅丸長方形を呈し、この形の土坑は貯蔵穴と解釈される場合が多い。

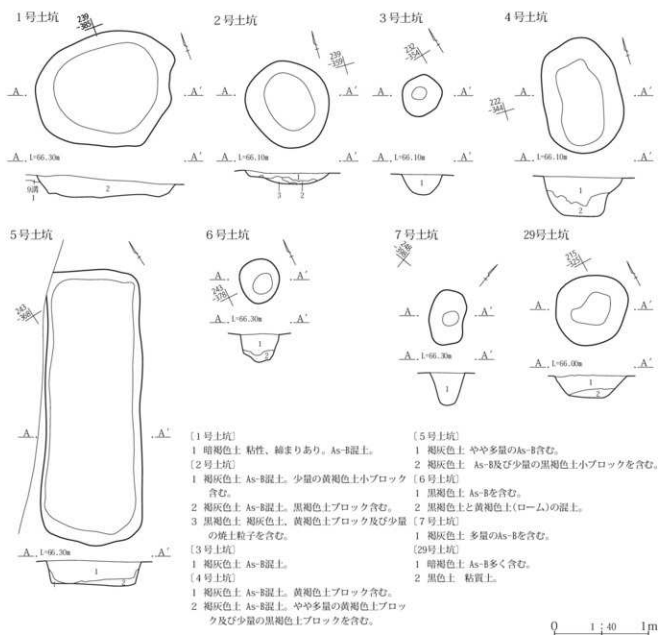
またその時期は、概ね中世と思慮されるが、As-Bを多く含む5～7号土坑はAs-B降下後、比較的早い段階のものである可能性を有する。

11. 2区2面南半部の土坑群(第68・73・75図、PL.78)

**概要** 本項では2区2面の土坑のうち、X=200ライン以南に所在する、23～27・29号土坑の6基の土坑を報告する。

**位置** 本土坑群のうち23～27号土坑は2区南部に西寄りであるが、23～26号土坑は西に寄って12・23溝付近に位置し、27号土坑は少し東に寄って単独で位置する。また29号土坑は、2区東端近くの中程に位置する。個々の土坑の位置するグリッドは表16参照のこと。

**重複** 23号土坑は12号溝と、25・26号土坑は23号溝と重複する。このうち、23号土坑は12号溝を切るが、25号土坑と23号溝の新旧関係は特定できず、26号土坑は23号溝



第74図 2区1・2・3・4・5・6・7・29号土坑

よりなかった。

#### 規模 表16

覆土 29号土坑は底面付近に黒色粘質土を確認したが、23～27・29号土坑は、As-B主体の土壌で埋没する。

構造 23・25・27号土坑は隅丸長方形のプランを呈するが、23号土坑は西壁にやや膨らみを持つ。26号土坑は確認面では隅丸楕形、中下位では隅丸方形を呈する。以上4基の掘削形態は箱形を呈する。

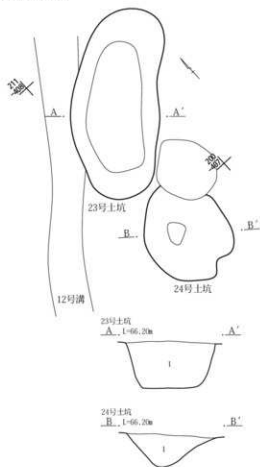
24・29号土坑は楕円形のプランを呈する。共に掘削形態は楕鉢状を呈するが、24号土坑の底面は逆笠形であり、29号土坑の底面は平底を呈する。

主軸方位は表16に記す。

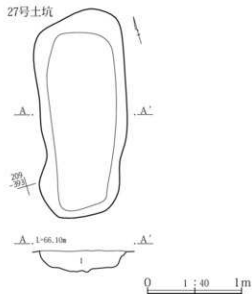
遺物 23～27号土坑からは少量以下の土師器・須恵器片が出土したが、23号土坑からは土師器甕(133)、26号土坑からは土師器椀(134)、29号土坑からは僅かな量の土師器片が出土したに過ぎなかった。

所見 本溝群各土坑の掘削図は特定できなかったが、23・25・27号土坑のプランである隅丸長方形は、中世の屋敷遺構等で頻繁に見られる形態で、貯蔵穴と解釈される場合が多い。またその時期は、概ね中世の範囲で捉えられるに過ぎない。

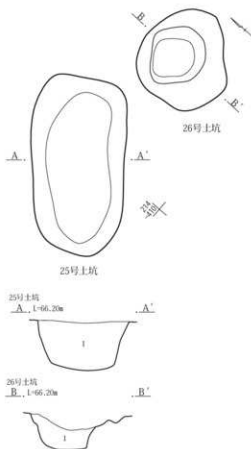
23・24号土坑



27号土坑



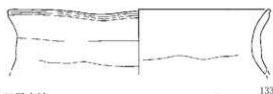
25・26号土坑



[23～27号土坑]

1 暗茶褐色土 As-8多く含み、ロームブロックまばらに入る。

23号土坑



26号土坑



第75図 2区23・24・25・26・27号土坑

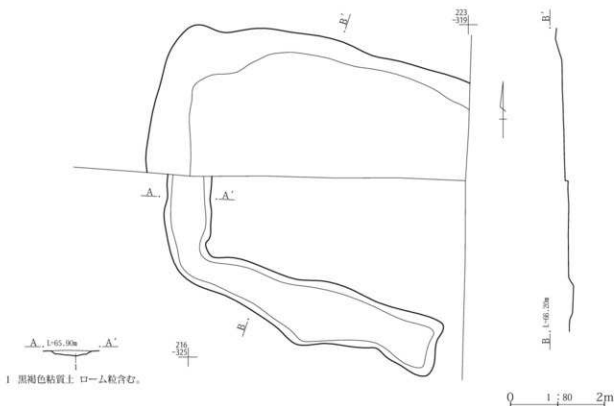
12. 不明遺構(第76図)

概要 本遺構は、北側調査区では段差として確認され、南側調査区では溝遺構として確認された遺構である。

本遺構は東部が調査区外にあり、上述のように南北の

調査区で異なった形状を呈しているため、全容を詳かにすることができなかった。

なお、南側の3期調査区調査区においては、4面にて本遺構を確認した。しかし、北側調査区で2面にて確認



第76図 2区2号不明遺構

したため、2面の遺構として報告するが、4面に属する可能性を有することを記しておく。

**位置** 本遺構は2区中東部東端にあり、215～223-319～325グリッドに位置する。

**重複** 本遺構は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 東西：残長690cm 南北：735cm

**覆土** 本遺構全体の覆土の記録は残せなかったが、南側調査区(3期調査)で検出された黒褐色粘質土で埋没している。

**構造** 本遺構付近の遺構確認面は、北側調査区(2期)に対して、南側調査区は20cm程低い。従って、西側の遺構の範囲は北側に対して、南側は45cm程狭くなっている。

本遺構のプランは隅丸方形様を呈するものと想定される。

上述のように、北側調査区では段差、即ち竪穴状の遺構として確認され、底面は平らである。また確認面からの壁高は19cm以下を測る。

一方南側調査区は幅74～140cm 深さ7cm以下を測る周溝状の遺構として確認され、その走行は西辺と南辺から成る鉤形を呈するが、南東端は途切れている。西辺の

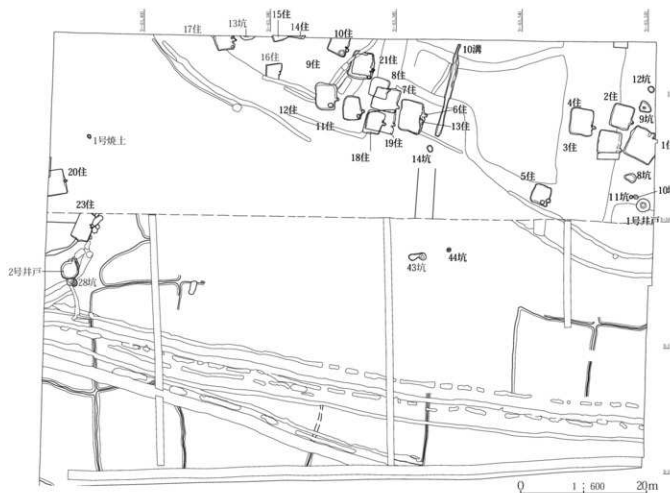
N2°Eを示し、南辺の走向はN21°Wを向く。溝の掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底である。

**遺物** 本遺構からの出土遺物は得られなかった。

**所見** 本遺構は南側調査区の溝の検出は、南側調査区より先行して調査した、北側調査区の確認面より低い位置で把握された。従って、北側調査区にも同様の溝が廻っていた可能性が考えられる。

また、本遺構の掘削意図は想定できなかった。

なお、その時期は、特定されなかった。北側調査区(2期)での確認面からは、概ね中世の遺子として把握されるに過ぎないが、南側調査区の遺構が、中世において窪地として遺されていたとするならば、本遺構は古墳時代まで遡る可能性も有する。



第77図 2区3面全体図

### (3) 2区3面の遺構と遺物

#### 1. 2区3面の概要

2区3面は、おおそ古代に属する遺構である。本面の遺構は、調査3面と調査4面で調査されているが、調査3面に確認された遺構と、調査4面で確認されたもののうち、明らかに律令期に属する遺構として確認できたものを報告する。

2区3面の遺構は北部・東域と、中西部及び南部中・西域並びに東南部と、中央部東寄りに分布域が分かれる。

このうち北部中・東域の遺構は220-320地点と250-390地点を結ぶラインの北側(北東側)に分布し、竪穴住居である1~6・9~19号住居、8~14号土坑、1号井戸が分布する。これらの遺構の検出域、微高地区に当たり、この微高地区は東接する3区に続く。

中西部及び南部中・西域並びに南東部の遺構は、調査区西壁中部~南壁、そして東壁に沿う区域であり、全体にAs-Bテフラで覆われた水田址が遺され、中西部の調査

区西壁に近い付近には、竪穴住居である20・23号住居や2号井戸、28号土坑が分布する。また中央部東寄りには43・44号土坑が在った。このうち水田址の検出された範囲は、3区に続く低地部であり、中西部西端域は、1区に続く微高地区である。

#### 2. 1号住居(第78~81図、PL.35・78・79)

**概要** 本住居は竪穴の竪穴住居である。住居北東隅部は、東側調査区外に出るため、全容は把握できなかった。

**位置** 本住居は2区北東部南寄りの調査区東壁際であり、228~235-318~323グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：505cm 短軸：494cm 深さ：29cm

**竈** 幅：132cm 奥行き：88cm

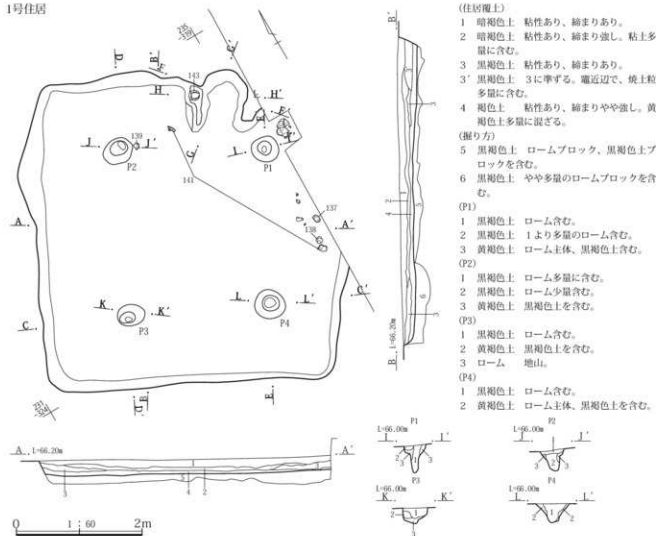
左袖 幅：18cm 長さ：51cm 高さ：16cm

右袖 幅：(42)cm 長さ：(55)cm 高さ：14cm

燃焼部 幅：44cm 奥行：70cm 深さ：2cm

**柱穴1** 径：43×41cm 深さ：45cm

1号住居



第78図 2区1号住居

柱穴2 径：50×40cm 深さ：34cm

柱穴3 径：44×35cm 深さ：35cm

柱穴4 径：50×45cm 深さ：43cm

覆土 暗褐色土等で埋設する。いわゆる三角堆積等を確認することはできなかった。

構造 [竈穴]竈穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN58°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は東部に残径283×134cm 深さ6cm、南西隅部に径258×136cm 深さ13cmを測る大型の土坑を伴う掘り方を有し、ロームブロックを含む黒褐色土等で埋め戻して、床面を造っている。

[竈]竈は北東壁東寄りに設けられ、その方位はN41°Eを向く。掘り方を有し、黒褐色土で埋め戻して燃焼面を作っている。

左右に袖が残るが、天井部の構造は確認できなかった。

[柱穴]床面にはP1(北東)・P2(北西)・P3(南西)・P4(南東)の4基の柱穴が掘削されている。柱穴はいずれも楕円形のプランを呈する。

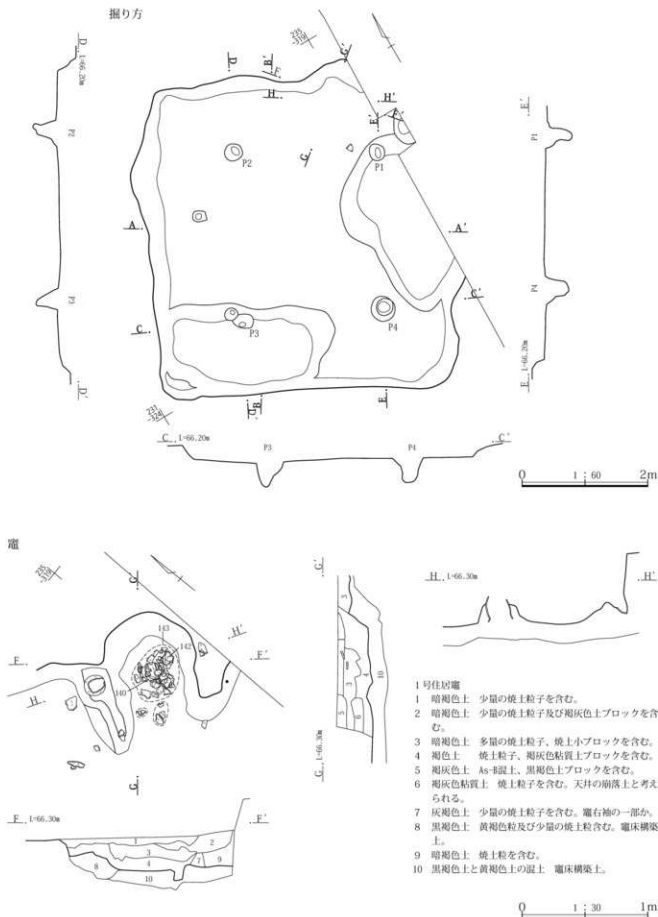
柱間は、P1・2間は228cm、P3・4間は229cmを測り、P2・3間は280cm、P1・4間は233cmを測る。

[貯蔵穴]貯蔵穴は確認できなかった。

[上屋]棟方向は、柱間の測定値の比較では、北東-南西列、北西-南東列のいずれになるか判断はつかなかったが、竈穴の直交する径の比較から、北西-南東方向に棟を置くものと判断される。

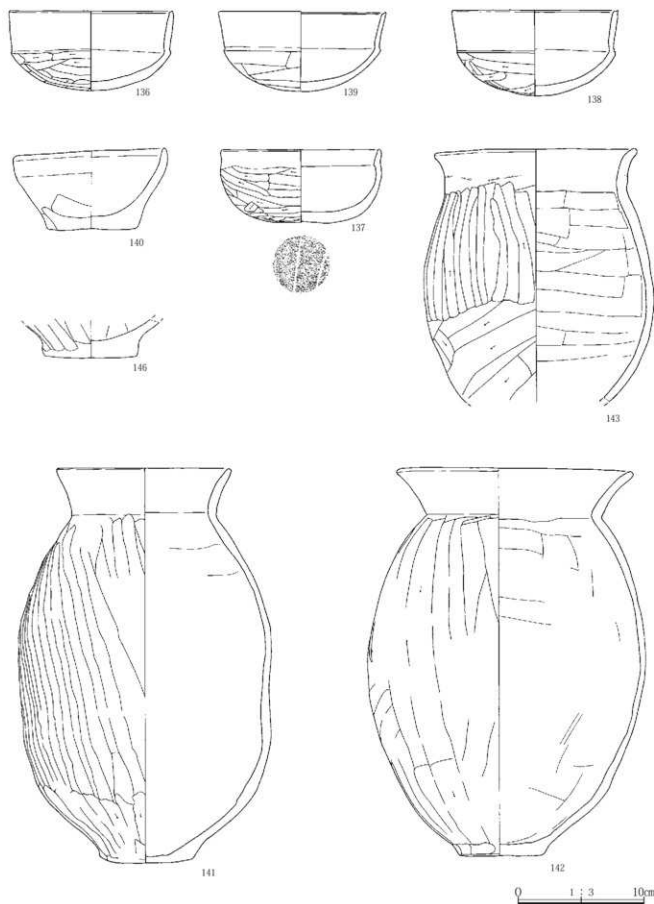
遺物 杯(136～139)・鉢(140)・甕(141・146)・壺(142・143)・甕(144・145)等の土師器と、僅かな量の須恵器片が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、6世紀前半の所産と判断される。

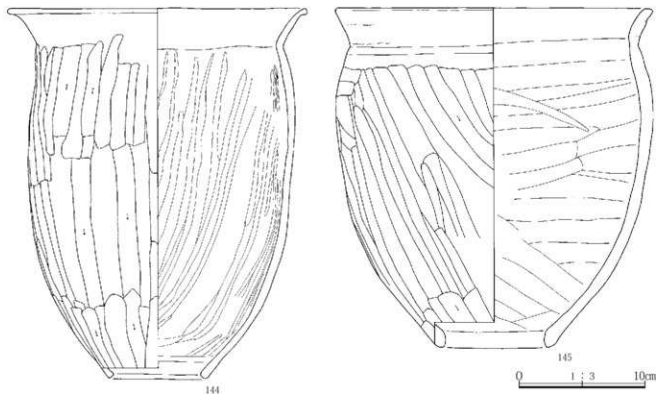


第79図 2区1号住居掘り方と竈





第80図 2区1号住居出土遺物(1)



第81図 2区1号住居出土遺物(2)

### 3. 2号住居(第82・83図、PL.35・79)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。

**位置** 本住居は2区北東部にあり、234～238-322～326グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 長軸：378cm 短軸：340cm 深さ：38cm

**竈** 幅：112cm奥行き：89cm

左袖 幅：42cm 長さ：23cm 高さ：223cm

右袖 幅：(30) cm 長さ：52cm 高さ：17m

燃焼部 幅：40cm 奥行：45cm 深さ：5cm

**柱穴1** 径：40×36cm 深さ：15cm

**柱穴2** 径：35×25cm 深さ：8cm

**覆土** 暗褐色土等で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

**構造** [竈穴]竈穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN73°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は南東隅に径135×99cm 深さ21cmを測る、方形プランを呈する大型の土坑を伴う掘り方を有し、黒褐色土と黄褐色土の混土で埋め戻して、床面を造る。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN71°Wを向く。竈は径50×40cm 深さ57cmを測る柱穴状の掘り込を有する掘り方を持ち、これを黒褐色土、更に灰褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。左右に袖が残るが、天井部の構造は確認できなかった。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は、住居南東隅、竈右側に掘削される。楕円形のプランを呈し、掘削形態は袋状を呈する。

[上屋]棟の方向は、竈穴の直交する軸の比較から、北西—南東方向に棟を置くものと推定される。

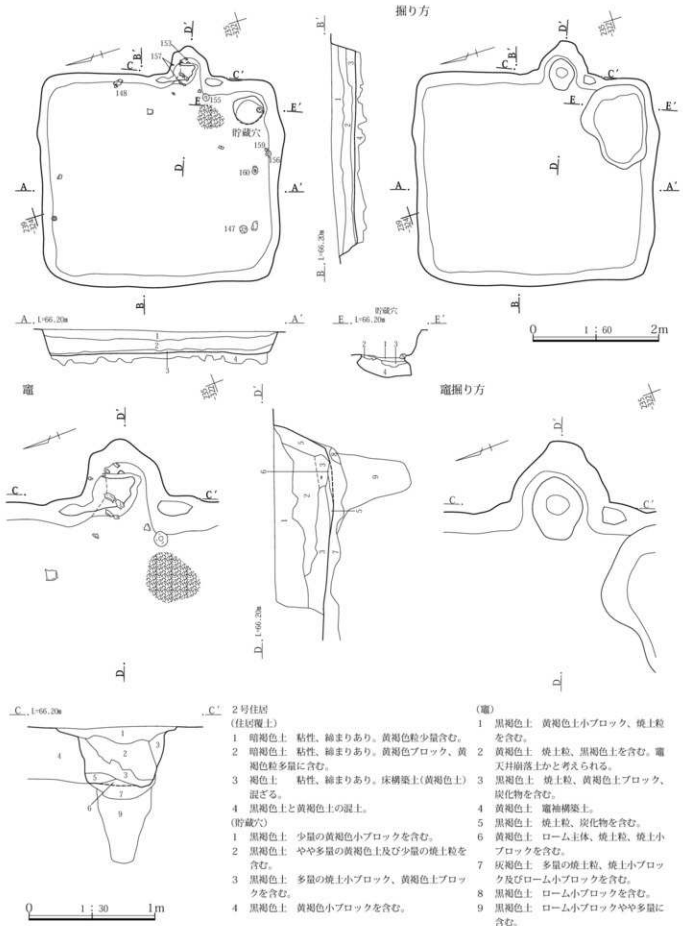
**遺物** 杯(147～151)・甕(152・153)・台付甕(154)等比較的多くの土師器と、杯(155・156)・椀(157～160)須恵器、不明鉄製品(161)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

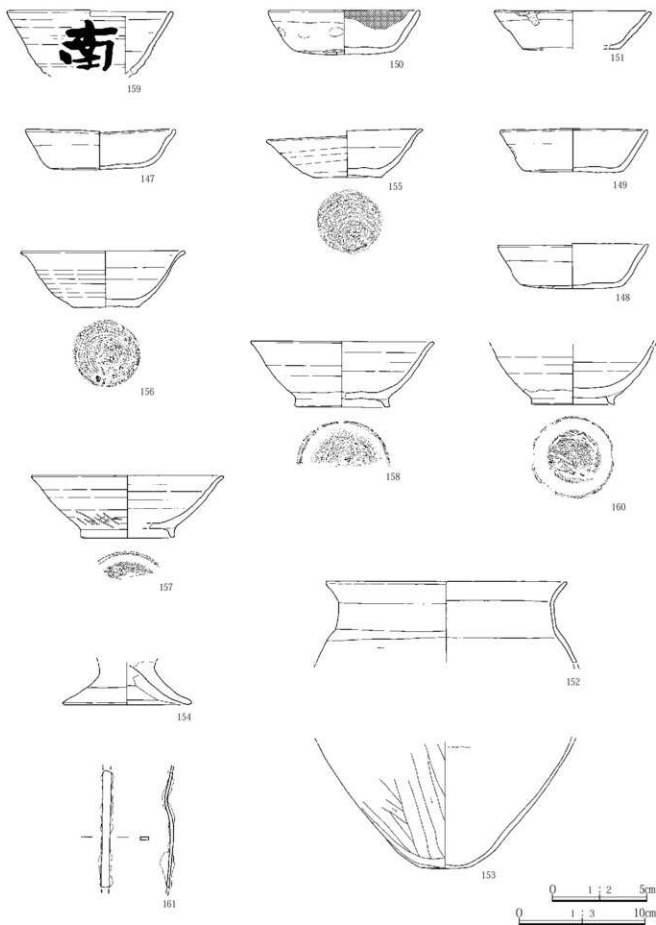
### 4. 3号住居(第84・85図、PL.36・79)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。

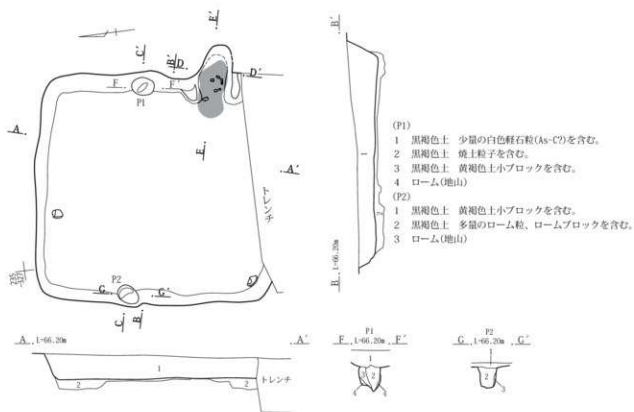
**位置** 本住居は2区北東部にあり、230～234-324～327グリッドに位置する。南部が試掘トレンチに切られて、全容を把握することはできなかった。



第82図 2区2号住居と竈

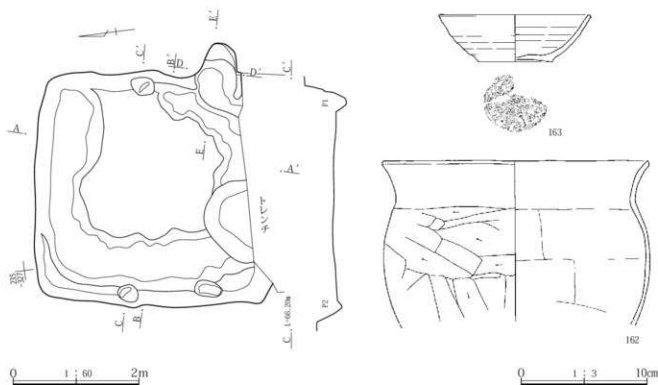


第83図 2区2号住居出土遺物

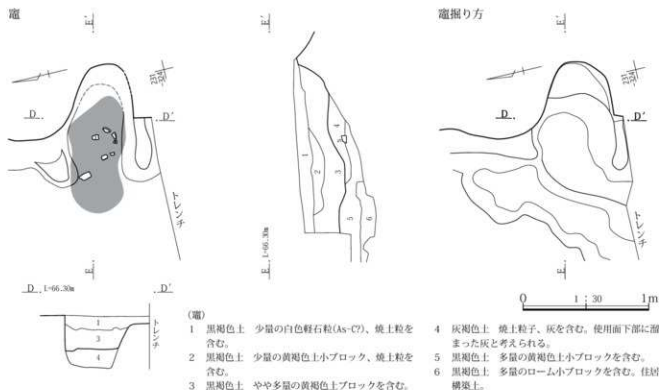


(住居覆土)

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含む。3号住居埋土だが、人為的に埋戻された土であると考えられる。
- 2 黒褐色土 多量の黄褐色土ブロックをふくむ。3号住居床構築土。



第84図 2区3号住居と出土遺物



第85図 2区3号住居竈

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：(368) cm 短軸：365cm 深さ：40cm

**竈** 幅：(108) cm 奥行き：120cm

左袖 幅：28cm 長さ：43cm 高さ：22cm

右袖 幅：37cm 残長：30cm 高さ：31cm

燃焼部 幅：37cm 奥行：72cm 深さ：5 cm

**貯蔵穴** 径：48×43cm 深さ：35cm

**覆土** 暗褐色土等で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

**構造** [竈穴]竈穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN80°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は、幅33～90cm 深さ10cmを測る周溝状の掘り込を有する掘り方を有し、黒褐色土等で埋め戻して、床面を造る。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN69°Wを向く。楕円形のプランを呈するものと想定される掘り方を有し、黒褐色土、黄褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。燃焼部には5 cmの厚さで灰が堆積し、幅45cm、奥行94cmの範囲で焼土面が見られた。

左右に袖が残るが、天井部の構造は確認できなかった。  
[柱穴]柱穴は東西両壁際に、棟持ち柱と見られる、いわゆる壁柱穴が掘削される。東側の柱穴1は住居北縁から

130cm、西側の柱穴2は住居北縁から120cmを測るが、住居の南側が失われているため、明らかにできないが、北に寄った位置に掘削されている。

[貯蔵穴]貯蔵穴は、確認されなかった。

[上屋]棟方向は柱穴の設置位置から、略東南東-西北西方向を向くものと判断される。

**遺物** 鬘(162)等の土師器と、杯(163)等少量の須恵器が出土した。

**所見** 本住居は棟持ち柱のみが確認された、特殊な住居である。

また、その時期は、出土遺物から推して、9世紀第2四半期の所産と判断される。

#### 5.4号住居(第86・87図、PL.36・79)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。

**位置** 本住居は2区北東部にあり、233～238-328～332グリッドに位置する。南部が試掘トレンチに切られて、全容を把握することはできなかった。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：426cm 短軸：368cm 深さ：13cm

**竈** 幅：61cm 奥行き：111cm

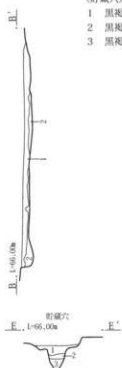
左袖 幅：21cm 長さ：32cm 高さ：5 cm

(住居覆土)

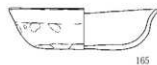
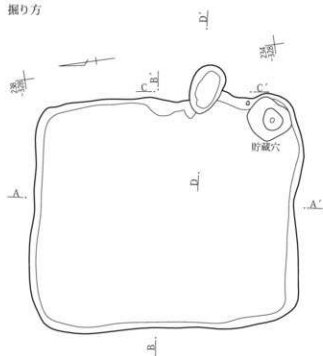
- 1 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 多量の黄褐色小ブロックを含む。

(貯蔵穴)

- 1 黒褐色土 少量の焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 黄褐色小ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 やや粘質。



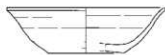
掘り方



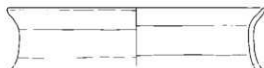
165



164



167

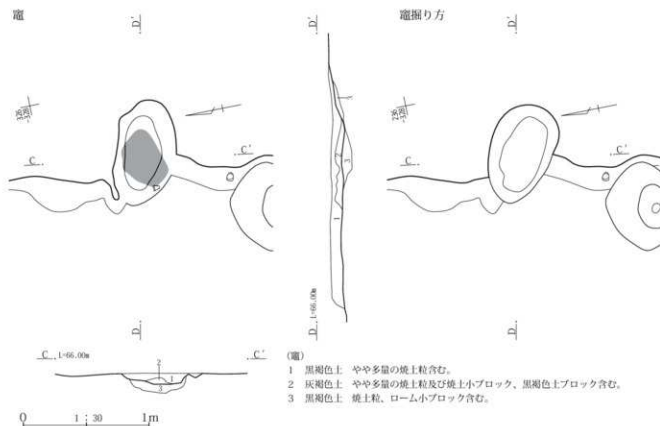


166

0 1 : 60 2m

0 1 : 3 10m

第86図 2区4号住居と出土遺物



第87図 2区4号住居竈

燃焼部 幅：30cm 奥行：112cm 深さ：2cm

貯蔵穴 径：68×63cm 深さ：44cm

覆土 黒褐色土等で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

構造 [竈穴]竈穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN82°Wを向く。

[掘り方・床]本住居の掘り方は確認できなかった。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その主軸方位はN69°Wを向く。楕円形のプランの浅い掘り方を有し、これを焼土粒やロームを含む黒褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左側の袖が残るが、右側袖と天井部の構造は確認できなかった。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は、住居の南東隅掘削されている。貯蔵穴は隅丸方形プランを呈し、尖底に近い底部形態を呈し、柱穴状の掘削形態を呈する。

[上屋]棟の方向は、竈穴の直交する軸の比較から、南北方向に棟を置くものと推定される。

遺物 杯(164・165)・囊(166)等の少量の土師器と、椀(167)等僅かな量の須恵器が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀から第3四半期の所産と判断される。

#### 6. 5号住居(第88図、Pl.37・79)

概要 本住居は竈付の竈穴住居である。

位置 本住居は2区北東部にあり、222～225-335～338グリッドに位置する。

重複 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

規模 長軸：307cm 短軸：300cm 深さ：18cm

竈 幅：65cm 奥行き：73cm

燃焼部 幅：43cm

奥行：63cm

深さ：5cm

貯蔵穴 径：71×70cm

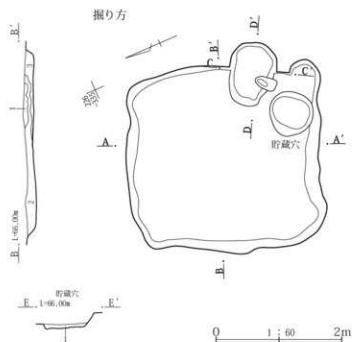
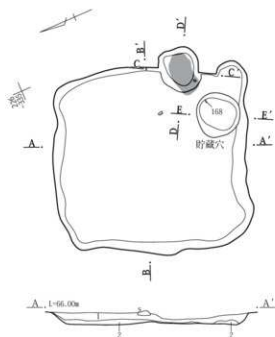
深さ：7cm

覆土 黒褐色土等で埋没する。いわゆる三角堆積を確認することはできなかった。

構造 [竈穴]竈穴は隅丸方形のプランを呈するが、東壁の最南部に、幅50cm、奥行23cmを測る半円形の突出部がある。主軸方向はN68°Wを向く。

[掘り方・床]本住居の掘り方を確認することはできな





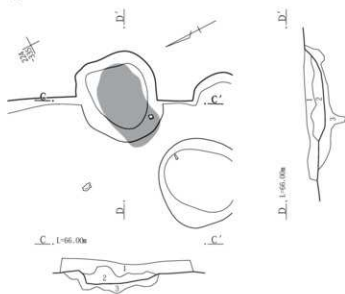
(住居履土)

- 1 黒褐色土 少量の焼土粒含む。
- 2 黒褐色土 少量の黄褐色小ブロック含む。
- 3 黒褐色土 灰褐色土及びやや多量の焼土粒、焼土小ブロック含む。

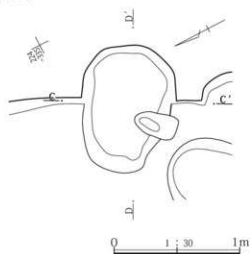
(貯蔵穴)

- 1 暗褐色土 少量の焼土小ブロック、黄褐色小ブロック含む。

竈

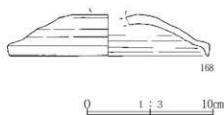


竈掘り方



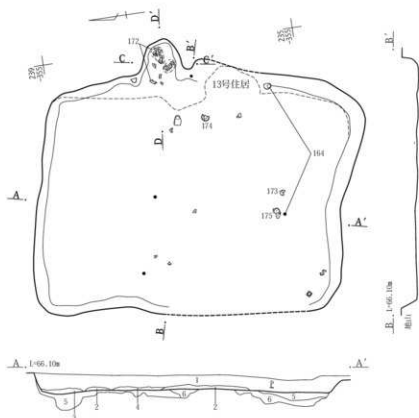
(竈)

- 1 黒褐色土 少量の焼土粒、灰褐色土ブロック含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒子、焼土小ブロック含む。
- 3 黒褐色土 上面には灰が堆積、焼土粒含む。



第88図 2区5号住居と出土遺物

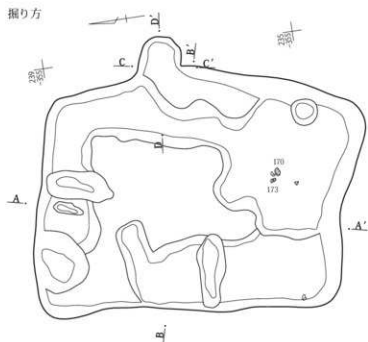
第3章 発見された遺構と遺物



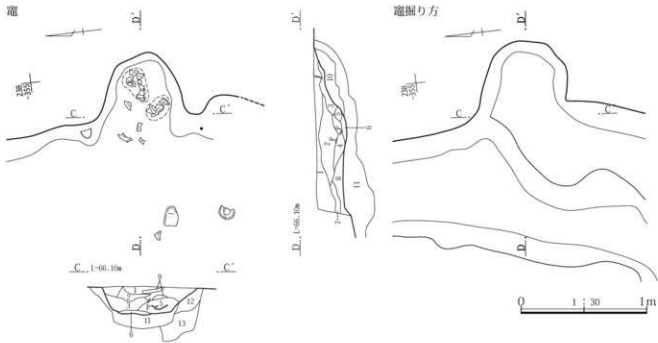
(住居覆土)

- 1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。赤褐色粒微量含む。
- 2 黒褐色土と黄褐色土の混土 粘性あり、締まり強し。13号住居床構築上。
- 3 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色土ブロック微量含む。
- 4 黒褐色土 1、3に比し、黒み強い。
- 5 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。6号住居床構築上。
- 6 黒褐色土と黄褐色土の混土 黒褐色土中に黄褐色土多量に含む。6号住居床構築上。

掘り方



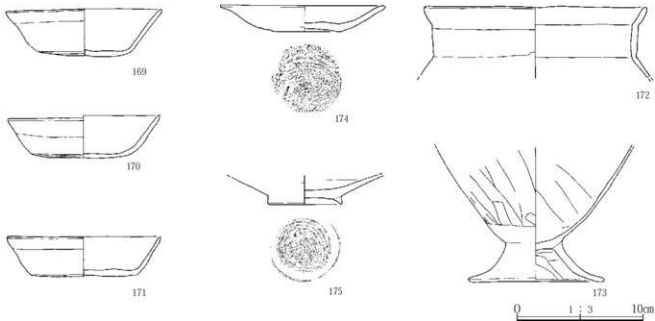
第89図 2区6号住居



6号住居  
(竈)

- 1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり、赤褐色粒微量含む。
- 2 黒褐色土と灰褐色土の混土 埋土中に竈構築上が混ざる。天井崩落上と考えられる。
- 3 赤褐色土 焼土。
- 4 赤褐色土と黒褐色土の混土 埋土(黒褐色土)と焼土(赤褐色土)の混土。焼土の割合多い。
- 5 灰白色土 灰。

- 6 黒褐色土 灰少量含む。
- 7 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。灰褐色ブロック少量含む。
- 8 黒褐色土 1・7に類するが赤褐色粒、灰褐色ブロック含まず。
- 9 灰褐色粘質土 竈構築上、天井崩落上と考えられる。
- 10 赤褐色土と暗黄褐色土の混土 竈構築上と焼けて焼土含む。
- 11 暗黄褐色土 竈構築上。
- 12 暗褐色土 焼土、灰含む。竈構築上。
- 13 暗褐色土 6号住居壁地山。
- 14 暗褐色土 13に類するが、色調13より暗い。



第90図 2区6号住居竈と出土遺物

かった。

〔竈〕竈は東南東壁南寄りに設けられ、竈の方位はN58°Wを向く。竈は幅71cm、奥行103cm 深さ10cmを測る、逆隅丸台形プランの掘り方を有する。この掘り方を焼土粒を含む黒褐色土で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼面には灰が堆積する。

左右の袖と天井部は破壊されて、残されていなかった。

〔柱穴〕床面、掘り方面を含め、柱穴を確認することは、できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は、住居南壁沿い、住居南東隅部の南東壁よりやや西北西寄りに掘削される。貯蔵穴は、西北西側がやや突出する、隅丸長方形のプランを呈し、掘削形態は箱型状を呈する。

〔上屋〕柱穴もなく、竪穴の軸も、竈に対して横位、前後方向の差が少ないため、棟の方向は、想定できなかった。

遺物 本住居からは少量の土師器と、杯蓋(168)等僅かな量の須恵器、不明鉄製品(160)が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀代の所産と推定される。

### 7.6・13号住居

(第89・90・104・105図、PL.37・41・75・79・80)

概要 6・13号住居は、共に竈付の竪穴住居である。13号住居は6号住居の調査中に検出されたため、遺構の範囲等を正確に把握することができなかった。

位置 6・13号住居は2区北東部にある住居群の東端部にある住居で、233～239-355～359グリッドに位置する。

重複 6・13号住居は重複する。が、13号住居の方が新しい。

規模 (6号住居)長軸:495cm 短軸:370cm 深さ:30cm

竈 幅:89cm 奥行き:71cm

左袖 幅:19cm 長さ:18cm 高さ:14cm

燃焼部 幅:47cm 奥行:66cm 深さ:2cm

(13号住居)長軸:(293)cm 短軸:(183)cm 深さ:13cm

竈 幅:115cm奥行き:75cm

左袖 幅:24cm 長さ:24cm 高さ:8cm

右袖 幅:22cm 長さ:(20)cm 高さ:10cm

燃焼部 幅:50cm 奥行:52cm 深さ:6cm

覆土 6号住居は暗褐色土、13号住居は黒褐色土で埋没

する。両住居は共に、いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

構造 (6号住居)

〔竪穴〕竪穴は横長の長方形に近い隅丸菱形のプランを呈する。主軸方向はN68°Wを向く。

〔掘り方・床〕6号住居は、竈前と北西部隅部を除く、壁際に、幅63～205cm 深さ14cm以下の周溝状の掘削を伴う掘り方を有し、これを暗褐色土で埋め戻して、床面を造る。

〔竈〕竈は東壁の北寄りに設けられ、N78°Wを向く。竈は掘り方を有し、これを暗褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右の袖が残るが、天井部は確認されなかった。なお、右袖は暗褐色土で構築される。

〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

〔上屋〕棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、棟は北北東—南南西方向に置くものと推定される。

(13号住居)

〔竪穴〕竪穴のプランは確認できなかった。主軸方向はN78°Wを向く。

〔掘り方・床〕13号住居は掘り方を有する。13号住居の掘り方は、6号住居の床面を利用しているが、その形状を正確に確認することはできなかった。

〔竈〕竈は残存範囲から推して、東壁の南寄りに設けられているものと判断される。その方位はN87°Wを向く。竈は掘り方を有し、これを暗灰色粘質土等で埋め戻して燃焼面を作る。

左右の袖が残るが、袖は、焼土を含む暗灰色粘質土、暗褐色土、焼土や灰を含む暗褐色土で構築されている。天井部は確認されなかった。

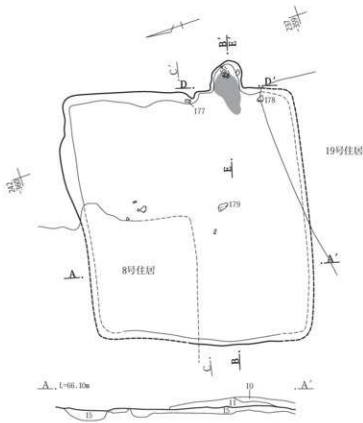
〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

〔上屋〕棟の方向は、竪穴の残存直交する軸の比較から、棟は略南北方向に置くものと推定される。

遺物 6号住居からは杯(169～171)・甕(172)・台付甕(173)等比較的多くの土師器と、皿(174・175)等少量の須恵器が出土した。

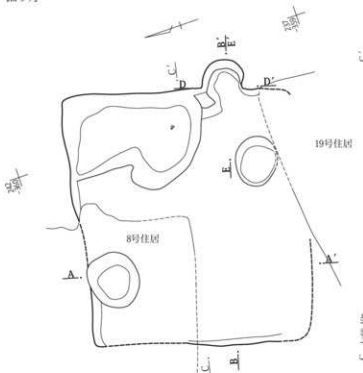
13号住居は杯(230)・甕(231・232)・甕(233)等の土師器と、僅かな量の須恵器片が出土した。

所見 出土遺物から推して、6住居、13住居の時期は共に9世紀第3四半期と判断される。



- 7号住居  
(住居覆上)
- 1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色粒少量含む。
  - 2 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。灰黄褐色土少量含む。
  - 3 黒褐色土と灰黄褐色土の混土 埋土(黒褐色土)中に竈天井崩落土(灰黄褐色土)が混ざる。
  - 9 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。赤褐色粒微量含む。
  - 10 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色土に含まれる。
  - 11 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色土まばらに含む。
- (竈覆上)
- 4 黒褐色土と灰黄褐色土の混土 3に焼土が少量含まれる。
  - 5 灰黄褐色粘質土 竈構築土、天井崩落土と考えられる。
  - 6 赤褐色土 焼土。
  - 7 黒灰色土 灰。
  - 8 黒褐色土 1層土に類する。焼土少量含む。
- (竈掘り方)
- 13 暗灰褐色土 焼けており焼土を含む。
  - 14 暗褐色土 黄褐色ブロックを含む。
- (住居掘り方)
- 15 黒褐色土と黄褐色土の混土 住居床構築土。

掘り方

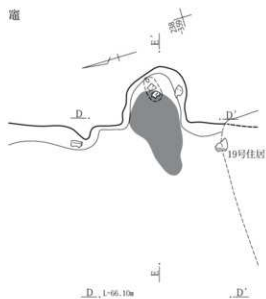


第91図 2区7号住居

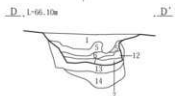
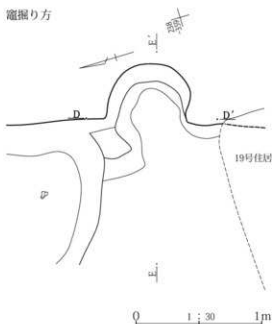
0 1:60 2m

第3章 発見された遺構と遺物

竈



竈振り方



(住居層上)

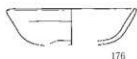
- 1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色粒少量含む。
- 2 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。灰黄褐色土少量含む。
- 3 黒褐色土と灰黄褐色土の混土 埋土(黒褐色土)中に竈天井崩落土(灰黄褐色土)が混ざる。
- 9 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。赤褐色粒微量含む。
- 11 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色土まばらに含む。

(竈覆上)

- 4 黒褐色土と灰黄褐色土の混土 3に焼土が少量含まれる。
- 5 灰黄褐色粘質土 竈構築土、天井崩落土と考えられる。
- 6 赤褐色土 焼土。
- 7 黒灰色土 灰。
- 8 黒褐色土 1層上に積ずる。焼土少量含む。
- 12 灰褐色土 灰。

(竈振り方)

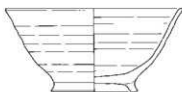
- 13 暗灰褐色土 焼けており焼土含む。
  - 14 暗褐色土 黄褐色ブロックを含む。
- (住居振り方)
- 15 黒褐色土と黄褐色土の混土 住居床構築土。



176



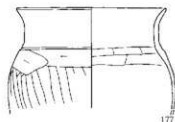
180



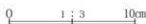
179



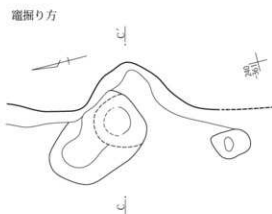
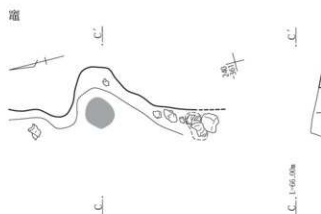
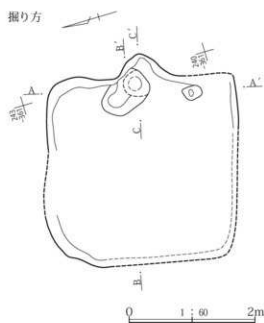
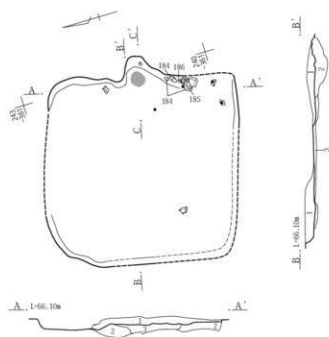
178



177



第92図 2区7号住居竈と出土遺物



8号住居  
(住居・竈覆土)

- 1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。上の面の影響を受け、一部As-3混土化。
- 2 暗褐色土 焼土粒、炭化物等微量含む。電磁がい。
- 3 暗褐色土 黄褐色ブロック混ざる。床構築土か。

第93図 2区8号住居と竈

## 8・7・8号住居(第91～94図、PL.37・38・80)

**概要** 7・8号住居は、竈付の竅穴住居である。調査経過は単純ではないが、7・8・18・19号住居は一括で掘削したため、それぞれの住居は全体を調査することはできなかった。

**位置** 7・8号住居は2区北東部にあり、7号住居は235～241-359～363グリッド、8号住居は239～242-361～364グリッドに位置する。

**重複** 7号住居は8・19号住居と重複するが、19号住居

→7号住居→8号住居の順に新し新しい。

**規模** (7号住居)長軸:406cm 短軸:(370)cm 深さ:29cm

**竈** 幅:50cm 奥行き:63cm

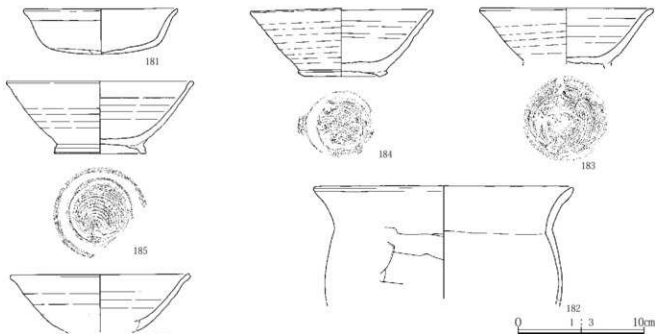
燃焼部 幅:43cm 奥行:50cm 深さ:2cm

(8号住居)

長軸:305cm 短軸:300cm 深さ:20cm

**竈** 幅:80cm奥行き:49cm

左袖 幅:25cm 長さ:16cm 高さ:12cm



第94図 2区8号住居出土遺物

燃焼部 幅:(41)cm 奥行:(42)cm 深さ:(17)cm

覆土 7・8号住居は黒褐色土等で埋没するが、共にいわゆる三角堆積等は確認できなかった。

構造 (7号住居)

〔竪穴〕竪穴は縦長の隅丸菱形のプランを呈する。主軸方向はN78°Wを向く。なお、南辺は19号住居、北西部は8号溝と重複していたため、遺構を確認できなかった箇所がある。

〔掘り方・床〕7号住居は、中・北東部の東・北壁に沿って、径174×105cm 深さ15cm以下を測る大型の土坑を伴う掘り方を有し、黒褐色土と黄褐色土の混土で埋め戻して床面を造っている。

〔竈〕竈は東壁の南寄りに設けられ、N73°Wを向く。竈は掘り方を有し、これを暗褐色土、更に焼土を含む暗褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右袖及び天井部は確認されなかったが、土層断面の観察から、天井部は灰黄褐色粘質土で構築されていたことが確認された。

〔柱穴〕柱穴は確認されなかった。

〔貯蔵穴〕床面において貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方面の南壁際、東壁より75cmの地点を東壁とする、径79×(68)cm 深さ13cm床面からの深さ:26cmを測る、楕円形プランで井筒形を呈する土坑が掘削されていたが、これが貯蔵穴であった可能性を有する。

〔上屋〕棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、東西方向にあるものと推定される。

(8号住居)

〔竪穴〕竪穴のプランは、おおよそ隅丸方形を呈する。主軸方向はN75°Wを向く。

〔掘り方・床〕本住居は凹凸の少ない掘り方を有し、これを黄褐色土混入の暗褐色土で埋め戻され、床面が造られる。

〔竈〕竈は東壁残存範囲から推して、東壁の中央に設けられる。その方位はN83°Wを向く。

竈は左袖の位置に径66×45cm 深さ20cmを測り、主軸方位をN32°Wに取る、隅丸長方形プランの土坑を伴う掘り方を有し、これを、住居掘り方と同じ土壌で埋め戻して燃焼面を作る。

左右袖が残るが、構築材の記録は残せなかった。

また、天井部、煙道は確認されなかった。

〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴、貯蔵穴を確認することはできなかった。

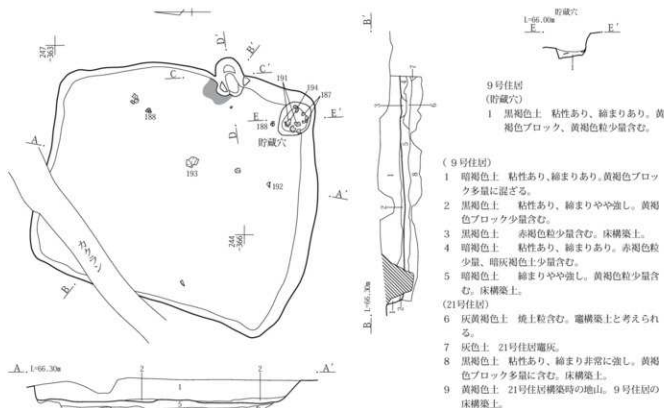
〔上屋〕棟の方向は、確認できなかった。

遺物 7号住居からは杯(176)・小型甕(177)等の土師器、杯(178・180)・椀(179)等の須恵器が出土した。

8号住居からは杯(181)・甕(182)を含む土師器が出土した他、椀(183～185)を含む須恵器が出土した。

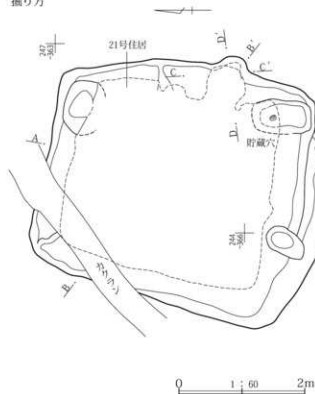
所見 その時期は、出土遺物から推して、7住居は9世





紀第三四半期、8住居の時期は9世紀第4四半期の所産と判断される。

掘り方



9・9・21号住居(第95～98図、PL.39・80・81)

概要 9・21号住居は隣付の竪穴住居である。

21号住居は、9号中に全く重なってある。しかし、9号住居の掘り方を調査中、2面の床構築土(5層、8層)を検出したが、これについて、8層面が5層面に対して一段下がること、そして隣掘り方から焼土、灰など検出したことから、9号住居の下に別の住居が有るものと認定して調査したものである。

位置 9・21号住居は2区中北部にあり、共に242～246-363～367グリッドに位置する。

重複 9・21号住居は重複し、21号住居を9号住居が切っている。

なお、9号住居の北西部が2面の7号溝に壊されるものの、3面の他の遺構との重複はなかった。

規模 (9号住居)長軸:433cm 短軸:375cm

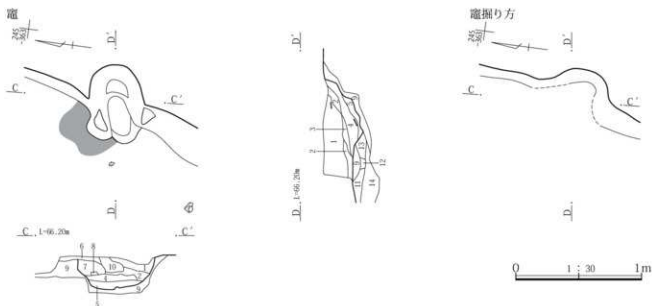
深さ:35cm

竈 幅:55cm・奥行き:63cm

左袖 幅:21cm 長さ:32cm 高さ:15cm

第95図 2区9号住居

### 第3章 発見された遺構と遺物



#### 9号住居竈

(9号住居竈覆土)

- 1 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック多量に混ざる。
- 2 暗褐色土 粘性、締まりあり。赤褐色粒と暗灰褐色土少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土ブロック、灰少量含む。
- 4 暗褐色土と赤褐色土の混土 暗褐色土中に焼土混ざる。
- 5 暗灰褐色土 灰
- 6 暗黄褐色粘質土と暗褐色土の混土 竈天井構築土残がい(暗黄褐色粘質土)と埋土(暗褐色土)の混土。
- 7 暗褐色土 暗黄褐色ブロック含む。竈埋土。
- 8 赤褐色焼土

(9号住居竈構築材)

- 9 暗黄褐色土 竈構築土。
- 10 暗黄褐色粘質土 竈構築土だが天井崩落土と考えられる。
- (21号住居竈構築材)
- 11 暗黄褐色土。
- 12 暗赤褐色土 11層に続くが焼土化する。
- 13 暗黄褐色土と赤褐色土の混土 11・12層上の混土、灰も含む。
- 14 暗黄褐色土と赤褐色土の混土 締まり強し。
- ※ 11-13は使用面に天井が落ちた状況と思われる。

第96図 2区9号住居竈

右袖 幅：20cm 長さ：19cm 高さ：14cm  
 燃烧部 幅：18cm 奥行：38cm 深さ：7cm  
 竈 幅：55cm・奥行き：63cm  
 左袖 幅：21cm 長さ：32cm 高さ：15cm  
 右袖 幅：20cm 長さ：19cm 高さ：14cm  
 燃烧部 幅：18cm 奥行：38cm 深さ：7cm

貯蔵穴 径：55×49cm 深さ：14cm

(21号住居)長軸：326cm 短軸：302cm 深さ：15cm

竈 幅：55cm 奥行き：66cm

左袖幅：48cm 長さ：48cm 高さ：17cm  
 左袖幅：15cm 長さ：21cm 高さ：24cm  
 燃烧部幅：38cm 奥行：64cm 深さ：11cm

覆土 9号住居は暗褐色土、黒褐色土で埋没する。21号住居の覆土は確認されなかった。なお、9号住居掘り方覆土(5層)は21号住居掘り方埋土に重なる。

構造 (9号住居)

〔竪穴〕竪穴は隅丸方形のプランを呈する。主軸方向はN88°Wを向く。

〔掘り方・床〕本住居は暗褐色土、黄褐色土で埋め戻して、床面を造る。

〔竈〕竈は東壁南寄りに設けられ、竈の方位はN67°Wを向く。

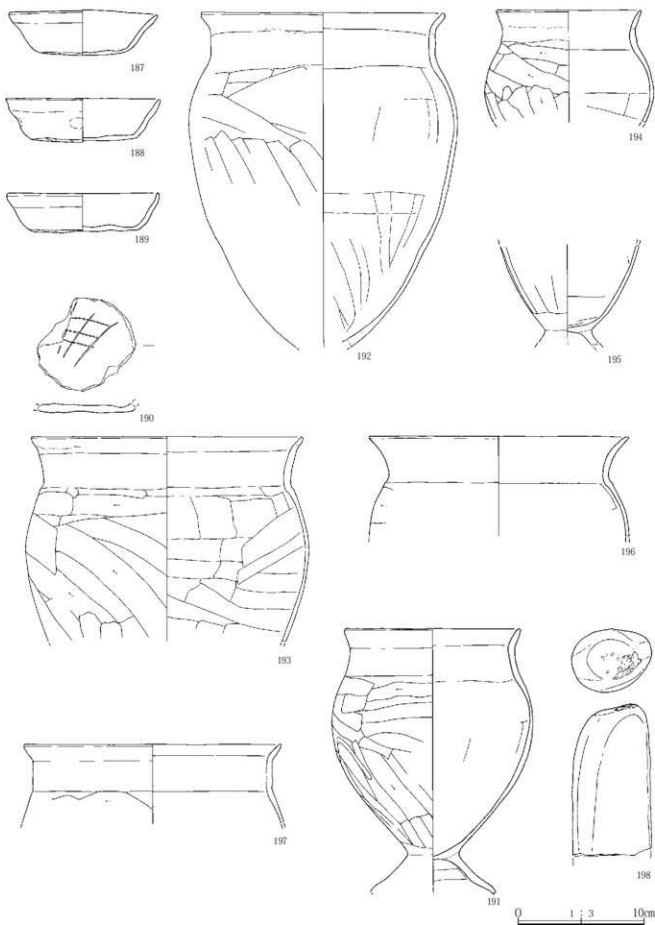
竈は幅53cm、奥行42cm以上、深さ14cmを測る、楕円形に近い隅丸方形様のプランの掘り方が掘削され、これを暗黄褐色土で埋め戻して、燃烧面と袖が作られている。

左右の袖は残るものの、天井部は残らなかったが、暗黄褐色粘質土で構築されている。

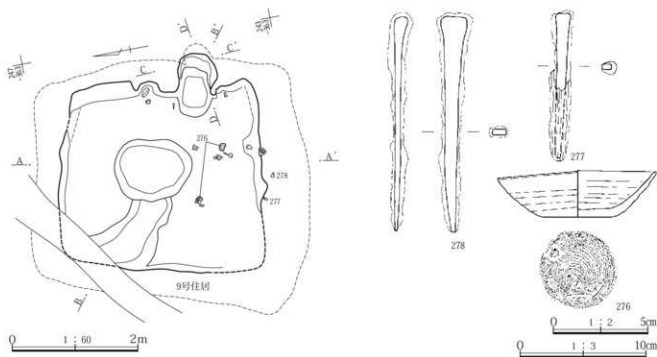
〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は住居南東隅に掘削される。プランは隅丸の菱形を呈する。掘削形態は箱形を呈し、底面は平底である。

〔上屋〕棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、南北



第97図 2区9号住居出土遺物



第98図 2区21号住居(掘り方)と出土遺物

方向にあるものと推定される。

(21号住居)

〔竪穴〕竪穴は隅丸方形のプランを呈するものと想定される。主軸方向はN85°Wを向く。

〔掘り方・床〕本住居は掘り方を有し、これを黒褐色土で埋め戻して、床面を造る。

〔竈〕竈は東壁南寄りに設けられ、竈の方位はN87°Wを向く。

竈は灰黄褐色土で構築される。

〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴・貯蔵穴を確認することはできなかった。

〔遺物〕9号住居からは、杯(187～190)・台付甕(191・195)・甕(192・193・196・197)・小型甕(194)を含む土師器や須恵器片の他、僅かな量の陶器片や燧石(198)が出土した。

21号住居からは、少量の土師器、杯(276)を含む須恵器の他、鉄釘(277)、不明鉄製品(278)が出土した。

〔所見〕9号住居の時期は、出土遺物と重複関係から推して、9世紀第3四半期の所産と推定され、また21号住居は9世紀第3四半期の所産と判断される。

#### 10. 10号住居(第99図、PL.39・81)

〔概要〕本住居は竈付の竪穴住居である。

北側が調査区外に出ていて、全容を把握することはで

きなかった。

〔位置〕本住居は2区中北部の北端部にある。246～248-367～370グリッドに位置する。

〔重複〕本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

〔規模〕長軸：(317) cm 短軸：310cm 深さ：15cm

〔竈〕幅：79cm 奥行き：78cm

左袖 幅：22cm 長さ：47cm 高さ：12cm

燃焼部 幅：35cm 奥行き：47cm 深さ：4cm

〔覆土〕暗褐色土等で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

〔構造〕〔竪穴〕竪穴は横長の隅丸長方形プランを呈し、主軸方向はN69°Wを向く。

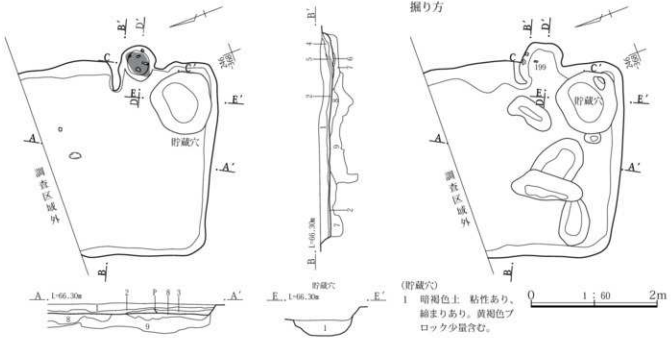
〔掘り方・床〕本住居は南部に土坑状の掘削が見られる掘り方を有し、これを黒褐色土、暗褐色土で埋め戻して床面を造る。

〔竈〕竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN57°Wを向く。

竈は掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して燃焼面を作る。燃焼面には径32×30cmの範囲で焼土面が見られる。

左右に袖が残り、暗黄褐色土で作られるが、左袖は燃焼による焼土化が見られる。また右袖は確認されなかったが、位置的に貯蔵穴と接していたものと思慮される。

天井部の構造は確認できなかった。

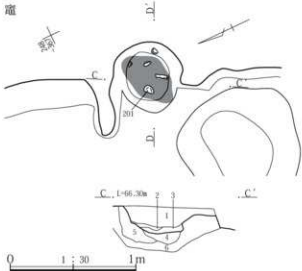


10号住居  
(住居覆土)

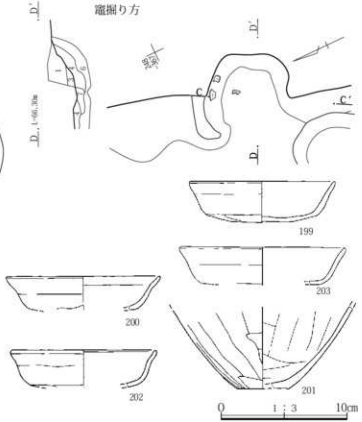
- 1 暗黄褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色粒少量含む。
  - 2 床構築土(黄褐色土)と埋土(暗褐色土)の混土。
  - 3 暗褐色土 粘性、締まりあり。赤褐色土、炭化物少量含む。
- (竈)
- 4 暗黄褐色粘質土 竈構築土。天井崩落土と考えられる。
  - 5 赤褐色土 焼土(竈3層に同じ)
  - 6 暗灰褐色土 竈構築土。灰多量に含む。
  - 7 暗黄褐色土 竈構築土。

(掘り方)

- 8 黒褐色土と暗褐色土の混土
- 9 暗褐色土

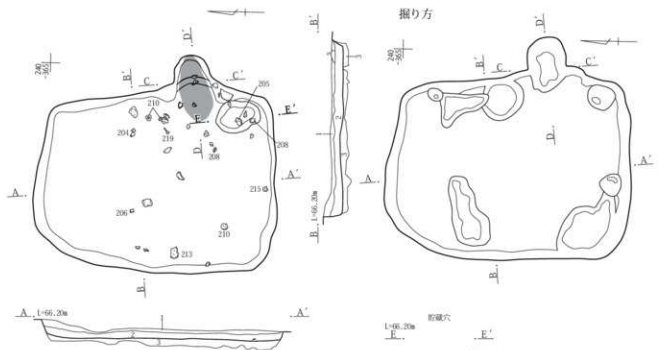


- (竈)
- 1 暗褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石粒、焼土粒微量含む。
  - 2 赤褐色土 焼土
  - 3 暗褐色土 焼土、灰、炭化物含む。
- (竈構築土)
- 4 黒褐色土 焼土、灰含む。
  - 5 暗赤褐色土だが焼けて赤褐色化している。
  - 6 暗黄褐色土
  - 7 暗灰褐色土 灰多量に含む。



第99図 2区10号住居と出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



11号住居

(住居覆土)

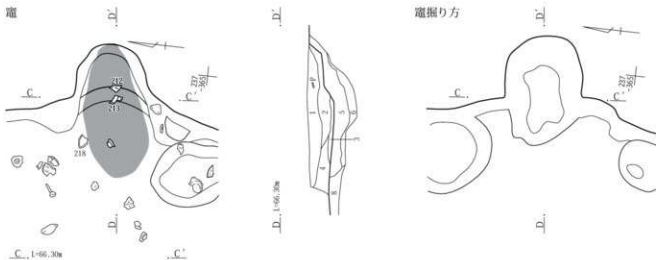
- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。
- 2 黒褐色土 1層上に類する。赤褐色粒少量含む。

(掘り方)

- 3 黒褐色土と黄褐色ブロックの混土

(貯蔵穴)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色粒少量含む。



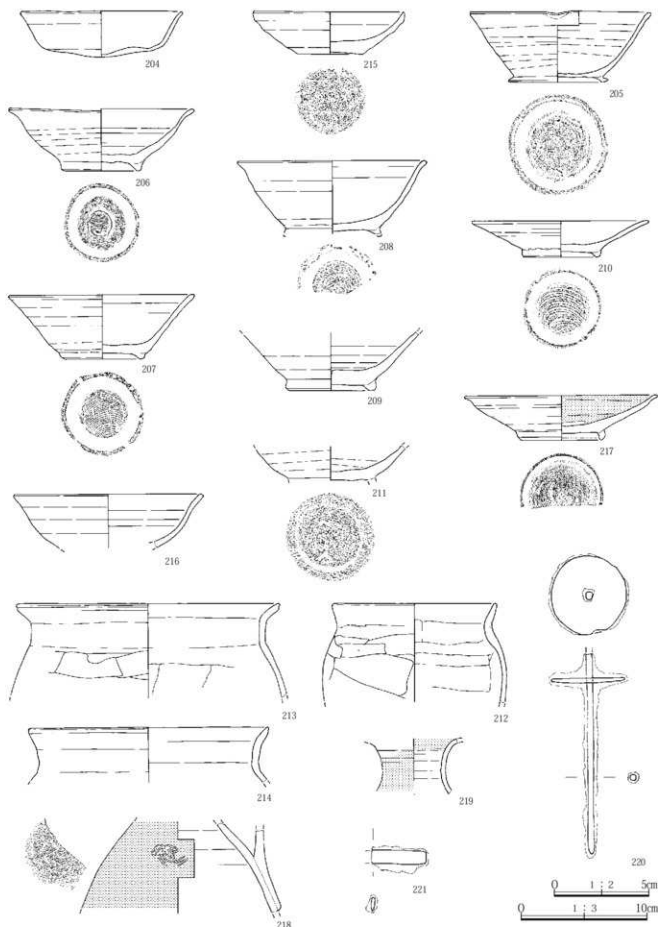
(竈)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石粒少量含む。
- 2 暗褐色土 粘性、締まりあり。暗灰色粘質土(竈天井崩落上)、焼土粒、炭化物、灰含む。
- 3 暗褐色土 粘性、締まりあり。焼土粒、炭化物含む。
- 4 暗褐色土 2層上に類する。焼土粒、炭化物は含まれるが、暗灰色粘質土は含まれず。

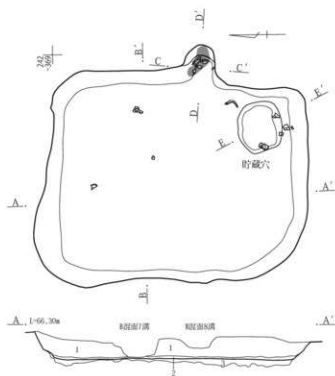
(掘り方覆土)

- 5 黒褐色土 粘性あり、締まりやや強し。竈床構築土。
  - 6 黒褐色土 5に類する。黄褐色ブロック少量含む。
  - 7 暗灰褐色土 粘性あり、締まりやや強し。竈床築土。
- (住居床構築土)
- 8 黒褐色土と黄褐色土の混土

第100図 2区11号住居



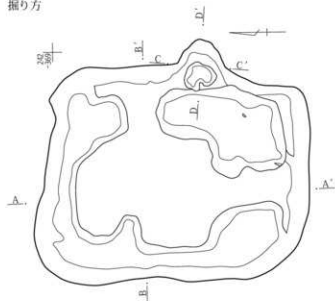
第101図 2区11号住居出土遺物



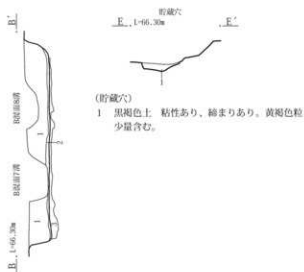
12号住居  
(住居覆土)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色粒少量、赤褐色粒微量含む。
- 2 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色土(床構築土)少量混ざる。(掘り方)
- 3 黒褐色土と黄褐色ブロックの混土

掘り方



0 1:60 2m



(貯蔵穴)  
1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色粒少量含む。

〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は、住居南東隅に掘削される。楕円形のプランを呈し、掘削形態は箱形を呈する。

〔上屋〕棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、南北方向に棟を置くものと推定される。

遺物 本住居は土師器杯(199・200・202・203)・甕(201)等少量の土師器及び須恵器片が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀中葉の所産と判断される。

11. 11号住居(第100・101図、PL.40・81)

概要 本住居は灌付の竪穴住居である。

位置 本住居は2区中北部にあり、236～239-365～368グリッドに位置する。

重複 本住居は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

規模 長軸：378cm 短軸：290cm 深さ：32cm

竈 幅：140cm 奥行き：106cm

左袖 幅：(40) cm 長さ：(27) cm 高さ：12cm

右袖 幅：40cm 長さ：28cm 高さ：10cm

燃焼部 幅：60cm 奥行：90cm 深さ：3cm

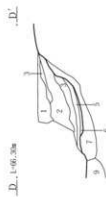
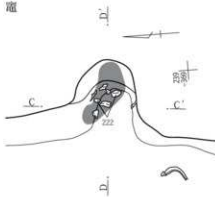
貯蔵穴 径：73×51cm 深さ：11cm

覆土 黒褐色土で埋没する。なお、いわゆる三角堆積等

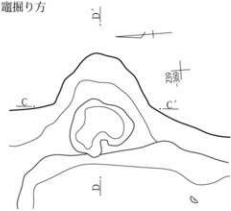
第102図 2区12号住居



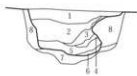
竈



竈圍り方



C, 1-06.30m



C

(竈覆土)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。
- 2 黒褐色土 粘性、締まりあり。焼土粒微量。
- 3 暗灰色粘質土 竈構築土、天井の崩落土。
- 4 暗灰褐色土 灰
- 5 赤褐色土 焼土
- 6 暗青灰色土 灰

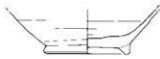
(竈圍り方)

- 7 暗褐色土と黄褐色土の混土 締まりやや強し。
  - 8 暗灰褐色粘質土 袖構築土。
- (住居圍り方)
- 9 黒褐色土と黄褐色土の混土

0 1:30 1m



228



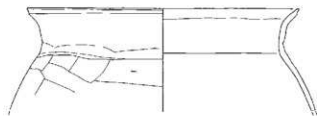
227



224



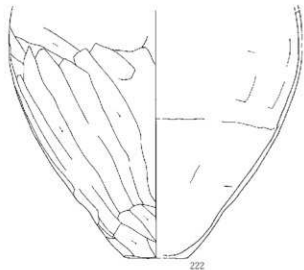
225



223



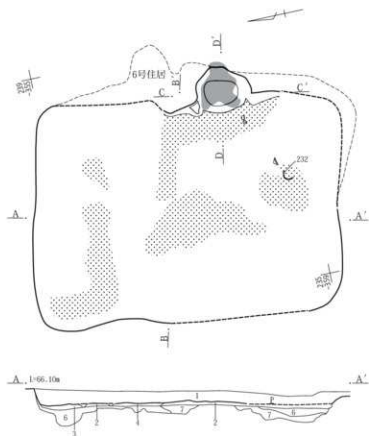
226



222

0 1:3 10cm

第103図 2区12号住居竈と出土遺物



2区13号住居

(住居覆土)

1 黒褐色土 粘性、締まりあり。赤褐色粒微量含む。

(竈構築上)

3 暗褐色土 粘性あり、締まりやや強し。

4 暗褐色土 灰及び焼土が状に堆積。

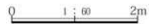
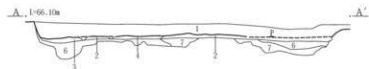
5 暗褐色土 粘性あり、締まりやや強し。暗灰色ブロック含む。

(住居掘り方)

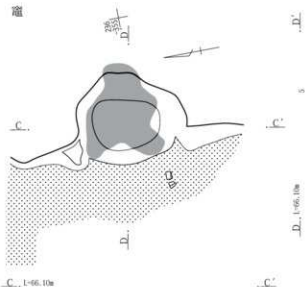
2 黒褐色土と黄褐色土の混土 粘性、締まり強し。

6 暗褐色土 粘性、締まりあり。6号住居埋土も兼ねる

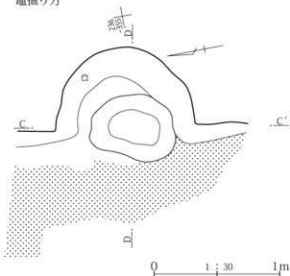
7 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量含む。6号住居埋床構築上。



竈



竈掘り方



(竈掘り方)

6 暗灰色粘質土 暗褐色土やや少量。

7 暗褐色土 粘性あり、締まりやや強し。

8 暗灰色粘質土 焼土少量。

9 暗褐色土 灰及び焼土が層状に堆積。灰の割合多し。

10 赤褐色土 だいたふ境けている。

11 暗灰色粘質土 焼土粒、灰含む。

12 暗灰色土 灰多量に含む。

13 暗褐色土 暗灰色ブロック含む。

14 暗褐色土 暗黄褐色ブロック含む。

(住居掘り方)

15 黒褐色土と褐色土の混土

16 黒褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石粒少量含む。住居壁、地山。

(竈覆土)

1 暗褐色土 粘性、締まりあり。焼土粒微量含む。

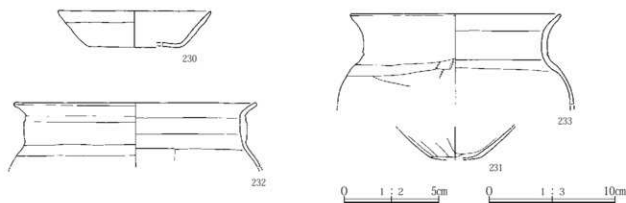
2 暗褐色土 粘性、締まりあり。焼土粒少量含む。

3 暗褐色土 粘性、締まりあり。焼土粘みられず。

4 暗褐色土と暗灰色粘質土の混土 埋土中に竈構築上(暗灰色粘質土)混ざる。

5 暗赤褐色土 焼土

第104図 2区13号住居



第105図 2区13号住居出土遺物

は確認できなかった。

**構造** [竪穴]竪穴は、南辺に対して北辺が2割ほど短くなる、横長の略隅丸長方形プランを呈する。主軸方向はN88°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は南東、北西、北東隅部に、南壁に接する東西2m、南北2.2mの範囲を画するように、深さ7cm以下の土坑状の掘り込みが掘削され、竈の左側に、楕円形プランで径71×64cm 深さ7cmの土坑が掘削される掘り方を有し、これを黒褐色土と黄褐色土で埋め戻して床面を造る。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN82°Eを向く。

竈は径51×44cm 深さ18cmを測る、楕円形プランに掘削された掘り方を有し、これを黒褐色土で埋め戻して燃焼面が作られる。なお、燃焼面には径104×50cmの範囲で焼土面が見られた。

左右に袖、あるいはその痕跡がみられるが、この袖は、粘性のある暗灰褐色土で作られる。

天井部や煙道は残らず、その構造を確認することはできなかった。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は、住居南東隅に掘削される。南側が絞られる楕円形のプランを呈し、掘削形態は箱形を呈する。

[上屋]棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、南北方向に棟を置くものと推定される。

**遺物** 本住居は、杯(204)・小型甕(212)・甕(213・214)等の土師器、片口椀(205)・椀(206～209)・皿(210・217)・杯(215・216)や杯と思われるもの(211)等の須恵器、灰軸陶器の手付瓶(212)や瓶(213)、鉄製紡錘車(220)、不明鉄製品(221)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第4四半期の所産と判断される。

## 12. 12号住居(第102・103図、PL.40・81)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。

**位置** 本住居は2区中北部にあり、237～242-369～372グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 長軸：420cm 短軸：330cm 深さ：35cm

**竈** 幅：52cm 奥行き：75cm

燃焼部 幅：31cm 奥行き：50cm 深さ：1cm

**貯蔵穴** 径：83×71cm 深さ：20cm

**覆土** 黒褐色土で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

**構造** [竪穴]竪穴は、横長の略隅丸長方形プランを呈する。主軸方向はN89°Wを向く。

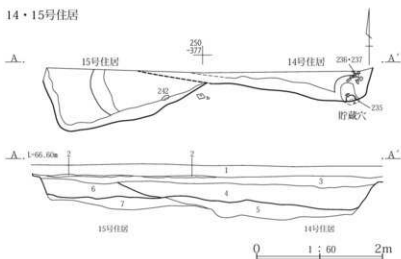
[掘り方・床]本住居は東側北寄りと南側西寄りの2箇所を除く壁際に、幅24～97cm、12cm以下の深さに掘削された周溝状の掘り込を伴う掘り方を有しており、これを黒褐色土と黄褐色土で埋め戻す。そして、その上に、厚さ4cm程に粘性のある暗褐色土を敷いて、貼土としている。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN78°Eを向く。

竈は径41×37cm 深さ5cmを測る、逆ハート形プランの掘り方を有し、これを黒褐色土と黄褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。燃焼面には径40×18cmの範囲で焼土面が見られる。燃焼部の燃焼面側は、暗灰褐色粘質土で覆われる。

第3章 発見された遺構と遺物

14・15号住居

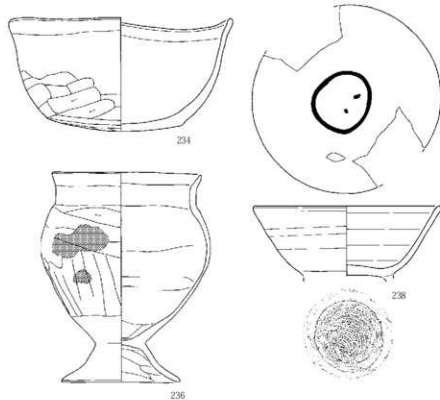
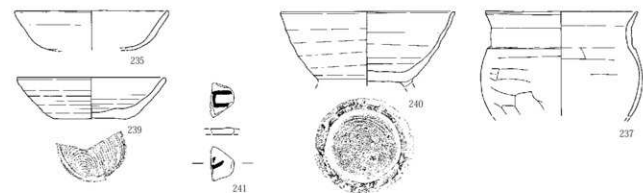


14・15号住居

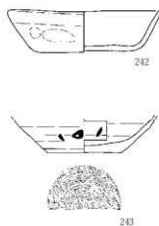
(埋戻上等)

- 1 暗灰褐色土 表土耕作上。
- 2 暗褐色砂質土 As・粘土。
- 3 黒褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石粒微量含む。(14号住居覆土)
- 4 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロックまばらに散ざる。(14号住居廻り方)
- 5 黒褐色土 粘性あり、締まりやや強し。黄褐色ブロック少量含む。(15号住居覆土)
- 6 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック縁に含む。(15号住居廻り方)
- 7 暗褐色土と黄褐色土上の脱土 粘性あり、締まりやや強し。

14号住居



15号住居



0 1 : 3 10cm

第106図 2区14・15号住居と出土遺物

袖や天井部の構造は確認できなかった。

〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は、住居南東隅に掘削される。隅丸方形のプランを呈し、掘削形態は箱形を呈する。

〔上屋〕棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、南北方向に置くものと推定される。

遺物 本住居からは、甕(222～224)等やや多くの土師器、椀(225～227)・杯(228)等の須恵器が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

### 13. 14・15号住居(第106図、PL.41・82)

概要 14・15号住居は竪穴住居である。

しかしながら、両住居共に遺構の過半は北側調査区外に出ていて、南縁近くを調査できたに過ぎなかった。

また、両住居共に調査範囲が狭かったこともあり、床面が確認できず、掘り方を調査できたに過ぎなかった。

位置 両住居は2区中北部、北側調査区際であり、14号住居は248～249-374～377グリッド、15号住居は248～249-377～379グリッドに位置する。

重複 14・15号住居は重複するが、土層断面の観察所見からは断定はできないが、14号住居が新しい可能性が高い。なお、両住居は共に、他の遺構との重複はなかった。

規模 (14号住居)長軸：残長403cm 短軸：残長47cm 深さ：45cm

貯蔵穴 径：40×(38)cm 深さ：21cm

(15号住居)長軸：残長262cm 短軸：残長102cm 深さ：30cm

覆土 14号住居は黒褐色土等で埋没し、15号住居は暗褐色土等で埋没する。両住居共にいわゆる三角堆積等は確認できなかった。

構造 (14号住居)

〔竪穴〕14号住居の竪穴は、隅丸方形様プランを呈するものと推定される。

〔掘り方・床〕本住居は凹凸の少ない掘り方を有し、これを黒褐色土で埋め戻して床面を造っている。

〔竈〕竈は確認できなかった。

〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は、住居南東隅に掘削される。隅丸方形のプランを呈し、掘削形態は袋状を呈する。

〔上屋〕棟の方向も想定できなかった。

(15号住居)

〔竪穴〕15号住居の竪穴は、隅丸方形様プランを呈するものと推定される。

〔掘り方・床〕本住居は西壁寄りが中・東部に対して10cm高く残る掘り方を有し、これを暗褐色土と黄褐色の混土で埋め戻して床面を造る。

〔竈〕竈は確認できなかった。

〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴・貯蔵穴も確認できなかった。

〔上屋〕棟の方向も想定できなかった。

遺物 14号住居からは、鉢(234)・杯(235)・台付甕(236)・小型甕(236)等の土師器、杯(238・239・241)・椀(290)等の須恵器片が出土した。

15号住居からは杯(242)の土師器、杯(243)等の須恵器片が出土した。

所見 14・15号住居の時期は、出土遺物と重複関係から推して、共に9世紀第3四半期の所産と判断される。

### 14. 16号住居(第107図、PL.41・42・82)

概要 本住居は竈付の竪穴住居である。南部が2面7号溝に切られていたため、全容を確認することはできなかった。

位置 本住居は2区中北部にあり、242～244-378～380グリッドに位置する。

重複 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

規模 長軸：残長250cm 短軸：250cm 深さ：8cm

竈 幅：76cm 奥行：47cm

左袖 幅：22cm 奥行：27cm 高さ：8cm

右袖 幅：19cm 奥行：22cm 高さ：5cm

燃焼部 幅：35cm 奥行：40cm 深さ：2cm

覆土 黒褐色土で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

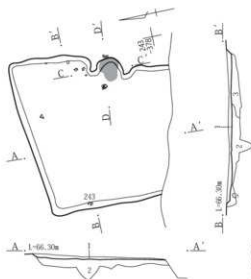
構造 〔竪穴〕竪穴は、東壁が南側で西寄りに傾斜する、逆台形のプランを呈する。主軸方向はN87°Wを向く。

〔掘り方・床〕本住居はビット状の掘り込を伴う掘り方を有し、これを黒褐色土、暗褐色土、ロームで埋め戻して床面を造っている。

〔竈〕竈は東壁に設けられ、その方位はN84°Wを向く。

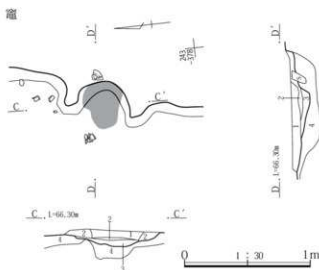
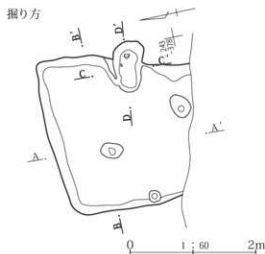
竈は径80×48cm 深さ10cmを測る、楕円形プランの掘り方を有し、黒褐色土とロームで埋め戻し燃焼面を作り、

第3章 発見された遺構と遺物



16号住居  
(住居覆上)

- 1 黒褐色土 少量の焼土粒及び白色軽石(A<sub>1</sub>-C<sub>1</sub>)を含む。
- (掘り方)
- 2 黒褐色土 少量のローム粒・小ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 やや多量のローム粒及びローム小ブロックを含む。

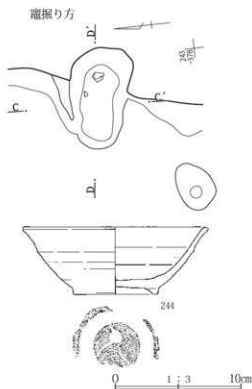


(竈覆上)

- 1 暗褐色土 焼土粒、焼土小ブロックを含む。
- 2 灰褐色土 焼土粒、炭化物を含む。竈袖残りかと考えられる。
- 3 黒褐色土 やや多量の焼土粒子、炭化物、灰を含む。部分的に天井・袖崩落上と考えられる。灰褐色ブロックあり。

(竈掘り方)

- 4 黒褐色土 少量のローム粒・小ブロックを含む。住居2層に同じ。



第107図 2区16号住居竈と出土遺物

少なくとも左袖もを作る。

燃焼部の両側には袖が作られるが、天井部は確認できなかった。

[柱穴・貯蔵穴] 柱穴、貯蔵穴を確認することはできなかった。

[上屋] 棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、南北方向に置くものと推定される。

遺物 本住居から僅かな量の、土師片と、碗(244)

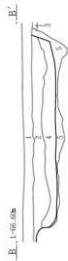
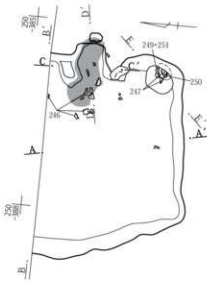
含む須恵器片が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

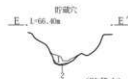
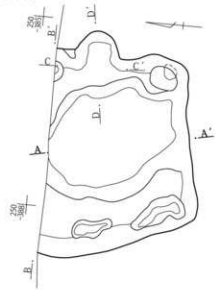
15. 17号住居(第108・109図, PL.42・82)

概要 本住居は竈付の竪穴住居である。北側が調査区外に出ていて、全容を確認することはできなかった。

位置 本住居は2区中北部の調査区北壁際にある。247



掘り方



0 1:60 2m

2区17号住居(住居覆土)

- 1 暗灰褐色土 表土耕作上。
- 2 黒褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石粒少量含む。
- 3 暗黄褐色土 粘性あり、締まり強し。
- 4 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック少量含む。

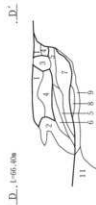
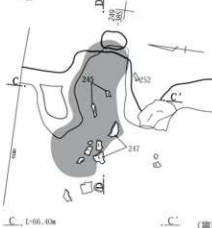
(掘り方)

- 5 黒褐色土と黄褐色土の混土 締まりあり。

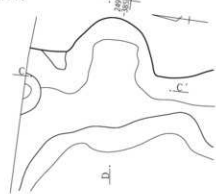
(貯蔵穴)

- 1 暗黄褐色土と暗褐色土の混土 粘性、締まりあり。
- 2 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。

竈



竈掘り方



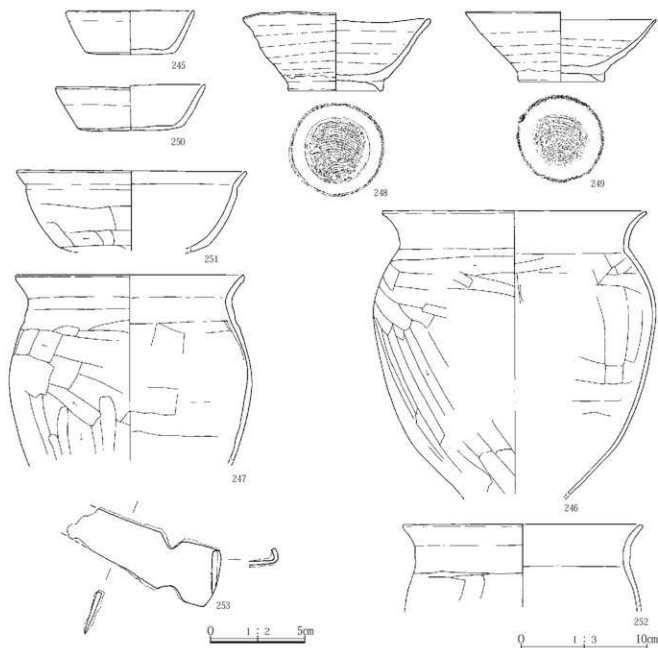
(竈覆土)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。赤褐色粒微量含む。
- 2 暗灰黄褐色粘質土 黒褐色土混ざる。天井崩落上と考えられる。
- 3 暗灰黄褐色粘質土 竈構築上、焼上多量に含む。
- 4 黒褐色土 粘性、締まりあり。暗灰黄褐色土少量含む。
- 5 赤褐色土 焼上
- 6 暗褐色土 粘性、締まりあり。暗灰黄褐色土やや多量に含む。
- 7 暗黄褐色土 粘性、締まりあり。焼上、灰少量含む。
- (竈掘り方)
- 8 暗褐色土 焼上、灰多量に含む。
- 9 暗黄褐色土 締まり強し。
- 10 暗黄褐色粘質土 袖構築上。
- 11 黒褐色土と黄褐色土の混土。

0 1:30 1m

第108図 2区17号住居

第3章 発見された遺構と遺物



第109図 2区17号住居出土遺物

～249-385～388グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：326cm 短軸：238cm 深さ：29cm

**竈** 幅：76cm 奥行き：47cm

左袖 幅：31cm 奥行：53cm 高さ：19cm

右袖 幅：30cm 奥行：38cm 高さ：19cm

燃焼部 幅：36cm 奥行：78cm 深さ：1cm

**貯蔵穴** 径：49×35cm 深さ：22cm

煙道 幅：11cm、奥行：8cm 高さ：27cm

**覆土** 暗黄褐色土で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

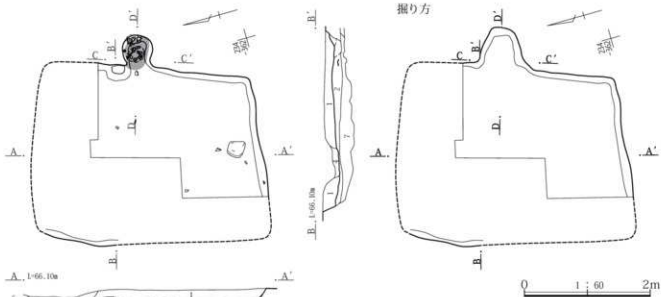
**構造** [竪穴]竪穴は、東辺と南辺が鉤形に繋がり、西辺が北寄り西に膨らむ、隅丸桶形と推定されるプランを呈する。主軸方向はN89°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は東中央部に長軸182cm以上、短軸151cm 深さ19cm以下を測る楕円形プランの大きな掘り込と、西壁際南寄り及び東壁際の確認範囲北部に深さ14cm以下の掘り込を伴う掘り方を有し、これを黒褐色土と黄褐色土で埋め戻して床を造る。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN87°Wを向く。

竈は掘り方を有し、これを下位に暗黄褐色土、上位に





(他遺構)

- 3 黒褐色土主体 粘性、締まりあり。
- 4 暗灰褐色土 粘性やや弱し、締まりややあり。溝埋土。
- 5 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。黄褐色ブロック少量含む。
- 6 黒褐色土と黄褐色土の混土 7号住居床構築上。
- 7 黒褐色土と黄褐色土の混土 19号住居床構築上。

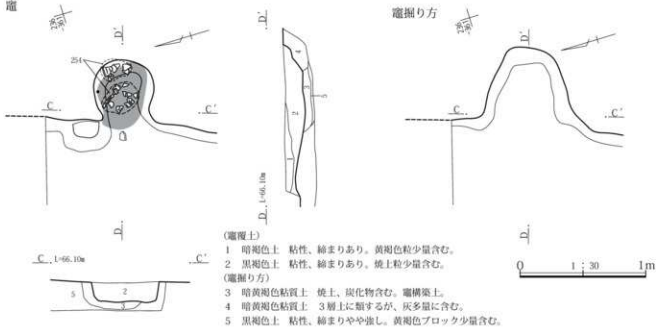
(18号住居)

1 黒褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石・赤褐色粒少量含む。

(18号住居掘り方)

2 黒褐色土 粘性、締まりやや強し。赤褐色粒微量含む。

竈



(竈覆土)

- 1 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色粒少量含む。
- 2 黒褐色土 粘性、締まりあり。焼土粒少量含む。

(竈掘り方)

- 3 暗黄褐色粘質土 焼土、炭化物含む。竈構築上。
- 4 暗黄褐色粘質土 3層上に類するが、灰多量に含む。
- 5 黒褐色土 粘性、締まりやや強し。黄褐色ブロック少量含む。

第110図 2区18号住居

焼土や灰を多量に含む暗褐色土で埋めて燃焼面を作る。

燃焼面には径103×50cmを測るの範囲内に焼土面が残されている。

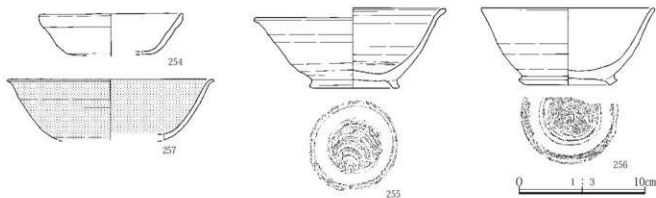
左右両側に、暗黄褐色粘質土で構築された袖が残されている。天井部の構造は確認できなかった。

煙道は、窯燃焼部奥壁からの径で、60°程の角度で奥壁上側方向に掘削される。煙道は確認面まで20cm弱の距

離で残る。確認面に19×14cm横長の隅丸方形様のプランの開口部が開く。この開口部と竈奥壁との距離は11cm程隔たる。

〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は、住居南東隅に掘削される。楕円形様楕鉢状を呈するが、E34°S方向に、斜めに掘削され、下方70°の角度にて掘削され、底面は壁の下端線のライ



第111図 2区18号住居出土遺物

ンを越えて掘削される。

[上屋]棟の方向は、想定できなかった。

**遺物** 本住居は、杯(245・250)・鉢(251)・甕(246・247・252)等やや多くの土師器、碗(248・249)等の須恵器片、鉄鎌(253)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第4四半期の所産と判断される。

#### 16. 18・19号住居(第110～113図、PL.43・83)

**概要** 18・19号住居は、竈付の堅穴住居である。調査経過は単純ではないが、重複する7・8・18・19号住居は一括で掘削したため、それぞれの住居は全体を調査することはできなかった。

**位置** 18・19号住居は2区北東部にあり、18号住居は233～237-361～365グリッド、19号住居は233～235-360～364グリッドに位置する。

**重複** 19号住居は7・8号住居とは重複し、18号住居は19号住居と重複する。前者は19号住居→7号住居→8号住居の順に新しく、後者は18号住居が新しい。

**規模** (18号住居)長軸：(3.68)cm 短軸：290cm 深さ：15cm

竈幅：75cm 奥行き：71cm

左袖幅：39cm 長さ：26cm高さ：9cm

燃焼部幅：26cm 奥行き：60cm 深さ：1cm

(19号住居)長軸：(465)cm 短軸：385cm 深さ：25cm

竈幅：81cm 奥行き：53cm

左袖幅：15cm 長さ：20cm 高さ：13cm

右袖幅：36cm 長さ：23cm 高さ：12cm

燃焼部幅：38cm 奥行き：45cm 深さ：1cm

貯蔵穴径：62×53cm 深さ：28cm

**覆土** 7・8・18・19号住居は黒褐色土等で埋没するが、共にいわゆる三角堆積等は確認できなかった。

**構造** (18号住居)

[堅穴]本住居は19号住居との重複により確認できない箇所もあるため、全容を把握してはいないが、堅穴のプランは、横長の隅丸形状を呈するものと思慮される。主軸方向はN75°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は凹凸の少ない掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床面を造っている。

[竈]竈は東壁中央やや北寄りに設けられる。その方位はN70°Wを向く。

竈は掘り方を有し、これを、暗黄褐色粘質土で埋め戻して燃焼面を作る。

左袖が残るが、構築材等の記録は残せなかった。また、天井部は確認されなかった。

[柱穴・貯蔵穴]柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

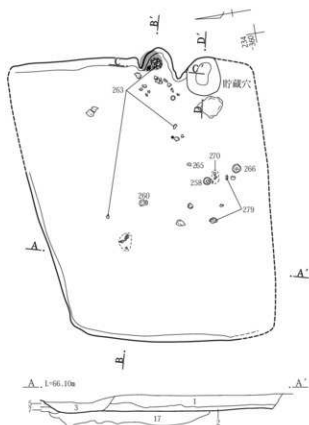
[上屋]棟の方向は、堅穴の直交する軸の比較から、南北方向にあるものと推定される。

(19号住居)

[堅穴]本住居は18号住居との重複等により、確認できない箇所もあるが、堅穴のプランは、縦長の逆台形を呈する。主軸方向はN82°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は、南壁中程の壁際に幅46cm以下、深さ10cm、西部に幅152cm以下、深さ14cm、北壁中程の壁際に幅64cm 深さ14cmを測る掘り込みが繋がり、北壁沿いの掘り込の内壁に隣接して径101×85cm 深さ35cmを測る、楕円形様プランの土坑状の掘り込みを伴う掘り方を有する。床面は、これを黒褐色土と黄褐色土の混土で埋め戻して造っている。

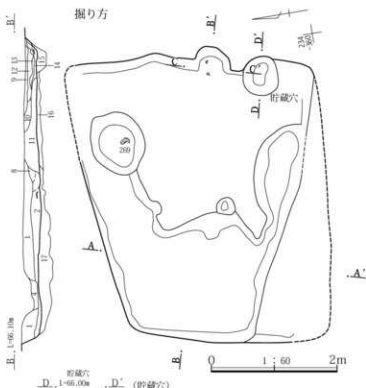
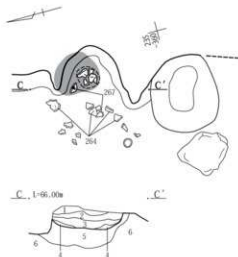
[竈]竈は東壁中央の南寄りに設けられる。その方位はN



2区19号住居  
(18号住居)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。白色軽石粒、赤褐色粒少量含む。
  - 2 黒褐色土 粘性あり、締まりやや強し。赤褐色粒微量含む。
- (他遺構)
- 3 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック少量、炭化物微量含む。
  - 4 暗灰色土 粘性やや弱し、締まりややあり。全体的にザラつきあり。溝埋土と考えられる。
  - 5 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック少量含む。
- (7号住居)
- 7 黒褐色土と黄褐色土の混土。
- (18号住居)
- 8 黒褐色土 粘性、締まりやや強し。黄褐色ブロック少量含む。

竈



貯蔵穴

D. 1:66.00m

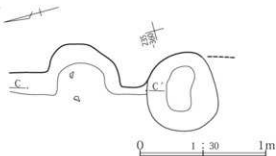
D'. (貯蔵穴)

- 1 黒褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色粒少量含む。

(19号住居覆土)

- 9 黒褐色土 粘性、締まりあり。
  - 10 黒褐色土 粘性、締まりあり。暗灰色粘質土少量含む。
  - 11 黒褐色土 粘性、締まりあり。赤褐色粒少量含む。
- (19号住居覆)
- 12 暗灰色土(カマド構築土)と暗褐色土の混土
  - 13 赤褐色焼土
  - 14 黒褐色土 焼土、灰、炭化物含む。19号住居カマド埋土。
  - 15 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック少量含む。
- (19号住居覆り方)
- 16 黒褐色土と黄褐色土の混土 19号住居床構築土。
  - 17 黒褐色土と黄褐色土の混土 19号住居床構築土だが、19号住居構築前の風倒木。

竈掘り方

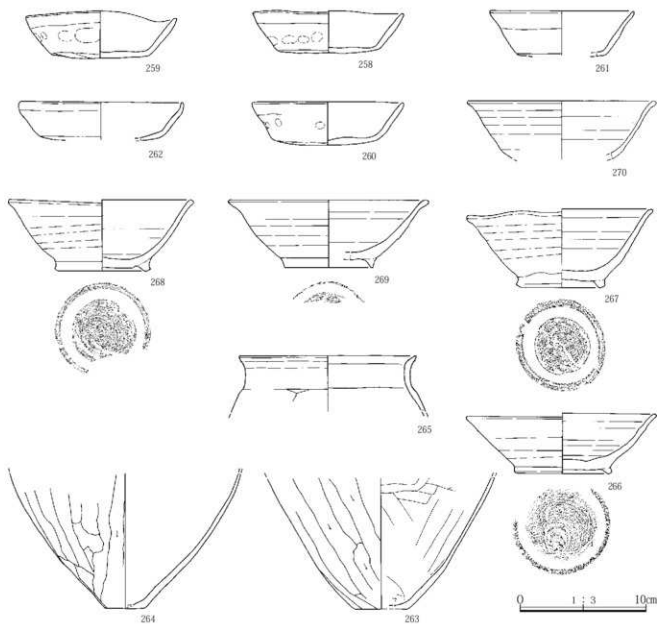


(竈覆土)

- 1 黒褐色土 粘性あり、締まりあり。19号住居埋土。
  - 2 暗灰色土(竈構築土)と暗褐色土の混土
  - 3 赤褐色土 焼土、19号住居竈埋土。
- (竈掘り方)
- 4 黒褐色土 焼土、灰、炭化物含む。
  - 5 暗褐色土 粘性、締まりあり。黄褐色ブロック少量含む。
- (地山)
- 6 黒褐色土 粘性、締まりあり。

第112図 2区19号住居

第3章 発見された遺構と遺物



第113図 2区19号住居出土遺物

73°Wを向く。

竈は掘り方を有し、これを、粘性のある暗褐色土壌で埋め戻して燃焼面が作られる。

左右側の袖が残るが、構築材の記録は残せなかった。また、天井部は確認されなかった。

〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は、竈右袖の外側に接して掘削される。貯蔵穴のプランは楕円形を呈し、その掘削形態は揺鉢形を呈する。

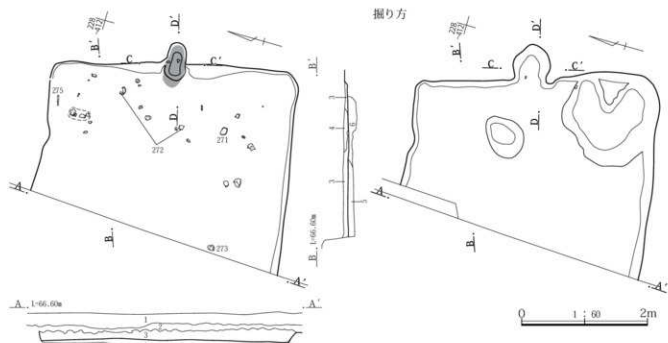
〔上屋〕棟の方向は、竪穴の直交する軸の比較から、東西

方向にあるものと推定される。

**遺物** 18号住居からは杯(254)を含む、やや多い量の土師器や、椀(255・256)を含む須恵器、椀と思われる灰軸陶器(257)の出土が見られた。

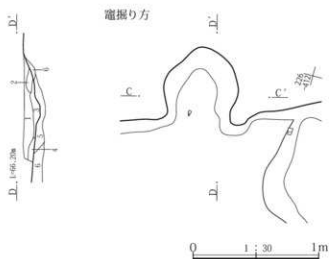
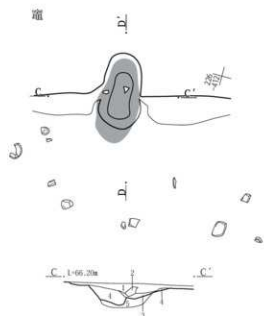
19号住居からは杯(258～262)・甕(253～255)等の土師器、椀(266～270)等の須恵器片が出土した。

**所見** その時期は18号住居は9世紀第3四半期の、19号住居は9世紀第4四半期の所産と判断される。



2区20号住居(現耕作上等)

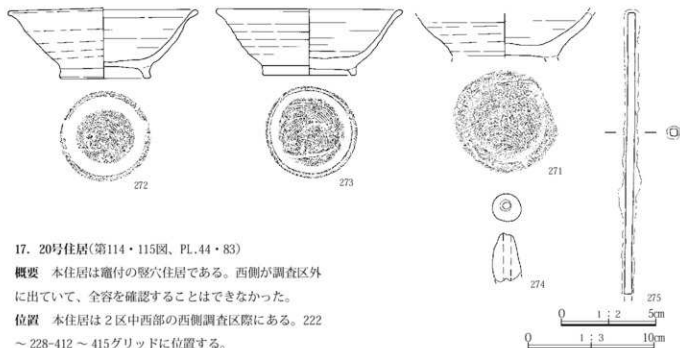
- 1 褐灰色土 現在の耕作上。
- 2 褐灰色土と黒褐色土の混土 (住居覆土)
- 3 黒褐色土 少量の白色軽石(As-C)・焼土粒含む。
- 4 暗褐色土 やや多量の焼土粒・小ブロック含む。(竈掘り方)
- 5 黒褐色土 少量のローム小ブロック含む。(住居掘り方)
- 6 黒褐色土 ロームブロック及び焼土粒含む。



(竈)

- 1 黒褐色土 焼土粒・小ブロック、炭化物を含む。
- 2 灰褐色土 焼土粒子・小ブロックを含む。天井、袖からの崩落土か。
- 3 黒褐色土 焼土小ブロック、炭化物、灰を含む。(竈掘り方)
- 4 暗褐色土 多量の焼土粒、炭化物及び灰褐色土を含む。天井落土、袖崩壊梁材。
- 5 黒褐色土 焼土粒を含む。(住居掘り方)
- 6 黒褐色土 やや多量の焼土粒を含む。

第114図 2区20号住居



第115図 2区20号住居出土遺物

17. 20号住居(第114・115図, PL.44・83)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。西側が調査区外に出て、全容を確認することはできなかった。

**位置** 本住居は2区中西部の西側調査区際にある。222～228-412～415グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：残長3.98cm 短軸：325cm 深さ：12cm

**竈** 幅：30cm 奥行：61cm

燃焼部 幅：18cm 奥行：45cm 深さ：2cm

**覆土** 黒褐色土等で埋没する。いわゆる三角堆積等は確認できなかった。

**構造** [竪穴]全容が確認できなかったため、断定はできないが、長方形に近い隅丸地用方形のプランを呈する。主軸方向はN79°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は南東隅部に径108×104cm、深さ6cmを測る円形のプランを呈する掘り込みと、竈左手前に径73×55cm 深さ8cmを測る楕円形プランを呈する土坑が掘削される掘り方を有し、これを東部ではロームや焼土粒を含む黒褐色土で埋め戻して床を造る。

[竈]竈は東壁の中程に設けられ、主軸はE0°を向く。

竈は掘り方を有し、これを焼土粒を含む黒褐色土で埋めて燃焼面を作る。燃焼面には径66×33cmの範囲内に焼土面が残る。

袖及び天井部の構造は確認できなかった。

[柱穴・貯蔵穴]柱穴及び貯蔵穴は確認できなかった。

[上屋]棟の方向は、想定できなかった。

**遺物** 本住居は、土師器片や、椀(271～273)等の須恵器、土錘(274)、不明鉄製品(275)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第4四半期の所産と判断される。

18. 23号住居(第116図, PL.44・83)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。削平により床面及び西壁が失われ、カマド付近は2面の土坑の重複が見られ、遺存状態は不良である。

**位置** 本住居は2区西端中部、217～220-408～411グリッドに位置する。

**重複** 2面の12号溝や23・24号溝と重複する。が、同時期の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 長軸：490cm 短軸：287cm 深さ：14cm

**竈** 幅：残長66cm 奥行：残長66cm 深さ：4cm

**覆土** 覆土は確認されなかった。

**構造** [竪穴]本住居は横長の船形のプランを呈する。主軸方向はN67°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は掘り方を有し、これをローム粒を含む暗褐色粘質土で埋め戻して床面を造る。

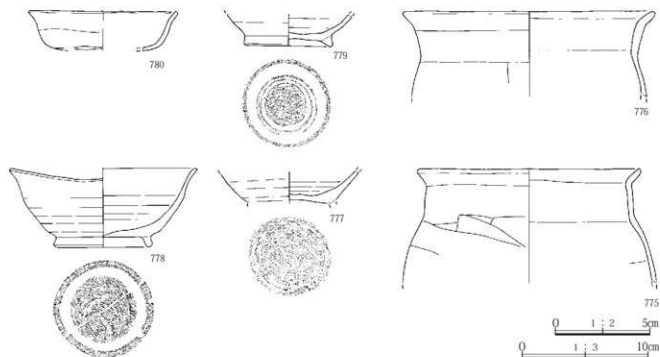
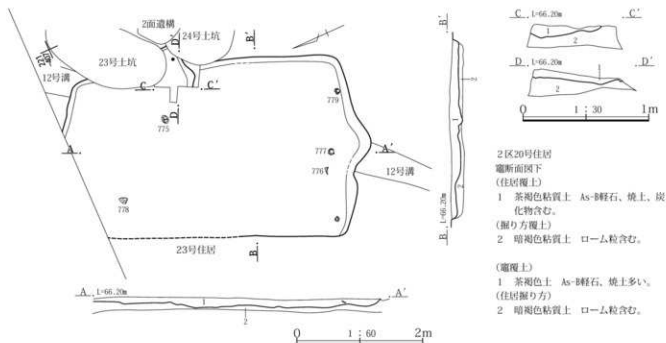
[竈]竈は東壁北寄りに設けられる。楕円形様プランと推定される掘り方を有し、これを住居掘り方と同様の土壌で埋め戻して燃焼面としている。しかし、遺存状態が悪く、カマドのプラン、袖等の構造は確認できなかった。

[柱穴・貯蔵穴]柱穴、貯蔵穴等は確認できなかった。

**遺物** 少量の杯(780)・甕(775・776)等の土師器、杯(777)・椀(778・779)等の須恵器が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

第2節 2区の遺構と遺物



第116図 2区23号住居と出土遺物

19. As-B下水田(第117図、PL.45～47)

**概要** 本水田は、浅間山が天仁元(1108)年に噴火した際噴出した、As-Bテフラで覆われた、水田址である。

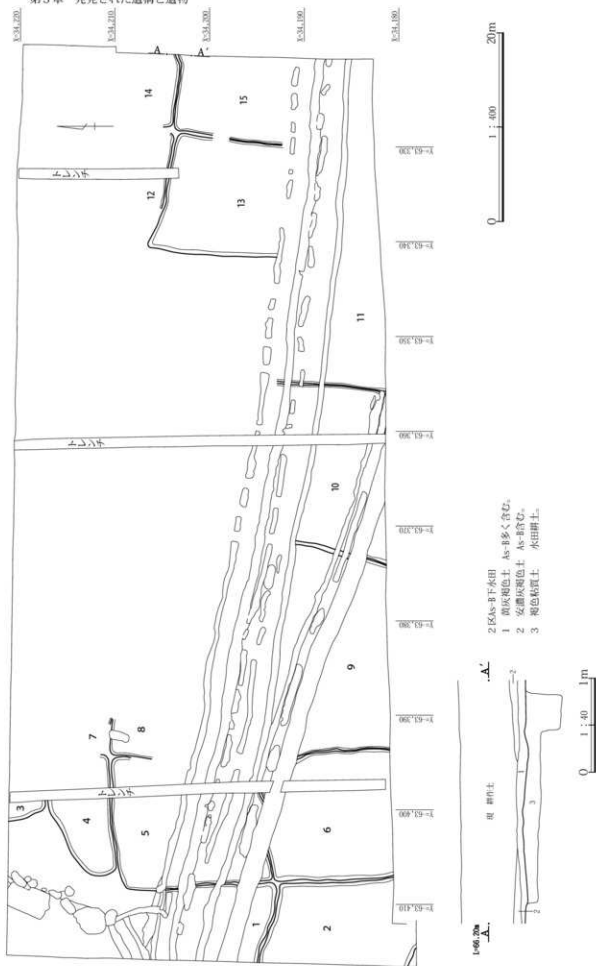
2区南半部に検出されたが、南半部の中北域では後世の削平により失われて確認できなかった。また東西両側と南側は調査区外に出ていて確認できなかったため、全

容は詳らかにすることはできない。

**位置** 本水田址は、2区南半の東・南・西の調査区境に沿うように位置し、180～211-320～416グリッドにある。

なお、個々の水田面の位置は表8に記載する。

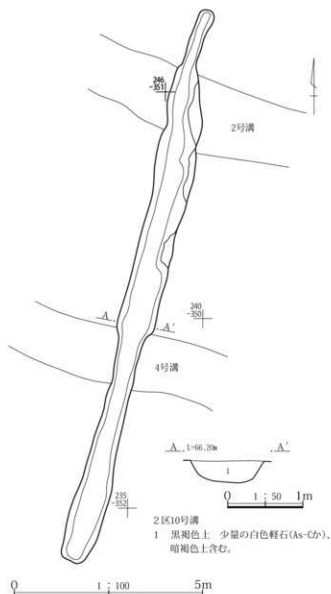
**重複** 本水田址は、3面の他の遺構との重複関係は見られなかった。



- 2区As-B下水田  
 1 黄灰色土 As-B多く含む。  
 2 安濃灰色土 As-B含む。  
 3 褐色粘質土 水田耕土。

第117図 2区As-B下水田





第118図 2区10号溝

**規模** 残存東西：96.2m 南北：30.5m

水田面規模は表8参照のこと。

**覆土** 本水田址は、As-Bテフラ(軽石・火山灰)で覆われている。

**構造** 本水田址では15面の水田面を確認した。

畦畔の配置は、水田面3に西壁は弧状のライン、水田面4の西壁は楕円様の輪郭呈するが、その他の水田面を圍繞する畦畔は、おおよそ東西を向くもの(以下「畦」とする)と、おおよそ南北を向くもの(以下「畔」とする)があるが、畦は、略東西に走向を取る箇所と西北西—東南東方向に走向を取る箇所があり、畔は、一部を除いて略南北方向に直線的にある。なお、水田面3・4の西壁は低地部と、西側の微高地部との境を示すものと思慮され

る。

水田面の比高差の比較から始めに畦(東西)を設置して、その後、畦と畦の間を仕切るように畔(南北)が設置されたものと思慮される。畦は15.2～16m、平均15.6mの間隔で設置され、畔は12～18m、平均14.55m、間隔の広い一ヶ所を除くと、平均13.4mの間隔で設置される。また、畦畔の幅は、畦は57～106cm、平均71.5cmを測り、畔は45～112cm、平均69.26cmを測る。

遺存状態が悪いため、明確ではないが、水田面は略長方形または略平行四辺形のプランを呈するものと思慮される。またいずれの畦畔にも水口は検出されなかった。なお、水田の傾斜はほぼ平坦であるが、東西方向では、西高東低で水田面1と水田面15間では、0.35%の勾配を測り、一方、南北方向では平坦である。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

**所見** 本水田址の畦畔は、自然地形と条里方眼の両者を勘案したような縄張りで配置される。

その時期は、天仁元(1108)年を下限とした、平安時代の所産である。

## 20. 10号溝(第118図、PL.44)

**概要** 本溝は、中規模な溝遺構である。

北側が調査区外に出ているため、全容は把握することはできなかった。

**位置** 本溝は2区中北部、中北部野住居群の東側にあり、233～247-349～353グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独であり、同じ面における他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 長さ：15m 幅：100cm 深さ：31cm

**覆土** 本溝は黒褐色土で埋没する。

**構造** 本溝は直線的な走向を呈し、その走向はN18°Eを向く。また掘削形態は箱型を呈する。

**遺物** 出土遺物は得られなかった。

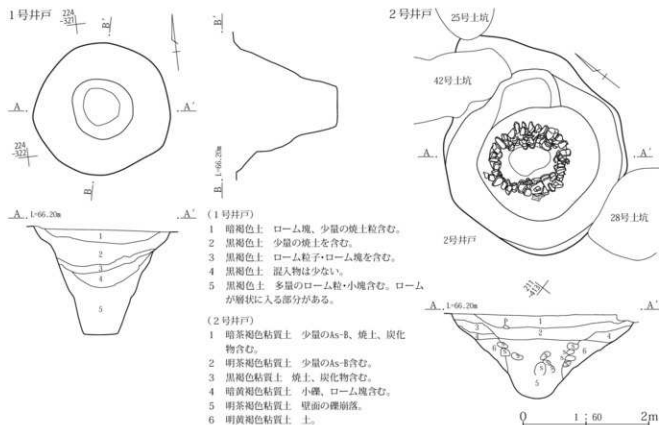
**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期もおおよそ古代の遺構として把握されるだけで、特定することはできなかった。

## 21. 1号井戸(第119・120図、PL.47)

**概要** 本井戸は2区北半部(2期調査区)の南東隅部にある井戸遺構である。

### 第3章 発見された遺構と遺物



第119図 2区1・2号井戸

**位置** 本井戸は2区中東部、調査区東端部北寄りにあり、221～223-319～321グリッドに位置する。

**重複** 本井戸は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 径：80×76cm 深さ：172cm

**覆土** 本井戸は黒褐色土等で埋没する。

**構造** 本井戸は楕円形の掘削形態を見せる井戸である。

プランは、略円形を呈する。

本井戸は、地山の堆積層の記録を残せなかったため、湧水箇所等を特定することはできなかった。また、アグリは確認されなかった。

**遺物** 井戸からは甕(781)等の土師器、杯(782)等の須恵器が出土した。

**所見** 本井戸の時期は、出土遺物から推して、10世紀前期の所産と想定される。

#### 22. 2号井戸(第119～121図、PL.47・83・84)

**概要** 本井戸の上位部分は、22号住居として調査を行ったが、その後の検討により下位部分と併せて井戸遺構として把握することとした。

なお、本井戸の上位には、焼土等を含む竈ともしき箇所もあったが、明確な竈遺構として把握することはできなかった。

**位置** 本井戸は2区西端中部、211～213-410～413グリッドに位置する。

**重複** 2面の23号溝や3面の28号土坑と重複する。が、28号土坑との新旧関係は特定できなかった。

**規模** 径：291×281cm 深さ：130cm

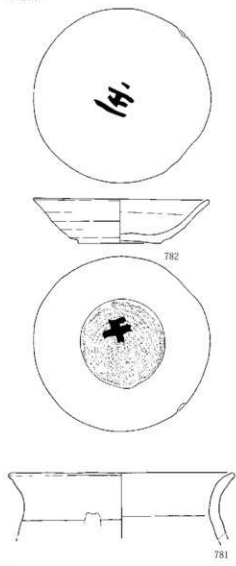
**覆土** 上位層(1・2層)はAs-B軽石の入る茶褐色土で埋没し、下位層(5層土)は壁面と同じ、明茶褐色土で埋没する。

**構造** 本井戸は井筒部分が浅い、井筒朝顔型の掘削形態を呈する井戸である。

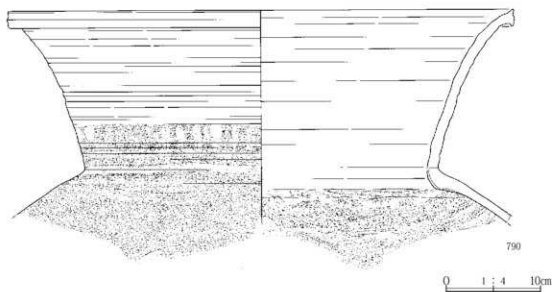
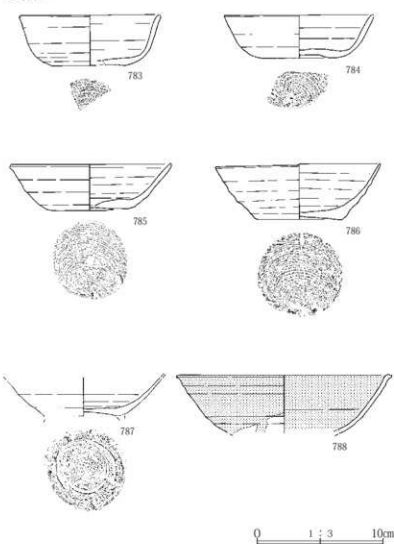
プランは、上位は隅丸方形を呈し、底面は隅丸台形を呈する。また北東部に、底面から70cmの高さに、幅60～90cm、奥行44cmを測るテラス状の掘り込が残る。本井戸は、掘削の後、外周を暗黄褐色粘質土で埋戻し、一部には焼土や炭化物を含む黒褐色粘質土が乗るが、中位から下位にかけて野面の石積みが施されていた。

なお、地山の堆積層の記録を残せなかったため、湧水

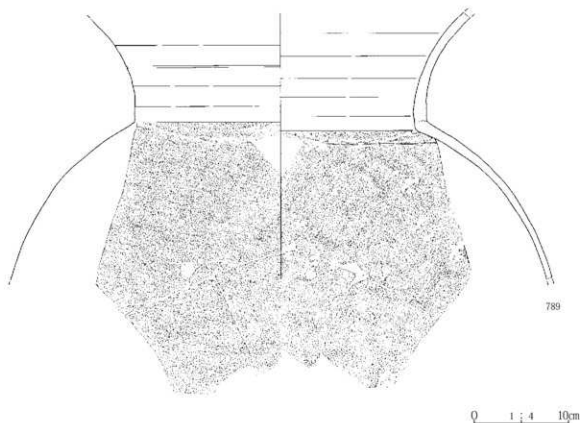
1号井戸



2号井戸



第120図 2区1・2号井戸出土遺物(1)



第121図 2区2号井戸出土遺物(2)

箇所等を特定することはできなかった。

**遺物** 本井戸からは数量の多い土師器や、杯(783～785)・椀(786～787)・甕(789・790)を含む須恵器、灰釉陶器椀(788)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀代の所産と想定されるが、石組の井戸であることから、中世以降の所産である可能性を有する。

### 23. 2区3面北半部の土坑群

(第122図、Pl.48・84)

**概要** 本項では2区3面の土坑のうち、X=200ライン以北に所在する、8・9・10・11・12・13号土坑の6基について扱う。

**位置** 本土坑群のうち8・10・11号土坑は2区中東部の調査区東端に近い位置にあり、9・12号土坑は北東部の調査区東端に近い位置にある。また13号土坑は中北部西端の調査区北端を跨いであり、14号土坑は中北部の南東寄りにある。なお、個々の土坑の位置するグリッドは表9参照のこと。

**重複** 8～13号土坑は、それぞれ単独であり、共に、

他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 表9

**覆土** 8・12号土坑の埋土は暗褐色土、9・14号土坑は黒褐色土、10・11号土坑は暗褐色土と黒褐色土、13号土坑は暗褐色土と若干の褐色土で埋没する。

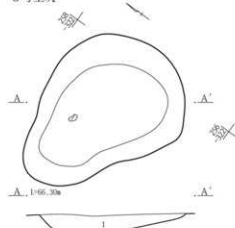
**構造** 各土坑のプランは、8号土坑は楕円形、9号土坑は隅丸三角形、10～12号土坑は円形を呈し、13号土坑は円形と推定され、14号土坑は隅丸方形を呈する。

また、これらの掘削形態は、8・9号土坑は遺存状態が不良であるため、的確に把握できないが、底面は平底である。10号土坑は掘鉢状を呈するが、壁面は立ち気味で、底面は平底である。11号土坑は缶形を呈する。12～14号土坑は碗形を呈し、12・13号土坑は丸底、14号土坑は平底を呈する。

主軸方位は表9に記す。

**遺物** 9号土坑からは甕(792)を含む少量の土師器、10・11号土坑からは少量の須恵期が出土する。12・14号土坑からは少量の土師器が出土するが、12号土坑からは、古墳時代前期の所産と認識される鉄製銅(794)が、覆土の上位から出土した。

8号土坑



[8号土坑]

1 暗褐色土 粘性、締まりあり。色調暗い。

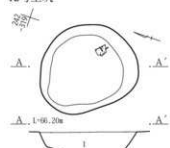
9号土坑



[9号土坑]

1 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。

12号土坑



[12号土坑]

1 暗褐色土 ローム粘・小ブロック含む。

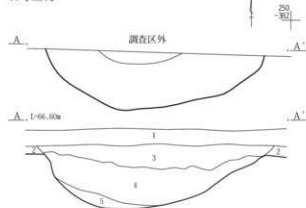
14号土坑



[14号土坑]

1 黒褐色土 焼土粒、炭化物含む。  
2 黒褐色土 ローム小ブロック含む。

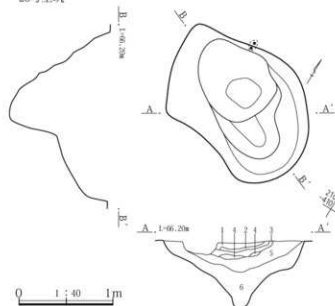
13号土坑



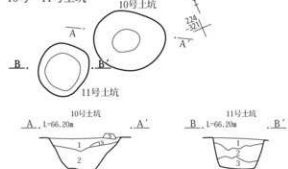
[13号土坑]

1 暗褐色土 表土、現代研上。  
2 暗褐色土 粘性、締まりあり。  
3 暗褐色土 粘性、締まりややあり。黄褐色粒少量を含む。  
4 暗褐色土 粘性あり、締まりややあり。黄褐色ブロック少量含む。  
5 褐色土 粘性、締まりややあり。全体的にややザラつきあり。

28号土坑



10号・11号土坑



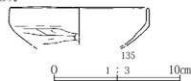
10号土坑

1 暗褐色土 少量のローム小ブロック含む。  
2 黒褐色土 黄褐色ローム小ブロックを含む。

11号土坑

1 暗褐色土 黒褐色土小ブロック含む。  
2 黒褐色土 少量の黄褐色土含む。  
3 黄褐色土 黒褐色土小ブロック含む。

28号土坑

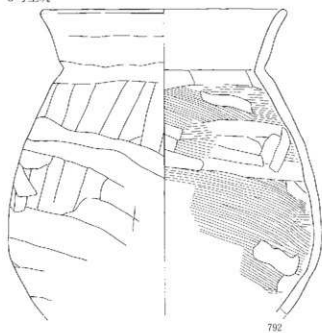


0 1:40 1m

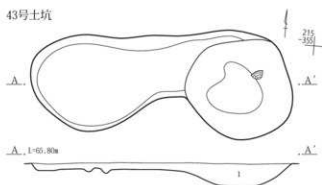
0 1:3 10cm

第122図 2区3面の土坑と出土遺物(1)

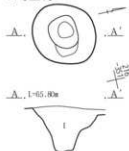
9号土坑



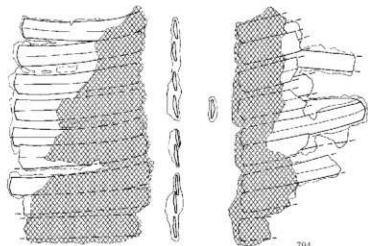
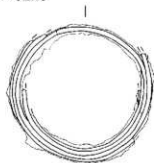
43号土坑



44号土坑

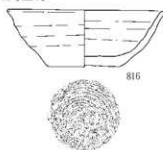


12号土坑



0 1 : 40 1m

43号土坑



0 1 : 3 10cm

0 1 : 2 5cm

第123図 2区3面の土坑と出土遺物(2)

**所見** 各土坑の掘削意図は特定できなかった。

またその時期は特定できなかったが、出土遺物から推して、9号土坑は×世紀××の所産と想定され、10～12号土坑は概ね平安の所産と判断されるが、8・13・14号土坑は概ね律令期の所産として把握されるに過ぎない。なお、12号土坑からは鉄製釧(248)が出土するが、本土坑に伴うものではなく、混入したものと思慮される。

#### 24. 2区3面南半部の土坑群

(第77・122・123図、PL.48・84)

**概要** 本項では2区3面の土坑のうち、X=200ライン以南に所在する、28・43・44号土坑の3基について扱う。

**位置** 本土坑群のうち28号土坑は2区中西部にあり、43・44号土坑は中東部に位置する。

個々の土坑の位置する。

グリッドは表9参照のこと。重複28号土坑は、3面の遺構としては23号住居と重複する。が、本土坑の方が新しい。また43・44号土坑は共に単独であり、他遺構との重複関係は見られなかった。

**規模** 表9

**覆土** 28号土坑の埋土は、大きく上位層と中・下位層に分けられる。前者は灰層とAs-B軽石混土層の互層であり、後者はAs-B軽石主体、あるいはAs-B軽石混じりの明褐色土で埋没する。43・44号土坑は暗青灰色粘質土で埋没する。

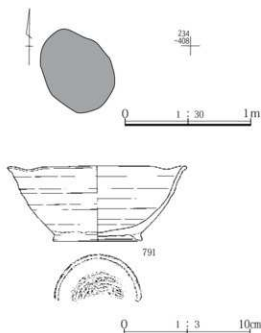
**構造** 28・44号土坑は楕円形プランを呈し、掘削形態は漏斗状を呈する。43号土坑は東西に瓢箪形のプランを呈し、掘削形態は中西部は遺存状況が悪く明瞭ではないが、平底を呈し、東部は中。西部に比し14cm程深く掘削されるが、その壁面はやや開き気味である。

主軸方位は表9に記す。

**遺物** 28号土坑からは少量の土師器、須恵器片が出土し、43号土坑からは須恵器椀(816)が出土したが、他の土坑からの遺物の出土は見られなかった。

**所見** 各土坑の掘削意図は特定できなかったが、28・43号土坑は、その掘削形態から井戸あるいは水室の可能性が考慮される。

またその時期は、43号土坑は、出土遺物から推して、9世紀後半と判断される。また、28号土坑は古代末のAs-A軽石降下後の天仁元(1108)年以降の所産であり、中



第124図 2区1号焼土と出土遺物

世に下る可能性も思慮される。しかし、28・43号土坑以外の土坑の時期を特定することはできず、概ね古代の所産と判断している。

#### 25. 1号焼土遺構(第124図、PL.84)

**概要** 本遺構は、焼土が面的に確認された遺構である。

**位置** 本遺構は2区4北西部西寄りにあり、233～234-408～490グリッドに位置する。

**重複** 本遺構は単独であり、他遺構との重複関係は見られなかった。

**規模** 径：75×58cm

**覆土** 覆土の記録化はなされなかった。

**構造** 本遺構は、焼土が、N31°Wに主軸の方向を向ける、楕円形プランの形状で面的に確認されている。

**遺物** 少量の土師器と、椀(791)を含む僅かな量の須恵器片が出土した。

**所見** 本遺構の燃焼の目的は想定できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と想定される。



第125図 2区4面全体図

#### (4) 2区4面の遺構と遺物

##### 1. 2区4面の概要

2区4面は北半部において、北西隅部から南東方向へ向かう谷地形部と、中北部の中部から南西方向へ向かう谷地形部が確認され、これらの谷地形によって区切られる。北東、中北、北西の3ヶ所の微高地部が確認されている。また、南側は全体としては低地部が広がる様相が窺われる。

4面の遺構は北半部を中心に確認できるが、その分布は区の中央北寄りに濃い区域があり、全体としては西側より東側の方が、その分布が濃い傾向が見られる。

4面で確認された遺構には、11・29・30・32～35号溝があり、その他、井戸1基、15～17・30～42号土坑、1～15・17～28号ピット、2～6号焼土、不明遺構1基があった。また、微高地部には78基の風倒木痕が確認したが、非人為的遺構であるため、掘削調査は行わず、特段の記録化も施さなかった。

##### 2. 29・30号溝(第126図、PL.50)

**概要** 29・30号溝は、近接した位置、及び近似した走行を見せる溝遺構である。

両溝共に西側調査区から出ているが、29号溝は西接する溝を1区では確認できず、また東部は南側調査区外に抜けるため、全容は詳らかにできなかった。一方、30号溝は位置的に1区の59号溝に接続するものと判断され、東側は調査区南西部で途絶えている。

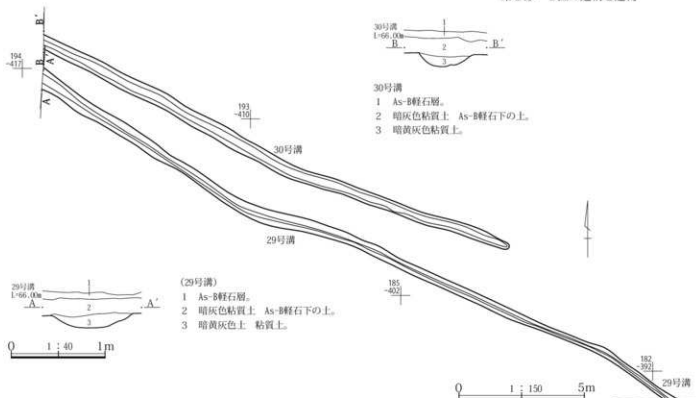
なお、上述のように1区59号溝は、1区東寄りでは1区68号溝が分岐するが、68号溝は後述する2区31号溝に接続するものと判断される。

**位置** 29・30号溝は2区南西部に位置する。29号溝は180～194-391～414グリッドに、30号溝は186～199-397～414グリッドにある。

**重複** 両溝共に単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 29号溝 残長：28.5m 幅：63cm 深さ：15cm  
30号溝 残長：20.5m 幅：56cm 深さ：22cm





第126図 2区29・30号溝

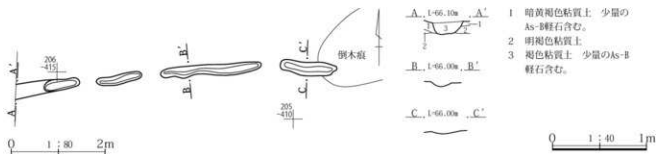
**覆土** 29・30号溝は、共にAs-B層下の暗灰色粘質土下の暗黄灰色粘質土で埋没する。

**構造** 29・30号溝は同様の掘削規模を有し、東に向かって若干開くが、その芯々の距離は、西端で130cm、共にほぼ重なる位置で屈曲する中央部で210cm、30号溝の東端で235cmを測る。さて29号溝は西側よりN59°Wの角度で2区調査区に入り、直線的に走行した後、9m程で反時計回りに僅かに走行を転じてN67°Wを向き、極緩やかに蛇行しながら、14m程で時計回りにN53°W方向に走行を転じた後、直線的に走行して南側調査区外に抜けている。掘削形態は箱堀状を呈するものと想定されるが、底面の横断面形は丸底状を呈する。なお、底面の勾配率は0.11%で傾斜はほぼ無いが、僅かに西高東低であ

る。30号溝は西側よりN63°Wの角度で2区調査区に入り、11.5m程極緩やかに蛇行しながら走行した後、反時計回りにN69°W方向に走行を転じた後は、比較的直線的に9m程走行して途絶える。本溝も29号溝同様に、底面の横断面形は丸底状を呈するが、箱堀に近い掘削形態を呈するものと想定される。なお、本溝も底面の勾配率は0.39%でほぼ平坦であるが、僅かに自然傾斜に反する東高西低の状態を見ている。

**遺物** 両溝からの出土遺物は、共に得られなかった。

**所見** 29・30号溝の掘削位置が近似していることから、掘削意図は同様のものであると想定される。このうち29号溝では西側の1区59号溝のプラン等からあるいは水路の可能性が考慮されるが、覆土に流水の痕跡は確認さ



第127図 2区31号溝

れず、勾配もほぼ平坦に近いもので、その可能性を積極的に示す根拠は得られなかった。

また両溝共に、その時期を特定することはできず、概ね古墳時代以降の所産として把握されるに過ぎない。

### 3. 31・32号溝(第127・128図, PL.50・85)

**概要** 31号溝は底面付近が断続的に連なる遺構として確認されたもので、35m程を調査できたに過ぎない。しかし、位置的に西接する1区の68号溝に接続するものと判断される。また32号溝は、2区内で完結するもので、20m弱を調査した。

**位置** 31・32号溝は2区中西部に位置する。31号溝は205～206・409～410グリッドに、32号溝は213～215・404～409グリッドにある。

**重複** 31号溝は単独で在ったが、32号溝は3号井戸、34・45号土坑と重複する。が、本溝は3号井戸より新しいが、34・45号土坑との重複関係は確認できなかった。

**規模** 31号溝 長さ(調査範囲):6.86m 幅:29cm 深さ:13cm

32号溝 残長:5.1m 幅:72cm 深さ:21～47cm

**覆土** 31号溝はAs-B軽石を含む暗黄褐色土で埋没するが、本溝がAs-B下水田の下位に確認されていることから、包含されるAs-B軽石は植物の腐食に伴う等の、二次的堆積であると認識される。一方、32号溝の覆土は炭化物、焼土を含む黒褐色土で埋没する。

**構造** 31号溝は西側よりN82°Eの角度で2区調査区に入り、極緩やかに蛇行しながら走行するが、全体としては北側に極緩く張り出す弧状に走行し、西端から5.4m付近で東西走行となる。確認範囲東端部でN82°W方向を向く。上述のように4箇所の底面付近が断続的に連なる。そのため、全容は詳らかでないが掘削形態は箱型状を呈する。底面が断続する、即ち凹凸が見られるが、全体として勾配率は0%で、傾斜の方向が見られない。

30号溝は直線的に走行し、その主軸はN66°Eを向く。掘削形態は箱型状を呈する。底面は西端から216cmの範囲で土坑状の掘り込を見せるが、その東が世の底面に対して掘り込東端で16cm、中央で29cm、西端で13cm低く、土坑状部分の底面は向斜面状を呈している。なお土坑部分より東の区域は平底を呈するが、東に傾斜しており、勾配は1.79%を測る。

**遺物** 31号溝からは僅かな土師器片が出土したに過ぎなかった。一方、32号溝からは土師器杯(809)・付付甕(801)・甕(810)や、その可能性が考慮されるものを含む椀(803～808)を含む須臾器の他、灰釉陶器皿(800)、土鍾(802)の出土が見られた。

**所見** 31号溝は水路あるいは区画溝の可能性が考慮されるが、掘削意図を特定することはできなかった。

また31号溝は概ね古墳時代の所産として把握されるに過ぎなかったが、32号溝は出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

### 4. 33・34号溝(第129図, PL.50)

**概要** 33・34号溝は近似した走行を示す溝である。このうち33号溝は断続的に確認されたもので、34号溝は部分的な確認に留まった。

**位置** 33・34号溝は2区中西部に位置する。33号溝は214～218・350～399グリッド、34号溝は216～217・380～337グリッドにある。

また、34号溝は、33の北側に芯々距離で85～100cm程を測る位置で並走するようにある。

**重複** 33号溝は南西端で34号溝と接し、また32号溝と重複するが、いずれも新旧関係は確認できなかった。

**規模** 33号溝 長さ:残長49.0m 幅:88cm 深さ:9cm  
34号溝 長さ:7.5m 幅:77cm 深さ:10cm

**覆土** 33・34号溝は暗青灰色粘質土で覆われる。

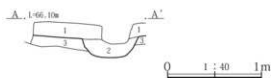
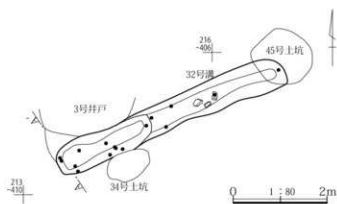
**構造** 33号溝は底面近くが確認されているに過ぎず、西端部で1か所、中西部で3か所、東部で西端では1か所が断続的に確認されているに過ぎない。その走行は西端部ではN77°Eを測り、中西部西端近くで時計周りに走行を転じてN87°Eを向き、東端でN82°W方向に走行を転ずる。掘削形態は箱型状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、僅かに東に傾斜しており、勾配は0.14%を測る。

34号溝は確認範囲が狭く、その全容は詳らかでない。その走行は弱い蛇行を見せており、全体として、その走行の方向はN90°Eを示す。掘削形態は箱型状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、僅かに西に傾斜しており、勾配は0.30%を測る。

**遺物** 両溝共に、僅かな土師器片が出土したに過ぎなかった。

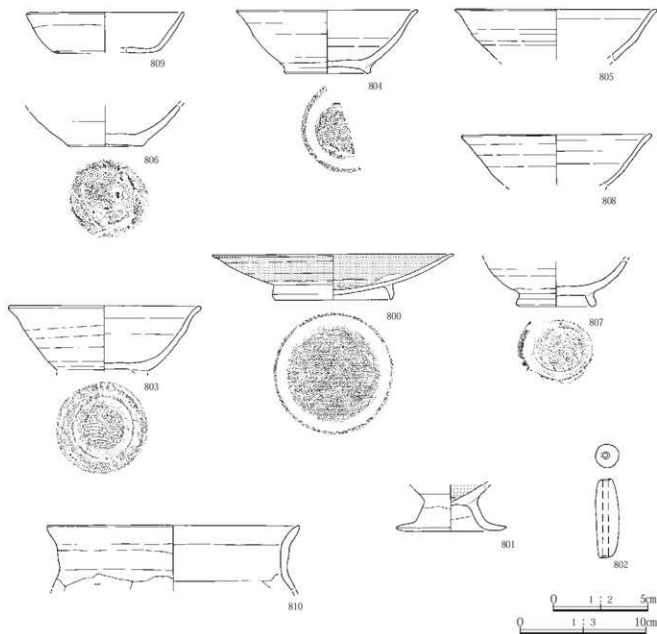
**所見** いずれの溝についても掘削意図を特定することは

第2節 2区の遺構と遺物

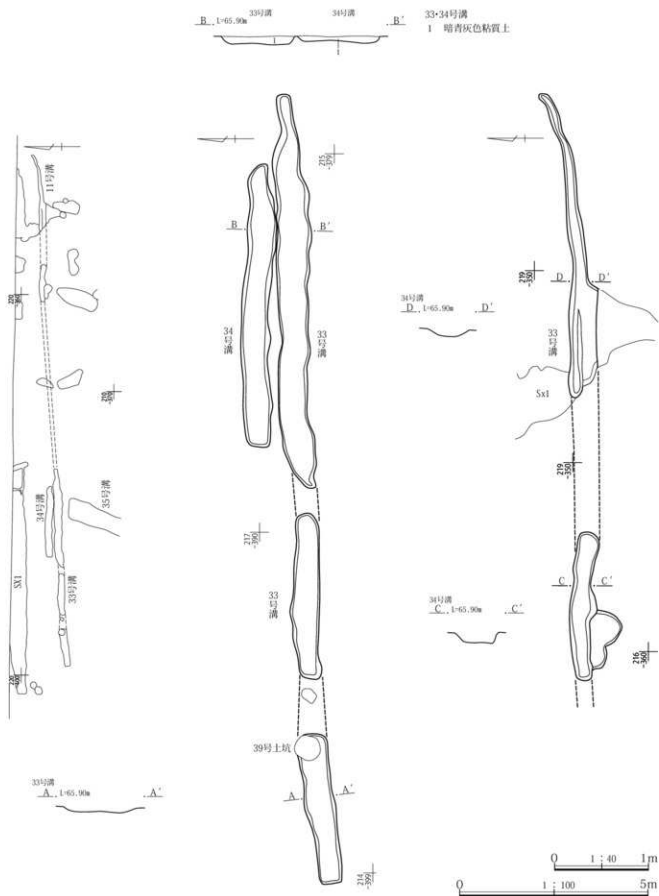


2区32号溝

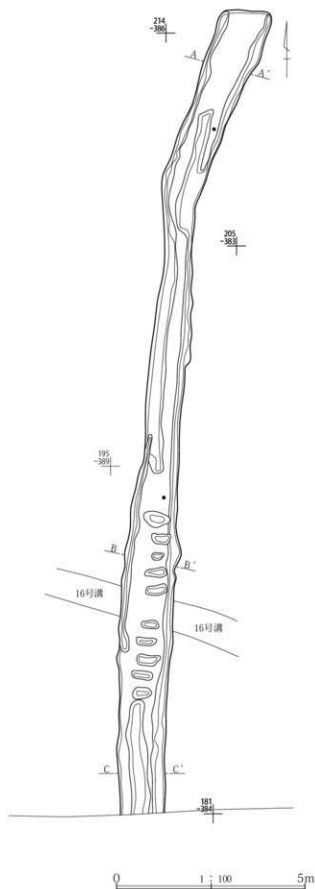
- 1 明茶褐色土 白色軽石粒含む。
- 2 黒褐色土 炭化物、焼土含む。
- 3 暗茶褐色土 白色軽石粒多く含む。



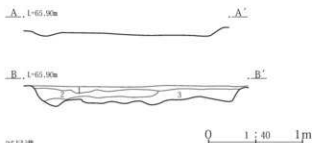
第128図 2区32号溝と出土遺物



第129図 2区33・34号溝



第130図 2区35号溝



35号溝

- 1 黄褐色土 Hr-FA二次堆積土
- 2 褐色土 ローム粒少量含む。
- 3 明褐色土 砂粒ブロック状に入る。

できなかった。なお、プランから推して、11号溝は区画溝の可能性を有し、33・34号溝は区画溝、あるいは水路の可能性を考慮することができる。

また各溝は、共に、概ね古墳時代の所産として把握されるが、その時期を特定することはできなかった。

#### 5. 35号溝(第130図、PL.50)

**概要** 35号溝は、2区4面の各溝に比して大型の溝である。また部分的に底面が東西に分かれ、南寄りには掘削痕と見られる掘り込が10箇所確認された。

**位置** 本溝は2区西南部にあり、180～214-381～388グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独であり、同じ面における他遺構との重複は見られなかった。

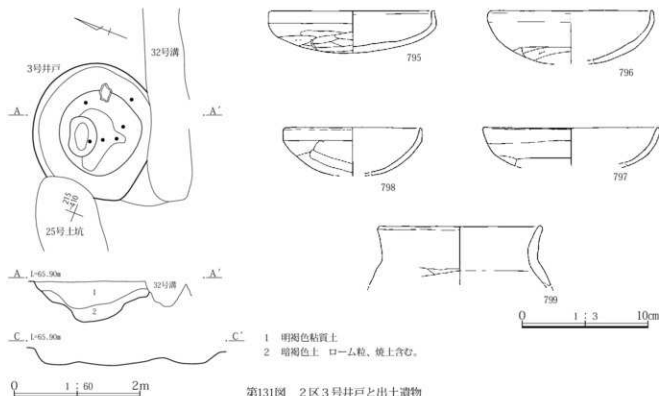
**規模** 残長：34.0m 幅：220cm 深さ：22cm

**覆土** 最下層に砂粒がブロック状に入る明褐色土が入り、褐色土を挟んで上位はHr-FA（二次堆積層）で被覆される。

**構造** 南側は調査区外に出ており、北側も消失していたため内容は確認できなかったが、北部でN21°Eを向く直線的な走行を取り、それより以南では、北側でN6°E、南でN2°Eを向く、西側に極弱張り出す弧状の走行を取る。掘削形態は箱堀状を呈するが、北側では幅80cm 深さ5cm以下の溝が、南側には幅50～70cm 深さ5cmを測る溝が東壁沿いと中央に掘削される。

掘削形態は箱堀状であり、底面は溝状の掘削や鋤跡を想起される掘削痕跡が見られる。また、底面は、北高南低で、勾配は0.02%とほぼ平坦であるが、底面を更に底部での勾配は、0.15%である。

**遺物** 僅かな量の土師器片を出土したが、図示すべきも



第131図 2区3号井戸と出土遺物

のはなかった。

**所見** 本溝は、底面を更に掘削して溝を掘削していること、及び覆土の観察所見から、本溝は水路として掘削されたものと判断される。

また、南寄りに、横(東西)に長い隅丸長方形を中心とするプランの小坑が、縦列に10基確認されている。これらの掘削を跡跡と見なせば、明確ではないが、その形態から推して、作業者が南を向き、北側に後退しながら掘削していったものと解釈することができる。

本溝は、概ね古墳時代の所産として把握されるが、その時期を特定することはできなかった。

### 6. 3号井戸(第131図、PL.85)

**概要** 本井戸は重複遺構との重複により、一部が失われていた。

**位置** 本井戸は2区西端中部、211～213-410～413グリッドに位置する。

**重複** 本井戸は同じ面の遺構としては、32号溝や28号土坑と重複する。このうちが、28号土坑との新旧関係は特定できなかったが、32号溝は本井戸を掘っている。

**規模** 径：220×205cm 深さ：76cm

**覆土** 上位層(1層)は明褐色粘質土で埋没し、下位層(2層土)はローム・焼土粒を含む暗褐色土で埋没している。

**構造** 本井戸は井筒朝顔型の掘削形態を見せる井戸であるが、その掘り込は極めて浅い。

プランは楕円形を呈する。

なお、地山の堆積層の記録を残せなかったため、湧水箇所等を特定することはできなかった。

**遺物** 本井戸からは、杯(795～798)・甕(799)を含む土師器と、僅かな量の須恵器片が出土した。

**所見** 本井戸の時期は、出土遺物から推して、8世紀前半の所産と想定される。

### 7. 2区4面北半部の土坑群

(第132・134図、PL.51・85)

**概要** 本項では2区4面の土坑のうち、X=200ライン以北に所在する、15～22号土坑の8基について扱う。

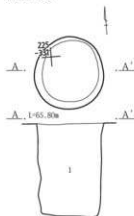
**位置** 本土坑群の土坑のうち15・16号土坑は北東部南寄りに、17号土坑は中北部南東寄り、18号土坑は西北部調査区北壁際に、19～21号土坑は北西部東寄りに、22号土坑は中北部北東寄りに位置する。

個々の土坑の位置するグリッドは、表9に記した。

**重複** 本土坑群の土坑のうち、20号土坑と21号土坑が重複するが、20号土坑の方が新しい。これ以外の土坑は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 表9

15号土坑



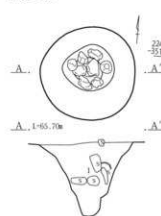
(15号土坑)  
1 黒色土 軽石(As-C)とロームブロック含む。

16号土坑



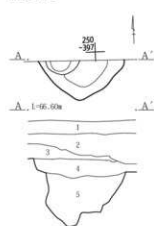
(16号土坑)  
1 暗褐色土 礫を含む。

17号土坑



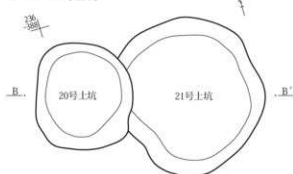
(17号土坑)  
1 黒褐色土 河床礫と少量の焼土粒含む。粘性は強。

18号土坑

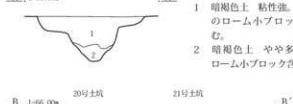


(18号土坑)  
1 灰褐色土 表土。現在の耕作土。  
2 灰褐色土 As-8置土。  
3 黒褐色土 As-Cを含む。  
4 暗褐色土 少量のローム小ブロック含む。  
5 黒褐色土 白色軽石及び少量のロームブロック含む。

19・20・21号土坑

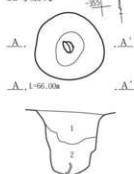


(19号土坑)  
1 暗褐色土 粘性強。少量のローム小ブロック含む。  
2 暗褐色土 やや多量のローム小ブロック含む。



(20号土坑)  
1 暗褐色土 粘性は強い。  
2 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。  
(21号土坑)  
3 暗褐色土 1層上に類似するが、ローム小ブロック含む。

22号土坑



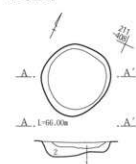
(22号土坑)  
1 黒褐色土 少量の軽石、焼土粒含む。  
2 黒褐色土 多量のロームブロック含む。

31号土坑



(31・32号土坑)  
1 明灰褐色粘質土 少量のローム・白色軽石粒含む。  
2 明褐色粘質土 ローム粒含む。

32号土坑

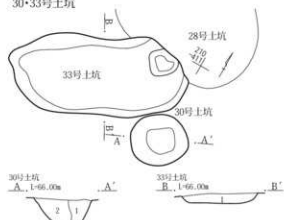


第132図 2区4面の土坑(1)

0 1:40 1m

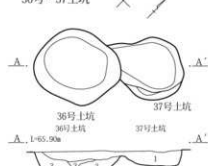
第3章 発見された遺構と遺物

30・33号土坑



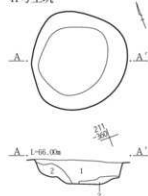
- (30号土坑) 1 明灰褐色粘質土 少量のローム・白  
色軽石粒含む。 2 明褐色土 ロームブロック含む。
- (33号土坑) 1 明茶褐色土 少量の白色軽石  
粒含む。

36号・37号土坑



- (36-37号土坑) 1 茶褐色土 少量の白色軽石粒含む。  
2 暗褐色土 ロームブロック含む。  
3 暗茶褐色粘質土 ローム粒含む。

41号土坑

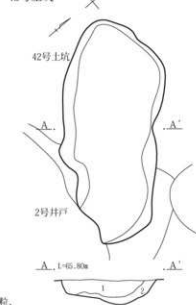


- (41号土坑) 1 明黄褐色粘質土  
2 黄灰色土 黒色土ブロック  
含む。

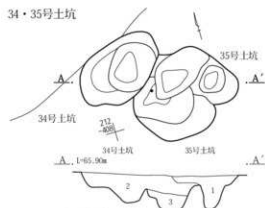
(42号土坑)

- 1 暗褐色土 白色軽石・ローム粒、  
炭化物含む。  
2 暗黄褐色土 ロームブロック多く  
含む。

42号土坑

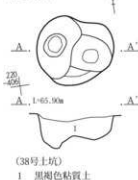


34・35号土坑



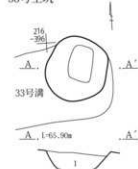
- (35号土坑) 1 明黄褐色粘質土 ローム粒含む。  
(34号土坑) 2 褐色土 ロームブロック含む。  
3 暗黄褐色土 ロームブロック多く含む。

38号土坑



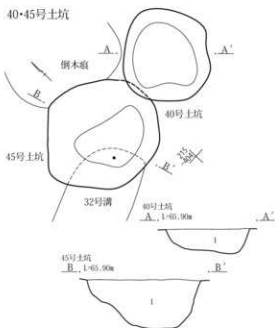
- (38号土坑) 1 黒褐色粘質土

38号土坑



- (39号土坑) 1 明黄褐色土 ロームブロック含む。

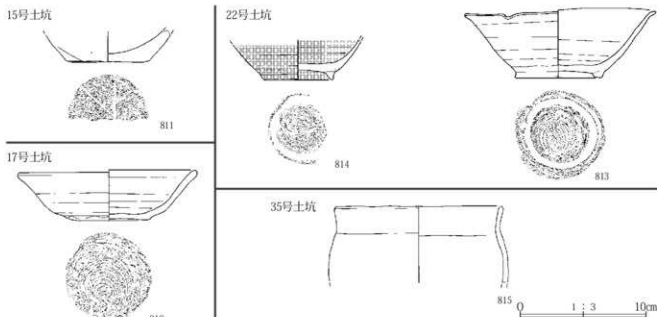
40・45号土坑



- (40号土坑) 1 明黄褐色土 ロームブロック含む。  
(45号土坑) 1 暗褐色粘質土 白色軽石・ローム粒含む。

第133図 2区4面の土坑(2)





第134図 2区4面の土坑の出土遺物

**覆土** 15号土坑が黒色土、16・19～21号土坑が暗褐色土等、17・18・22号土坑が黒褐色土等で埋没する。なお、16号土坑からは礫が出土した。

**構造** 本土坑群の土坑のうち、15・17・20・22号土坑が円形、16号土坑が隅丸方形、19・21号土坑が楕円形のプランを呈する。また18号土坑は円形プランを呈するものと推定される。

掘削形態は15号土坑は井筒形、16・18・20～22号土坑は箱形、17・19号土坑は鉢形を呈し、底面形態は15・16・21・22号土坑は平底、17・19号土坑は尖底、18号土坑は丸底を呈する。

なお、主軸方位は表9に記す。

**遺物** 15号土坑は土師器甕(811)を含む僅かな量の土師器・須恵器片、17号土坑からは椀(812)を含む須恵器片と僅かな土師器片、19・21号土坑は僅かな量の土師器片。22号土坑からは少量の土師器片と片口椀(813)を含む僅かな須恵器片、黒色土器椀(814)が出土した。

**所見** その形態から、15号土坑は井戸の可能性が考慮されるが、他の土坑の掘削意図は特定できなかった。

また、出土遺物から推して、15号土坑は古墳時代後半、17号土坑は9世紀後半の所産、22号土坑は10世紀の所産と判断され、19・21号土坑は平安時代の所産の可能性が考慮されるものの、他の土坑は古墳時代から律令期の所産として把握できるに過ぎなかった。

## 8. 2区4面南半部の土坑群

(第133・134図、PL.51・52)

**概要** 本項では2区3面の土坑のうち、X=200ライン以南に所在する、30～42・45号土坑の14基について扱う。

**位置** 本土坑群の土坑のうち41号土坑は2区中部のやや東寄りであり、他の土坑は2区中西部に位置する。

個々の土坑の位置するグリッドは、表9に記した。

**重複** 本土坑群の土坑うち、34号土坑は33号溝及び35号土坑と、36号土坑と37号土坑、そして40号土坑と45号土坑が重複する。このうち34号土坑が、後述するように分割される35号土坑のa坑より古く、35号土坑のb坑より新しいことを確認した他は、新旧関係を特定することはできなかった。

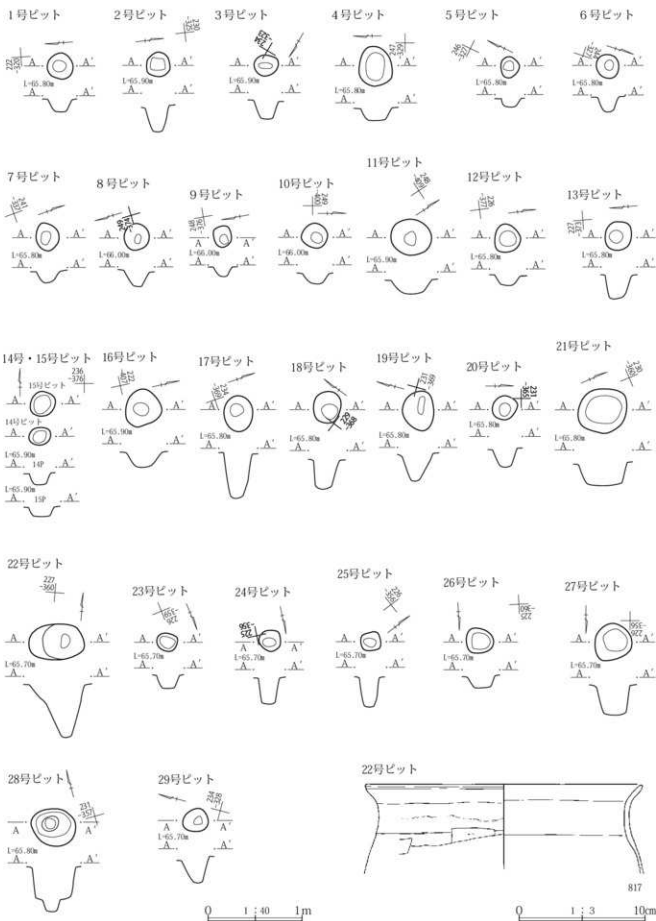
**規模** 表9

**覆土** 38号土坑が黒褐色土、42号土坑が暗褐色土等で埋没する他は、明るい褐色系の土壌で埋没している。また、30～32・34～37・39・40・42号土坑ではロームが混入するが、34号土坑の混入量は多い。

**構造** 本土坑群の土坑のうち、35号土坑は1基の土坑として調査したが、形態及び土層断面の観察から、3基の土坑の集合体として認識した。個々の土坑は東側のものを35号土坑a坑、北西のものを35号土坑b坑、南西のものを35号土坑c坑と呼称することとした。

本土坑群のプランは31・32・41号土坑が円形、33・34・38号土坑が楕円形、30・39・40・45号土坑が隅丸方

第3章 発見された遺構と遺物



第135図 2区4面のビット群

形、35a・35b・35c・36・42号土坑が隅丸長方形、37号土坑が水滴形を呈する。

掘削形態は箱形あるいは筒形を呈し、壁面は全体的に立ち気味であるが、掘削底面は、30・34・35a・35b・35c・38・39・45号土坑は丸底、42号土坑は船底形を呈する他は、平底を呈する。また、34・38号土坑は、34号土坑では東に偏した位置に、底面から13cm程の深さに柱穴状の掘り込が見られ、38号土坑では更に西に偏した位置に、底面から11cm程の深さに柱穴状の掘り込が見られた。

なお、主軸方位は表9に記す。

**遺物** 34・37・40・45号土坑から僅かな土師器片、35号土坑からは土師器裏(815)が出土している。

**所見** 各土坑の掘削意図は特定できなかった。しかし、その形態から、34・38号土坑は柱穴の可能性を有するが、共に単独であり、建物や柵の存在を想定することはできなかった。

また、出土遺物から推して、35号土坑は平安時代の所産と認識される。また、34・37・40・45号土坑は平安時代の所産の可能性が考慮されるものの、他の土坑は、古墳時代から律令期の所産として把握されるに過ぎなかった。

## 9. 2区4面のピット群(第135図、PL.52・85)

**概要** 2区4面では29基のピットを調査した。

**位置** 1～7号ピットは2区北東部に、8・9・12～15・17～28は中北部に、10・11・16号ピットは北西部にあるが、中北部の南寄りに13基のピットが集中して分布していた。

個々の土坑の位置するグリッドは、表10に記した。

**重複** 各ピットは単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 表10

**覆土** 各ピットの埋土の記録を残せなかった。

**構造** 本ピット群のピットのうち、1・3・5・6・8・11・12・15・20・23・24・25号ピットは円形、2・7号ピットは隅丸方形、4・17・19・22・28号ピットは楕円形、9・13・18・21・26・27・29号ピットは隅丸方形、10・14・16号ピットは略円形のプランを呈する。

各ピットは掘削形態は柱穴状を呈する。

なお、主軸方位は表10に記す。

**遺物** 15・28号ピットからは、僅かの土師器片が出土し、22号ピットは土師器裏(817)が出土したが、他のピットからの遺物の出土はなかった。

**所見** 各ピットの掘削意図は特定できなかった。また、ピットの配置から、柵等の構造物を想定することはできなかった。

また、出土遺物から推して、22号ピットは9世紀第3四半期頃の所産と判断される。この他のピットでは、15・28号ピットが平安時代の所産の可能性が考慮されるものの、他のピットの時期は古墳時代から律令期の所産として把握できるに過ぎなかった。

## 10. 焼土遺構群(第135図)

**概要** 4面では2～6号焼土の5ヶ所の焼土遺構を確認した。

**位置** 焼土遺構のうち、2～5号焼土は中央部から中東部にかけてあり、2号焼土は215-349～350グリッド、3号焼土は211～212-343～344グリッド、4号焼土は208-333～334グリッド、5号焼土は208～209-229グリッドに位置する。また6号焼土は中西部にあり、207～208-405～406グリッドに位置する。

**重複** 焼土遺構のうち2～4号土坑は風倒木痕と重複する。が、いずれも焼土遺構の方が新しい。また5・6号焼土は単独である。

**規模** 2号焼土径：55×45cm 3号焼土径：96×57cm 4号焼土径：44×23cm 5号焼土径：78×38cm 6号焼土径：74×54cm

**構造** 焼土遺構は燃焼により出現している。

**遺物** いずれの焼土遺構からも、出土遺物を確認することはできなかった。

**所見** 燃焼の目的等は確認されなかった。

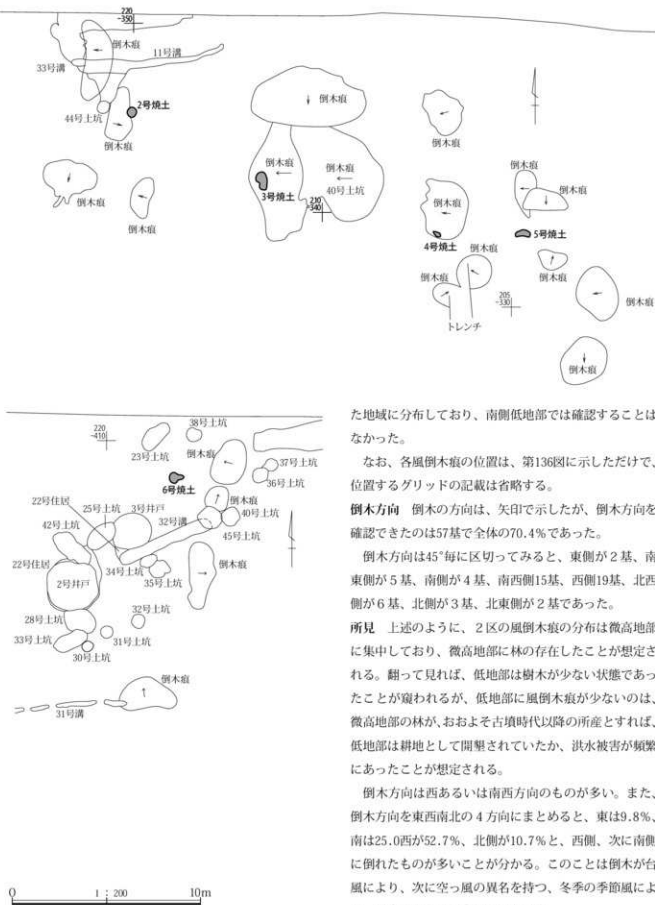
また、その時期は、調査面から推して古墳時代(前期)以前の所産として把握されるに過ぎない。

## 11. 2区の風倒木痕(第125図、PL.136・137)

**概要** 2区4面では、北半の調査区では56基、南半の調査区では25基の、合わせて81基の風倒木痕を確認した。

風倒木痕は人為的遺構でないため、南側調査区で倒木方向を記録しただけで、掘削は行わなかった。

**位置** 風倒木の多くは、微高地部、及び微高地に隣接し



第136図 2区2～6号焼土遺構

た地域に分布しており、南側低地部では確認することはなかった。

なお、各風倒木痕の位置は、第136図に示しただけで、位置するグリッドの記載は省略する。

**倒木方向** 倒木の方向は、矢印で示したが、倒木方向を確認できたのは57基で全体の70.4%であった。

倒木方向は45°毎に区切ってみると、東側が2基、南東側が5基、南側が4基、南西側15基、西側19基、北西側が6基、北側が3基、北東側が2基であった。

**所見** 上述のように、2区の風倒木痕の分布は微高地部に集中しており、微高地部に林の存在したことが想定される。翻って見れば、低地部は樹木が少ない状態であったことが窺われるが、低地部に風倒木痕が少ないのは、微高地部の林が、おおよそ古墳時代以降の所産とすれば、低地部は耕地として開墾されていたか、洪水被害が頻繁にあったことが想定される。

倒木方向は西あるいは南西方向のものが多く、また、倒木方向を東西南北の4方向にまとめると、東は9.8%、南は25.0%西が52.7%、北側が10.7%と、西側、次に南側に倒れたものが多いことが分かる。このことは倒木が台風により、次に空っ風の異名を持つ、冬季の季節風により、発生したのことが多いことを示す。



第137図 2区の風倒木痕

## (5) 遺構外の出土遺物(第138～142図、PL.85・86・87)

**概要** 本項では2区1～4面の遺構外の出土遺物を一括報告する。

**出土遺物** 2区の遺構外の遺物は、土師器、須恵器片を中心に各種出土したが、図示したものには以下のものがある。

古代の土器類としては、土師器の杯(283～286・305・306・823・824)・高杯(287・295・820)・鉢(290・307・819)・小型甕(289)・甕(291・294・312)、黒色土器皿(299)、須恵器の杯(298・300・314)・椀(280・282・302・303・308・311・313・315・826)・皿(299・301)・四耳壺(281)、灰釉陶器壺(304)、土鍾(279・288・296・297・821)がある。

また、中近世の土器、陶磁器としては、中国陶器青花皿(336)・白磁皿(318)、龍泉窯系青磁の盤(317)・稜花皿(328)・椀(335・351・352・337・338)、同安窯系青磁

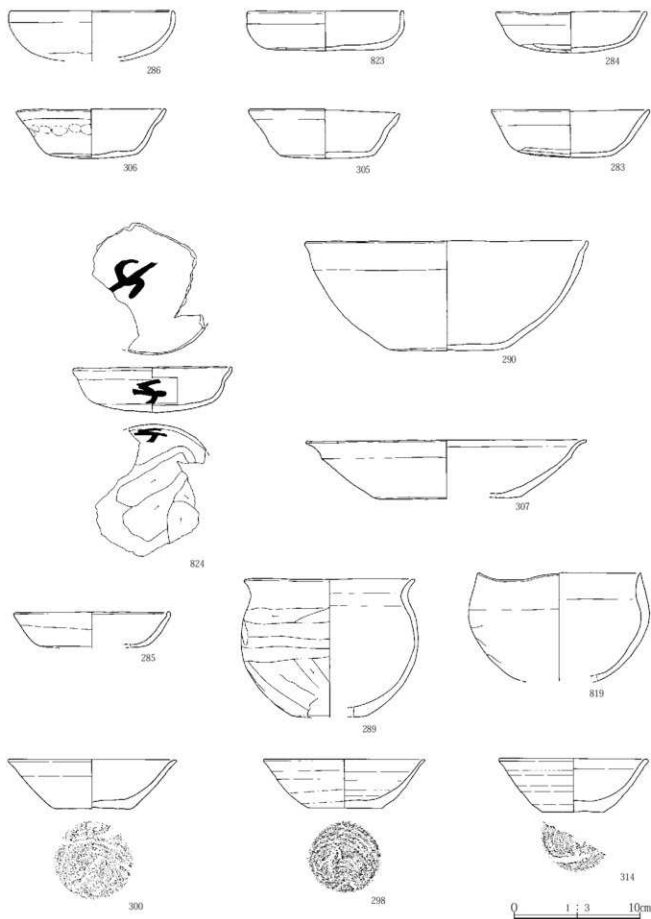
椀(324)、搬入系土器かと思われる人形(353)、古瀬戸緑釉皿(325・332・339)・皿(320・322)・大皿(354)・平椀(323)や平椀と思われるもの(327)やおろし皿(321)、古瀬戸香炉かと思われる陶器(331)、肥前陶磁器皿(319)、瀬戸・美濃陶器の丸皿(329・330)・皿(326)、尾張陶器片口鉢(333・348)、渥美陶器甕(350)、常滑陶器甕(356)、在地陶器の内耳鍋(341・343・345・346)・片口鉢(316・342・344・347・349・355)がある。

また金属製品では刀子(361)、鉄釘(357・359)、不明鉄製品(362・372・373)、鉄滓(363)といった鉄製品や、銅製キセル吸い口(360)、不明銅製品(358)、銅銭(364～367・374～377)が出土しているが、銅銭のうち355と364は寛永通宝、他は模倣銭を含む中世の所産である。

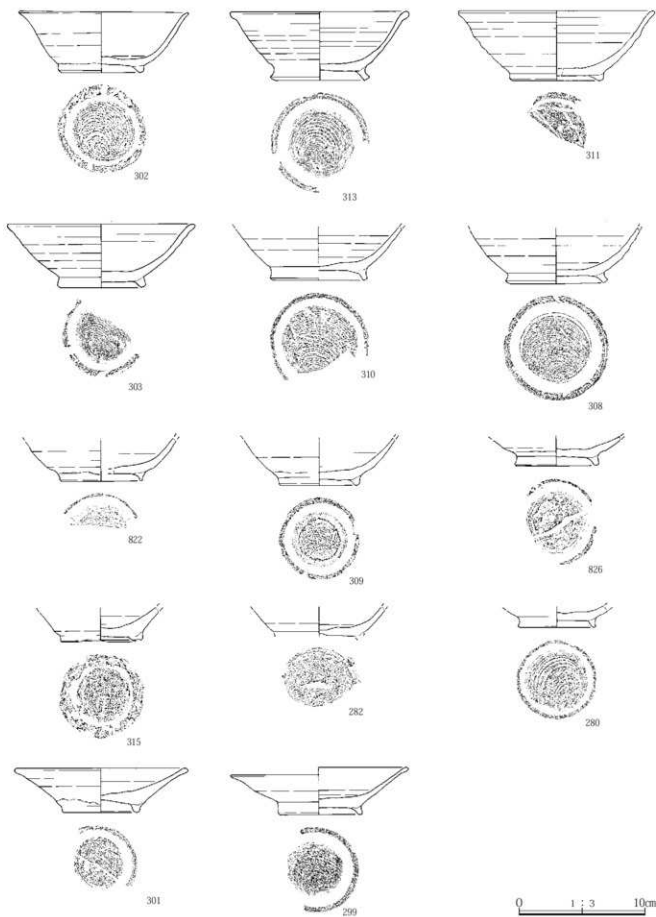
石製品では、敲石(369)、不明石製品(370)、火打石(371)があった。

1面からは土師器片3g、須恵器片5g、陶磁器2g、軟質陶器70g、2面からは土師器片24,220g、須恵器片

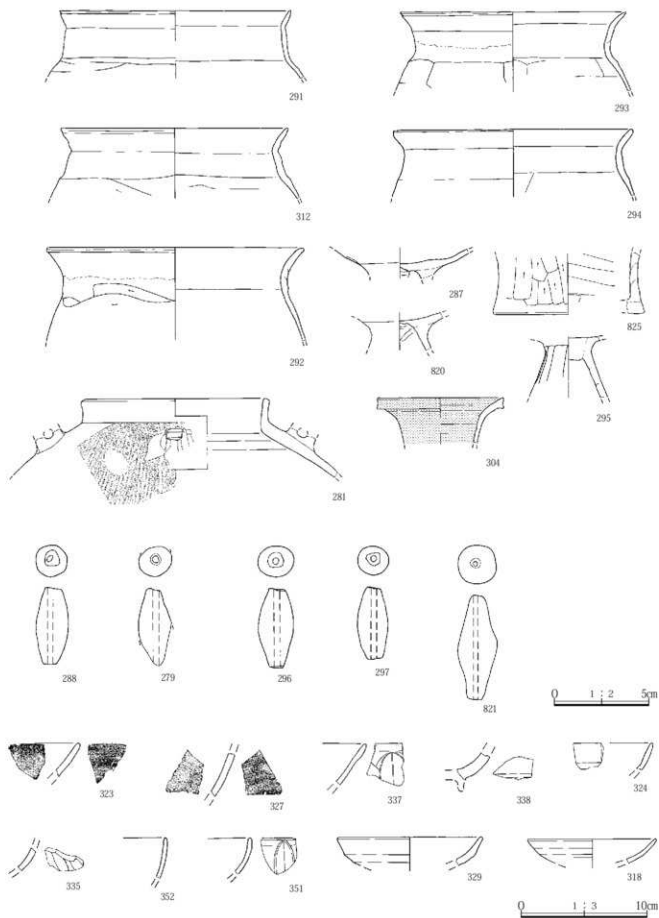
第3章 発見された遺構と遺物



第138図 2区遺構外の出土遺物(1)

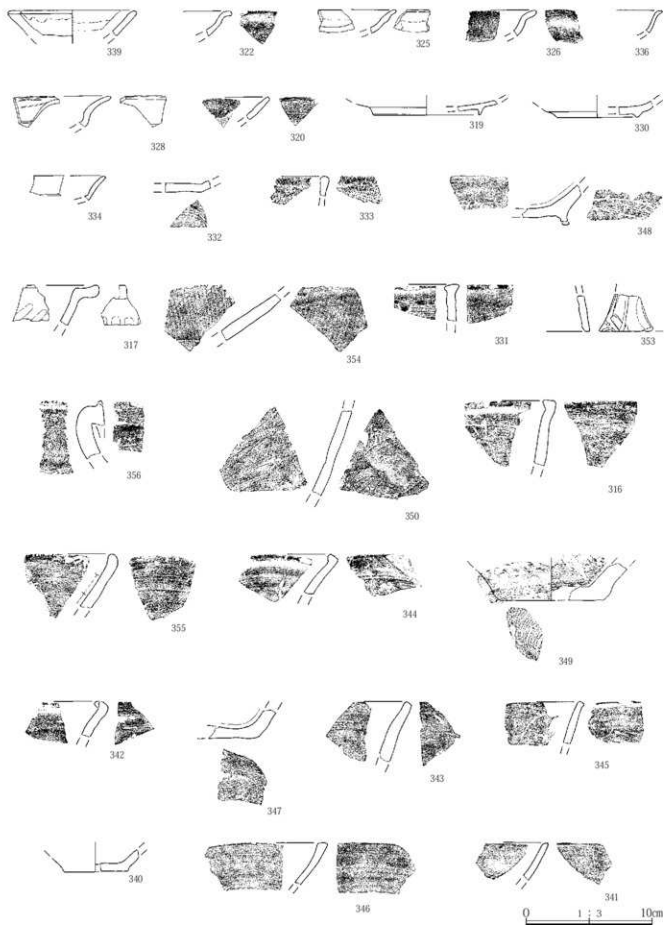


第139図 2区遺構外の出土遺物(2)



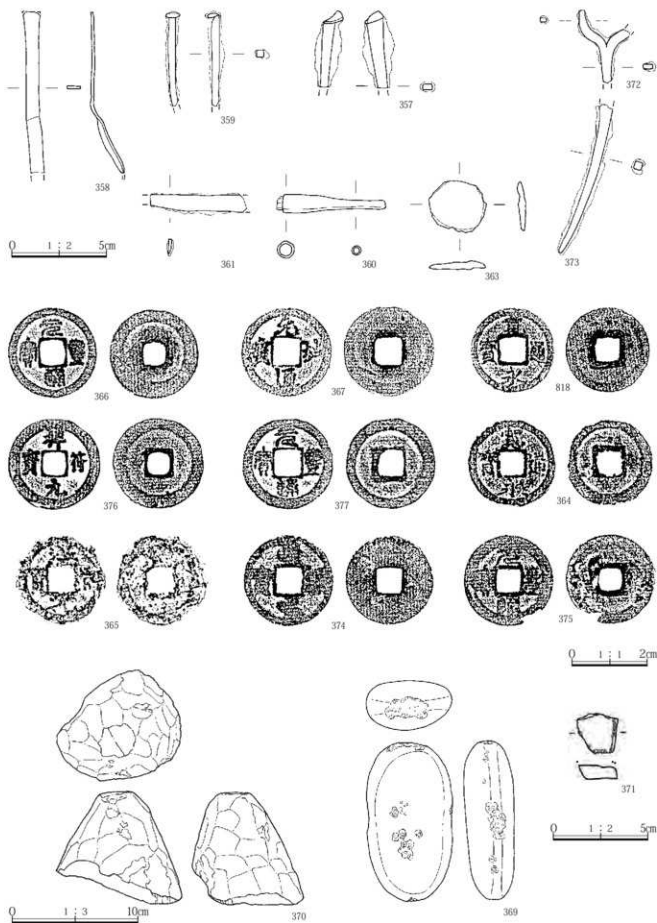
第140図 2区遺構外の出土遺物(3)





第141図 2区遺構外の出土遺物(4)

第3章 発見された遺構と遺物



第142図 2区遺構外の出土遺物(5)

13,592g、陶器18g、その他22g、3面からは土師器片912g、須恵器片1,409g、陶磁器片10gが出土したが、4面における遺構外からの遺物の出土はなかった。また、面の特定できなかったものでは、須恵器片20gがあった。

また、これとは別に行った陶磁器を中心とした集計では、古代の須恵器7片、灰釉陶器5片、中世の陶磁器11片、国産陶器11片、在地系土器陶器類47片、近世の国産陶磁器165片、在地系統締陶器等34片、近現代の陶磁器7片、土器1片、時期不詳の土器類51片、瓦1片があり、他に鉄製品類2点があった。

**出土区域** これらの遺物のうち微高地から出土したものは遺物番号823・824・825・357、南半部からは遺物番号283～288・303・358～367・818があった。

**出土面** 出土面で見ると、2面からの出土遺物は遺物番号279～299・301・302・304・306～308・311・316・320～350が、3面からの出土遺物は282～286・305であった。

## (6) 2区の旧石器確認調査

### 1 調査方法

2区4面の調査後、旧石器の確認調査を行った。

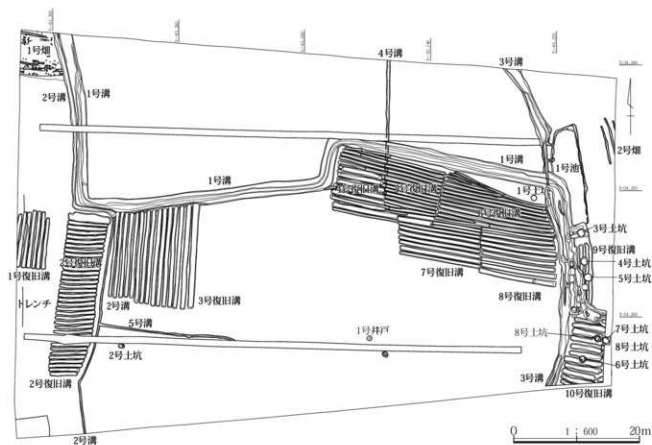
このうち南半部では、南北4m、東西2mのトレンチを19箇所設定した。トレンチの間隔は、南北方向には、その南半部で南北10m、北半部で10～15m、一部20m、東西方向に中・東部では15m、西部では10mの間隔を以て、掘削深度は60ないし80cm程で、掘削した層位はローム(層厚20～30cm程)であった。

なお、試掘トレンチ等の設定位置図は、第3章末尾に1～3区一括して掲載した(292頁 第297図)。

### 2 調査結果と所見

いずれのトレンチからも旧石器時代の遺物、遺構を確認することはできなかった。従って2区において旧石器時代の遺構、遺物は存在しないものと判定して、調査を終了した。

なお、本確認調査に伴って、縄文・弥生時代の明確な遺構遺物も確認されなかったことを附記する。



第143図 3区1面全体図

## 第3節 3区の遺構と遺物

### (1) 3区1面の遺構

#### 1. 3区調査の概要

3区においても、1面では天明3(1783)年の浅間山被災前後の遺構、2面では天仁元(1108)年の浅間山噴出の軽石を多く包含するいわゆるAs-B混土面の遺構を調査した。

3区の3面では、2区の北東部から続く、北西隅部の微高地部と、中北部から東部にかけてある微高地部、この二つの微高地の間と東端部を除く中部から南部にかけて広がる低地部から成る。3面の微高地部では平安時代の竪穴住居を主体とする集落、低地部では天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴い、降下テフラによって被災した水田面を調査した。

4面は、北東隅部と南西隅部を除く広範囲に、多数の風倒木痕の存在を確認したが、他の遺構は確認されなかった。

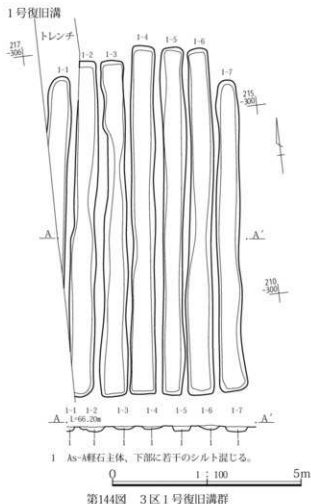
#### 2. 3区1面の概要

3区1面は全体に、圃場整備などで削平されており、往時の地表面に伴う遺構は、北西隅と北東部に一面ずつを検出した畑の一部のみであった。発見された遺構の多くは、往時の地表を掘り込んで掘削された復旧溝や溝などであった。

3区1面の遺構の分布は、中東部と東部、及び中西部と西部にあり、中央部と中北部、中南部にその分布は薄い。1面に検出された遺構は、復旧溝群8群、畑2面、溝4条、池1面、井戸1基、土坑8基であった。

1面の遺構のうち、復旧溝群、溝、池、畑、井戸は、各遺構毎に報告するが、土坑は各面一括して報告することとする。

なお、各遺構の名称は、特に記載のないもの以外、区、面の呼称は省略して以下に記す。



第144図 3区1号復旧溝群

### 3. 1号復旧溝群(第144・153図、PL.54・87)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

本復旧溝群は、西側が調査区外に出ており、全容は把握できなかった。また、他の復旧溝群の状況を勘案すれば、その一部を調査したに過ぎないものと思われる。

**位置** 本復旧溝群は3区中西部の調査区西端にあり、207～216-300～305グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。なお、東側に2号復旧溝が近接してある。

**規模** 東西：(5.1)m、南北：9.3m

個々の溝の規模などについては表18に記しているが、個々の溝番号は西側から順に付している。

**覆土** As-A軽石を主体に埋め込まれている。

**構造** 本復旧溝群は7条以上の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN7°Eを向く。

溝は68～91cm、平均79.67cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、8.2～9.2m、平均8.92mを測り、溝の上幅は56～65cm、平均60.14cm、確認面

からの深さは5～12cm、平均9.00cmを測る。また溝と溝の間は10～28cm、平均19.50cmを隔てて、近接して掘削される。

溝の掘削形態は箱堀状で、ほとんどは平底を呈し、壁面は立ち気味であると見られる。

**遺物** 本復旧溝群からは模铸銭と見られる中世の銅銭(378・379)と、備かな土師器、須恵器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N6°E方向に長い、長方形あるいは短冊形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

### 4. 2号復旧溝群(第145・153図、PL.54・87)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

本復旧溝群は、南寄りに試掘トレンチが横断していて、一部が確認できなかった。

**位置** 本復旧溝群は3区中西～南西部にあり、190～216-290～300グリッドに位置する。

**重複** 他遺構との重複は見られなかった。

なお、西側に1号復旧溝が近接しており、北縁は1号復旧溝群の北縁の延長線に近い位置にある。また、本復旧溝の東側と北側は2号溝に接するようである。

**規模** 東西：6.8m、南北：26.3m

個々の溝の規模については表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** As-A軽石を主体に埋め込まれている。

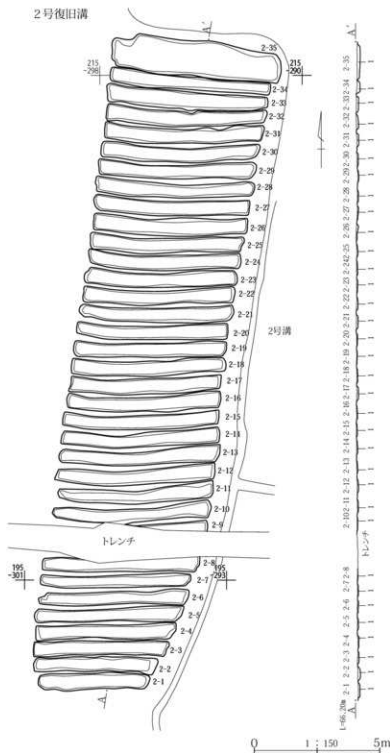
**構造** 本復旧溝群は35条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN87°Wを向く。

復旧溝の幅は溝1～34はほぼ同規模であるが、最北の溝35は広い。溝は61～99cm、平均78.93cm、最北の溝35を除くと平均73.00cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、4.44～6.8m、平均6.08mを測り、溝の上幅は45～140cm、平均57.62cmで、最北の溝35を除くと平均55.00cmを測る。確認面からの深さは4～20cm、平均9.09cmを測る。また溝と溝の間は6～22cm、平均17.36cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、平底を呈し、壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは銅製キセルの雁首(380)と備か

2号復旧溝



1 As-A軽石主体、下部に若干のシルト混じる。

第145図 3区2号復旧溝群

な量の須恵器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は全体として、N10°E方向に長い、東縁は2号溝の走向に併行に、南・西縁は直線的、北縁は山形を呈する、短冊形の区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定できなかった。

5. 3号復旧溝群(第146・153図、PL.54・87)

**概要** 本復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は3区中西～南西部にあり、201～218-276～291グリッドに位置する。

**重複** 北側に1号溝と接し、2号溝の分岐部分(2-2溝)と重複する。堆積層による新旧関係の特定はできなかったが、位置関係から1号溝とは併存し、2号溝を切る可能性が考慮される。

なお、西側に2号復旧溝が接するようである。

**規模** 東西：13.5m、南北：16.8m

個々の溝の規模については表18に記しているが、個々の番番号は西側から順に付している。

**覆土** As-A軽石を主体に埋め込まれているが、東寄りの溝の底部にはAs-A軽石と灰色シルトの混土が入る。

**構造** 本復旧溝群は15条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN5°Eを向く。

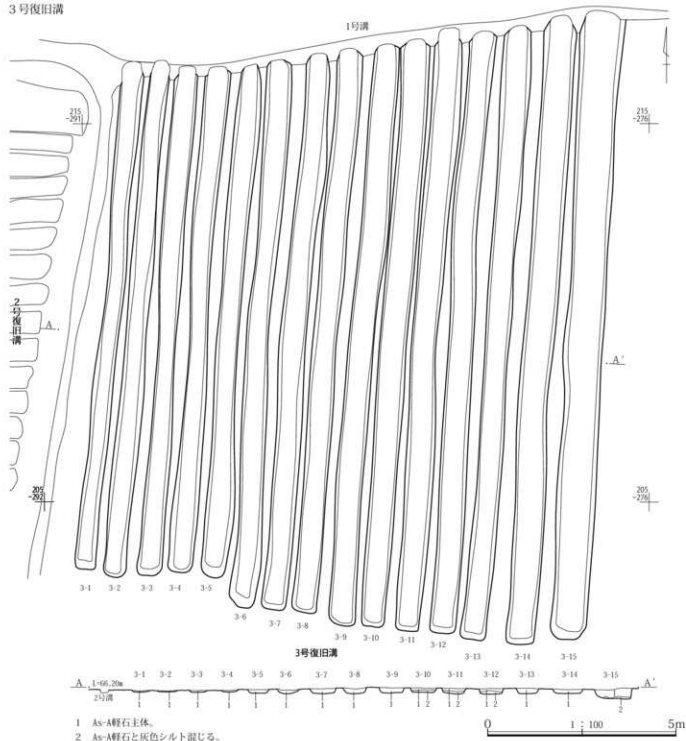
復旧溝は73～135cm、平均91.61cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、13.42～16.62m、平均14.96mを測り、溝の上幅は46～100cm、平均67.13cmで、確認面からの深さは8～31cm、平均15.80cmを測る。また溝と溝の間は14～44cm、平均25.21cmを隔てて掘削されるが、規格性は弱い。

溝の掘削形態は箱堀状で、平底を呈し、壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは仏飯器と見られる肥前磁器(381)と、僅かな量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は、北縁が1号溝に規制される配

## 3号復旧溝



第146図 3区3号復旧溝群

置を見せるが、東西両縁は直線的で平行にあり、南縁は略西北西、東南東方向に直線的に走る、東縁を底辺とする台形プランの区画内に掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

## 6. 4号復旧溝群(第147図、PL.55)

**概要** 4号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

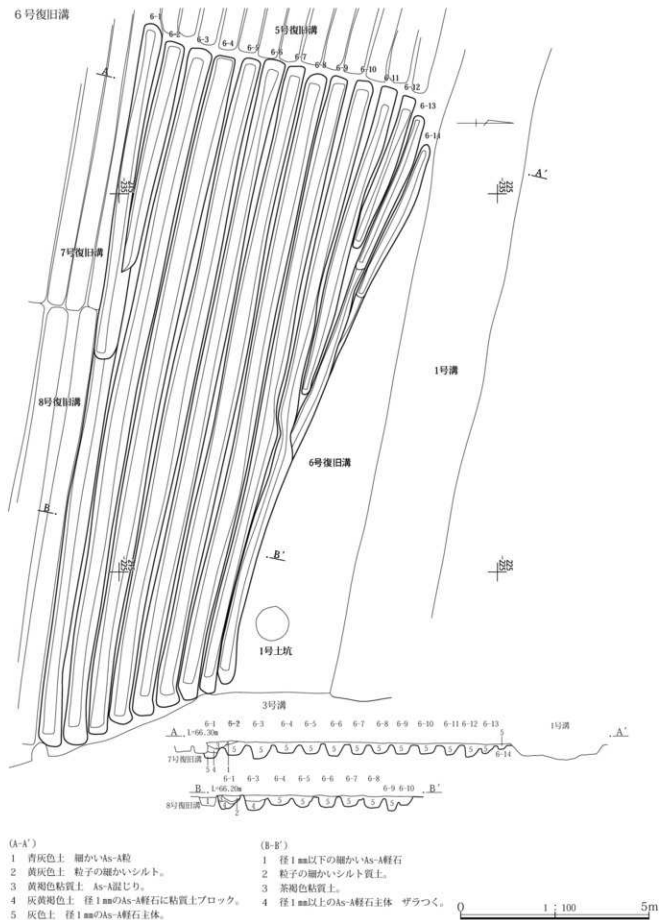
**位置** 本復旧溝群は3区中央部北東寄りにあり、214～224-245～255グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群は、北側に5・11号復旧溝群、東側に7号復旧溝群と重複するが、本復旧溝群は5・11号より





6号復旧溝



第148図 3区6号復旧溝群

新しい。しかし、7号復旧溝群との新旧関係は特定することはできなかった。

なお、西縁の北寄りには、1号溝に接するように所在している。

**規模** 東西：11.3m、南北：7.3m

個々の溝の規模については表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** As-A軽石を含む灰色土などで埋め込まれている。

なお、As-Aの入る褐灰色土(1層)は天地返し後の耕作土である。

**構造** 本復旧溝群は10条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN83°Wを向く。

復旧溝は73～100cm、平均88.29cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、6.65～10.75m、平均8.64mを測り、溝の上幅は50～88cm、平均74.38cmで、確認面からの深さは14～24cm、平均19.88cmを測る。また溝と溝の間は5～32cm、平均13.14cmを隔てて掘削される。

溝の掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は平底を呈するものと、丸底状を呈するものがある。壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは、僅かな量の土師器・須恵器片が出土した。

なお、本溝と5号復旧溝のいずれに属するか峻別できない遺物に、龍泉窯系青磁椀(382)、製作地不詳の磁器小杯(383)、火打石(384)や少量の土師器・須恵器片があった。

**所見** 本復旧溝群は、西縁が1号溝とその延長線上に規制されるが、東・南・北縁は直線的である。本復旧溝群は長方形の区画に掘削されるが、この区画は5・11号復旧溝群の掘削範囲に重なっている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

なお、5号復旧溝群の掘削に伴う天地返しでAs-Aを処理した後に、敢えて5号復旧溝群の区画内に復旧溝を掘削して、更にAs-Aを埋め込んで天地返しを行っている。これは復旧溝の掘削、即ち天地返しが一度に完結したことでないことを示している。

### 7.5号復旧溝群(第147・153図、PL.55・87)

**概要** 5号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は3区北東部南西寄りにあり、214～226-237～255グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群と11号復旧溝群と、北側に1号溝、北西部で4号復旧溝群、東寄路南端部に7号復旧溝群と重複するが、本復旧溝群は1号溝・4号復旧溝より古く、11号復旧溝群より新しいが、7号復旧溝群との新旧関係は特定できなかった。

なお、北縁は、1号溝に接するようにある。

**規模** 東西：16.9m、南北：(9.3)m

個々の溝の規模については表11に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** As-A軽石を含む灰色土などで埋め込まれているが、As-Aの入る褐灰色土(1層)は天地返し後の耕作土である。

**構造** 本復旧溝群は15条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN78°Wを向く。

復旧溝は52～68cm、平均57.82cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、11.2～17.0m、平均16.20mを測り、溝の上幅は42～60cm、平均50.53cmで、確認面からの深さは9～23cm、平均15.69cmを測る。また溝と溝の間は4～12cm、平均6.79cmを隔てて近接して掘削される。

溝の掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は平底を呈するものと、丸底状を呈するものがある。壁面は立ち気味である。

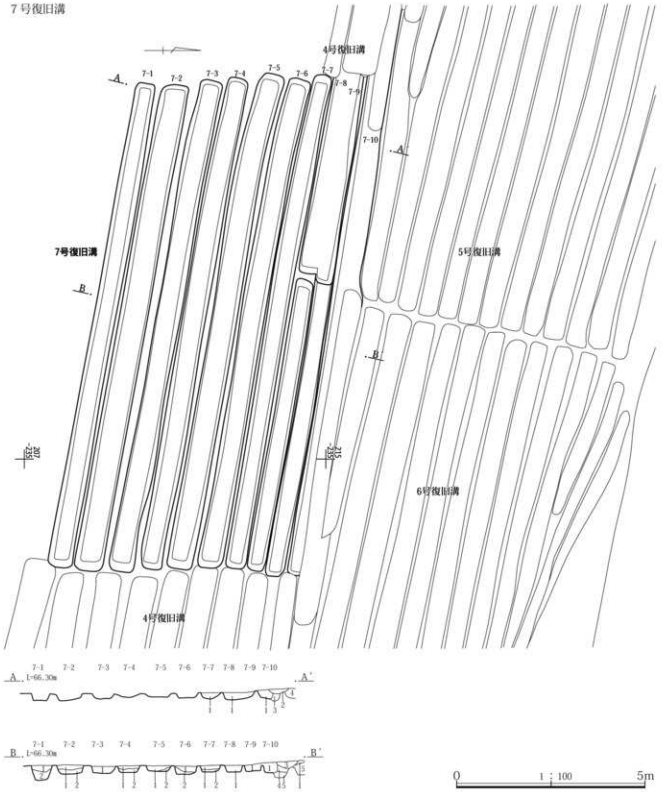
**遺物** 本復旧溝群から僅かな量の土師器・須恵器片が出土した。

なお、本溝と4号溝のいずれに属するか峻別できない遺物があった。

**所見** 本復旧溝群は、北縁が1号溝とその延長線上に規制されるが、全体としては長方形プランを呈する区画に復旧溝群は掘削されている。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけであり、細かい時期を特定することはできなかった。

7号復旧溝



(A-A')

- 1 径1mm以下の細かいAs-A軽石
- 2 粒子の細かいシルト質土。
- 3 茶褐色粘質土。
- 4 径1mm以上のAs-A軽石主体 ゼラつく。

(B-B')

- 1 相灰色土 径1mmのAs-A軽石に鉄分が混じる。
- 2 茶褐色土 径1mmのAs-A軽石に粘質土ブロック混じる。
- 3 黄灰色土 粒子の細かいシルト。
- 4 暗茶褐粘質土。
- 5 青灰色土 径1mmのAs-A軽石主体。

第149図 3区7号復旧溝群

#### 8. 11号復旧溝群(第147図、PL.)

**概要** 11号復旧溝群は、天地返しを目的として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は3区中部北東寄りにあり、216～220-243～255グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群は、4・5号復旧溝群と重複するが、両復旧溝群に対して、本復旧溝群の方が古い。

**規模** 東西：12.6m、南北：3.1m

個々の溝の規模などについては表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 本復旧溝群は、4・5号復旧溝群の溝の調査に伴って発見された。溝は3条程を確認したに過ぎず、溝が東西走行を呈することを確認しただけで、構造を確認するには至らなかった。復旧溝の軸線方向は略西北西-東南東方向を向く。

**遺物** 本復旧溝群からの出土遺物は確認できなかった。

**所見** 本復旧溝群は、その存在を確認したに過ぎなかった。

また、本復旧溝群の掘削時期を、特定することができなかった。

#### 9. 6号復旧溝群(第148・153図、PL.55・87)

**概要** 6号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は3区北東部南にあり、212～223-220～239グリッドに位置する。

**重複** 南西部南端で7号復旧溝群と重複。7号復旧溝群との新旧関係は特定できなかったが、1号溝に切られる。

また本復旧溝群は、3区中・東部で、南側に8号復旧溝群と接し、東縁は3号溝に接する。

**規模** 東西：19.3m、南北：8.1m

個々の溝の規模については表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 本復旧溝群は、As-A軽石主体に埋め込まれているが、南側の2条は下位にAs-Aと粘質土含む灰黄褐色土が埋め込まれている。

**構造** 本復旧溝群は14条の溝から成るが、東側に比べ西側の南北幅が広いため、溝と溝の間を埋めるため、西寄り南端近くで溝1と溝3の間に東側が溝1に重なるよう

に溝2が掘削され、西寄り北端近くで、溝11と溝13の間に溝12が掘削されている。復旧溝の軸線方向はN80°Wを向く。

復旧溝は40～68cm、平均59.12cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、16.4～19.85m、平均17.78mを測り、溝の上幅は30～65cm、平均48.36cmで、確認面からの深さは13～28cm、平均21.00cmを測る。また溝と溝の間は6～18cm、平均10.62cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形はやや丸底状を呈する。壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは瀬戸・美濃陶器の片口鉢(385)・播鉢(386)、在地系土器の火鉢(387)と僅かな量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本復旧溝群は、東縁が3号溝に規制され、南・西縁は直線的に、北縁は窪むように緩やかな弧状を呈しており、この不正長方形の区画に掘削されている。しかし、北縁は、北側に近接する1号溝との間に狭い空間が遺されているため、北縁は自然地形に規制されていた可能性が考慮される。

本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、その細かい時期を特定することはできなかった。

#### 10. 7号復旧溝群(第149・153図、PL.55・87)

**概要** 7号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は3区中東部にあり、207～215-230～245グリッドに位置する。

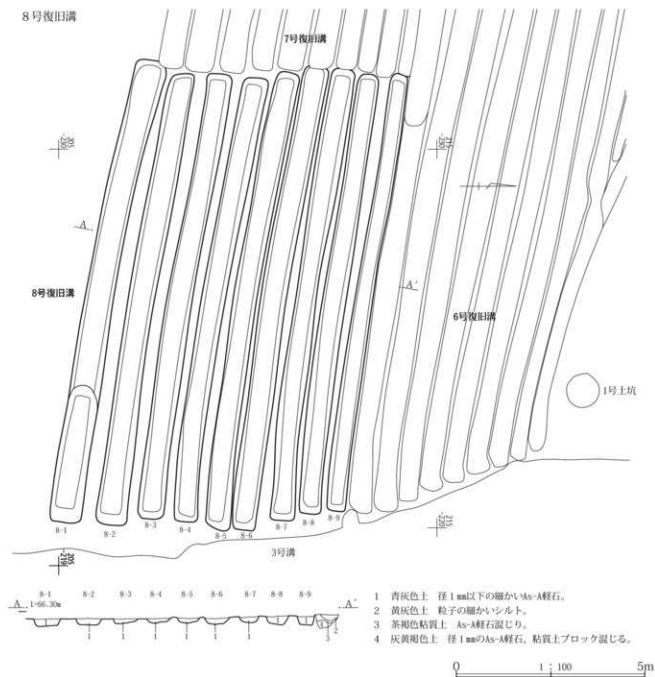
**重複** 本復旧溝群は、北側で5号・6号復旧溝群と東側で8号復旧溝群と重複するが、いずれに対しても新旧関係は特定できなかった。

**規模** 東西：14.1m、南北：6.9m

個々の溝の規模などについては表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 本復旧溝群は10条の溝から成るが、北寄り溝8・9は東西に分かれており、西側の溝は8・9溝の間の障壁が無く、一体のものとして掘削されている。復旧溝の軸線方向はN78°Wを向く。



第150図 3区8号復旧溝群

復旧溝は53～88cm、平均70.67cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、12.9～18.35m、平均13.35mを測り、溝の上幅は45～75cm、平均61.40cmで、確認面からの深さは12～32cm、平均20.80cmを測る。また溝と溝の間は4～20cm、平均10.00cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は平底を呈するものと、丸底状を呈するものがある。壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは模鑄銭の天祥通寶(388)が出土

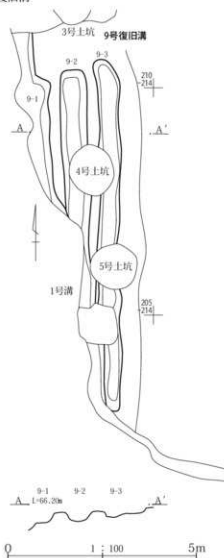
した。

なお、本溝と8号復旧溝のいずれに属するか峻別できない遺物に、僅かな土師器・須恵器片があった。

**所見** 本復旧溝群は、長方形プランの区画に掘削されている。

なお、本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、その時期を特定することはできなかった。

9号復旧溝



第151図 3区9号復旧溝群

11. 8号復旧溝群(第150・153図, PL.56・87)

**概要** 8号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

**位置** 本復旧溝群は3区中東部にあり、204～214-219～232グリッドに位置する。

**重複** 本復旧溝群は、単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

なお、本復旧溝群は北側に6号復旧溝群、西側に7号復旧溝群と接し、東側に3号溝と近接する。

**規模** 東西：13.1m、南北：7.7m

個々の溝の規模などについては表18に記した。なお、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 本復旧溝群は、細かいAs-A含む青灰色土で埋没する。

**構造** 本復旧溝群は9条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN82°Wを向く。

復旧溝は72～110cm、平均85.81cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、11.7～12.45m、平均12.10mを測り、溝の上幅は50～75cm、平均63.22cmで、確認面からの深さは13～28cm、平均18.44cmを測る。また溝と溝の間は12～35cm、平均22.50cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は平底を呈するものと、丸底状を呈するものがある。壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは寛永通寶(389)が出土した。

なお、本溝と7号復旧溝のいずれに属するか峻別できない遺物に、僅かな土師器・須恵器片があった。

**所見** 本復旧溝群は、平行四辺形プランの区画に掘削されている。

なお、本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、その細かい時期を特定することはできなかった。

12. 9号復旧溝群(第151図, PL.55)

**概要** 9号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

本復旧溝群の掘削される区画の北部、1号池との境に略東西走向の土坑状の掘り込2箇所(以下、北側のものを「土坑1」、南側のものを「土坑2」とする)が確認された。

**位置** 本復旧溝群は3区中東部東寄りにあり、201～211-214～216グリッドに位置する。

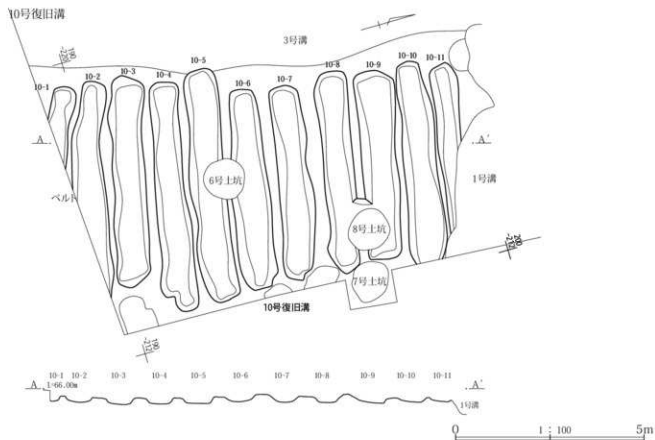
**重複** 本復旧溝群は、1号溝、4・5号土坑と重複する。1号溝との新旧関係は特定できなかったが、本復旧溝の方が、4・5号土坑より新しい。

なお、上述の本復旧溝群が掘削される区画の北側の掘り込土坑1は、1号池と重複するが、新旧関係は特定できなかったが、本復旧溝群の掘削時期と1号池の時期との見当から、土坑1の方が新しい可能性を有する。

**規模** 東西:(2.2)m、南北:9.4m

個々の溝の規模などについては表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

土坑1 東西長:276cm 南北長:132cm 深さ:31cm



第152図 3区10号復旧溝群

土坑2 東西残長：287cm 南北長：88cm 深さ：34cm

覆土 細かいAs-A含む青灰色土で埋没する。

なお、土坑1・2の覆土の記録は取れなかった。

構造 本復旧溝群は3条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN3°Eを向く。

復旧溝は測定できた溝2・3間で98cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できた溝3で9.3mを測り、溝の上幅は55～70cm、平均62.50cmで、確認面からの深さは18～21cm、平均19.33cmを測る。また溝と溝の間は測定できたもので、30cmを隔てて掘削されている。

溝の掘削形態は箱型で、底面は平底を呈する。壁面は立つ。

また、土坑1・2は隅丸方形様のプランを呈し、掘削形態は箱型を呈する。土坑1・2の主軸方向は、共にN78°Eを向く。

遺物 本復旧溝群からの出土遺物は得られなかった。

所見 本復旧溝群は、南北が北側の1号池南側の落ち込みの手前から南側1号溝の北肩までの10.7m以上、東西が、本復旧溝群から26～60cm東にある、西側が低い、比高差14cmの段差から、西側1号溝東肩までの2.8m以

上の区域に掘削されている。

また、土坑1・2は覆土の記録もないため、復旧坑であるかを特定することはできなかった。

なお、本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、その細かい時期を特定することはできなかった。

### 13. 10号復旧溝群(第152・153図、PL.56・87)

概要 10号復旧溝群は、降下As-A軽石を除去し、天地返しを目的として掘削された溝群である。

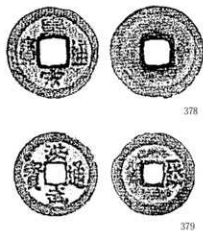
本復旧溝群は南側が調査区外に出ており、北側は1号溝と重なっており、全容を詳らかにすることはできなかった。

位置 本復旧溝群は3区南東隅部にあり、南側が調査区外に出ているため、全容は詳らかにできなかった。189～199-212～219グリッドに位置する。

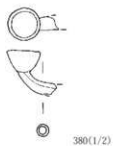
重複 本復旧溝群は、1号溝、6・8号土坑と重複する。いずれに対しても新旧関係は特定できなかったが、6・8号土坑は9号復旧溝群と重複する4・5号土坑と同類の遺構と判断されることから、両土坑に対しては本復旧

第3章 発見された遺構と遺物

1号復旧溝



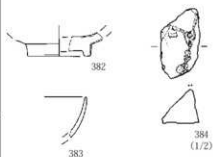
2号復旧溝



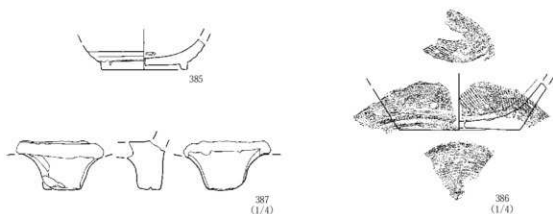
3号復旧溝



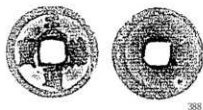
3・5号復旧溝



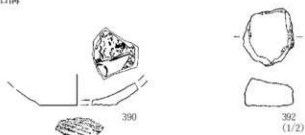
6号復旧溝



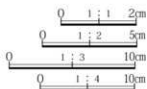
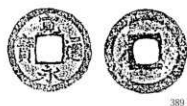
7号復旧溝



10号復旧溝



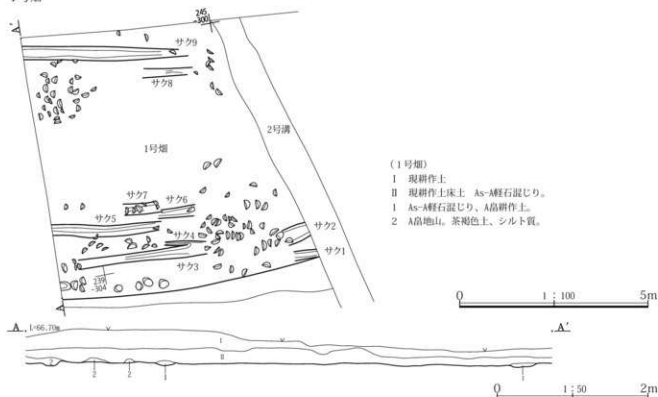
8号復旧溝



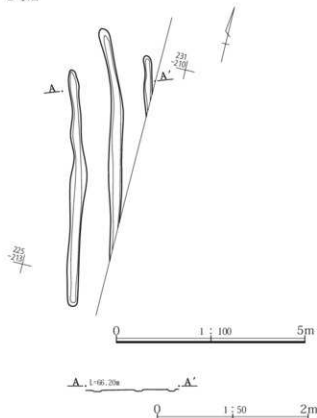
第153図 3区復旧溝群出土遺物



## 1号畑



## 2号畑



第154図 3区1・2号畑

溝群の方が新しい可能性を有する。

**規模** 東西：6.3m、南北：(11.0)m

個々の溝の規模などについては表18に記しているが、個々の溝番号は南側から順に付している。

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 本復旧溝群は10条の溝から成る。復旧溝の軸線方向はN79°Wを向く。

本復旧溝は、11条以上から成る。75～123cm、平均102.70cmの間隔で掘削されている。溝の長さは測定できたもので、5.0～6.22m、平均5.55mを測り、溝の上幅は50～90cm、平均78.18cmで、確認面からの深さは3～24cm、平均15.00cmを測る。また溝と溝の間は10～40cm、平均22.70cmを隔てて、近接して掘削されている。

溝の掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形は平底を呈するものと、丸底状を呈するものがある。壁面は立ち気味である。

**遺物** 本復旧溝群からは在地系土器の皿(390)、銅銭(391)、火打石(392)、少量の土師器・須恵器片が出土した。  
**所見** 本復旧溝群は、短冊形プランの区画に掘削されている。

なお、本復旧溝群の掘削時期は、天明3(1783)年以降と把握されるだけで、特定することはできなかった。

14. 1号畑(第154図、PL.56)

**概要** 本畑は、天明3(1783)年の前後の時期の畑遺構である。

なお、上位が削平され、後世の耕作により遺存状態は不良である。また東側は2号溝と重複し、南側は比高差13cm以下で南が低くなる段差に限られ、西側と北側は調査区外に出るため、全容は把握できなかった。

**位置** 本畑は3区北西隅部にあり、238～245-298～305グリッドに位置する。

**重複** 本畑は、東に2号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

また新旧関係は特定できなかったが、南西部にあるサク3と4、サク6・7は重複し、近接するサクにあっても、規格(幅)が異なるものや、走向の異なるものも多く見られた。このため、本畑は、何回かの掘り直しがあったものと思慮される。

**規模** 東西：7.0m、南北：7.0m

個々のサクの規模などについては表19に記すが、個々のサク番号は南東(サク1・2)、南西(サク3～7)、北西(8・9)の順に南側から付している。

**覆土** 一部のサクの記録によれば、本復旧溝群はAs-A混土で覆われる。しかし、上述のように何回かの掘り直しがあったものと想定されるため、この覆土の所見が、必ずしも本畑の全てのサクの覆土に伴うものと、いうことはできない。

**構造** 本畑は9条以上のサクから成る。上述のように重複や走向の相違、あるいは規格の違うものが混在するため、幾つかの異なる時期に掘削されたものの痕跡が残されているものと思慮される。なお、同時期の可能性が指摘できるのは、北西部に並走するサク8・9だけである。軸線方向は個々のサクで異なるため、略西北西—東南東方向と記すに止める。

北西部のサク8・9は54cmの間隔で掘削されている。サクの長さは、遺存状態が悪く、残存長を測定できたに過ぎない。サクの上幅は11～45cm、平均32.13cmで、確認面からの深さは2～12cm、平均5.78cmを測るに過ぎない。またサクとサクの間はサク8・9では50cmほどを測った。

サクの掘削形態は箱掘状である。

また、本畑にはサクの有無に拘らず、鋤先痕が分布し

ていた。鋤先痕は114箇所検出した。主に南東寄り41箇所、南西寄りに27箇所、北西隅部に28箇所が比較的集中して分布していた。鋤の幅は28cm以下を測り、上位が幅1尺程を測る鋤で掘削されたものと想定され、その掘削深度は、確認面からおおよそ5cm以下と浅かった。掘削時の向きは一定しないが、南東部のものは東を向いて掘削するものが多く、北東端部のものは西南西、北西部のものは西を向くものがやや多い傾向が窺われた。

**遺物** 本畑からは火打石が出土した他は、僅かな量の土師器・須恵器片が出土したに過ぎない。

**所見** 本畑は、東隈を2号溝付近、南隈を上述の段差として掘削されている。

なお、本畑の掘削時期は、覆土の所見からは天明3(1783)年以降との所産として把握されるが、本畑は複数回の掘削が確認されるため、長期間の使用が窺われる。一方、サクの覆土の記録もほとんど残せなかったため、本畑の耕作の期間を特定することはできず、ここでは天明3年を前後する時期の所産である可能性を記すに止めたい。

15. 2号畑(第154図)

**概要** 本畑は、3条のサクが確認された畑遺構である。

本畑は東側が調査区外に出ている、全容を確認することはできなかった。

**位置** 本畑は3区北東部、調査区東壁際にある。224～231-210～213グリッドに位置する。

**重複** 本畑は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 東西：2.3m、南北：7.3m

個々のサクの規模などについては表19に記しているが、個々のサクの番号は、西側から付している。

**覆土** 本遺構の時期は特定できなかった。

**構造** 本畑は3条以上のサクから成る。調査範囲が限定的で、遺存状態が良好とは言えないため、様相は明確にできないが、以下のような若干の所見を得た。

サクは直線的に走行し、北端近くで屈曲する、ヘ字状のプランで走向し、その走向は、中・南部はN11°Wを測り、北端近くではN26°Wを測る。

サクは86～111cm、平均95.00cmの間隔で掘削される。サクの長さは測定できたサク1で6.22cmを測った。また

サクの幅は20～32cmで、平均27.33cmを測り、深さは5～8cm、平均6.00cmを測った。また、サクとサクは58～85cm、平均69.00cm隔てて掘削されている。

サクの掘削形態は箱型である。

**遺物** 本畑からの出土遺物は見られなかった。

**所見** 本畑は、1号池東側の微高地に掘削される。恐らく、長方形プランの区画内に掘削されているものと想定される。

なお、本畑は、土層の記録も取れなかったため、その時期は特定できず、おおよそ近世の所産と把握されるに過ぎない。

#### 16. 1号溝(第155～157図、PL.56・57・87・88)

**概要** 本溝は、比較的大型の溝であり、3区の遺構群を区画する溝遺構でもある。北西側と南東側が、共に調査区外に出ているため、本溝の全容を把握することができなかった。

**位置** 本溝は3区北半部から中東部にかけてあり、198～245-212～299グリッドに位置する。

**重複** 本溝は2-2号溝、3号溝、3・5・10号復旧溝群と重複している。本溝は3号溝及び5号復旧溝群よりは新しいが、2-2号溝や3・10号復旧溝群との新旧関係は特定できなかった。単独であり、同じ面に於ける他遺構との重複は見られなかった。

なお、西部で2号溝が西に並走し、東部で3号溝と交差しつつ並走する。

**規模** 残長：131.5m 幅：220cm 深さ：62cm

**覆土** As-A主体の青灰色シルトで埋没する。

**構造** 本溝は、全体的な走行の概略を述べると、調査区北壁西寄りより調査区に入って南行し、その後反時計回りに走向を転じて東行する。その途中でクランク状に走向しつつ、その東端で今度は時計回りに屈曲して南行し、最後は反時計回りに屈曲し、東に走って調査区を抜ける。

詳しく述べると調査区にN12°Wの走向で入り、直線的に7m程走行した後、緩やかな弧を描きながら9m程走り、その後走向をN2°Wに転じて18m走行し、更に時計回りにN78°Wに1/4回転して、直線的に6m東方に走行し、走向をN84°Eに転じた後、直線的に32m走行する。その後、N10°Eに走向を転じて4m程北行し、更にN75°Wに転じて、33m程東に走った後、N7°Wの

走向で、直線的に19m程南行するが、その南寄り、反時計回りにN82°Wに走向を転じて、東側調査区外に抜ける。

掘削形態は箱型を呈する。その底面は平底であるが、調査区に入って7m地点で東壁(左岸)沿いに、幅28cm、深さ6cmの浅い溝が掘削されるが、この溝は5m程南行した後、壁から離れ、溝の中央あるいは右岸に沿って流下する。壁から離れた後、この溝は、幅57～148cm、深さ5～10cm程を測る。1号溝底面は、この溝に向かって傾斜している。また東部の底面には、軸線上に150cm程、幅60cm程、深さ10～70cmを測る土坑状の落ち込みが8箇所ほど散見された。

なお、底面は西高東低であるが、勾配30.33%と水平に近い。

**遺物** 本溝からの出土遺物は多くの遺物が出土している。出土した遺物には、瀬戸・美濃陶器の腰鉋椀(393)・尾呂茶碗か丸椀(394)・片口鉢(397)・椀(398・401)・円盤状加工品(395)・製作地不詳の陶器壺(396)・肥前磁器椀(399・400・404)・猪口(405)・皿(406)・瀬戸・美濃陶器と見られる椀(403)・ガラス製石罫りと見られるもの(407)・在地系土器焙烙(408・409)・片口鉢(411)・丹波陶器すり鉢(412)・益子・空閑陶器すり鉢(413)・軒先瓦(414)・不明鉄製品(415・416・429・432)・寛永通宝(417)・砥石(418～421)・敲石(425)・板碑片(426)・火打石(427・428)・鉄釘(430・431)・キセル雁首(435・436)があった。この他、土師器片と、比較的量の多い須恵器片の出土遺物が見られた。

**所見** 本溝は東部底面の凹凸などから推して、本溝は水路であったものと思慮される。

また、その時期はAs-A降下の天明3(1783)年以降の所産と判断されるが、その時期を特定することはできなかった。なお、2号溝に並走することから推して、当初の掘削時期は天明3年以前に遡る可能性を有する。

#### 17. 2号溝(第155・158図、PL.56・57・88)

**概要** 本溝は中規模の溝である

**位置** 本溝は3区西部にあり、181～245-275～299グリッドに位置する。

**重複** 本溝は5号溝と、また本溝の分岐部分(「2-2号溝」とする)が1号溝や3号復旧溝群が重複するが、位置的に5号溝は本溝から分岐するものと思慮される。また、

3号復旧溝群との新旧関係は明確ではないが、本溝の方が古い可能性が考えられる。

なお、本溝はその北部で1号溝の西に並走し、北部の西側に1号畑が近接し、(2号溝本体では)南部の東側に3号復旧溝、西側に2号復旧溝群が近接してある。

**規模** 残長：69.0m 幅：80cm 深さ：10cm

**覆土** As-Aで埋没する。

**構造** 本溝は、全体的な走行の概略を述べると、おおよそ南北方向に調査区を横断するが、途中クランクがあり、東側の屈曲部では東に2-2号溝が分岐する。また、南寄りでは5号溝が東に分岐する。

詳しく述べると北側から調査区にN15°Wの走向で入り、直線的に12m程南行した後、走向をN2°Wに転じて13m走行してクランク部に入る。クランク部では反時計回りに走向を1/4回転して、N75°Wに転じた後直線的に5m程東に走り、走向をN7°Eに転じた後、直線的に18m走行し、時計回りに緩やかな弧を描きながら12m程南南西方向に進む。この地点で走向をN33°EからN5°Wに転じて直線的に8m程走行して調査区を出る。一方、クランク部の二度目(東側)の屈曲部から2-2溝が分岐し、緩やかな後描いて、3m程走行した後、走向をN80°Eに転じて直線的に12.7m程走行し、1号溝と重複して確認できなくなる。

掘削形態は箱堀状を呈する。その底面は平底であるが、クランク部の東側屈曲部から南へ70cm程の地点で、7cm程を測る段差があり、南の方が高い。まこの屈曲部の分岐点の中心の高さに対して、東に分岐する2-2溝東端の比高差は6cm程あって2-2号溝東端の方が高いが、2号溝本体にある南側の段差2-2号溝東端より4cm程高いため、この段差構造によって2-2号溝へ給水されていたことが分かる。

なお、底面は北高南低であるが、勾配は0.28%と水平に近い。

**遺物** 本溝からは瀬戸美濃磁器腰鉋鏡(402)・鉄製鋳(437)と僅かな量の土師器・須臾器片が出土した。

**所見** 本溝は比較的長い距離を掘削されていることなどから推して、本溝は水路として掘削されたものと推定される。

また、その時期はAs-A降下の天明3(1783)年以降前後と判断される。

### 18. 3号溝(第155・158図、PL.56・57・88)

**概要** 本溝は比較的規模の大きい溝である。本溝は南北両側が調査区外に出ていて、全容を詳らかにすることはできなかった。

**位置** 本溝は3区東部にあり、189～239-217～228グリッドに位置する。

**重複** 本溝は1号溝と重複するが、本溝の方が古い。

また、本溝の中程西側に1号池が併存し、中部の東側に1号溝、西側に6・8号復旧溝群が近接して並走する。

**規模** 残長：50.0m 幅：150cm 深さ：46cm

**覆土** 本溝はAs-Aを含む黄灰色土、砂粒を含む明褐色土や褐色土などで埋没する。

**構造** 本溝は、北側調査区からN41°Wに走向を向いて調査区に入り、4m程直線的に走行した後、走向をN23°Wに転じて、8m程直線的に走行する。

この走向を転ずる付近、調査区北端寄り7.3mの地点から西壁が迫り出して中段を形成し、溝の本流は東壁に押し付けられて、幅58cm程と狭くなる。溝底面と中段との比高差は北端では1cm程と僅かだが、後述する中段の南端では11cm程になる。狭められた溝は、北側ではN21°W、南側でN32°Wに走向を取る、弧状のプランで8m程走向し、南端で時計回りに走向をN20°Eに転ずるが、この地点より東壁は、東側の1号池の西壁に沿って走行し、西側の中段は狭まり始める。そして溝本流は短く走行した後、反時計回りにN2°Wに転じるが、中段はこの地点で失われる。一方、この地点から東に1号池への道水路が付く。この道水路については、21項「1号池」で述べる。

その後、溝の幅員は本流の幅員と同じとなり、N2°Wの方向で、10m程南流するが、途中で1号池からの排水路が接続し、南端に土坑が掘削される。1号池の排水路は、本溝に直交しするが、この排水路は、21項「1号池」の中に記載する。一方、土坑は、溝の走向に主軸を取り、径170×73cm、深さ16cmを測る。

溝はこの土坑から走向をN22°Wに転じて、5m程直進し、更にN3°Eに走向を転じて2.5m程直線的に走行した後、N27°Wに走向を転じて短く走るが、ここに径126cm×82cm、深さ19cmを測る楕円形プランの土坑が掘削される。この土坑からは縄42個が出土したが、土坑の



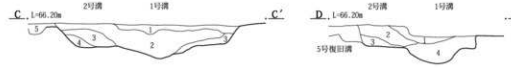
(A-A')

- 1 暗灰色土 シルトに黒色土ブロック
- 2 暗灰色土 シルトブロック
- 3 明白灰色土 シルト層
- 4 明茶褐色土 シルトブロックと砂粒の混土
- 5 明黄褐色土 As-A軽石少量含む
- 6 黄褐色粘質土 黄褐色土がブロック状に入る
- 7 黒色土 地山の黒色土ブロックが混じる

- 8 暗茶褐色土 黒色土がブロック状に入る
- 9 青灰色土 As-A軽石主体
- 10 明褐色土 砂粒含む
- 11 褐色土 鉄分含む砂粒含む
- 12 暗茶褐色粘質土

(B-B')

- 1 褐色土 径1mm以下の細かいAs-A軽石、鉄分含む
- 2 茶褐色土 As-A軽石含む
- 3 青灰色土 As-A軽石主体
- 4 褐色土 径1mmのAs-A軽石主体
- 5 黄灰色土 径1mm以下のAs-A軽石
- 6 茶褐色粘質土 As-A軽石少量含む

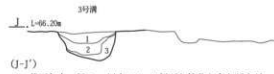
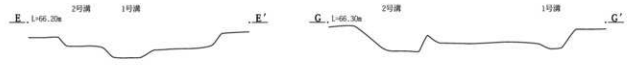


(C-C')

- 1 黄灰色土 細かいシルト層
- 2 青灰色土 細かいシルトに鉄分含む
- 3 明茶褐色土 少量のAs-A軽石含む、粘質
- 4 暗褐色粘質土

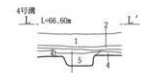
(D-D')

- 1 黄灰色土 細かいシルト層
- 2 青灰色土 細かいシルトに鉄分含む
- 3 明茶褐色土 少量のAs-A軽石含む、粘質
- 4 暗褐色土 粘質土



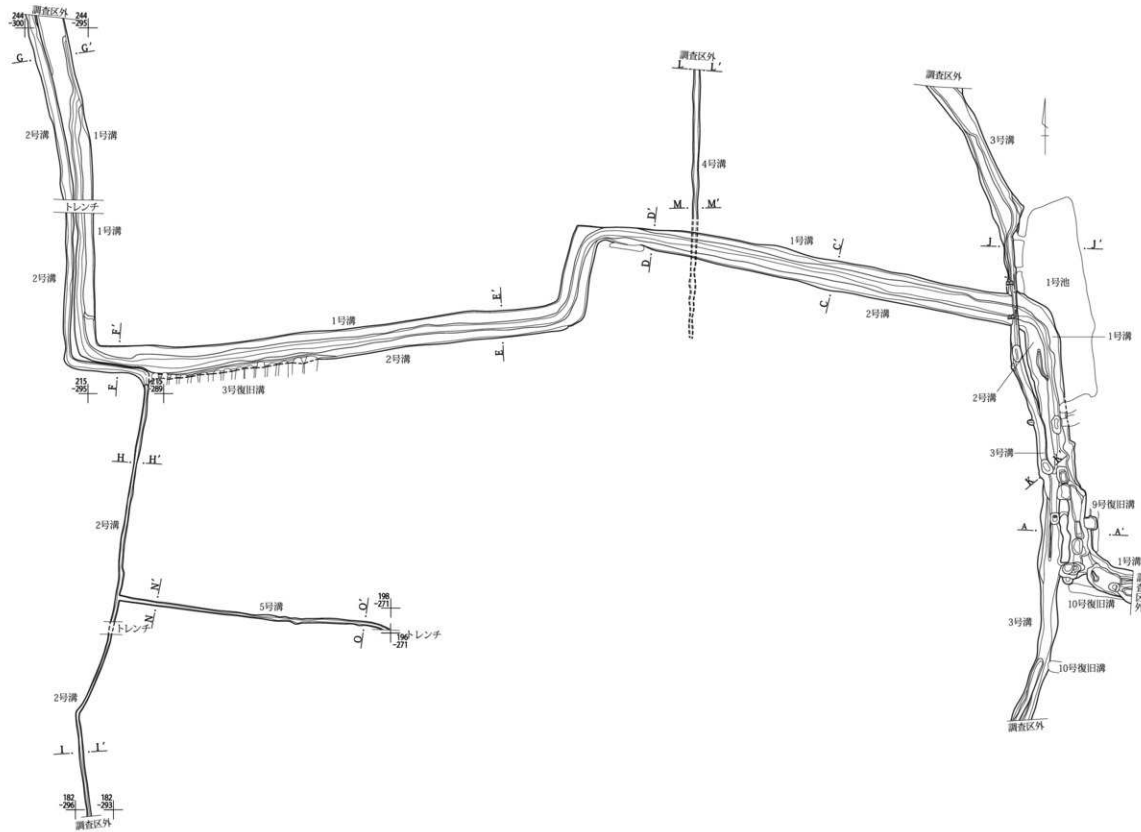
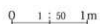
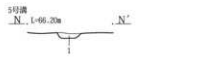
(J-J')

- 1 黄灰色土 径1mm以上のAs-A軽石と鉄分を含んだ土がラミナ状に混じる
- 2 径1mmのAs-A軽石と砂粒のラミナ層
- 3 黄褐色砂質土

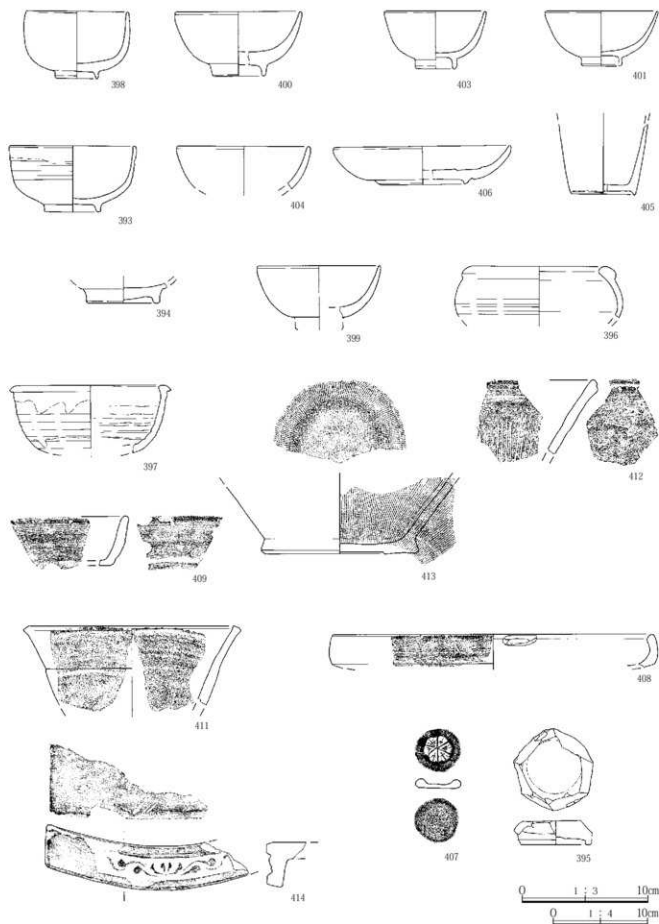


(L-L')

- 1 現耕作土
- 2 現耕作土床土
- 3 暗黄褐色土 腐植層崩壊前の耕作土
- 4 暗茶褐色土 (地山)
- 5 暗茶褐色シルト質土

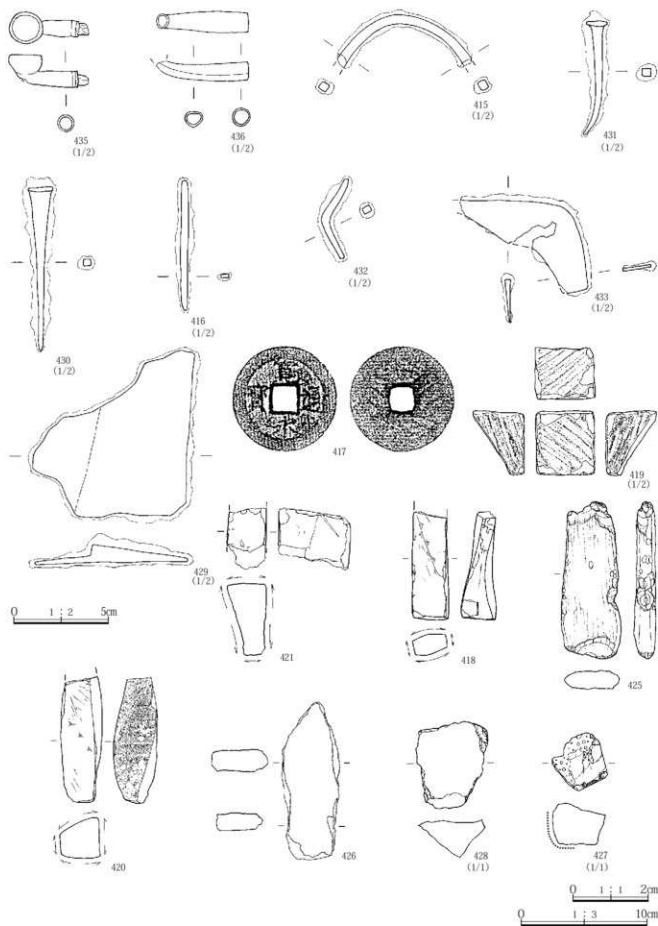


第155図 3区1・2・3・5号溝



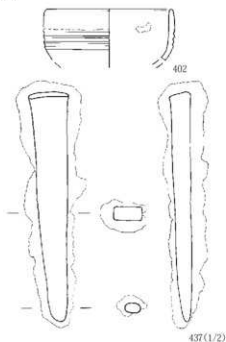
第156図 3区1号溝出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

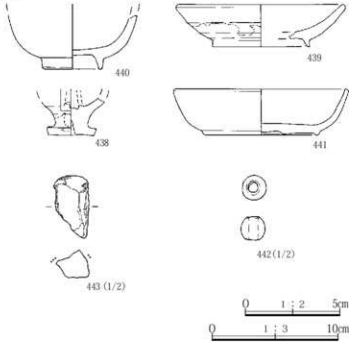


第157図 3区1号溝出土遺物(2)

2号溝



3号溝



第158図 3区2・3号溝出土遺物

南西壁に沿って、石組が組まれた痕跡が遺されている。確認したものでは石組は平積4段であった。

この石組を残す土坑を越えた南西側で、溝の走向はN2°Eに転じて、13m程直線的に走行する。また、北部では、石組の土坑の南2m程の地点から、幅66～80cm、深さ40cmを測る副溝が、6.5m程の区間で現れ、本溝本流の西に6cm程隔てて並走し、南部でこれと合流する。なお、この副溝の存在により、付近の溝幅が広がる。

このN2°Eに走向を取る区間の南端からは時計回りに緩やかな弧状の走行を呈し、南端部ではN26°Eの走向を見せる。なお、南端寄り5.5mの地点から南には、西壁に沿って幅36～63cm、深さ10～24cmを測る溝が掘削されている。また、調査区南端から2.2m地点から南では、東壁に沿う幅58cm、深さ6cmを測る溝も掘削されている。

掘削形態は箱型状を呈し、底面は平底であるが、上述のように南北両端付近では、東壁または西壁に沿う溝が、底面より掘削されて至る。

また底面は北高南低であるが、その勾配は0.34%と水平に近いが、最北端底部と、最南端最深部を比較すると、その勾配は2.90%となる。

**遺物** 本溝からは瀬戸・美濃陶器のひょうそく(438)や皿(439)、肥前陶器の刷毛目椀(440)、肥前磁器の皿(441)、

ガラス玉(442)、火打石(443)が出土した他、少量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本溝は水路であったものと想定される。また、南寄りの西側に並走する副溝の存在から、掘り返しが行われたものと思慮される。

また、本溝は覆土から推して、As-A降下の天明3(1783)年以降に掘削されたものと判断されるが、副溝の存在から、当初の掘削時期は天明3年以前に遡るものと思慮される。

#### 19. 4号溝(第155図, PL.56・57)

**概要** 本溝は中型の溝であるが、北側が調査区外に出ていて、全容を詳らかにすることはできなかった。また、南側は試掘トレンチ、1号溝と重複して失われ、4・5号復旧溝群との重複部分では、遺構の状態は不明瞭である。

**位置** 本溝は3区中北部東寄りにあり、219～240-246～247グリッドに位置する。

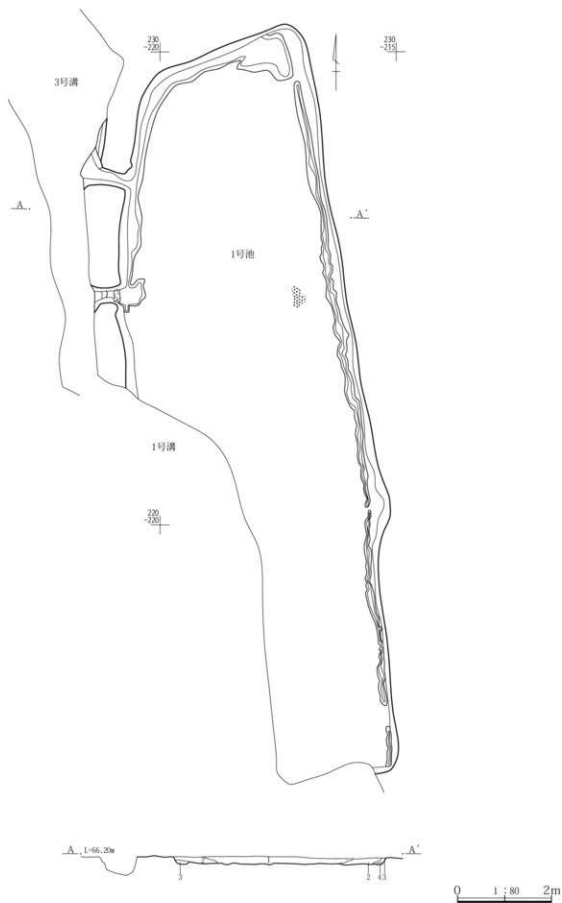
**重複** 本溝は1号溝、4・5号復旧溝群と重複するが、いずれに対しても新旧関係は明瞭ではない。

**規模** 残長:21.1m 幅:60cm 深さ:46cm

**覆土** 本溝は暗茶褐色シルト質土で埋没する。

**構造** 本溝は、北側が調査区外に出てるため、全容は





第159図 3区1号池

詳らかにできなかったが、南半部も1号溝や4・5復旧溝群と重複するため、遺構の状態は不明瞭である。北側調査区からN1°Eに走向で、直線的に走行する。

**掘削形態**は箱型で、平底を呈する。調査区北端からトレンチまでの間の底面は、北高南低であるが、その勾配率は0.56%と僅かなものであった。

**遺物** 本溝からは不明鉄製品3点(444～447)が出土した他、少量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

また、その時期も特定できなかったが、本溝は覆土から推して、As-A降下の天明3(1783)年以前の可能性が考慮される。

#### 20. 5号溝(第155図、Pl.56・57)

**概要** 本溝は小型の溝遺構である。東側が、試掘トレンチに切られており、全容は詳らかにできなかった。

**位置** 本溝は3区南西部にあり、196～198-252～271グリッドに位置する。

**重複** 本溝は西端で2号溝に接するが、2号溝以西では確認されず、また1号溝以西は3復旧溝群があるため、併存していたものと思慮される。

**規模** 残長：22.0m 幅：30cm 深さ：7cm

**覆土** 本溝はAs-A含む茶褐色土で埋没する。

**構造** 上述のように、本溝は全容を詳らかにできなかったのであるが、西端で2号溝にT字形に接続し、以東でN81°Wで直線的に走行し、西端から14m程で、走向をN88°Wに転じて6.5m程直線的に走行した後、走向を時計回りに転ずるが、試掘トレンチのすぐ北側ではN62°Wを向く。

**掘削形態**は箱型で、平底を呈する。本溝の底面は、強いて言えば西高東低で、その勾配率も0.09%とごくわずかで、ほぼ平坦であった。

**遺物** 本溝からは不明鉄製品4点(444～447)が出土した他、少量の土師器・須恵器片が出土した。

**所見** 本溝の掘削意図については、本溝が、2号溝に接続するものと判断されることから、水路の可能性が考えられる。

また、その時期も、2号溝同様、As-A降下の天明3(1783)年前後の所産と判断される。

#### 21. 1号池(第143・159図、Pl.57)

**概要** 本池は、農耕に資したものであったものと思慮される。3号溝と有機的に結合する、池遺構である。

なお、本池は1号溝と重複して失われていたため、南西側の構造を明らかにすることはできなかった。

また、本池には3号溝と接続する2条の小型の溝が南北に遺されていたが、北側のものは3号溝の東肩が僅かに窪むことから給水路、南側のものは池の溝側底面が抉られることから排水路と判断して報告する。

**位置** 本池は3区北東部南寄りにあり、214～230-214～221グリッドに位置する。

**重複** 本池は、1号溝と重複するが、1号溝と本池が接続する3号溝との新旧関係を照らして、本池の方が古いものと思慮される。

また、本池は西側に専排水路2条を以て、3号溝に接するが、その構造から推して、3号溝と併存していたものと思慮される。

**規模** 東西：5.9m 南北：16.12m 深さ：10cm

**給水路** 長さ：1.21cm 幅：20～93cm

深さ：3～7cm

**排水路** 長さ：0.76cm 幅：31～58cm 深さ：12～18m

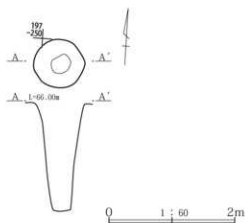
**覆土** 本池は、As-A軽石、あるいはAs-A軽石と茶褐色土の混土で埋没する。

**構造** 上述のように、本池は、南西側が1号溝に壊されているため、全容は詳らかでないが、本遺構のプランは西に張り出す隅丸方形様のプランを呈するものと思慮される。

**掘削形態**は箱形を呈しており、底面は平底を呈している。底面に傾斜は特に確認することができず、ほぼ平坦である。なお、西壁南寄りの排水路際の底面は、流水の影響か、幅58cm、奥行45cmの範囲で、不整形プランに、深さ6cm程抉られている。

また北東隅部を除く、北壁から西壁排水路までの間の壁際には、幅23～66cm、深さ4cm以下を測る周溝が掘削される。また、池の北東隅部を除く東壁際に接する、あるいは壁際から22cm離れた位置には、幅5～20cm、深さ4cm以下を測る周溝が、断続的に掘削されているのが確認された。

なお、上述のように、排水路際には、流水によるもの



第160図 3区1号井戸

と見られる挟れが見られたが、排水路際の南側には幅11cm、長さ16cmを測る、細長い短冊形の、板状のものを差し込んだ痕跡を確認することができた。ここには、止水のために、板を差し込んでいたものと思慮されるが、板の厚さは3寸ほどと想定され、(南北方向の)板の長さは、排水路の幅に照らして、おおよそ2尺ほどあったものと想定される。なお、板の(上下方向の)幅を想定することはできなかった。

**給水路** 給水路は西壁北寄りから、垂直の方向、3号溝の北側屈曲部に向けて掘削されていた。

そのプランは鼓形を呈し、底面の形態は、3号溝側を天とする、漏斗形のプランを呈していた。

掘削形態は箱堀状を呈し、その走行は直線的で、走向はN70°Wを向く。

また、底面は本池側が高く、3号溝側が低いが、池底面に対して、給水路の池寄り部分が-1cm、3号溝寄り部分が-7cm、3号溝底面が-12cmの比高差を測り、池と給水路、給水路と3号溝の間には、それぞれ段差が見られた。このように、池より、溝の底面の方が低いが、その段差は12cm程と僅かであるため、水路の水位が高ければ、池への導水は充分に可能であったものと判断される。

**排水路** 排水路は西壁の南寄り、給水路からおおよそ2.1m離れた位置に掘削されている。掘削方向は掘削地点の池の壁面に対して垂直方向にある。

排水路のプランは鼓形を呈している。その走行は直線的で、走向はN89°Eを向く。

掘削形態は箱堀状を呈するが、中程に、西側が低くなる、比高差9cmの段差が設けられている。また池際の、上述の止水板から7cm隔てて、水勢を制御するように、

横位に河床礫を据えているが、その頂部は、池の底面にほぼ同じである。

また底面は池側が高く3号溝側が低いが、池底面に対して、排水路の池寄り部分が-8cm、3号溝寄り部分が-17cm、3号溝底面が-26cmを測り、池と排水路、排水路内、排水路と3号溝には段差が設けられ、池からの段差と排水路内の段差の間には上述のように河床礫が据えられている。

**遺物** 本溝からは、砥石(851)と僅かな量の須恵器が出土した。

**所見** 上述のように、本池は3号溝と接続し、農業用水の滞水、あるいは水量調整を目的に掘削された遺構であるものと判断される。

また、その時期は明確にはできなかったが、3号溝と有機的に結合していることから、3号溝と同様、天明3(1783)年を前後する時期の所産と判断される。

## 22. 1号井戸(第160図)

**概要** 本井戸は、小型の井戸遺構である。

**位置** 本井戸は3区中南部やや東寄りにあり、196～197-249～250グリッドに位置する。

**重複** 本井戸は単独であり、他の遺構との重複関係は見られなかった。

**規模** 径：80×76cm 深さ：172cm

**覆土** 本井戸の覆土の記録は取ることができなかった。また、地山層の土層記録も取れなかった。

**構造** 本井戸は円形プランを呈し、強いて言えば主軸方位はN39°Eを指している。

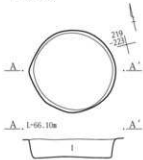
掘削形態は井筒形を呈し、底面形態は平底を呈する。

また、上述のように、地山層の土層記録が取れなかったことから、湧水層、あるいは滞水層を特定することはできなかった。また、滞水時の吃水面を想定することのできる、壁面のアグリ(窪み)は形成されていない。

**遺物** 本井戸からの遺物の出土は見られなかった。

**所見** 本井戸は、近世に多い井戸遺構であるが、その時期を特定することはできなかった。

1号土坑



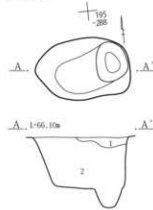
1号土坑

1 明茶褐色土 若干のシルト含む。粘性弱い。

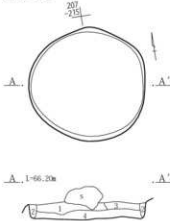
2号土坑

1 暗茶褐色土 黒色のブロック。  
2 茶褐色土 若干のA軽石含む。

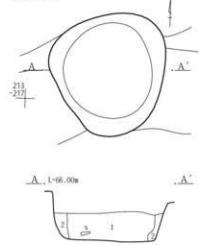
2号土坑



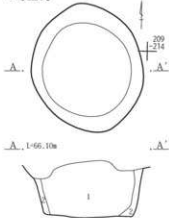
5号土坑



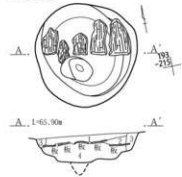
3号土坑



4号土坑



6号土坑



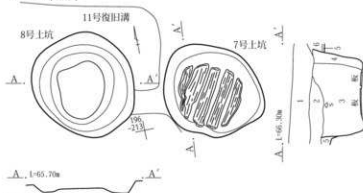
3号～5号土坑

1 茶褐色土 少量のAs-A軽石、ザラつく。  
2 暗褐色土 黒色のブロック混じる。(桶の木質部)。  
3 明茶褐色土 φ 1mm以下のAs-A軽石。  
4 明茶褐色土 φ 1mmのAs-A軽石。

6号土坑

1 暗茶褐色土 As-A軽石少量含む。粘質土。  
2 明茶褐色土 As-A軽石少量含む。粘質土。  
3 褐色土 黒色上のブロック混じる(桶の木質部)。  
4 青灰色土 As-A軽石に黒色土ブロック混じる。

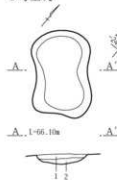
7・8号土坑



(7号土坑)

1 珉礫作土  
2 茶褐色土 As-A軽石混じる。  
3 明茶褐色土 粘質土。  
4 黄褐色土 黒色土ブロック混じる。  
5 青灰色土 As-A軽石主体。  
6 赤灰色土 シルト質。

9号土坑



第161図 3区1面の土坑群

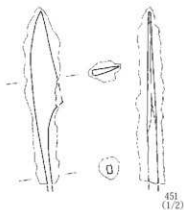
## 3号土坑



## 6号土坑



## 4号土坑



第162図 3区1面の土坑群出土遺物

## 23. 3区1面の土坑群(第161・162図, PL.58・89)

**概要** 3区1面では8基の土坑を調査した。下に記すように、2号土坑を除く各土坑は東部にあり、これらは形態的にも近似したものであり、共に農耕に関連した遺構であるものと想定された。

**位置** 本土坑群のうち2号土坑は、南西部にあり、他の1・3～8号土坑は中・東部に位置していた。また、後者のうち、1号土坑は1号溝の南(右岸)、3号溝の西側にあり、3～8号土坑は1号溝の東(左岸)、3号溝の東側に所在するものであった。

個々の土坑の位置するグリッドは表21参照のこと。

**重複** 4・5号土坑は9号復旧溝群と重複するが、4・5号土坑の方が古い。また、6・8号土坑は10号復旧溝群と重複するが、新旧関係を特定することはできなかったが、6・8号土坑は、4・5号土坑と9号復旧溝群と新旧関係に照らして、両土坑の方が古い可能性を有している。また、3号土坑は9号復旧溝群北側の、1号池との境にある土坑と重複し、これを切っている。群状の高まりを切っている。

**規模** 表21

**覆土** 1号土坑はAs-Aを含まない明茶褐色土、2～8号土坑はAs-Aを含む茶褐色土あるいはAs-A軽石で埋没する。また、3～5号土坑は桶の側板の木質の痕跡である暗褐色土が残る。

**構造** 各土坑のプランは、1・5号土坑は円形、3・4・6～8は縦横口の少ない楕円形、2号土坑は楕円池を呈する。

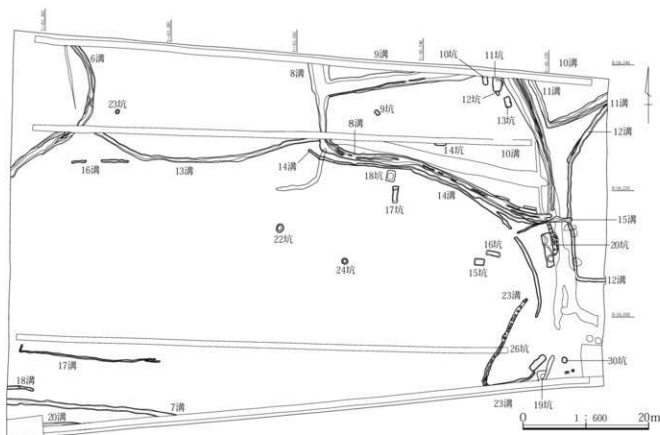
掘削形態はいずれも箱形で、壁面は垂直に近く、底面は平底を呈する。また6号土坑は底部付近のAs-A軽石上、7号土坑は底面に板が遺る。

主軸方位は表21に記す。

**遺物** 1号土坑からは僅かな土師器片、3号土坑からは在地系の焙烙(448)と僅かな須惠器片、4号土坑からは短頸壺(449)など、比較的量の多い須惠器片、産地不詳の磁器小杯(450)、鉄製鉄(451)や僅かな量の土師器片、6号土坑からは寛永通宝(452)、8号土坑からは僅かな須惠器片の出土が見られた。

**所見** 1・3～8号土坑の掘削形態は近似しており、3～5号土坑に側板の痕跡が残り、6・7号に底板と思慮される板が遺されることから、1・3～8号土坑は水桶または堆肥用の桶を設置したものと思われる。またプランの異なる2号土坑の掘削意図は特定できなかったが、しっかりした掘り込を持ち、平底であることから、同様の用途に供されたものである可能性が考慮される。

その時期は、As-A軽石の遺存状態から、2～8号土坑は天明3(1783)年以降の所産であり、1号土坑は天明3年以前の所産と認識される。



第163図 3区2面全体図

## (2) 3区2面の遺構と遺物

### 1. 3区2面の概要

3区2面は3面の地形をトレースするように、僅かに高い、北西隅部と北東から南東隅部にかけての微高地部があり、他の区域は低地部である。遺構の分布は、低地部に分布するものもあるが、微高地部周辺に集中する傾向がある。

3区2面では溝15条、土坑17基が見られた。溝は北西部の微高地と低地部を画するような位置に1条、低地部に8条が分布し、他は東側の微高地と、微高地と低地部の境付近にある。また、土坑は2基を除いて微高地周辺に分布している。

これらの遺構のうち、溝は各面遺構毎に報告するが、土坑は一括して報告する。

なお、本面でも、特に記載のないもの以外、遺構名称は、区、面の呼称は省略して以下に記す。

### 2. 6号溝(第164図、PL.59)

**概要** 本溝は、比較的中型の溝遺構である。

北側が、湧水対応のために調査区際掘削した排水溝で区切られて、以北は調査区外にあるため、調査することができなかった(以下同様掘削排水溝で切られるものは、調査区外として記載する)。調査区外、南側が西側調査区外に出ていて全容を把握することはできなかった。

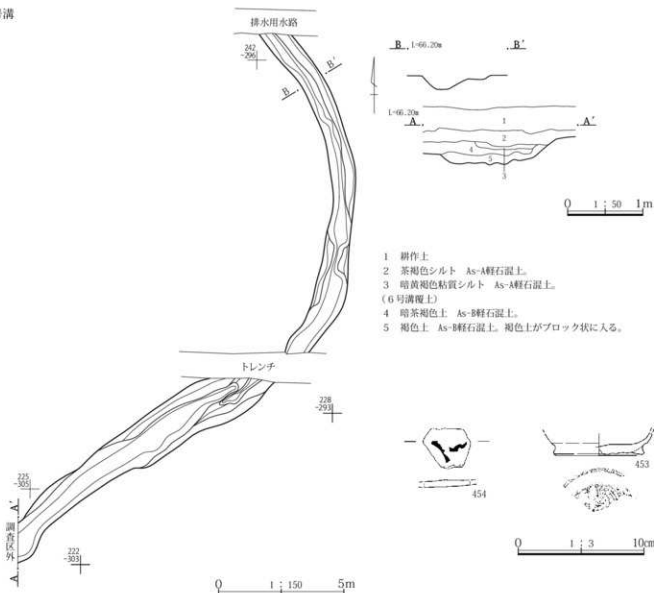
なお、本溝は底部の形態観察から、調査区北端から流下する溝(以下6-1号溝とする)と、X=230グリッドライン付近に現れて、6-1号溝と入れ替わって西側調査区端まで流下する溝遺構(以下「6-2溝」とする)があるが、掘り直しが行われたものと思慮される。

また、本溝は3区3面19号溝より微高地側に、ほぼ並走して掘削されており、一方、本溝は、その位置と走行から推して2区5号溝(あるいは28号溝)に接続する可能性が考慮される。

**位置** 本溝は3区北西、隅部寄りにあり、222～243-294～305グリッドに位置する。なお、6-1号溝の南限は225-300グリッド、6-2号溝の北限は296-229グリッドにある。

**重複** 本溝は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。また、6-1・6-2号溝は重複するが、新旧関係を

6号溝



第164図 3区6号溝と出土遺物

特定することはできなかった。

なお、北側で、N15°Wの方向に走る。東に低い、比高差12cmを測る段差が、7～26m離れてある。また、など高線の観察から、新旧関係は不明であるが、南東方向にある13号溝が、本溝と交差する可能性が考慮される。  
**規模** 残長：28.0m (6-1溝 残長：21.7m 6-2溝 残長：11.6m) 幅：175cm 深さ：18cm

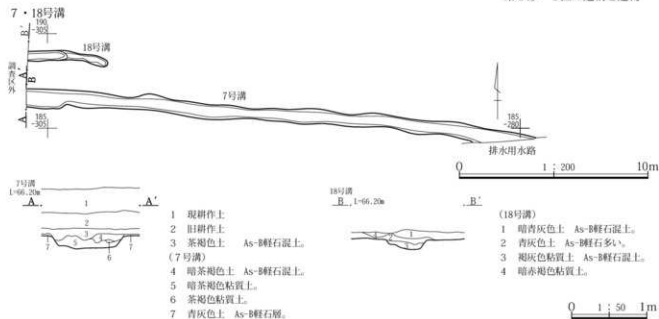
**覆土** 6-2号溝はAs-Bの混ざる褐色土などで埋没している。なお、6-1号溝の覆土の記録は残せなかった。

**構造** 本溝は、北側からN35°Wの走向で調査区に入り、時計回りに弧状の走行を呈して、中程やや南の試掘トレンチ付近でN50°Eに走向を転じている。以南は、反時計回りに緩やかな弧状を描いて走行し、南西隅、西側

調査区際ではN45°Eに走向を転じている。

6-1号溝、6-2号溝は、共に箱型を呈する底面は凹凸が見られるが、概ね平底を呈する。

またその底面は、6-1号溝は、北端から8.5m付近までは、東壁(右岸)沿い幅31～17cm、底面平均比高差11cm以下を測るテラスが設けられ、また、その南1m付近から1.1m程の間は、西壁(左岸)際に、幅17cm以下、底面からの比高差7cm以下、長さ上面の長さ2.8mを測る、東壁際には、幅24cm以下、底面からの比高差9cm以下を測るテラスが設けられ、この部分の溝幅は28～37cm程と狭くなる。また、南部、試掘トレンチ以南の溝底部中央には幅22～39cm、深さ5cm以下、長さ195cm以上を測る窪みが見られる。



第165図 3区7・18号溝

一方、6-2号溝は6-1号溝の西側に現れ、その比高差は5cmで6-2号溝の方が低い。6-2号溝西壁際には、試掘トレンチから5.1mの区間で、幅30cm以下、底面との比高差15cm以下を測るテラスが設けられている。また試掘トレンチに近い位置から、テラスに沿って、幅35cm、深さ2cm程の浅い溝状の掘り込が見られるが、その北端から1.2m程から溝の東壁方向へ広がり、3.7m南西方向で6-2号溝東壁と重なる。

底面は6-1号溝は南高北低で、勾配率は0.37%を測り、ほぼ平坦である。6-2号溝は北高南低で、勾配率は9.05%を測る。

**遺物** 本溝からは椀(453)などの須恵器と、杯(454)などの土師器が出土した。

**所見** 本溝は、3区北西部の微高地と低地部の境付近に掘削されたものと解釈される。

上述のように、本溝は掘り直された2条の溝から成る。本溝は、底面の凹凸や、テラスの出現などから推して、水路であったものと想定されるが、6-1号溝と6-2号溝の勾配は逆方向を示しており、通水の方向は定められない。また、6-1号溝の東西両壁際にテラスが設けられ、溝の幅員が減ずるところは、その以北に溜水の意図が有った可能性が考えられる。

また、その時期は確認面と覆土から推して、概ね中世の所産として把握されるに過ぎない。

### 3. 7号溝(第165図、PL.59)

**概要** 本溝は、比較的中規模の溝である。

西側が、西側調査区外、東側は南側調査区外に在って、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本溝は3区南西部南寄りにあり、184～186-279～306グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

なお、北側に4.5m隔てて18号溝が、並走するようにある。

**規模** 残長：27.0m 幅：95cm 深さ：16cm

**覆土** 本溝は茶褐色・暗褐色粘質土、上端近くにAs-B混暗茶褐色土で埋没する。

**構造** 本溝は、西側からN89°Wの走向で調査区に入り、直線的に16.6m走行した後、走向をN74°Wに変じて、南側調査区外に出る。なお、東端近くでは幅員の増加が始まる傾向が見られる。

**掘削形態**は箱堀状を呈し、底面が平底状を呈する。底面の勾配は自然地位とは逆の東高西低で、勾配率は3.59%を測る。

**遺物** 本溝は、僅かな量の土師器・須恵器片が出土したに過ぎず、図示すべきものは見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は確認面と覆土から推して、概ね中世の所産として把握されるに過ぎない。



#### 4. 18号溝(第165図)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。西側が調査区外に出ていて全容を把握することはできなかった。

本溝の遺存状態は良好とは言えなかった。

**位置** 本溝は3区南西部にあり、188-301～306グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独であり、他遺構との重複関係は認められなかった。

**規模** 残長：4.2m 幅：50cm 深さ：12cm

**覆土** As-B含む褐色土などで埋没する。

**構造** 本溝の西側はN88°Eに走向を取り、2.3m走行し、その東で時計回りに弧状に走行し、東端でN76°Wを向く。

掘削形態は箱型状を呈し、平底を呈する。底面の勾配は東高西低で、勾配率は0.95%を測る。

**遺物** 本溝からの出土遺物は僅かな土師器片のみで、図示すべきものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎない。

#### 5. 8・9号溝(第166・167図、PL.60・89)

**概要** 8・9号溝は、大型の溝である。

8号溝は北側が調査区外、南東側は10号溝と重複して、全容は把握できなかった。また、9号溝も東側が調査区外に出ていて全容は把握できなかった。

両溝共に遺存状態は良好と言え難かった。

**位置** 8・9号溝は3区中北部から北東部にかけてあり、8号溝は216～240-219～258グリッド、9号溝は235～238-231～255グリッドに位置する。

**重複** 8・9号溝はT字形に接する。新旧関係は特定できなかったが、底面も一続きであり、覆土も近似することから推して、併存の可能性が高いものと判断される。

また、8号溝は1・15号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。

なお、8号溝の南側には、14号溝が0.5～1m隔てて並走する。

**規模** 8号溝 残長：51.3m 幅(北部)：322cm (中・東部)：186cm 深さ：12cm

9号溝 残長：23.6m 幅：244cm 深さ：16cm

**覆土** 8号溝はAs-B混茶褐色土で埋没する。

9号溝はAs-B主体の暗茶褐色土で埋没する。

**構造** 8号溝は、北側からN4°Wの走向で調査区に入り、直線的に4.5m程直線的に走行して、東(右岸側)に9号溝を分岐するが、ここで走向をN8°Wに転じて、直線的に8m程走行し、反時計回りにN71°Wを向くまで1/4周程回転ながら6m程走行し、N89°Wに走向を転ずる。途中、試掘トレンチの南では、溝は10cm隔てて東西2条に分かれるが、東側の溝(8-1溝)は、幅42cm、深さ12cm、西側の溝は幅87～146cm、深さ5cmは測る。試掘トレンチから2.4mの地点からは、8-1号溝と8-2号溝の間に別の溝(8-3号溝)が入るが、この3条に分かれる区間では、8-1号溝と8-2号溝の間隔は4～13cm、8-2号溝と8-3号溝の間隔は8～13cmを測り、8-1号溝は幅40cm、深さ9cm、8-2号溝は幅40cm、深さ7cm、8-3号溝は幅48cm、深さ7cmを測る。なお、8-3号溝は6.5m走行して消えるが、3溝、あるいは8-3溝滅失以東、8-1・8-2号溝の間を仕切る障壁は断続的に、東端部近くまで続く。なお、略南北方向から略東西方向に転じた後の8号溝は、N89°Wの走向のまま、直線的に13.5m程走行した後、時計回りに緩やかな弧状を呈しながら、走向をN67°に転じて、13.5m程直進するが、この付近で8-1号溝と8-3号溝は6cm程の間隔を以て並走し、8-1号溝は幅39cm、深さ10cm、8-3号溝は幅23cm、深さ8cm程を測る。この直線部の東端からは、反時計回りに緩やかな弧を描いて走行し、東端部でN86°Wに走向を取る。

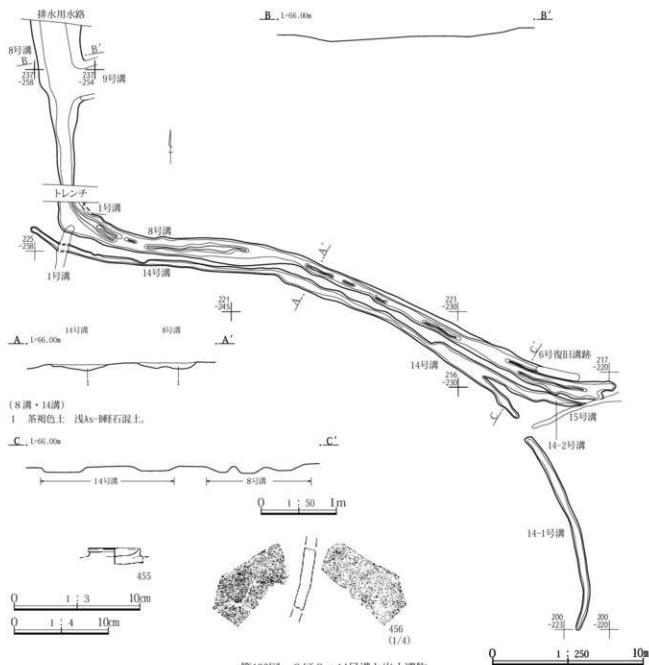
9号溝は、8号溝から略東方向に垂直に分岐し、その走向はN83°Eを取って、直線的な走行を取る。

8・9号溝共に掘削形態は箱型状を呈し、底面は平底を呈するが、上述のように8号溝では中・東部で3ないし2条の並走する溝に分かれている。また底面の勾配は、8号溝は北高東低で、勾配率は0.33%と水平に近く、9号溝の底面の勾配は東高西低で、勾配率は1.17%を測る。

**遺物** 8号溝出土遺物は少なく、少量の土師器や蓋の摘み片(455)を含む須恵器片や、裏と思われる常滑陶器片(456)が出土したに過ぎない。

一方、9号溝からは、瀬戸・美濃磁器碗(457)、在地系土器片口鉢(458・459)、状態の悪い銅銭1枚(460)と、少量の土師器・須恵器片が出土したに過ぎない。

**所見** 8号溝北部と9号溝は、その規模から推して、1



第166図 3区8・14号溝と出土遺物

条の堀であった可能性が高いものと思慮される。また、8・9号溝の掘削意図は特定できなかったが、走行の状態などから推して水路の可能性が想定されるが、8号溝は掘り直しのある3時期の溝であったものと判断される。

また、その時期は特定できなかったが、概ね中世の所産として把握されるに過ぎない。

#### 6. 14号溝(第166図)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。本溝は東部で分岐して2条に分かれるが、南側に分岐するものを、14-1号

溝、北側に分岐するものを14-2号溝とする。

また、本溝の遺存状態は良好とは言えず14-1号溝は北寄りで1.4m程途切れる。

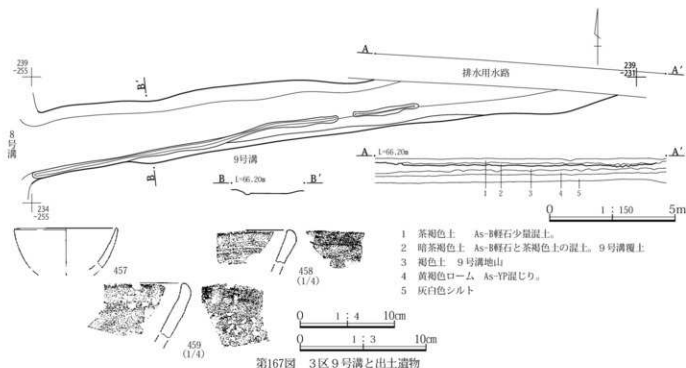
**位置** 本溝は3区中北部から南東部にかけてあり、215～226-221～258グリッドに位置する。

**重複** 本溝のうち14-2号溝は15号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 長さ：50.7m(14-2溝 長さ：10.5m) 幅：76cm 深さ：14cm

**覆土** 本溝はAs-B軽石混じりの茶褐色土で埋没する。

**構造** 本溝の西端部はN55°Wの走向で始まり、2.9m直



第167図 3区9号溝と出土遺物

線的に走った後、走行をN89°Wに走向を転じた後、時計回り弧状に走行するが、途中22.6mで14-1号溝と14-2号溝とが分岐するが、その分岐点の南東側でN51°W、南端近くでN7°Wに走向を取り、南端で走向をN18°Eに取る。

さて14-2号溝の14-1号溝からの分岐は、14-1号溝から北側にスライドするように分かれるため、14-1号溝と14-2号溝とは別遺構の可能性がある。また14-1号溝と14-2号溝とが分岐点より西へ10m程戻った地点には、幅員が44cmから南に張り出して72cmに広がる長さ4m程の区間があるが、これも別遺構の存在を示唆する可能性が考えられる。14-2号溝は14-1号溝からの分岐後、N63°Wの走向で、直線的に7.7m走行した後、走行を転じてN72°Wを向き、弱い区蛇行しながら走行し、東端部に至る。

掘削形態は箱堀状を呈し、平底を呈する。14-1溝の底面の勾配は西高南低で、勾配率は0.31%とほぼ平坦であり、14-1溝の底面の勾配は、勾配率と0.03%とほとんど見られない。

**遺物** 本溝からの出土遺物は、少量の土師器・須恵器片を出土したに過ぎず、図示するものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎなかった。

#### 7. 10号溝(第168図、PL.89)

**概要** 本溝は、大型の溝遺構である。

北側が調査区外にあり、南側も削平されて全容を把握することはできなかった。

**位置** 本溝は3区北東から中東部にかけてあり、209～237-219～227グリッドに位置する。

**重複** 本溝は、8・11・15号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかったが、11号溝は覆土中で本溝を切る。

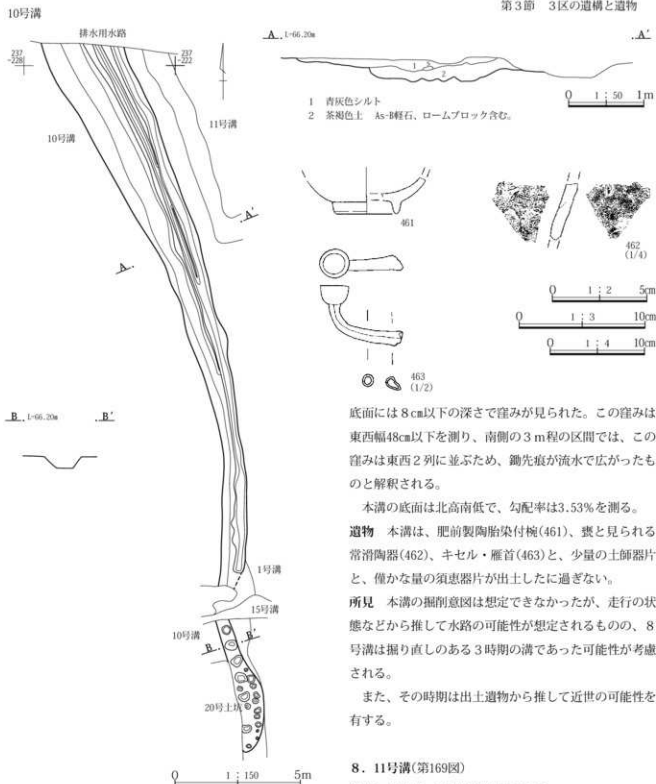
なお、北側で11号溝が東に0.8m以下の間隔で並走し、中位で12号溝が東に2m程隔てて1並走する。

**規模** 残長：30.0m 幅：270cm 深さ：20cm

**覆土** 本溝はAs-B軽石の混入する茶褐色土などで埋没する。

**構造** 本溝は、北側からN27°Wの走向で調査区に入り、時計回りに弧状に走行し、南寄りで、10号溝と交差する。この交差部分で、N2°Wに走向を取る。それ以南はN18°Wに走向を取り、南端でN1°Wを向く。

掘削形態は箱堀状を呈し、底面が平底状を呈するが、北部で東西3条に分かれる。東から10-1号溝、10-2号溝、10-3号溝と仮称する。10-1号溝と10-2号溝は8～12cm、10-2号溝は10～32cmの間隔を持って掘削され、10-1号溝は幅51cm、深さ29cm、10-2溝は幅32cm、深さ29cm、10-3号溝は65～164cmを測り、深さ26cmを測る。北端から10-1・10-2号溝は合流し、この合流点から3.6m地点



第168図 3区10号溝と出土遺物

で10-1・2号溝と10-3号溝は合流するが、底面は前者の方が後者より7cm深く、この段差は、合流点から南7.9mの地点まで続く。なお、10-1・2号溝が途絶えた地点以南では、東側を確認することができない。また、15号溝との交差点以南では下端のみが確認され、この部分の

底面には8cm以下の深さで窪みが見られた。この窪みは東西幅48cm以下を測り、南側の3m程の間では、この窪みは東西2列に並ぶため、鋤先痕が流水で広がったものと解釈される。

本溝の底面は北高南低で、勾配率は3.53%を測る。

**遺物** 本溝は、肥前製陶胎染付椀(461)、甕と見られる常滑陶器(462)、キセル・雁首(463)と、少量の土師器片と、僅かな量の須恵器片が出土したに過ぎない。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかったが、走行の状態などから推して水路の可能性が想定されるものの、8号溝は掘り直しのある3時期の溝であった可能性が考慮される。

また、その時期は出土遺物から推して近世の可能性を有する。

### 8. 11号溝(第169図)

**概要** 本溝は、中型の溝遺構である。

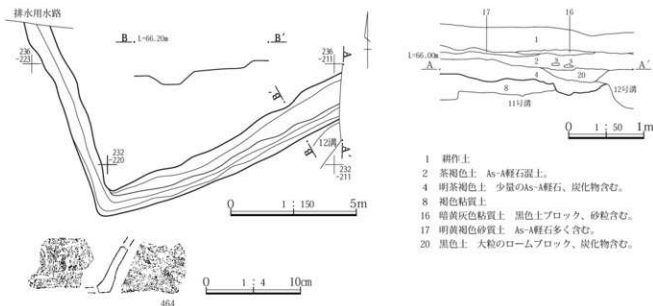
本溝は北側と東側が調査区外にあるため、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本溝は3区北東から中東部にかけてあり、233～237-210～223グリッドに位置する。

**重複** 本溝は、10号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかったが、本溝の方が新しい。

なお、北側で11号溝が東に0.8m以下の間隔で並走し、

### 第3章 発見された遺構と遺物



第169図 3区11号溝と出土遺物

中位で12号溝が東に2m程隔てて1並走する。

**規模** 残長：19.0m 幅：138cm 深さ：32cm

**覆土** 本溝は少量のAs-A軽石などを含む明茶褐色土で埋没する。

**構造** 本溝のプランは鉤状を呈する。本溝は調査区の北側からN20°Wの走向で調査区に入り、8.2m直線的に走行した後、半時計回りに1/4周してN82°Wに走向を転じ、3.3m直線的に走行し、N64°Wに走向を転じて直線的に走行し、調査区外に抜ける。

掘削形態は箱型を呈し、平底を呈して、凹凸が見られる。本溝の底面の勾配は東高北低であるが、勾配率は0.26%で、ほぼ平坦である。

**遺物** 本溝からの出土遺物は、在地系土器片口鉢(464)と12号溝出土遺物との峻別ができないものを含めて、僅かな量の土師器・須恵器片が出土したに過ぎない。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかったが、走行のプランから推して、土地区画に供された可能性が考慮される。

また、その時期は覆土などから推して近世の可能性を有する。覆土にAs-Aを含むが、1面で確認できなかったため、As-A時点で開口していた可能性も考慮される。

#### 9. 12号溝(第170図、PL.60)

**概要** 本溝は、中型の溝遺構である。

本溝は南北両側が東側調査区外にあるため、全容を把

握することはできなかった。

**位置** 本溝は3区北東から中東部、調査区東端部にあり、205～233-210～211グリッドに位置する。

**重複** 本溝は15号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 残長：34.5m 幅：57cm 深さ：16cm

**覆土** 本溝はAs-B軽石混じりの暗茶褐色土で埋没する。

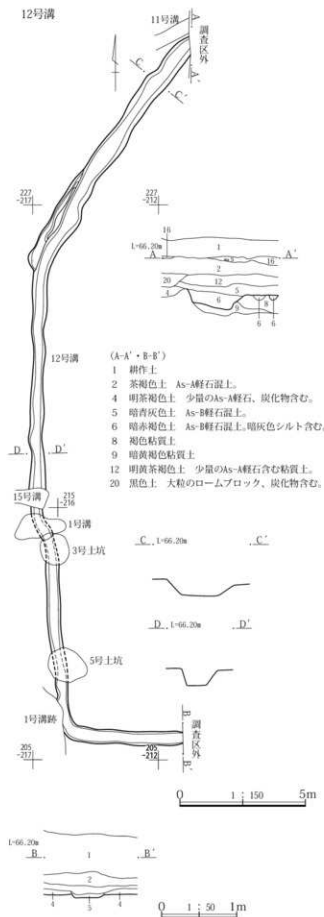
**構造** 本溝の走向は、楕形を呈するものと想定される。本溝の北側は東側調査区外からN38°Eの走向で入り、6.5m直線的に走行した後、反時計回りにN0°に走向を転じて、9.4m直線的に走行し、1.5mの区間の中でN21°W、N5°Wと走行を転じた後、直線的に7m程走行し、半時計回りに1/4回転してN87°Wに走向を取り、直線的に4.5m程走行して調査区外に抜けている。

掘削形態は箱型を呈し、平底を呈する。本溝の底面の勾配は南高北低であるが、勾配率は0.43%と、ほぼ平坦である。

**遺物** 本溝からの出土遺物は、少量の土師器・須恵器片が出土したに過ぎず、図示するものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図を想定することはできなかったが、走行のプランから推して土地区画に供されたものと想定される。

また、その時期を特定することはできず、概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎなかった。



第170図 3区12号溝

## 10. 13号溝(第163・171図、PL.)

**概要** 本溝は、中型の溝遺構である。遺存状況は不良である。

東側は8号溝に切られ、西側は削平され、更に試掘トレンチに切られるため、全容を把握できなかった。

**位置** 本溝は3区中北部から中西部にかけてあり、227～229-290～256グリッドに位置する。

**重複** 本溝は8号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。なお高線の観察から、新旧関係は特定できなかったが、北西方向にある6号溝と交差する可能性が考慮される。

**規模** 残長：37.2m 幅：82cm 深さ：12cm

**覆土** 本溝はAs-B軽石混じりの暗茶褐色土で埋没する。

**構造** 本溝の西部はN63°Wの走向で、9m直線的に走り、反時計回りにN85°Eに向け、時計回りに弧状に5m程走行した後、N82°WからN86°Wに走向を転じて、直線的に9m走行し、更に、N74°Eに走向を転じて8.5m直線的に走行した後、走行をN82°Eに転じて5.4m直線的に走行して8号溝に重なる。

掘削形態は箱状を呈し、平底を呈する。本溝の底面に勾配は見られない。

**遺物** 本溝からの出土遺物は、僅かな量の土師器・須恵器片が出土したに過ぎず、図示するものはなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎなかった。

## 11. 15号溝(第172図、PL.60)

**概要** 本溝は、中・小規模の溝遺構である。

また、本溝の遺存状態は良好とは言えなかった。

**位置** 本溝は3区中東部にあり、213～215-216～225グリッドに位置する。

**重複** 本溝は14-2号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 長さ：9.2m 幅：31cm、76cm 深さ：9cm

**覆土** 本溝はAs-B軽石混じりの黄灰色土で埋没する。

**構造** 本溝の西端部はN80°Eの走向で直線的に1.2m程走行し、N72°Eに走向を転じた後、時計回りに弧状に走向した後、東端部でN88°Wに向く。東部の幅員は中・



第171図 3区13号溝

西部に比べ広くなる。

**掘削形態** 箱型状を呈し、底面の横断面形は丸底状を呈する。底面の勾配は西高東低で、勾配率は0.98%を測る。

**遺物** 本溝からの出土遺物は、少量の土師器・須恵器片を出土したに過ぎなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎなかった。

### 12. 16号溝(第172図)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。

また、本溝の遺存状態は良好とは言えず、途中2.6m程途切れている。

**掘削形態** 箱型状を呈する。

**位置** 本溝は3区北西部にあり、224-286～295グリッドに位置する。

**重複** 本溝は14-2号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 長さ：9.1m 幅：48cm 深さ：7cm

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 本溝は東西に分かれて検出されているが、西側はN88°Eの走向で直線的に走行し、東側はN89°W走向で、直線的に走行する。

**遺物** 本溝からの出土遺物は見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎなかった。

### 13. 17号溝(第172図)

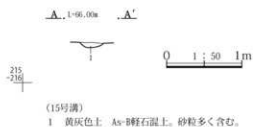
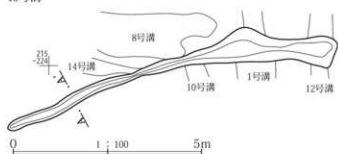
**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。略東西に走る溝(「17-1号溝」と仮称する)と、西端に重複する略北東-南南西方向に走向する短い溝、(「17-2号溝」と仮称する)、17-1号溝の東端部の南に並走する溝(「17-3号溝」と仮称する)の3条の溝で構成される。

また、本溝の遺存状態は良好とは言えなかった。

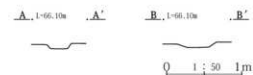
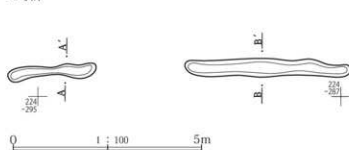
**位置** 本溝は3区南西部にあり、192～195-281～303グリッドに位置する。

**重複** 本溝は17-1号溝と17-2号溝は重複するが、新旧関係は特定できなかった。なお、17-3号溝は他遺構との重複

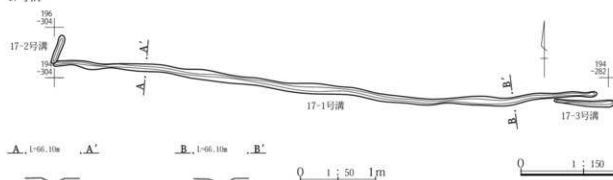
15号溝



16号溝



17号溝



第172図 3区15・16・17号溝

関係はなかったが、北側に17-1号溝が近接してある。

**規模** (17-1号溝)長さ：23.8m 幅：30cm 深さ：4cm

(17-2号溝)長さ：1.18m 幅：24cm 深さ：2cm

(17-3号溝)長さ2.38m 幅：10～26cm 深さ：2cm

**覆土** 覆土の記録は残せなかった。

**構造** 17-1号溝はN86°Wに走向を取り、極緩やかに蛇行するが、西端から18m付近でN82°Eに走向を転じて、時計回りに1.4m程弧状に走行し、東端付近はN79°Eの走向で、走行は極緩やかに蛇行を呈する。

17-2号溝はN17°Eに走向を取り、直線的に走行する。

17-3号溝は、17-1号溝の西端から20.2m地点の南に、17-1号溝から6cm隔てて掘削され、中・西部はN83Wの走向で直線的に走行し、西端から1.8m地点から反時計回りに緩やかな弧状のプランで走向して、東端でN84°Eを向く。

**掘削形態**は3条共に、箱状を呈する。17-1号溝の底面の勾配は西高東低であるが、勾配率は0.08%とほとんど平坦な状態である。

**遺物** 本溝からの出土遺物は僅かな土師器片のみで、図示すべきものはなかった。



**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎない。

#### 14. 20号溝(第173図、PL.59)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。西側が調査区外に出ており、南半部が排水溝に掘削されて、全容を把握することはできなかった。

本溝の遺存状態は良好とは言えなかった。

**位置** 本溝は3区南西部にあり、182・183-294～300グリッドに位置する。

**重複** 本溝は単独であり、他遺構との重複関係はなかった。

**規模** 残長：6.0m 幅：104cm 深さ：17cm

**覆土** As-B混じりの暗褐色土で埋没する。

**構造** 本溝はN86°Eに走向を取り、直線的に走行する。

掘削形態は箱型を呈し、平底を呈する。

**遺物** 本溝からの出土遺物は見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎない。

#### 15. 22号溝(第173図、PL.87)

**概要** 本溝は、3面の26号溝の覆土に検出されたものである。

なお、溝遺構としては3面26号溝に後述する。(261頁)

**位置** 本溝は3区東部に位置する。

**重複・規模・覆土・構造** 上に述べように、3面26号溝の項で後述する。

**遺物** 22号溝としては、土師器杯(465)、須臾器椀(466)の出土を見ているが、他の遺物は確認できなかった。

**所見** 本溝は、全く26号溝と重なっており、26号溝埋没過程の窪みであったものと認識され、遺構としては明確に把握できなかった。

#### 16. 23号溝(第174図、PL.60)

**概要** 本溝は、中型の溝遺構である。

本溝は略北北東-南南西走行の溝(「23-1号溝」と仮称する)と調査区南端部で略東北東-西南西走行の溝(「23-2号溝」と仮称する)から成る。

また、本溝の遺存状態は不良である。

**位置** 本溝は3区南西部にあり、23-1号溝は189～202-223～230グリッド、23-2号溝は189～191-222～228グリッドに位置する。

**重複** 本溝は、23-1号溝、23-2号溝共に単独であり、他の遺構との重複はなかった。

**規模** 23-1号溝 残長：15.7m 幅：66cm

深さ：—cm

23-2号溝 残長：7.0m 幅：49cm 深さ：8cm

**覆土** 23-1号溝はAs-Bや砂粒の入る褐色土で埋没する。23-2号溝の覆土の記録は残せなかった。

**構造** 23-1号溝の北端はN32°Eに走向を取り、北端から1.8m程走行し、N27°Eに走向を転じて、極弱く蛇行しながら11m走行したところでも反時計回りに走向をN18°Eに転じ、1.8m走行するが、南端近くで走向をN10°Wに向ける。

23-1号溝は、北半部底面付近のみを確認したに過ぎなかったため、掘削形態は把握できなかった。底面は平底状を呈し、軸線方向に27～72cm、幅20～39cm、深さ6cm以下を測る隅丸方形などのプランを呈する窪みが連なる。また南半部は、北端から7.7m地点以南の東寄りに、途中途切れるが、幅35cm以下、深さ5cm以下を測る溝遺構が掘削され、南端から0.7mの範囲では、この溝の西側と10cmの間隔を取って、幅30cm、深さ3cmを測る溝が、東の溝に並行に掘削されている。なお、東側の溝が途切れる区間には上述の窪みが見られた。

23-2号溝は、北東端はN35°Eを向けて、短く直線的に走行するが、その南側は走向をN81°Eに取って、概ね直線的に走行する。

23-2号溝の掘削形態は箱型を呈する。

**遺物** 23号溝からは僅かな土師器、須臾器片を出土に過ぎず、図示すべきものはなかった。

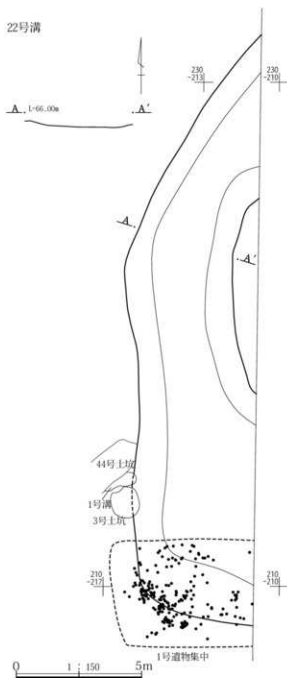
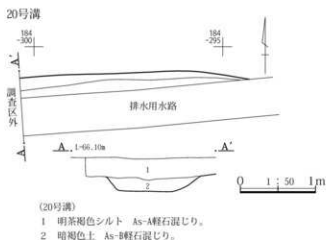
**所見** 23-1号溝と23-2号溝は形態、走行から推して、別遺構の可能性はある。

23-1・23-2号溝の掘削意図は想定できなかった。

また、その時期は概ね中世から近世の所産として把握されるに過ぎない。

#### 17. 3区2面の土坑群

(第174・175図、PL.60・61)



**概要** 3区2面では、9・20・22・24・26・30号土坑の17基の土坑を調査した。

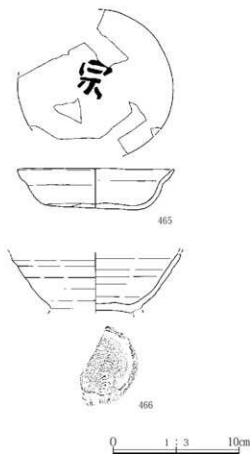
**位置** このうち、22・24号土坑は、遺構分布の少ない3区中部、23号土坑は北西部にあるが、他の溝群の分布する中東部から東部にかけてである。後者のうち、9・14号土坑は中北部の8号溝と9号溝の間に、10～13号土坑は区北東部の10号溝の北端近くに、15～18号土坑は14号溝の南あるいは南西に沿うように、20号溝は中東部の12・14号溝の間に、19・26・30号土坑は南東部にある。

なお、個々の土坑の位置するグリッドは表21参照。

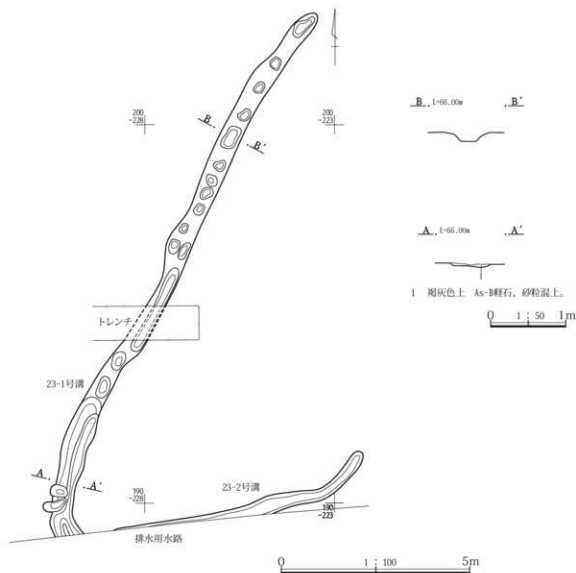
**重複** 12号土坑は13号土坑と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。

**規模** 表21に記す。

**覆土** 9～14号土坑はAs-Bを含む茶褐色土、15～18号土坑はAs-Bを含む黒褐色粘質土、下位層がある場合はAs-Bを含まない黒褐色などの粘質土、19・23号土坑はAs-Bの入る暗茶褐色土、20号土坑はAs-B主体の明黄褐色土、22号土坑は明褐色土で埋没する。22号土坑と覆土の記録の無い26・30号土坑以外の土坑はAs-B軽石が含まさ



第173図 3区20・22号溝と出土遺物



第174図 3区23号溝

れている。

**構造** 各土坑のプランは次の通りである。9号土坑は長方形に近い瓢箪形、10・11・13・14・16・17・18・20・26号土坑は隅丸長方形、12号土坑は長円形。15号土坑は長方形、22～24・30号土坑は楕円形を呈する。19号土坑は隅丸長方形を呈すると推定する。

また、掘削形態は9～20・26・30は箱形、掘削の深い15～17号土坑の壁面は立ち、底面は18号土坑が丸底を呈する他は平底を呈する。22～24は壁面側が僅か開く井筒形で、底面は平底を呈する。

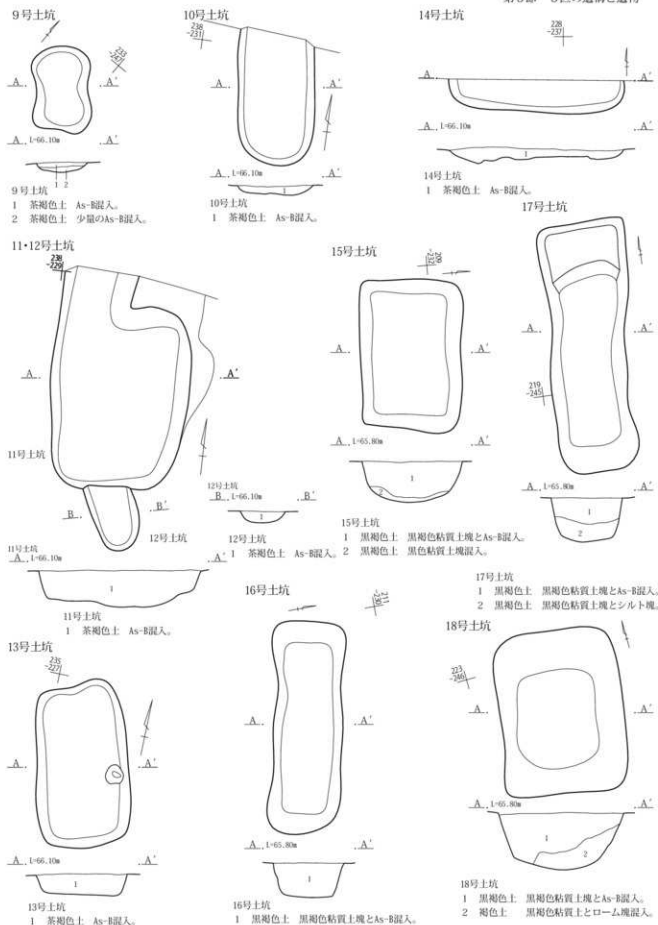
主軸方位は表21に記す。

**遺物** 10・11・17・20・26・30号土坑からは僅かな量の土師器・須恵器片、13・15・16号土坑からは僅かな量の土師器片、18号土坑からは少量の土師器片と僅かな量の

須恵器片、19号土坑からは僅かな量の土師器片と少量の須恵器片が出土したに過ぎなかった。

**所見** 9～11・13～20・26号土坑は規模と形態から推して貯蔵穴の可能性が想起され、22・24号土坑は規模と形態から推して井戸の可能性を有する。12・23・30号土坑の掘削形態は想定されなかった。

またその時期は、As-Bを含む土坑は、おおよそ中世の所産と想定されるが、As-Bを含まない22号土坑は時期が下る可能性を有する。

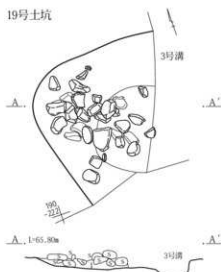


第175図 3区2面の土坑(1)

0 1:40 1m

第3章 発見された遺構と遺物

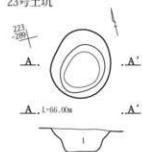
19号土坑



19号土坑

1 暗茶褐色土 As-B含む。やや粘質。

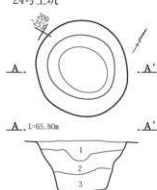
23号土坑



23号土坑

1 暗茶褐色土 As-B混上。

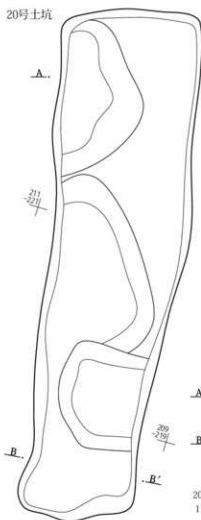
24号土坑



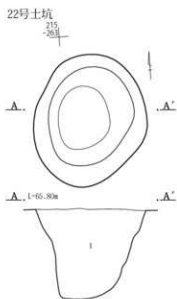
24号土坑

1 明茶褐色土 As-Bと褐色土混上。  
2 明茶褐色土 明茶褐色土粘質土塊。As-B少量含む。  
3 暗茶褐色土 As-B多く含む。

20号土坑

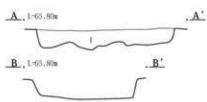


22号土坑



22号土坑

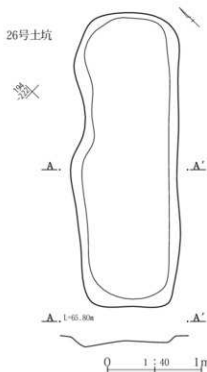
1 明褐色土 明褐色粘質土塊状に入る。



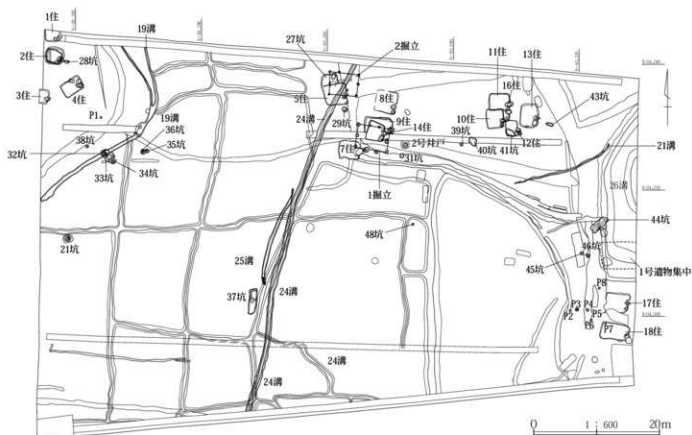
20号土坑

1 明黄褐色土 As-B主体。茶褐色土塊含む。

26号土坑



第176図 3区2面の土坑(2)



第117図 3区3面全体図

### (3) 3区3面の遺構と遺物

#### 1 3区3面の概要

3区3面は中東部東寄りから東部にかけて、及び北西部に微高地が現れ、その他の区域が低地部と認識される。

上述の微高地部には竪穴住居17件、溝1条、土坑13基があり、微高地部と低地部の境に溝2条、微高地から低地部にかけて走る溝2条、低地部には井戸1基、土坑8基があり、前面に水田面が広がっていた。

これらの遺構のうち住居、溝、井戸は各遺構毎に報告するが、土坑、水田は一括して報告する。

なお、本面でも、特に記載のないもの以外、遺構名称は、区、面の呼称は省略して以下に記す。

#### 2. 1号住居(第178・179図、PL.63・89)

**概要** 本住居は竪付の竪穴住居である。住居北側が調査区外にあるため、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本住居は3区北西隅にあり、243～245-302～304グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複は見られな

かった。

**規模** 長軸：255cm 短軸：(185) cm 深さ：34cm

**竈** 幅：76cm 奥行：76cm

燃焼部 幅：53cm 奥行：73cm 深さ：1cm

**貯蔵穴** 径：60×55cm 深さ：20cm

**覆土** 焼土・炭化物を含む明褐色土などで埋没する。いわゆる三角堆積などを確認できなかった。

**構造** [竪穴] 本住居は全容が詳らかでないため、明確ではないが、竪穴は隅丸長方形プランを呈する。主軸方向はN87°Wを向く。

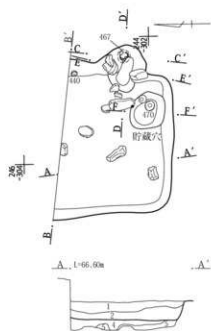
[掘り方・床] 本住居は大型の土坑を伴う掘り方を有し、これをロームブロック主体の土で埋めた上に、暗茶褐色を乗せて、床面を造っている。

[竈] 竈は東壁南寄りに設けられ、東壁に咬込んで作られる。その方位はN76°Wを向く。

径62.2×26.7cm、深さ1cmを測り、横長の円形プランで西に片寄る揺鉢形の掘り込を持つ掘り方を有し、これを焼土粒や炭化物を多く含む褐色土などで埋め戻して燃焼面を作る。

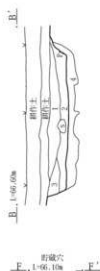
燃焼部は縦長の部円形のプランを呈し、左側に上下2

第3章 発見された遺構と遺物



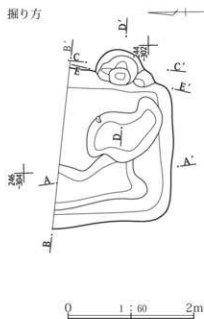
(1号住居覆上)

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物少量含む。
  - 2 明褐色土 焼土・炭化物含む。
  - 3 褐色土 茶褐色土をブロック状に含む。
- (掘り方)
- 4 暗茶褐色土 ローム粒・炭化物含む。
  - 5 黄褐色土 ロームブロック主体。

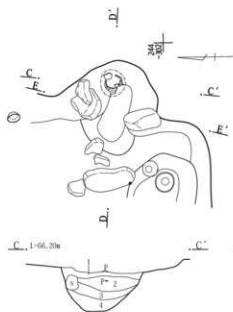


(貯蔵穴)

- 1 黒褐色粘質土 炭化物、ローム粒含む。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒多く含む。



竈

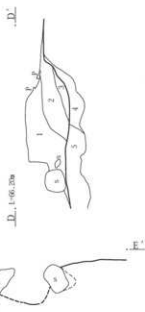


(竈覆上)

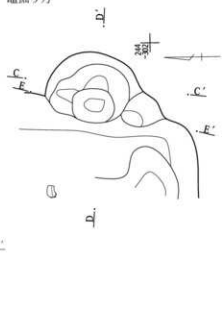
- 1 住居-2層
- 2 褐色土 焼土ブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒多く含む。

(竈掘り方)

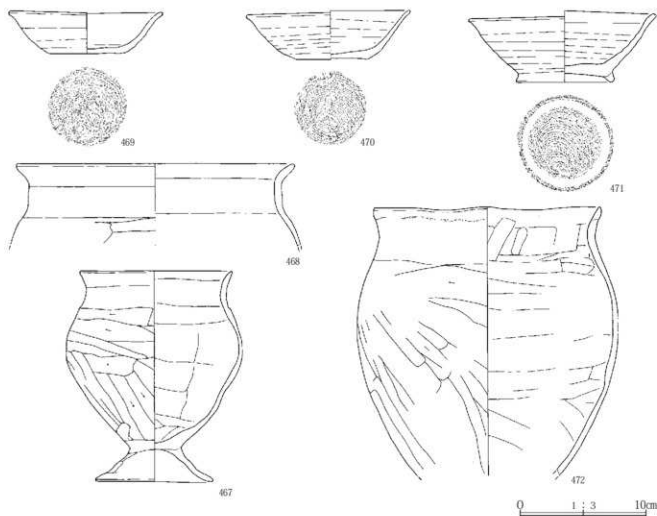
- 4 褐色土 焼土粒、炭化物多く含む。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒、炭化物含む。



竈掘り方



第178図 3区1号住居



第179図 3区1号住居(・3号住居)出土遺物

個の、右側に1個の河床礫が据えられている。この河床礫は袖石と見られるが、袖本体は確認されなかった。また、天井や煙道も確認できなかった。なお、竈奥壁手前やや右寄り覆土中から、土師器小型甕(467)が出土した。〔貯蔵穴〕貯蔵穴は住居南東部、東壁面から38cmほど離して掘削される。貯蔵穴のプランは隅丸方形を呈し、掘削形態は箱形を呈する。

〔上屋〕棟方向は、竈穴の直交する軸の比較から、略南北方向と判断される。

**遺物** 杯(469・470)・小型台付甕(467)・甕(472)を含む土師器と、椀(471)を含む須恵器など少量の遺物が出土した。467は竈から、469・470は貯蔵穴からの出土である。

なお、本住居と3号住居のいずれに属するか峻別できなかった遺物に、土師器甕(472)がある。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

### 3. 2号住居(第180・181図、PL.63・89)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。2区北東部に分布する竈穴住居群の一部と認識される。

**位置** 本住居は3区北西隅部にあり、239～242・301～304グリッドに位置する。

**重複** 本住居は15号住居と重なってあるが、本住居の方が新しい。

**規模** 長軸：310cm 短軸：276cm 深さ：40cm

**竈** 幅：80cm 奥行き：102cm

左袖 幅：27cm 長さ：52cm 高さ：17cm

右袖 幅：25cm 長さ：23cm 高さ：20cm

燃焼部 幅：26cm 奥行：55cm 深さ：7cm

煙道 幅：47cm 奥行：46cm 深さ：5cm

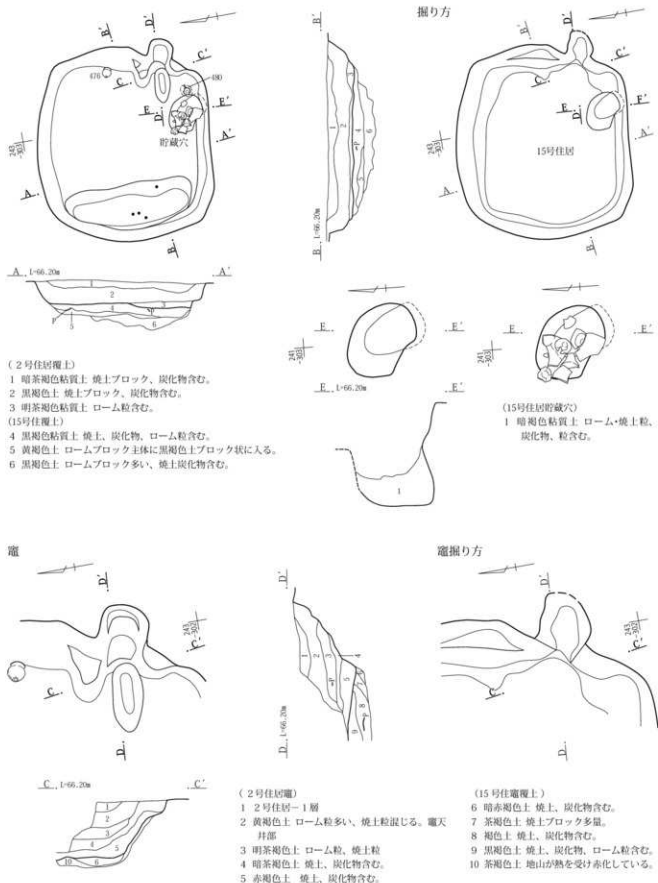
**貯蔵穴** 径：(77)×(53)×深さ43cm

**覆土** 焼土・炭化物を含む黒褐色土などで埋没する。明茶褐色土(3層)はいわゆる三角堆積層である。

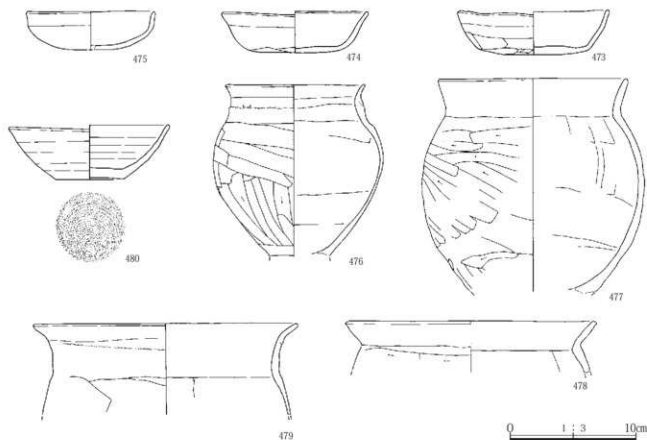
**構造** 〔竈穴〕竈穴は四面共に膨らみを持つ、横長の隅丸



第3章 発見された遺構と遺物



第180図 3区2・15号住居



第181図 3区2号住居出土遺物

長方形のプランを呈する。主軸方向はN84°Wを向く。  
 [掘り方・床]本住居は15号住居の覆土を掘り方とし、焼土・炭化物・ローム粒含む黒褐色土(4層)で床を構築する。床は西側1/3程が東側より5cm程低い。  
 [竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN73°Wを向く。

掘り方を有し、これを焼土、炭化物を含む暗赤褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

燃焼部の左右に掘り残しによる袖の一部が残されるが、袖の構造はその一部を捉えたに過ぎない。また、天井部の構造を確認することはできなかった。

燃焼面の奥に、燃焼面から15cmの比高差を以て、奥壁を削った煙道が作られる。

[貯蔵穴]貯蔵穴は住居南東隅部、東壁から17cm程隔てて掘削される。プランは楕円形を呈し、掘削形態は箱形を呈する。

[上屋]棟方向は、竅穴の直交する径の比較から、略南北方向と判断される。

遺物 杯(473～475)・小型台付甕(476)・小型甕(477・478)・甕(479)を含む土師器と、椀(480)などの僅かな須

恵器片が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

#### 4. 3号住居(第182・183図、PL.64・90)

概要 本住居は竈付の竪穴住居である。住居西側が調査区外にあるため、全容を把握することはできなかった。

位置 本住居は3区北西部調査区西端にあり、233～236-303～305グリッドに位置する。

重複 本住居は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

規模 長軸：225cm 短軸：(160)cm 深さ：40cm

竈 幅：87cm 奥行き：103cm

左袖 幅：26cm 長さ：24cm 高さ：26cm

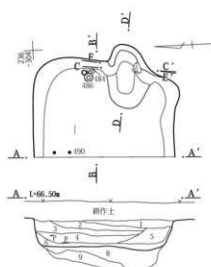
右袖 幅：35cm 長さ：23cm 高さ：24cm

燃焼部 幅：30cm 奥行：75cm 深さ：7cm

煙道 幅：58cm 奥行：26cm 深さ：20cm

覆土 ローム、焼土、炭化物を含む茶褐色粘質土などで

第3章 発見された遺構と遺物

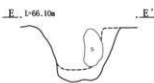
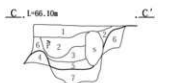
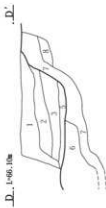
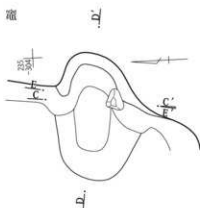
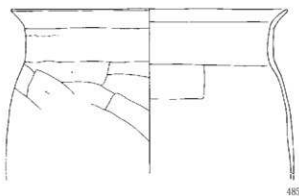
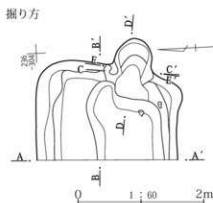


(住居覆土)

- 1 黒色粘質土 少量の焼土粒、ローム粒含む。
- 2 暗茶褐色粘質土 焼土粒、炭化物、ローム粒多く含む。
- 3 暗褐色粘質土 ローム粒、焼土粒多く含む。
- 4 茶褐色粘質土 ロームブロック多い。焼土、炭化物含む。
- 5 褐色土 ロームブロック少量含む。粘質土。
- 6 明褐色土ローム粒少量含む。粘質土。
- 7 明茶褐色土 黄灰色シルトブロック含む。

(掘り方)

- 8 暗褐色土 大粒のロームブロック含む。
- 9 褐色土 ローム粒多く含む。
- 10 黄褐色土 ロームブロック含む。

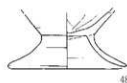


(竈覆土)

- 1 3号住居-2層
- 2 明茶褐色土 黄灰色シルトブロックと焼土。竈天井部
- 3 黒色土 炭化物、灰層。
- 4 黄色土 ロームと粘土混じり層。竈袖部。
- 5 黄褐色土 焼土、灰、ローム含む。竈燃床部

(竈掘り方)

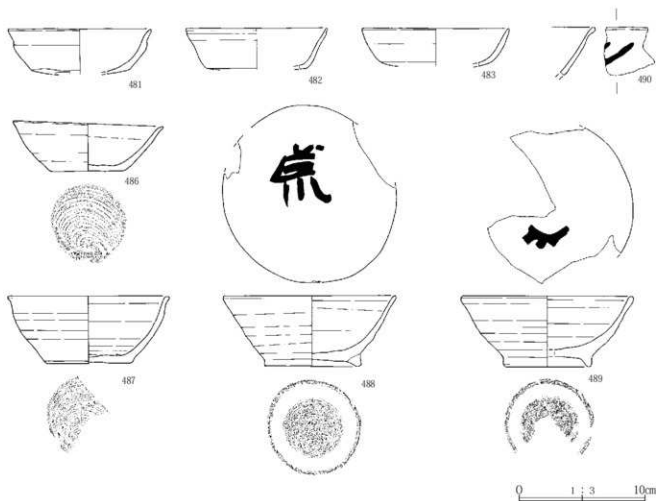
- 6 住居-8層に同じ。
- 7 住居-10層に同じ。
- 8 褐色土 焼土、炭化物含む。



0 1 : 30 1m

0 1 : 3 10m

第182図 3区3号住居



第183図 3区3号住居出土遺物

埋没する。また、5層(褐色土)・7層(明茶褐色土)はいわゆる三角堆積であり、6層(明褐色土)は土葺き材の可能性を有する。

**構造** [竪穴] 上述のように本住居は、西部が調査区外にあるため全容を確認できなかったが、残存部から推して、竪穴は隅丸方形様のプランを呈するものと想定される。主軸方向はN87°Wを向く。

**[掘り方・床]** 中～南部にかけて、深さ13cm以下を測る掘り込を伴うローム多く含む褐色土など、更にローム含む暗褐色土で埋め戻して、床面を造る。

**[竈]** 竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN81°Wを向く。径70×80cm程、深さ10cm程を測る連筒形プランの掘り方を有し、これをロームを含む暗褐色土や黄褐色ロームで埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、左袖は地山を掘り残した上に、ロームと粘土を混ぜた黄色土で作られている。天井部の構造は確認できなかったが、燃焼部の奥に燃焼面より16cm高

く段差を作って煙道が設けられている。

[柱穴・貯蔵穴] 柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。

[上屋] 棟方向は、特定できなかった。

**遺物** 杯(481～483)・台付甕(484)・甕(485)などの土師器と、杯(486・487)・椀(488～489)を含む須恵器が出土した。

なお、本住居と1号住居のいずれに属するか峻別できなかった遺物に、土師器甕(472)がある。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

#### 5. 4号住居(第184・185図、PL.64・90)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。

本住居は近隣の住居と軸線方位が異なる。

**位置** 本住居は3区北西部にあり、234～238-298～

302グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

**規模** 長軸：343cm 短軸：230cm 深さ：10cm

**竈** 幅：108cm 奥行き：93cm

左袖 幅：39cm 長さ：30cm 高さ：8cm

右袖 幅：30cm 長さ：35cm 高さ：6cm

燃焼部 幅：56cm 奥行：75cm 深さ：2cm

**貯蔵穴** 径：(70)×(53)cm 深さ：25cm

**覆土** 暗茶褐色土で埋没する。いわゆる三角堆積などは確認できなかった。

**構造** [竪穴]竪穴は縦長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN57°Eを向く。

[掘り方・床]本住居は南西部の広い範囲と、竈前に土坑状の掘り込を有する掘り方を有し、これを茶褐色土で埋め戻して、床面を造る。

[竈]竈は北東壁中央や北西寄りに設けられ、その方位はN55°Eを向く。

土坑状の掘り込を伴う掘り方を有し、これを若干の焼土と炭化物を含む明褐色土で埋め戻して燃焼面を作っている。

左右に袖が残るが、袖は若干の焼土と炭化物を含む明褐色土で作られる。燃焼部の形態から袖は壊されて短くなっているものと判断される。

天井部や煙道を確認することはできなかった。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は、住居南西隅にあり、楕円形プランを呈し、掘削形態は椀形で平底である。

[上屋]棟方向は、竪穴の直交する径の比較から、北東―南西方向を向くものと推定される。

**遺物** 杯(491・492)・小型甕(493)・甕(494～496)を含む土師器と、僅かな量の須恵器片が出土した。なお、494～496は貯蔵穴からの出土である。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、6世紀前半の所産と判断される。

#### 6. 5号住居(第177・186・187図、PL.65・91)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。

**位置** 本住居は3区中北部にあり、233～237-256～260グリッドに位置する。

**重複** 本住居は2号掘立柱建物、8号溝、27号土坑と重複する。いずれの遺構に対しても本住居の方が新しい。

**規模** 長軸：375cm 短軸：335cm 深さ：20cm

**竈** 幅：115cm 奥行き：90cm

左袖 幅：31cm 長さ：40cm 高さ：16cm

右袖 幅：42cm 長さ：76cm 高さ：10cm

燃焼部 幅：46cm 奥行：82cm 深さ：2cm

煙道 幅：41cm 奥行：11cm 高さ：4cm

**貯蔵穴** 径：58×55cm 深さ：21cm

**覆土** 焼土粒・炭化物を含む暗茶褐色土で埋没する。いわゆる三角堆積などは確認できなかった。

**構造** [竪穴]竪穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN83°Eを向く。

[掘り方・床]本住居は幅56～84cm、深さ5cmを測る周溝状の掘り込を有する掘り方を有し、これをローム粒主体の黄茶褐色土で埋め戻して、床面を造る。

[竈]竈は東壁中央や南寄りに設けられ、その方位はN88°Eを向く。

径54×44cm、深さ1cmを測る土坑状の掘り方を有し、これを、ロームを多く含む茶褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、袖は灰、粘土混じりの褐灰色土で作られる。

天井部を確認することはできなかった。

煙道部は燃焼部の奥に、燃焼面より5cm高い位置を掘削して掘られ、幅45cm以下、長さ12cm程を測る。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

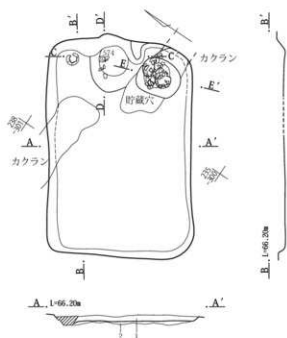
[貯蔵穴]貯蔵穴は住居南西隅にあり、隅丸長方形プランを呈し、壁面を掘削して掘られる。掘削形態は椀形で丸底を呈する。

[上屋]棟方向は、竪穴の直交する軸の比較から、略南北方向を向くものと推定される。

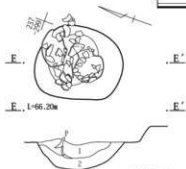
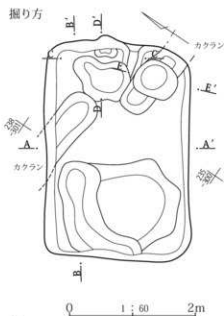
**遺物** 杯(497～506)・台付甕(507)・小型甕(508)・甕(500)を含む土師器と、杯(510・511)・皿(512)を含む少量の須恵器片が出土している。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

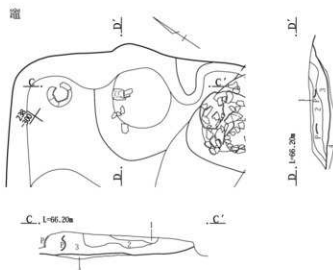
なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。



- (住居覆上)  
 1 暗茶褐色粘質土 少量のローム粒と炭化物含む。土。  
 (住居掘り方)  
 2層 茶褐色土 少量の炭化物。

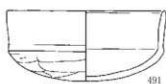


- (貯蔵穴)  
 1層 暗褐色粘質土焼土粒含む。  
 2層 褐色粘質土。

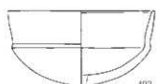


- (竈覆上)  
 1 灰褐色土 灰、焼土粒、炭化物含む。  
 2 赤褐色土 灰、焼土粒、炭化物多い。  
 3 明褐色土 若干の焼土、炭化物含む。  
 (竈掘り方)  
 4 暗茶褐色土 若干の焼土、炭化物含む。

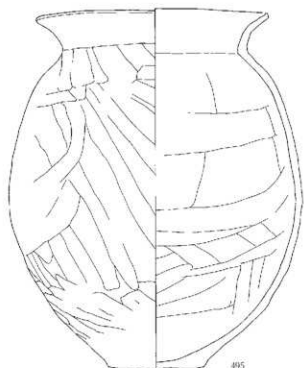




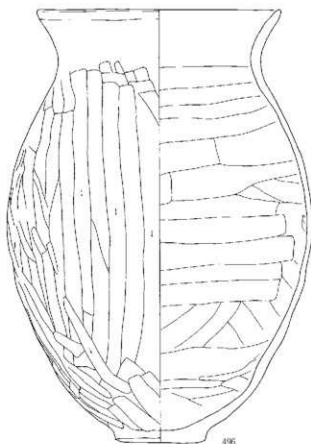
491



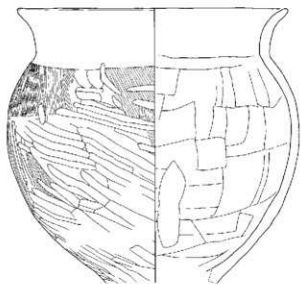
492



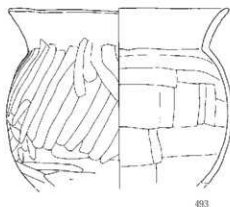
495



496



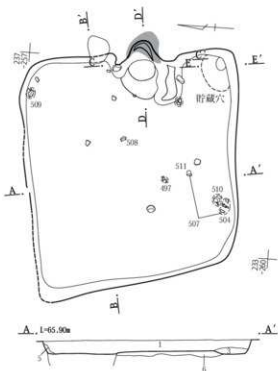
494



493

0 1 : 3 10cm

第185図 3区4号住居出土遺物

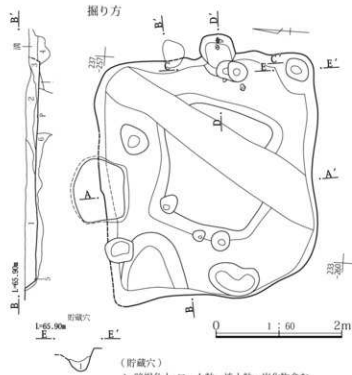


(住居覆土)

- 1 暗茶褐色粘質土 焼土粒、炭化物含む。
- 2 明茶褐色土 焼土粒、炭化物多く含む。
- 3 褐色土 焼土粒、炭化物少量含む。
- 4 暗褐色土 焼土がブロック状に入る。
- 5 茶褐色土 地山崩落土。

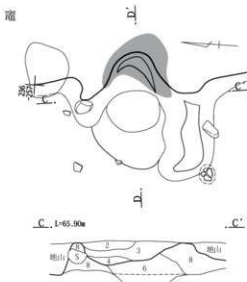
(掘り方)

- 6 黄茶褐色土 ローム粒主体。



(貯蔵穴)

- 1 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物含む。

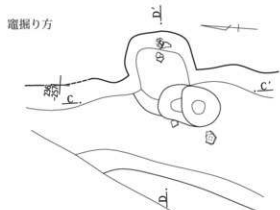


C, 1=65.90m



(竈覆土)

- 1 茶褐色土 焼土粒、炭化物少量含む。
- 2 暗茶褐色土 焼土ブロック、炭化物含む。
- 3 黒色土 焼土ブロック、炭化物含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 5 明茶褐色土 焼土粒、炭化物少量含む。



(竈掘り方)

- 6 茶褐色土 ロームブロック多く含む。
- 7 黄褐色土 ローム崩落土。
- 8 褐灰色土 灰、粘土混じり。竈袖部。

第186図 3区5号住居

7. 7号住居(第177・188・189図, PL.65)

概要 本住居は竈付の壁穴住居である。

住居の緑が2面13号溝に切られて、確認できない。

位置 本住居は3区中北部にあり、224～228-254～258グリッドに位置する。

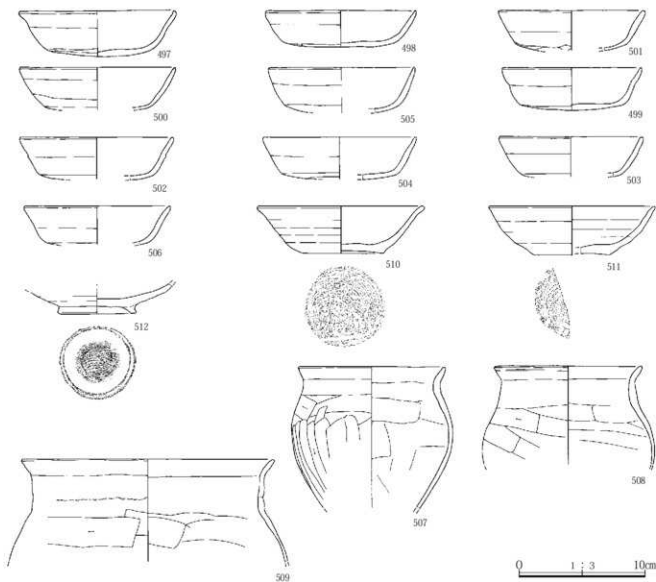
重複 本住居は1号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

規模 長軸:833cm 短軸:(290)cm 深さ:14cm

竈幅:108cm 奥行き:96cm

燃焼部 幅:79cm 奥行き:81cm 深さ:-cm





第187図 3区5号住居出土遺物

**貯蔵穴** 径：56×54cm 深さ：24cm

**覆土** 暗灰色粘土・焼土粒・炭化物を含む暗褐色土で埋没する。2層土(褐色土)はいわゆる三角堆積である。

**構造** [竪穴]竪穴は横長の隅丸長方形様のプランを呈し、主軸方向はN85°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は東壁の半ばから北壁東半部にかけて、幅26～41cm、深さ5cm以下を測る周溝状の掘り込を有し、北東部を除く広い範囲で、深さ10cm、以下を測る掘り込を伴う掘り方を有し、これを、ロームブロックを含む茶褐色土で埋め戻して、床面を造る。

[竈]竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN75°Wを向く。

径85×80cm、深さ13cmを測る、楕円形様のプランを呈する掘り込を伴う掘り方を有し、これを、焼土、炭化物

を含む暗褐色土などで埋め戻して燃焼面を作る。

袖や天井部を確認することはできなかった。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は住居南東隅にあり、隅丸方形プランを呈する。掘削形態は掘鉢形で、底面は尖底状を呈する。

[上屋]棟方向は、竪穴の直交する径の比較から、略東西方向を向くものと推定される。

**遺物** 杯(513～519)・甕(520～522)を含む土師器と、椀(524)・皿(525)を含む少量の須恵器片が出土し、その他、土錘(523)も出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。



(住居覆土)

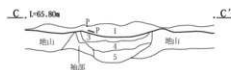
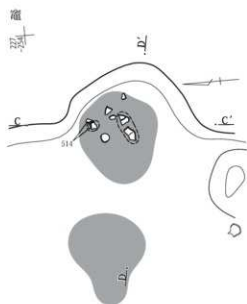
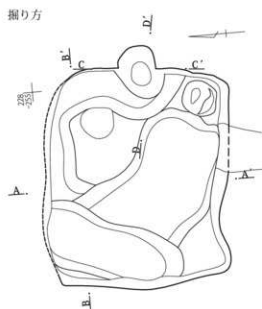
- 1 暗褐色粘質土 暗灰色粘土ブロック、焼土粒、炭化物含む。
- 2 褐色粘質土 炭化物、暗灰色粘土ブロック含む。
- (住居掘り方)
- 3 茶褐色土 ロームブロック、As-C軽石少量含む。



貯蔵穴  
1.65.90m  
E

(貯蔵穴)

- 1 暗茶褐色土 炭化物、ローム粒含む。

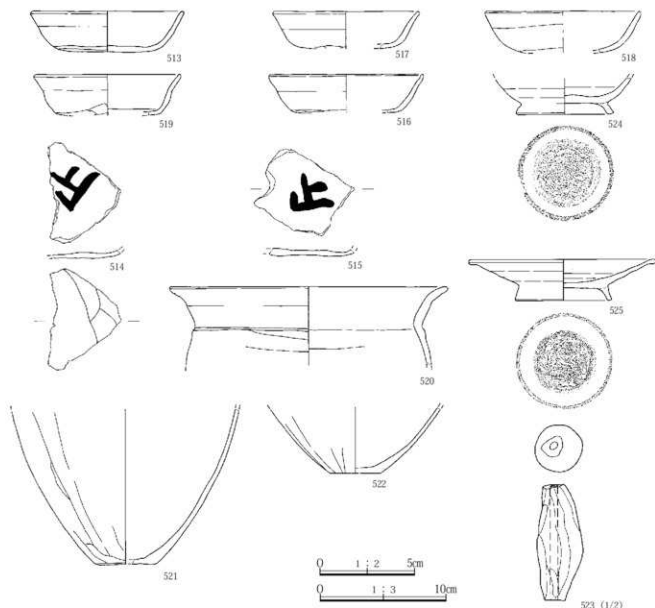


(竈)

- 1 暗茶褐色土 焼土、炭化物多い。
- 2 茶褐色土 若干の焼土粒、炭化物含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 4 褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- (掘り方)
- 5 茶褐色土 ローム粒多い。
- 6 黄褐色土 ローム粒と黄褐色土の混土。竈袖部。



第188図 3区7号住居



第189図 3区7号住居出土遺物

8. 8号住居(第177・190・191図、PL.66・91)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。北西側の広い範囲で、壁が失われていた。

**位置** 本住居は3区中北部にあり、232～235-248～252グリッドに位置する。

**重複** 本住居は他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：356cm 短軸：348cm 深さ：13cm

**竈** 幅：108cm 奥行き：93cm

左袖 幅：38cm 長さ：50cm 高さ：8cm

右袖 幅：37cm 長さ：53cm 高さ：11cm

燃焼部 幅：36cm 奥行：85cm 深さ：4cm

貯蔵穴 径：80×42cm 深さ：15cm

**覆土** 焼土粒・炭化物を含む茶褐色土などで埋没する。

いわゆる三角堆積などは確認できなかった。

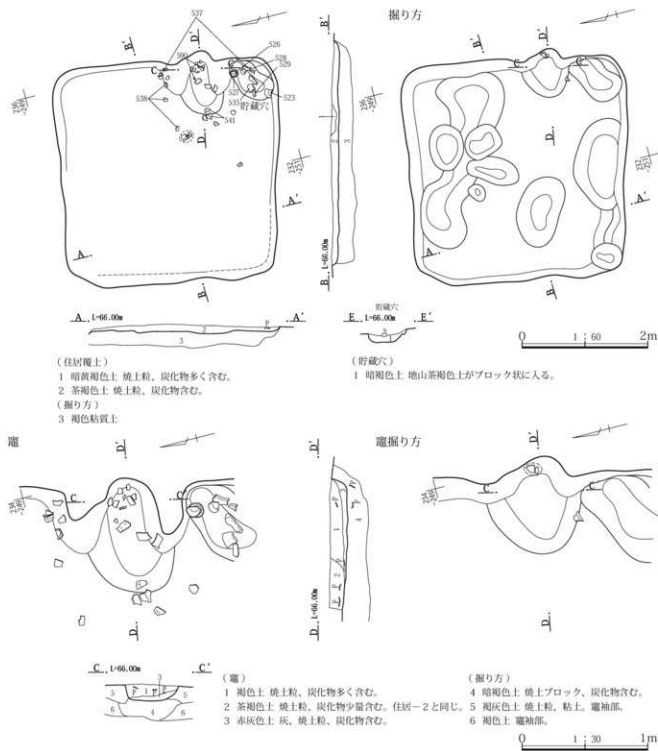
**構造** [竪穴]竪穴は隅丸方形のプランを呈し、主軸方向はN78°Eを向く。

[掘り方・床]本住居は深さ9cm以下を測る土坑状の掘り込が多数見られる掘り方を有し、これを褐色粘質土で埋め戻して床面を造る。

[竈]竈は東壁南寄りに設けられ、その方位はN79°Eを向く。

径75×64cm、深さ2cmを測る、楕円形様プランを呈する浅い掘り方を有し、これを、焼土ブロック、炭化物を含む暗褐色土などで埋め戻して燃焼面を作る。

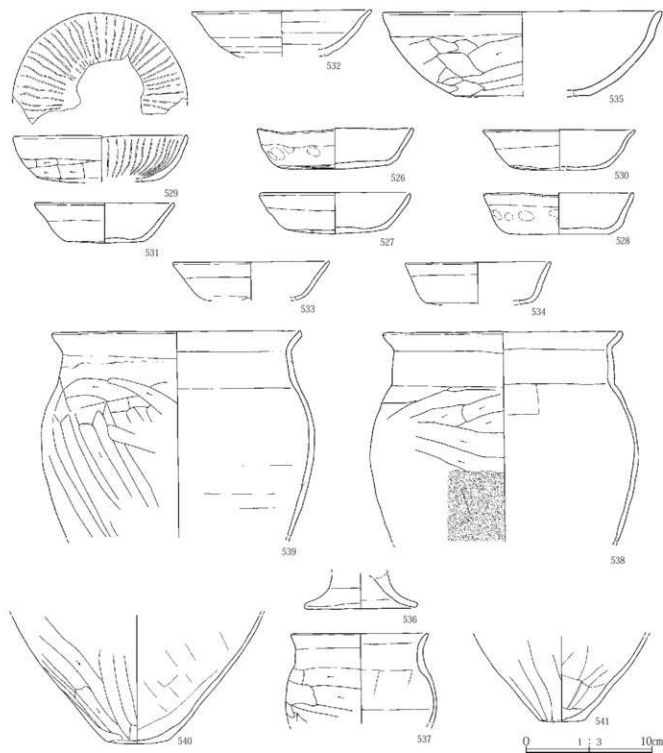
袖は左右に確認され、下位に褐色土、上位に焼土粒、粘土を含む褐灰色土で作られている。



第190図 3区8号住居

天井部や煙道を確認することはできなかった。  
 [柱穴] 柱穴は確認できなかった。  
 [貯蔵穴] 貯蔵穴は住居南東隅にあり、四角形プランを呈する。掘削形態は箱形で、平底を呈する。  
 [上屋] 棟方向を想定することはできなかった。  
**遺物** 杯(526～534)・大型杯(535)・台付甕(536)・小

型甕(537)・甕(538～541)を含む土師器と、少量の須恵器片が出土した。  
**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。  
 なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。



第191図 3区8号住居出土遺物

9. 9号住居(第177・192・193図、PL.66・91・92)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。南側が試掘トレンチに切られて確認できなかった。

**位置** 本住居は3区中北部にあり、228～231-249～254グリッドに位置する。

**重複** 本住居は14号住居、1号掘立柱建物と重複する。このうち14号住居より本住居は古いが、1号掘立柱建物

との新旧関係特定することはできなかった。

**規模** 長軸：455cm 短軸：(263)cm 深さ：23cm

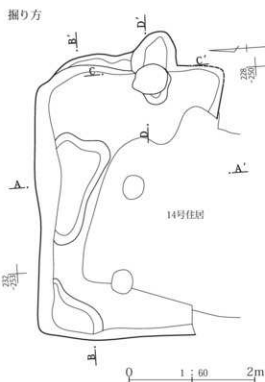
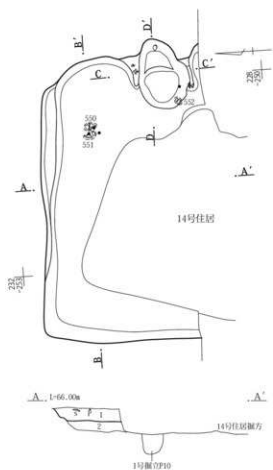
**竈** 幅：104cm 奥行き：115cm

左袖 幅：29cm 長さ：54cm 高さ：10cm

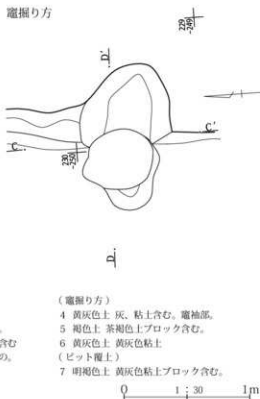
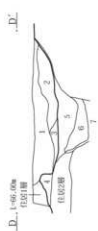
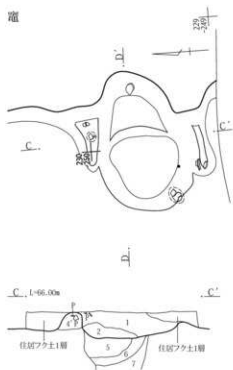
右袖 幅：26cm 長さ：54cm 高さ：5cm

燃焼部 幅：55cm 奥行き：62cm 深さ：4cm

**覆土** 焼土粒・炭化物を含む暗褐色土で埋没する。いわ



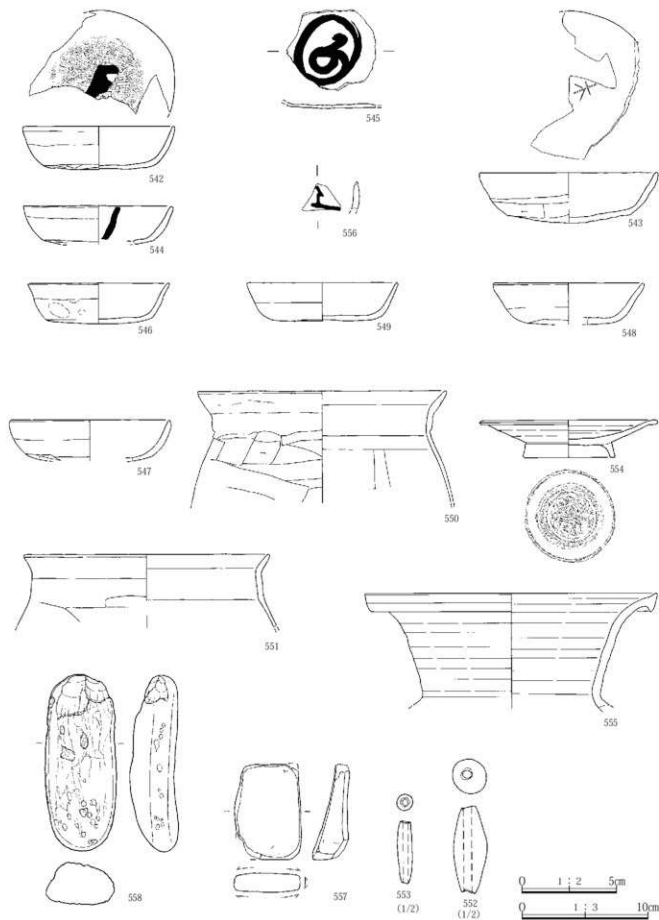
- (住居覆土)  
 1 暗褐色粘質土 焼土粒、炭化物、若干のAs-C含む。  
 (掘り方)  
 2 暗褐色土 茶褐色土ブロック入る。



- (竈覆土)  
 1 褐色土 焼土粒、炭化物含む。  
 2 赤化色土 焼土粒、炭化物多く含む。  
 3 灰褐色土 灰、焼土粒、炭化物多く含む  
 4\* 黄灰色土 竈袖粘土が流出したもの。

- (竈掘り方)  
 4 黄灰色土 灰、粘土含む、竈袖部。  
 5 褐色土 茶褐色土ブロック含む。  
 6 黄灰色土 黄灰色粘土  
 (ピット覆土)  
 7 明褐色土 黄灰色粘土ブロック含む。

第192図 3区9号住居



第193図 3区9号住居出土遺物

ゆる三角堆積などは確認できなかった。

**構造** [竪穴] 上述のように、南部が確認できなかったため、全容は確認できなかったが、竪穴は隅丸方形様のプランを呈するものと思慮される。主軸方向はN87°Eを向く。

[掘り方・床] 本住居は掘り方を有し、これを暗褐色土などで埋め戻して床面を造る。

[竈] 竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN82°Eを向く。

径(44)×108cmを測る掘り方を有し、褐色土などで埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、袖は灰、粘土を含む黄灰色土で作られる。

天井部、煙道部は確認できなかった。

[柱穴] 柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴] 貯蔵穴は住居南東隅にあるが、残存部分が少なく、形態などを確認することはできなかった。

[上屋] 棟方向を想定することはできなかった。

**遺物** 杯(542～549・556)・甕(550・551)を含む土師器と、皿(554)・甕(555)を含む少量の須恵器片、及び土師(552・553)、砥石(557)、叢石(558)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第2四半期の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

#### 10. 10号住居(第194・195図、PL.67・92)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。

**位置** 本住居は3区北東部西寄りにあり、229～232・231～234グリッドに位置する。

**重複** 本住居は11・16号住居と重複するが、16号住居よりは新しいものの、11号住居との新旧関係は、遺構の上では特定できなかった。

**規模** 長軸：306cm 短軸：284cm 深さ：18cm

**竈** 幅：80cm 奥行き：87cm

**左袖** 幅：28cm 長さ：(50)cm 高さ：13cm

**右袖** 幅：31cm 長さ：47cm 高さ：12cm

**燃焼部** 幅：24cm 奥行：72cm 深さ：—cm

**貯蔵穴** 径：57×47cm 深さ：26cm

**覆土** 暗茶褐色土で埋没する。2層土(茶褐色土)の一部

が三角堆積を形成する。

**構造** [竪穴] 竪穴は隅丸方形プランを呈し、主軸方向はN87°Eを向く。

[掘り方・床] 土坑状の掘り込が散見される掘り方を有しており、これを茶褐色土などで埋め戻して、床面を造っている。

[竈] 竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN86°Eを向く。

掘り方を有し、これを、焼土粒、灰、炭化物を含む灰色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、袖は暗灰色粘土で作られる。

天井部、煙道部は確認できなかった。

[柱穴] 柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴] 貯蔵穴は住居南東隅にあり、円形様のプランを呈し、箱形の掘削形態を呈し、平底を呈する。

[上屋] 棟方向を想定することはできなかった。

**遺物** 杯(560・561)・甕(562)を含む土師器と、少量の須恵器片と、紡錘車と思われる石製品(563)が出土している。また、11号住居出土遺物との峻別のできなかった遺物に、少量の土師器片や、椀(564)を含む少量の須恵器片が出土している。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

#### 11. 11号住居(第196・197図、PL.67・92)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。

**位置** 本住居は3区北東部西寄りにあり、232～235・230～234グリッドに位置する。

**重複** 本住居は10・16号住居と重複するが、16号住居よりは新しいものの、10号住居との新旧関係は、遺構の上では特定できなかった。

**規模** 長軸：345cm 短軸：270cm 深さ：36cm

**竈** 幅：86cm 奥行き：133cm

**左袖** 幅：22cm 長さ：44cm 高さ：12cm

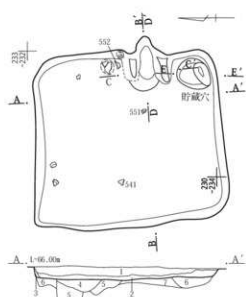
**右袖** 幅：21cm 長さ：30cm 高さ：19cm

**燃焼部** 幅：41cm 奥行：78cm 深さ：6cm

**煙道** 幅：48cm 奥行：14cm 深さ：7cm

**覆土** 焼土粒・炭化物を含む暗褐色粘質土や褐色土などで埋没する。地山崩落層である5層(茶褐色土)がいわゆる三角堆積である。





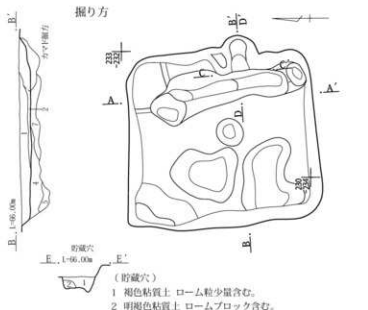
(住居層上)

- 1 暗茶褐色粘質土 焼土粒、炭化物少量含む。
- 2 茶褐色砂質土 ローム粒含む。
- 3 明茶褐色土 地山の崩落土。

(掘り方)

- 4 黒褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 5 明茶褐色土 ローム粒多い。
- 6 茶褐色土 ローム粒多い、炭化物、焼土含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロック多い。

※ 4から掘り方。



(貯蔵穴)

- 1 褐色粘質土 ローム粒少量含む。
- 2 明褐色粘質土 ロームブロック含む。

0 1 : 60 2m



(竈覆土)

- 1 住居-1層に同じ。
- 2 褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒、炭化物多く含む。



(袖)

- 4 暗灰色粘土 竈袖構築材。
- 5 茶褐色土 地山を利用した竈袖部。

(掘り方)

- 6 灰色土 焼土粒、灰、炭化物を含む。
- 7 赤褐色土 焼土粒、ロームブロック、竈天井部崩落土。
- 8 暗黄褐色土 焼土粒、ロームブロック、竈天井部崩落土。

0 1 : 30 1m

第194図 3区10号住居

構造 [竈穴]竈穴は縦長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN89°Eを向く。

[掘り方・床]本住居は西壁と南北両壁西部に見られる幅45cm、深さ5cm程を測る周溝状のものを含む掘り込もを伴う掘り方を有し、これをロームの多い黄褐色土などで埋め戻して床面を造る。

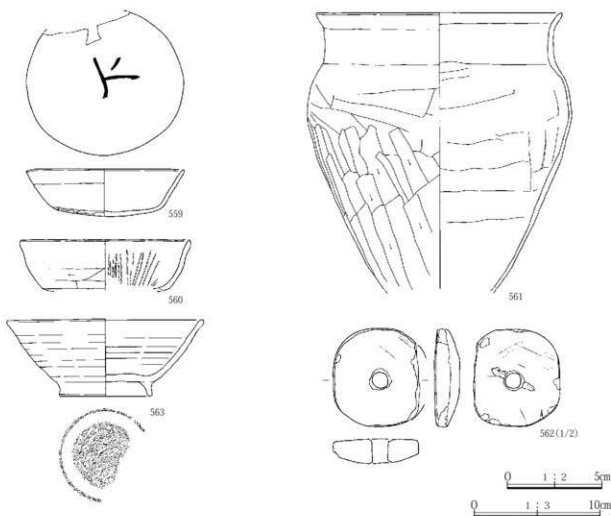
[竈]竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN

89°Eを向く。

径66×62cm、深さ19cmを測る土坑状の掘り込を伴う掘り方を有し、これを、焼土粒、灰、炭化物を含む灰色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、住居壁際は地山の掘り残して作られる。

天井部は確認できなかった。



第195図 3区10号住居(・11号住居)出土遺物

煙道部は燃焼面より17cm高い位置から、緩傾斜に掘削される。

〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

〔上屋〕棟方向は、竪穴の直交する径の比較から、略東西方向を向くものと推定される。

**遺物** 杯(565～573・580～582)・甕(574)を含む土師器と、杯(575)・椀(576)・皿(577)・杯蓋(578)を含む少量の須恵器と、土鍾(579)の出土が見られた。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

## 12. 12号住居(第198図、PL.68・92)

**概要** 本住居は竪付の竪穴住居である。

**位置** 本住居は3区中北部にあり、228～231-229～231グリッドに位置する。

**重複** 本住居は16号住居と重複するが、新旧関係は、遺構の上では特定できなかった。

**規模** 長軸：250cm 短軸：196cm 深さ：13cm

**竪** 幅：73cm 奥行き：79cm

**左袖** 幅：24cm 長さ：18cm 高さ：7cm

**右袖** 幅：14cm 長さ：23cm 高さ：5cm

**燃焼部** 幅：35cm 奥行：51cm 深さ：6cm

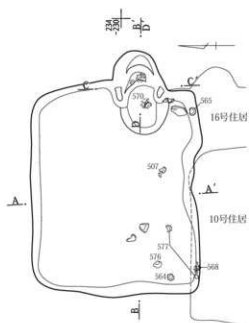
**煙道** 幅：52cm 奥行：16cm 深さ：2cm

**貯蔵穴** 径：68×53cm 深さ：9cm

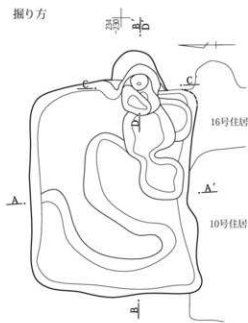
**覆土** 焼土・ローム粒含む暗茶褐色粘質土で埋没する。いわゆる三角堆積などは確認できなかった。

**構造** 〔竪穴〕竪穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN87°Eを向く。

第3章 発見された遺構と遺物



掘り方



(住居覆上)

- 1 褐色粘質土 ローム粒、焼土粒、炭化物含む。
- 2 明褐色粘質土 焼土粒、炭化物含む。ロームブロック混入。
- 3 黒褐色粘質土 炭化物、灰含む。

4 暗褐色粘質土 焼土粒、炭化物含む。

5 茶褐色土 地山崩落土。

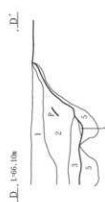
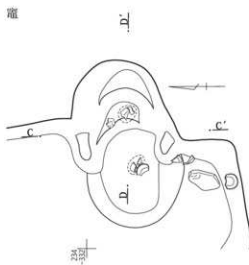
(掘り方)

6 褐色土 ロームブロック径3~4cm含む。

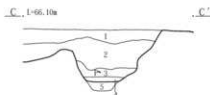
7 黄褐色土 ローム多い。

0 1:60 2m

竈



竈掘り方



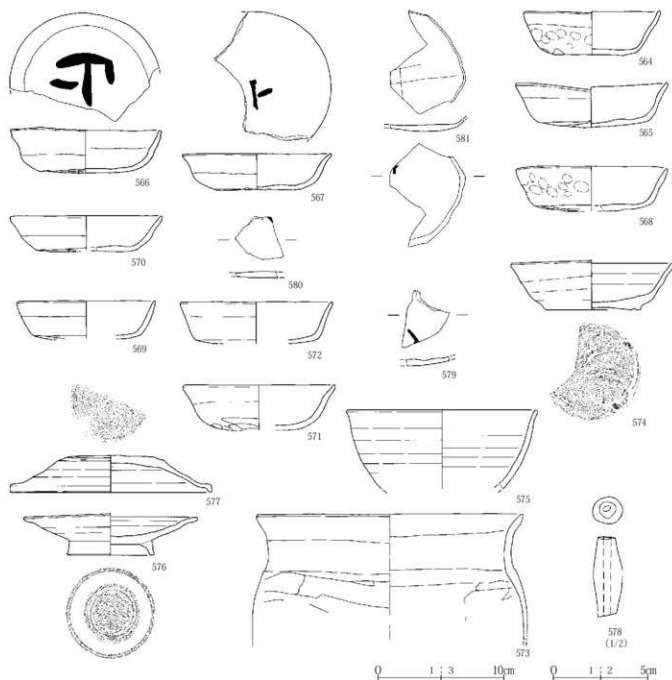
(竈覆上)

- 1 住居1層に同じ。
- 2 赤褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 3 黒褐色土 炭化物、灰含む。住居3と同じ。
- 4 暗赤褐色土 焼土、炭化物多く含む。

(竈掘り方)

5 灰色土 灰、焼土粒、炭化物含む。

第196図 3区11号住居



第197図 3区11号住居出土遺物

〔掘り方・床〕本住居は深さ36cm以下の土坑状の掘り込が散見される掘り方を有し、これをローム粒を多く含む黄褐色土や焼土粒や炭化物を含む暗褐色土で埋め戻して、床面を造る。

〔竈〕竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN87°Wを向く。

径40×36cm、深さ8cmを測る土坑状の掘り込を含む掘り方を有し、これを、焼土粒や炭化物を含む暗褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、掘り残しの地山の上にローム粒を

含む茶褐色土で作られる。

天井部を確認することはできなかった。

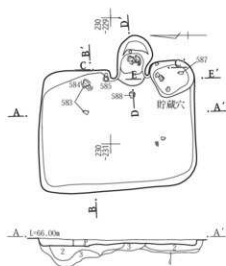
煙道部は燃焼面から9cm上から奥側に、緩傾斜に掘り込んで作られている。

〔柱穴〕柱穴は確認できなかった。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は住居南西隅にあり、隅丸方形プランを呈し、壁面を掘削して掘られる。掘削形態は椀形で丸底を呈する。

〔上屋〕棟方向は、竈穴の直交する径の比較から、略南北方向を向くものと推定される。

第3章 発見された遺構と遺物



(住居覆上)

1 暗茶褐色粘質土 焼土粒、ローム粒含む。

2 暗褐色土 焼土粒、炭化物含む。

3 明茶褐色土ローム粒多く含む。

4 黄褐色土 ローム硬化面。



(貯蔵穴)

1 茶褐色土 焼土粒、炭化物少量含む。



(罐覆上)

1 明褐色土 焼土粒、炭化物多く含む。

2 褐色土 焼土粒、炭化物少量含む。

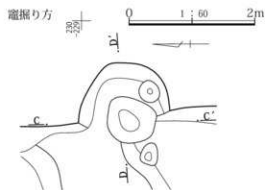
(罐掘り方)

3 暗褐色土 焼土粒、炭化物含む。

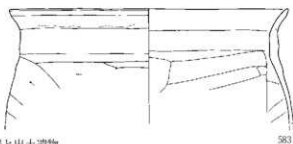
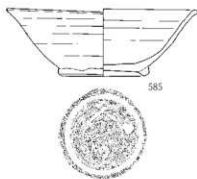
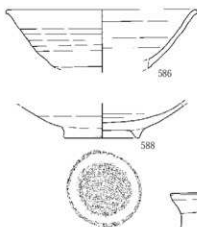
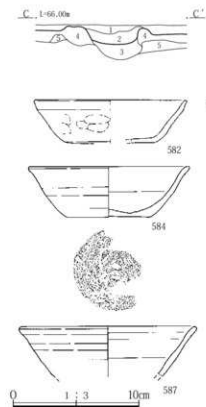
4 茶褐色土 ローム粒含む。罐袖部。

(地山)

5 茶褐色土



0 1:60 2m



第198図 3区12号住居と出土遺物

**遺物** 杯(582)・甕(583)を含む土師器と、椀(584～587)・皿(588)を含む須恵器が少量が出土している。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

### 13. 13号住居(第199・200図、PL.68・92・93)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。北東隅部の壁面が2面の13号土坑に切られている。

**位置** 本住居は3区中北部にあり、229～233-226～229グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独であり、3面の他の遺構との重複は無かった。

**規模** 長軸：380cm 短軸：296cm 深さ：29cm

**竈** 幅：92cm 奥行き：109cm

左袖 幅：42cm 長さ：38cm 高さ：26cm

右袖 幅：32cm 長さ：44cm 高さ：23cm

燃焼部 幅：21cm 奥行：58cm 深さ：4cm

煙道 幅：41cm 奥行：40cm 深さ：13cm

貯蔵穴 径：96×72cm 深さ：16cm

**覆土** 焼土・炭化物・ローム粒含む暗褐色粘質土で埋没する。2層土(暗茶褐色粘質土)がいわゆる三角堆積である。

**構造** [竪穴]竪穴は横長の隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN88°Eを向く。

[掘り方・床]本住居は32～86cm、深さ8cm以下を測る周溝状の掘り込が、壁際、あるいは壁から60cm以下離れて掘削される掘り方を有し、これを焼土や炭化物を含む褐色土の上に、焼土粒含む茶褐色土で埋め戻して床面を造る。

[竈]竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN89°Eを向く。

径70×42cm、深さ21cmを測る土坑状の掘り込を含む掘り方を有し、これを、ロームブロックの多い褐色土燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、袖は外側にローム粒・炭化物含む暗茶褐色土、燃焼部側に灰色粘質土を置き、その上に褐色粘質土を乗せて作っている。

天井部を確認できなかった。

煙道部は燃焼面から10cm上から奥側に、緩斜に掘り込んで作られる。煙道底面は幅12cmと細長い。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は住居南東隅にあり、隅丸方形のプランを呈して掘削される。掘削形態は箱形を呈し、平底を呈する。[上屋]棟方向は、竪穴の直交する径の比較から、略南北方向を向くものと推定される。

**遺物** 比較的量の多い杯(589～594・603)・甕(595・596)を含む土師器や杯(597・598)・椀(599～601)・甕(602)を含む須恵器、砥石(604)が出土している。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀第3四半期の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

### 14. 14号住居(第201・202図、PL.69・93)

**概要** 本住居は竈付の小型の竪穴住居である。

**位置** 本住居は3区中北部にあり、227～231-250～253グリッドに位置する。

**重複** 本住居は9号住居、1号掘立柱建物と重複するが、両遺構より本住居の方が新しい。

**規模** 長軸：310cm 短軸：290cm 深さ：25cm

**竈** 幅：88cm 奥行き：83cm

左袖 幅：22cm 長さ：32cm 高さ：11cm

右袖 幅：32cm 長さ：38cm 高さ：11cm

燃焼部 幅：36cm 奥行：59cm 深さ：6cm

煙道 幅：49cm 奥行：15cm 深さ：11cm

貯蔵穴 径：107×68cm 深さ：12cm

**覆土** 焼土・炭化物・ローム粒含む暗褐色土などで埋没する。いわゆる三角堆積などは確認されなかった。

**構造** [竪穴]竪穴は隅丸台形のプランを呈し、主軸方向はN75°Eを向く。

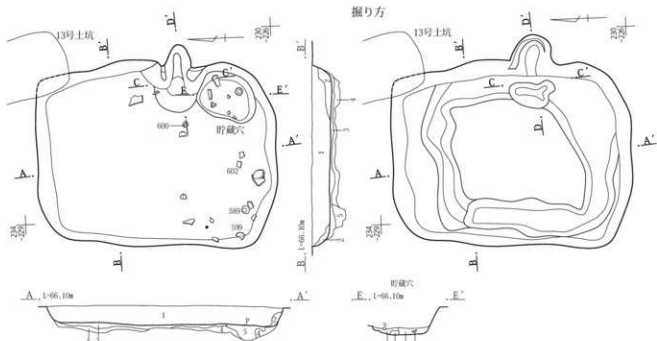
[掘り方・床]本住居は深さ7cm以下を測る土坑状の掘り込を有する掘り方を有し、これを焼土・炭化物・ローム明褐色土で埋め戻して床面を造る。

[竈]竈は東壁北寄りに設け、方位はN72°Wを向く。

径57×51cm、深さ9cmを測る、楕円形プランを呈する土坑状の掘り方を有し、これを、焼土粒や炭化物を含む褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、袖の構築方法は記録できなかった。

第3章 発見された遺構と遺物



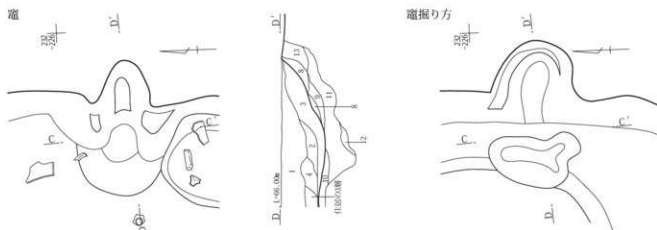
(住居覆土)

- 1 暗褐色粘質土 焼土粒、炭化物、ローム粒含む。
  - 2 暗茶褐色粘質土 ローム粒、炭化物含む。
- (掘り方)
- 3 茶褐色土 ローム粒を多く含む。
  - 4 黄褐色土 ローム粒多く含む。
  - 5 黒褐色粘質土 ロームブロック多い、炭化物含む。

(貯蔵穴)

- 1 暗茶褐色土 ローム粒、炭化物含む。
- 2 茶褐色土 ロームブロック含む。
- 3 茶褐色土 ロームブロック多く含む。

0 1 : 60 2m



(覆層上)

- 1 暗褐色土 焼土粒、炭化物、ローム粒含む。
- 2 暗黄褐色土 焼土ブロック含む。
- 3 茶褐色土 焼土粒含む。
- 4 褐色土 焼土ブロック、炭化物含む。

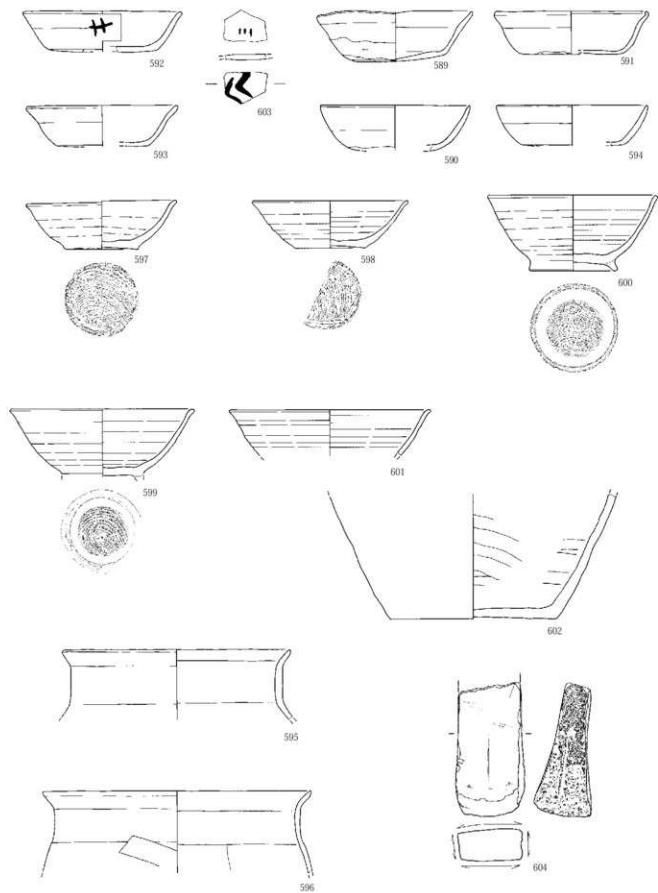
(袖構築材)

- 5 暗灰色粘質土。
- 6 灰色土粘質土。
- 7 暗茶褐色土 ローム粒、炭化物含む。

- 8 暗赤褐色土 焼土粒多い。
- 9 赤灰色土 焼土、灰混じり。
- 10 暗赤褐色土 炭化物、ローム粒含む。
- 11 褐色土 ロームブロック多い、地山が攪乱されたもの。
- 12 黄褐色土 ロームブロック多い、地山に近い。
- (地山)
- 13 茶褐色土 地山

0 1 : 30 1m

第199図 3区13号住居

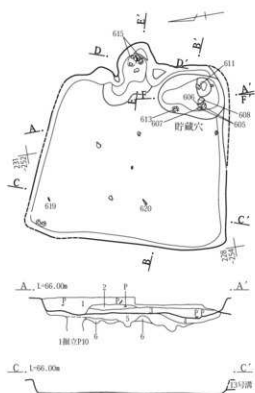


第200図 3区13号住居出土遺物

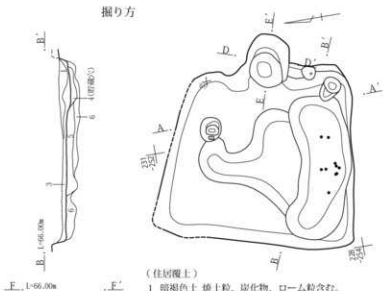
0 1 : 3 10cm



第3章 発見された遺構と遺物



掘り方



(住居覆土)

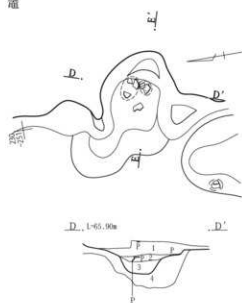
- 1 暗褐色土 焼土粒、炭化物、ローム粒含む。
- 2 暗灰色土 炭化物含む。灰色粘質土ブロック状に入る。
- 3 明褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物含む。灰色粘質土ブロック状に入る。

(掘り方)

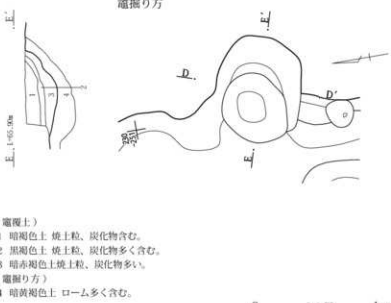
- 4 褐色土 炭化物、焼土粒少量含む。ロームブロック含む。
  - 5 明褐色土 焼土粒、炭化物、ロームブロック含む。
  - 6 黄褐色土 ロームブロック多く含む。
- ※ 4から住居掘り方。

0 1:60 2m

竈



竈掘り方



(竈覆土)

- 1 暗褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、炭化物多く含む。
- 3 暗赤褐色土 焼土粒、炭化物多い。

(竈掘り方)

- 4 暗黄褐色土 ローム多く含む。

0 1:30 1m

第201図 3区14号住居

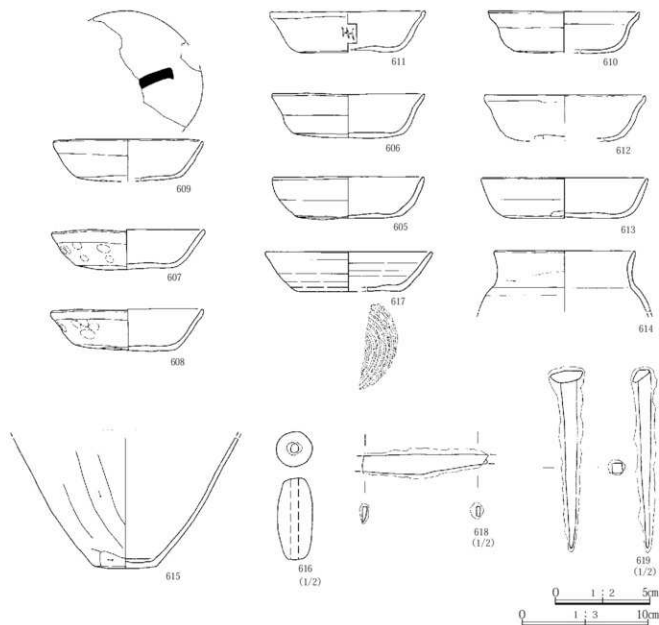
天井部を確認できなかった。

煙道部は燃焼面から4cm上から奥側に、緩傾斜に掘り込んで作られる。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は住居南東隅にあるが、南壁から竈右側の袖まで掘削されている。その形態は、隅丸方形様のプランを呈し、掘削形態は箱形を呈し、平底を呈する。

[上屋]棟方向は、想定できなかった。



第202図 3区14号住居出土遺物

**遺物** 杯(605～613)・小型甕(614)・甕(615)を含む比較的多くの土師器、杯(617)など、少量の須恵器、土錘(616)、刀子(618)、鉄釘(619)が出土する。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

#### 15. 15号住居(第203・204図, PL.69・93)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。2号住居の掘り方に検出された。

**位置** 本住居は3区北西部隅部にあり、240～242-302

～304グリッドに位置する。

**重複** 本住居は2号住居と重なってあるが、本住居の方が古い。

**規模** 長軸:282cm 短軸:212cm 深さ:25cm

**竈** 幅:90cm 奥行:82cm

**左袖** 幅:22cm 長さ:50cm 高さ:14cm

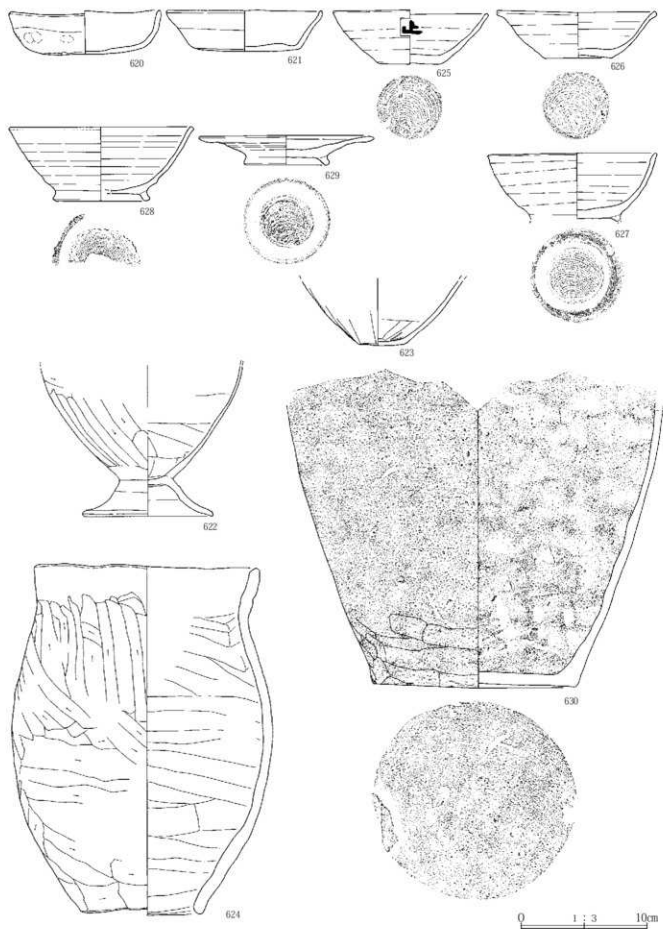
**右袖(掘り方)** 幅:34cm 長さ:49cm 高さ:11cm

**燃焼部** 幅:59cm 奥行:67cm 深さ:2cm

**貯蔵穴** 径:107×68cm 深さ:12cm

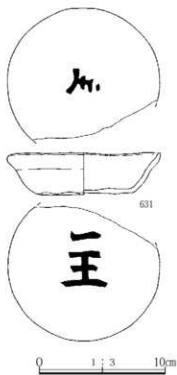
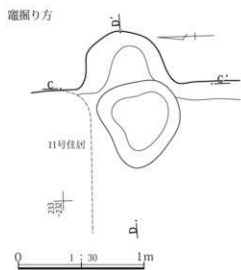
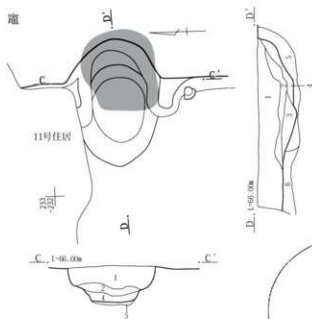
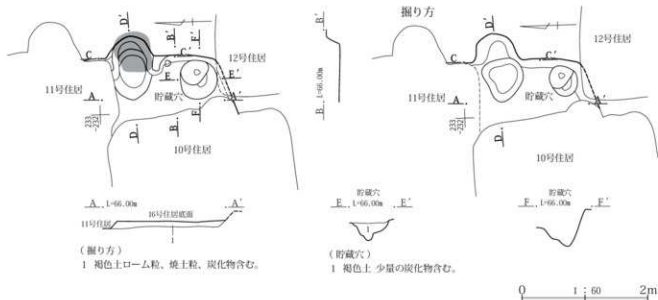
**覆土** 焼土ブロック、炭化物を含む黒褐色土や暗茶褐色粘質土で埋没する。3層土(明茶褐色土)がいわゆる三角堆積である。





第204図 3区15号住居出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

〔上屋〕棟方向は、竪穴の径の比較から、略東西方向と推定される。

遺物 杯(621・622)・台付甕(623)・甕(624)・甗(625)を含むやや少量の土師器や、椀(626～629)・皿(630)・甕(631)を含むやや多い須恵器が出土している。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性を有する。

第205図 3区16号住居と出土遺物

## 16. 16号住居(第205図、PL.70・94)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。重複する他住居と、一括で掘削されたため、竈、及び貯蔵穴付近を確認できたに過ぎなかった。

**位置** 本住居は3区北東部にあり、230～232-230～232グリッドに位置する。

**重複** 本住居は10・11・12号住居と重複するが、10・11号住居に対しては本住居の方が古い。なお、12号住居との新旧関係は、遺構の上では確認できなかった。

**規模** 残径：240×120cm 深さ：21cm

**竈** 幅：85cm 奥行き：102cm

**左袖** 幅：(13) cm 長さ：39cm 高さ：8 cm

**右袖** 幅：27cm 長さ：31cm 高さ：16cm

**燃焼部** 幅：43cm 奥行：70cm 深さ：9 cm

**貯蔵穴** 径：62×58cm 深さ：29cm

**覆土** 10・11号住居と一括で掘削したため、覆土の記録は残らなかった。

**構造** [竈穴]遺存が限定的であったため、竈穴の形状は確認できなかった。なお、主軸方向はN87°Eを向く。

[掘り方・床]本住居は掘り方を有するが、詳細は不明である。

[竈]竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN85°Eを向く。

径70×66cm、深さ9cmを測る隅丸三角形様のプランを呈する掘り方を有し、これを焼土粒、炭化物多く含む赤褐色土と、ローム粒、焼土粒、炭化物含む茶褐色土で埋め戻して、燃焼面を作っている。

左右に袖が残るが、構築材に関する記録は残すことはできなかった。

煙道部は燃焼面から10cm程高い位置に設けられ、底面は斜め上方へ上がる。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は住居南東隅部に掘削される。プランは楕円形様を呈し、掘削形態は掘鉢状で、底面は尖底を呈する。

[上屋]棟方向を想定することはできなかった。

**遺物** 少量の杯(631)を含む土師器や、僅かな量の須恵器片が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

## 17. 17号住居(第206・207図、PL.70・94)

**概要** 本住居は竈付の竈穴住居である。西壁と南壁の中・西部が1面の1号溝に壊されていたため、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本住居は3区南東部東壁近くにあり、200～203-211～216グリッドに位置する。

**重複** 本住居は、3面の他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：390cm 短軸：310cm 深さ：26cm

**竈** 幅：104cm 奥行き：79cm

**左袖** 幅：46cm 長さ：54cm 高さ：18cm

**右袖** 幅：25cm 長さ：31cm 高さ：19cm

**燃焼部** 幅：34cm 奥行：43cm 深さ：4 cm

**貯蔵穴** 径：63×45cm 深さ：23cm

**覆土** 褐色土などで埋没する。3層土(暗黄褐色土)がいわゆる三角堆積である。

**構造** [竈穴]全容は確認できなかったが、竈穴は縦長の隅丸長方形様のプランを呈し、主軸方向はN85°Wを向く。

[掘り方・床]本住居は、深さ13cm以下を測る土坑状の掘り込が散見される掘り方を有し、これをロームブロックや焼土粒、炭化物を含む黒褐色などで埋め戻して床面を造っている。

[竈]竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN80°Wを向く。

竈は浅い掘り方を有し、これをローム粒、焼土粒を多く含む褐色土で埋め戻して、燃焼面を作る。

左右に袖が残るが、暗灰色粘質土で構築される。

天井・煙道部は確認できなかった。

[柱穴]柱穴は確認できなかった。

[貯蔵穴]貯蔵穴は住居東壁際、南壁寄りに掘削される。洋梨形様のプランを呈し、掘削形態は箱形、平底である。

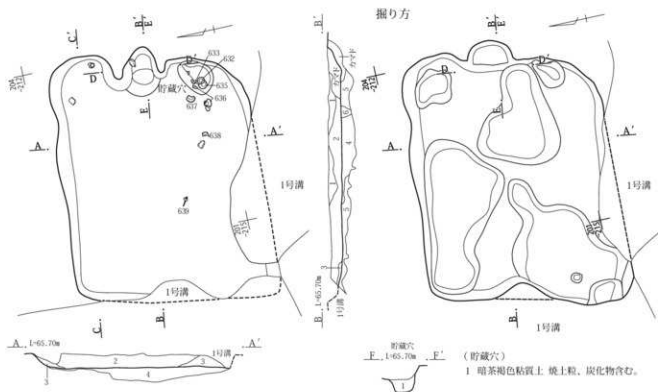
[上屋]棟方向は、竈穴の直交する径の比較から、略東西方向を向くものと推定される。

**遺物** 少量の杯(632・633)を含む土師器、椀(635～638)を含む須恵器、鉄製紡錘車(639・640)があった。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

なお、覆土に焼土や炭化物を含むことから、本住居はいわゆる焼失家屋の可能性が考慮される。

第3章 発見された遺構と遺物



(住居覆土)

- 1 黒褐色粘質土 焼土粒、炭化物、ロームブロック含む。
- 2 褐色粘質土 焼土粒、炭化物少ない、ローム粒含む。
- 3 暗黄褐色粘質土 ロームブロック多く含む。

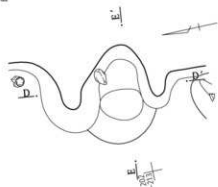
(掘り方)

- 4 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒、炭化物含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック多く含む。
- 6 茶褐色土 ローム粒多く含む。

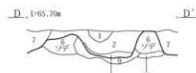
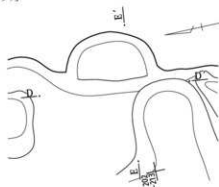


0 1:60 2m

竈



竈掘り方



(竈覆土)

- 1 暗灰色土 焼土粒、炭化物、灰多い。
- 2 黄灰色土 焼土粒、灰色粘質土。
- 3 黒灰色土 焼土粒、炭化物、灰多く含む。
- 4 赤褐色土 焼土。
- 5 黒色土 炭化物含む。

(住居覆土)

- 7 褐色土 焼土粒、炭化物少ない、住居2-層と同じ

(袖構素材)

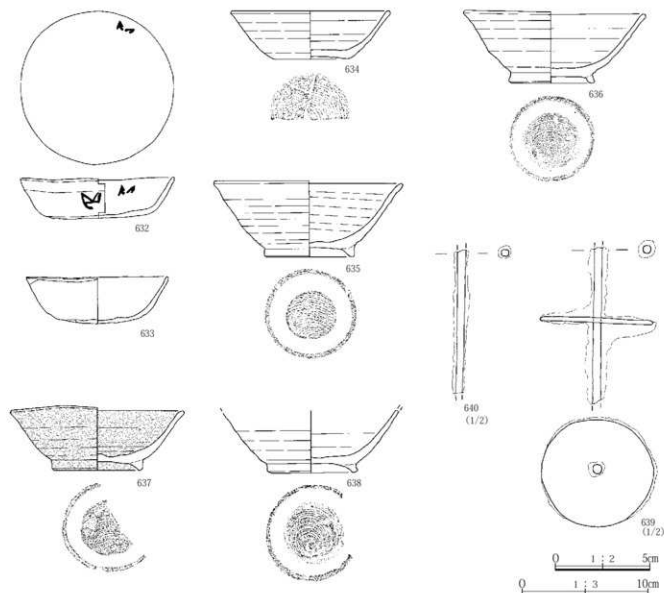
- 6 暗灰色土 粘質土、竈袖部。
- 10 茶褐色土 ローム粒含む。

(竈掘り方)

- 8 赤褐色土 竈床面、焼土多い。
- 9 褐色土 ローム粒、焼土粒多く含む。

0 1:30 1m

第206図 3区17号住居



第207図 3区17号住居出土遺物

## 18. 18号住居(第208・209図, PL.71・94)

**概要** 本住居は竈付の竪穴住居である。南東隅が1面の7号土坑によって壊されているため、当該部分を確認することはできなかった。

**位置** 本住居は、3区南東部東壁近くにあり、196～199-211～216グリッドに位置する。

**重複** 本住居は3面の他遺構との重複はなかった。

**規模** 長軸：458cm 短軸：260cm 深さ：20cm

**竈** 幅：(88)cm 奥行き：98cm

**左袖** 幅：30cm 長さ：67cm 高さ：6cm

**燃焼部** 幅：36cm 奥行：51cm 深さ：2cm

**覆土** 明褐色粘質土などで埋没する。地山の崩落土である2層土(茶褐色土)がいわゆる三角堆積である。

**構造** [竪穴]竪穴は南壁が東に向かって北に寄っていく縦長の隅丸長方形様のプランを呈する。主軸方向は竈からN81°Wを向く。

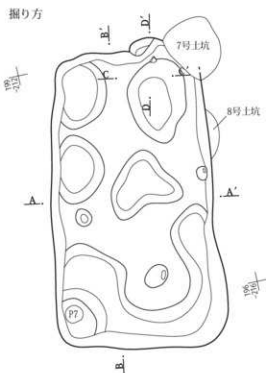
[掘り方・床]本住居は、深さ13cm以下を測る土坑状の掘り込が散見される掘り方を有し、これをロームブロックや焼土粒、炭化物を含む黒褐色などで埋め戻して床面を造っている。

[竈]竈は東壁中央やや南寄りに設けられ、その方位はN81°Wを向く。

本住居の竈は、竈から竈前にかけて掘削される、径132×94cm、深さ9cmを測る、楕円形プランを呈する掘り込を伴う掘り方を有し、これを暗褐色土や焼土・ローム粒を含む褐色土で埋め戻して、燃焼面を作る。



第3章 発見された遺構と遺物



(住居覆土)

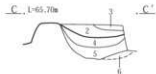
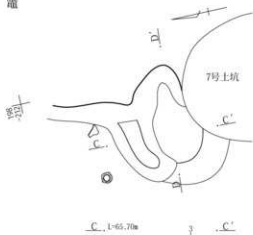
- 1層 明褐色粘質土 茶褐色土がブロック状に入る。
- 2層 茶褐色土 地山の崩落土。

(掘り方)

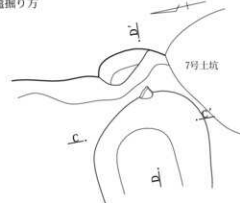
- 3層 暗黄褐色土 ロームブロック多く含む。

※ 3層から住居掘り方。

竈



竈掘り方



(住居覆土2段)

- 1 茶褐色土 少量の焼土粒含む。
- 2 暗茶褐色土 焼土粒、炭化物多く含む。
- 3 灰色土 近世の7号土坑粘土

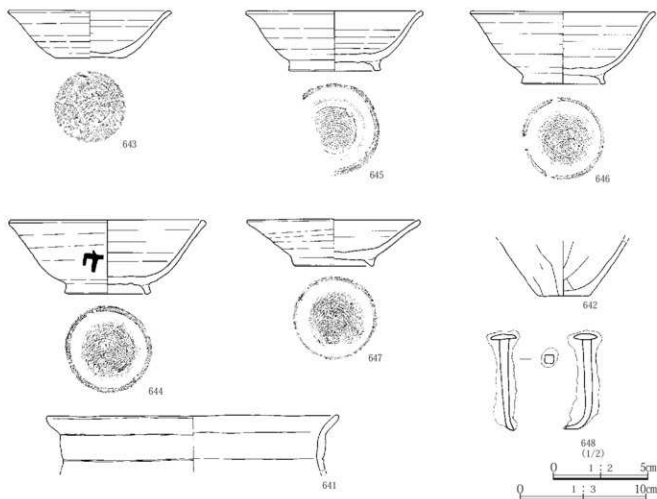
(竈掘り方)

- 4 褐色土 焼土粒、ローム粒含む。
- 5 暗褐色土 少量の焼土。
- 6 黄褐色土 ローム粒多く含む。

※ 4層から竈掘り方。



第208図 3区18号住居



第209図 3区18号住居出土遺物

左右に袖が残るが、地山の掘り残しである。

天井は確認できなかった。

煙道部は、燃烧部奥側に、底面幅14cmを測る部分があるが、ここから始まる可能性がある。

[柱穴・貯蔵穴]柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

[上屋]棟方向は、壁穴の直交する径の比較から、略東西方向を向くものと推定される。

遺物 少量の甕(641・642)を含む土師器や、椀(643～647)を含む須恵器や、鉄釘(648)が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断される。

#### 19. 1号掘立柱建物(第210図、PL.71)

概要 本建物は、主軸(棟方向)を略東西方向に取る、2×3間の掘立柱建物である。

位置 本建物は3区中北部にあり、225～230-249～255グリッドに位置する。

重複 本建物は7・9・14号住居と重複するが、14号住居よりは古いが、7・9号住居との新旧関係は特定できなかった。

覆土 本建物の柱穴は茶褐色粘質土などで埋没する。

規模 範囲：560×445cm

P 1 径：52×41cm 深さ：50cm

P 2 径：72×54cm 深さ：27cm

P 3 径：60×38cm 深さ：37cm

P 4 径：58×50cm 深さ：37cm 柱痕径：36cm

P 5 径：94×75cm 深さ：41cm 柱痕径：28cm

P 6 径：54×48cm 深さ：53cm

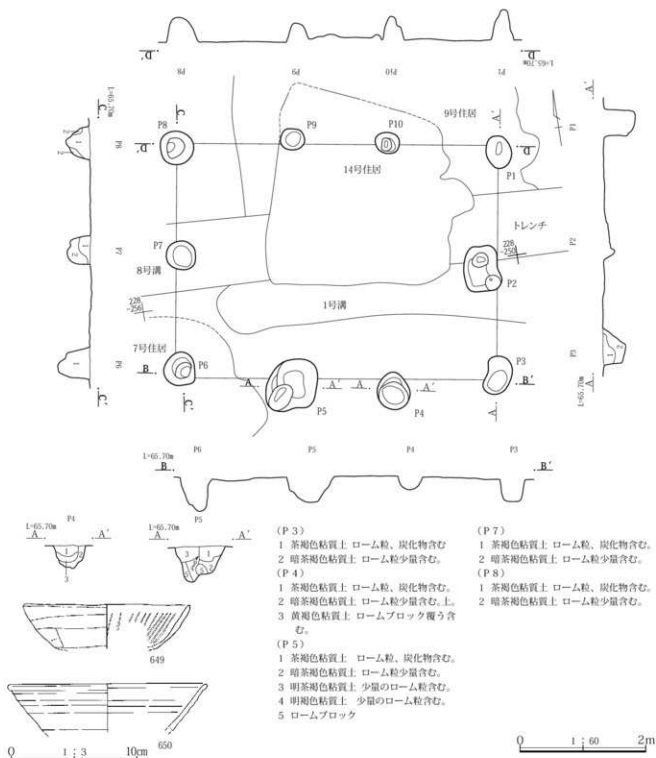
P 7 径：48×45cm 深さ：37cm

P 8 径：53×53cm 深さ：38cm 柱痕径：20cm

P 9 径：38×33cm 深さ：30cm

P 10 径：38×33cm 深さ：40cm

構造 上述のように本建物は3×2間の掘立柱建物である。主軸(棟方向)はN82°Wを向く。



第210図 3区1号掘立柱建物と出土遺物

[柱穴の配置] 本建物の柱の配列は、長方形を呈する。  
 [柱穴の形態及び規模] 柱穴のプランは、P 2・3・5が  
 張出しを持つが、円形、楕円形、隅丸方形を呈する。掘  
 削形態はいずれも井筒形で、P 2・3は平底を呈し、他  
 の柱穴は丸底状を呈する。

また、P 2・5・6・8・10の底面には静的荷重によ

る塑性変形が見られた。特に P 2 では北寄りと南東に 2  
 か所の塑性変形が見られたが、前者を①、後者を②とし  
 ている。塑性変形による沈降は P 2 では①が 9cm、②が  
 6cm、P 5 で 12cm、P 6 で 13cm、P 8 で 10cm、P 10 で  
 18cmを測る。

柱穴の径は 33 ~ 94cm、平均 51.85mを測る。また柱穴

の深さは27～53cm、平均39.00cmであった。

〔柱間〕本建物の柱間は、以下のように測った。

〔桁間〕

P 8—P 9：195cm

P 9—P 10：148cm

P 10—P 1：180cm

P 6—P 5：173cm

P 5—P 4：180cm

P 4—P 3：166cm

〔梁間〕

P 8—P 7：175cm P 7—P 6：185cm

P 1—P 2①：178cm P 1—P 2②：208cm

P 2①—P 3：198cm P 2②—P 3：183cm

桁間は148～195cmと幅があり、その平均は173.67cmを測る。梁間も175～208cmと幅があり、その平均は187.83cmを測る。

〔上屋〕柱の径は、上記規模の柱痕径は土層断面によって想定されるものを記載したが、その太さは、20～36cmを測るものであった。また、底面形態やの塑性変形から推すと、P 1・5は板状の柱を使用し、P 2・6・8・10は円柱であった可能性が考えられる。

そして、底面の塑性変形と、柱痕跡から推せば、太い柱材を使い、しっかりした構造の建物であったことを想定することができる。

棟方向はP 2の塑性変形が①のときはN80°W、②の時はN77°Wを向くと想定される。

遺物 本建物からは杯(649)など僅かな土師器片と須恵器碗(650)片が出土した。

所見 本建物の時期は、出土遺物から推して、9世紀後半の所産と判断されるが、柱穴の径もこれを肯定するものである。

## 20. 2号掘立柱建物(第211図、PL.71)

概要 本建物は、主軸(棟方向)を略東西方向に取り、南列の西から2本目の柱穴は確認できなかったが、2×3間と想定される掘立柱建物である。

位置 本建物は3区中北部にあり、234～239-254～259グリッドに位置する。

重複 本建物は5号住居、27号土坑、24号溝と重複する。本建物は5号住居、27号土坑より古いものの、24号溝と

の新旧関係は特定できなかった。

覆土 本建物の柱痕し黒褐色粘質土で埋没し、柱は暗土灰色粘質土で固定されている。

規模 範囲：500×390cm

P 1 径：35×33cm 深さ：48cm 柱痕径：4～27cm

P 2 径：41×32cm 深さ：36cm 柱痕径：15～21cm

P 3 径：47×35cm 深さ：26cm

P 4 径：50×33cm 深さ：20cm

P 5 径：28×25cm 深さ：29cm

P 6 径：46×18cm 深さ：15cm

P 7 径：37×30cm 深さ：25cm

P 8 径：41×33cm 深さ：25cm

P 9 径：(30)×(13)cm 深さ：22cm

構造 上述のように本建物は3×2間と想定される掘立柱建物である。主軸の方向は(棟方向)はN85°Wを向く。

〔柱穴の配置〕本建物の柱の配列は、縦長の台形のプランを呈する。

〔柱穴の形態及び規模〕柱穴のプランは、形状の確認できなかったP 9を除くと、P 1・7は隅丸方形、P 2・4・8は楕円形、P 3・6は瓢箪形を呈する。掘削形態はいずれも円筒形で、P 1・2・4が丸底状を呈する他は、平底状を呈する。また、P 1の底面には20×19cm、深さ6cm、P 4の底面には26×26cm、深さ4cmを測る塑性変形が見られる。

柱穴の径は18～50cm、平均31.33cmを測る。深さは15～48cm、平均27.33cmを測る。

〔柱間〕本建物の柱間は以下の通り。

〔桁間〕

P 7—P 8：149cm

P 4—P 3：171cm

〔梁間〕

P 7—P 6：198cm

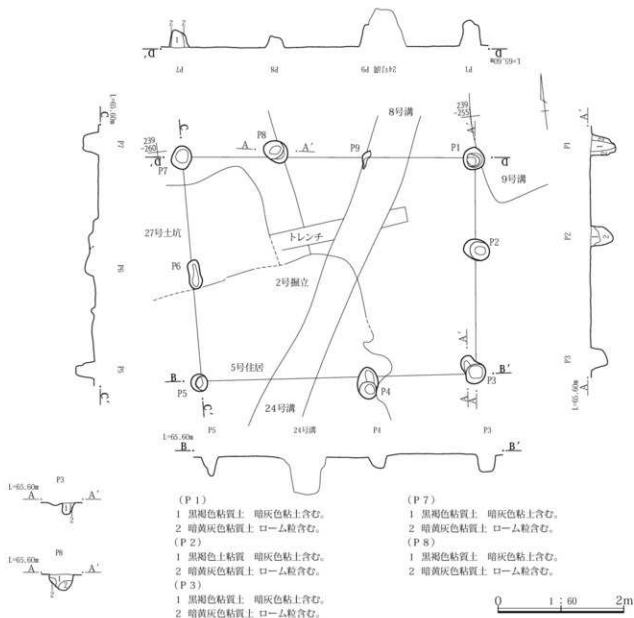
P 6—P 5：173cm

P 1—P 2：143cm

P 2—P 3：193cm

桁間は測定できたのは、149cmと171cmと幅があり、その平均は160.00cmを測る。梁間も143～198cmと幅があり、その平均は176.75cmを測る。

〔上屋〕柱は、土層断面や底面形態、塑性変形から推して、おおよそ6寸程であったと推定される。またP 6の柱は板状であったことが想定される。P 1・4の塑性変形は浅く、この2本を除くと塑性変形が見られないことから鑑みるに、上屋構造は比較的単純なものであった可能性



第211図 3区2号掘立柱建物

が想定されるのである。

棟方向はN82°Wを向く。

**遺物** 本建物からは僅かな量の土師器片が出土したに過ぎない。

**所見** 本建物の時期は特定できなかった。しかし、柱穴の径はやや中世的であるものの、棟持ち柱を有することから推して、おおそ律令期以前の所産として把握することができる。

21. As-B下水田(第212・213図、PL.71・72・94)

**概要** 本水田は、浅間山が天仁元(1108)年に噴火した際に噴出した、As-Bテフラで覆われた、被水田址である。

本水田址は、2区南半部から続くもので、3区の北西部及び中北部から東部にかけてある微高地を除く、低地部全体で確認された。

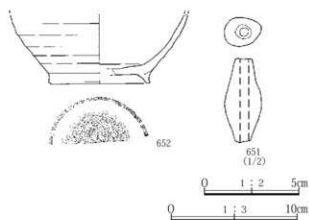
なお、一部畦畔を確認できなかったところもあった。

**位置** 上述のように、本水田址は3区低地部にあり、全体としては、183～242-221～306グリッドに位置する。なお、個々の水田面の位置は表20に記載する。

**重複** 本水田址は19・24・25号溝、21・32～37・48号土坑と重複するが、19・25号溝及び各土坑は本水田址より新しい。また、24号溝は明確ではないが、本水田址より古い可能性が考慮される。

**規模** 残存東西：96.2m 南北：30.5m





第213図 3区As-B下田面出土遺物

水田面規模は表20参照のこと。

**覆土** 本水田址は、As-Bテフラ(軽石・火山灰)で覆われている。

**構造** 本水田址では22面の水田面を確認した。

畦畔の配置は、東寄り、水田面14・20・21と水田面22の間に、南北走行する大畦が確認される。一方、他の畦畔、概ね略東西南北を基本とするが、水田面1・3・4・5の西縁あるいは北西縁、水田面8～10・14・20の東縁あるいは北縁の微高地との境は、地形の制約を受けて弧状の形態を見せる。一方、水田面4・9・20・21は、土地の勾配に対する調整のためか、勾配の方向に狭く作られている。

大畦は基底幅171～260cm、平均217.00cm、上幅55～125cm、平均96.67cmを測り、その高さは西側の水田面20・21に対しては0～3cm、平均2.00cm、東側の水田面22に対しては4～15cm、平均7.33cmを測る。その走向は、北端部ではN8°Eを向くが、過半はN1°Wと真北に近い。

大畔を含めた畦畔の間隔は、東西に走向する畦畔では、測定できた水田面2・4・7・9～12・15・16・20の両側の畦畔で見ると、2.8～30.7mと間隔に大きな開きがあり、平均は15.16mを測る。一方、南北に走向する畦畔で、測定できた水田面5～7・10～12・14～16・20・21の両側の畦畔で見ると、3.7～23.5mとやはりその間隔に大きな開きがあり、その平均は12.47mを測った。これを考慮すれば、おおそ東西25m、南北30m間隔を基準に、土地の勾配を勘案しながら、畦畔が設けられたものと考えられる。

畦畔の走向は各様であったが、概ね南北～北北東-南

南西を向き、あるいは東北東～東南東を向くものが多い。

また、畦畔の規模は、東西走行の畦畔では、基底幅42～240m、平均81.38m、上幅は10～190cm、平均34.82cmを測るが、水田面8・9間の畔は東側微高地寄り大きく幅員が増すため、これを除いた下幅の最大値は122cmで、平均は77.77cmとなる。また水田面4・9・10に囲まれた交差点は上幅が87cm程と、幅員が広がっている。畦の高さは、北側の水田面に対する高さは0～5cm、平均2.11cm、南側の水田面に対する高さは0～6cm、平均2.56cmを測り、南北両側の畦の高さの平均は2.33cmを測る。

一方、南北走行の畦畔では、基底幅36～162m、平均93.57m、上幅は14～88cm、平均40.40cmを測る。畦の高さは、西側の水田面に対する高さは-1～9cm、平均1.74cm、東側の水田面に対する高さは0～6cm、平均2.62cmを測り、東西両側の畦の高さの平均は2.18cmを測る。

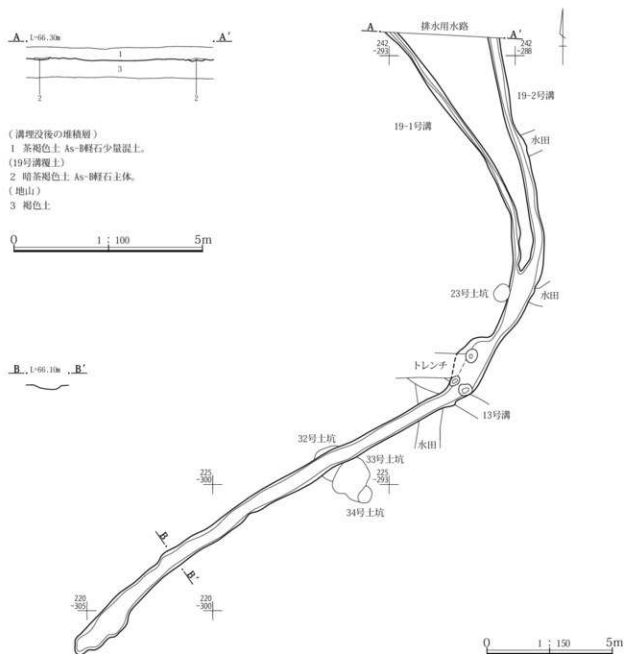
水田面のプランは長方形を基本とするが、微高地の存在や、土地の傾斜によって規制され、台形、靴形、短冊形など多様な形状を呈する。

また、水田面の比高差は、僅かに西高東低あるいは西北高南東低を呈するが、西の水田面2と東の水田面22、北西にある水田面3と南東方向にある水田面22の勾配率は、それぞれ0.50%、0.52%とほぼ平坦であった。これを裏付けるように、畦畔の両側の水田面の比高差は、東西では平均0.88cm、南北では平均0.44cm程測った。大畔の東西の比高差は、3～12cm、平均5.33cm測り、大畔の東西で明瞭な段差があったことが分かる。なお、南北方向で見ると、水田面2・6・11・15・20・22を結ぶライン付近がより低い傾向が示される。

**遺物** 比較的量の多い土師器片や、椀(652)を含む須恵器片、土鍾(651)の出土があった。

**所見** 本水田址は、その大畦を含め、その畦畔が略東西、略南北を向くものの、その規格は方形様とは限らず、畦畔の設置間隔も一定しないことから、本水田址の畦畔の設置は、条里方眼と自然地形を融合したような配置持つものと判断される。

その時期は、天仁元(1108)年を下限とした、平安時代の所産と認識される。



第214図 3区19号溝

## 22. 19号溝(第214図、PL.71)

**概要** 本溝は、中型の溝道構であるが、北部で東西に分岐する。以下便宜的に西のものを19-1号溝、東のものを19-2号溝と呼称することとする。

また、本溝の北側が調査区外に出ていて、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本溝は3区北西部にあり、218～242-288～305グリッドに位置する。

**重複** 本溝はAs-A下水田と重複するが、これを切る。

**規模** 残長：34.9m 幅：70cm 深さ：8cm

(19-1号溝) 残長：11.1m 幅：38cm 深さ：3cm

(19-2号溝) 残長：10.1m 幅：40cm 深さ：5cm

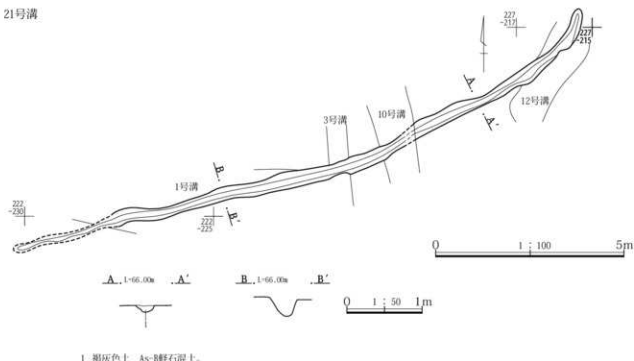
**覆土** 19-1・19-2号溝を含む本溝は、As-B主体の暗茶褐色土で埋没する。

**構造** 19-1号溝は、N35°Wの走向で北側から調査区に入り、6.5m程直線的に走行した後、時計回りに弧状に走行し、19-2号溝との合流点直北ではN1°Wの走向を向いている。また、19-2号溝は、N13°Wの走向で北側から調査区に入り、極緩やかに蛇行しながら8.5m程走行した後、時計回りに弧状に短く走行し、19-1号溝との合流点直北ではN20°Eの走向を向ける。

合流点で、本溝はN21°Eの走向を取り、その後、時



21号溝



第215図 3区21号溝

計りに弧状に2.8m走行したところで、走行を $N36^{\circ}E$ を取って直線的に5m程走行する区間に入るが、19-1・2号溝の合流点で111cmあった幅員は漸移的に幅員を減じて、この区間の直前では42cmとなっている。

しかし、この直線走行部分は西側に張り出して幅員は131cmを測る片船形のプランを呈するが、その南端で東壁際に径 $54 \times 50$ cm、深さ16cmを測る、隅丸方形様のプランを呈するピット、西壁際に径 $47 \times 33$ cm、深さ13cmを測る、楕円形プランのピットが残る。また西壁際のピットの北107cm地点に、径 $54 \times 46$ cm、深さ18cmを測るピットが遺されている。

この区間の南端で幅員を62cm程に減じた後、走向を $N63^{\circ}E$ に転じ、反時計回り弧状に10m程走行するが、南西端部で $N48^{\circ}E$ に走向している。

本溝の掘削形態は箱型状で、平底を呈する。

なお、本溝の底面は北高南低であるが、勾配率は0.32%を測る。

**遺物** 本溝からの遺物の出土は見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかったが、掘削形態などから推して、水路に供された可能性が考慮される。なお、この場合、ピットを伴う片船形の部分は、流水の制御などに供されたものと思慮される。

また、その時期は、土層の観察から、As-B降下の天仁

元(1108)年以降、さして下らない時期の所産と把握されるに過ぎない。

23. 21号溝(第215図、PL.72)

**概要** 本溝は、小型の溝遺構である。

**位置** 本溝は3区北東部にあり、221～227-215～230グリッドに位置する。

**重複** 本溝は、3面の遺構との重複はなかった。

**規模** 長さ：16.9m 幅：34cm 深さ：24cm

**覆土** As-B混褐色土で埋没する。

**構造** 本溝の中・西部は、 $N76^{\circ}E$ の走向で、10m程、極緩やかに蛇行する走行で東進し、走向を $N54^{\circ}E$ に転じて直線的に5.5m程走行し、東端で反時計回りに $N15^{\circ}E$ に走向を転ずる。

本溝の掘削形態は箱型状で、底面の横断面形は丸底状を呈する。

**遺物** 本溝からの遺物の出土は見られなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

また、その時期は、覆土の観察から、天仁元年以降の所産と捉えられるが、2面で確認できなかったことから、As-B降下後、時期が下らない可能性が考慮される。

## 24. 24号溝(第216図、PL.72)

概要 本溝は、中型の溝遺構である。

また、土層断面から1回の掘り直しが確認された。

位置 本溝は3区を縦断しており、185～240-255～272グリッドに位置する。

重複 本溝は、5号住居、2号掘立柱建物、As-B下水田と重複する。5号住居とAs-B下水田に対しては本溝の方が古い。また2号掘立柱建物との新旧関係は特定できなかった。

規模 残長：58.2m 幅：106cm 深さ：54cm

覆土 黒褐色粘質土などで埋没する。

構造 本溝は調査区北端でN36°E、中程でN13°Eに走向を取るが、この間、く字状に32.5m程走行する。以南はN12°Eの方向に緩やかに蛇行しながら走行する。

本溝の掘削形態は箱堀状で、底面形態は平底を呈する。

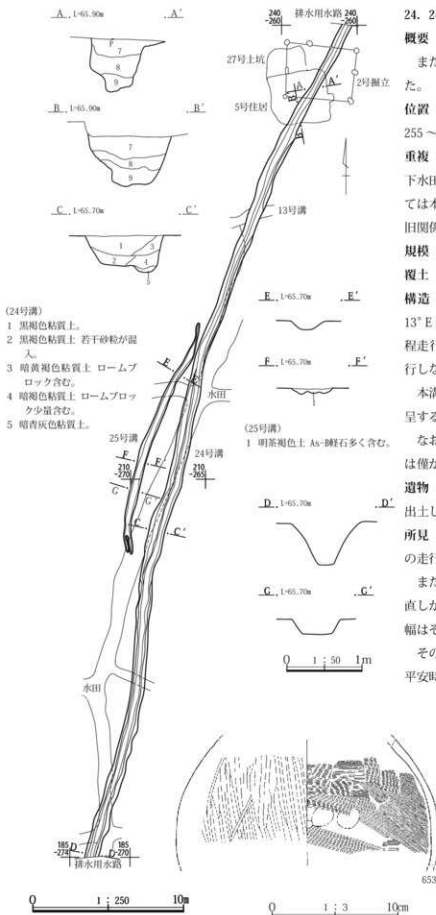
なお、北溝の底面は北高南低であるが、勾配率は僅か0.07%を測るのみであり、ほぼ平坦である。

遺物 本溝からは糞と思われる須恵器片(653)が出土した。

所見 本溝の掘削意図は特定できなかったが、その走行から推して、水路の可能性が考慮される。

また、上述のように土層断面の観察から、掘り直しがあり、上位の溝の深さは40cmを測り、溝の幅はそのまま利用されている。

その時期は、覆土と出土遺物から推して、概ね平安時代の所産と判断される。



第216図 3区24・25号溝と出土遺物

25. 25号溝(第216図、PL.72)

**概要** 本溝は、中型の溝遺構である。

**位置** 本溝は3区中央部にあり、205～220-265～270グリッドに位置する。

**重複** 本溝は、As-B下水田と重複するが、本溝の方が新しい。

**規模** 長さ：16.3m 幅：54cm 深さ：10cm

**覆土** As-B軽石を多く含む明褐色土で埋没する。

**構造** 本溝は南端でN10°Wの走向で直線的に1.3m程走行し、走行を転じてN12°EからN32°Eになるまで時計回りに弧状に走行し、北端でN5°Eの走向で短く走る。

本溝の掘削形態は箱型状を呈するが、底面には凹凸が見られる。

**遺物** 本溝からの遺物の出土はなかった。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかった。

また、その時期は、覆土の観察から、天仁元年以降と捉えられるが、2面で確認できず、As-Bを多く含むことから、As-B降下後、あまり下らない時期の所産である可能性が考慮される。

26. 26号溝(第217図、PL.73)

**概要** 本溝は、大型の溝遺構である。南北両側が、東側調査区外に出ているが、東接する南玉二丁目遺跡1区の古墳(周堀)に接続する。

本溝は22号溝としても調査されたが、22号溝は本溝の覆土中に在って、本溝と同一であるため、26号溝として報告する。

また、覆土中(8層土など)に1号遺物集中域が確認されたが、同遺物集中域は本項29(288頁)に後述する。

**位置** 本溝は3区東端部のやや北寄りにある。208～233-211～217グリッドに位置する。

**重複** 本溝は、3面の遺構では44号土坑と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 残長：29.4m 残幅：530cm 深さ：50cm

**覆土** 暗黄褐色粘質土などで埋没するが、上位にAs-Bの純層が堆積し、As-B降下時点で、本溝は窪んでいたことが確認される。

**構造** 本溝は南端でN74°W、北端でN34°E、中位でN3°Wで走向を取。内縁は円弧状のプランを呈し、外縁は半楕形のプランを呈する。

本溝の掘削形態は箱型状を呈し、底面は平底状を呈する。

**遺物** 上述のように本溝の覆土中には1号遺物集中域が含まれるが、土師器と、椀(654)を含む量の多い須恵器が出土している。

**所見** 本溝の掘削意図は特定できなかったが、本溝の北側に近接する、N60°Eを向き直線的に10.5m程を測る比高差14cmの段差を含め、東接する南玉二丁目遺跡1区の古墳周堀に接続するものと思慮されるため、古墳の周溝と判断したい。なお、古墳(周堀)に関しては南玉二丁目遺跡の発掘調査報告書を参照されたい。

また、その時期は、平安時代を下限とするが、上述の想定から、古墳時代後期の所産と判断される。

27. 2号井戸(第218図、PL.73・94)

**概要** 本井戸は、上位に石組を伴う小型の井戸である。

**位置** 本井戸は3区中北部にあり、226～227-247～248グリッドに位置する。

**重複** 本井戸は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** 径：128×126cm 深さ：128cm

**覆土** 本井戸は炭化物、焼土ブロックを含む明褐色土で埋没する。なお、地山層土の記録は残せなかった。

**構造** 本井戸は隅丸方形のプランを呈し、主軸方位はN1°Eを指す。

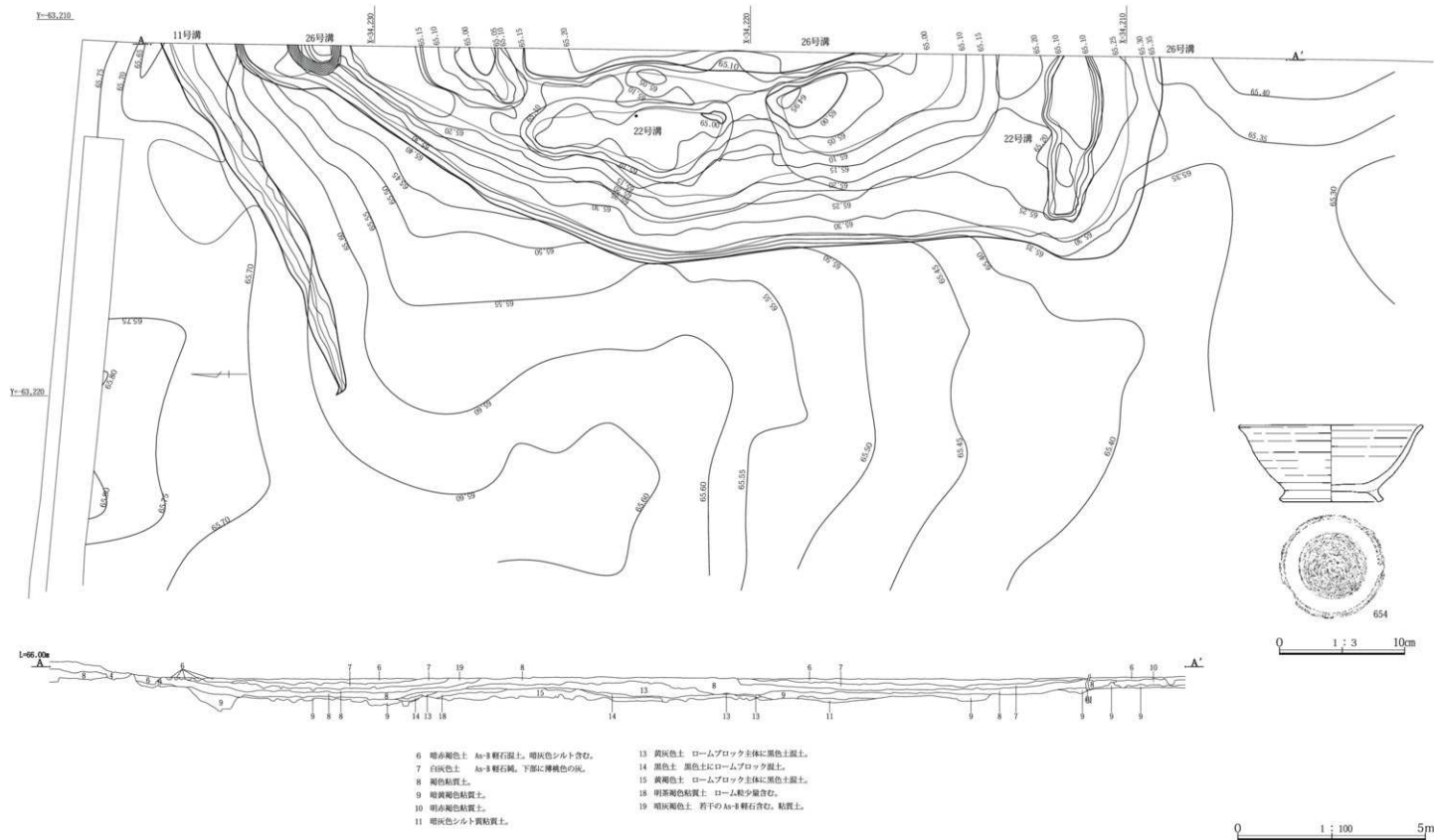
掘削形態は井筒朝顔形を呈する。底面は平底である。

また、上位の朝顔部に西側から北側にかけて、河床礫20個以上を用いた石組が遺されているが、北側では3段に積まれている。

なお、地山層の土層記録が取れなかったため、湧水層などは特定できなかった。また、アグリは形成されていない。

**遺物** 本井戸からは僅かな量の土師器や、椀(655)含む須恵器片が出土した。

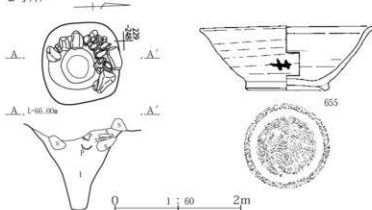
**所見** 本井戸は、井筒朝顔型に掘削し、朝顔部分に3段の石組を設けている。本井戸の時期は、出土遺物から推して9世紀後半の所産と判断される。



- |                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 6 暗赤褐色土 Aa-B 軽石混。暗灰色シルト含む。 | 13 黄灰色土 ロームブロック主体に黒色土混上。   |
| 7 白灰色土 Aa-B 軽石混。下部に薄褐色の成。  | 14 黒色土 黒色土にロームブロック混上。      |
| 8 褐色粘質土。                   | 15 黄褐色土 ロームブロック主体に黒色土混上。   |
| 9 暗黄褐色粘質土。                 | 18 明茶褐色粘質土 ローム粒少量含む。       |
| 10 明赤褐色粘質土。                | 19 暗灰褐色土 若干のAa-B 軽石含む。粘質土。 |
| 11 暗灰色シルト質粘質土。             |                            |

第217図 3区26号溝と出土遺物

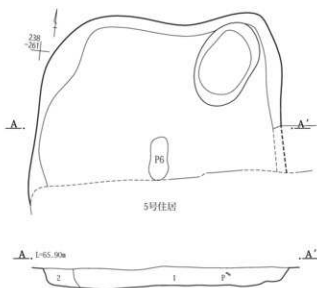
2号井戸



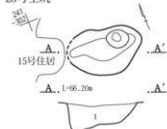
(2号井戸)

1 明褐色土 炭化物、焼土ブロック、小礫含む。

27号土坑



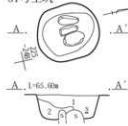
28号土坑



(28号土坑)

1 褐色粘質土 若干のAs-C軽石含む。

31号土坑

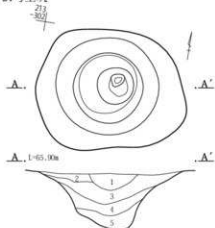


(31号土坑)

1 黒色粘質土 茶褐色土ブロック含む。  
2 褐色土粘質土。

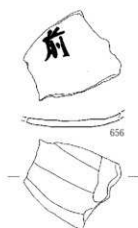


21号土坑

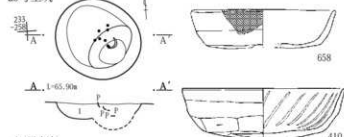


(21号土坑)

1 暗茶褐色土 As-C軽石含む。やや粘質。  
2 黄褐色土 As-C軽石、黄褐色土ブロック。  
3 青灰色土 川砂  
4 黒褐色粘質土  
5 暗褐色粘質土 茶褐色土ブロック含む。

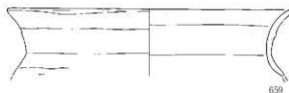


29号土坑



(29号土坑)

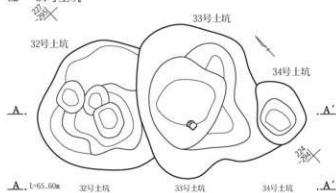
1 黒褐色粘質土 茶褐色土ブロックを含む。



第218図 3区2号井戸及び3区3面の土坑群(1)と出土遺物

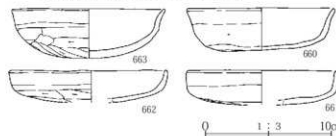
第3章 発見された遺構と遺物

32～34号土坑

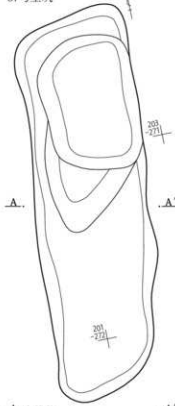


(32・33・34号土坑)

- 1 暗褐色粘質土 As-B礫石含む。
- 2 褐色粘質土 ロームブロック多く含む。
- 3 明茶褐色土 ローム・粘土ブロック含む。
- 4 暗褐色粘質土 茶褐色土ブロック含む。
- 5 暗茶褐色土 灰褐色粘質土ブロック多く含む。



37号土坑



(37号土坑)  
1 黒褐色土 ローム粒含む。粘質土。

38号土坑



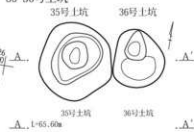
(38号土坑)  
1 黒褐色粘質土 ローム粒含む。

39号土坑



(39号土坑)  
1 黒褐色粘質土 ローム粒含む。  
2 褐色土 黒色土ブロック含む。

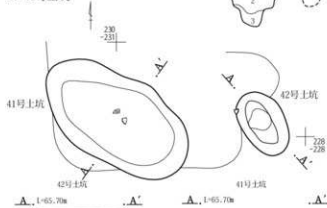
35・36号土坑



(35・36号土坑)

- 1 明褐色粘質土。
- 2 褐色土 若干の砂粒。
- 3 黄灰色粘質土。
- 4 褐色土 黄色粘質土ブロック含む。

41・42号土坑



(41号土坑)

- 1 暗褐色粘質土 茶褐色土ブロック含む。
- 2 褐色粘質土 ローム粒含む。
- 3 暗黄褐色粘質土 ロームブロック多く含む。

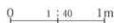
(42号土坑)

- 1 暗茶褐色粘質土 茶褐色土ブロック含む。
- 2 暗黄褐色粘質土 ロームブロック多く含む。

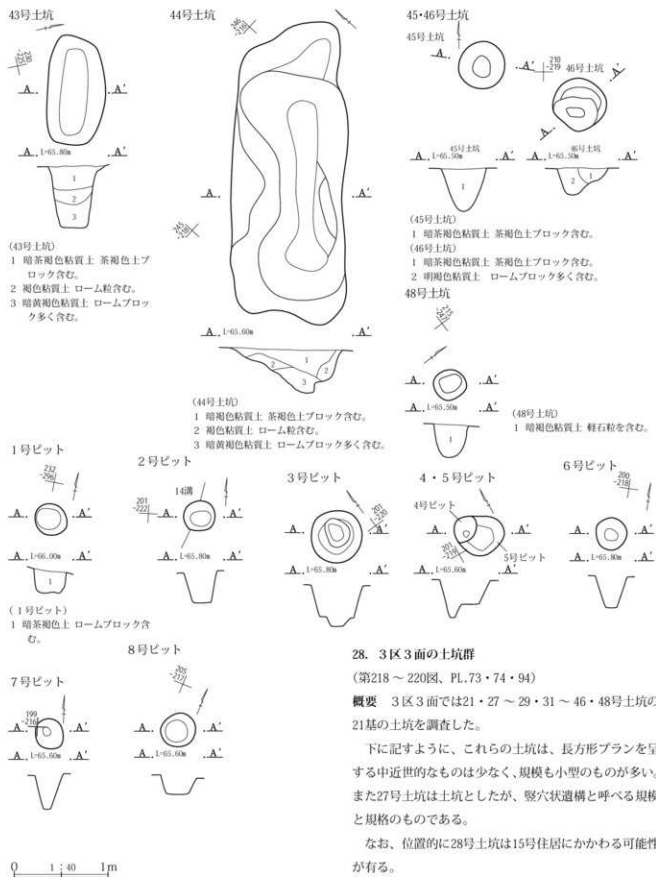
40号土坑



(40号土坑)  
1 黒色粘質土 茶褐色土ブロック含む。  
2 暗褐色土 ローム粒含む。  
3 暗茶褐色土 ローム粒含む。

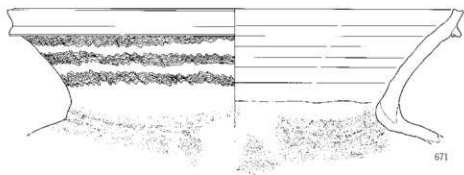
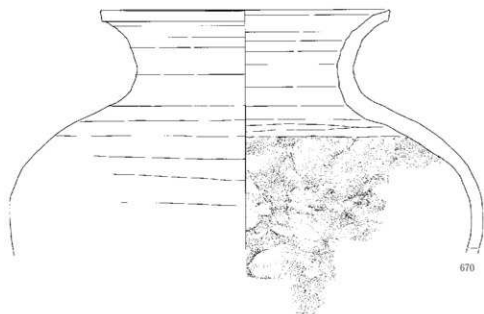
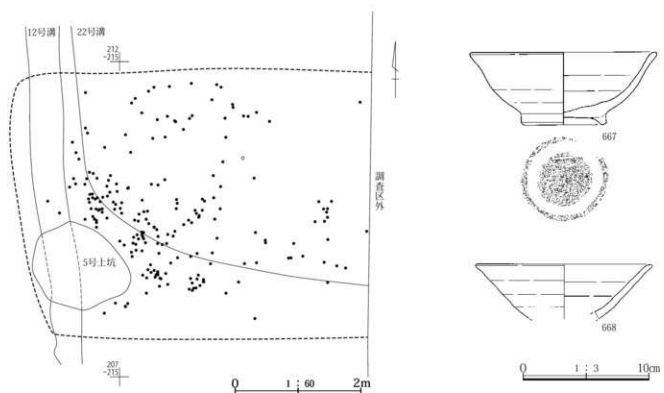


第219図 3区3面の土坑群(2)と出土遺物



第220図 3区3面の土坑群(3)

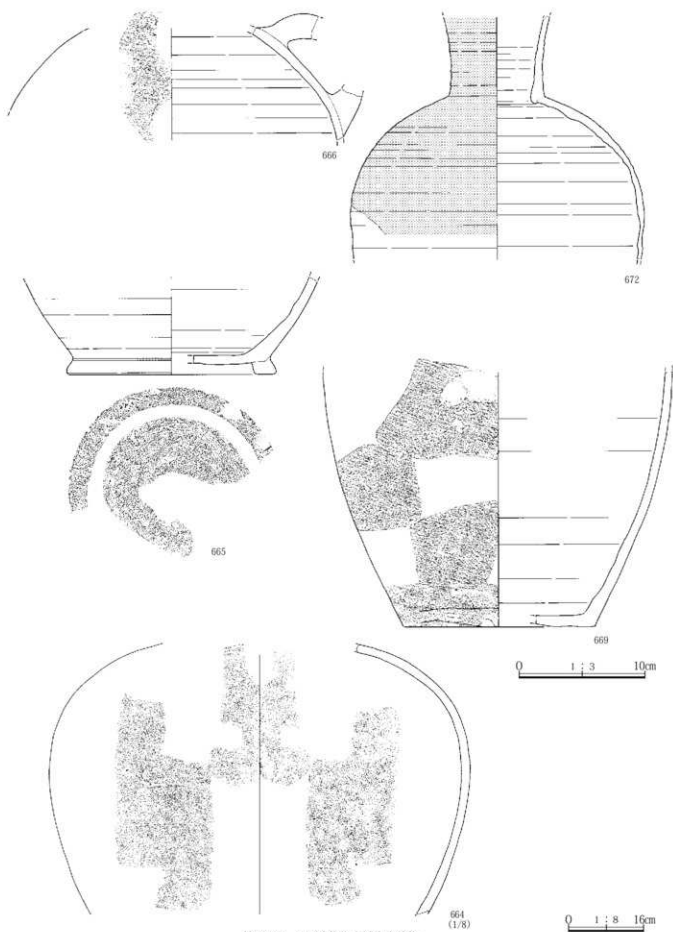
第3章 発見された遺構と遺物



0 1 4 10cm

第211図 3区遺物集中域と出土遺物





第222図 3区遺物集中域出土遺物

微高地に27・29・31・39・40・41・42・43土坑、中東部の微高地に44・45・46号土坑がある。

なお、個々の土坑の位置するグリッドは表21参照。

**重複** 21・32～37・48号土坑はAs-B下水田と重複し、これを切る。33号土坑と32・34号土坑が重複するが、34号土坑が33号土坑を切るものの、32・33号土坑の新旧関係は特定できなかった。

また、27号土坑は5号住居、2号掘立と重複するもののいずれに対しても本土坑の方が古い。41・42号土坑が12号住居と重複するが、12号住居の方が古い。44号土坑は26号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

**規模** 表21

**覆土** 21・32・33号土坑はAs-B含む暗褐色土などで埋没するが、21号土坑は中・下位層で川砂や黒褐色暗褐色粘質土が入る。29・31・37～40号土坑は黒色系の粘質土、34・41～46・48号土坑は暗褐色などの粘質土、28号土坑はAs-C含む褐色粘質土、36号土坑は褐色土、35号土坑は明褐色・黄灰色粘質土などで埋没し、27号土坑は焼土炭化物を含む暗茶褐色土で埋没し、西壁際は地山茶褐色土が崩落する。

**構造** 本土坑群の土坑のプランは45号土坑は円形、21・29・31・32・33・34・35・41・42・46号土坑は楕円形、36・39号土坑は突出部付楕円形、37・43・44号土坑は隅丸長方形、28号土坑は隅丸三角形、38・48号土坑は隅丸長方形、40号土坑は不定形を呈する。また27号土坑は隅丸長方形のプランを呈する。

また、掘削形態は、28・42・44号土坑は船形、29号土坑箱形で、東丸底、西平底、31・36・37・40・43号土坑は箱形、平底だが、38・43号土坑は規模に比して掘り込が深い。また、41号土坑は箱形でやや丸底気味、46号土坑は箱形で尖底、21・32号土坑は摺鉢状で尖底を呈し、35号土坑は摺鉢形で平底、33・34号土坑は摺鉢形で丸底、38・39・45・48号土坑は柱穴状を呈するが、39号土坑は平底、39号土坑は平底だが北側(突部)には柱穴状の掘り込が見られ、45号土坑は尖底、48号土坑は丸底を呈するが、38号土坑は規模に比して掘り込が深い。27号土坑は竪穴状の掘り込を有し、底面は平底である。

主軸方位は表#に記す。

**遺物** 27号土坑から杯(656・657)を含む少量の土師器片と僅かな須恵器片、28号土坑からは僅かな土師器・須恵

器片、29号土坑からは僅かな杯(658・410)・甕(659)土師器・須恵器片、31号土坑からは少量の土師器片と僅かな須恵器片、32号土坑からは杯(660～663)を含む少量の土師器片、33・39・48号土坑からは僅かな土師器片が出土したが、他の土坑からの出土遺物はなかった。

**所見** 37・43・44号土坑は規模と形態から推して貯蔵穴の可能性が想起され、27号土坑は竪穴状遺構であるが、他の土坑の掘削意図を明らかにすることはできなかった。

その時期については、出土遺物から推して29号土坑は9世紀、32号土坑は8～9世紀の所産と判断された。また、21・32・33号土坑はAs-Bを含むが、中・下位層あるいは下位層はAs-Bを含まず、As-Bを含む土層を含め全体として粘質土であるため、古代の所産とした。また、他の土坑もAs-B降下以前の所産として把握される。

## 29. 1号遺物集中域

(第221・222図、PL.73・94・95)

**概要** 本遺物集中域は、26号溝の覆土中に検出されたもので、土器類211点、石器1点を、出土位置を記録した後、取り上げた。

**位置** 本遺物集中域は3区中東部、調査区東端付近に位置する。26号溝中にあり、207～211-211～215グリッドに位置する。

**重複** 本集中域は26号溝と重複し、その覆土中に位置する。

**規模** [分布範囲] 東西:520cm 南北:380cm

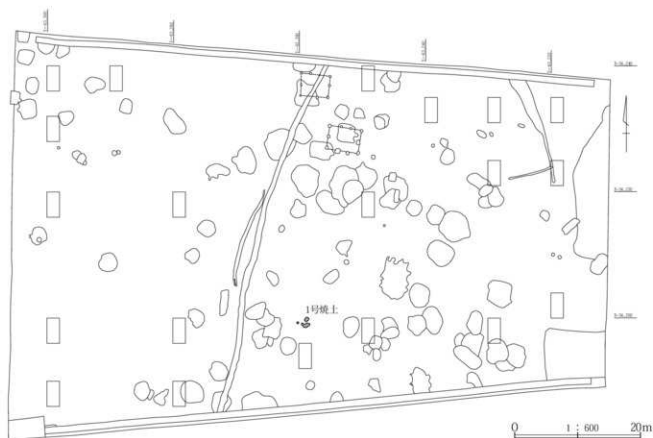
**覆土** 本集中域は、26号溝-8層(褐色粘質土)を中心に出土した。

なお、8層の上にはAs-Bの純層が乗る。

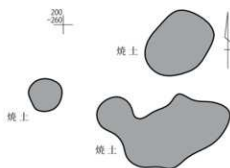
**構造** 本集中域の出土遺物は、26号溝南部に、標高65.094～65.590mの範囲に出土した。

**遺物** 本集中域からは少量の土師器と、大甕(664)・短頸壺(665)・把手付壺(666)・椀(667・668)・甕(669～671)などを含む多量の須恵器、及び灰陶器長頸壺(672)、僅かな陶器が出土した。

**所見** 本集中域は、出土遺物から推して9～10世紀の所産と判断される。



第223図 3区4面全体図



第224図 3区1号焼土

#### (4) 3区4面の遺構と遺物

##### 1. 3区4面の概要

3区4面では焼土を面的に確認した他は、風倒木痕を確認したのみである。

また本面において、旧石器時代の遺物の確認調査を実施したが(6)項に後述する。

##### 2. 1号焼土(第223・224図、PL.)

**概要** 1号焼土は、焼土が面的に確認されたものである。

**位置** 本焼土は3区中南部にあり、198～200-258～

260グリッドに位置する。

**重複** 本焼土は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

**規模** [分布範囲] 東西：250cm 南北：172cm

**覆土** 確認面は暗黄褐色ローム漸移層土である。

**構造** 本焼土は、面的に焼土の分布が確認されたものである。

**遺物** 本焼土からの遺物の出土はなかった。

**所見** 本焼土の燃焼意図は特定できなかった。

またその時期も、弥生時代以前と把握されるだけで特定できなかった。



第225図 3区風倒木痕

### 3. 3区の風倒木痕(第225図)

**概要** 3区4面では、79基の風倒木痕を確認した。

**位置** 3区の風倒木痕は微高地部、低地部の別なく広域に分布している。

**倒木方向** 倒木の方向の記録は残せなかった。また、形態的に倒木方向が想定されたものは、西向きが4基、南が3基、南東が1基であった。

**所見** 風倒木痕は、2区では微高地部に集中して分布していたが、2区に続くなど西部は微高地部を中心に、その分布が多いものの、以東では微高地部、低地部の別なく分布し、却って北東部や東部の微高地部での分布が少ない。

#### (5) 遺構外の出土遺物(第226図、PL.96)

**概要** 本項では3区1～4面の遺構外の出土遺物を一括報告する。

**出土遺物** 3区の遺構外の遺物は、土師器、須恵器片を中心に各種出土したが、図示したものには以下のものがある。

古代の土器類としては、土師器の杯(674・683・684・685)、須恵器の椀(678・682)・杯蓋(679～681)、灰朽陶器瓶(686・687)、土錘(675～677)がある。

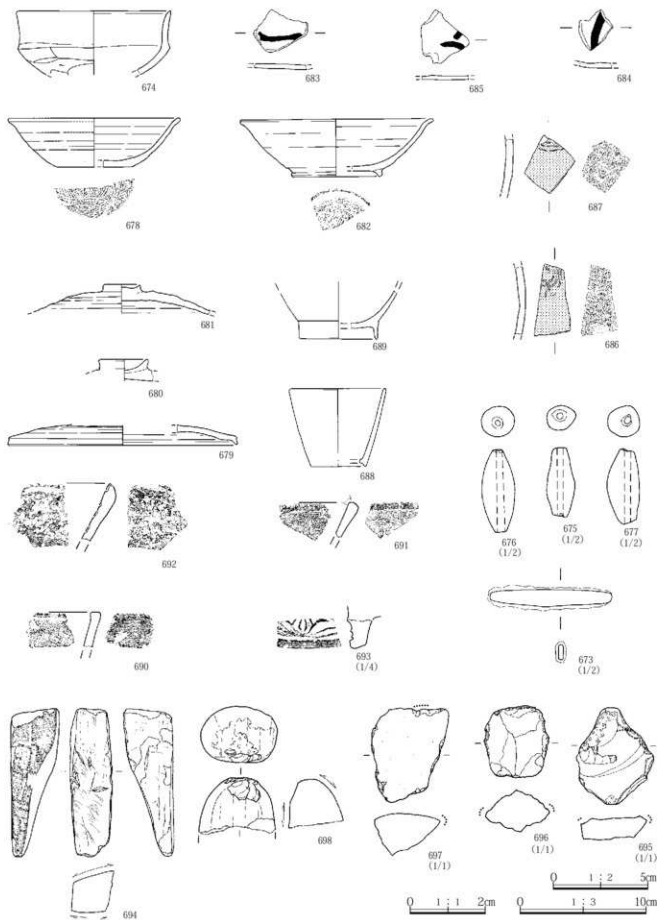
また、中近世の土器、陶磁器としては、肥前磁器猪口(688)・広東椀(689)、在地系土器の内耳鍋と思われるもの(690)や片口鉢(691・692)、軒丸瓦(693)が出土した。

この他に、不明鉄製品(673)や砥石(694)、叢石(698)、火打石(695～697)があった。

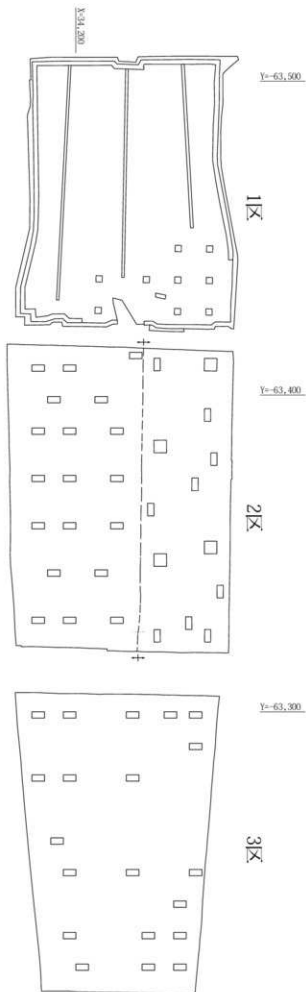
1面からは土師器片118g、須恵器片847g、2面からは土師器片50g、3面からは土師器片10.757g、須恵器片7.984g、陶器片75gが出土したが、4面からの出土はなかった。

**出土区域** これらの遺物のうち、出土位置(範囲)の特定できたものはなかった。

**出土面** また、記録の不備もあり、出土面が特定できたものは673のみであった。



第226図 3区遺構外の出土遺物



第227図 福島味噌袋遺跡試掘坑・トレンチ配置図

## (6) 2区の旧石器確認調査

### 1. 調査方法(第227図、PL.75)

3区4面の調査後、旧石器の確認調査を行った。

このうち南半部では、 $4 \times 2$  mのトレンチを東西10～30m間隔、南北10m以下の間隔で20箇所設定し、As-YP下の粘質シルト層、礫混じりの褐灰色土まで掘削調査した。

掘削深度はおおよそ1m程であった。

### 2. 調査結果と所見

いずれのトレンチからも旧石器時代の遺物、遺構は確認されなかった。従って3区において旧石器時代の遺構、遺物は存在しないものと判定して、調査を終了した。

なお、縄文・弥生時代の明確な遺構遺物は確認されなかったことを附記する。

## 第4節 弥生・縄文時代の遺物

## 1. 概要(第228図、PL.96・97)

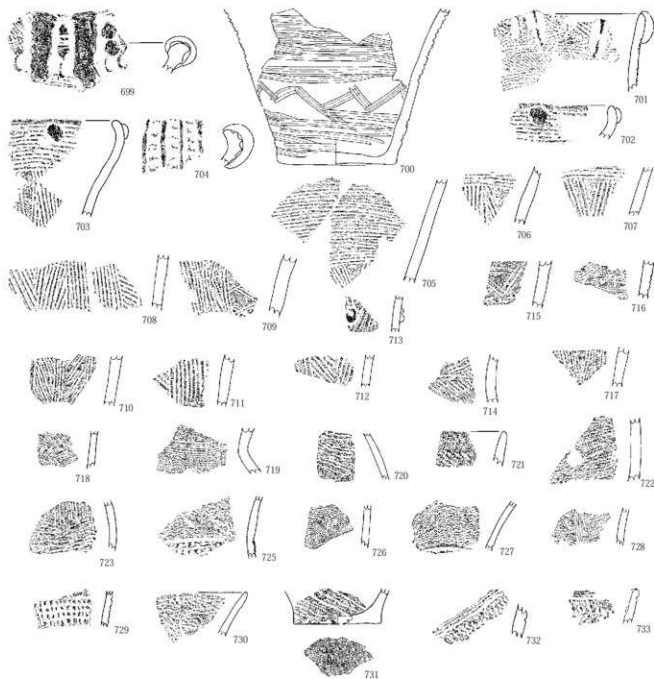
本遺跡においては、1区の微高地を中心に、縄文・弥生土器、及び当該期の石器が出土した。

これらの遺物は、当該期以外の遺構、あるいは、1区の下位層などの遺物包含層から出土した。なお、明確に弥生、縄文時代に属する遺構はなかった。

## 2. 出土遺物

出土した縄文土器は、諸磯b式(699・700・734～740)の深鉢片、諸磯c式(701～718)、興津式(732・733)の深鉢片などの前期の土器、中期の加曾利E3式(741)の土器があった。

弥生土器には、甕片と壺片があったが、甕には後期の樽式(719・726)、吉ヶ谷式併行(721)、終末期の十王台式系(720)、壺には十王台式系(722～725・727～731)があった。



第228図 福島味噌袋遺跡出土縄文・弥生土器(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第229図 福島味噌袋遺跡出土縄文土器及び石器(2)





第230図 福島味噌袋遺跡出土石器(3)

また石器類には、石鏃(742・756・762・763・767～771)、尖頭状石器(764)、削器(773)、打製石斧(743・744・747～749・757～760・765・772・774)、石核(750～752・761・774)、磨石(766)、磨石と思われるもの(746)、敲石(746・753・754)、スタンプ形石器(755)があった。この他、1区から縄文土器片18gが出土している。

### 3. 出土地区

1区から出土した土器類には699～723・729・731・738・740、石器類には742～755、2区から出土した土器類には725・727・728・730・732・733・735・736・741、石器類には756～767、3区から出土した土器類には726・734・736・737・739、石器類は768～774があった。

## 第4章 まとめ

### 第1節 福島味噌袋遺跡の埋蔵文化財

#### (1) 概況

福島味噌袋遺跡では4面の調査面で発掘調査を実施した。詳細は繰り返さないが、4面で合せて、竪穴住居40軒、掘立柱建物3棟、水田5面、大畦1条、溜池1カ所、畑9面、段差2面、溝127条、井戸4基、土坑111基、ピット59基、焼土8カ所、遺物集中1カ所、復旧溝群26カ所の遺構を確認、調査した。

本遺跡では、縄文時代以降の時期の多くの出土遺物を得た。特に縄文時代や弥生時代の遺構は確認されなかったものの、縄文時代前期を中心とした時期の縄文土器や石器、弥生時代中期の土器が出土したことは、本遺跡付近では珍しいロームの表出が、1区北東部に見られたことと関連しているよう。この他、次節で述べる螺旋状鉄鋼の出土も注目される出土遺物であった。

本遺跡の所在する群馬県佐波郡玉村町は、関東平野の北西隅部近くにあり、本遺跡は、立地する前橋台地を縦断する大河川、利根川の右岸に所在する。現況は平坦であるが、第2調査面以下では微高地や谷地の存在が確認された。詳細は不明であるが、本遺跡東端の26号溝は古墳の存在を示唆するものであった。2・3区に見られた6世紀前半の竪穴住居、あるいは1区に確認されたHr-FA下水田と併せて、微高地に古墳と集落が営まれ、低地部に水田の営まれていた様相が窺うことができた。

奈良時代の様相は明らかにできなかったが、平安時代には集落、低地部には水田が営まれていたことが確認され、古墳時代後期と同様の様相があったことが窺われた。しかし、その集落は9世紀に集中しているが、このことについては後述する。

中世においては様相が一変する。1区南東部から2区西部にかけて、屋敷遺構があったが、その北側には略西北西—東南東方向に走向する溝群が確認された。また2区から3区の微高地部にかけては、微高地を圍繞するように溝が掘削されていた。また1区北部には水田が営まれていた可能性が窺われた。

近世においては、1～3区全域で、天地返しの痕跡である復旧溝群が散見された。特に2区ではAs-A被災後の近世後期以降の復旧畑が確認され、3区東半部では土地区画の溝や、溜池と見られる遺構などが確認され、復旧溝群と共に、往時の土地利用の様相を見ることができた。

#### (2) 平安時代の竪穴住居と水田

本遺跡で調査した41軒の竪穴住居のうち、古墳時代後期のものは2軒で、他の39軒は平安時代の所産であった。この平安時代の竪穴住居はいずれも9世紀代のもので、9世紀前半の所産の住居と判断されるものが4軒であるのに対して、9世紀後半の所産とできる住居は33軒と多い。更に四半世紀に分類した状態で見ると、これらの竪穴住居に第1四半期のものはなく、第2四半期の住居は2軒、第3四半期は21軒、第4四半期は5軒と、第3四半期の住居が突出して多い。

この9世紀第3四半期での竪穴住居軒数の増加の原因については、平安海進に象徴されるような温暖化や、あるいは牛馬耕による農耕改革による食糧の収穫量の増加などが考えられるが、その明確な理由を提示することはできない。そして、一方、第4四半期に見られる竪穴住居軒数の減少も特徴的な事象であるが、これについてもその理由を明らかにすることはできなかった。

また、As-B水田も、後世の攪乱によって1区の広い範囲、あるいは2区北半では確認できなかったものの、本遺跡調査区の低地部の全域が耕地となっていたものと想定される。その前の時代においても、1区のHr-FA下水田の存在によって同様の状態があったことが、推定される。しかし、1区においてAs-B水田の畦畔が不明瞭であったことから推して、12世紀初頭段階で耕作放棄地が広がっていたことが窺われる。これは、これにAs-B降下の天仁元(1107)年に先立つ11世紀に、峰岸純夫が指摘する、中央では関東を「亡弊の国」と称していた時期、「おそらく自然災害による不作に加えて、役夫工米の過酷な徴収が亡弊の原因」とした(峰岸1980)時期を経て、この亡弊の状態が改善しなかったことを現していると思われるのである。

## 第2節 螺旋状鉄釧

最後に、本遺跡の2区3面12号土坑から出土した、螺旋状鉄釧について若干の所見を述べて、稿を閉じたいと思う。

### ① 螺旋形鉄釧

福島味噌袋遺跡出土の鉄釧は、「螺旋型鉄釧」あるいは「螺旋状鉄釧」と呼ばれるもの(本稿では「螺旋状鉄釧」と述べることにする)で、弥生時代後期に現れ、古墳時代前期まで使用されていた鉄製の腕輪である。

螺旋状鉄釧は、細帯状の鉄材を以て作られたものであるが、こうした鉄材を以て作製される鉄釧は、野澤誠一の集成(野澤2002)などにより、本遺跡例を含め、長野県と関東地方を中心とする、1都6県の35遺跡51例が知られる。このような鉄釧には1周巻かれたものと、2周以上の周回で螺旋状に巻き上げて作られるものの二種類があるが、前者は1段で完結する帯状輪型あるいは単環状と呼ばれるものであり、後者は巻き上げてつくる螺旋状の二種類があるが、土屋了介は前者が断面長方形と断面三角形の二種類に分けられ、更に「両環状鉄釧の派生として螺旋状鉄釧を理解できないこと」を指摘している。従って本遺跡例は、両環状鉄釧を含めない螺旋状鉄釧を概観する中で、評価したいと思う。

本稿で検討に使用した螺旋状鉄釧は、長野県須ヶヶ峯遺跡、浅川扇状地遺跡、塩崎遺跡群伊勢崎地点、檀田遺跡、五里田遺跡、丘中学校遺跡、後田原遺跡、荒神山おまんわし遺跡、西一里塚遺跡群の各1例、篠ノ井遺跡群新幹線地点2例、同遺跡群聖川堤防地点3例、上田原遺跡、剣ノ宮遺跡、後家山遺跡の各2例、群馬県石墨遺跡2例、有馬遺跡と当遺跡の1例、埼玉県下田町遺跡1例、東京都七社神社前遺跡、多摩ニュータウンNo.200遺跡、下戸塚遺跡、西早稲田三丁目遺跡の各1例、千葉県大井戸八木遺跡、寒沢遺跡、ヲサル山遺跡の各1例、神奈川県受地だいやま遺跡、大原遺跡の各1例、1都5県30遺跡の、35例である。しかし全体としては、長野県の出土事例が多い。

なお、本遺跡例は、渋川市の有馬遺跡の1例と、沼田市の石墨遺跡の2例に続いて、群馬県内出土例4例目ということになる。

### ② 福島味噌袋遺跡の螺旋状鉄釧

12号土坑は、他の出土遺物から推して、平安期の所産と考えられる土坑であり、螺旋状鉄釧の出土位置も覆土の上位であり、流れ込みに伴うものと判断された。従って本鉄釧は12号土坑に伴うものではなく、出土遺構との関係で論ずる資料ではないのであるが、以下に、鉄釧そのものについて若干詳述する。

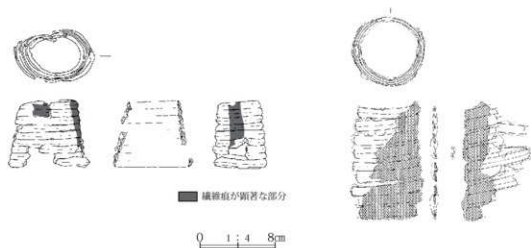
本釧は一段分が一周して残るものではあるが、片側がこの一段を除いて失われており、反対側では9段(巻)を確認することができた。推定される全体の形状は、上端が径6.5cm、下端が径7.5cmと推定され、高さは12.1cmを測り、円錐台を呈するものと想定される。以下、円錐台の底面側を「下方」、頂部側を「上方」と称ふことにする。

なお、本釧の外面には布目痕が認められたが、その詳細を確認することはできなかった。

さて、本鉄釧の素材となる鉄板(環体)は、錆化しているため、正確な測定はできなかったが、環体は外面に突出部を有する、二など辺三角形に近い五角形の横断面を呈するもので、その幅は10.80～12.91mm、平均11.83mmを測り、端部の厚みは1.43～2.14mm、平均1.75mm、頂部と底辺との厚みは、2.51～4.12mm、平均3.40mmを測る。

螺旋状鉄釧は、鍛造で作られ、研磨により整形される二など辺三角形の横断面形を呈するもの(野澤誠一2002)とされるが、本釧は、上述のように錆化していたため、その加工痕跡を確認することはできなかった。また、本釧路の横断面形は五角形を呈するが、上縁を0、下縁を100とした場合、その割合は47.73～57.48、平均で54.38を測り、その頂部は、僅かだが下縁側に寄っている。鉄釧の横断面形は、左右対称を意図して作成されていると思われるが、本釧に見られる頂部の片寄りとは、利き腕側が、外面の2面のうち広い側を形作ったものと思慮される。

さて、本釧の素材である板の長さは、一周分の測定ができた5段目の外径が22.8cm、内径が21.8cmを測り、その平均が22.3cmとなるが、測定箇所が中位であるため、上下両側の径の差を相殺できるとすれば、単純計算すると9段で200.7cmを測る。幅11mm弱で、3.4mm程の厚さの五角形の横断面形に加工した、長さ2m余りの素材を用意した、技術は大変高度であったものと思慮される。



第231図 福島味噌袋遺跡(右)と長野県西一里塚遺跡(左)出土の螺旋状鉄釘

(西一里塚遺跡出土螺旋状鉄釘は(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター (2012)『園り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』pp.91より転載)

## ② 福島味噌袋遺跡の螺旋状鉄釘の評価

土屋了介によれば螺旋状釘は南関東で先行して用いられ、弥生時代後期後半に中部地方で用いられ始めたが、前者が環体幅8mm 5段型であるのに対し、後者が環体幅4mm10段型であり、両者の分布域に重なりはなく、両者は環体幅8mm 5段型と環体幅4mm10段型の堆積が共に6.9cm<sup>3</sup>であり、ほぼ同じ素材を使うものと評価している。また、環体幅8mm10段型のもがあり、その分布は東京北部から長野県佐久市にあり、環体幅8mm 5段型と環体幅4mm10段型のそれぞれの分布域の中心部では分布しないということであり、中部高地、東京北部から長野県佐久市、東京湾岸に、鉄釘の形式による地域設定がなされるとされている(土屋2009 c)。この設定に従えば、本遺跡例は環体幅8mm10段型に分類され、東京北部から長野県佐久市という、その分布域に含まれる。また、本遺跡出土鉄釘の体積はおおよそ61.1cm<sup>3</sup>を測り、環体幅8mm 5段型と環体幅4mm10段型の螺旋状鉄釘の堆積の9倍の量の素材を用いていることが分かるのである。

また土屋は、環体幅8mm 5段型の環体の横断面形が二など辺三角形から変化しないのに対し、環体幅4mm10

段型は環体幅が6mm程度に増加し、横断面形も五角形に変化する傾向を把握している(土屋2009 c)。本遺跡出土鉄釘の含まれる8mm10段型の形態変化は把握できないが、環体幅4mm10段型と同様の変化が生じていたとするならば、横断面形が五角形を呈する本遺跡例も新しい時期のものである可能性を有する。

以上の点から、福島味噌袋遺跡出土の鉄釘は、螺旋状鉄釘に分類され、3地域に分けられる螺旋型鉄釘の分布域のうち、中間の東京北部から長野県佐久市分布域に含まれるものである。本遺跡出土鉄釘は幅1cm強、長さ2mほどを測る、高度な技術による細板状の均質な素材で作成された、比較的大型の部類に入る鉄釘と評価される。また、螺旋状鉄釘は弥生時代後期から古墳時代前期の所産の鉄製品である。しかし、本遺跡例は、第230図に図示した、弥生時代後期の長野県佐久市西一里塚遺跡群SM07(木棺墓)出土鉄釘路(第230図左)の横断面形のような二など辺三角形ではなく、五角形を呈していることから、時期の下る可能性を有するものであり、本遺跡周囲の遺跡分布を勘案すれば、古墳時代前期の所産として把握されるものと思慮される。

## 【参考文献】

## 【第1章】

国土庁 1996『首都圏整備計画』

## 【第2章】

新井 仁2001『群馬県における平安時代の水田開発について』研究紀要19

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

新井房夫1962『群馬大紀要自然科学編』10 p.1-79.

井上唯雄1992『第4章 律令時代の玉村町 第5節 古代信仰と神社』『玉村町誌』通史編 上巻

尾崎喜左雄1967『上野玉村古墳群発掘調査概報』

尾崎喜左雄1976『群馬の地名』

唐澤定市1988『玉村御厨』『国史大辞典』9 吉川弘文館

澤口 宏1995『第三章 地形・地質 第二節 台地』『玉村町誌 通史編 下巻2』p.1516

石井榮一2009『B区4面より検出された建物遺構の建築史的検討』『福島大島遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

玉村町誌編集委員会1992『玉村町誌 通史編 上巻』

中里正憲2000『砂町遺跡における大形野の調査例』群馬考古学手帳10

中島直樹1999『Ⅴまとめ』『沖遺跡』玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会

中島直樹・吉澤 学2004『群馬県玉村町における条里地割の復原』『東国史論』19

土生田純之2008『古墳時代の実像』『古墳時代の実像』

深澤敦仁2013『玉村周辺の古墳時代のはじまりを考える』『玉村町の前期古墳』平成25年度玉村町歴史資料館 第18回企画展資料

石島和大2009『玉村の古墳群を考える』群馬考古資料里帰り展資料 玉村町歴史資料館

築瀬大輔2013『中世上野の地域構造と利根川—上野と西上野』『群馬県歴史博物館紀要』第33号、pp45-66

山崎 一1978『群馬県古城址の研究』上巻、pp125-126

吉田 稔2003『北島式の提唱』『埼玉考古別冊7 埼玉考古学会シンポジウム、北島式上巻とその時代』

若狭 徹2002『古墳時代の地域経営』『考古学研究』49-2

若狭 徹2011『中期の上毛野』『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『西善尺司遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『中内村前遺跡(1)』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『西田遺跡 村中遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『横手南川端遺跡 横手湯田遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『徳丸仲田遺跡(2)』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『上福島中町遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『福島飯塚遺跡(1)』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『福島飯玉遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『箱石茂間山古墳 不動山古墳』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『齊田中崩地遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2011『齊田竹之内遺跡』

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『東上之宮遺跡』

玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』

玉村町教育委員会1993『小泉大塚遺跡』

玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会1999『沖遺跡』

玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会2001『角間城遺跡』

玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会2003『一万田遺跡』

玉村町歴史資料館2001『玉村町の古墳時代』企画展資料

玉村町歴史資料館2002『玉村町の中世展』企画展資料

玉村町歴史資料館2006『天明三年茂間山焼尻押と玉村町』企画展資料

玉村町歴史資料館2008『玉村町の地区の歴史Ⅰ 玉村地区編』企画展資料

玉村町歴史資料館2009『玉村町の地区の歴史Ⅱ 上郷地区編』企画展資料

玉村町歴史資料館2010『玉村町の地区の歴史Ⅲ 芝根地区編』企画展資料

玉村町歴史資料館2011『国境河川地域、玉村町の戦国時代』企画展資料

玉村町歴史資料館2013『玉村町の前期古墳』企画展資料

群馬県教委1988『群馬県の中世城館跡』

## 【第3章】

石守 晃2001『復元住居を用いた境実実験再び』『研究紀要』19、95-104、

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

大塚昌彦

## 【第4章】

岩本 崇2002『東日本における弥生時代鉄剣の製作背景』『古代文化』

VOL.54、pp1-18

菅澤 浩2014『千曲川水系の後期弥生社会—その性格と銅剣・鉄剣を装着した人物について—』『ふたがき群馬台国シンポジウム14 シンポジウム』

『群馬台国時代の甲・信と大和資料集』、pp73-86、香芝市二上山博物館友の会「ふたがき史遊会」

榎原 健2015『鉄剣私考』『古代学研究』207、pp1-6

土屋了介2009 a『弥生時代卑環状鉄剣の形式学的研究—断面長方形・断面二など辺三角形にみる系譜の違い—』『東海史学』第43号、pp73-96

土屋了介2009 b『螺旋状鉄剣の基礎研究—形態と数値的要素を中心に—』『日々』の考古学2』、pp157-169

土屋了介2009 c『弥生時代鉄剣の研究—鉄剣形式の応用研究—』『平成21年度 九州考古学会総会 研究発表資料集』、pp45-53

野澤誠—2000『高山村遺跡調査穴出土の鉄剣』について』『須賀』第50号、pp34-37

野澤誠—2002『銅剣・鉄剣からみた東日本の弥生社会』『長野県立歴史館研究紀要』第8号、pp1-20

藤岡孝司1995『螺旋状鉄剣小考—東日本における展輪の意味』『千葉県文化財センター 研究紀要』16』、pp201-224

表3 1区出土遺物観察表

1面

As-A復旧水田

種 類 PL.No.	No.	種 類 種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第99回 PL.76	1	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	4.2 4.2	玉髓	細片素材。稜線上に潰れあり。		
1号復旧溝群										
第100回 PL.76	2	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	5.3 5.3	石英	縁辺および稜線上に潰れあり。		
3号復旧溝群										
第120回 PL.76	3	在地系土器 烙格	口縁部片	口 底	高		黒灰～白釉	内外面横ナデ。外面被熱。黒色。	溝3	
第120回 PL.76	4	石製品 砥石	1/2	長 幅	厚 重	60.9	砥沢石	4面使用。下部は割落と考えられる。正面は砥面が凹状であるが、裏面は山形を呈する。	溝4	
	5	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	1.9 1.5 2.6	1.0 2.6	石英	稜線部に潰れあり。	溝9
PL.76	6	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	2.5 1.7 6.2	1.5 6.2	石英	稜線上の潰れは少ない。	
PL.76	7	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	1.7 1.1 2.7	1.1 2.7	石英		溝15
7号復旧溝群										
第150回 PL.76	8	瀬戸・美濃 陶器 燈次か	下半1/2	長 幅	厚 重	4.2	灰黄白	内面と外面裏まで鉄軸。		
第150回 PL.76	9	肥前磁器 碗	1/4	口 底	(H.1) (4.2)	高 5.2	白灰	外面雪輪梅木文か。内面無文。高台内に不文様。		
第150回 PL.76	10	銅製品 キセル・吸 い口	破片	長 幅	厚 重	4.4 0.5	0.9 1.68		キセルの吸い口部分。雁首側はつぶれ破損する。	溝18
3号溝										
第180回 PL.76	11	瀬戸・美濃 陶器 腰掛碗	体部一部、底部 1/2	長 幅	厚 重	4.2	白灰	内外面貫入。高台に重焼痕。		
第180回 PL.76	12	瀬戸・美濃 陶器 鉄絵鉢	口縁部片	口 底	高		灰黄	表裏の轆轤目明瞭。		
第180回 PL.76	13	瀬戸・美濃 磁器 碗	口縁部1/4、底 部1/2	口 底	(8.0) (4.0)	高 4.6	白	外面に梅花文、内面無文。底部蛇の目高台。	近代	
第180回 PL.76	14	在地系土器 烙格	口縁部片	口 底	高		灰白～黒灰	焼成良好。破損。		
第180回 PL.76	15	鉄製品 不明	破片	長 幅	厚 重	7.6 7.1	0.7 25.69		くの字形の鉄製品で、断面形では内側が薄くなるが対部とは認められない。両端部とも劣化破損し全体形状不明。	
第180回 PL.76	16	鉄製品 不明	破片	長 幅	厚 重	9.5 3.1	0.5 8.73		厚さ0.5mmの薄い鉄板で、錆化するものの表面には平滑面が見られ一部に刻印状の跡が見られる。近・現代物と考えられる。	
第180回 PL.76	17	鉄製品 不明	破片	長 幅	厚 重	10.8 5.8	1.5 25.96		薄い板状の鉄製品で、中央付近で折れ曲がり両端とも劣化破損する。	
第180回 PL.76	18	銅製品 鏡貨	完形	縦 横	厚 重	2.787 2.778	0.204 4.63		寛永通寶(裏表)。表面は彫浅く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面も彫浅く外縁・波・郭ともやや不明瞭。永と寶の字間に裏面から突き上げるような変形が見られる。	
第180回 PL.76	19	礫石器 敲石	完形	長 幅	厚 重	1152.8		雲母石英片岩	扁平な楕円形の側面に割離痕、下端部に敲打痕が残る。	
第180回 PL.76	20	石造物 板碑片		長 幅	厚 重	6.7 3.6	1.7 43.4	緑色片岩		
第180回 PL.76	21	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	29.5		石英	上部を中心に稜線上の潰れが認められる。	
第180回 PL.76	22	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	39.4		石英	上部は使用頻度が高く、広範囲に潰れている。	
第180回 PL.76	23	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	3.4 3.3	2.7 38.3		石英	
9号溝										
第200回 PL.76	26	製作地不詳 磁器 扇状みぎ	底部1/2	口 底	高	(4.0)		白	外面に酸化コバルトの青、内面無文。高台内1重圏線内に不文様。	近代
第200回 PL.76	27	石製品 砥石	1/2	長 幅	厚 重	121.9		砥沢石	表裏および左右、下小口面の5面使用。表裏面は砥面が凹状に研ぎ減る。	
第200回 PL.76	28	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	3.5		玉髓	細片素材。割離後も使用している。	

## 2面

13号溝

採石 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.76	29	鉄製品 不明	破片	長 幅	2.3 0.5	厚 重	0.4 0.87	断面長方形の角棒状鉄製品で両端は錆びに覆われているが破損の可能性も有る。木質等の痕跡は見られない。

## 3面

1号住居

第31図 PL.76	30	土師器 杯	2/3	口 底	12.2 9.2	高	3.6	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第31図 PL.76	31	土師器 杯	1/5	口 底	12.1 8.2			細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第31図 PL.76	32	土師器 費	口縁部1/4	口	20.4			細砂粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は頸部から胴部がヘラナデ。	
第31図 PL.76	33	礫石器 磨石?	完形	長 幅	7.7 9.4	厚 重	91.4	10.1 326.9	デイサイト凝灰岩	扁平礫素材。上部破断面に磨面がある。破損後の再利用と考えらる。
第31図 PL.76	34	石製品 カマド構築材 (切石)	破片	長 幅	7.7 9.4	厚 重	3.8 129.5	3.8 129.5	未固結凝灰岩	小片だが方形の切石と推定される。外側の平坦面は吸炭し黒色となっている。
第31図 PL.76	35	石製品 カマド載石		長 幅	7.9 7.6	厚 重	3.8 129.5	3.8 129.5	未固結凝灰岩	

32号溝

第40図 PL.76	36	埴輪陶器 片口鉢	底部片	口 底		高			白灰	底部高台が付くが欠損。底部内面平滑。
---------------	----	-------------	-----	--------	--	---	--	--	----	--------------------

11号土坑

第42図 PL.76	42	土師器 杯	完形	口 底	11.6 9.4	高	3.1		細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内外面口縁部にスガが付着。	外面体部に、内面底部に「子」の墨書。
第42図 PL.76	43	土師器 杯	3/4	口 底	12.1 9.4	高	3.5		細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内外面口縁部にスガが付着。	外面体部と内面底部に「子」の墨書。
第42図 PL.76	44	土師器 杯	1/2	口 底	12 8.7	高	3.1		細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	外面体部と内面底部に「子」の墨書。
第42図 PL.76	45	土師器 杯	1/6	口 底	12 9.2	0 0	0 0		細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第42図 PL.76	46	須恵器 杯	完形	口 底	12.2 7.1	高	3.3		細砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

33号ヒット

第42図 PL.76	47	須恵器 椀	2/3	口 底	13.2 6	高	3.9		細砂粒・粗砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
---------------	----	----------	-----	--------	-----------	---	-----	--	-------------	--------------------------	--

## 4面

45号溝

第46図 PL.76	37	土師器 杯	完形	口 底	9 10.3	高	3.3		細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部と底部は手持ちヘラ削り。	
第46図 PL.76	38	土師器 台付費	1/4	口 高	13.5 4.7				細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。器面磨滅のため単位不詳。	
第46図 PL.76	39	礫石器 磨石	1/2	長 幅		厚 重	751.8		粗粒輝石安山岩	楕円形の正面中央部と上部に敲打痕が残る。表裏面には磨面が認められる。	

50号溝

PL.76	40	鉄製品 不明	破片	長 幅	4.2 1.0	厚 重	1.0 4.07			断面四角の角棒状で全体に厚い錆びに覆われ脆弱で両端とも劣化破損し詳細は不明。
-------	----	-----------	----	--------	------------	--------	-------------	--	--	--

8号土坑

第42図 PL.76	41	須恵器 椀	完形	口 底	13.9 7.4	台 高	6 5.5		細砂粒・粗砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
---------------	----	----------	----	--------	-------------	--------	----------	--	-------------	----------------------------	--

遺構外の出土遺物

第53図 PL.76	50	土師器 台付費	南部IV層 口縁部-胴部片	口 底	17.3				細砂粒/良好	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目後、斜に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第53図 PL.76	64	土師器 台付費	中東部V層 口縁部-体部1/2	口 底	10.7 16	0 0	0 0		細砂粒/良好	口縁部横ナデ、頸部から胴部は縦位-斜めのハケ目後頭部下にナデと横位のハケ目。内面は頸部にハケ目、胴部はナデ。	中東部V層
第53図 PL.76	65	土師器 台付費	北東 底部-胴部片	底 厚	7.9 5.1				細砂粒/良好	胴部と頸部は接合。胴部底部は内側に折り返し。胴部から胴部上半はハケ目、胴部下半はナデ。内面はヘラナデ。	北東
第53図 PL.76	48	土師器 杯	南部IV層 1/5	口 底	11.8 8.6				細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第53図 PL.76	49	土師器 杯	南部IV層 小片	口 底	12 9				細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第53図 PL.76	59	土師器 杯	遺構外 1/4	口 底	12.6 8.3				細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	遺構外
第53図 PL.76	60	土師器 杯	北東部 1/4	口 底	13.4 9.8				細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。口縁部下にナデ部分が残る。内面は体部から口縁部に放射状凹文。	北東部
第53図 PL.76	61	土師器 杯	北東V層 1/6	口 底	9 9.4				細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	北東V層

種目 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第5308 PL.77	63	土師器 高杯	中東部 3/4	口 23.8 底 8.2	高 11.9 厚 14.9	細砂粒/軟質	杯身部と脚部は接合、外面の整形は器面磨滅のため不鮮明。口縁部下半から脚部はヘラナデか。内面は杯身部は上砂が付着のため不明。脚部は上半がヘラナデ。	脚部中に透孔が3ヶ所。中東部
第5308	62	土師器 鉢	南西部 口縁部片	口 23		細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。器面磨滅のため単位などは不明。	南西部
第5308	66	土師器 鬘	北東部 頸部-胴部片			細砂粒/良好	頸部は器面磨滅のため単位不明。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	北東部
第5308 PL.76	67	須恵器 杯	東部V層 体部-底部1/2	底 6.4		細砂粒/還元焰	ロクロ整形、回転車削り。底部は回転車削り無調整。	東部V層
第5308 PL.76	68	須恵器 椀	北東部5層 口縁部-底部1/3	口 13.6 底 6.8	台 5.5 高 4.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰	ロクロ整形、回転車削り。底部は回転ナデ、高台は貼付。	北東部5層
第5308	69	須恵器 椀	北東部 底部片	底 6.5		細砂粒/酸化焰	ロクロ整形、回転車削り。底部は回転ナデ、高台は貼付。	北東部
第5308	57	土製品 土鉢	V層 1/2	長 3.6 幅 1.8	孔 0.3	微砂粒/良好	外面はナデ。	V層
第5308 PL.77	58	土製品 土鉢	表採 1/4			細砂粒/良好	外面はナデ。	表採
第5408	51	龍泉京系青 磁陶	IV層北東 胴部片	口 底		暗灰	内面素地に印刷文。釉は透明度が高く、貫入する。	中世、IV層北東
第5408 PL.77	71	中国磁器 白磁皿	表採 口縁部一部、底 部1/4	口 (9.6) 底 (6.0)	高 1.9	灰白	底部から口縁部に直線的に開く。内外面に反輪。口唇部上面と口縁部内面の縁を接ぎ取る	
第5408 PL.77	53	古瀬戸 おろし皿	IV層北東 口縁部片	口 底	高	白灰	口唇部内面に折り返し状。外面と口縁部内面に厚く反輪、貫入する。	中世、IV層北東
第5408 PL.77	54	古瀬戸 おろし皿	IV層北東 口縁部片	口 底	高	白灰	口縁部がく字に内折。口唇部上面に凹輪が巡る。口縁部内外面に薄く反輪。	中世、V層北東
第5408 PL.77	70	瀬戸・美濃 陶器 飯鉢	攪乱 口縁部1/3、底部 片	口 (9.8) 底 4.2	高 6.1	くすんだ黄白	外面の凹輪が太く、高台がやや高い。外面下半の鉄輪が薄く、光沢なし。内面の凹輪にムラ。貫入する。	
第5308	55	尾張陶器 片口鉢	V層北東 底部片	口 底	高	白灰	内面に自然輪がわずかに掛かる。	中世、V層北東
第5308	56	在地系土器 I区	IV層北東 1/4	口 (8.4) 底 (4.4)	高 2.5	くすんだ淡緑	底部から口縁部に直線的に開く。体部は厚手。底部回転車削り、無調整。口縁部内外面全体に煤油付着、黒色化。	IV層北東
第5308 PL.77	72	在地系土器 I区	II区2面IV層 一部欠損	口 7.2 底 0.4	高 2.1 厚 0.0	にぶい緑/0/0	体部直線的に開く。底部回転車削り後、ナデ。	
第5308	52	在地系土器 内耳掛	V層南東 底部0/4	口 底	高	橙	底部回転車削り。	中世、V層南東
第5408 PL.77	73	銅製品 キセル・磨 首	器完形	長 4.1 幅 1.7	厚 2.1 重 7.74		キセルの磨首部分。吸い口側端面上面の接合痕から外れる様に変形している。	
第5408 PL.77	74	鉄製品 刀子	破片	長 6.7 幅 1.8	厚 0.6 重 9.09		棒・刃側面に間を持つ刀子破片で、刃側側面に劣化破損する。茎部に木等質の痕跡は見られない。	
第5408 PL.77	75	鉄製品 不明	北東部 破片	長 2.6 幅 0.5	厚 0.5 重 0.98		錆化により形状は不明だが、断面四角の短い棒状鉄製品。内端とも錆に覆われ劣化のため詳細は不明。	
第5408 PL.77	76	銅製品 銭貨	縦 2.490 横 2.458	厚 0.172 重 3.19			元豊通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが一部劣化破損する。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第5408 PL.77	77	銅製品 銭貨	南西部 縦 2.429 横 2.412	厚 0.111 重 2.51			皇宋通貨。表面は彫浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	南西部
第5408 PL.77	78	銅製品 銭貨	北西部 縦 - 横 -	厚 0.122 重 1.39			銭貨の破片で、表面は彫浅いが文字はつづれ不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。破断面は錆化している。	北西部
第5408 PL.77	79	銅製品 銭貨	北西部 縦 - 横 -	厚 0.145 重 1.16			銭貨破片で○の字部分のみ残存。破断面は錆化している。表面は彫浅いが文字は不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。	北西部
第5408 PL.77	80	碑石器 不明	完形	長 幅	厚 重 74.7	流紋岩	扁平小形碑の上下端部に敲打痕および磨滅痕が残る。表裏面に鋭利な道具によると推定される線状痕が見られる。	
第5408 PL.77	81	碑石器 磨石	破片	長 幅	厚 重 193.9	流紋岩	扁平様の破片。正面および右側面に磨面が見られる。	
第5408 PL.77	82	碑石器 砥石?	略完形	長 幅	厚 重 178.5	変質玄武岩	扁平な円碑素材。表裏面に鋭利な道具によると推定される線状痕が見られるため、砥石としたが、別器種の可能性がある。	
第5408 PL.77	83	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 27.9	石英	縁辺および稜線に潰れあり。	
第5408 PL.77	84	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 7.5	石英	縁辺および稜線に潰れが連続的に認められる。	
第5408 PL.77	85	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 15.4	石英	稜線に潰れあり。裏面に自然面を残す。	
第5408 PL.77	86	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 21.9	石英	稜線に潰れあり。	
第5408 PL.77	87	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 8.6	石英	縁辺および稜線に潰れあり。	
第5408 PL.77	88	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 17.6	石英	稜線に潰れあり。	
第5408	775	在地系土器 焙烙		長 幅	厚 重			



表4 2区出土土物観察表(凡例 口:口径 底:底径 台:台径 高:器高 長:長さ 重:重量単位 径・高・長・幅:cm 重量:g)

## 1面

## 1号復旧講群

種別 PL-No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.77	89	瀬戸・美濃 陶器 香炉	口縁部6/6 1/4	口 底	(7.7) (6.0)	高 3.2	くすんだ淡黄	脚は不明。内面口縁部から外面まで胎輪。
第57図 PL.77	90	肥前磁器	底部片	口 底	(4.4)	高	白灰	外面に染付。見込みの輪を乾の目状に掻き取る。
第57図 PL.77	91	瀬戸・美濃 陶器 露碗	1/8	口 底		高	灰	体部外面に磨目・切っ先状の2種の瓦割で文様施文。口縁部外面と内面に胎輪。
第57図 PL.77	92	銅製品 キセル・吸 い口	一部欠損	長 幅	5.6 0.9	厚 重 1.0 5.15		表面は灰褐色で劣化により荒れている。雁首および吸口端部と劣化破損する。吸い口側端部より2cm程で凹み変形が見られる。

## 2号復旧講群

第57図 PL.77	93	肥前磁器 青磁香炉	口縁部1/8	口 底	(11.0)	高	灰白	口唇部から外面に水色の灰輪、貫入する。	
第57図 PL.77	94	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 8.8 1.4 16.6		石英	稜線上に潰れが連続的に認められる。	
	95	石製品 火打石	不明	長 幅	2.5 3.0	厚 重 1.4 16.6		石英	

## 3号復旧講群

第57図 PL.77	96	瀬戸・美濃 陶器 皿	1/8	口 底	(11.0) (6.0)	高 2.0	灰黄白	内外面に長石輪。
第57図 PL.77	97	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 10.3		石英	縁辺に潰れあり。

## 4号復旧講群

第57図 PL.77	98	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 3.4		玉髓	剥片素材。剥離後も使用し、縁辺に微小剥離面と潰れが見られる。	
	99	石製品 火打石	不明	長 幅	1.8 2.3	厚 重 1.7 6.6		石英	

## 2面

## 1号講

第70図 PL.77	100	須恵器 鉢	1/4	口 底	13.6 6.3	台 高 6.1 5.5	細砂粒/酸化塩/に ぶい黄緑	ロクロ整形、回転き回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	内面の一部に 透?
	101	須恵器 封釜	蹲片				細砂粒/酸化塩/灰 黄	ロクロ整形。蹲は貼付。	
第70図 PL.77	102	土製品 土鏝	略1/2	0	0		微砂粒/良好/灰青	外面はナデ。	
第70図 PL.77	103	石製品 砥石	1/2	長 幅	厚 重 23.8		珪質頁岩	4面使用。上部小口面も平滑である。縁辺に刃割らし傷状の線状痕が残る。	
第70図 PL.77	104	礫石器 敲石	完形	長 幅	厚 重 184.9		粗粒輝石安山岩	小形棒状礫素材。上下端部に敲打痕、正面中央部に磨面が認められる。	
第70図 PL.77	105	礫石器 敲石	略完形	長 幅	厚 重 194.6		粗粒輝石安山岩	扁平な楕円礫の側面に敲打痕が認められる。	
第70図 PL.77	106	礫石器 敲石	完形	長 幅	厚 重 264.8		砂岩	右側面礫楕部および正面に敲打痕が残る。左側面および下面は破断面だが、破損後加工を施している。	
第70図 PL.77	107	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 25.9		石英	稜線上に潰れあり。	
第70図 PL.77	108	石製品 不明	完形	長 幅	厚 重 261.8		二ツ房軽石	楕形。平ノミ状工具による整形痕および断面V字状の線状痕が認められる。	

## 1+号講

第70図 PL.77	109	灰釉陶器 長頸壺	底部片	底	14.2		細砂粒・黒粒/還元 塩/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。底部はヘラ削り。	
---------------	-----	-------------	-----	---	------	--	-------------------	-----------------------	--

## 2号講

第70図 PL.77	110	在地系土器 片口鉢	底部1/5	口 底		高	橙	体部内面平滑。底部内外面荒れ。	中世
第70図 PL.77	112	在地系土器 片口鉢	体部片	口 底		高	暗灰	内面丁寧なナデ、外面粗いナデ。内面下半に縦位の粗い磨面施文。	中世
第70図 PL.77	113	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口 底		高	くすんだ紫灰	内面丁寧なナデ、外面粗いナデ。内面に縦位の粗い磨面施文。内面使用により摩耗、底部やや摩耗。	中世
第70図 PL.77	114	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	底部1/6	口 底	(14.0)	高	灰黄白	内外面に磨目。底部回転糸切り痕。	
第70図 PL.77	115	尾張陶器 片口鉢	体部片	口 底		高	淡灰	外面に磨目。内側に自然輪。	中世
第70図 PL.77	116	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底		高	暗灰	内外面磨目。	中世
第70図 PL.77	117	在地系土器 内耳罎	口縁部片	口 底		高	くすんだ白灰	口縁部外折。内外面ナデ。	
第70図 PL.78	118	礫石器 敲石	破片	長 幅	厚 重 251.4		砂岩	棒状礫の上部面に敲打痕が残る。下部欠損。	

## 3号溝

種別 PL-No	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石・素材等	成形・形状の特徴	備考
第71号 PL-78	119	礫石器 敲石	2/3	長幅	厚 186.3	粗粒輝石安山岩	棒状礫の上端および礫後部を中心に敲打痕が残る。	

## 4号溝

第71号 PL-78	120	尾張陶器 片口鉢	口鉢部片	口 底	高	灰	薄手硬質で瓦質。口縁部丸く肥厚。	中世
---------------	-----	-------------	------	--------	---	---	------------------	----

## 5号溝

第71号 PL-78	121	土製品 土鉢	完形	長幅	5.6 孔重 1.6 12.8	微砂粒/良好/灰白	外面はナデ。	
第71号 PL-78	122	礫石器 敲石	2/3	長幅	厚 640.9	ひん石	棒状礫の上端小口部に敲打痕が認められる。	
第71号 PL-78	123	礫石器 敲石	完形	長幅	厚 552.8	雲母石英片岩	扁平な楕円礫の左側面および上下端部に敲打痕が残る。	
第71号 PL-78	124	礫石器 敲石	完形	長幅	厚 499.0	流紋岩	扁平楕円礫素材、上端部の敲打痕が顕著である。下端部には連続する割離痕と摩滅が見られる。	

## 7号溝

第71号 PL-78	125	須恵器 椀	底部-底部3/4	底台	6 6.1	6 6.1	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元焰/にぶ い黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
PL-78	126	鉄滓	破片	長幅	3.6 4.4	2.1 23.11		表面黒色の鉄滓破片で、一部黒色および黒色ガラス化光沢部分も見られる。全体に丸い溶融面で一方のみ1×3cm程の破断面が見られる	

## 8号溝

第71号 PL-78	127	礫石器 敲石	完形	長幅	厚 372.9	粗粒輝石安山岩	礫部および上端部に著しい敲打痕が残る。下面は表面中央部が摩滅し凸状を呈し、縁辺に割離痕および摩滅が見られる。表面には鋭利な道具によると推定される線状痕が残る。全体的に使用度が高く、スタンプ形石器の再利用の可能性もある。	
---------------	-----	-----------	----	----	------------	---------	---	--

## 16号溝

第71号 PL-78	128	須恵器 椀	底部片	底台	6 6.3		細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第71号 PL-78	129	常滑陶器 片口鉢か	体部片	口 底	高		暗灰	瓦質で硬質。外面褐色に変色。	中世

## 20号溝

第71号 PL-78	130	須恵器 椀	底部-体部片	底台	6 6.5		細砂粒・濁粒/酸 化焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
---------------	-----	----------	--------	----	----------	--	------------------	----------------------------	--

## 23号溝

第71号 PL-78	131	須恵器 椀	2/3	口 底	16.2 8.8	台 高	8.7 7.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第71号 PL-78	132	須恵器 椀	1/3	口 底	16.9 8.2			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。

## 23号土坑

第75号 PL-79	133	土師器 甕	口縁部片	口	20.6			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
---------------	-----	----------	------	---	------	--	--	-----------------	---------------------------------

## 26号土坑

第75号 PL-79	134	須恵器 椀	体部-底部片	底台	8 7.6	0 0	0 0	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。底部切り難し技法は不明、高台は貼付。
---------------	-----	----------	--------	----	----------	--------	--------	----------------	---------------------------------

## 3面

## 1号住居

第80号 PL-78	136	土師器 杯	完形	口 底	12.8 4.5	高	6.2	細砂粒/良好	口唇端部は平坦面をつくる。口縁部は横ナデ、体部(鏡下)から底部は手持ちヘラ削り。
第80号 PL-78	137	土師器 杯	口縁一部欠	口 底	12.6 4.5	高	5.7	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。底部は木煎痕が残る。内面は底部から体部に放射状へら磨き、器面磨滅のため単位不明瞭。
第80号 PL-78	138	土師器 杯	3/4	口 底	13 12.4	高	6.7	細砂粒/良好	口唇端部は平坦面をつくり、ごく細い凹線が通る。口縁部は横ナデ、体部(鏡下)から底部は手持ちヘラ削り。
第80号 PL-78	139	土師器 杯	3/5	口 底	13.1 12.4	高	6.3	細砂粒/良好	口唇端部に平坦面をつくる。口縁部は横ナデ、体部(鏡下)から底部は手持ちヘラ削り。
第80号 PL-78	140	土師器 鉢	5/6	口 底	11.8 7	高	6.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好	口縁部は横ナデ、体部上半はナデ、下半はヘラナデ。底部はヘラ削りか。
第80号 PL-78	141	土師器 甕	3/4	口 底	13.3 6.7	高 胴	31.1 20	細砂粒・粗砂粒/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。
第80号 PL-78	142	土師器 甕	2/3	口 底	18.2 6.7	高 胴	30.7 22	細砂粒・粗砂粒/ 良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。
第80号 PL-79	143	土師器 甕	底部欠	口	15.4 18	高		多量の細砂粒・少量の粗砂粒/良好	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第80号 PL-79	144	土師器 甕	口縁一部欠	口 底	23.4 7.8	高	29	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ後や中細いへら磨き。

検体 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第81区 PL-79	145	土師器 甗	1/3	口 底	24.4 8.3	高 27.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第80区 PL-146		土師器 甗	底部片	口 底	11.6 7.2	高 3.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好	底部と胴部はへら削り、底部周辺はナデ。内面はへらナデ。
2号住居								
第83区 PL-79	147	土師器 杯	完形	口 底	11.7 7.9	高 3.2	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第83区 PL-79	148	土師器 杯	3/4	口 底	11.8 8.1	高 3.5	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第83区 PL-79	149	土師器 杯	2/3	口 底	11.6 7.9	高 3.5	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第83区 PL-79	150	土師器 杯	2/3	口 底	11.8 7.8	高 3.4	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。 内面の口縁部にススが付着。灯明として使用か。
第83区 PL-79	151	土師器 杯	底部欠	口 底	12.2 7.7	高 3.4	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。 内面体部と外面口縁部の一部にススが付着。
第83区 PL-79	152	土師器 甗	口縁1/4	口	19		細砂粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第83区 PL-79	153	土師器 甗	底部～体部片	底	4		細砂粒/良好	内面胴部に輪積痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。
第83区 PL-79	154	土師器 台付甗	脚部片	脚	9.8		細砂粒/良好	脚部は外面が横ナデ、内面は上半がへらナデ、下半が横ナデ。
第83区 PL-79	155	須恵器 杯	完形	口 底	12.2 5.4	高 3.8	細砂粒/酸化燧	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第83区 PL-79	156	須恵器 杯	1/2	口 底	12.6 5.2	高 4.5	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元燧	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第83区 PL-79	157	須恵器 甗	1/4	口 底	15 7.4	台 7 高 4.9	細砂粒/酸化燧	ロクロ整形、回転右回り。底部はナデ、高台は貼付。 外面体部下下に焼成後のへら描き。
第83区 PL-79	158	須恵器 甗	1/4	口 底	14.3 7.4	台 7 高 5.1	細砂粒/還元燧	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第83区 PL-79	159	須恵器 甗	1/3	口	13		細砂粒/還元燧	ロクロ整形、回転右回り。外面はへら状工具か。
第83区 PL-79	160	須恵器 甗	体部～底部片	底 台	6.5 6.4		細砂粒/還元燧	ロクロ整形、回転右回り。底部はナデ、高台は貼付。
第83区 PL-79	161	鉄製品 不明	破片	長 幅	6.1 0.8	厚 2.55		断面長方形で幅5mm程の帯状鉄製品で両端は劣化破損する。全体的には直線的だが途中一か所への字型に曲がる。
3号住居								
第84区 PL-79	162	土師器 甗	口縁部～胴部片	口 底	20.9 21		細砂粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第84区 PL-79	163	須恵器 杯	1/2	口 底	11.8 5.8	高 3.7	細砂粒/酸化燧	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
4号住居								
第86区 PL-79	164	土師器 杯	ほぼ完形	口 底	12 9	高 3.5	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第86区 PL-79	165	土師器 杯	ほぼ完形	口 底	11.6 8	高 3.3	細砂粒/良好	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指痕が残る。底部は手持ちへら削り。
第86区 PL-79	166	土師器 甗	口縁部片	口	20.2		細砂粒/良好	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第86区 PL-79	167	須恵器 甗	1/3	口 底	12.5 6	高 3.6	細砂粒/良好	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
5号住居								
第88区 PL-79	168	須恵器 杯蓋	1/4	口	15.7			ロクロ整形、回転右回り。天井部は中央部が回転へら削り。
6号住居								
第90区 PL-80	169	土師器 杯	ほぼ完形	口 底	12.2 7.1	高 3.8	細砂粒/良好/に 赤い燧	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第90区 PL-80	170	土師器 杯	2/3	口 底	11.8 8	高 3.4	細砂粒/良好/明赤 燧	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第90区 PL-80	171	土師器 杯	1/3	口 底	11.8 8.4	高 3.2	細砂粒/良好/に赤 い燧	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第90区 PL-80	172	土師器 甗	口縁1/2	口	17.4		細砂粒/良好/燧	口縁部は横ナデ、頸部はナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第90区 PL-80	173	土師器 台付甗	胴部～底部片	底 脚	4.5 10.4		細砂粒/良好/灰黄 燧	胴部と脚部は接合。胴部はへら削り、底部付近から脚部は横ナデ。内面は胴部と脚部上半はナデ、下半は横ナデ。
第90区 PL-80	174	須恵器 甗	3/4	口 底	12.9 5.3	高 2	細砂粒/還元燧/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第90区 PL-80	175	須恵器 甗	体部～底部片	底 台	5.7 5.6		細砂粒・粗砂粒/ 酸化燧/に赤い燧	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。

## 7号住居

棟号 PL.No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第92区 PL.80	176	土師器 杯	口縁部～底部片	口 10		細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第92区 PL.80	177	土師器 小型甕	口縁部～胴部片	口 11.8 胴 13.1		細砂粒/良好/にぶ い褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第92区 PL.80	178	須恵器 杯	3/4	口 12.8 底 6.1	高 3.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい 褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第92区 PL.80	179	須恵器 杯	口縁～底部1/4	口 13.8 底 6.4	台 6 高 6.6	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/明赤 褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第92区 PL.80	180	土師器 杯	側方 底部片			細砂粒/良好/橙 褐色	底部はヘラ削り。	底部内面に墨 書、判読不能。

## 8号住居

第94区 PL.80	181	土師器 杯	1/4	口 12 底 8	高 3.5 0	細砂粒/良好/にぶ い褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第94区 PL.80	182	土師器 杯	口縁部～胴部片	口 20.4		細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第94区 PL.80	183	須恵器 甕	3/4	口 13.5 底 6.6		細砂粒/酸化塩・ 燧/灰黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。 高台が剥落・欠損後研磨して再度使用。	
第94区 PL.80	184	須恵器 甕	3/4	口 14.2 底 6.9	台 6.2 高 5.3	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩・燧/灰 黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。 高台一部欠損。欠損力所を研磨して再度使用。	
第94区 PL.80	185	須恵器 甕	1/2	口 14.4 底 7	台 6.8 高 5.7	細砂粒/酸化塩・ 燧/にぶい 黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第94区 PL.80	186	須恵器 甕	1/4	口 14 底 0	0 0 0	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/酸化塩/明 黄褐色	ロクロ整形、回転右回りか。	

## 9号住居

第97区 PL.80	187	土師器 杯	ほぼ完形	口 11.6 底 7.5	高 3.5 0	細砂粒/良好/橙 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第97区 PL.80	188	土師器 杯	ほぼ完形	口 12.2 底 8.4	高 3.4 0	細砂粒/良好/橙 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちヘラ削り。	
第97区 PL.80	189	土師器 杯	一部欠損	口 11.8 底 8.7	高 3 0	細砂粒/良好/橙 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第97区 PL.80	190	土師器 杯	底部片			細砂粒/良好/橙 褐色	底部は手持ちヘラ削り。	内面底部には 焼成後に格子 状彫刻。
第97区 PL.80	191	土師器 台付甕	1/2	口 13.7 底 4.1	脚 高 -9.5 -26	細砂粒/良好/にぶ い赤褐色	胴部と脚部は接合。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ 削り、底部付近から脚部は横ナデ。内面は胴部と脚部上半 がヘラナデ。	
第97区 PL.80	192	土師器 甕	口縁部～胴部 1/3	口 19 胴 21		細砂粒/良好/橙 褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。胴部中央にカマド装着時の粘土着。	
第97区 PL.80	193	土師器 甕	口縁部～胴部 1/4	口 21.4 胴 22.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙 褐色	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第97区 PL.80	194	土師器 小型甕	口縁部～胴部 1/3	口 11.5 胴 13.2		細砂粒/良好/橙 褐色	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第97区 PL.81	195	土師器 台付甕	底部片			細砂粒/良好/にぶ い褐色	胴部と脚部は接合。胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面 は胴部がヘラナデ。	
第97区 PL.81	196	土師器 甕	口縁部片	口 20.2		細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第97区 PL.81	197	土師器 甕	口縁部片	口 21		細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第97区 PL.81	198	礫石 敲石	2/3	長 6	厚 重 633.7	粗粒礫石安山岩	棒状礫の上端小口部に最打痕と摩滅が認められる。	

## 10号住居

第99区 PL.81	199	土師器 杯	1/5	口 11.4 底 8.8	高 3.2 0	細砂粒/良好/にぶ い褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第99区 PL.81	200	土師器 杯	口縁部片	口 12.1 底 8.5		細砂粒/良好/明褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第99区 PL.81	201	土師器 甕	底部片	底 4		細砂粒/良好/明褐色	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第99区 PL.81	202	土師器 杯	口縁部片	口 11.4 底 8.4		細砂粒/良好/橙 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第99区 PL.81	203	土師器 杯	1/4	口 13 底 9.6		細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	

## 11号住居

第101区 PL.81	204	土師器 杯	1/2	口 12.6 底 8.5	高 3.6 0	細砂粒/良好/にぶ い褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第101区 PL.81	205	須恵器 甕(行口)	2/3	口 14 底 7	台 高 6.8 5.5	細砂粒/酸化塩・ 燧/にぶい 黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第101区 PL.81	206	須恵器 甕	2/3	口 14.4 底 6.5	台 高 5.8 4.9	細砂粒/酸化塩/浅 黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、周囲は高台を 貼付時の回転ナデ。	

種別 PL_No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第10101 PL-81	207	須臾器 椀	1/4	口 底	14.4 7	台 高	5.9 5.1	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/酸化塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。
第10101 PL-81	208	須臾器 椀	1/4	口 底	14.6 7.4			細砂粒/酸化塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。
第10101	209	須臾器 椀	1/3	口 底	7 6			細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ナデ、高台は貼付。
第10101 PL-81	210	須臾器 皿	1/3	口 底	13.8 6.2	台 高	5.7 2.9	細砂粒・粗砂粒・ 褐粉/酸化塩/に ぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。
第10101	211	須臾器 杯?	底部片	口 底	12.8 14.4			細砂粒・粗砂粒・ 褐粉/酸化塩/明 黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。高台はすべて脱落。
第10101 PL-81	212	上師器 小型甕	口縁部～胴部片	口 底	12.8 14.4			細砂粒/良好/に ぶい褐色	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は頸部から胴部がへらナデ。
第10101 PL-81	213	上師器 甕	口縁部～胴部片	口 底	20.6			細砂粒/良好/に ぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第10101 PL-81	214	上師器 甕	口縁部片	口 底	18.8			細砂粒/良好/に ぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第10101	215	須臾器 杯	小片	口 底	11.8 5	高	3.3	細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整か、底面は器面磨減のため不明。
第10101	216	須臾器 杯	口縁部1/3	口 底	14.6			細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。
第10101 PL-81	217	灰桶陶器 手付瓶	1/2	口 底	15 7	台 高	6.1 5.5	微砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ナデ、高台は貼付。内面底部は磨り磨かれている。施釉方法は刷毛塗りか。
第10101	218	灰桶陶器 手付瓶	胴部片、把手付					微砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか、把手は貼付。胴部上位に鉛刻文。
第10101	219	灰桶陶器 瓶	頸部片					微砂粒・黒色粉/ 還元塩/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施釉方法不明。
第10101 PL-81	220	鉄製品 鉄鉢車	一部欠損	長 幅	10.7 4.2	厚 度	4.3 24.27		紡輪に紡輪が装着された状態で錆化し、紡輪の一端は劣化破損する。他の端部は鉤状の形状を示す。ややとりが気味に終わる。
第10101 PL-81	221	鉄製品 不明	破片	長 幅	3.1 1.5	厚 度	1.1 4.35		断面長方形で一端はやや薄くなるが、刃部とは確定できない。端部は角型で他の端部は劣化破損する。
12号住居									
第10301 PL-81	222	上師器 甕	胴部-底部片	口 底	5 23			細砂粒/良好/に ぶい褐色	内面頸部に輪積痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。
第10301 PL-81	223	上師器 甕	口縁部-胴部片	口 底	21.4			細砂粒/良好/褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第10301 PL-81	224	上師器 甕	口縁1/2	口 底	20.2			細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、頸部はナデ。内面は口縁部から頸部に横ナデ。
第10301 PL-81	225	須臾器 椀	2/3	口 底	14.8 7.7	台 高	6.5 5.2	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい 黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。
第10301 PL-81	226	須臾器 椀	1/3	口 底	14.7 7.5			細砂粒/酸化塩/ 焼/にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。高台欠損後、欠損か所を研磨し、再度使用か。
第10301	227	須臾器 椀	底部	口 底	6.6 6.1			細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。
第10301 PL-81	228	須臾器 杯	1/2	口 底	12.7 5.7	高	4	細砂粒・粗砂粒・ 長石/還元塩/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。
13号住居									
第10501	230	上師器 杯	小片	口 底	12 7.2	高	2.8	細砂粒/良好/に ぶい褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第10501	231	上師器 甕	底部片	口 底	4			細砂粒/良好/明 黄褐色	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。
第10501 PL-81	232	上師器 甕	口縁-胴部上位 1/2	口 底	19			細砂粒/良好/褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第10501	233	上師器 甕	口縁部片	口 底	16.4			細砂粒/良好/明赤 褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
14号住居									
第10601 PL-82	234	上師器 鉢	鉢正形	口 底	17.4 10.8	高	9	細砂粒/良好/に ぶい褐色	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへら削り、底部は手持ちへら削り。内面は口縁部が横ナデ、底部から体部はへら磨きか、単位・方向は不明。
第10601	235	上師器 鉢	1/5	口 底	12 7.2			細砂粒/良好/黄 褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。
第10601 PL-82	236	上師器 台付甕	脚部一部欠	口 脚	11.5 9.1	高 脚	16.5 13.9	細砂粒/良好/に ぶい赤褐色	胴部と脚部は接合。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、脚部下位から脚部は横ナデ。内面は胴部がへらナデ、脚部上半はナデ。
第10601 PL-82	237	上師器 小型甕	口縁部-胴部片	口 底	11.9 12.7			細砂粒/良好/に ぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第10601 PL-82	238	須臾器 杯	3/4	口 底	14.5 7			細砂粒/還元塩/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。高台欠損後研磨して再利用か。
第10601 PL-82	239	須臾器 杯	1/2	口 底	11.6 5.8	高	3.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。

検出 PL.No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10609 PL-82	240	須忠器 椀	器完形	口 底	12.6 7.4		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。 高台欠損・洒落後も使用可。	
第10610	241	土師器 杯	0 底部片				細砂粒/良好/橙	底部はへら削り。	底部内外面に 墨書、判読不 能。
15号住居									
第10609 PL-82	242	土師器 杯	完形	口 底	12 7.8	高 3.3	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちへら削り。	
第10610	243	須忠器 杯	底部1/2	口 底	6		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面体部に墨 書、判読不能。
16号住居									
第10709 PL-82	244	須忠器 椀	1/3	口 底	14.2 6.8	台 高 5.6 5.3	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
17号住居									
第10909 PL-82	245	土師器 杯	1/4	口 底	10 7	高 3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第10910	246	土師器 椀	1/2	口 底	20.8 22.4		細砂粒/良好/にぶ い/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部が へらナデ。	
第10910	247	土師器 椀	口縁部・胴部片	口 底	17.8 19		細砂粒/良好/にぶ い/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部が へらナデ。	
第10910	248	須忠器 椀	器完形	口 底	14.7 7.8	台 高 7 6.2	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第10910	249	須忠器 椀	器完形	口 底	15 6.8	台 高 6.6 5.5	細砂粒・粗砂粒、 径10 <sup>-</sup> 長石/還元 焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第10910	250	土師器 杯	完形	口 底	11.7 8.2	高 3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第10910	251	土師器 鉢	1/6	口 底	18.1 12		細砂粒/良好/にぶ い/褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへら削り、底 部は手持ちへら削り。	
第10910	252	土師器 甕	口縁部片	口 底	18.7		細砂粒/良好/にぶ い/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部が へらナデ。	
第10910	253	鉄製品 鎌	一部欠損	長 幅	8.2 5.2	厚 重 1.0 21.93		右上端部を深く折り曲げ柄着部とした鎌で、柄着部付近 に木質等は確認できない。刃先部は劣化破損する。	
18号住居									
第11109	254	土師器 杯	1/3	口 底	11.2 7	高 3.2	細砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第11109	255	須忠器 椀	1/2	口 底	15 6.7	台 高 6.4 6.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第11110	256	須忠器 椀	1/4	口 底	13.4 7.2	台 高 6.5 6.1	細砂粒・粗砂粒/酸 化焰/にぶい/黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。 高台は貼付。	
第11110	257	灰釉陶器 椀か?	1/4	口 底	16		微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法は不明。	光ケ丘1号窯 式期か。
19号住居									
第11309 PL-83	258	土師器 杯	完形	口 底	11.7 8	高 3.4	細砂粒/良好/にぶ い/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちへら削り。	
第11309	259	土師器 杯	3/4	口 底	11.7 7.7	高 3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちへら削り。	口縁部に赤み がみられる。
第11309	260	土師器 杯	3/4	口 底	11.8 8.2	高 3.4	細砂粒/良好/にぶ い/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちへら削り。	
第11309	261	土師器 杯	口縁部・体部片	口 底	11.3 6.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第11309	262	土師器 杯	口縁部・底部1/5	口 底	12.8 9.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第11309	263	土師器 甕	胴部・底部片	口 底	4.2		細砂粒/良好/灰褐	底部から胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第11309	264	土師器 甕	胴部・底部片	口 底	3		細砂粒/良好/赤褐	底部から胴部はへら削り。内面はへらナデか、器面磨滅の ため単位不明。	
第11309	265	土師器 甕	口縁部片	口 底	13.9		細砂粒/良好/にぶ い/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部が へらナデ。	
第11309 PL-83	266	須忠器 椀	器完形	口 底	14.8 7.6	台 高 6.7 4.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/にぶい/黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第11309 PL-83	267	須忠器 椀	1/2	口 底	14.4 6.9	台 高 6 6.2	細砂粒/還元焰/に ぶい/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第11309 PL-83	268	須忠器 椀	1/2	口 底	14.2 7.4	台 高 6.6 5.6	細砂粒・粗砂粒・ 褐色/還元焰/にぶ い/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第11309 PL-83	269	須忠器 椀	1/3	口 底	15.4 7.2	台 高 6.8 5.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第11309	270	須忠器 椀	口縁1/2	口 底	14.6		細砂粒/還元焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。	

## 20号住居

神図 PL.No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 土・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第11500 PL.83	271	須臾器 椀	底部-体部片	底	8.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は剥落、剥落部分は埋り磨いて再使用か。		
第11500 PL.83	272	須臾器 椀	3/4	口 底	14.7 7.1	台 高	6.3 5.5	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第11500 PL.83	273	須臾器 椀	1/2	口 底	14.4 7.4	台 高	6.4 5.2	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第11500 PL.83	274	土製品 土埴	1/2	孔	0.4			微砂粒/良好/にぶ い黄	外面はナデ。
第11500 PL.83	275	鉄製品 不明	一部欠損	長 幅	15.0 1.3	厚 重	0.8 14.57		断面はほぼ正方形の角棒状鉄製品で、端部は角形で終わり他の端部は劣化破損する。全体に厚く覆われ木質等も見られない。

## 21号住居

第9800 PL.81	276	須臾器 杯	器完形	口 底	12.3 6.3	高	3.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第9800 PL.81	277	鉄製品 釘	器完形	長 幅	8.0 1.3	厚 重	0.8 7.27		断面長方形で先端に向かい細くなるが鋭利には実らない。先端から5cm程は錆化した木質が付着する。頭は角形で折り返し等は見られない。
第9800 PL.81	278	鉄製品 簪?	器完形	長 幅	11.5 1.9	厚 重	1.3 17.18		断面長方形で先端に向かい幅を減じ先端は細く尖る。頭は幅厚とも増大するが折り返し等の形状は示さず、木質等の残存も確認できない。

## 23号住居

第11600 PL.83	775	土師器 甕	口縁部-胴部片	口 底	17.4 0			細砂粒/良好/にぶ い黄	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第11600 PL.83	776	土師器 甕	口縁部片	口	19.8			細砂粒/良好/黄	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第11600 PL.83	777	須臾器 杯	底部	底	6.5			細砂粒・粗砂粒/ 片岩/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は剥落。
第11600 PL.83	778	須臾器 椀	2/3	口 底	14.6 7.6	台 高	6.8 6.2	細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第11600 PL.83	779	須臾器 椀	底部	底	7 6.7			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第11600 PL.83	780	土師器 杯	1/3	口 底	11.7 8			細砂粒/良好/にぶ い黄	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、底部は手持ちへら削り。

## 1号井戸

第12000 PL.83	781	土師器 甕	口縁部片	口	17.6			細砂粒/良好/にぶ い黄	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第12000 PL.83	782	須臾器 杯	完形	口 底	13.7 6.5	高	3.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。

## 2号井戸

第12000 PL.83	783	須臾器 杯	1/4	口 底	10.9 6	高	4	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第12000 PL.83	784	須臾器 杯	1/4	口 底	11.6 6	高	3.4	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第12000 PL.83	785	須臾器 杯	口縁一部欠	口 底	12.5 6	高	3.6	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/にぶい黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第12000 PL.83	786	須臾器 杯	口縁一部欠	口 底	13 6.8	高	4.4	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第12000 PL.84	787	須臾器 椀	底部片	底	6			細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は剥落。
第12000 PL.84	788	灰釉陶器 椀	口縁部-体部 1/4	口	16.5			微砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。体部下半は回転へら削り。塗釉方法は漬け掛け。
第12100 PL.84	789	須臾器 甕	口縁部-肩部 1/5	面	30.8			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	頸部で胴部と口縁部を接合。口縁部はロクロ整形。胴部は外面がナデ、内面にアテ具痕がすかに残る。
第12000 PL.84	790	須臾器 甕	口縁部-肩部 1/3	口	53			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	頸部で胴部と口縁部を接合。口縁部はロクロ整形、下に甲き痕が残る。胴部は外面に甲き痕、内面にアテ具痕がすかに残る。
第12400 PL.84	791	須臾器 椀	2/5	口 底	13.9 6.8	台 高	7 5.9	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第12300 PL.84	792	土師器 甕	口縁部-胴部 1/3	口 胴	19 24.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がハケ目。
第12300 PL.84	794	鉄製品 鋼	一部欠損	長 幅	12.6 7.8	厚 重	7.3 99.38		幅1cmで薄い山形断面の鉄板を螺旋状に巻いた鉄鋼。現存部で9回の螺線が見られるが両端部とも劣化破損し全体サイズは不明。鋼外面に沿う形で布が一部溶化残存する。

## 28号土坑

種別 PL.No	No.	種類 器種	出上位位置 残存率	計測値		胎土/構成/色調 土・素材等	成形・整形の特徴	備考
第142号 PL.122	135	土師器 杯	口縁部片	口 最	10.8 11		細砂粒/良好/赤褐色	口縁部は横ナデ、体部と底部はへう削り、口縁部下にナデ部分が残る。

## 4面

## 3号丹戸

第1311号 PL.85	795	土師器 椀	ほぼ完形	口 最	13 13.3	高 3.4	細砂粒/良好/にぶい 黄橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへう削り、底部は手持ちへう削り。
第1311号 PL.85	796	土師器 杯	1/5	口 最	12.8 13		細砂粒/良好/にぶい 黄	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへう削り、底部は手持ちへう削り。
第1311号 PL.85	797	土師器 杯	1/6	口 最	13.8		細砂粒/良好/にぶい 黄	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへう削り。
第1311号 PL.85	798	土師器 杯	1/5	口 最	10.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はへう削り。
第1311号 PL.85	799	土師器 罍	口縁部～肩部片	口 最	12.6		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。

## 32号溝

第1289号 PL.85	800	灰輪陶器 罍	1/2	口 底	18.9 9.5	台 高 3.5	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ナデ、高台は貼付。施輪方法は刷毛塗り、内面底部にも施輪。	光ヶ丘1号窯式期古段属
第1289号 PL.85	801	土師器 台付罍	脚部	脚	7.5		細砂粒/良好/にぶい 橙	胴部内面は黒色処理。胴部と脚部は接合。脚部は外面が横ナデ、内面は上半がへうナデ、下半は横ナデ。	
第1289号 PL.85	802	土製品 土罍	完形	長 幅	4.1 1.2	孔 重 0.3 7.1	微砂粒/良好/灰褐色	外面はナデ。	
第1289号 PL.85	803	須恵器 椀	高台欠損	口 底	14.9 7.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は欠損・剥落後欠損部を研磨し、再度使用。	
第1289号 PL.85	804	須恵器 椀	1/2	口 底	14 6.7	台 高 5	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1289号 PL.85	805	須恵器 椀	口縁部～体部 1/3	口 最	15.7		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回りか。	
第1289号 PL.85	806	須恵器 椀	体部～底部1/3	底	5.8		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1289号 PL.85	807	須恵器 椀	体部～底部片	底	5.9 5.7		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1289号 PL.85	808	須恵器 椀?	口縁部～体部 1/3	口 最	14.8		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。	
第1289号 PL.85	809	土師器 杯	1/4	口 底	12.3 8.4	高 3.2	細砂粒/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1289号 PL.85	810	土師器 罍	口縁部～肩部片	口 最	19.8		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。	

## 15号土坑

第134号 PL.85	811	土師器 罍	底部1/2	底	6.5		細砂粒/良好/にぶい 橙	胴部はへう削り、底部はへう削り後凹線が施されている。内面はへうナデ。
----------------	-----	----------	-------	---	-----	--	-----------------	------------------------------------

## 17号土坑

第134号 PL.85	812	須恵器 椀	完形	口 底	13.8 6.8	高 4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	底部は疑似高台状を呈す。
----------------	-----	----------	----	--------	-------------	--------	----------------------	--------------------------	--------------

## 22号土坑

第134号 PL.85	813	須恵器 椀(片口)	完形	口 底	15 6.8	台 高 5.5	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。口縁部は歪みで楕円形。
第134号 PL.85	814	黒色土器 椀	底部片	底 台	6 5.3		細砂粒/還元焰/黄 灰	内外面とも黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。

## 35号土坑

第135号 PL.85	815	土師器 罍	口縁部～胴部片	口 最	13 14.2		細砂粒/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ、器面磨滅のため単位などは不明。
----------------	-----	----------	---------	--------	------------	--	-----------------	--

## 43号土坑

第134号 PL.84	816	須恵器 椀	完形	口 底	12 5.5	高 4.5	細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
----------------	-----	----------	----	--------	-----------	----------	----------------	--------------------------

## 22号ビット

第135号 PL.85	817	土師器 罍	口縁部～肩部 1/6	口 最	21.7		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。
----------------	-----	----------	---------------	--------	------	--	----------	---------------------------------

## 遺構外の出土遺物

第142号 PL.	818	銅製品 残貨	2区南半部 完形	縦 厚	2.278 2.273	0.145 2.58		貫水通貫。表面は形浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も形浅く外縁・郭とも不明瞭。
第138号 PL.	819	土師器 鉢	Aa-C黒色土 1/6	口 最	12.8		細砂粒/軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへう削り。器面磨滅のため単位など不明瞭。
第140号 PL.	820	土師器 高杯	Aa-C黒色土 底部片				細砂粒/良好/にぶい 赤褐色	脚部と杯身部は接合。接合部は横ナデ、脚部内面はナデ。
第140号 PL.86	821	土製品 土罍	Aa-B黒土 完形	長 幅	5.5 2.1	孔 重 0.2 16.6	微砂粒/良好/にぶい 橙	外面はナデ。
第139号 PL.	822	須恵器 椀	* 底部1/2	底 最	6.8 6.3		細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第138号 PL.	823	土師器 杯	微高地黒色土 1/2	口 底	12.2 9	高 3.1	細砂粒/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。



挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1388 PL.	824	土師器 杯	微高地黒色土 1/6	口 底	12.4 8	高 3.5	細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	内外面体部・ 内面底部に 「子」の墨書
第1406 PL.	825	土師器 甕	微高地黒色土 体部～底部片	底	11.5		細砂粒/良好/に ぶい橙	断面に輪積痕が残る。胴部はヘラ削り。内面はナデ。	
第1396 PL.	826	須恵器 鉢	微高地黒色土 底部片	底 台	6.4 6.3		細砂粒/還元焰・ 焼/濁灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ナデ、高台は貼付。	
第1406 PL.86	279	土製品 土鉢	2面 完形	長 幅	4 1.7	孔 重 0.3 11.6	微砂粒/良好/に ぶい橙	外面はナデ。	
第1406 PL.	280	須恵器 鉢	2面 底部	底 台	6.1 5.9	0 0 0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1396 PL.86	281	須恵器 四耳壺	2面 口縁部～胴部片	口	13.9		細砂粒/還元焰/灰	口縁部から頸部はロクロ整形、胴部は外面に平行叩き痕が残るが、内面はナデ消されている。肩に4カ所穿孔された突起をもつ。	
第1396 PL.	282	須恵器 壺	3面 口縁部～底部1/3	底	7.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は剥落。	
第1385 PL.85	283	土師器 杯	210-400G、As-B 下包合層 完形	口	12.4 7.3	高 3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第1385 PL.85	284	土師器 杯	210-400G、As-B 下包合層 1/3	口	11.9 8.2	高 3.3	細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第1385 PL.85	285	土師器 杯	210-400G、As-B 下包合層 1/5	口	12.3 8.6		細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第1385 PL.	286	土師器 杯	210-400G、As-B 下包合層 1/5	口	12.9		細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第1406 PL.	287	土師器 高杯	210-400G、As-B 下包合層 底部片				細砂粒/軟質/に ぶい橙	杯身と頸部は接合。接合部は横ナデ、他は器面磨滅のため整形不明。	
第1406 PL.86	288	土製品 土鉢	210-400G、As-B 下包合層 1/3	孔	0.3		微砂粒/良好/に ぶい橙	外面はナデ。	
第1385 PL.85	289	土師器 小型甕	確認面(黒色土) 1/2	口	13.6 6	高 胴 10.8 19	細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第1385 PL.85	290	土師器 鉢	2面確認面(黒色土) 口縁部～底部片	口	22.2 9.0	高 8.6	細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。器面磨滅のため単位など不明。	
第1406 PL.86	291	土師器 甕	2面確認面(黒色土) 口縁部～胴部 1/2	口	18.0		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1406 PL.	292	土師器 甕	2面確認面(黒色土) 口縁部～胴部1/4	口	20.0		細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1406 PL.	293	土師器 甕	2面確認面(黒色土) 口縁部～胴部1/4	口	17.8		細砂粒/良好/に ぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1406 PL.	294	土師器 甕	2面確認面(黒色土) 口縁部片	口	18.8		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1406 PL.	295	土師器 高杯	2面確認面As-C 混黒色土 胴部上位				細砂粒/良好/に ぶい黄橙	頸部に杯身と接合。頸部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第1406 PL.86	296	土製品 土鉢	2面確認面As-C 混黒色土 完形	長 幅	4.2 1.8	孔 重 0.3 11.3	微砂粒/良好/に ぶい橙	両端部は平坦面をつくる。外面はナデ。	
第1406 PL.86	297	土製品 土鉢	2面確認面As-C 混黒色土 完形	長 幅	3.8 1.6	孔 重 0.3 9.2	微砂粒/良好/に ぶい橙	両端部は平坦面をつくる。外面はナデ。	
第1385 PL.85	298	須恵器 杯	2面確認面As-C 混黒色土 3/4	口	12.5 5.9	高 3.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1396 PL.85	299	黒色土器 皿	2面確認面As-C 混黒色土 1/2	口	14.5 6.6	台 高 6.2 5	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰・焼/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1385 PL.85	300	須恵器 杯	2面確認面As-C 混黒色土 1/2	口	13.1 6.2	高 4.9	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。底部は器面磨滅のため不明瞭な部分あり。	
第1396 PL.86	301	須恵器 皿	2面確認面As-C 混黒色土 2/5	口	13.3 6.3	台 高 6 3.5	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第1396 PL.85	302	須恵器 鉢	2面確認面As-C 混黒色土 2/5	口	13.3 6.8	台 高 6.2 4.9	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	

検出 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第139段 PL.86	303	須臾器 椀	210-400G 2/5	口 13.9 底 6.6	台 6.4 高 3.7	細砂粒/還元焼・ 焼/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第140段	304	灰釉陶器 壺	2面確認面As-C 混黒色上 口縁部片	口 9.9		細砂粒/還元焼/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。施釉方法不明。	
第138段 PL.85	305	土師器 上鉢	2面包含層B下 部定形	口 11.8 底 7.5	高 3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第138段 PL.85	306	土師器 杯	2面包含層B下 4/5	口 11.7 底 7.1	高 3.9	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちへら削り。	
第138段	307	土師器 上鉢	2面包含層B下 小片	口 22 底 11.5	高 4.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はへら削り。器蓋面のため 単位など不明。	
第139段	308	須臾器 椀	2面包含層B下 体部-底部片	底 7.6 台 7.4		細砂粒/還元焼・ 焼/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第139段	309	須臾器 椀	2面包含層B下 体部-底部片	底 6.5 台 7.5		細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第139段	310	須臾器 椀	2面包含層B下 体部-底部片	底 7.5 台 7.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焼/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第139段	311	須臾器 椀	2面包含層B下 口縁部-底部片	底 7.5 台 6.8		細砂粒/還元焼・ 焼/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第140段	312	土師器 試掘りナ 口縁部-肩部片		口 17.8		細砂粒/良好/明赤 焼	口縁部から肩部は横ナデ、肩部はへら削り。内面は肩部が へらナデ。	
第139段 PL.85	313	須臾器 椀	不明遺構 3/5	口 13.8 底 7.2	台 6.9 高 5.4	細砂粒/還元焼/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第138段	314	須臾器 椀	横上 2/5	口 11.5 底 4.8	高 4.3	細砂粒/還元焼/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第138段 PL.86	315	須臾器 椀	横上 体部-底部片	底 6.5 台 6.3		細砂粒/還元焼/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第141段 PL.86	316	在地系土器 土鉢	微高地 口縁部片	口 底	高	にぶい橙//	口縁部外縁。口唇部内面嚙込に突出。外面に煤付着。	
第141段 PL.86	317	龍泉窯系青 磁 盤	横上 口縁部片	口 底	高	灰//	口縁先端がくの字に外折し、受け口状に突出。体部内外面 とも素地に印刻文が入る。釉は暗緑色で厚い。	
第140段 PL.86	318	中国磁器 白磁皿	横上 口縁部片	口 底	(0.0)	白//	口縁部縦やかに内湾。外面素地に削りの稜あり。素地は緻 密で均質。内外面の釉に貫入入る。	
第141段 PL.86	319	肥前磁器 皿	横上 底部1/4	口 底	(8.4)	白//	内面に花文染付。高台外に1重圈線内。	
第141段 PL.86	320	古瀬戸 皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	白灰//	口縁部縦やかに内湾しながら開く。口唇部丸軸。口縁部内 面に厚く灰釉。	中世
第141段 PL.86	321	古瀬戸 おろし皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	灰白-黒灰//	口縁部直線的に外縁。口唇部内削ぎ状で、内面に横。口縁 部内面に灰釉。	中世
第141段 PL.86	322	古瀬戸 皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	黄灰白//	内湾しながら開く口縁部の先端が強く外反。軸なし。口唇 部に煤付着。	中世
第140段 PL.86	323	古瀬戸 平碗	As-B混上 口縁部片	口 底	高	淡灰//	口縁部が僅かに内湾しながら開く。口唇部やや尖丸。口縁 部内外面に灰釉。	中世
第140段 PL.86	324	同安窯系青 磁 碗	As-B混上 口縁部片	口 底	高	灰//	口縁部が僅かに内湾しながら開く。口唇部丸軸。口縁部内 外面に灰釉。貫入入る。	中世
第141段 PL.86	325	古瀬戸 緑釉皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	灰//	口縁部縦やかに内湾しながら開く。先端を削り込んで端反 り状とする。口唇部丸軸。口縁部内外面に厚く緑釉。貫入 入る。	中世
第141段 PL.86	326	瀬戸・美濃 陶器 皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	黄白//	口縁部外反。内外面に胎釉。	
第140段 PL.86	327	古瀬戸 平碗?	As-B混上 体部片	口 底	高	黄灰白//	体部縦やかに内湾。内外面に薄く灰釉。細かな貫入入る。	中世
第141段 PL.86	328	龍泉窯系青 磁 梅花皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	白灰//	体部がくの字に屈曲し、口縁部が大きく外反する。口唇部 輪花。口縁部内面に緑白文様。内外面に緑釉。貫入入る。	中世
第140段 PL.86	329	瀬戸・美濃 陶器 丸皿	As-B混上 1/6	口 底	(11.0)	白灰//	口縁部内湾。内外面に灰釉。貫入入る。	
第141段 PL.86	330	瀬戸・美濃 陶器 丸皿	As-B混上 1/4	口 底	高 (6.4)	灰黄白//	内外面に厚く灰釉。	
第141段 PL.86	331	古瀬戸か 香かか	As-B混上 口縁部片	口 底	高	灰白//	口唇部に平坦面を形成。口唇部と外面全体および口縁部内 面に灰釉。貫入入る。	中世
第141段 PL.86	332	古瀬戸 緑釉皿	As-B混上 底部片	口 底	高	白灰//	底部回転糸切り痕、無調整。内面に緑釉流れる。	中世
第141段 PL.86	333	尾張陶器 片口鉢	As-B混上 口縁部片	口 底	高	灰//	口縁部肥厚。内外面に僅かに自然釉。	中世
第141段 PL.86	334	同安窯系青 磁 皿	As-B混上 口縁部片	口 底	高	白灰//	体部から内折して口縁部が外反する。内外面に緑釉。貫入 入る。	中世
第140段 PL.86	335	龍泉窯系青 磁 碗	As-B混上 体部片	口 底	高	暗灰//	外面に蓮弁文。	中世

種図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1418 PL.86	336	中国磁器 青花皿	As-B混土 口縁部片	口 底	高 白//	口縁部外反。内外面に筋輪。外面に清花。口縁部内面に1重圈線内。	中世
第1408 PL.86	337	龍泉京系青 磁碗	As-B混土 口縁部片	口 底	高 灰//	外面に蓮弁文。	
第1408 PL.86	338	龍泉京系青 磁碗	As-B混土 体部下位片	口 底	高 淡灰//	高台欠損。内面に纏目文。	
第1418 PL.86	339	古瀬戸 緑釉皿	As-B混土 1/8	口 底	高 (12.0) 灰白//	口縁部内外面に厚く鉄輪。	
第1418 PL.86	340	在地系土器 皿	As-B混土 体部2/5底部1/6	口 底	高 (5.0) 灰白//	底部回転系切り痕、無調整。体部内外面に煤油付着。	
第1418 PL.86	341	在地系土器 内耳鍋	As-B混土 口縁部片	口 底	高 灰褐//	内外面焼し、黒色化。焼成良好、硬質。	中世
第1418 PL.86	342	在地系土器 片口鉢	As-B混土 口縁部片	口 底	高 灰褐-灰//	内折する口唇部欠損。瓦質で焼成良好。	中世
第1418 PL.86	343	在地系土器 内耳鍋	As-B混土 口縁部片	口 底	高 暗灰//	厚手で瓦質。	中世
第1418 PL.86	344	在地系土器 片口鉢	As-B混土 口縁部片	口 底	高 白灰//	口縁部外反。口唇部内折。瓦質。内外面焼し、黒色化。	
第1418 PL.86	345	在地系土器 内耳鍋	As-B混土 口縁部片	口 底	高 白灰//	薄手で口唇部外面に突出。内外面被焼、変色、赤化。	中世
第1418 PL.86	346	在地系土器 内耳鍋	As-B混土 口縁部片	口 底	高 橙//	肥厚する口縁部が内湾。口唇部内折ぎ状。外面に煤付着、黒色化。	中世
第1418 PL.86	347	在地系土器 片口鉢	As-B混土 底部片	口 底	高 C系橙//	底部回転系切り。内面擦れ。	中世
第1418 PL.86	348	尾張陶器 片口鉢	As-B混土 底部片	口 底	高 白灰//	瓦質。高台欠損。内面擦れ、平滑。	中世
第1418 PL.86	349	在地系土器 片口鉢	As-B混土 底部1/6	口 底	高 灰//	瓦質。底部回転系切り。内面擦れ、平滑。	中世
第1418 PL.86	350	瀬美陶器 片口鉢	As-B混土 体部片	口 底	高 暗灰//	瓦質。硬質。外面に叩き目。	
第1408 PL.86	351	龍泉京系青 磁碗	口縁部片	口 底	高 灰白//	口縁部内湾。外面に蓮弁文。内外面に緑輪。	中世
第1408 PL.86	352	中国磁器か 碗	口縁部片	口 底	高 白//	外面に染付。見込みの輪を壁の目状に掻き取る。口縁部内面に2重圈線。内外面に貫入する。	
第1418 PL.86	353	瀬系土 器？ 人形	基部片	口 底	高 橙//	人物立像か。	
第1418 PL.86	354	古瀬戸 大皿	体部片	口 底	高 灰白//	外面と口縁部内面に灰輪。貫入する。	中世
第1418 PL.86	355	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	高 褐-暗灰//	口唇部外折ぎ状。瓦質、硬質。	中世
第1418 PL.86	356	常滑陶器 碗	口縁部片	口 底	高 灰-黒灰//	口唇部S字状。	
第1428 PL.86	357	鉄製品 釘	鐵高地 一部欠損	長 4.1 厚 1.7 幅 1.5 重 10.34	1.5 //	断面長方形の角釘で先端に向かいわずかに細くなるが劣化破損し端部は不明。頭部は薄く広げたのちやや斜めに折り曲げる。	
第1428 PL.86	358	銅製品 不明	南半部 破片	長 8.5 厚 1.0 幅 1.0 重 5.79	1.8 5.79 //	幅0.7～1cm厚さ0.1cmの幅狭い板状の銅製品で、端部は指状に僅かに広がる。他の端部は劣化破損する。破損部から3cm付近で斜めにねじれる様に折れ曲がる。	
第1428 PL.86	359	鉄製品 釘	南半部 一部欠損	長 5.0 厚 1.1 幅 1.1 重 4.36	0.8 4.36 //	断面正方形に近い角釘で、先端に向かいわずかにカーブし劣化破損する。頭部は薄く広く延びたのち深く折り曲げる。木質等の付着は見られない。	
第1428 PL.86	360	銅製品 鉢・碗・口	南半部 ほぼ完形	長 5.8 厚 1.0 幅 1.0 重 4.78	1.0 4.78 //	キセルの喉い口破片。表面は劣化により荒れ裝飾等は不明。腰首側に籬師の木質の一部が残存する。	
第1428 PL.86	361	鉄製品 刀子	南半部 破片	長 5.1 厚 1.2 幅 1.2 重 4.22	0.5 4.22 //	断面狭三角形の刀子刃部分の破片で先端および基部の両端を劣化破損する。	
第1428 PL.86	362	金属製品 不明	南半部 破片	長 3.0 厚 2.7 幅 3.5 重 17.67	0.5 17.67 //	不定形の平板状金属製品で、表面は灰青色で輪状の細いひびが全体に見られる。	
第1428 PL.86	363	鉄洋 破片	南半部 破片	長 3.7 厚 2.0 幅 3.5 重 31.66	2.0 31.66 //	鉄洋破片。表面は黒色で一部酸化土砂が覆う厚重な鉄洋破片。	
第1428 PL.86	364	銅製品 銭貨	南半部 ほぼ完形	縦 2.340 横 2.288 重 2.16	0.130 2.16 //	寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。外縁および文字の一部は劣化破損する。	
第1428 PL.86	365	銅製品 銭貨	南半部 一部欠損	縦 2.362 横 2.367 重 2.38	0.169 2.38 //	〇〇元寶。劣化が著しく外縁・文字の一部を破損するするため文字不明瞭。	
第1428 PL.86	366	銅製品 銭貨	南半部 完形	縦 2.384 横 2.392 重 2.59	0.127 2.59 //	元寶通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面はやや彫浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第1428 PL.86	367	銅製品 銭貨	南半部表土 完形	縦 2.397 横 2.407 重 2.02	0.105 2.02 //	元祐通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦でかろうじて外縁・郭が認められる状況。外縁上部は一部劣化破損する。	
第1428 PL.86	368	銅製品 銭貨	2区南半部 完形	縦 2.278 横 2.273 重 2.58	0.145 2.58 //	寛永通寶。表面は彫浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫浅く外縁・郭とも不明瞭。	

種図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14200 PL.87	369	礫石 砥石	完形	長 幅	厚 重	粗粒輝石安山岩//	扁平楕円礫素材。表裏面および側面、上端面に敲打痕が残る。	
第14200 PL.87	370	石製品 不明	完形	長 幅	厚 重	二ッ居軽石//	円錐形に近い形状。側面に平ノミ状工具による整形痕が残る。下部は破損しているが、破断面の一部に磨面が認められる。再利用の可能性ある。	
第14200 PL.87	371	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	石英	縁辺および稜線上に潰れあり。	
第14200 PL.86	372	鉄製品 不明	南半部 一部欠損	長 幅	厚 重	3.9 0.6 2.8 5.27 //	Y字形の鉄製品で断面は長方形。Y字形の端部はやや幅を減じ角形で終わる。その片側は氧化破損する。	
第14200 PL.86	373	鉄製品 不明	南半部 一部欠損	長 幅	厚 重	8.0 0.9 3.0 11.26 //	断面はほぼ正方形で僅かに曲がる角棒状鉄製品で、先端は細くなるが鋭利には突らない。他の端部は氧化破損する。全体に厚く錆に覆われ木質等も見られない。	
第14200 PL.87	374	銅製品 鉄貨	南半部 完形	縦 横	厚 重	2.403 0.129 2.395 2.72 //	表面は外縁・文字とも彫は深い。文字はつづれ不明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。文字の輪郭から政和通寶と見られる。	
第14200 PL.87	375	銅製品 鉄貨	南半部 一部欠損	縦 横	厚 重	2.412 0.144 2.412 2.89 //	元豊通寶。表面は彫浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面はやや彫浅いが外縁・郭とも明瞭。豊一通の部分に欠けが見られるが氧化破損の可能性あり。	
第14200 PL.86	376	銅製品 鉄貨	南半部 完形	縦 横	厚 重	2.450 0.145 2.459 3.89 //	詳符元寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面はやや彫浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第14200 PL.86	377	銅製品 鉄貨	南半部 完形	縦 横	厚 重	2.446 0.119 2.432 2.62 //	元豊通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面はやや彫浅いが外縁・郭とも明瞭。	

表5 3区出土遺物観察表(凡例 口:口径 底:底径 台:台径 高:器高 長:長さ 重:重量単位 径・高・長・幅:cm 重量:g)

### 1面

#### 1号復旧溝群

種図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15300 PL.87	378	銅製品 鉄貨	完形	縦 横	厚 重	2.490 0.177 2.518 4.55	皇宋通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面は彫浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第15300 PL.87	379	銅製品 鉄貨	完形	縦 横	厚 重	2.246 0.145 2.251 2.73	弘武通寶(背一銭)。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	

#### 2号復旧溝群

第15300 PL.87	380	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長 幅	厚 重	2.7 2.3 1.7 5.39	キセルの蓋首部分。表面は灰青色で劣化により表面が有れている。狭い口縁は劣化破損している。	
-----------------	-----	-------------------	------	--------	--------	---------------------	--	--

#### 3号復旧溝群

第15300 PL.87	381	肥前磁器 仏飯器か	1/4	口 底	(8.0) 高	灰白	口縁部外面に波状文様。内面無文。	
-----------------	-----	--------------	-----	--------	------------	----	------------------	--

#### 4-5号復旧溝群

第15300 PL.87	382	龍泉系青 磁 碗	底部1/4	口 底	(5.0) 高	淡灰	底部厚く、見込みに稜線が入る。内外面縁軸、貫入入。高台内無軸。	
第15300 PL.87	383	製作地不詳 磁器 小林	口縁部片	口 底	高	白	外面に染付。内面無文。	
第15300 PL.87	384	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	13.4 石英	稜線上に潰れが連続的に見られる。	

#### 6号復旧溝群

第15300 PL.87	385	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	底部片	口 底	(9.0) 高	淡灰黄	内面と外面高台脇まで縁軸。見込みにトチン痕1箇所。	
第15300 PL.87	386	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	底部片	口 底	(12.6) 高	淡灰黄	外面腰下に凹線。底部回転糸切り。内外面と底面に筋軸。内面腰から底面使用による擦れ。	
第15300 PL.87	387	在地系土器 火鉢か	脚部片	口 底	高	黄灰褐	内外面焼し、黒色。	

#### 7号復旧溝群

第15300 PL.87	388	銅製品 鉄貨	完形	縦 横	厚 重	2.464 0.116 2.473 2.51	天祥通寶。表面は彫浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦だが外縁は明瞭。郭は不明瞭。	
-----------------	-----	-----------	----	--------	--------	---------------------------	---	--

#### 8号復旧溝群

種図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15300 PL.87	389	銅製品 鉄貨	完形	縦 横	厚 重	2.279 0.125 2.284 2.11	寶永通寶。表面は彫浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫浅く外縁・郭とも不明瞭。	

#### 10号復旧溝群

第15300 PL.87	390	在地系土器 皿	底部片	口 底	(6.0) 高	白橙	体部縦やかに内溝。内面に墨書で詳細な文様。所々に未定しあり。絵軸か。底部回転糸切り後、裏の子状の圧痕。	
	391	銅製品 鉄貨	1/6	縦 横	厚 重	0.127 0.57	鉄貨破片で永の子部分のみで破断面は磨化している。	
第15300 PL.87	392	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重	17.7 石英	稜線上に潰れあり。裏面に自然面を大きく残す。	

## 1号加

母図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
	24	石製品 火打石	不明	長 幅	厚 重 4.6	石灰	小形。稜線上の潰れあり。	

## 1号調

母図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15606 PL.87	393	瀬戸・美濃 陶器 嬰器 部2/3	口縁部一部、底 部2/3	口 底 (9.8) 4.4	高 5.2	白灰	外面口縁部下に螺旋状凹溝。底縁に貫入る。	
第15606 PL.87	394	瀬戸・美濃 陶器 尾呂茶碗か 丸碗	底部	口 底 5.6	高	白灰	内外面に鉄軸。内面に摺れ。高台周囲を円形状に打ち欠き、円盤状加工品か。	
第15606 PL.88	395	円盤状加工 品	完形	口 底 6.4 6.3	高 1.9	淡灰白-青	肥前陶器緑軸輪光面の底部を円形状に加工したもの。	
第15606 PL.88	396	製作地不詳 陶器 壺	口縁部1/4	口 底 (10.8)	高	灰	内外面に鉄軸。	
第15606 PL.88	397	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	1/6	口 底 (15.6)	高	黄灰白	内面から外面腹まで鉄軸。貫入る。	
第15606 PL.87	398	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部一部、底 部完	口 底 (8.0) 3.2	高 5.3	白灰	概念に竹林風景景付。口縁部内面に一重輪線、見込み二重輪線内に不明文様。	
第15606 PL.88	399	肥前磁器 碗	体部1/3	口 底 (9.6)	高	白灰	外面に梅文、内面無文。貫入る。	
第15606 PL.87	400	肥前磁器 碗	1/4	口 底 (9.8) (4.0)	高 5.1	灰白	外面に梅文、内面無文。	
第15606 PL.87	401	瀬戸・美濃 磁器 碗	1/2	口 底 (8.6) (3.0)	高 4.3	白	外面に青・緑・ピンクの色絵で自動車等を染付。内面無文。	近代
第15606 PL.87	403	瀬戸・美濃 磁器か 碗	一部欠	口 底 8.6 3.0	高 4.5	白	外面にゴム印刷による施文。内面無文。	近代
第15606 PL.87	404	肥前磁器 碗	口縁部1/4	口 底 (10.2)	高	灰白	外面に二重網目文、内面無文。	
第15606 PL.87	405	肥前磁器 楕口 碗	体部1/3、底部 1/2	口 底 (5.0)	高	白	外面に草花文、見込み二重輪線内に不明文様。	
第15606 PL.87	406	肥前磁器 皿	1/8	口 底 (13.8) (6.6)	高 3.0	灰白	見込みの軸を掻き取る。体部内面に染付。外面無文。	
第15606 PL.88	407	ガラス製品 石置きか	完形	口 底 6.0	高 0.7	青	表面に六角形の凹溝。	近代
第15606 PL.88	408	在地系土器 焙烙	1/12	口 底 (3.6)	高	にぶい橙	丸底で内耳が付く。	
第15606 PL.88	409	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口 底	高	暗灰-白橙	平底。外面被熱、覆付着。黒色。	
第15606 PL.88	411	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底 (19.6)	高	黒灰	口縁部外面横ナデ、外面輪軸目。胴部外面に斜行する粗いナデ筋。	中世か
第15606 PL.88	412	丹波陶器 すり鉢	口縁部片	口 底	高	灰	僅かに肥厚する口縁部に土線がめぐる。	
第15606 PL.88	413	益子・笠間 陶器 すり鉢	体部一部、底部 1/2	口 底 15.8	高	にぶい橙	外面に鉄軸。底部蛇の目。内面腹下から底面使用による摩耗顕著。	近現代
第15606 PL.88	414	瓦 軒先瓦	2/3	口 底	高	くすんだ淡灰	文様は江戸様。表面と側面研磨。裏面ナデ。	
第15706 PL.88	415	鉄製品 不明	破片	長 幅 7.1 3.1	厚 重 0.9 11.43		断面ややや角の丸い正方形で、平円形に曲がった棒状鉄製品で肉端とも劣化破損し全体形状は不明。	
第15706 PL.88	416	鉄製品 不明	ほぼ完形	長 幅 7.1 1.1	厚 重 1.0 5.31		断面長方形の細い環状の鉄製品で一端は細くなり尖り気味だが鋭角ではない。たの端部は角形で終わり他に特徴的な形状を持たない。	
第15706 PL.88	417	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.806 2.803	厚 重 0.124 4.42		寛永通寶(表渡)。表面は形浅く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も形浅く外縁・波・郭とも不明瞭。	
第15706 PL.88	418	石製品 砥石	2/3	長 幅	厚 重 76.8	砥沢石	4面使用だが、左右側面には整形痕が残る。表裏内面は左下、右上が研ぎ減り、側面から見るとねじれたような形状である。	
第15706 PL.88	419	石製品 砥石	破片	長 幅	厚 重 37.0	砥沢石	電動のこぎりによる切断痕が残る。	
第15706 PL.88	420	石製品 砥石	略完形	長 幅	厚 重 137.2	砥沢石	4面使用だが、表裏面の使用頻度が高い。表裏内面とも左下、右上の片減りが著しい。上部欠損。	
第15706 PL.88	421	石製品 砥石	破片	長 幅	厚 重 93.8	牛伏砂岩	4面使用だが、輪軸の表面が最も平滑で使用頻度が高い。	
	422	石製品 砥石		長 幅 (5.6) 3.8	厚 重 2.5 69.5	砥沢石		

種目 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
	423	石製品 砥石		長 幅	4.9 3.0	厚 重	2.8 59.7	流紋岩	
	424	石製品 砥石		長 幅	(6.8) 3.6	厚 重	1.9 55.9	砥沢石	
第15796 PL-88	425	礫石器 礫石	略定形	長 幅		厚 重	144.1	雲母石英片岩	棒状の扁平礫素材。上下端に摩滅と刻痕が残る。
第15796 PL-88	426	石造物 板碑片	破片	長 幅		厚 重	158.7	緑色片岩	正面右下の凹みは文字の一部の可能性ある。
第15796 PL-88	427	石製品 火打石	不明	長 幅		厚 重	2.6	玉髓	上部を中心に潰れが認められる。
第15796 PL-88	428	石製品 火打石	不明	長 幅		厚 重	5.2	石英	稜線上の潰れあり。
第15796 PL-88	429	鉄製品 不明	破片	長 幅	9.2 9.1	厚 重	2.1 159.34		鍛造鉄製品の破片で破断面は錆化している。断面形状から踏破の破片と考えられるが小破片のため詳細は不明。
第15796 PL-88	430	鉄製品 釘	ほぼ定形	長 幅	9.2 1.8	厚 重	1.5 19.63		断面正方形の角釘で頭部から先端に向かい急激に細くなる。頭部は薄く広げ短く折り曲げる。木質等の痕跡は確認できない。
第15796 PL-88	431	鉄製品 釘	ほぼ定形	長 幅	6.7 1.5	厚 重	1.3 11.36		断面はほぼ正方形の角釘で先端に向かい徐々に細くなり先端近くで緩やかに折れ曲がる。頭は薄く広げ折り曲げる。全体に厚い錆に覆われ本体破断で木質等は確認できない。
第15796 PL-88	432	鉄製品 不明	ほぼ定形	長 幅	4.5 1.9	厚 重	1.1 5.74		断面四角の角棒状でく字形に折れ曲がる。両端ともやや細くなるが尖らずに角形で終わる。
第15796 PL-88	433	鉄製品 鎌?	破片	長 幅	7.9 5.3	厚 重	0.8 14.07		断面四角の角棒状でく字形の鉄製品で、茎を持つ鎌の破片と推定されるが破損により詳細不明。
第15796 PL-88	435	銅製品 キセル・雁首	ほぼ定形	長 幅	4.3 1.8	厚 重	1.8 6.71		キセルの雁首部分。表面は錆化により荒れ裝飾等は不明。吸い口側端部に二条の段を持ち内部には羅印の一部が残存する。
第15796 PL-88	436	銅製品 キセル・雁首	破片	長 幅	4.9 1.1	厚 重	1.1 5.51		キセルの雁首部分で火皿部分を欠く。錆化により表面は荒れ一部断面が三角形に変形する。

2号溝

第15800 PL-	402	瀬戸・美濃 陶器 饗鉢	口縁部片	口 底		高		2		
第15800 PL-	437	鉄製品 壺	ほぼ定形	長 幅	13.0 3.8	厚 重	2.7 128.02		断面長方形で先端に向かい幅を細め先端は丸みを持つ。頭部は使用によりものか広がりめくれるような形状を示す。	

3号溝

第15800 PL-88	438	瀬戸・美濃 陶器 ひょうそく	下半	口 底	3.6	高			灰黄白	内面から外面側まで鉄蝕。底部回転糸切り。底面中央に設置用の円孔。
第15800 PL-88	439	瀬戸・美濃 陶器 皿	1/7	口 底	(13.0) 7.0	高	3.3		灰黄白	口縁部外面と内面に灰蝕。
第15800 PL-88	440	肥前陶器 刷毛目碗	体部一部、底部 完	口 底	4.5	高			暗紫灰	内外面に刷毛目波状腐文。見込みに軽く蛇の目ナデ。
第15800 PL-88	441	肥前磁器 皿	口縁部1/2、底 部完	口 底	13.5 9.0	高	3.6		白	蛇の目目高台。体部内面と見込み一重圈線内に雪輪世文。口縁部外面に不明染付。
第15800 PL-88	442	ガラス製品 ガラス玉	ほぼ定形	長 幅	1.4 1.4	厚 重	1.2 2.92			青色でほぼ球形のガラス玉。劣化が著しく表面全体に細かい凹みが見られる。
第15800 PL-88	443	石製品 火打石	不明	長 幅		厚 重		10.7	石英	稜線上の潰れあり。

4号溝

	444	鉄製品 不明	破片	長 幅	13.4 1.4	厚 重	1.3 12.48			断面4～3mmの円形から楕円形の棒状鉄製品で一端は劣化破損する。
	445	鉄製品 不明	破片	長 幅	8.1 0.9	厚 重	1.1 5.24			断面2～3mmの円形から楕円形で両端とも劣化破損する棒状鉄製品破片。50034-3と似た断面を持つが接合はできない。
	446	鉄製品 不明	破片	長 幅	4.9 0.6	厚 重	0.7 1.17			劣化が著しく土砂を巻き込んだ錆に覆われ本体は空洞化する。断面3.5×2.5mm楕円形の棒状鉄製品だが詳細は不明。
	447	鉄製品 不明	破片	長 幅	3.8 0.9	厚 重	0.8 2.57			断面2～3mmの円形で両端とも劣化破損する棒状鉄製品破片。

1号池

PL-88	25	石製品 砥石	池 破片						砥沢石//	正面および左側面の2面使用。裏面および右側面には磨面タガネ痕が残る。
-------	----	-----------	---------	--	--	--	--	--	-------	------------------------------------

3号土坑

種目 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第16298	448	在地土器 焙烙	1/10	口 底	(36.0)	高		椀	丸底で内耳が付く。体部外面被熱、煤付着。黒色。

4号土坑

第16298 PL-89	449	須恵器 短頸壺	口縁部～肩部 1/3	口 肩	11.6 21.2				細砂粒/還元焼成/灰	ロクロ製形。回転器回りか。
-----------------	-----	------------	---------------	--------	--------------	--	--	--	------------	---------------

検出 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第162号 PL-89	450	製作地不詳 磁器 小杯	体部一部、底部 1/2	口 底	(3.4) 高	白	外面に染付。高台内に不明文様。			
第162号 PL-89	451	鉄製品 鉢	破片	長 幅	9.4 2.1	1.5 24.06	磨り鉢の刃部近破片。全体に厚い錆に覆われ脆弱で刃の一部および端部を劣化破損する。			
6号上坑										
第162号 PL-89	452	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.328 2.330	厚 重	0.110 1.82	寛永通寶。表面は彫浅く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面も彫浅いが外縁・郭とも明瞭。		
<b>2面</b>										
6号溝										
第164号 PL-89	453	須恵器 碗	底部片	底 台	7 6.8		細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部はへう削り、高台は貼付。		
第164号 PL-89	454	土師器 杯	底部片				細砂粒/良好/明赤褐	底部はへう削り。	底部内部に墨書、判読不能。	
<b>8号溝</b>										
第166号 PL-89	455	須恵器 蓋	插み片	插 口	4		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。插みは貼付。		
第166号 PL-89	456	常滑陶器 甕か	体部下位片	口 底			暗灰	内外面ナデ。内面に自然釉。	中世	
<b>9号溝</b>										
第167号 PL-89	457	瀬戸・美濃 磁器 碗	口縁部1/4	口 底	(8.0)	高	白	外面にゴム印判による施文。内面無文。	近代	
第167号 PL-89	458	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底		高	暗灰-紅橙	口唇部外削状。内外面釉面目。		
第167号 PL-89	459	在地系土器 片口鉢	片口部片	口 底		高	くすんだ橙	口唇部外削状。内外面釉面目。		
第167号 PL-89	460	銅製品 銭貨	1/5	縦 横	- -	厚 重	0.129 0.69	脆弱な銭貨破片で文字の判読は困難。断面は劣化破損。		
<b>10号溝</b>										
第168号 PL-89	461	肥前陶器 陶胎付付碗	底部1/3	口 底	(4.8)	高	暗灰	内外面貫入入る。		
第168号 PL-89	462	常滑陶器 甕か	体部片	口 底		高	淡灰	内面指押さえ面。外面たっぶりの自然釉。	中世	
第168号 PL-89	463	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長 幅	4.4 1.6	厚 重	3.2 7.05	キセルの雁首部分。火部は半球形で内部に残渣が残る。表面は黒色平滑で、吸い口側端部はつぶれる様に破損する。		
<b>11号溝</b>										
第169号 PL-89	464	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口 底		高	黒-白橙	内外面荒れ、剥落。	中世	
<b>22号溝</b>										
第173号 PL-89	465	土師器 杯	3/4	口 底	12.2 8	高	3.3	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	内面底部に「宗」の墨書。
第173号 PL-89	466	須恵器 碗	1/5	口 底	5.6			細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は剥落。	
<b>3面</b>										
<b>1号住居</b>										
第179号 PL-89	467	土師器 小型甕		口 底	11.8 4.1	脚 高	9 16.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り、底部から脚部はへうナデ。内面は口縁部から頸部と脚部は横ナデ、胴部がへうナデ。	
第179号 PL-89	468	土師器 碗	口縁部片	口 底	21.8			細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。	
第179号 PL-89	469	須恵器 杯	完形	口 底	11.8 6.2	高	3.4	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第179号 PL-89	470	須恵器 杯	口縁一部欠	口 底	12.8 5.8	高	3.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第179号 PL-89	471	須恵器 碗	口縁一部欠	口 底	14.3 7.5	台 高	7.1 5.6	細砂粒・粗砂粒/長石/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
<b>1・3号住居</b>										
第179号 PL-89	472	土師器 甕	口縁部～胴部片	口 脚	17.7 20.6			細砂粒/良好/にぶい橙	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は頸部から胴部にへうナデ。	
<b>2号住居</b>										
第181号 PL-89	473	土師器 杯	底部一部欠	口 底	11.7 8.8	高	3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへう削り、底部は手持ちへう削り。	
第181号 PL-89	474	土師器 杯	1/4	口 底	11.4 7.4	高	3.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第181号 PL-89	475	土師器 杯	1/5	口 高	10 3			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はへう削り。器面磨滅のため単位不明。	
第181号 PL-89	476	土師器 小型台付甕	台部欠	口 脚	10.9 13.4			細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。脚部は横ナデ。内面は胴部がへうナデ。	
第181号 PL-89	477	土師器 小型甕	口縁部～胴部 1/3	口 脚	14.6 17.6			細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへう削り、一部器面剥離のため不明瞭。内面は胴部がへうナデ。	

神田 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1818区 PL_80	478	土師器 小型甕	口縁部片	口	19.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第1818区 PL_80	479	土師器 小型甕	口縁部片	口	20.8	細砂粒/良好/明赤 褐	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 はへう削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1818区 PL_89	480	須恵器 椀	口縁部1/2欠	口	12.4 底 5.4	高 4.2 細砂粒/酸化塩/に ぶい黄橙	口ロコ型、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
3号住居								
神田 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第1839区 PL_90	481	土師器 杯	1/3	口	11.2 底 7.8	高 4.2 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1839区 PL_90	482	土師器 杯	1/4	口	11 底 7.8	高 4.2 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1839区 PL_90	483	土師器 杯	1/4	口	11.4 底 8.4	高 4.2 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1839区 PL_90	484	土師器 台付甕	底部～胴部3/4	口	4.2 底 9.1	高 4.2 細砂粒/良好/にぶ い赤褐	胴部と脚部は接合。胴部はへう削り、脚部は横ナデ。内面 は胴部と脚部上半がヘラナデ、脚部下半は横ナデ。	
第1839区 PL_90	485	土師器 甕	口縁部～胴部 1/3	口	21.7	高 4.2 細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 はへう削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1839区 PL_90	486	須恵器 杯	2/3	口	11.7 底 5.8	高 4 細砂粒/酸化塩/浅 黄	口ロコ型、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1839区 PL_90	487	須恵器 椀	1/4	口	12.6 底 6.6	高 5.3 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/暗灰黄	口ロコ型、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1839区 PL_90	488	須恵器 椀	ほぼ完形	口	13.6 底 7.5	高 7.4 台高 5.6 細砂粒/還元塩/灰 黄	口ロコ型、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	内面底部に 「荒(異体字)」 の墨書。
第1839区 PL_90	489	須恵器 椀	2/3	口	13.3 底 7	高 6.1 台高 6.6 細砂粒/還元塩/灰 黄	口ロコ型、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	内面底部に墨 書、判読不能。
第1839区 PL_90	490	須恵器 椀	口縁部片			高 6.6 細砂粒/酸化塩/に ぶい黄橙	口ロコ型。	口縁部外面に 墨書、判読不 能。
4号住居								
第1850区 PL_90	491	土師器 杯	1/2	口	12.5 底 12.3	高 5.6 細砂粒/良好/赤褐	口唇部に平坦面をつくる。口縁部は横ナデ、体部(膝下)か ら底部は手持ちへう削り。	
第1850区 PL_90	492	土師器 杯	1/4	口	11.6 底 10.9	高 5.9 細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部(膝下)から底部は手持ちへう削り。 器面磨減のため単位など不明。	
第1850区 PL_90	493	土師器 小型甕	底部欠	口	17.2 底 18	高 0 細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は上位から中位がヘラナデ、下位は へう削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1850区 PL_90	494	土師器 甕	口縁1/2、底部欠	口	21.1 底 23	高 7.4 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はハケ目日後へう磨き。内面 は胴部がヘラナデ。胴部下位の割れ口は磨減、底部欠損後 再調整して使用か。	
第1850区 PL_90	495	土師器 甕	2/3	口	18 底 7.6	高 28.4 胴 23 細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部は上位から中位がヘラナデ、下位は へう削り、底部もへう削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第1850区 PL_90	496	土師器 甕	1/2	口	19 底 7	高 34 胴 24 細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへう削り。内面は 底部から胴部がヘラナデ。	
5号住居								
第1879区 PL_91	497	土師器 杯	ほぼ完形	口	12.2 底 8	高 3.6 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	498	土師器 杯	2/3	口	11.8 底 8	高 2.9 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	499	土師器 杯	1/3	口	10.8 底 8	高 2.9 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	500	土師器 杯	1/3	口	12.2 底 8.4	高 0 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	501	土師器 杯	2/5	口	11.5 底 8.8	高 0 細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	502	土師器 杯	1/3	口	12 底 9	高 0 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	503	土師器 杯	1/3	口	11.2 底 8	高 0 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	504	土師器 杯	1/4	口	12.1 底 9.2	高 0 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	505	土師器 杯	1/4	口	11.4 底 9	高 0 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	506	土師器 杯	1/4	口	11.4 底 8	高 0 細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1879区 PL_91	507	土師器 台付甕	口縁部～胴部 2/3	口	11.4 底 12.7	高 0 細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第1879区 PL_91	508	土師器 小型甕	口縁部～胴部 1/4	口	11.4 底 13.6	高 0 細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第1879区 PL_91	509	土師器 甕	口縁部～胴部片	口	19.8	高 0 細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部が ヘラナデ。	



挿入 PL. No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第187図 PL. 91	510	須恵器 杯	1/2	口 底	13 6.3	高 3.7	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第187図	511	須恵器 杯	1/3	口 底	13 6	高 3.8	細砂粒/還元塩/灰	内面体部に輪積痕が残る。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第187図	512	須恵器 皿	口縁部欠	底	6 5.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/にぶい黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。

## 7号住居

挿入 PL. No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第189図 PL. 91	513	土師器 杯	1/2	口 底	11.8 8.5	高 3.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第189図 PL. 91	514	土師器 杯	底部片				細砂粒/良好/橙	底部は手持ちヘラ削り。		
第189図 PL. 91	515	土師器 杯	底部片				細砂粒/良好/明赤	底部は手持ちヘラ削り。		
第189図	516	土師器 杯	1/5	口 底	12 8.4		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第189図	517	土師器 杯	1/5	口 底	11.4 7.2		細砂粒/良好/にぶい赤黄	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第189図	518	土師器 杯	1/5	口 底	12 7.2		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第189図	519	土師器 杯	1/6	口 底	11.4 8.2		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第189図	520	土師器 甕	口縁部片				細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。		
第189図	521	土師器 甕	胴部～底部片	底	5		細砂粒/良好/灰黄	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第189図	522	土師器 甕	胴部～底部片	底	3.8		細砂粒/良好/黒	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第189図 PL. 91	523	土製品 土師	完形	長 幅	6.1 2.5	孔 重	0.4 29.5	微砂粒/良好/明赤	内面は平坦面をつくる。外面はナデ。	
第189図	524	須恵器 椀	底部片	底	6.8 7		台	7	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第189図 PL. 91	525	須恵器 皿	1/2	口 底	14.4 7	高 3.2	台	7.2	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。

## 8号住居

第191図 PL. 91	526	土師器 杯	完形	口 底	12.1 8.6	高 3.2	細砂粒/良好/明赤	口縁部は横ナデ、体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部は手持ちヘラ削り。
第191図 PL. 91	527	土師器 杯	1/2強	口 底	11.6 8.2	高 3.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第191図 PL. 91	528	土師器 杯	1/2	口 底	11.6 7.8	高 3.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部は手持ちヘラ削り。
第191図 PL. 91	529	土師器 杯	2/5	口 底	13.6 9.7		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面は体部から口縁部に放射状暗文。
第191図 PL. 91	530	土師器 杯	1/3	口 底	12 8	高 3.1	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第191図 PL. 91	531	土師器 杯	1/6	口 底	10.9 6.3	高 3.1	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第191図	532	土師器 杯	1/4	口	14.2		細砂粒/酸化塩/明赤	ロクロ整形、回転右回りか。
第191図	533	土師器 杯	1/6	口 底	12.3 7.8		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第191図	534	土師器 杯	1/6	口 底	11.4 8.2		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第191図 PL. 91	535	土師器 大型杯	1/8	口 底	22 10.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り、口縁部下にわずかにナデが残る。
第191図 PL. 91	536	土師器 台付甕	脚部2/3	脚	8.8		細砂粒/良好/明赤	脚部は内外面とも横ナデ。
第191図 PL. 91	537	土師器 小型甕	口縁部～胴部上 半	口 胴	10.7 12		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第191図 PL. 91	538	土師器 甕	口縁部～胴部 1/4	口 胴	18.8 20.1		細砂粒・周粒/良 好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第191図	539	土師器 甕	口縁部～胴部 1/5	口 胴	19.4 21.4		細砂粒/良好/にぶい橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第191図	540	土師器 甕	底部～胴部片	底	4.8		細砂粒/良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
第191図	541	土師器 甕	底部～胴部片	底	3.6		細砂粒/良好/黒	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

## 9号住居

第191図 PL. 91	542	土師器 杯	1/2	口 底	11.8 9	高 3.4	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。底部に指頭痕による盛り上がりがある。
-----------------	-----	----------	-----	--------	-----------	----------	-------------	---

種図 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第1939 PL.91	543	上師器 杯	1/3	口 14 底 9.6	高 4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへう削り、底部は手持ちへう削り。	内面底部に「木」の墨書。
第1939 PL.91	544	上師器 杯	1/5	口 11.2 底 8.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	内面底部に墨書、一部のため判読不能。
第1939 PL.91	545	上師器 杯	底部片			細砂粒/良好/橙	底部は手持ちへう削り。	内面底部に「子」の墨書。
第1939 PL.91	546	上師器 杯	1/3	口 11 底 8.4	高 3.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、一部に指頭痕が残る。底部は手持ちへう削り。	
第1939 PL.91	547	上師器 杯	1/5	口 12.6 底 9.8		細砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1939 PL.91	548	上師器 杯	1/5	口 11.8		細砂粒/良好/にぶい褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1939 PL.92	549	上師器 杯	1/5	口 11.8 底 8		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1939 PL.92	550	上師器 費	口縁部～胴部 1/5	口 19.4		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。	
第1939 PL.92	551	上師器 費	口縁部～胴部 1/6	口 19.2		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。	
第1939 PL.92	552	上製品 土埴	完形	長 4.7 幅 1.8	孔 0.4 重 12.2	微砂粒/良好/にぶい橙	外面はナデ。	
第1939 PL.92	553	上製品 土埴	ほぼ完形	長 3.3 幅 1.3	孔 0.3 重 1.8	微砂粒/良好/にぶい橙	外面はナデ。	
第1939 PL.92	554	須臾器 皿	2/3	口 13.8 底 6.8	台 7.5 高 2.9	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後ナデ、高台は貼付。	
第1939 PL.92	555	須臾器 費	口縁部片	口 23		細砂粒・粗砂粒/ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第1939 PL.92	556	上師器 杯	体部片			細砂粒/良好/にぶい褐色	体部はナデ。	体部内面に墨書、判読不能。
第1939 PL.92	557	石製品 砥石	1/2	長 幅	厚 111.3	砥沢石	表裏面および右側面の3面使用。表裏面は砥面が凹状を呈する。	
第1939 PL.92	558	礪石器 砥石	完形	長 幅	厚 407.1	黒色片岩	棒状礪の正面および側面に敲打痕、上端部に剝離痕が残る。	
10号住居								
第1950 PL.92	559	上師器 杯	口縁一部欠	口 12.2 底 8.5	高 3.7	細砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	内面底部に「下」の墨書。
第1950 PL.92	560	上師器 杯	小片	口 13.4 底 10		細砂粒/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、体部と底部はへう削り。内面は体部から口縁部に放射状凹文。	
第1950 PL.92	561	上師器 費	口縁部～胴部 1/2	口 19.2 胴 20.8		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、頸部はナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。	
第1950 PL.92	562	石製品 紡輪?	略完形	長 幅	厚 40.0	砥沢石	棒状孔径 8mm。平面形は隅丸方形を呈し、上面は他の面よりも摩滅している。	
第1950 PL.92	563	須臾器 機	1/2	口 15.3 底 7.5	台 7 高 6.1	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
11号住居								
第1970 PL.92	564	上師器 杯	口縁一部欠	口 10.6 底 6.9	高 3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	565	上師器 杯	口縁一部欠	口 11.8 底 8.8	高 3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	566	上師器 杯	1/2	口 11.7 底 7.6	高 3.5	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	内面底部に「止」の墨書。
第1970 PL.92	567	上師器 杯	1/2	口 11.7 底 7.2	高 2.8	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	内面底部に墨書、判読不能。
第1970 PL.92	568	上師器 杯	1/2	口 11.8 底 9	0 0	細砂粒/良好/明赤褐色	口唇部は横ナデ、口縁部から体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	569	上師器 杯	1/3	口 10.8 底 8.6		細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	570	上師器 杯	1/4	口 12 底 8	高 2.8	細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	571	上師器 杯	1/3	口 11.8 底 10		細砂粒/良好/にぶい褐色	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	572	上師器 杯	1/4	口 12 底 9.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう削り。	
第1970 PL.92	573	上師器 費	口縁部～胴部 1/4	口 20.8		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへう削り。内面は胴部がへうナデ。	
第1970 PL.92	574	須臾器 機	1/2	口 12.6 底 7.6	高 3.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第1970 PL.92	575	須臾器 機	口縁部～体部 1/4	口 15		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄褐色	ロクロ整形、回転右回りか。	内面は酸化焰。

種別 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19790 PL 92	576	須恵器 皿	3/4	口 底	13.4 6.5	台 高	6.2 3.2	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、周囲は高台 貼付時の回転ナデ。
第19790 PL 92	577	須恵器 杯蓋	1/3	口	15.8 2.9			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転糸切り後その周囲 を回転ヘラ削り。
第19790 PL 92	578	土製品 土罎	完形	長 幅	4.3 1.6	孔 重	0.4 9.4	微砂粒/良好/にぶ い橙	両端部は平坦面をつくる。外面はナデ。
第19790 PL 92	579	土師器 杯	底部片					細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底部はヘラ削り。
第19790 PL 92	580	土師器 杯	底部片					細砂粒/良好/にぶ い橙	底部はヘラ削り。
第19790 PL 92	581	土師器 杯	底部片					粗砂粒/良好/にぶ い橙	底部はヘラ削り。

## 12号住居

第19890 PL 92	582	土師器 杯	1/4	口 底	11.8 7.2			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第19890 PL 92	583	土師器 甕	口縁～胴部1/4	口	21.9			細砂粒/良好/明赤 褐	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第19890 PL 92	584	須恵器 椀	1/2	口	12.5 6.6	高	4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第19890 PL 92	585	須恵器 椀	2/3	口	14.7 7.2	台 高	6.5 5.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後、高台は貼付。
第19890 PL 92	586	須恵器 椀	口縁部～体部片	口	14.8			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。
第19890 PL 92	587	須恵器 椀	口縁部～体部 1/4	口	13.8			粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。外面に輪積痕がみられる。
第19890 PL 92	588	須恵器 皿	体部～底部片	底 台	6.3 5.8			粗砂粒/還元焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後、高台は貼付。

## 13号住居

第20090 PL 92	589	土師器 杯	完形	口 底	12.2 7.5	高	4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第20090 PL 92	590	土師器 杯	2/5	口	11.8 7			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第20090 PL 92	591	土師器 杯	1/4	口	11.8 8	高	3.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第20090 PL 92	592	土師器 杯	2/5	口	12.4 8.6	0	0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第20090 PL 92	593	土師器 杯	1/5	口	11.8 7.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第20090 PL 92	594	土師器 杯	1/5	口	11.8 8			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。
第20090 PL 92	595	土師器 甕	口縁部1/4～胴 部	口	17.8			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。
第20090 PL 92	596	土師器 甕	口縁部～胴部 1/4	口	21			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。
第20090 PL 92	597	須恵器 杯	完形	口	11.7 6	高	3.9	細砂粒・粗砂粒/ 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第20090 PL 92	598	須恵器 杯	1/2	口	12.2 5.7	高	3.7	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第20090 PL 92	599	須恵器 椀	1/2	口	14.2 6.4			細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。 高台欠損後研磨して再度使用か。
第20090 PL 92	600	須恵器 椀	2/3	口	13.3 6.7	台 高	7.1 6	細砂粒・粗砂粒/ 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第20090 PL 93	601	須恵器 椀	口縁部～体部 1/3	口	15.8			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回りか。
第20090 PL 93	602	須恵器 甕	胴部～底部2/3	底	13.2			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/暗灰	ロクロ整形、回転方向不明。底部は手持ちヘラ削り、胴部 はヘラ削り後ナデ。内面はヘラナデ。
第20090 PL 93	603	土師器 杯	底部片					粗砂粒/良好/にぶ い橙	底部はヘラ削り。
第20090 PL 93	604	石製品 砥石	破片	長 幅		厚 重	299.9	砥沢石	4面使用だが、表面は凹状を呈し使用頻度が高い。下端 小口および右側面の一部に整形時の痕跡が残る。断面V 字状の磨耗痕が大小認められる。

## 14号住居

種別 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第20290 PL 93	605	土師器 杯	口縁部・底部一 部欠	口 底	11.8 8.5	高	3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。

検体 PL_No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第2020 PL_93	606	土師器 杯	2/3	口 底	11.8 8.4	高 3.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第2020 PL_93	607	土師器 杯	3/5	口 底	12 7.8	高 3.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちヘラ削り。		
第2020 PL_93	608	土師器 杯	1/2	口 底	11.9 7.9	高 3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちヘラ削り。		
第2020 PL_93	609	土師器 杯	1/3	口 底	11.6 8	高 3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	内面底部に墨 書、判読不能。	
第2020 PL_93	610	土師器 杯	1/3	口 底	12 7.8	高 3.2	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第2020 PL_93	611	土師器 杯	1/4	口 底	12.2 8	高 3.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	外面体部に 「王」の墨書。	
第2020 PL_93	612	土師器 杯	1/5	口 底	12.6 9	0 0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第2020 PL_93	613	土師器 杯	1/4	口 底	13.2 10	高 3.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第2020 PL_93	614	土師器 小型甕	口縁部～胴部	口	11		細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。		
第2020 PL_93	615	土師器 上腹部	胴部～底部片	底	5		細砂粒/良好/明褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第2020 PL_93	616	土製品 土埴	完形	長 幅	4.3 1.9	孔 重	0.4 15.3	微砂粒/良好/にぶ い橙	外面はナデ。	
第2020 PL_93	617	須恵器 杯	2/5	口 底	13.2 8.2	高 3.2	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。		
第2020 PL_93	618	鉄製品 刀子	破片	長 幅	6.7 1.7	厚 重	1.3 12.44		刃先および基端部を欠く刀子破片。種別は問を持たず。刃 面も問を持たず折れ曲がるように茎へ移行する。	
第2020 PL_93	619	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	9.7 1.9	厚 重	0.9 18.61		断面はほぼ正方形の角釘で、先端に向かい細くなり尖る。 頭部は薄く大きく広げ深く折り曲げる。木質等の痕跡は確認 できない。	
15号住居										
第2040 PL_93	620	土師器 杯	4/5	口 底	11.8 7.4	高 3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデで一部に指頭痕が残る。底部 は手持ちヘラ削り。	内面口縁部の 一部にスガが 付着。	
第2040 PL_93	621	土師器 杯	1/2	口 底	12.1 8.5	高 3.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。		
第2040 PL_93	622	土師器 台付甕	胴部～脚部片	底 脚	4.2 10.1		細砂粒/良好/橙	胴部はヘラ削り、底部から脚部は横ナデ。内面は胴部がヘ ラナデ脚部上半がヘラナデ、下半が横ナデ。		
第2040 PL_93	623	土師器 甕	胴部～底部片	底	3.4		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第2040 PL_93	624	土師器 甕	4/5	口 底	17.4 9.6	高 製	27.7 20.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は口縁部が横ナデ、 胴部はヘラナデ。	
第2040 PL_93	625	須恵器 甕	ほぼ完形	口 底	12.1 5	高 4.3	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	内面体部に 「止？」の墨 書。	
第2040 PL_93	626	須恵器 甕	3/4	口 底	12.4 5.3	高 3.8	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。		
第2040 PL_93	627	須恵器 甕	3/4	口 底	13 7		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。 高台は一部欠損後欠損部分を研磨している。		
第2040 PL_93	628	須恵器 甕	1/2強	口 底	14.2 7.2	台 高	7 5.8	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2040 PL_93	629	須恵器 甕	3/5	口 底	13.6 6.4	台 高	6.4 2.3	細砂粒/還元焰/に ぶい黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2040 PL_93	630	須恵器 甕	胴部～底部片	底	16 0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	底部はヘラ削り、胴部最下部はヘラ削り。その上部はヘラ ナデ。内面胴部にアケ貝殻がくすかに残る。		
16号住居										
第2050 PL_94	631	土師器 杯	4/5	口 底	11.8 7.2	高 3.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	内外面底部に 「王」の墨 書。	
17号住居										
第2070 PL_94	632	土師器 杯	完形	口 底	11.9 7.6	高 3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	内外面の体部 に墨書、判読 不能。	
第2070 PL_94	633	土師器 杯	1/4	口 底	11 6.4	高 3.7	細砂粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、口縁部と体部はナデ、底部は手持ちヘラ 削り。		
第2070 PL_94	634	須恵器 杯	2/5	口 底	12.4 6	高 3.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。		
第2070 PL_94	635	須恵器 甕	口縁一部欠	口 底	14.7 7	台 高	7.1 6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2070 PL_94	636	須恵器 甕	3/5	口 底	14.2 6.5	台 高	6.3 5.7	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2070 PL_94	637	須恵器 甕	1/2強	口 底	12.5 7.1	台 高	7.2 5.1	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰・焼 にぶい黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	

持込 PL No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				底	幅	厚				
第2070R	638	須臾器 椀	体部～底部片	底 7.6	幅 6.6	厚 38.56	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。		
第2070R PL 94	639	鉄製品 鉄蹄車	破片	長 8.3	幅 6.1	厚 5.8	重 38.56		紡輪に紡輪が装着された状態で錆化し、紡輪の両端は劣化破損する。紡輪はほぼ円形。	
第2070R PL 94	640	鉄製品 鉄蹄車	破片	長 7.5	幅 1.0	厚 0.7	重 5.28		鉄蹄車の紡輪の破片で両端を劣化破損する。25-1と同一個体と思われるが劣化破損し直接接合できない。	
18号住居										
第2090R	641	土師器 甕	口縁部～胴部片	口 底	23		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。		
第2090R	642	土師器 甕	胴部～底部片	底	4		細砂粒/良好/灰濁	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
第2090R PL 94	643	須臾器 椀	2/3	口 底	12.6	台 高	6.8 5.7	細砂粒/還元焰・ 焼/灰濁	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2090R PL 94	644	須臾器 椀	1/2	口 底	15.2	台 高	6.8 5.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	墨書カ。
第2090R PL 94	645	須臾器 椀	2/5	口 底	13.8	台 高	7.2 4.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2090R PL 94	646	須臾器 椀	1/2	口 底	14.4	台 高	6.6 5.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2090R PL 94	647	須臾器 椀	2/3	口 底	13.6	台 高	6.4 3.7	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
第2090R PL 94	648	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	5.2 1.8	厚 2.1	重 12.31		断面はほぼ正方形の角釘で先端に向い徐々に細くなり先端近くでJ字形に折れ曲がる。頭は傘状に広がる全体に厚い跡に覆われ本体脆弱で木質等は確認できない。	
1号屋上柱建物										
第2100R	649	土師器 杯	口縁部片	口 底	13 8.2		細砂粒/良好/明赤 濁	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に斜放射状暗文。		
第2100R	650	須臾器 椀	口縁部片	口 底	15.6		細砂粒/還元焰/オ シ-7里	ロクロ整形、回転右回りか。		
As-B下水道										
第2130R PL 94	651	土製品 土鉢	完形	長 幅	4.4 2	孔 重	0.4 10.6	細砂粒/良好/にぶ い赤濁	外面はナデ。	
第2130R	652	須臾器 椀	体部～底部片	底	8 7.6			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	内面は還元焰状態。
24号溝										
第2160R	653	須臾器 甕?	胴部片					細砂粒/良好/灰黄	胴部は外面がヘラ磨き、内面はハケ目、一部に指頭痕がみられる。	
26号溝										
第2170R	654	須臾器 椀	2/5	口 底	14.4 7.4	台 高	7.5 6.1	細砂粒・粗砂粒・長 石/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	
2号井戸										
第2170R	655	須臾器 椀	口縁一部欠	口 底	13.5 6.4	台 高	6.6 5.1	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転系切り後高台を貼付。	外面体部に「++」の墨書。
27号土坑										
第2180R PL 94	656	土師器 杯	底部片					細砂粒/良好/橙	底部は手持ちヘラ削り。	内面底部に「前」の墨書。
第2180R	657	土師器 杯	体部片					細砂粒/良好/明濁	体部はナデ。	体部内面に墨書、判読不能。
29号土坑										
第2180R PL 94	658	土師器 杯	2/5	口 底	11.4 9	台 高	3.1	細砂粒/良好/明濁	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。	外面口縁部から体部の一部にスガが付着。
第2180R PL 94	659	土師器 甕	口縁部～胴部	口 底	22.2			細砂粒/良好/にぶ い赤濁	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第2180R	410	土師器 杯	2/3	口 底	12.7 9.4	台 高	3.9	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に斜放射状暗文。	
32号土坑										
第2190R PL 94	660	土師器 杯	ほぼ完形	口 底	11.5 9.5	台 高	3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ。底部は手持ちヘラ削り。	
第2190R PL 94	661	土師器 杯	1/3	口 底	11.7			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部両側部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第2190R	662	土師器 杯	1/4	口 底	12.2			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。	
第2190R PL 94	663	土師器 杯	ほぼ完形	口 底	12	台 高	3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
1号遺物集小城										
第2220R PL 95	664	須臾器 大甕	1/4	胴 台	66			細砂粒/還元焰/灰	粘土磨き上げ、外面の叩き痕はナデ消されている。内面のアテ痕もナデ消されているが微かに残る。	
第2220R PL 94	665	須臾器 甕(短頸甕)	胴部～底部片	底 台	15.4 16.2			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ナデ、高台は貼付。	

持因 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第22269 PL_94	666	須恵器 把手付壺	把手部片				細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転方向不明。把手は貼付、把手はナデ。		
第22269 PL_95	667	須恵器 壺	3/5	口 底	14.4 6.8	台 高	6.8 5.7	細砂粒・粗砂粒/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部はナデ、高台を貼付。	
第22189 PL_95	668	須恵器 壺	1/6	口	13.6			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。	
第22189 PL_95	669	須恵器 甕	胴部～底部1/3	底	15.2			細砂粒/還元焰/暗 灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部は平行引き筋が残る。底部は不定方向。胴部最下部は回転へう削り。内面胴部のアテ貝殻はナデ消されている。	
第22189 PL_95	670	須恵器 甕	口縁部～胴部 2/3	口	22.1 37			細砂粒・粗砂粒/還 元焰/灰	口縁部はロクロ整形。胴部は内面にアテ貝殻が残る。外面はへうナデにより引き筋が消されている。	
第22189 PL_95	671	須恵器 甕	口縁部～胴部 1/6	口	46.4			細砂粒・粗砂粒/還 元焰/灰	口縁部はロクロ整形、外面に3段の波状文。胴部は外面に引き筋、内面にアテ貝殻が残る。	
第22269 PL_95	672	灰輪陶器 長頸壺	遺物集中 口縁欠、上半1/5	頸	7.6 2.6			微砂粒・黒色粒/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。胴部中央は回転へう削り。施釉方法は不明。	東海9世紀代
遺構外の上遺物										
第22696 PL_96	674	土師器 杯	確認面 口縁部～底部 1/3	口	12.1 12			細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部(横下)から底部は手持ちへう削り。	
第22696	683	土師器 杯	確認面 底部片					細砂粒/良好/不 い赤褐	底部はへう削り。	底部内面に墨 書、判読不能。
第22696	684	土師器 杯	確認面 底部片					細砂粒/良好/明赤 褐	底部はへう削り。	底部内面に墨 書、判読不能。
第22696	685	土師器 杯	確認面 底部片					細砂粒/良好/明赤 褐	底部はへう削り。	底部内面に墨 書、判読不能。
第22696 PL_96	678	須恵器 壺	確認面 口縁部～底部 1/3	口	13.6 底	高	5.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい赤褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第22696	679	須恵器 杯蓋	確認面 口縁部片	口	18			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。天井部中央は回転へう削り。	
第22696	680	須恵器 杯蓋	確認面 口縁部片	幅	3.8			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。掴みは貼付。	
第22696	681	須恵器 杯蓋	確認面 掴み～天井部片	幅	2.8			細砂粒・粗砂粒/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。掴みは貼付、天井部中央は回転へう削り。	
第22696	682	須恵器 壺	確認面 口縁部～底部 1/4	口	15 底	台 高	6.9 4.5	細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第22696	686	灰輪陶器 壺	0 胴部片					微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転方向不明。胴部に筋刻文。	
第22696	687	灰輪陶器 壺	0 胴部片					微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転方向不明。胴部に筋刻文。	
第22696 PL_96	675	土製品 土鉢	確認面 完形	長 幅	3.7 1.5	孔 重	0.3 6.3	微砂粒/良好/橙	外面はナデ。	
第22696 PL_96	676	土製品 土鉢	確認面 完形	長 幅	4.4 1.8	孔 重	0.4 11.3	微砂粒/良好/不 い赤褐	外面はナデ。	
第22696 PL_96	677	土製品 土鉢	確認面 完形	長 幅	3.9 1.8	孔 重	0.3 10	微砂粒/良好/不 い赤褐	外面はナデ。	
第22696 PL_96	688	肥前磁器 器口	確認面 口縁部から体部 片	口 径 底	(7.4) (4.2)	高	6.1	白	外面に染付。口縁部内面に菱形裝飾帯。	
第22696 PL_96	689	肥前磁器 広玄碗	確認面 底部片	口 径 底	(6.0)	高		灰白	外面に染付。	
第22696	690	在地系土器 内耳銅か	確認面 口縁部片	口 径 底		高		淡灰	口唇部内面に突出、上面平坦。内外面焼し、黒色化。内外 面ナデ。	中世
第22696	691	在地系土器 片口鉢	確認面 口縁部片	口 径 底		高		淡灰	内外面焼し、黒色化。内外面ナデ。器面劣化、剥落。	中世
第22696 PL_96	692	在地系土器 片口鉢	確認面 口縁部片	口 径 底		高		くすんだ白灰	口縁部やや肥厚。口唇部外削削。内面斜行ナデ。外面研磨。 焼成良好、硬質。	中世
第22696 PL_96	673	鉄製品 不明	1面確認面 ほぼ完形	長 幅	6.6 1.4	厚 重	0.9 9.78		断面長方形の幅状の板状鉄製品で、両端に向かい幅を減じ 角形で終わり尖らない。材質等は確認できない。	
第22696 PL_96	693	瓦軒 先瓦	確認面 瓦頭片	口 径 底		高		淡灰	文様は江戸様。表面と側面研磨光沢。	
第22696 PL_96	694	石製品 砥石	完形	長 幅		厚 重	138.7	砥沢石	表面2面使用。正面は大きく研ぎ減る。左側面に幅広の工 具による整形痕が残る。	
第22696 PL_96	698	礫石器 磨石	破片	長 幅		厚 重	143.0	粗粒礫石(安山岩)	上端部に最好痕と剥離痕が残る。正面および最狭辺両面 平滑面が認められる。	
第22696 PL_96	695	石製品 大打石	不明	長 幅		厚 重	3.1	玉髓	剥片素材。剥離後も使用している。	

挿図 PL_No.	No.	種類 器種	出上位置 残存率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第22680 PL_96	696	石製品 火打石	0 不明	長幅 厚重 3.5	石英	縁辺に潰れおよび微小割傷が既る。	
第22680 PL_96	697	石製品 火打石	0 不明	長幅 厚重 7.4	石英	縁辺に使用による潰れが認められる。正面に自然面を大きく残す。	
表6 縄文・弥生時代の遺物観察表(凡例) 口:口径 底:底径 台:台径 高:器高 長:長さ 重:重量単位 径・高・長・幅・cm 重量:g							
第22880 PL_96	699	縄文土器 深鉢	口縁部片	口底 高	A	胴部下に3本単位の内形沈線文や山形沈線文を施す。器面風化で縄文の有無不明。内面底部付近に縦傷少付着。	諸磯b式
第22880 PL_96	700	縄文土器 深鉢	胴下半・底部のみ	口底 高 9.4	A	口縁部に低位な耳状や円形状の付付文あり。微量付着。	諸磯b式
第22880 PL_96	701	縄文土器 深鉢	1区V層 口縁部片	口底 高	A	口縁部に耳状付付文や集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	702	縄文土器 深鉢	1区V層 口縁部片	口底 高	A	口縁部に円形付付文や集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	703	縄文土器 深鉢	1区V層 口縁部片	口底 高	A	口縁部に内形付付文や横位集合平行沈線文を、胴部に縦位集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	704	縄文土器 深鉢	1区V層 口縁部片	口底 高	A	口縁部に耳状付付文を施し、その相互間に半截竹管の押し引き連続刻痕を付加する。	諸磯c式
第22880 PL_96	705	縄文土器 深鉢	1区V・V層 胴部片	口底 高	A	胴部に横位とそれに直交する縦位の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	706	縄文土器 深鉢	1区北東部 胴部片	口底 高	A	胴部に横位とそれに直交する縦位の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	707	縄文土器 深鉢	1区北東部 胴部片	口底 高	A	胴部に横位とそれに直交する縦位の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	708	縄文土器 深鉢	1区北東部 胴部片	口底 高	A	胴部に縦位や副歯状の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	709	縄文土器 深鉢	1区V層 胴部片	口底 高	A	胴部に縦位や副歯状の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	710	縄文土器 深鉢	1区V層 胴部片	口底 高	A	胴部に縦位や副歯状の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	711	縄文土器 深鉢	1区V層 胴部片	口底 高	A	胴部に縦位や副歯状の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	712	縄文土器 深鉢	1区北東部 胴部片	口底 高	A	胴部に縦位や副歯状の集合平行沈線文を施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	713	縄文土器 深鉢	1区東部V層 胴部片	口底 高	A	胴部に縦位や副歯状の集合平行沈線文を施す。円形付付文も見られる。	諸磯c式
第22880 PL_96	714	縄文土器 深鉢	1区V層 胴部片	口底 高	A	胴部に集合平行沈線文を副歯状に施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	715	縄文土器 深鉢	1区東部V層 胴部片	口底 高	A	胴部に集合平行沈線文を副歯状に施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	716	縄文土器 深鉢	1区東部V層 胴部片	口底 高	A	胴部に集合平行沈線文を副歯状に施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	717	縄文土器 深鉢	1区東部V層 胴部片	口底 高	A	胴部に集合平行沈線文を副歯状に施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	718	縄文土器 深鉢	1区東部V層 胴部片	口底 高	A	胴部に集合平行沈線文を副歯状に施す。	諸磯c式
第22880 PL_96	719	弥生土器 甕	1区南東部 胴部片	口底 高	D	頸部に7本単位の横位波状文を挿入して、その上下に波状文を施す。	樽式
第22880 PL_96	720	弥生土器 甕	1区中部 胴部片	口底 高	E	振幅の短い4本単位の横位波状文を複数段に施す。	十王台式系
第22880 PL_96	721	弥生土器 甕	1区南東部 胴部片	口底 高	D	口縁部にL型横位を横位に施す。器面の風化あり。	吉ヶ谷式併行
第22880 PL_96	722	弥生土器 甕	1区北部V層 胴部片	口底 高	E	絡糸体2種Rにより網目状器文を施文。内外面や風化。	十王台式系
第22880 PL_96	723	弥生土器 甕	1区V層 胴部片	口底 高	E	同部にスリット文を施し、以下に絡糸体2種Rにより網目状器文を施文。内外面風化。	十王台式系
第22880 PL_96	725	弥生土器 甕	2区2面確認 胴部片	口底 高	E	振幅の短い横位波状文を複数段に施す。筋数不明。内外面や風化。	十王台式系
第22880 PL_96	726	弥生土器 甕	3区10位 胴部片	口底 高	D	7本単位の横位波状文を横位に複数段に施す。内面研磨。	樽式
第22880 PL_96	727	弥生土器 甕	2区遺構外D 胴部片	口底 高	E	頸部に半截竹管状工具による結節沈線文を施し、上位に6本単位の小振りな横位波状文を複数段に施す。内外面風化。	十王台式系
第22880 PL_96	728	弥生土器 甕	2区2区微高地 胴部片	口底 高	E	頸部上位に斜格子文や6本単位のスリット文・波状文を施す。内面風化。	十王台式系
第22880 PL_96	729	弥生土器 甕	1区3区北東V層 胴部片	口底 高	E	頸部に半截竹管状工具による4本以上の結節沈線文を横位に施文。内外面や風化。	十王台式系
第22880 PL_96	730	弥生土器 甕	2区2面確認D 胴部片	口底 高	E	口唇部に刻み溝を施し、以下に5本単位の横位波状文を複数段に横位に施文。内外面や風化。	十王台式系
第22880 PL_96	731	弥生土器 甕	1区4区南東V層 底部1/4	口底 高 (6.8)	E	附加条第2種と思われるが輪縁不明。付加幅は1。底面に縦布痕。内面風化。	十王台式系
第22880 PL_96	732	縄文土器 深鉢	2区遺構外B 胴部片	口底 高	B	波状口縁と推定される。アナタラ属の日段縁文を施した後に平行沈線文を施文。内面研磨。	興津式
第22880 PL_96	733	縄文土器 深鉢	2区微高地 口縁部片	口底 高	B	アナタラ属の日段縁文を施した後に沈線文を施文。内面研磨。	興津式

種目 PL No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材	成形・整形の特徴	備考	
第22900 PL-96	734	縄文土器 深鉢	3区3住 胴部片	口底	高 A	縄文丸を横位施文。内面横磨き。	溝襷b式	
第22900 PL-96	735	縄文土器 深鉢	2区2区試掘トシ 底部1/8	口底	高 (00.0) A	縄文丸を横位施文。内面横磨き。	溝襷b式	
第22900 PL-96	736	縄文土器 深鉢	3区8溝 口縁部片	口底	高 A	内折する口縁部に横位及び弧状の集合沈線文を施す。内面は粗い横撫磨で。	溝襷b式	
第22900 PL-96	737	縄文土器 深鉢	3区遺構外 胴部片	口底	高 A	2本単位の平行沈線文を間隔置いて横位多段に施文。内面やや横化。	溝襷b式	
第22900 PL-96	738	縄文土器 深鉢	1区4面V層-1 胴部片	口底	高 A	横位の集合沈線文を施す。内面横磨き。	溝襷b式	
第22900 PL-96	739	縄文土器 深鉢	3区3区確認面 胴部片	口底	高 A	3本単位の平行沈線文を間隔置いて横位多段に施文。内面磨き。	溝襷b式	
第22900 PL-96	740	縄文土器 深鉢	1区4面V層 胴部片	口底	高 A	多段横位の横位平行沈線文間に副歯状の集合沈線文を施す。内面やや横化。	溝襷b式	
第22900 PL-96	741	縄文土器 深鉢	2区2面確認面 口縁部片	口底	高 C	波状口縁。幅広い低平な隆帯により区画文を施し、縄文Lを充填施文。内面横磨き。	加曾利E3式	
第22900 PL-97	742	割片石器 石鏝	1区33溝 完形	長幅	厚重 0.7	黒曜石	両面に押圧割離による二次加工を施し整形。	凹基無茎鏝
第22900 PL-97	743	割片石器 打製石斧	1区3面V層 完形	長幅	厚重 140.8	黒色頁岩	被熱によるハジケ・変色あり。両側縁を中心に二次加工を施す。	
第23000 PL-97	744	割片石器 打製石斧	1区3面V層 破片	長幅	厚重 45.7	珪質頁岩	基部破片。被熱によると推定されるハジケが認められる。右側縁潰れ。	
第23000 PL-97	745	礫石器 磨石?	1区3面V層 1/4	長幅	厚重 220.1	粗粒輝石安山岩	表裏面に摩滅が認められる。	
第22900 PL-97	746	礫石器 敲石	1区3面V層 完形	長幅	厚重 84.3	雲母石英片岩	小形。上下端部に割離痕が残る。	
第22900 PL-97	747	割片石器 打製石斧	1区4面北東 破片	長幅	厚重 52.8	粗粒輝石安山岩	刃部周辺の摩滅顕著。裏面は全面自然面。	
第22900 PL-97	748	割片石器 打製石斧	1区4面V層 3/4	長幅	厚重 140.8	黒色頁岩	刃部周辺の摩滅が顕著で、内腹でも観察できる。上端欠損。	
第22900 PL-97	749	割片石器 打製石斧	1区4面V層 完形	長幅	厚重 146.8	黒色頁岩	右側面に二次加工を施し整形。刃部は加工は無く滑い。	
第23000 PL-97	750	割片石器 石核	1区4面北東 完形	長幅	厚重 182.6	黒色安山岩	分別礫素材。上面平坦面および自然面を打面として割片剥離。	
第23000 PL-97	751	割片石器 石核	1区4面北東 完形	長幅	厚重 12.5	黒曜石	小形。打面を転移しながら剥離を行っている。	
第23000 PL-97	752	割片石器 石核	1区4面北東 完形	長幅	厚重 12.7	黒曜石	打面転移を繰り返しながら、割片を剥離している。小形で残核状態。	
第23000 PL-97	753	礫石器 敲石	1区4面中北 完形	長幅	厚重 343.6	雲母石英片岩	扁平礫の上下端部に割離痕と潰れが認められたため、敲石とした。	
第23000 PL-97	755	礫石器 スタンプ形 石器	1区4面V層 完形	長幅	厚重 650.0	砂岩	下面縁部に摩滅および割離痕。表裏面縁部に散打痕がある。	
第22900 PL-97	756	割片石器 石鏝	2区2面確認面 完形	長幅	厚重 0.9	チャート	正面に主要割離面の一部を残す。左返し部に小さな切りが入る。	
第22900 PL-97	757	割片石器 打製石斧	2区1溝2面割 2/3	長幅	厚重 72.4	黒色頁岩	基部側破片。左右側面に二次加工を施し整形。	
第23000 PL-97	758	割片石器 打製石斧	2区2溝2面 2/3	長幅	厚重 58.7	ホルンフェルス	下部欠損。右側縁摩滅。	
第23000 PL-97	759	割片石器 打製石斧	2区4溝2面 略完形	長幅	厚重 187.6	黒色頁岩	両側縁に切りが入る。刃部周辺の摩滅顕著。	
第23000 PL-97	760	割片石器 打製石斧	2区2面覆土 略完形	長幅	厚重 97.7	黒色頁岩	左右側縁に二次加工を施し整形。刃部に摩滅と縁状痕が見られる。	
第23000 PL-97	761	割片石器 石核	2区1溝2面 完形	長幅	厚重 284.1	石英	扁平礫素材。自然面および平坦な割離面を打面として打撃を加えている。火打石の素材の可能性が高い。	
第22900 PL-97	762	割片石器 石鏝	2区2住3面覆土 破片	長幅	厚重 1.6	黒色安山岩	先端部欠損。基部に厚みを残す。	凹基無茎鏝
第22900 PL-97	763	割片石器 石鏝	2区3面確認面 完形	長幅	厚重 2.8	チャート	両面全面に押圧割離を施し整形。	凹基無茎鏝
第22900 PL-97	764	割片石器 尖頭状石器	2区33溝 完形	長幅	厚重 35.8	黒色頁岩	大形薄手。横長割片を素材とし、両面縁部に二次加工を施し、尖頭状に整形している。	
第22900 PL-97	765	割片石器 打製石斧	2区4面As-C混黒 土上 完形	長幅	厚重 61.2	硬質頁岩	刃部周辺摩滅。摩滅を切る割離痕があることから刃部再生を行ったと推定される。裏面にバルブを残す。	
第23000 PL-97	766	礫石器 磨石	2区4面As-C混黒 土上 完形	長幅	厚重 270.2	粗粒輝石安山岩	礫礫素材。正面中央部に弱い磨面をもつ。	
第22900 PL-97	767	割片石器 石鏝	2区表採 完形	長幅	厚重 0.1	チャート	両面に押圧割離を施し整形している。全体的に彎曲し、返し部が左右非対称である。	凹基無茎鏝
第22900 PL-97	768	割片石器 石鏝	3区6溝2面 完形	長幅	厚重 0.7	チャート	両面に二次加工を施し丁寧に整形している。	凹基無茎鏝
第22900 PL-97	769	割片石器 石鏝	3区8溝2面 破片	長幅	厚重 0.5	黒曜石	先端部のみ残存。両面に二次加工を施し整形。左右で厚さが異なる。	
第22900 PL-97	770	割片石器 石鏝	3区3面確認面 略完形	長幅	厚重 0.8	黒色頁岩	左返し部欠損。全体的に摩滅し割離が明瞭でない。	凹基無茎鏝







表21 非掲載遺物一覧(2) 陶磁器中心

(点数)

区	期別・面	遺物名	土師器		須恵器		灰釉陶器		中世				近世				近現代		時期不詳	鉄製品	
			小型新瓦	中型新瓦	大型新瓦	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明			不明
1 1	1	貝類	近世	水田																	
1 1	1	復旧焼				1					2	1			2	12					4
1 1	3	復旧焼				1	8	1			1	1			17	2					4
1 1	7	復旧焼				2									6	15	1				1
1 1	2	焼														1					
1 1	3	焼				16	3	3													1
1 1	8	焼																			
1 1	9	焼																			1
1 1	1面2層	丹戸ラ																			5
1 1	1面3層	南東																			
1 1	1面3層	南西																			
1 1	1面3層	北東																			1
1 2	13	焼																			
1 2	2面	10	焼																		
1 2	2面	7	土坑																		1
1 2	2層	IV・V層	南東																		
1 2	2面V層	西																			
1 2	2面V層	南東						1													3
1 2	2面V層	北西																			
1 2	2面V層	南西																			2
1 2	2面V層	西																			
1 2	2面V層	南																			
1 2	2面V層	北西																			1
1 2	2面V層	南東																			
1 2	2面V層	北西部																			
1 2	3面V層	南西																			
1 2	3面V層	北西																			
1 2	3面V層	北東																			
1 2	3面V層	北東																			
1 2	3面V層	北東																			
1 4	4面V層	中東部																			2
1 4	4面V層	北																			1
1 4	4面V層	北東																			7
1 4	4層	焼																			1
1 4	4層	焼																			
1 4	4層	焼																			
1 9		水田																			
1 9		南東部																			
1 9		南西部																			
1 9		表深																			1
1 9		南北ト																			
1 9		レンヂ																			
1 9		焼丸																			
1 9		旧耕作																			
1 9		土																			
1 9		表深																			
2 1	1	復旧																			1
2 1	2	焼丸																			
2 1	4	焼																			
2 1	5	焼																			
2 1	6	焼																			1
2 1	6	焼																			
2 1	7	焼																			
2 1	8	焼																			
2 1		A8B8層																			
2 1		復旧サ																			
2 1		ブレ																			
2 1	1	復旧試																			
2 1		掘トレ																			
2 1		ンチ																			
2 1	1	復旧																			
2 1	2	復旧試																			
2 1		掘トレ																			
2 1		ンチ																			
2 1	2	復旧焼																			
2 1		土上蓋																			
2 1	2	復旧																			





表10 1区の水田測定表

1區(A-4段水田)		※軽の下層で計測		
番号	所在グリッド	南北長(m)×東西長(m)×平均深(m)	面積(m <sup>2</sup> )	備考
2	242-245-448-403	14.93×11.40×7	15.000	
2	236-238-453-455	4.60×2.35×6	5.200	
3	246-247-456-460	0.95×12.25×9	11.700	
4	248-249-459-460	0.75×11.20×9	8.100	
5	243-245-448-459	13.55×12.20×9	123.800	
6	246-247-456-457	11.51×10.93×5	63.400	
7	239-249-447-457	10.8×9.03×9	83.100	
8	237-250-439-448	12.97×9.75×13	163.200	

3區(A5-下水田)		※軽の下層で計測		
番号	所在グリッド	南北長(m)×東西長(m)×平均深(m)	面積(m <sup>2</sup> )	備考
1	233-239-504-507	12.10×15.90×4	79.800	
2	228-234-500-505	3.43×6.40×2	6.200	
3	238-249-504-507	0.65×14.10×3	3.210	
4	236-238-504-505	0.95×11.90×5	5.180	
5	223-235-491-504	3.65×15.95×4	30.300	
6	220-224-480-493	2.35×3.35×2	2.760	
7	218-229-489-491	1.15×11.87×3	12.800	
8	216-217-487-489	1.30×12.15×3	12.400	

4區(B1-F下水田)		※軽の下層で計測		
番号	所在グリッド	南北長(m)×東西長(m)×平均深(m)	面積(m <sup>2</sup> )	備考
1	213-214-502-504	1.84×10.56×0	-	
2	213-214-502-503	-	-	
3	209-210-496-497	1.42×10.50×1	-	
4	207-210-494-496	2.08×10.70×0	11.46	
5	206-207-492-494	0.70×10.70×0	-	
6	205-206-491-492	1.30×10.70×1	-	
7	215-218-502-503	12.12×11.14×0	11.73	
8	216-217-501-502	0.64×10.50×1	-	
9	211-213-498-498	1.25×10.50×1	11.000	
10	210-212-495-497	1.50×13.33×1	1.97	
11	209-211-493-495	2.24×12.24×2	2.74	
12	209-212-492-493	0.42×13.33×3	-	
13	206-490-491	-	-	
14	218-220-503-504	10.60×10.90×1	10.200	
15	217-219-501-503	2.10×1.49×2	2.62	
16	216-218-499-501	1.70×1.67×2	2.54	
17	214-216-497-500	2.80×2.05×2	5.62	
18	212-214-495-497	1.60×1.40×2	2.24	
19	211-212-494-496	1.35×10.70×2	10.91	
20	209-212-492-495	2.40×1.30×0	3.16	
21	208-210-490-492	2.40×1.30×1	2.99	
22	206-490-490	-	-	
23	223-214-504-505	0.80×10.70×0	10.32	
24	221-223-503-503	1.20×12.00×1	12.00	
25	219-221-501-504	2.49×1.64×3	3.02	
26	218-220-490-502	2.20×1.60×2	3.63	
27	217-219-498-500	1.72×1.04×2	1.70	
28	215-217-496-498	2.42×1.10×1	12.690	
29	214-216-494-496	1.65×1.16×1	11.800	
30	212-214-493-495	1.68×1.25×1	2.06	
31	212-213-492-493	0.96×1.10×1	1.06	
32	211-212-491-492	1.12×1.03×2	1.10	
33	209-211-489-491	2.30×1.12×1	2.36	
34	208-210-487-489	12.96×10.90×0	-	
35	214-226-504-505	11.06×10.50×2	10.54	
36	223-225-502-504	1.80×1.11×1	1.94	
37	221-223-500-503	2.22×2.22×2	3.17	
38	219-222-496-500	2.12×1.28×0	2.67	
39	218-220-497-499	1.80×1.23×2	2.26	
40	216-218-495-497	2.10×1.20×2	2.48	
41	215-217-493-495	1.70×1.32×1	2.13	
42	214-216-492-494	1.63×1.38×4	2.13	
43	213-214-491-492	0.92×1.50×0	1.31	
44	212-214-490-492	1.34×1.43×2	1.87	
45	210-212-488-490	2.27×1.17×2	2.75	
46	208-211-486-488	2.32×1.32×0	3.14	
47	225-227-503-505	12.27×1.90×4	11.86	
48	224-226-501-503	2.10×1.92×3	1.91	
49	222-224-499-501	2.20×1.90×2	2.20	
50	220-222-497-499	2.25×1.82×0	2.14	
51	219-220-496-498	1.65×1.06×1	1.84	
52	217-219-494-496	2.10×1.97×2	2.02	
53	216-218-492-494	1.50×1.28×1	2.05	
54	215-217-491-493	1.50×1.08×3	1.57	
55	214-216-490-491	0.82×1.06×0	0.83	
56	213-215-488-490	1.83×1.10×2	2.182	
57	211-214-487-489	2.27×1.18×4	2.64	
58	210-213-483-486	2.47×1.18×3	2.78	

59	228-230-504-505	11.45×11.40×3	11.07	
60	226-229-502-504	2.28×1.20×3	2.59	
61	225-227-500-502	2.00×1.15×3	2.29	
62	223-225-498-501	2.47×1.94×2	2.43	
63	221-223-496-499	1.83×1.20×2	2.00	
64	220-222-495-497	1.97×0.96×1	2.00	
65	218-220-493-495	2.03×1.10×2	2.96	
66	217-219-492-493	1.37×0.88×1	1.22	
67	216-218-490-492	1.70×1.17×3	1.66	
68	215-217-489-490	0.90×1.02×2	0.96	
69	214-216-487-490	1.90×1.07×3	2.10	
70	213-215-486-488	1.62×1.35×1	2.08	
71	211-213-483-486	2.76×1.30×3	3.40	
72	231-232-503-505	10.83×10.60×1	10.29	
73	229-231-503-505	1.72×1.23×2	2.16	
74	227-230-503-505	2.25×1.25×2	2.84	
75	226-228-499-501	2.00×1.10×3	2.18	
76	224-226-497-500	2.06×1.06×2	2.57	
77	223-226-496-497	2.20×1.10×3	2.24	
78	221-223-494-496	1.60×1.32×2	1.90	
79	219-221-492-494	2.00×1.02×1	2.02	
80	218-220-490-492	1.40×1.10×1	1.20	
81	217-219-489-491	1.83×1.26×3	2.50	
82	216-218-488-489	0.73×1.08×3	0.83	
83	215-217-486-489	1.60×1.22×2	1.82	
84	214-216-486-487	1.65×1.08×1	1.60	
85	211-213-483-486	2.40×1.10×4	2.56	
86	231-234-503-505	12.15×1.25×2	2.18	
87	230-232-501-504	1.92×1.45×2	2.70	
88	228-231-499-502	2.24×1.35×2	3.06	
89	227-229-498-500	1.95×1.40×3	2.73	
90	225-228-496-499	2.30×1.50×3	3.60	
91	223-226-494-496	1.92×1.53×2	2.88	
92	222-224-492-495	1.76×1.58×3	2.66	
93	220-223-491-493	2.00×1.80×2	2.89	
94	219-221-489-491	1.80×1.20×2	2.48	
95	217-220-487-489	2.50×1.44×3	3.42	
96	216-218-485-488	1.78×1.40×3	2.43	
97	214-217-483-486	2.53×1.34×3	3.16	
98	214-215-482-483	0.73×11.08×3	10.70	
99	214-216-504-505	11.25×10.95×2	10.89	
100	213-235-502-504	2.15×1.45×3	2.90	
101	231-233-503-503	1.80×1.20×3	2.15	
102	229-232-498-501	2.45×1.40×2	3.34	
103	228-230-496-499	1.80×1.45×2	2.54	
104	226-229-494-497	2.25×1.48×3	3.20	
105	225-227-493-495	1.98×1.25×4	2.43	
106	223-226-490-493	1.56×1.20×3	2.13	
107	222-224-489-492	2.04×1.40×1	2.90	
108	220-223-488-490	1.81×1.55×2	1.73	
109	218-221-486-488	2.41×1.32×3	3.26	
110	217-219-484-486	1.96×1.35×3	2.83	
111	215-218-482-485	2.25×1.37×3	3.85	
112	214-216-480-482	11.60×1.00×5	11.30	
113	237-239-504-505	11.16×11.04×0	10.60	
114	236-238-503-505	2.00×1.54×2	3.16	
115	234-236-501-503	2.25×1.55×3	3.29	
116	232-235-499-501	1.89×1.43×3	2.70	
117	231-233-497-500	2.28×1.25×3	2.94	
118	229-231-495-498	1.97×1.15×2	2.13	
119	228-230-490-496	2.12×1.11×2	2.37	
120	226-228-499-494	2.10×1.15×2	2.55	
121	225-227-489-492	1.68×1.45×2	2.19	
122	223-225-488-490	2.26×1.55×2	1.85	
123	221-224-486-489	1.83×1.96×2	2.85	
124	220-222-484-487	2.27×1.54×5	3.53	
125	218-221-482-485	2.05×1.55×4	3.10	
126	216-219-481-483	2.47×1.40×5	3.33	
127	215-217-479-481	11.81×1.43×3	12.40	
128	241-505-0	10.43×11.13×1	10.60	
129	238-241-503-505	2.26×1.41×0	3.02	
130	237-239-501-504	1.95×1.37×1	2.67	
131	235-238-499-502	2.10×1.35×2	2.87	
132	234-236-498-500	1.38×1.32×1	1.72	
133	232-235-496-499	2.83×1.45×3	3.96	
134	230-233-484-486	1.87×1.35×2	2.58	
135	229-231-492-495	2.05×1.45×2	2.89	
136	227-230-490-493	2.31×1.50×2	3.40	
137	226-228-489-491	1.66×1.63×1	2.74	
138	224-227-487-489	2.32×1.38×2	3.52	
139	223-225-485-487	1.80×1.46×3	2.52	
140	221-224-483-486	2.49×1.58×5	3.63	

141	230~222-481~483	1.68 × 1.36 × 3	2.10
142	218~220-479~482	2.16 × 1.63 × 4	3.47
143	216~219-477~480	2.20 × 1.60 × 2	3.57
144	246~247-507~	0.69 × 0.30 × 1	0.09
145	246~246-506~507	1.43 × 0.26 × 1	0.29
146	245~507~	0.30 × 0.19 × 1	0.04
147	241~243-504~485	1.61 × 1.15 × 0	0.20
148	240~242-502~504	2.10 × 1.25 × 0	2.53
149	238~240-500~502	2.00 × 1.31 × 1	2.59
150	237~238-499~501	2.26 × 0.90 × 1	1.92
151	235~237-497~499	1.40 × 1.35 × 2	1.78
152	233~236-495~498	2.80 × 1.15 × 2	3.05
153	232~234-493~495	2.12 × 1.22 × 0	2.55
154	230~232-491~494	2.11 × 1.40 × 2	2.94
155	229~231-489~492	2.08 × 1.18 × 0	2.69
156	227~229-487~490	1.90 × 1.45 × 3	2.69
157	226~228-485~488	2.40 × 1.55 × 3	3.40
158	224~226-484~486	1.94 × 1.60 × 4	2.91
159	222~225-482~485	2.36 × 1.40 × 4	3.46
160	221~223-480~482	1.80 × 1.40 × 4	2.58
161	219~222-478~481	1.85 × 1.28 × 2	2.30
162	217~220-476~479	2.33 × 1.30 × 0	2.94
163	217~218-475~477	0.70 × 0.22 × 2	0.86
164	248~250~	0.00 × 0.00 × 0	0.47
165	247~248-506~507	1.30 × 1.21 × 0	1.52
166	245~247-505~507	1.38 × 1.90 × 3	1.74
167	245~246-504~506	1.161 × 0.90 × 1	0.50
168	242~244-503~505	1.951 × 1.26 × 0	0.84
169	241~243-501~503	1.95 × 1.42 × 0	2.58
170	239~242-499~502	2.20 × 1.55 × 1	2.34
171	238~240-497~500	2.13 × 1.93 × 2	4.09
172	237~239-496~498	1.68 × 1.50 × 3	2.45
173	235~237-494~497	2.35 × 1.72 × 1	4.06
174	233~235-492~494	2.45 × 1.59 × 1	3.90
175	232~234-490~492	1.80 × 1.39 × 2	2.41
176	230~232-488~490	2.25 × 1.74 × 2	3.72
177	228~231-486~488	1.60 × 1.40 × 3	2.38
178	227~229-484~487	2.20 × 1.42 × 3	2.98
179	225~227-483~485	2.10 × 1.30 × 4	2.46
180	223~226-480~483	2.20 × 1.46 × 3	3.10
181	222~224-478~481	1.90 × 1.28 × 4	2.51
182	220~223-477~479	2.00 × 1.60 × 3	3.02
183	219~221-475~477	2.36 × 1.45 × 2	3.36
184	218~220-474~475	1.56 × 1.40 × 2	2.18
185	249~251~	0.60 × 0.35 × 1	0.14
186	249~250-506~507	1.35 × 0.79 × 0	1.04
187	248~249-505~506	1.37 × 1.00 × 1	1.19
188	246~248-504~506	1.28 × 1.18 × 1	1.39
189	245~247-503~505	1.32 × 1.13 × 1	1.60
190	243~245-502~503	2.08 × 0.83 × 2	0.60
191	242~244-500~502	1.60 × 1.11 × 0	0.66
192	241~243-498~500	1.86 × 1.20 × 0	2.16
193	240~242-496~498	1.85 × 1.10 × 0	2.08
194	238~240-495~497	1.85 × 1.40 × 0	2.65
195	236~239-491~495	2.33 × 1.21 × 0	3.30
196	235~237-491~493	2.10 × 1.45 × 1	2.98
197	233~235-489~491	2.15 × 1.35 × 2	2.91
198	231~234-486~489	2.32 × 1.50 × 2	3.42
199	230~232-485~487	1.86 × 1.55 × 4	2.85
200	228~231-483~486	1.88 × 1.50 × 3	2.90
201	226~229-481~484	2.27 × 1.55 × 3	3.49
202	225~227-479~482	1.85 × 1.50 × 5	2.88
203	224~226-478~480	1.74 × 1.13 × 4	2.50
204	223~224-476~478	2.08 × 0.35 × 2	2.75
205	220~223-474~476	2.00 × 1.18 × 3	2.32
206	219~221-473~474	1.12 × 0.28 × 2	0.109
207	240~251-506~507	0.70 × 0.50 × 0	0.27
208	249~251-505~507	1.20 × 0.90 × 0	0.71
209	248~250-504~506	1.26 × 0.64 × 1	0.68
210	247~249-503~504	1.56 × 0.45 × 2	0.70
211	246~247-502~503	1.15 × 0.95 × 2	0.82
212	245~246-502~503	1.051 × 0.90 × 2	0.72
213	~243-499~500	1.01 × 0.72 × 1	0.51
214	242~243-497~499	1.53 × 1.17 × 1	1.80
215	241~243-496~498	1.75 × 0.65 × 1	1.74
216	239~242-494~496	2.40 × 1.25 × 1	2.92
217	238~240-491~494	2.30 × 1.57 × 1	3.69
218	236~239-489~492	2.04 × 1.58 × 0	3.17
219	234~237-488~490	2.25 × 1.50 × 1	3.15
220	233~235-485~488	2.66 × 1.12 × 3	3.07
221	231~232-484~486	1.88 × 0.85 × 1	1.50
222	229~232-482~484	2.20 × 1.44 × 4	3.30

223	228~230-480~483	2.10 × 1.57 × 3	3.17
224	226~229-478~491	1.88 × 1.53 × 1	2.93
225	225~227-476~479	1.88 × 1.40 × 3	2.70
226	223~225-475~477	2.05 × 1.46 × 2	3.04
227	221~224-473~475	2.08 × 1.48 × 2	3.10
228	220~222-471~473	1.54 × 1.25 × 4	1.74
229	243~489~	0.32 × 0.15 × 1	0.13
230	242~243-495~497	1.28 × 1.13 × 1	0.24
231	241~243-493~495	2.06 × 1.10 × 0	2.70
232	239~242-491~493	3.00 × 0.72 × 0	0.20
233	237~239-489~491	2.24 × 0.60 × 0	0.18
234	236~238-487~489	1.30 × 0.70 × 0	0.18
235	235~236-484~487	2.70 × 1.04 × 3	0.23
236	234~235-483~484	0.94 × 0.62 × 2	-
237	231~232-481~483	0.20 × 0.90 × 1	-
238	229~230-479~480	0.60 × 0.60 × 0	-
239	228~230-477~479	2.18 × 1.12 × 4	0.28
240	226~228-475~478	1.90 × 1.13 × 4	0.29
241	224~227-473~476	1.95 × 1.18 × 3	2.40
242	223~225-471~474	1.24 × 1.00 × 2	-
243	243~244-493~495	2.07 × 0.60 × 1	0.41
244	233~237-484~486	2.25 × 0.50 × 1	0.06

表11 1区の土坑測定表

## 1層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	215-432-A	楕円形	E-81~E	90 × 52 × 3	

## 2層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	225-475-B	楕円形	E-51~E	120 × 85 × 8	
2	225-475-B	楕円形	E-51~E	120 × 85 × 8	
3	225-433-C	楕円形	E-28~E	66 × 31 × 6	
4	225-433-C	楕円形	E-31~E	150 × 110 × 27	
5	225-433-C	楕円形	E-31~E	220 × 80 × 27	
6	225-433-C	楕円形	E-31~E	220 × 80 × 27	

## 3層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	219-220-497-B	楕円形	E-51~E	120 × 85 × 8	
2	213-232-434-C	楕円形	E-26~E	110 × 50 × 13	
3	213-232-434-C	楕円形	E-26~E	110 × 50 × 13	
4	223-224-438-B	楕円形	E-69~E	90 × 60 × 43	

## 4層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	228~227-424-C	楕円形	E-51~E	225 × 190 × 11	
2	228~227-424-C	楕円形	E-56~E	108 × 62 × 37	
3	228~227-424-C	楕円形	E-59~E	100 × 72 × 25	調査区画
4	219~221-474-C	楕円形	E-41~E	135 × 150 × 8	調査区画
5	209~211-477-B	楕円形	E-61~E	120 × 85 × 8	
6	198-460-B	楕円形	E-82~E	85 × 70 × 38	
7	211~212-422-C	楕円形	E-81~E	150 × 100 × 30	

表12 1区のピット測定表

## 2層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
2	187-437-C	楕円形	E-6~E	41 × 25 × 20	1区調査区画

## 3層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
4	228-496-B	楕円形	E-34~E	55 × 35 × 14	
5	211-503	楕円形	E-33~E	55 × 37 × 16	2区調査区画
6	209-497	楕円形	E-32~E	45 × 43 × 15	
7	216-494	楕円形	E-61~E	45 × 35 × 15	
8	197-498-01	楕円形	E-61~E	37 × 37 × 9	
9	196-485	楕円形	E-61~E	33 × 27 × 17	
10	228-477	楕円形	E-61~E	51 × 38 × 21	
11	217-456	楕円形	E-43~E	39 × 33 × 20	
12	211-488	楕円形	E-49~E	59 × 49 × 6	

## 4層

番号	所在グリッド	形状	土層方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
14	217~218-434	不整形	E-68~E	73 × 40 × 21	
15	219-433-C	楕円形	E-29~E	45 × 27 × 17	
16	214~212-433	楕円形	E-32~E	36 × 26 × 13	
17	205-497	楕円形	E-68~E	36 × 26 × 13	
18	231-434	楕円形	E-36~E	26 × 26 × 12	
19	231-490	楕円形	E-38~E	41 × 31 × 18	
20	235-485-B	楕円形	E-32~E	51 × 38 × 21	
21	230-498	楕円形	E-61~E	28 × 21 × 18	
22	225~226-447	楕円形	E-37~E	45 × 29 × 11	
23	224-447	楕円形	E-35~E	47 × 35 × 14	
24	221~222-445-B	楕円形	E-61~E	60 × 39 × 9	
25	222-445-A	楕円形	E-61~E	60 × 39 × 9	
26	222-445-A	楕円形	E-61~E	49 × 43 × 10	
27	222-445-A	楕円形	E-61~E	47 × 37 × 9	
28	217-448	楕円形	E-31~E	37 × 36 × 22	
29	210-440	楕円形	E-36~E	36 × 37 × 15	
30	204~204-476-B	楕円形	E-61~E	47 × 41 × 10	
31	208-480-01	楕円形	E-54~E	49 × 49 × 10	
32	211-427	楕円形	E-61~E	28 × 26 × 20	
33	211-427	楕円形	E-61~E	43 × 39 × 18	
34	211-427	楕円形	E-61~E	28 × 27 × 18	
37	228-431	楕円形	E-83~E	41 × 32 × 33	
38	228-430-A	楕円形	E-80~E	39 × 31 × 25	







表15 2区水田測定表

番号	所在グリッド	標高の下端で計測				備考
		南北長(m)	東西長(m)	平均幅(m)	面積(㎡)	
1	192~407~416	111.30	7.85	× 6	184.301	
2	178~194-407~416	15.05	× 8.55	× 4	127.401	
3	217~221-399~400	13.50	× 11.00	× 5	14.801	
4	209~218-394~406	7.80	× 6.10	× 4	59.401	
5	193~210-394~408	15.30	× 13.50	× 6	190.101	
6	180~193-393~407	12.90	× 13.00	× 9	163.401	
7	-	-	-	× 2	-	
8	-	-	-	× 3	-	
9	186~190-371~394	19.80	× 19.50	× 6	132.401	
10	181~191355~391	11.50	× 17.30	× 5	185.801	
11	181~191-329~	-	-	× 6	-	
12	203~	-	-	× 3	-	
13	192-206~328~341	113.10	× 11.90	× 4	143.501	
14	203~1919~	-	-	× 4	-	
15	-~203-320~329	11.40	× 18.80	× 4	99.001	

表16 2区土坑測定表

番号	所在グリッド	形状	主軸方位	寸法(内)は測定値、( )は残存値		備考
				長さ×幅×深さ(m)		
1	237-238-384-385	円形	N-81°-E	150 × 120 × 23		
2	238-239-358-359	円形	N-0°	94 × 84 × 16		
3	231-354	円形	N-0°	66 × 42 × 17		
4	221-222-342-343	楕円形	N-6°-E	122 × 83 × 41		
5	240~243-366~369	楕円長方形	N-32°-E	290 × 100 × 25		
6	243-243-377	円形	N-0°	47 × 42 × 30		
7	247-248-398	楕円形	N-36°-W	58 × 46 × 35		
23	219~220-406~408	楕円長方形	N-45°-E	202 × 94 × 49		
24	218~219-407-408	円形	N-31°-E	103 × 88 × 30		
25	214~215-409~411	楕円長方形	N-51°-E	186 × 98 × 26		
26	214~215-408-409	円形	N-77°-E	106 × 90 × 42		
27	208~210-391~392	楕円長方形	N-21°-E	218 × 92 × 21		
29	214-324-325	円形	N-78°-E	80 × 72 × 23		

番号	所在グリッド	形状	主軸方位	寸法(内)は測定値、( )は残存値		備考
				長さ×幅×深さ(m)		
8	226-227-321~323	楕円形	N-71°-W	190 × 125 × 19		
9	237~239-329~331	楕円形	N-47°-W	210 × 171 × 22		
10	223-224-321-322	円形	N-68°-W	76 × 62 × 31		
11	223-224-322	円形	N-0°	56 × 51 × 32		
12	240-241-318-319	円形	N-57°-W	105 × 90 × 23		
13	249-382~384	円形か	-	(255) × (60) × 55		調査区界
14	231~232-354-355	楕円長方形	N-21°-W	106 × 79 × 15		
28	209~211-410~412	楕円形	N-57°-W	183 × 113 × 101		
41	215-351	円形	N-0°	70 × 63 × 48		

番号	所在グリッド	形状	主軸方位	寸法(内)は測定値、( )は残存値		備考
				長さ×幅×深さ(m)		
15	224-225-329-331	円形	N-0°	76 × 74 × 98		
16	229-230-334-335	楕円長方形	N-4°-E	120 × 80 × 16		
17	223-224-351-352	円形	N-0°	100 × 99 × 78		
18	249-387-388	円形か	N-90°	84 × (44) × 114		調査区界
19	232~233-386~388	楕円形	N-32°-E	135 × 116 × 45		
20	234~235-387-388	円形	N-0°	160 × 164 × 15		
21	234~235-385~387	楕円形	N-11°-E	123 × 108 × 30		
22	243-365	円形	N-0°	72 × 69 × 102		
30	208~209-410-411	円形	N-67°-E	62 × 53 × 30		
31	209~210-409-410	円形	N-0°	67 × 67 × 47		
32	210-407-408	円形	N-0°	76 × 74 × 15		
33	208~209-411~412	楕円長方形	N-64°-E	186 × 80 × 13		
34	213-407-408	楕円形	N-59°-E	98 × 60 × 34		
35	212~213-406-407	楕円形	N-53°-E	102 × 88 × 40		
36	217~218-401-402	楕円形	N-46°-E	93 × 75 × 21		
37	218~219-406-401	楕円形	N-41°-E	121 × 65 × 15		
38	218~220-404-405	楕円形	N-61°-W	82 × 65 × 40		
39	215~216-395-396	楕円長方形又は円形	N-3°-E	70 × 63 × 29		
40	215~216-402-403	楕円長方形又は円形	N-53°-E	98 × 88 × 25		
41	211~212-359-360	円形	N-0°	104 × 99 × 22		
42	215~215-410~412	楕円長方形	N-50°-W	227 × 95 × 24		
43	213~215-355~357	楕円形	N-65°-E	275 × 70 × 23		
45	215~216-403~405	円形	N-70°-W	130 × (115) × 56		

表17 2区のビット測定表

番号	所在グリッド	形状	主軸方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	222-319-320	円形	N-78°-W	26 × 26 × 16	
2	229-324	楕円長方形	N-0°	25 × 24 × 27	
3	244-323-324	円形	N-56°-E	26 × 23 × 19	
4	247-329	楕円形	N-89°-W	42 × 35 × 14	
5	243-336-337	円形	N-0°	23 × 20 × 10	
6	244-336-337	円形	N-0°	25 × 24 × 14	
7	241-336	楕円形	N-84°-W	30 × 25 × 11	
8	248 × 249-374	円形	N-0°	27 × 27 × 17	
9	247-376	楕円長方形	N-79°-E	22 × 19 × 11	
10	248 × 249-399	楕円形	N-0°	27 × 25 × 11	
11	247-408	円形	N-39°-E	44 × 38 × 15	
12	298-376	円形	N-0°	29 × 28 × 12	
13	298-373	楕円長方形	N-83°-W	30 × 27 × 25	
14	293-376	楕円形	N-59°-E	23 × 19 × 12	
15	293-376	楕円形	N-60°-E	29 × 25 × 9	
16	222-406	楕円形	N-0°	38 × 36 × 16	
17	234-368	楕円形	N-72°-W	38 × 31 × 47	
18	230-368 × 369	楕円長方形	N-61°-E	33 × 29 × 30	
19	231 × 232-369	楕円形	N-81°-E	42 × 33 × 28	
20	230-364	円形	N-0°	26 × 24 × 21	
21	229-359 × 360	楕円長方形	N-30°-E	48 × 48 × 24	
22	228-359 × 360	楕円形	N-87°-E	58 × 38 × 37	
23	228-358 × 359	円形	N-33°-E	23 × 17 × 13	
24	225 × 226-357	円形	N-77°-W	23 × 23 × 28	
25	225-355	円形	N-0°	22 × 20 × 32	
26	225-359	楕円長方形	N-0°	29 × 26 × 13	
27	226-355	楕円長方形	N-47°-E	38 × 30 × 31	
28	230 × 231-357	楕円形	N-76°-W	48 × 38 × 49	
29	234-329	楕円長方形	N-43°-W	30 × 24 × 27	4日ほど重複



表19 3区畑測定表

1画		1画	2画	3画	4画	5画	6画	7画	8画	9画	10画	11画	12画	13画	14画	15画	
1	北畷	東長	6,300 m	幅	5,500 m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m
		南長	7,000 m	幅	5,500 m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m
		西長	8,382 m	幅	5,500 m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m
		アウフ	238~242	幅	200	サテ	1(4.35)m	結	1(3.35)m	サテ	1(4.35)m	結	1(3.35)m	サテ	1(4.35)m	結	1(3.35)m
2	北畷	東長	6,300 m	幅	5,500 m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m
		南長	7,000 m	幅	5,500 m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m
		西長	8,382 m	幅	5,500 m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m	サテ	31m	結	34m
		アウフ	224~231	幅	213	サテ	1(4.35)m	結	1(3.35)m	サテ	1(4.35)m	結	1(3.35)m	サテ	1(4.35)m	結	1(3.35)m

表20 3区水田測定表

3画 ※射の下端で計測

番号	所在グリッド	南北(m)×東西(m)×深(m)	面積(m <sup>2</sup> )	備考
1	133 ~ 229 291 ~ 305	15.30 × 13.40 × 2	192.20	
2	183 ~ 213 293 ~ 306	29.55 × 11.50 × 3	1022.50	
3	228 ~ 242 278 ~ 287	7.10 × 8.85 × 4	186.20	
4	232 ~ 240 278 ~ 287	7.10 × 8.85 × 4	186.20	
5	244 ~ 253 277 ~ 282	20.00 × 12.35 × 6	1243.20	
6	188 ~ 213 280 ~ 283	14.80 × 11.40 × 4	166.80	
7	183 ~ 188 282 ~ 284	14.80 × 11.35 × 4	159.40	
8	226 ~ 241 283 ~ 278	11.30 × 14.80 × 5	119.20	
9	232 ~ 239 283 ~ 278	4.70 × 14.40 × 5	33.40	
10	214 ~ 232 282 ~ 279	19.10 × 11.35 × 6	264.60	
11	196 ~ 213 286 ~ 282	17.00 × 10.10 × 3	203.00	
12	185 ~ 187 277 ~ 283	10.80 × 10.00 × 2	109.60	
13	184 ~ 189 272 ~ 283	11.80 × 11.00 × 2	18.80	
14	215 ~ 224 274 ~ 264	5.80 × 10.20 × 6	109.20	
15	186 ~ 213 277 ~ 271	28.00 × 10.45 × 3	900.80	
16	188 ~ 192 279 ~ 271	8.50 × 11.50 × 2	192.20	
17	186 ~ 189 268 ~ 271	11.00 × 10.80 × 4	17.00	
18	185 ~ 187 266 ~ 268	11.80 × 11.50 × 2	112.80	
19	188 ~ 189 263 ~ 266	19.80 × 11.50 × 3	11.20	
20	237 ~ 215 274 ~ 278	8.10 × 1.30 × 4	24.00	
21	~ 206 274 ~	10.00 × 1.00 × 3	155.60	
22	187 ~ 221 271 ~ 282	132.00 × 18.20 × 8	2541.00	

表21 3区土坑測定表

1画 寸法内には確定値、○は残存値

番号	所在グリッド	形状	土輪方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	133 ~ 229 291 ~ 305	円形	サテ	37 × 37 × 31	
2	196 288 ~ 289	楕円形	サテ	100 × 55 × 75	東側に深さ不明。3区南西寄り
3	213 ~ 213 274 ~ 276	円形	サテ	130 × 120 × 18	底面平。3 ~ 8は東寄りにはさまる。
4	238 ~ 239 273 ~ 276	円形	サテ	138 × 120 × 60	底面平。3 ~ 8は東寄りにはさまる。
5	228 ~ 230 274 ~ 275	円形	サテ	125 × 120 × 18	底面平。3 ~ 8は東寄りにはさまる。中心に40cmの穴
6	183 ~ 193 273 ~ 276	円形	サテ	110 × 108 × 20	底面平。3 ~ 8は東寄りにはさまる。板材が半さ。補
7	186 ~ 186 271 ~ 274	円形	サテ	115 × 97 × 54	底面平。3 ~ 8は東寄りにはさまる。板材が半さ。補
8	186 ~ 186 271 ~ 274	円形	サテ	115 × 103 × 10	底面平。3 ~ 8は東寄りにはさまる。

2画 寸法内には確定値、○は残存値

番号	所在グリッド	形状	土輪方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
9	233 ~ 232 280 ~ 287	楕円形	サテ	92 × 54 × 10	3区北寄り
10	236 ~ 238 279 ~ 280	楕円形	サテ	1145 × 80 × 10	3区北東寄り
11	228 ~ 229 277 ~ 278	楕円形	サテ	173 × 118 × 38	3区北東寄り
12	228 ~ 229 277	楕円形	サテ	176 × 48 × 13	3区北東寄り
13	231 ~ 233 275 ~ 272	楕円形	サテ	180 × 98 × 22	3区北東寄り。底面平。
14	227 278 ~ 278	楕円形	サテ	183 × 103 × 8	
15	208 ~ 209 280 ~ 281	楕円形	サテ	162 × 106 × 42	
16	209 ~ 210 277 ~ 279	楕円形	サテ	225 × 74 × 38	
17	218 ~ 220 274 ~ 274	楕円形	サテ	285 × 80 × 48	
18	221 ~ 223 274 ~ 274	楕円形	サテ	175 × 130 × 92	底は平らな。
19	189 ~ 191 270 ~ 271	楕円形	サテ	1140 × 1140 × 9	楕円。
20	201 ~ 211 271 ~ 271	楕円形	サテ	548 × 111 × 26	
21	211 ~ 213 280 ~ 301	円形	サテ	163 × 122 × 11	
22	213 ~ 214 281 ~ 283	円形	サテ	142 × 120 × 97	
23	232 278	円形	サテ	72 × 60 × 29	
24	208 ~ 209 281 ~ 282	円形	サテ	103 × 95 × 56	
25	191 ~ 194 280 ~ 283	楕円形	サテ	311 × 112 × 11	

3画 寸法内には確定値、○は残存値

番号	所在グリッド	形状	土輪方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
26	236 ~ 238 278 ~ 280	楕円形	サテ	260 × 1162 × 27	
27	240 280 ~ 281	楕円形	サテ	81 × 49 × 28	
28	242 ~ 243 286 ~ 287	楕円形	サテ	91 × 41 × 82	
29	184 ~ 193 271 ~ 278	円形	サテ	100 × 90 × 14	
30	222 277 ~ 278	円形	サテ	166 × 79 × 26	
31	225 ~ 226 284 ~ 286	楕円形	サテ	137 × 101 × 14	
32	226 281 ~ 286	楕円形	サテ	183 × 125 × 85	
33	221 281 ~ 284	楕円形	サテ	68 × 52 × 55	
34	225 ~ 226 286 ~ 289	円形	サテ	80 × 5 × 49	
35	226 286	円形	サテ	62 × 53 × 26	
36	201 ~ 201 271 ~ 272	楕円形	サテ	405 × 120 × 30	
37	227 ~ 227 281 ~ 288	楕円形	サテ	41 × 49 × 49	
38	227 288	円形	サテ	31 × 45 × 36	
39	228 ~ 228 286 ~ 287	楕円形	サテ	185 × 111 × 30	
40	229 280 ~ 281	楕円形	サテ	62 × 55 × 19	
41	228 ~ 228 286	楕円形	サテ	72 × 46 × 25	
42	230 281 ~ 282	楕円形	サテ	115 × 62 × 66	
43	211 ~ 211 273 ~ 278	楕円形	サテ	302 × 118 × 50	
44	209 ~ 210 273	円形	サテ	50 × 48 × 44	
45	209 278	円形	サテ	55 × 52 × 28	
46	211 276	円形	サテ	34 × 31 × 33	

表22 3区ビット測定表

1画 寸法内には確定値、○は残存値

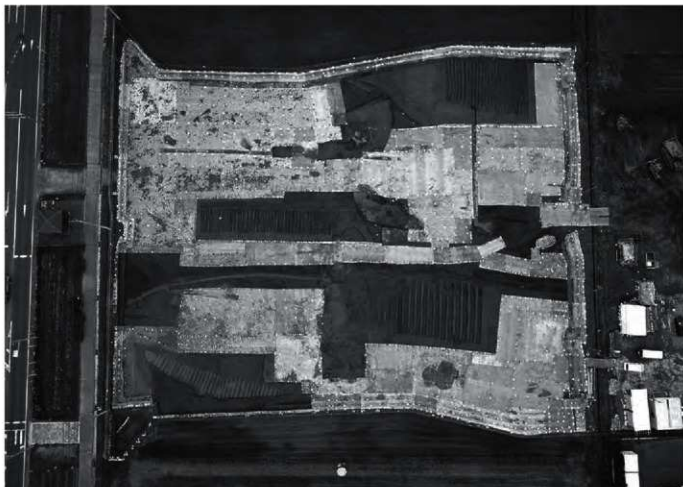
番号	所在グリッド	形状	土輪方位	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	231 296 ~ 296	円形	サテ	36 × 33 × 24	
2	201 ~ 201 271	楕円形	サテ	34 × 33 × 31	
3	201 ~ 201 271	円形	サテ	37 × 34 × 44	
4	201 278	楕円形	サテ	31 × 22 × 40	砂土層後
5	201 ~ 201 278	楕円形	サテ	43 × 33 × 27	砂土層後
6	192 277 ~ 278	楕円形	サテ	37 × 43 × 34	
7	188 ~ 189 275 ~ 276	楕円形	サテ	33 × 29 × 38	土層厚と前後
8	201 ~ 201 276 ~ 277	円形	サテ	37 × 34 × 21	土層厚と前後

# 写真図版





1 1区1面 (西より)



2 1区1面 (直上より)



1 1区As-A復旧水田全景 (南より)



2 1区1号復旧溝群及び1・2号溝 (南西より)





1 1区As-A復旧水田水口 (南東より)



2 1区1号復旧溝群土層堆積状況 (南より)



3 1区1号復旧溝群全景 (西より)



4 1区2号復旧溝群 (北より)



5 1区3号復旧溝群As-A堆積状況 (南より)



6 1区3号復旧溝群全景 (南より)



7 1区4号復旧溝群全景 (東より)



8 1区4号復旧溝群中・東部 (北より)



1 1区5号復旧溝群全景（北より）



2 1区6号復旧溝群全景（北より）



3 1区7号復旧溝群全景（南東より）



4 1区7号復旧溝群土層堆積状況（南より）



5 1区3号溝西部（東より）



1 1区4号溝全景 (西より)



2 1区5・6・7号溝全景 (西より)



3 1区8号溝全景 (東より)



4 1区9号溝全景 (北西より)



5 1区10号溝全景 (北東より)



6 1区11号溝全景 (東より)



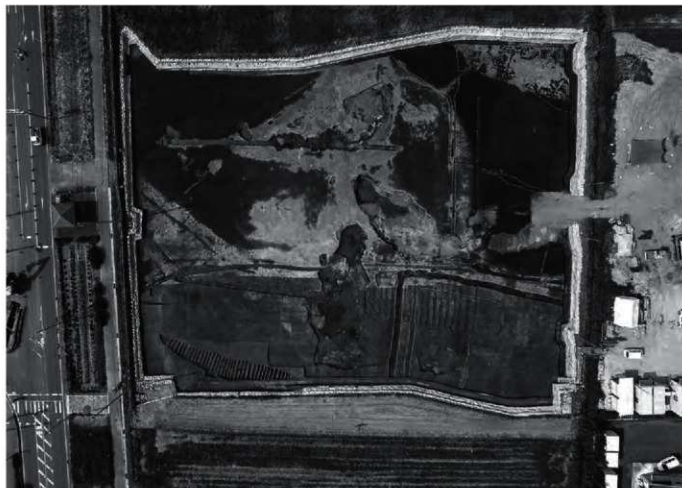
7 1区12号溝全景 (南東より)



8 1区3号土坑全景 (南より)



1 1区2面航空写真(南より)



2 1区2面航空写真(北)



1 1区2面北部全景(東より)



2 1区2面南部全景(西より)



1 1区2面東部全景・13号溝全景(奥側)(北より)



2 1区2面南西隅部全景(北より)



3 1区13号溝(右端は15号溝、西より)



4 1区13号溝北辺(西より)



1 1区15号溝土層断面(西より)



2 1区16号溝全景(南より)



3 1区17号溝全景(南より)



4 1区18号溝全景(北東より)



5 1区19号溝全景(東より)



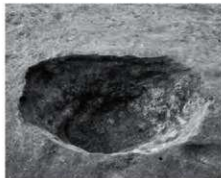
6 1区20号溝全景(北東より)



7 1区21(左)・22号溝全景(南より)



8 1区23号溝全景(北より)



1 1区1号土坑全景(南より)



2 1区2号土坑全景(北東より)



3 1区4号土坑土層断面(南西より)



4 1区4号土坑全景(南西より)



5 1区5号土坑全景(西より)



6 1区6号土坑全景(南より)



7 1区14号土坑全景(南東より)



8 1区1号ピット全景(南東より)



9 1区2号ピット全景(南より)





1 1区3面航空写真(東より)



2 1区3面航空写真(北)



1 1区1号住居全景(南西より)



2 1区1号住居竈(西より)



3 1区1号住居掘り方全景(南西より)



4 1区2号住居全景(掘り方、北西より)



5 1区As-B下水田全景(東側上空より)



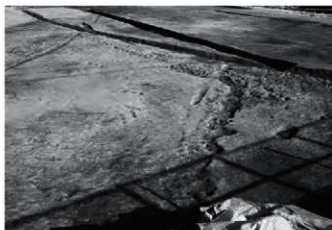
1 1区1号掘立柱建物全景(南西より)



2 1区26号溝全景(北西より)



3 1区24・25・26号溝(南東より)



4 1区27号溝全景(北西より)



5 1区28号溝全景(南東より)



1 1区29・36号溝全景(西より)



2 1区30号溝全景(南より)



3 1区31号溝全景(東より)



4 1区32(右)・33号溝全景(南より)



5 1区34・35号溝全景(南より)



6 1区36号溝全景(西より)



7 1区37(左)・38号溝全景(東より)



8 1区39(左)・40号溝全景(東より)



1 1区7号土坑全景(南より)



2 1区3号ピット全景(南東より)



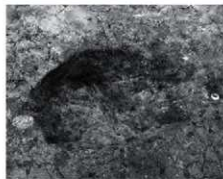
3 1区4号ピット全景(南東より)



4 1区5号ピット全景(北西より)



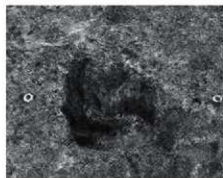
5 1区6号ピット全景(北東より)



6 1区7号ピット全景(南より)



7 1区9号ピット全景(南より)



8 1区10号ピット全景(東より)



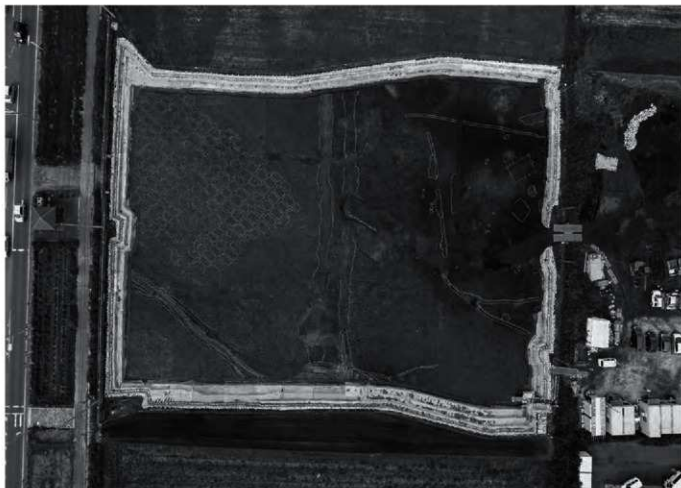
9 1区11号ピット全景(東より)



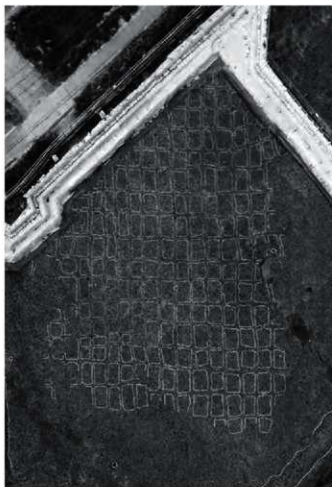
10 1区12号ピット全景(南東より)



1 1区4面航空写真(西より)



2 1区4面航空写真(上北)



1 1区Hr-FA下水田(手前側南東)



2 1区Hr-FA下水田全景(北西より)



3 1区Hr-FA下水田全景(南東より)



4 1区Hr-FA下水田検出状況(西より)



5 1区Hr-FA下水田検出状況(南東より)



6 1区Hr-FA下水田検出状況(北より)



7 1区4面北部全景(東より)



1 1区南西部跡r-FA下水田と溝群(手前側南)



2 1区南東部遺構面(北西より)



3 1区41号溝全景(東より)



4 1区42号溝全景(東より)



5 1区43～51号溝(北西より)





1 1区43～46・48号溝(南東より)



2 1区45・46・50・51号溝(南東より)



3 1区45号溝遺物(39)出土状況(西より)



4 1区48・49号溝全景(南東より)



5 1区51号溝全景(南東より)



6 1区52・53号溝全景(南より)



7 1区52・53号溝全景(南より)



8 1区54～58号溝全景(南西より)



1 1区54号溝遺物出土状況(西より)



2 1区55・56・57号溝全景(西より)



3 1区58号溝全景(南西より)



4 1区59・60号溝航空写真(手前南)



5 1区59・60号溝全景(西より)



6 1区61・62号溝全景(南より)



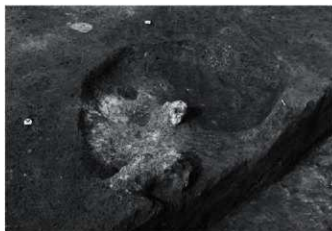
7 1区63号溝全景(北より)



8 1区64号溝全景(南より)



1 1区1号坑土(南より)



2 1区2号坑土(南東より)



3 1区4面北東部土層断面(東より)



4 1区4面北東部微高地北側遺物出土状況(東より)



5 1区4面北東部土師器出土状況(東より)



6 1区4面北東部遺物包含層遺物出土状況(北東より)



7 1区4面北東部遺物包含層遺物出土状況(東より)



8 1区4面北東部遺物包含層遺物出土状況(南より)



1 弥生土器出土状況



2 縄文土器出土状況



3 縄文土器出土状況



4 石槍出土状況(33号溝内)



5 石鏃出土状況



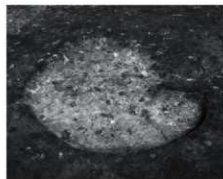
6 打製石斧出土状況



7 1区8号土坑(東より)



8 1区9号土坑遺物出土状況(北より)



9 1区9号土坑全景(南より)



10 1区10号土坑土層断面(北西より)



11 1区11号土坑遺物出土状況(西より)



12 1区12号土坑全景(北東より)



1 1区15号土坑全景(南より)



2 1区17号土坑全景(西より)



3 1区18号土坑全景(西より)



4 1区14号ピット全景(北より)



5 1区15号ピット全景(南より)



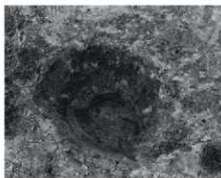
6 1区16号ピット全景(東より)



7 1区17号ピット土層断面(南より)



8 1区18号ピット全景(南東より)



9 1区19号ピット全景(南より)



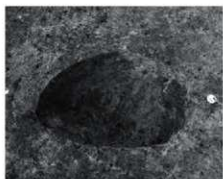
10 1区20号ピット全景(北より)



11 1区21号ピット全景(南より)



12 1区22号ピット全景(南東より)



13 1区23号ピット全景(東より)



14 1区24・25・26号ピット全景(東より)



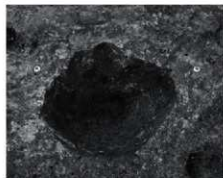
1 1区27号ピット全景(南東より)



2 1区28号ピット土層断面(南東より)



3 1区29号ピット全景(東より)



4 1区31号ピット全景(南東より)



5 1区32号ピット全景(南西より)



6 1区33号ピット全景(東より)



7 1区34・35号ピット全景(西より)



8 1区34号ピット土層断面(西より)



9 1区37号ピット全景(西より)



10 1区38号ピット土層断面(西より)



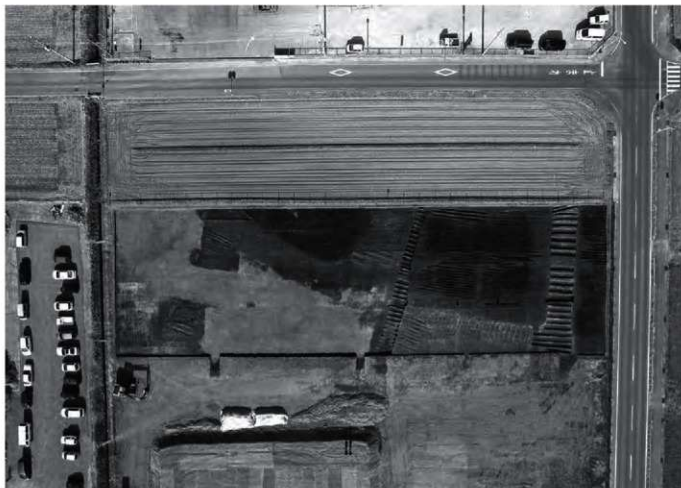
11 1区1号風倒木土層断面(南より)



12 1区旧石器確認調査



1 2区1面北半部航空写真(東より)



2 2区1面北半部航空写真(上側北)



1 2区1面南半部航空写真(西より)



2 2区1面南半部航空写真(上側北)





1 2区1号復旧溝群全景(南より)



2 2区1号復旧溝群土層断面(東より)



3 2区2・3号復旧溝群全景(南より)



4 2区4号復旧溝群全景(東より)



5 2区5号復旧溝群全景(北より)



6 2区6号復旧溝群全景(北より)



7 2区7号復旧溝群全景(北より)



8 2区1号畑全景(西より)



1 2区2号畑全景(西より)



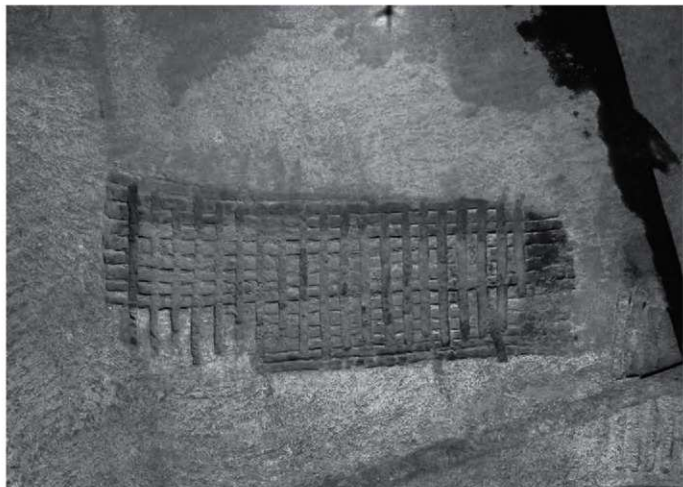
2 2区3号畑全景(西より)



3 2区4号畑全景(西より)



4 2区5号畑全景(西より)



5 2区5号(横方向)・7号(縦方向)復旧溝群(手前側東)



1 2区6号畑全景(西より)



2 2区7号畑全景(西より)



3 2区8号畑遺構確認状況(東より)



4 2区8号畑全景(北より)



5 2区12号溝全景(西より)



6 2区15号溝全景(西より)



7 2区13・14・15号溝全景(北より)



8 2区13・14・15号溝全景



1 2区1・7・8号溝(南より)



2 2区4・5・6号溝(西より)



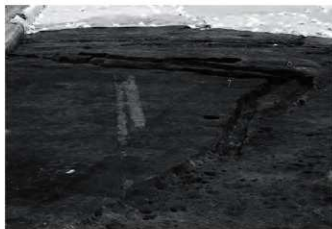
1 2区1号溝全景(西より)



2 2区2号溝全景(南より)



3 2区5・28号溝全景(西より)



4 2区7・8号溝全景(西より)



5 2区9号溝全景(西より)



6 2区16号溝土層断面(東より)



7 2区23号溝及び25・26号土坑(西より)



8 2区22号溝土層断面(東より)



1 2区16～27号溝全景(西より)



2 2区23号溝土層断面(東より)



3 2区25号溝馬歯出土状況



4 2区27号溝土層断面(西より)



5 2区28号溝土層断面(西より)



1 2区3面北半部航空写真(西より)



2 2区3面北半部航空写真(上側北)



1 2区南半部航空写真(東より)



2 2区南半部航空写真(上側南)





1 2区1号住居全景(南西より)



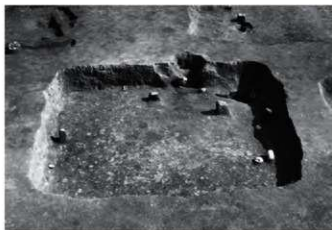
2 2区1号住居竈遺物出土状況(南西より)



3 2区1号住居竈掘り方(南西より)



4 2区1号住居掘り方全景(南西より)



5 2区2号住居全景(西より)



6 2区2号住居竈及び貯蔵穴(西より)



7 2区2号住居掘り方(西より)



8 2区2号住居竈掘り方全景(西より)



1 2区3号住居全景(西より)



2 2区3号住居竈(西より)



3 2区3号住居竈掘り方(西より)



4 2区3号住居掘り方全景(西より)



5 2区4号住居セクション(東より)



6 2区4号住居全景(西より)



7 2区4号住居竈(西より)



8 2区4号竈掘り方(西より)



1 2区5号住居全景(西より)



2 2区5号住居竈(西より)



3 2区6号住居全景(西より)



4 2区6号住居竈遺物出土状況(西より)



5 2区6号竈掘り方(西より)



6 2区6号住居掘り方全景(西より)



7 2区7号住居全景(西より)



8 2区7号住居竈(西より)



1 2区7号住居竈掘り方(西より)



2 2区7号住居掘り方全景(西より)



3 2区8号住居全景(西より)



4 2区8号住居竈(西より)



5 2区8号住居掘り方(西より)



6 2区8号住居掘り方全景(西より)



7 2区9号住居全景(西より)



8 2区9号住居遺物出土状況(西より)



1 2区9号住居貯蔵穴遺物出土状況(南より)



2 2区9号住居土層堆積状況(西より)



3 2区9号住居(西より)



4 2区9・21号住居掘り方全景(西より)



5 2区10号住居全景(西より)



6 2区10号住居(西より)



7 2区10号住居掘り方(西より)



8 2区10号住居掘り方全景(西より)



1 2区11号住居遺物出土状況(西より)



2 2区11号住居遺物出土状況(西より)



3 2区11号住居掘り方(西より)



4 2区11号住居掘り方全景(西より)



5 2区12号住居全景(西より)



6 2区12号住居(西より)



7 2区12号住居掘り方(西より)



8 2区12号住居掘り方全景(西より)



1 2区13号住居竈(西より)



2 2区13号住居竈振り方(西より)



3 2区14号住居覆土堆積状況(南より)



4 2区14号住居全景(西より)



5 2区14号住居遺物出土状況(西より)



6 2区14号住居振り方全景(西より)



7 2区16号住居全景(西より)



8 2区16号住居竈遺物出土状況(西より)



1 2区16号住居竈掘り方(西より)



2 2区16号住居掘り方全景(西より)



3 2区17号住居全景(西より)



4 2区17号住居竈遺物出土状況(西より)



5 2区17号住居竈遺物出土状況(西より)



6 2区17号住居貯蔵穴(西より)



7 2区17号住居竈掘り方(西より)



8 2区17号住居掘り方全景(西より)





1 2区18号住居全景(西より)



2 2区18号住居竈遺物出土状況(西より)



3 2区18号住居竈掘り方(西より)



4 2区18号住居掘り方全景(西より)



5 2区19号住居遺物出土状況(西より)



6 2区19号住居貯蔵穴(西より)



7 2区19号住居竈掘り方(西より)



8 2区19号住居掘り方全景(西より)



1 2区20号住居遺物出土状況(西より)



2 2区20号住居遺物出土状況(西より)



3 2区20号住居竈(西より)



4 2区20号住居掘り方(西より)



5 2区20号住居掘り方全景(西より)



6 2区23号住居全景(西より)



7 2区23号住居遺物出土状況(西より)



8 2区10号溝全景(南より)



1 2区As-B下水田全景(南西より)



2 2区As-B下水田東半部全景(北西より)



1 2区As-B下水田西部全景(北東より)



2 2区As-B下水田東部(北東より)



3 2区As-B下水田西部(南西より)



4 2区As-B下水田西南部(北西より)



5 2区As-B下水田西部(北より)



1 2区As-B下水田中北(北東より)



2 2区As-B下水田南西部畔(西より)



3 2区As-B下水田土層断面(西より)



4 2区As-B下水田畔部分土層断面(南より)



5 2区1号井戸全景(南西より)



6 2区2号井戸全景(北西より)



7 2区2号井戸遺物出土状況(東より)



8 2区2号井戸掘り方全景(東より)



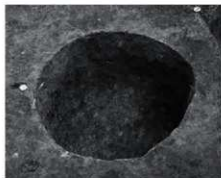
1 2区8号土坑全景(南より)



2 2区9号土坑全景(西より)



3 2区10号土坑全景(南より)



4 2区11号土坑全景(南より)



5 2区12号土坑全景(西より)



6 2区13号土坑全景(南より)



7 2区28号土坑全景(南より)



8 2区43号土坑全景(南より)



9 2区44号土坑全景(南より)



1 2区北半部4面航空写真(南東より)



2 2区北半部4面航空写真(上側が北)



1 2区11号溝全景(北より)



2 2区29・30号溝全景(西より)



3 2区31号溝全景(東より)



4 2区32号溝全景(東より)



5 2区32号溝遺物出土状況(東より)



6 2区32号溝遺物出土状況



7 2区33・34号溝全景(西より)



8 2区35号溝全景(北より)





1 2区15号土坑全景(西より)



2 2区16号土坑全景(南より)



3 2区17号土坑全景(西より)



4 2区18号土坑土層断面(南より)



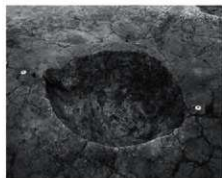
5 2区19号土坑全景(西より)



6 2区20・21号土坑全景(西より)



7 2区22号土坑全景(西より)



8 2区30号土坑全景(南より)



9 2区31号土坑全景(南より)



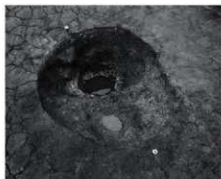
10 2区33号土坑全景(南より)



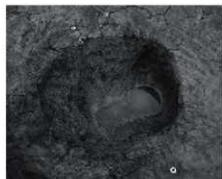
11 2区34・35号土坑全景(南より)



12 2区36・37号土坑全景(南より)



13 2区38号土坑全景(西より)



14 2区39号土坑全景(西より)



15 2区40号土坑全景(西より)



1 2区41号土坑全景(南より)



2 2区42号土坑全景(北より)



3 2区45号土坑全景(南より)



4 2区21号ピット全景(西より)



5 2区22号ピット全景(西より)



6 2区24号ピット全景(西より)



7 2区北部旧石器確認調査全景(西より)



8 2区中南部旧石器確認調査掘削状況(北より)



9 2区旧石器確認調査掘削状況(西より)



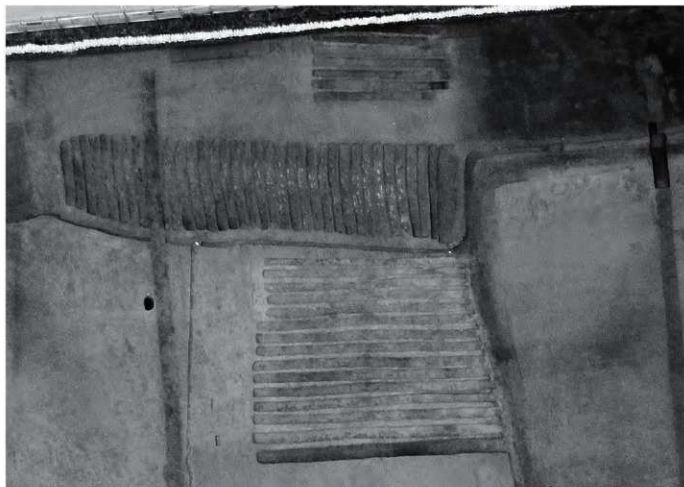
10 2区旧石器確認調査189-410グリッド(東より)



1 3区1面航空写真(南より)



2 3区1面航空写真(上側北)



1 3区1～3号復旧溝群航空写真(上側西)



2 3区1号復旧溝群全景(北より)



3 3区2号復旧溝群全景(東より)



4 3区2号復旧溝群全景(北より)



5 3区3号復旧溝群全景(南より)



1 3区5～9号復旧溝群航空写真(上側北)



2 3区4・5(手前)号復旧溝群土層断面(東より)



3 3区6号復旧溝群及び1号溝(右)(東より)



4 3区7号復旧溝群全景(南より)



5 3区7号復旧溝群掘削状況(東より)



1 3区8号復旧満群全景(南より)



2 3区10号復旧満群全景(西より)



3 3区1号畑全景(東より)



4 3区1号溝東部(東より)



5 3区1～5号溝航空写真(西より)



1 3区1号溝西部(南より)



2 3区1号溝南東端部石組(南より)



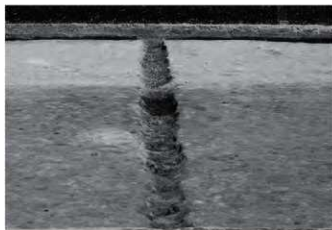
3 3区1号溝南東端部掘り方(南東より)



4 3区2号溝南部(南より)



5 3区3号溝南部(南より)



6 3区4号溝全景(南より)



7 3区5号溝全景(東より)



8 3区1号池全景(北より)



1 3区1号土坑土层断面(南より)



2 3区2号土坑土层断面(南より)



3 3区2号土坑全景(南より)



4 3区3号土坑土层断面(南より)



5 3区3号土坑全景(東より)



6 3区4号土坑土层断面(南より)



7 3区4号土坑全景(東より)



8 3区5号土坑土层断面(南より)



9 3区6号土坑土层断面(南より)



10 3区6号土坑底板出土状況(北より)



11 3区6号土坑掘り方全景(東より)



12 3区7号土坑土层断面(西より)



13 3区7号土坑底板出土状況(手前側)



14 3区8号土坑全景(東より)



15 3区8号土坑掘り方全景(東より)





1 3区6号溝全景(東より)



2 3区6号溝全景(南より)



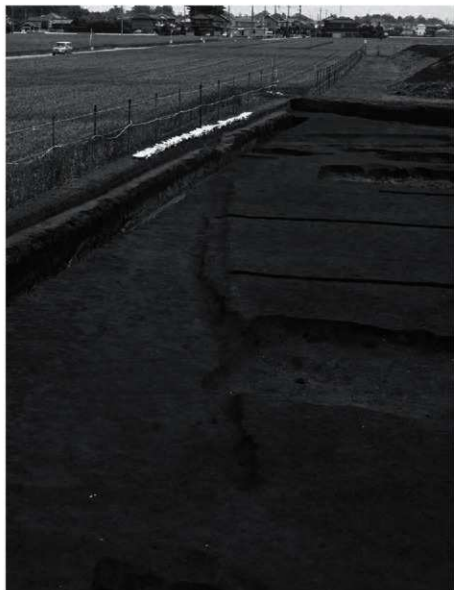
3 3区19号溝全景(東より)



4 3区7号溝全景(西より)



5 3区20号溝全景(東より)



1 3区9号溝全景(西より)



2 3区8号溝土層断面(西より)



3 3区12号溝土層断面(西より)



4 3区13号溝土層断面(西より)



5 3区15号溝土層断面(西より)



6 3区18号溝土層断面(東より)



7 3区23号溝土層断面(南より)



8 3区9号土坑全景(南より)



9 3区10号土坑全景(南より)



10 3区11・12号土坑土層断面(南より)



1 3区13号土坑全景(南より)



2 3区14号土坑全景(南より)



3 3区15号土坑全景(北より)



4 3区15・16号土坑(北より)



5 3区16号土坑全景(北より)



6 3区17号土坑全景(東より)



7 3区18号土坑全景(南より)



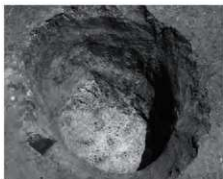
8 3区19号土坑礫出土状況(南より)



9 3区20号土坑全景(北より)



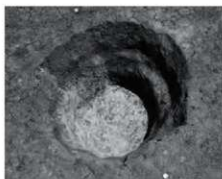
10 3区21号全景(北より)



11 3区22号土坑全景(南西より)



12 3区23号土坑全景(西より)



13 3区24号土坑全景(南東より)



14 3区26号土坑全景(北東より)



15 3区27号土坑全景(西より)



1 3区3面航空写真(西より)



2 3区3面航空写真(上側北)



1 3区1号住居遺物出土状況(西より)



2 3区1号住居遺物出土状況(西より)



3 3区1号住居掘り方土層断面(南より)



4 3区1号住居掘方及び土層断面(東より)



5 3区2号住居全景(西より)



6 3区2号住居(西より)



7 3区2号住居遺物出土状況(南より)



8 3区2号住居遺物出土状況(北より)



1 3区3号住居全景(西より)



2 3区3号住居竈(西より)



3 3区3号住居竈掘り方(西より)



4 3区3号住居掘り方全景(西より)



5 3区4号住居全景(南西より)



6 3区4号住居竈及び土層断面(南西より)



7 3区4号住居遺物出土状況(南西より)



8 3区4号住居掘り方全景(南西より)



1 3区5号住居全景(西より)



2 3区5号住居竈(西より)



3 3区5号住居竈掘り方(西より)



4 3区5号住居掘り方全景(西より)



5 3区7号住居全景(西より)



6 3区7号住居竈遺物出土状況(西より)



7 3区7号住居竈掘り方及び土層断面(西より)



8 3区7号住居掘り方全景(西より)



1 3区8号住居全景(西より)



2 3区8号住居竈遺物出土状況(西より)



3 3区8号住居竈掘り方及び土層断面(西より)



4 3区8号住居掘り方全景(西より)



5 3区9号住居全景(西より)



6 3区9号住居竈(西より)



7 3区9号住居竈掘り方(西より)



8 3区9号住居掘り方全景(西より)





1 3区10号住居全景(西より)



2 3区10号住居竈(西より)



3 3区10号住居貯蔵穴(西より)



4 3区10号住居掘り方全景(西より)



5 3区10号住居全景(南より)



6 3区10号住居竈(西より)



7 3区10号住居竈掘り方(西より)



8 3区10号住居掘り方全景(西より)



1 3区12号住居遺物出土状況(西より)



2 3区12号住居遺物出土状況(西より)



3 3区12号住居掘り方と土層断面(西より)



4 3区12号住居掘り方全景(西より)



5 3区13号住居全景(西より)



6 3区13号住居(西より)



7 3区13号住居貯蔵穴(西より)



8 3区13号住居掘り方(西より)



1 3区13号住居掘り方全景(西より)



2 3区14号住居遺物出土状況(西より)



3 3区14号住居竈(西より)



4 3区14号住居竈掘り方(西より)



5 3区14号住居掘り方全景(西より)



6 3区15号住居全景(西より)



7 3区15号住居竈付近遺物出土状況(西より)



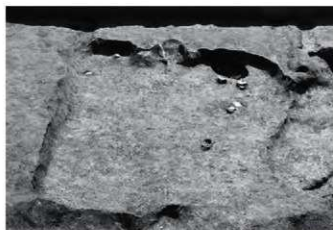
8 3区15号住居掘り方全景(西より)



1 3区16号住居竈(西より)



2 3区16号住居竈掘り方及び土層断面(南より)



3 3区17号住居全景(西より)



4 3区17号住居竈掘り方(西より)



5 3区17号住居遺物出土状況(西より)



6 3区17号住居遺物出土状況(西より)



7 3区17号住居掘り方全景(西より)



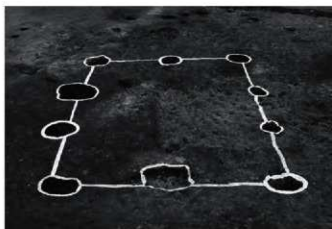
8 3区18号住居全景(西より)



1 3区18号住居竈(西より)



2 3区18号住居掘り方全景(西より)



3 3区1号掘立柱建物全景(東より)



4 3区2号掘立柱建物全景(東より)



5 3区As-B下水田全景(南より)



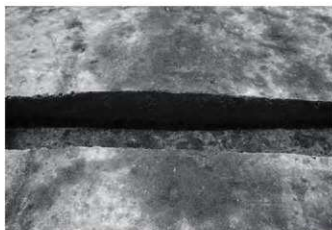
1 3区As-B下水田面(南東より)



2 3区As-B下水田西部(南より)



3 3区As-B下水田南部(西より)



4 3区As-B下水田大畔土層断面(南より)



5 3区19号溝全景(西より)



6 3区21号溝全景(東より)



7 3区24・25号溝全景(北より)



1 3区26号溝全景(南より)



2 3区26号溝全景(西より)



3 3区2号井戸全景(東より)



4 3区2号井戸掘り方全景(西より)



5 3区1号遺物集中(北より)



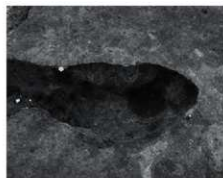
6 3区1号遺物集中遺物出土状況(南より)



7 3区21号土坑全景(北より)



8 3区27号土坑全景(西より)



9 3区28号土坑全景(南より)



1 3区29号土坑全景(南より)



2 3区31号土坑全景(西より)



3 3区32・33・34号土坑全景(北東より)



4 3区35・36号土坑全景(北より)



5 3区37号土坑全景(北より)



6 3区38号土坑全景(北より)



7 3区39号土坑全景(西より)



8 3区40号土坑全景(南西より)



9 3区41号土坑全景(北西より)



10 3区42号土坑全景(北より)



11 3区43号土坑全景(西より)



12 3区44号土坑全景(南西より)



13 3区45号土坑全景(西より)



14 3区46号土坑全景(西より)



15 3区48号土坑全景(北より)





1 3区4面全景(西より)



2 3区旧石器確認調査236-250グリッド(東より)



3 3区旧石器確認調査234-240グリッド(東より)

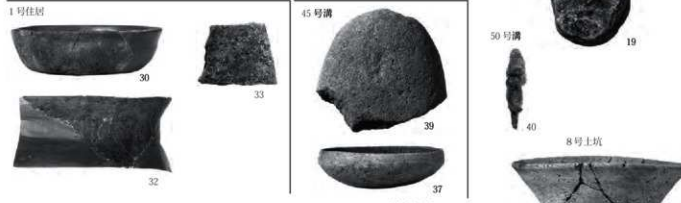
# PL.76

As-A 復旧水田

1号復旧溝

3号復旧溝

7号復旧溝





58



54



55



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88

1号復旧溝



89



90



91

2号復旧溝



93

3号復旧溝



96



97

4号復旧溝



98

1号溝



100



103



104



105



106



108



102



107

2号溝



3号溝



4号溝



5号溝



8号溝



7号溝



23号土坑



23号溝



1号住居



1号住居



143



144



145

2号住居



147



148



149



159



150



151



155



156



157



158



154



152

4号住居



164



165

6号住居



169



170

3号住居



163

5号住居



168



161

6号住居



172



174



173

7号住居



177

8号住居



181



179



178



183



184



185



182

9号住居



187



188



189



190



192



193



191



194

2区3面

9号住居



196



197



198

21号住居



276

10号住居



199



277



278

11号住居



204



205



206



214



207



208



210



212



213



217



221



220

12号住居



228



224



218



222



225



223



226

13号住居



232

14号住居



234



236



237



238



239



240

15号住居



242

16号住居



244

17号住居



245



248



249



250



251



247



246



252



253



18号住居



19号住居



20号住居



1号井戸



23号住居



2号井戸



2号井戸



789

43号土坑



816

道橋外



299



790

12号土坑



794

9号土坑



792

1号土坑



791

2区4面

32号溝



3号井戸



15号土坑



17号土坑



22号土坑

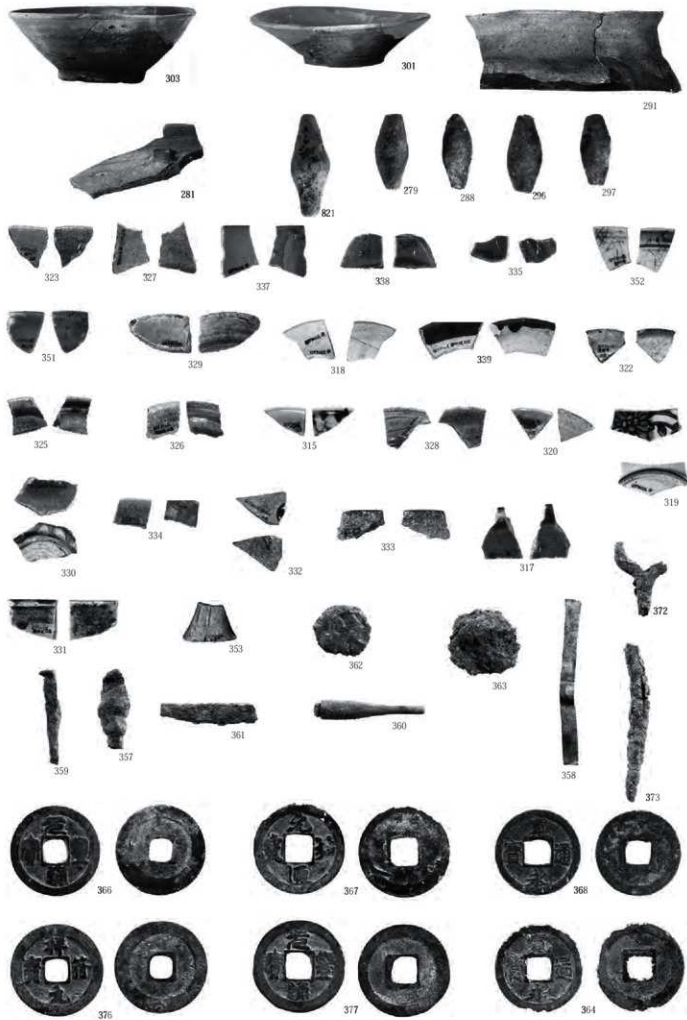


22号ピット



道橋外







365



374



375



370



369



371

1号復旧溝



378



379

2号復旧溝



380

3号復旧溝



381

3・5号復旧溝



382



383



384

6号復旧溝



385



387

7号復旧溝



388

8号復旧溝



389

10号復旧溝



390



392

1号溝



398



400



402



403



404



394



406



405



401

1号溝



2号溝



3号溝



4号溝



1号池



6号土坑



452

4号土坑



450

8号溝



456

9号溝



457

10号溝



461



462

10号溝



463

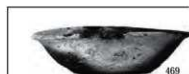
22号溝



465



466



469

1号住居



470



471



472



467

2号住居



474



473



480



478



476



477

3号住居



4号住居





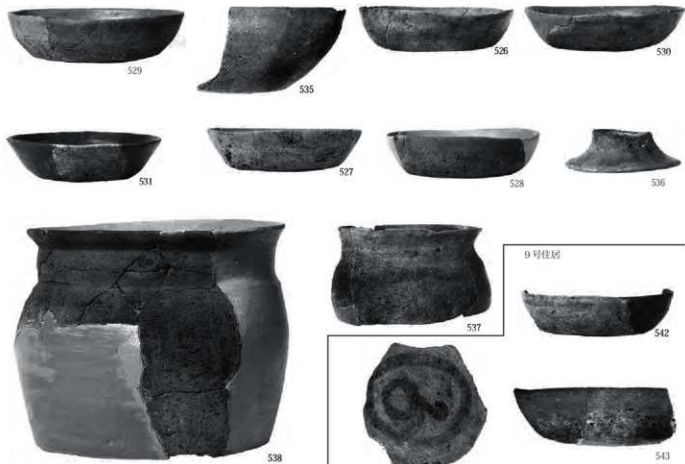
5号住居



7号住居



8号住居



9号住居



9号住居



10号住居



11号住居



12号住居



13号住居

13号住居



14号住居



15号住居



16号住居



17号住居



18号住居



As-8下水田



2号井戸



27号土坑



29号土坑



32号土坑



遺物集中



遺物集中



664



667



669



670

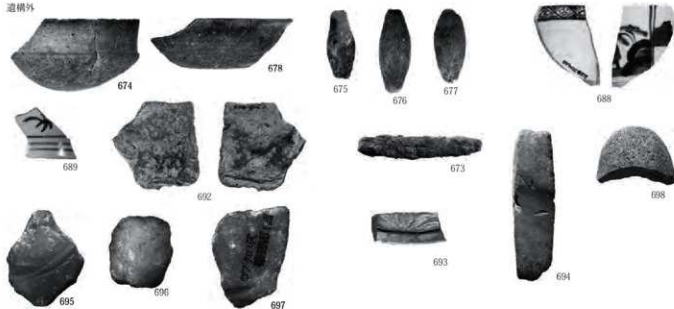


671

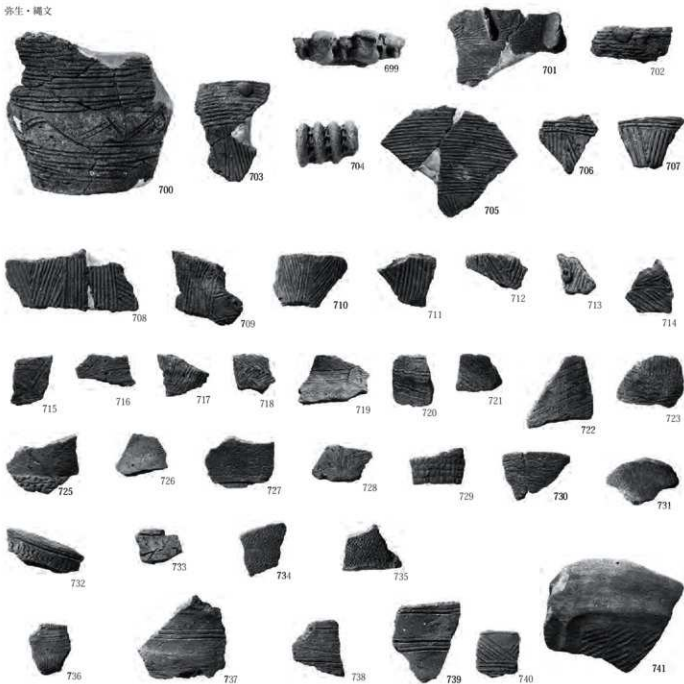


672

## 遺構外



## 弥生・縄文





# 報告書抄録

書名ふりがな	ふくじまみそぶくろいせき
書名	福島味噌袋遺跡
副書名	国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	612
編著者名	石守 晃・長谷川博幸・大本紳一郎
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160315
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県澁川市北極町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ふくじまみそぶくろいせき
遺跡名	福島味噌袋遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんさわぐんたまむらまちおおあざふくじま
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町大字福島
市町村コード	10464
遺跡番号	玉村町0699
北緯(世界測地系)	361823
東経(世界測地系)	1390740
調査期間	20100601-2011030
調査面積	19,481
調査原因	道路建設
種別	生産/集落
主な時代	古墳時代/平安/中世/近世
遺跡概要	弥生・縄文—土器・石器/弥生以前—焼土5/古墳—竪穴住居2+水田1+溝15+土坑4—土師器・須恵器・鉄製品/古墳—平安—溝16+焼土2+土坑17+ピット46/奈良・平安—竪穴住居38+掘立柱建物3+水田3+大畦1+溝11+井戸4+土坑45+ピット4+焼土1+遺物集中1—土師器・須恵器・灰輪陶器・土製品・石製品・鉄製品/中世—溝53+土坑36+ピット9+段差1—土器・陶磁器・石製品・鉄製品/中近世—溝9+段差1/近世—水田1+畑9+復旧溝群26+溝23+溜池1+土坑9—土器・陶磁器・石製品・鉄製品
特記事項	覆土中より螺旋型鉄鍋が出土した。また9世紀第3四半期を中心とした集落がある。
要約	本遺跡は利根川右岸の前橋台地上に立地する。古墳時代後期の集落や水田、平安時代を中心とする集落や、中世の溝群、そして、天明3(1783)年の火山災害等の復旧に伴う天地返し工事を示す溝群などが調査された。このうち平安時代の竪穴住居は9世紀第3四半期のものが多い。また、耕地復旧遺構は、天明3年の火山災害の他、天明6年の洪水被災を窺わせるものも見られた。



公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第612集

## 福島味噌袋遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備  
(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成28(2016)年3月4日 印刷

平成28(2016)年3月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社間文社印刷所

---

